

とある転生者の憂鬱な
日々

ぼけなす

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ある世界に戦争に勝利を導いた青年がいました。しかし最低な神様に転生させられ、さあ大変。

呪いもかけられ、周りから嫌われた彼に、彼の味方の女神様が彼の前世の友を転生させるようになったが————って人選ミスじゃね？　これ……………。

この物語はノリとカオスで構成された彼の第二の人生記録である

※注意

この小説は主にカオスとたまにシリアスに入るノリで書いたドタバタコメディです。変態もいます。下ネタもあります。

他作品のキャラがもはやオリキャラ認定されるほどにキャラ崩壊しています。

こんなの彼女たちではない！不快だ！と思う方は読まないことをオススメします。

それでもいい方はぜひ楽しんでください。

ちなみに初投稿なので誤字脱字などを報告してくれば助かります。

ちよこちよこ改稿しますので注意してください。

目次

無印編 始まりはいつだって災難	1
プロローグ	1
第一話	7
第二話	14
第三話	24
第四話	31
第五話	36
第六話	42
第七話	51
第八話	58
第九話	67
第十話	78
第十一話	87
第十二話	97
第十三話	106
番外編その一	117
番外編その二	122
第十四話	130
番外編その三	137
第十五話	149
設定集その一	160
第十六話	165
番外編その四	180
第十七話	191

第十八話	203
第十九話	214
第二十話	225
閑話 とある転生者の改心劇	233
第二十一話	241
第二十二話	250
第二十三話	257
番外編その五	266
AS編 災難の次は受難	
第二十四話	271
第二十五話	281
第二十六話	288
第二十七話	296

番外編その六 前半	308
番外編その六 後半	324
第二十八話	348
第二十九話	361
第三十話	369
第三十一話	381
第三十二話	393
第三十三話	400
第三十四話	406
第三十五話	415
第三十六話	422
第三十七話	431
第三十八話	440

第三十九話	449
第四十話	458
第四十一話	468
GOD編 いつだって不幸はある	
第四十二話	476
第四十三話	481
第四十四話	486
第四十五話	494
第四十六話	505
第四十七話	519
第四十八話	529
第四十九話	534
第五十話	542

第五十一話	549
第五十二話	555
第五十三話	571
空白期 やりたい放題だヤツ	
フウウウウ!!	
閑話 それぞれの立場	581
第五十四話	590
第五十五話	599
第五十六話	611
第五十七話	626
第五十八話	640
第五十九話	649
第六十話	662

第六十一話	670
第六十二話	682
第六十三話	693
第六十四話	705
第六十五話	714
閑話 なのはちやんがなのはさん	
——じゃなかった『なのは様』に変わるま	
で	726
第六十六話	738
第六十七話	751
第六十八話	761
番外編その八	774
第六十九話	778

番外編その九	791
第七十話	795
第七十一話	810
第七十二話	819
第七十三話	826
第七十四話	839
第七十五話	849
第七十六話	857
第七十七話	865
第七十八話	876
第七十九話	886
第八十話	893
閑話 混沌とした結婚式	908

第八十一話	—	918
第八十二話	—	932
閑話 悲劇の結末と災厄の誕生	942	
閑話 召喚されし者達	—	953
外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年	—	966
その一	—	979
外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年	—	991
その三	—	1001
外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年	—	1001
その四	—	

外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年	—	1016
その五	—	
S T S 編 最終章だから時々シリーズに	なる	
第八十三話	—	1032
第八十四話	—	1041
第八十五話	—	1049
第八十六話	—	1057
第八十七話	—	1062
第八十八話	—	1072
第八十九話	—	1082
第九十話	—	1091
第九十一話	—	1108

第九十二話	—
第九十三話	—
閑話 感染していく若者達	—
第九十四話	—
第九十五話	—
第九十六話	—
第九十七話	—
第九十八話	—
第九十九話	—
第一百話	—
第一百一話	—
第一百二話	—
第一百三話	—

1274126112491237121311991180116811581148114011311120

第一百四話	—
第一百五話	—
第一百六話	—
第一百七話	—
第一百八話	—
第一百九話	—
第一百十話	—
第一百十一話	—
第一百十二話	—
第一百十三話	—
第一百十四話	—
第一百十五話	—
第一百十六話	—

1420141514041393138313711358134713371325131012971284

第百十七話	—	1432
第百十八話	—	1443
第百十九話	—	1453
第百二十話	コラボつちやいますその	1467
—	—	1482
第百二十一話	—	1495
第百二十二話	コラボつちやいますそ	1510
の二	—	1523
第百二十三話	コラボつちやいますそ	1532
の三	—	1549
第百二十四話	—	1549
第百二十五話	—	1549
第百二十六話	—	1549

第百二十七話	—	1562
番外編	ifなバッドエンド	1575
第百二十八話	コラボつちやいますそ	1583
の四	—	1599
第百二十九話	—	1616
第百三十話	—	1629
第百三十一話	—	1642
第百三十二話	—	1653
最終話	—	1665
お知らせ	—	1665

プロローグ

(主人公サイド)

気がついたら真つ白な空間にいた。ほんとに何も無い見覚えのないところだ。

あれ……………？　ここはどこだ？

オレは確か……………

「気がついたか」

振り返るとギリシヤ神話に出そうな服装を着た老人がいた。……………なぜか嫌な予

感と嫌悪感がした。

「おぬしには踏み台転生者になってもらうぞ」

「踏み台？　転生者？　何いってんだあんた？」

「無礼な男じゃのう。ワシが神ということを知つてのことか？」

「ぐは!？」

いきなり身体が重圧がのしかかる。……………ちくしように、こいつ何しやがった。

「ふほほほ、良い気味じゃのう。あの小娘の駒をこのように扱えるのじゃからのう」

ムカつくなこいつ嘲笑。オレはなんとかしようと召喚術を使うが反応しない。

チツ、アレが使えればこんなヤツ!

「安心しろい。殺さぬ。だが、おぬしはワシが用意した世界で不遇なおもちゃとして歩むのじゃな」

「だ……それが……おもちゃ……なんか」

「強情じやのう。ほれ、呪いじや」

そう言つて老人は腹部を蹴りやがった。ゴロゴロを転がる。

クソツ、立てない。呪いとかかけられたのか、不快感も感じるし。

「さて、そろそろゆくがよい。そして踏み台という惨めな人生を楽しむがよい」

オレの下から大きな穴が現れる。ちくしょう……。やつと……。やつと、後悔なく終わったのに……。

オレは最後まで、老人を睨みながら落ちていった。

(??サイド)

老人がなぜソラをこんな目に合わせたのか理由がある。

この神は自らの愉悦を楽しむ最低最悪な神で、幾度の少年少女達の人生を不幸なモノしてきた。

ソラを使って自らの娯楽を楽しむと考えてのことである。

「ふほほほ、良い気味じゃ。これほど気分が良いは不幸な人生を見たとき以来じゃ。さてと、ヤツの容姿と特典をつけて……………」

老人は訝しげな表情でウインドに映った設定をみる。

「なぜじゃ？ 容姿は銀髪オッドアイに設定したのに、銀髪じゃが蒼い瞳しか設定できぬ。それに特典が既についているじゃと？」

邪魔な特典と思い、取り除こうしたがエラーと表示される。そればかりでだんだん苛立ちを募り、

「ええいなぜじゃ！ 仕方あるまい。こうなれば人格を……………」

——ザシユ

「あ？……………」

老人の胸から手が生えていた。血で濡れた細い手が手刀を構えていた。背後にはその犯人である女性が無表情で佇んでいた。

……………貫かれたのだその女性に。

「なにアタシのおもちやを使って遊ぼうとしているの？ この下級神」

「き……………やま」

手が引き抜かれたとき、老人は瀕死であった。

神には上級、中級、下級という位階で分かれている。邪神であれ、悪神であれ、善神であれ、その位階には上下関係は絶対である。

「で、アンタはアタシのお気に入りになんでこんなことしたのかしら？」

「貴様のような小娘が中級など、絶対認めん！ 女が男の上に立つなど許せん！」

「やれやれ……………古い考えだねえ」

額に手を当て、呆れた女神だがすぐに鋭い目で下級神を見据えた。

ソラをこんな目に合わせた理由はもう一つある。

——嫉妬

彼は女神が自分より上の位にすることが許せなかったのだ。

「アンタが踏み台転生者にしたヤツがどういうヤツか知ってる？ アタシのお気に入りの一つで”英雄”になった少年よ」

「な、なんじゃと？」

「神界において英雄を転生することはタブーよ。それを破る上に踏み台の呪いをかけるなんて言語道断だわ」

「わ、ワシは悪くない！ 悪いのは……………そうお前じゃ！ 女の身でありながらワシより上の位にいるからじゃ！」

「あ。あとアタシはもう中級じゃないから」

女神は額を見せる。そこには紋章があった。

「そ、それは上級神の……………」

「そ。あいつが英雄になったおかげでアタシは晴れて上級神に昇級よ。んで、アンタには抹殺命令が下されたのねえ。全知全能様に」

「ゼウス様が!？」

「アンタがこれまで娯楽で人を地獄に叩き落とした罪がバレたのよねえ。ちなみにソースはアタシだけど」

「き、キサマアアアアアアアアアア!!」

狂ったかのように襲いかかる下級神に上級神はただ手を向けて、

「消えろ。過去の遺物」

消滅の砲撃で完全に消した。

消えた下級神に目をくれず、女神は嘆息吐きながら振り返る。そこには三人の少女が立っていた。

「というわけでアタシはあいつの呪いを解除で手が空けないからサポート頼むわよ」

「任せてください！ あの人には人間だった頃からお世話になりましたし」

「……………できる限りのことをするわ」

「別に合法的にヤつちやつてもかまわんだろ？」

「なに考えてるの!?!」

「ジュルリ……………シヨタになった彼をこの手で……………ハアハア」

「だめよ。その役目は私よ。譲らないわ。縛るのは私の役目」

「○○○ちゃん!?! なにとんでもないこと言ってるの!?! あ。でもいいかもそれ」

騒ぐ三人娘に女神はこめかみに指を押しながら呟く。

「人選間違えたかも……………」

—————これは少年と少女達の異世界冒険(?)記である。

無印編 始まりはいつだって災難 第一話

ひらひらと桜が舞い散る季節。出会いがある季節がまたやってきた。

天気は快晴な青空だ。

だけど、オレの心情は曇天である。

どうも、オレの名前は神威ソラ。私立聖伴小学校三年生である。

リリカルなのはという世界に転生してきたオレはボチボチ生きているわけだが、

「あいつ……………あたし達を見てるよ」

「気持ち悪いね……………」

「そうだね……………」

このように人に嫌われている。高町なのはに出会ったときなんか、声をかけた瞬間、嫌われてたし、おまけに主人公っぽいヤツに誤解されてドロップキックされた。高町は王子様のように現れたそいつにホの字なり、公園に残された。

え、なにこれほんと。

その理不尽な扱いに全世界のオレは泣いた。

アリサ・バニングスと月村すずかのと きなんかもつと酷い。いじめに救済に入ったのに、恩どころか仇で返されたし。

「なんでいるのかな？」

お前からこそ、なんでオレをそんな嫌悪な視線するんだと言いたいが、言つたところでオリ主っぽいヤツがまた誤解して制裁を加えそうだ。

誰もオレを助けてくれない四面楚歌。……………まあ、なんにせよ。

「死のうかな……………今日辺り」

ネガティブ？ いやもう二年もこういう状況だし。

自殺を計画しておこう。元から未練ないし。生きる理由ないし。

(黒髪のヒロインサイド)

女神からやつと転生させてもらい、私達は海鳴という町に来ていた。ここに彼が

.....。

「急いで見つけようよ！　なんか嫌な予感がする！」

親友の言う通り、胸騒ぎがする。私達三人は散り散りに別れて、そして――

「見つけた！」

学校の屋上で一人ポツンと立っていた。彼は手を肩までの位置に上げて――

!?

「まさか!?　いけない！」

私はすぐにテレパシーで、彼女達二人を呼んだ。間に合つて！

(黒髪少女サイドout)

もうここでいいか.....。きれいな青空が広がるこの屋上でオレは死ぬ覚悟を決めた。

ここなら誰も来ないし、見つからないだろう。

オレは一度死に、悔いのない終わり方をしたのだ。だからもう躊躇いもない。

戦争で生き抜き、仲間や敵が死ぬ光景を何度もみたおかげでオレにはもう死ぬ恐怖はない。

「来い……………『全てを開く者』」

オレは神器を召喚する。

黒いカギがそのまま剣となったような剣……………。今まで共に戦ってきた相棒である。

それを自らの胸に剣先を向ける。

この神器の能力は全てを開き、閉じたりする見た目通りの鍵のような力がある。概念すら干渉できるレベルため、魂を肉体から切り離すなど容易である。概念

「……………もし生まれ変わるのなら、彼女達に会いたいなあ」

大切な人達を想いながらオレは神器を——

ガシッ

——
刺す間際で誰かに手首を掴まれて止められた。綺麗な手の少女によって。

「馬鹿な真似はよしなさい」

「……………冗談だろ？ だって……………お前は……………」

「ええそうよ。あなたの思う通り、私は別世界の住人だった」

「だった？」

「天寿をまっとうできたのよ。私も彼女も。それからあなたを支えるために、修行して、やっとな今日、この日にここに来れたわ」

「……………」

「あなたは今、絶望しているのはわかるわ。けど、死ぬことを許さない。約束したでしょ？ 彼女と私に」

……そうだ。彼女達と約束して、オレはこの世から消えた。彼女は背後からオレを抱き締め、耳元でささやいた。

「もう逃がさないわよ。あなたがたとえ死を望んでも、私が許さない。身体も心も、全て私達のモノよ。勝手は許さない」

「めちやくちやだなあ……。病んでないかお前」

「ええ、愛のために狂ってるわ」

「重たい愛なこと」

神器を消して、オレはふり返る。ああ……。やっぱ彼女だ……。

「久しぶり、ほむら」

「ええ、久しぶりねソラ」

オレを殺した少女がそこにいた。

第二話

(??サイド)

曇天だった彼の心はこの青空のように晴れてくれた。理由はそう、かつての戦友であるほむらと再会したからだ。

ソラにとつて友達の再会は生きる気力を与えてくれるものだった。

ほむらはソラに自分が転生してきた理由を説明し、ソラは納得した顔で手に顎を当てる。

「へえ……………つまり転生したオレが死なないようにつてこと？」

「ええ、本来ならあなたは天命で死を迎え、魂を浄化してから生まれ変わる段階まで事を運んでいた。だけど、それをあの老害が勝手に転生させて……………やつぱら脳髓だけ残してホルマリン漬けにするべきよ」

「やめて。それはいろんな意味でトラウマを起こす光景だから」

某ループモノと破天荒な野球ゲームに出てくる光景を思い出したソラである。

「英雄になつてんだなオレ」

「数々の敵を一撃で葬り去ったという伝説を残しているわ。当然よ」

「そういえば、これで異世界とか行けるの？ 転生してから試したことがなかったんだけど」

ソラは『全てを開く者』を召喚してほむらに聞いた。腕を組んで、しばらく考えてから彼女は口を開けた。

「可能………かもしれない」

「かもしれない？」

「このリリカルなのは世界は次元世界というふうに多次元に世界が分かっているのよ。私達がいるここは管理局という暴虐不尽な組織に目をつけられていない管理外世界。逆に目をつけられている世界は管理世界ね。そして、発展した技術によって滅んだか、はたまた他の理由で滅んだ無人世界。要する世界が星のように分かれていると考えればいいわ」

若干^{じゃっかん}管理局という組織に悪意ある言い方だが、ソラとしては別にどうでもよかった。

「うくん」と異世界のことにも悩ませて唸っていた。別に理解してないわけではないが、彼にとつて異世界というもの次元世界というわけではない。

「あなたが異世界と呼んでいる並行世界や幻獣界はもしかするとあるかもしれないわ。詳しく知りたいなら実験すればいいわ。失敗したら女神に連絡して聞けばいいし」

「連絡できるの?」

「187と電話番号を押せば出てくるわ」

「なんかヤな電話番号だな」

イヤな、という呼び方がなんともあのドS女神らしい。

「でもこれで冒険ができるんだな。やったね、また冒険できるよ!」

「……………異世界に行くことは管理局の技術じゃ到底無理なことだから、あなたはきつと目をつけられるわね」

「ゲツ、お前からあの暴虐不尽とか言われてたその組織に?」

「馬車馬のように働かせるに違いないわね。もしくは侵略という形で使われる道具とか」

「おいおい……………ぜってえヤだなあ」

「そうならないように私達がいるのよ」

ほむらは胸を張る。とは言っても小学三年生の容姿のため、頼れる雰囲気じゃないと思う。

「いや大丈夫かよ。お前容姿が小学三年生じゃん。重火器を撃つどころか持てるのかよ」

「魔法少女だったときのスペックしてもらったから持つことや発砲に起きる反動も耐え

られるわよ。それにあなたと同じように神器を特典してもらったわ」

光りと共にほむらの手に一枚のカードが現れ、服装も魔法少女の衣装に変わる。

『時を駆けるカード』。時間操作を可能にする神器よ。まあ、時間遡行はできなくなっただけ」

肩をすくめながらほむらはそう告げた。要するに遡行以外の能力が継承されているようだ。

ソラは首を傾げながら、次の疑問を口に出した。

「ほむらも神器使いか。ん？　つまりまどかもか？」

「そうね。『慈愛の弓兵』という神器を持つてるわ。別名デストロイアーチャー」

「ちよい待ち。なんで慈愛なのにデストロイという物騒な文字が出てくるんだよ」

「あなたも覚えてるでしょ？　救済の魔女を倒したまどかの魔法。あれが神器となったことを想像して」

「……………なるほど、確かにデストロイの次にオーバーキルが付きそうだわ……………あれ」

少し背筋が凍った。あれで生きていたら最早怪物どころの問題じゃなかったりする。

核兵器レベルの攻撃に耐えられる知的生物なんて見たことない。

「それにしても千香も転生してくるなんて……………」

「ちなみに最期はシヨタコンのパンツ仮面に必殺技を喰らって死んだとか言ってたわ」

「いやほんとどんな死に方!? めちゃくちやきになるんだけど? つーかあいつつて盾の神器だろ。なんで死んでんだよ!」

あらゆる攻撃を防ぐ神器使いを倒したその変態に戦慄を覚えるソラ。

ほむらは目を覆い隠し、呆れながら答えた。

「……………受けなきや駄目だつて芸人魂がつて言つてたわ……」

「やっぱバカだあいつ」

しょうもない理由である。ちなみに敵意や悪意、殺意に反応するため防げない欠点があるが、神器すら使つてないので最早呆れるしかない。

「ま、なんにせよ。また会えるつてことだろ。オレはうれしいな」

「……………ほむう」

ほむらはおもしろくなさそう表情になる。それもそうだ。意中の男性が他の女性のことを考えているのだ。ほむらはソラの手の甲をつねる。

「イテツ。な、なんだよ」

「別に、なんでもないわ」

「だからつねるなよ。痛いって」

「……………じゃあ、私の言うことを聞いてくれたらやめてあげるわ」

「はいはい。わかつたわかつた。んでお願いつてなんだ?」

「……………ギョツと手を握りなさいよ」

嘆息を吐きながら甘えてくるほむらの言うこと聞いてあげた。表情も鉄仮面から少女らしい微笑に変わる。それをかわいいなと思ったソラだった。

「ほむらちゃー……ん!!」

「ほむほむう……!!」

親友であるまどかがこちらに向かってきた。彼女の今の姿は魔法少女の時の衣装と同じ服装である。

「まどか、千香? いったいどう……………」

ほむらは絶句した。ソラも目をギョツとさせた。

彼女達二人の背後には———魔女がいた。

あの頃にあった魔女が。薔薇の魔女が。

いやなんか、ものすつげえスピードでもう飛んでこちらに向かつて……………。

「なんで魔女が!？」

「リリカルなのはってキュウベえと契約して魔法少女になる物語なの?」

「そんなわけないでしょ。あれはあの世界のみだから! 虚先生ワールドだから

!」

「さりげなくメタ発言だなオイ」

まあなんにせよ。魔女がいることに変わらない。まどかと千香と合流して、ソラ達は魔女と相対する。

「しっかし、誰がこいつを呼んだんだ？ あの世界にしかないはずだろ」

「あの……その……」

「あ、あはははは……」

「オイお前ら。なんで苦笑してるんだ？」

理由を聞くと彼女は答えた。

——回想——

「見つからないなー。本当にどこにいるんだろ？」

「おーい、まどつちー」

「あれ？ 千香ちゃん。どうしたの………つてそれ何？」

「いやー、なんか金髪の自称オリ主（笑）くんがボクにナンパしてきて、んで身ぐるみ剥いだら出てきた。ちなみに全裸で吊るした」

「うん、とんでもないことしたよね。犯罪だよねそれ」

「バレなきやいいんですよ、姐さん」

「面倒だからもう聞かないけど、その宝石は何かな？ 魔力の塊っぽいんだけど」

「うーん、わっかんないからとりあえず質屋に行こうと思う。換金してお金ゲットだけ！」

「いやソラくん財産あるから大丈夫だよ。あの下級神が踏み台転生者にしようとしていたから、全財産が一京以上あるみたいだよ。それに年間一千万が銀行に入るみたいだし」

「ガーン。つまり意味なし!? ちつくしようー。こんなもの!」

千香は宝石を壁に叩きつけた。しかしびくともしない。

「だから壁に向かって投げないの! もう、割れたらどうするの」

「大丈夫大丈夫。たとえ魔女が踏んづけても耐えられそうみたいだから」

「そんな鉋石見たことないよ。それにしても魔女……………魔女かあ。薔薇の魔女ってなんで薔薇なのかな。百合の魔女とかいかなかったのかな?」

まどかはかつていた世界の魔女を思い出していた。あのとときのママさんはカツコ良

かったなあと思い出していると宝石が光だして――

――回想終了――

「……………」

「それから魔女が出てきて現在進行形で襲われていたの」

「要するに……………」

ソラとほむらはある人物に目を向ける。

「お前のせいかアアアアア!!」

怒鳴られた千香はテヘツとサムアップで返した。ほむらにドツかれて涙目になったが。

オレは次にまどかに指をさしてツッコむ。

「お前もお前でなに思い出してないんだ！アレってほむらが言ったジュエルシードじゃねえか!!」

「ぶっちゃけ、ほむらちゃんが覚えているからいいやつて思ってたから忘れててね」

「人任せかよ!!」

「ティヒ♪」キラーン

「なに『やっっちゃった』って顔してんだよ！ それで許すわけ——」

「許す。無罪。釈放よ！」キリッ

「お前は黙ってろ！」

結局、彼と彼女達は暴走体（魔女）と戦うことになった。まどかのオーバークイルでなんとかなったが。

………ホント、スゲーな円環の理って。

そんなことを思いながらソラは滅された魔女が消滅するのを目に焼き付けるのだった。

第三話

翌日、また登校することになるうとは過去のオレもびつくりなことである。

なぜなら元自殺願望者だったからな、ははは……。

担任の教師が黒板に転校生達の名前を書いていた。

今日転校という形で学校に入る小学生がいるが、オレは別にどうでもよかった。

昨日、再会した彼女達はオレの居候することになった。戸籍はあるが、どうもお金や寝床がないらしく仕方なく、居候させた。

仕方なくだぞ？　ここ重要。

まあ、なんにせよ。

彼女達もまた学校に転校という形で行くことになっている。どこか知らないが、元気でスクールライフをしているだろう。

「はい、今日は転校生が三人います」

「先生ー、女の子ですか？」

「はい。とびつきり綺麗な女の子ととびつきりかわいい女の子が来ます。………最後
の一人は美少女だけととびつきり変ですが」

オイ聞き捨てならないこと言ったぞ今。まあ、美少女に反応する男子達を尻目にオレは寝たふりをする。

「では転校生のほむらちゃん、まどかちゃん、千香ちゃんです」

「朱美ほむらです」

「朱美まどかです」

「天ヶ瀬千香だよん」

……………マジで？ つーか、学校ってここかよ。

「まずこの私、朱美ほむらから自己紹介をするわ」

そう言いながらほむらは壇上に立つ。おお、なんかすごい自信。しっかりしてるなあ。

「諸君、あなた達は妹をどう思う？」

訂正。しっかりしてない。暴走してた。キリッとした顔で彼女は続ける。

「かわいい美人清楚という様々な容姿がありツンデレ、クーデレ、アマデレというスタンスを持ち、なおかつ年下または同い年というところがすばらしい。私の妹はかわいい。愛らしい。すばらしい。手を出すものに地獄をみせたい。そう、妹とは萌えの至高の地位!! だから宣言しよう。妹とは女神に等しい存在である——」

「いい加減にしろお前！ 転校初日になに言ってるの!?!」

さすがにツッコむわ！ 誰か止めろよ！

するとほむらは髪を流しながら、オレに向けて言葉を出す。

「あら、あなたはうちのペットのソラじゃない。こんなとこにいたのね。女王である私のお仕置が必要ね」

「いつからお前のペットになった。つーか何様だお前」

「そう私の名前は朱美ほむら」

「なんか始まった……………」

「……………団体戦のテレビゲームはいつも一人だった美少女よ……………」

「まさかのボツチだった宣言!?!」

予想外デス。いろんな意味で。

「次は私の至高の妹、朱美まどかの紹介よ」

「朱美まどかです。ほむらちゃんは普段こうおかしい人ですが、根は優しい双子の姉なので、妹共々よろしく願います」

さりげなく罵倒したよなこいつ。オイほむら。なに悶えてるんだよお前。

「かわいいよ、かわいいわまどか……………ハアハア」つて。

ヤベえ、そろそろこいつ危ないな。主にまどか……………いや、むしろバツチこいつか
言いそう。

「趣味はイスを集めることです」

前世からそうらしいが、どんな趣味だよ。集めるとなんか出るのかよ。

「それとここにいる銀髪青目なソラくんに言いたいことがあります」

はい、指名されました。てか、特徴的確に言われる指名なんて初体験だよ。

なんだよ、と聞くとまどかは妖艶な微笑みを浮かべ、

「私のイスになってくださいー！」

「なに自信満々に言ってるんだお前。なんでお前のイスにならなきゃならん。そんなもん他にやらせとけ」

「えー？　せつかく渾身の求婚だったのに……………」

「どんなプロポーズ!?　新しすぎるわー！」

「まどかは渡さないわ。欲しければ、この私を倒しなさい！　そして奴隷になりなさい、

歓迎するわー！」

「オイオイオイ!?　なんでお前が出てくんだよ！　つーかお前もか!!」

奴隷とかイスとかになれって最早こいつらドS姉妹だよ。しかも百合百合な。

ほら、今でもなんか二人だけの世界に入ってる。

「最後はボクだねー！」

「こいつがいた……………」

思わず手を覆う。

百合姉妹のボケの応酬ばかりだったが、こいつは違う。

こいつは一言で表すと変態だ。

ただの変態ではない。とびっきりのだ。

口に出すものは小学生にはOUTなものばかりだ。

「天ヶ瀬千香です。趣味は盗撮、ストーカー、下着ドロなどを実行する人の下着を警察官に渡すことです」

（「どんな趣味!?!」）

なんかクラスの心が一つになった気がした。

「それとボクもソラくんに言いたいことがあります」

「こいつもプロポーズか？　なんでオレはこんなおかしなヤツらに好かれるんだ？」

「まともに言えよ？」

「大丈夫大丈夫。二人と違って普通だから」

深呼吸してヤツは言った。

「ソラ……………ボクのダッチワイ——げぶつ」

「言わせねえよ！」

オレは変態に腹部にドロップキックを決めた。

暴力？ ツツコミは暴力ではない。

閑話休題

「ふう、これで美少女三人はクラスに溶け込めそうね」

「いや溶け込めねえだろこれ！ 姉妹は未だに百合空間だし、そこに倒れてる変態は究極だし、ぜってえ馴染めないだろー！」

「大丈夫。全て神威くんに押し付けるから」

「お前ほんとここの教師!?!」

生徒に全て押し付けるなよ！

「あ、ぶっちゃけ私、今日で寿退社します。妊娠三ヶ月のデキ婚で。彼氏を襲ったらできちゃった☆」

「なにすんごいことカミングアウトしてんのあんた!?!」

教頭のツラをあまおんで売ったという、伝説を残したアグレッシブな教師かと思えば、ここまでとは！

ていうかここで言うことかそれ!?!

「変わりの先生が今日来ているのでその人と仲良くしてねー！ ……………そのうち生徒

に手を出しそうだけど」ボソッ

「ちよつと待てエエエエ！　なんかマズイこと言ったよな今!?」

「んじゃ、シーユー!!　じゃあな、また会おうぜ……………みんな!!」

「オイオイオイ！　なに爽やか系主人公っぽいこと言ってるんだお前!!　逃げるなゴルアアアアア！」

あんのバカ教師走り去りやがった。カオスな現場をそのままにして！

廊下に出たときもう遙か彼方にいるし！　どんだけ早いあの人の人!?

「こんにちは……………今日このクラスの担任になる早乙女和子です……………。ああ……………なんでフラれたの……………」

……………ほむらとまどかにとって見覚えのある担任だったようだ。

だって百合空間にいたこいつらが目を丸くして彼女を見ているもん。

ちなみに彼女がフラれた理由は目玉焼きの焼き具合の喧嘩である。

うん……………妥協を覚えようよ。

第四話

転校生の自己紹介——————もとい知り合いの羞恥を周りに見せる悪夢は終わり、昼休みとなった。

さすがにあの紹介の仕方ではドン引きである。

DSで百合姉妹、もう一人はある意味究極体。関われば確実に染まるだろう。オレもそれはヤだけれども手遅れだろうなあ。

「ソラくんー、一緒にお弁当に食べようー!」

こういうとき、まどかは女神見える。腹黒でなければ……………。

「つて、手作りか?」

「うん。さすがに居候だからこれくらいししないとね」

「将来、良い嫁さんになるよお前」

「なら……………私を貰ってくれる?」

「断固拒否」

「えー? なんで? こんなかわいいお嫁さん候補が目の前にいるのに?」

「今朝した自己紹介を思い出せ」

イスにはまだなりたくない。

軽口をいいながらオレ達が教室に出ようとすると、だ。

「ちよつと待ちなさい」

バニングス、月村、高町が声をかけてきた。オレに対して嫌な顔しているが。

「何かな」

「こんなヤツより私達と一緒に食べましょうよ」

わーお、直球ど真ん中。あとその二匹。うんうんと頷くな。なんかムカつく。

ま、事実オレはクラスから浮いてる方だ。あまり人と関わらないようにしてきたからな。

それに高町、月村、バニングスの三人の美少女をしつこく口説いて嫌われているという噂が勝手に出回っている。

いや………口説いた覚えねえし、そもそもこいつら好きじゃないし。

「なんでそんなこと言うのかな？」

「そいつは女の子と出会う度に口説き回るサイテーな男よ。襲われるわよ？」

オイ、いつの間にかそんな噂が出ているんだ？ 口説いた覚えほんと覚えねえぞ。

そしてまどか。「ふーん」と言いながらダンダンと足を踏むな、痛い。

ほんとにしてないから。

「で？」

「でつて……………」

「だからどうしたの？ 襲われたら、返り討ちにすればいいし、社会的に抹殺すればいい話だもん」

「さらりと恐ろしいこと言うお前に戦慄を覚える」

「ソラくんならむしろバッチこい!! ベッドであなたを待つてる！」

「自重しろ！ いやホントマジで!!」

サムアップするこの淫乱ピンクに拳骨を落とした。上手く逃げたヤツのドヤ顔が少しイラツときた。

「で、でも……………」

「でももなにもないよ。あなた達と違って、私はソラくんが大好きだから一緒にいたい。だから善意のつもりで言ったかもしれないけど、くだらない噂を信じるあなたのことを信用も信頼しない」

「なんですつて!?!」

「どうして怒るの？ ソラがそんなことするはずないって確信があるから言ったつもりだよ私。それにあなた達はソラを勝手に嫌悪しているのでしょ？ ならあなた達は何も関係ない。関わらないことをオススメするよ」

ヤベえ………まどかキレてるよ。怒りで鬨気出してよ。

それほど嫌なんだなオレを馬鹿にされることが。

まどかはそう言つてオレの手を握り、三人娘を残してさっさと出ていった。

まあ、なんにせよ………ほんのり温かいものが胸に広がった昼食だった。

☆☆☆

そして、とある休日。良い天気なので散歩に出かけた。

理由は家にリビングにエロ本が大量にあったからだ。

どうやら、千香の私物で入り切らなくなったものが溢れたらしい。それを片付けるためにまどかとほむらは千香を締め上げた後、オレを追い出した。

なんやかんやと言いながら二人は興味津々にまじまじ見ていたし、たぶん、そのうちどちらかが性的に暴走するだろうな。

百合展開は自宅ではないでほしい。居ずらいから。

さて気分転換のつもりに出た散歩だが、オレの目の前に赤い髪の少女がいる。身体的

特徴から同い年だろう。

「というか、どっかで見たことあるが知らん顔をする。しかし、少女の手がオレのズボンの裾を掴む。」

「腹減った……………ソラ、なんか奢ってくれ……………」

「知らん。オレはお前を知らんぞ。佐倉なんとかさんというズボラな女を知らん」

「的確にダメ出ししてるよなそれ？」

「チツ」

「なぜ舌打ち?! ああ……………腹減った……………」

「はあ……………なんでこいつもここに居るか近くのファミレスで聞くか。」

「というわけで今日の散歩はファミレスで奢ることで終了した。」

第五話

ファミレスで杏子と再会してからいろいろ聞いた。杏子とママさん、さやかもここに転生してきたそうだ。

オレのサポートというほむら達と同じ理由である。

「もぐ………んで、今女神に用意された寢床に向かったけど、はぐれて迷子になってんだよ………もきゅもきゅ」

「しつかりしろよ。お前、成人した女性だろ。また少女に戻ったところでダラしなく——つてどんだけ食うの!?!」

「アタシが満足するまで」

「そもそもお前の腹どうなっているんだよ!?! よく肥らないなお前………」

「適度に運動しときゃあ、問題ねえさ」

ニシシシと笑うこのブラックホール。さりと全世界の女性を敵にしたぞ今。

「携帯で連絡とれないのか?」

「……………あ、あんなもんなくたって生きていけるだろ」

「壊したな……………」

「仕方ないだろ！ 『すらいど』とか『ぼたん』ってなんだよ。黒電ありや充分だろ!!」
「逆ギレすんなよ！ あとお前めちやくちや古い通話スタイル！」

「そういえばこいつ機械オンチだったな。出来ても炊飯器や洗濯機を動かせるくらいだったな。」

「やれやれ。ママさんの電話番号わかるか？」

「えつと確か……………」

スラスラと数字を答えた。つて……………。

「その暗記力で公衆電話で連絡する手段思い付かなかったのか？」

「……………あ」

「はあ……………」

「な、なんだよその目は!？」

「いやお前ってさやかかの子として産まれたんだなあって……………」

「アホの子って言いてえのか!？ あとさやかと血は繋がってねえよ!!」

「お前もそういうことさやかに対して思ってたんだな」

やれやれと嘆息を吐いてふとガラス越しの窓を見る。そこにはジョギングする大人。

買い物する親子。

小学生くらいのカップルがジュエルシードで告白する幸せで平凡な

「つてジュエルシード？」

「つて、オイイイイイイなんでそんな平凡にあるのあれが!？」

「うおっ、いきなり叫ぶなよ！」

「ばっ、そんなこと言ってる場合」

次の瞬間、木がこちらに迫ってくる光景が目映り、気を失った。

☆☆☆

暴走したジュエルシードによって飛ばされたオレは目を開けた。

そこには赤い髪の少女が赤い衣装を纏い、右手で槍で迫りくる木を払い、空いた手で

注文した焼き鳥を食べていた。

「つてこんな状況でなに食ってるの!？」

「仕方ねえだろ。もったいないし」

「もつたいないどころじゃないから！ 普通に命が危ない状況だから！」
「テメー、食い物を粗末にするなって母ちゃんに言われなかつたのか？」

「あ、スミマセン——じゃねエエエエ！ 食えるときと戦うときのメリハリつけろよ!!」

シリアスが台無しだよコノヤロー。

そうこうしているうちに杏子は焼き鳥を食い終わり、指をさす。

あれって……………。

「人？」

「ん。たぶん願いの核みたいなものだろ。アンタならあれをどうにかできるだろう」

なるほど……………ならお望み通り。

「解放してやるその呪縛」

『全てを開く者』を召喚し、その剣先を核に向ける。

それを防ごうと木々が迫るが、杏子の数人分身し、それを払う。

さて、どうやって核に行くつもりか、みなさんはどう考えているのだろうか。

オレは空にはあまり飛びません。では答えはなんでしょうか？

オレってジャングルファイト得意のよね。

スパイダーな男のように木々に飛び乗り、その間に神器から解錠の波動を撃つ。

核に当たり、光りが生まれるとそこにいたのは、先ほどの小学生カップルとジュエルシードである。

「ふう、どうにかなった」

「相変わらずデタラメだなそれ」

「お前のもデタラメだろ。なんだよその神器」

杏子の胸にあるアクセサリーに指をさす。

「これか？　こいつは『幻想は現実』っていう神器さ。あることをないこと、ないことをあることにする——要するにあたしが創った幻想は現実にしたたり幻想のままにできるってことさ」

なにその神器。どこぞのクフフな人が使いそうなんだけど。

「とにかくここから離れるぞ。なんかめんどいヤツが来たし」

高町とオリ主が飛んでくるところを目にとらえた。さっさと行かないと余計なことになりそうだ。

「なあこれ貰っていい？　綺麗だし」

「別にいいけど、後で何重も封印するから貸せよ？」

ということ言いながら疾風のごとくその場を去った。

(オリ主くんサイド)

俺は天宮草太。転生者だ。

なのはと一緒にジュエルシードの封印に向かっていたが、ジュエルシードの反応がなくなり、そのうえジュエルシードもなくなっていた。原作にはなかった予想外なことに戸惑った。

しかし犯人はわかっていた。間違はなく神威とその協力者だ。
神威の魔力と知らない魔力も感じたからな。

「にしてもこんな短時間で封印するとはあいつの力は本物ってことだろう」
だが、負けない。お前が世界をむちやくちやにするなら絶対止めてみせる!!

第六話

杏子達の居候場所は自宅でした。

いやマジで。

嘘だドンドコーと言いたいくらい事実だった。

まさか帰ってきたらママさんとさやかか優雅に紅茶飲んでは誰も思わないわ。

「ソラは渡さないわ。ソラは私とまどかのおもちやよ、美樹さやか!」

「友江さやかかって言ってるでしょ!! こっちこそソラはあたし達友江家のものよ!」

「よろしいならば戦争よ」

「上等。かかってこい」

青筋を浮かべて、第一次ほむさや大戦勃発。

いや頼むから神器を出さないで。家がぶつ壊れるから。

「はい、ソラ君あーん」

「一人で食べれるから、ママさん」

「お姉ちゃんって呼んでいいわよ?」

「いえ、結構だから。というかまどか、膨れっ面でオレの首を締めないで。地味にキツイ

……………」

まあなんにせよ。

「カオスだなこりゃ」

杏子がツツコむか。

閑話休題

「ママさんは『結んで開くりボン』。さやかは『無限の音楽』か。ピユエラ・マギ・なんちやらの頃の魔法少女が勢揃いだな」

「ピユエラ・マギ・ホーリー・クインテットよ!!」

「ママさん通常運転だなオイ。なんかママさん達も聖伴行くとか言ってたけどホント?」

「ええそうよ。私が一年上で、さやかさんと杏子さんが別のクラスだそうよ」

「ママさんが名前で呼ぶのってなんか新鮮」

「仕方ないさ。同じ友江だし。ぶっちゃけ女神がめんどいからひとくくりしたって言っ

てたし」

「なんとアバウトな……………」

せめて考えてほしいな。まあ今となつてはどうでもいいが。

「ちなみに名前で呼ぶのに何度も囁んでたぞ」

「し、杏子さん！」

「マミさんで萌えることになろうとは」

「わかるよほむらちゃん。これがギャップ萌えだね！」

「いろいろ台無しだよコノヤロー」

そんな軽口をたたきながらオレ達の夜は過ぎる——

まさか、マミさんが就寝のときに夜這いしてくるとは思わなかったが。

☆☆☆

翌日、朝からなんかオリ主くんと呼ばれた。

スルー。めんどいから。

昼休み、オリ主くんと呼ばれる。

スルー。ウザいから。

放課後、ママさん出現。

逃げる。さやかが現れた。

窓から飛び降りる。杏子がロッキー食つてた。一本もらつた。固い。

「無視するなっ!」

ロッキー食つてたらオリ主くんが現れた。あ、まだいたんだ。

「当たり前だ! お前に聞きたいことが——ぐふっ!」

言い切る前に杏子が右ストレートを与えた。なんでこんなことしたんだ?

「ヘタレっぽいのに態度がえらそうだった。殴ったことに後悔してない」

いや笑顔でサムアップして答えるもんじゃないだろ。第三者から見たら殴ったサイ

テーな人間じゃん。

「大丈夫。痴漢されたって言えばアタシが正義になる!」

「黒ツ! 黒いよお前!」

「ところで痴漢ってなんだ? 電車でよくポスターで見えるけど」

「違った。まさかの純粹無垢!」

「よろしい。この変態の婦人。千香ちゃんをご教授承ろう!!」

「一番教えてほしくないヤツが現れた!!」

場はカオスになったのだ。杏子と千香を連れて逃走した。

☆☆☆

逃走したオレと千香、杏子は公園に来ていた。海鳴の公園は普通に良い場所だ。ジャングルジム、ブランコ、シーソー。

そして巨大な犬のオブジェ——あつれー？

「おかしいな………。なんかグルルって唸るオブジェってあつたっけ？」

「リアリティーあるオブジェだねー。これ創った人は神だよ」

「呑気なこと言ってる場合か！ ジュエルシードだよ！」

杏子のツツコミで正気に戻ったオレ達は神器を召喚した。

「そういえば犬って食えたっけ？」

「食うつもり!?!」

千香の爆弾発言に戦慄を覚えているといきなり、電撃が犬に直撃した。

犬は元のサイズに戻り、ジュエルシードを落とした。

誰だかわからないが封印してくれて助かる。

オレはジュエルシードを拾おうとしたとき――――つて電撃がこちらにもきた!?

「守護せよ」

千香の神器『守護神の壁』が発動し、半透明半円がオレを守る。

「ありがと千香。助かった」

「いえいえ。しつかし、いきなり攻撃するなんて物騒な女の子なこと」

千香が言う少女はスクール水着のような衣装を纏った金髪で同じ年の女の子だ。うん、一言言わせてもらおう。

スウーハアー深呼吸して、

「変態だアアアア痴女がいるウウウウウ!?!」

「違います! 初対面でひどいですねあなた!」

「ヤベー、あんな服装で見られたらアタシ間違いなく引きこもるわー。あいつの変態力はパネエぞ」

「うんうん、同士がいて千香ちゃん感激! しかも美少女! ゲヘヘヘヘ………:夢が広がるのお」

オレと杏子にドン引きされ、千香には視姦されてしまいついに痴女は「違うのに………」と半泣きしてしまった。

ザマアと思つたオレは外道じゃない。いきなり攻撃したお返しだコノヤロー。

「うちの主人様をなに泣かしてんだい!!」

傍らにいた犬が怒鳴つてきた。普通は「犬が喋つた!」と驚くところだがオレ達は違
う。

「ソラあいつ捕まえようぜ! サークাসに売れば儲けられる!」

「よっしゃあ!! 二人で山分けして買いいしに行こうぜ!」

「なに考えてるのこのガキ共!? とんでもないヤツらだよ、こいつら!」

驚くどころか捕まえて買取するのがオレらのスタンダード。

ちなみにまどかとはむらだつたら、片方は普通にリアクションするが、もう片方は射撃の実験台にするとか言いそうだ。

「コースプレツ、コースプレツ!」

「ばーいしゅッ、ばーいしゅッ!」

「ひ、ひいッ」

さすがに怯え始める襲撃者達。もはや彼女達が狩る側ではない。狩られる側だ。

杏子と千香のテンションが高くなっており、掛け声が出ている。それが余計に彼女達

に恐怖心を与える。

——しかしオレの不幸はまだ続いてようだ。

「ぬお!？」

「うわっ!？」

「うきよ!？」

いきなり黒い魔力弾がこちらに向かってきた。この魔法は……………。

「か弱い女の子に何をしているんだお前は!!」

みんな大好きオリ主くんでした。

うわー、一番めんどーなヤツがきた……………。

「何って、その犬を捕まえて買収するつもり」

「その痴女を捕まえて着せ替え人形にするつもり」

「ソラが」

「お前らなに言ってるの!？」

擦り付けられた! こいつらヒドッ!

「なんてヤツだ! もう許さない!」

なんか知らないけど誤解されたままだし! オリ主くんは再びオレに向けて魔力弾

を撃つ。

ああもう。仕方ない。

オレは魔力弾を神器で弾き返した。オリ主くんは防御したが返されたことに驚いていた。

いやこの程度でやられるわけねえじゃん。

三年前にオレをボコボコしたことで調子乗ってるのかこいつ？

「だとしたら————思い知らせてやるか……………」

お前が相手している敵がなんなのか。未熟者ごときじゃ勝てない相手ってヤツをな。

第七話

(草太サイド)

フェイトを助けるために撃った魔力弾がまさか弾き返されるとは思わなかった。踏み台転生者であるが、こいつの実力は本物だ。

だけど俺は勝てる自信があった。

なのはのお父さんとお兄さんと毎日稽古つけてもらい、それなりの実力がついたと自信がある。

だから挑んだ。そして知った。

——敵が遥か彼方の実力を持つ者であつたことを。

「遅い。ぶっ飛べ」

「がはっ!？」

魔力刃で斬り込んだが、ヒラリと右に避け、腹部に激痛がはしる。強烈な蹴りだった。

士郎さん——いや、それよりも重く強い一撃。

まさか魔力強化しているのか!?

「んなわけあるかタコ」

「ぐ、あ……………」

心を読んだようにヤツはそう言って、カギのような剣を魔力刃で受け止めたが、重すぎてる！

なんて斬撃だ。たった一撃で全身の筋肉の体力を持っていかれそうだ！

神威は次々に右、左、上、下からと斬撃を放つ。反撃できず、成すがままだった。

「ああアアアア！」

「おつ、火事場のなんちゃらか？」

俺はすぐさまヤツから距離を取り、相棒であるデバイスに最強の魔法の発射準備を頼んだ。

「ラルド！　　ダークインパルスを!!」

《《心得た!》》

「え、なにそのおもちゃ。初めて知った——」

興味津々にラルドを見ていた神威だが、最後まで言えなかった。

ダークインパルス。

なのはのスターライトブレイカーの黒いバージュョンの最強の砲撃魔法である。さす

がにヤツも――

「なっ!？」

そんな考えはすぐに破棄された。神威は無事だった。

しかも無傷で。

剣先をこちらに向けた格好で不機嫌な表情をしていた。

「いきなり撃つなよ。ビックリしただろ」

「な、なんでお前は無事なんだよ!？ あれほどの砲撃をどうやって!？」

「え？ 普通に『開いた』んだけど」

「どういうことだ!？」

「いや『開けた』っていう概念をその砲撃にぶつけて切り開いたってことだけど」

概念に干渉する武器？

ヤツはどんな特典をもらったんだ！ 踏み台が得る特典じゃないぞ!？」

「なんかもうめんどいからとつと終わらせよう」

「ナメるな。まだ俺は――」

そう言いかけたとき、神威を見失い、後頭部に衝撃を受け、地面にたたきつけられた俺は失神してしまった。

……なんて……強さ……だ。

(ソラサイド)

オリ主くんとの戦闘が終わり。オレは寝ているヤツを縄で縛った。

「うん、つまんない」

ここまで骨のない敵は久し振りである。オレが強すぎるせいかな相手にならなかった。

つーか、千香と神器なしの模擬戦した方がまだマシだった。

防御専門のヤツに負けるなんて、最悪だなもう。

「んで、なにしてんのソラと千香は」

「いや金あるかなって。ほら、オレってまどかに財布握られてるし。あつたら返済無しで借りる予定」

「ボクはこいつの恥ずかしい写真をとってネットにばらまく予定」

「サイテーだなオイ。だが許可する。ゆけい、我が積年の恨みのために」

「やめんかお前ら」

ちなみに金髪少女は戦闘中に逃げられた。

結局、オレの復讐も杏子に止められたし。ちくせう。

☆☆☆

翌日、オリ主くんに遭遇しないように細心の注意を払い、帰宅した。

途中、ゴツくてケツ顎男性が「ヤらないか」と聞かれたとき、寒気がした。

追ってきたところを、通りすがりの金髪オツドアイを生け贄にしたオレは悪くない
………はず。

まあなんにせよ。貞操を守れたことがすばらしいことである。

「ただいまー」

「おかえりなさいソラ」

ほむらが出迎える。そういえば、今日は買い物当番だったな。

「ねえソラ。温泉行きたい？」

「うーん、別にどっちでもいいかもな」

「私達の裸体みたくない？」

「お前いい加減に自重しような」

昔はオドオドした大人しい文学少女だったらしいが最早面影ないくらいのハツチャケキャラにシフトチェンジ。

何が彼女を変えてしまったんだ……。あ。オレか……。たぶん。

「自重しなくて何が魔法少女よ」

「なにその某英雄王みたいな言い分。確かにあれはあれで自重してなかったけどさ。リアルファイトはアニメーションだけでいいよマジで」

円環の理だった頃のまどかに見せてもらった並行世界の一つの話だったりする。

あれはひどい。

主にマミさんの死因が。

「とにかく温泉行くのはどっちでもいい。みんなが行きたいなら行くって感じ」

「あら、それは全員一緒に賛成したら行くってことかしら？」

「……………」

「女たらし」

「うっさい。オレは誰一人欠けたくないの」

クスツとほむらが優しい笑みでオレを見つめる。……………凶星つかれる

のって結構ハズいな。

—と、いうことでゴールデンウィークは全員で温泉行くことになった。

「あ。移動と荷物持ちはソラの役目ね」

「なにその男女差別。解せぬ」

第八話

空は快晴。気分がよいことが起きそうな天気である。

こんにちは、みんなのソラです。

今日は昨日ほむらが当たった福引きの戦利品で温泉に行きます。ただいま絶賛荷物持ちをしてるでござる。

「お、あっちにあるもんうまそう！」

「コラッ、勝手な行動はしないの杏子！ あ、なんかいい石鹸見つけ」

「つてさやさやも勝手な行動してるんじゃない！ あ、そこのお姉さまお茶しない？」

スッゲーフリーダムな我ら転生者軍団。オイ、誰か労えよ。もしくは変わってよ。

三人のやりたい放題な現場にオレは嘆息を吐いた。

「ふふ、みんなしてはしゃいじやって♪」

「ママさんが唯一の清涼剤だ」

「お姉さんですもの」

お姉さん万歳。ママさん万歳。

「なにデレデレしてるのいやらしい」

「そして鉄仮面によってオレのハートブレイクされる……………」

「ほむらちゃんも鉄仮面じゃないよ。変人だよ」

「どうしようソラ。最近のまどかのセメント率が高いわ……………」

まどかがこうなった主な原因は例の三人娘である。なんかオレの悪口言ってるらしい。

まどかはその陰口は嫌いらしい。

「もつと堂々と来いって毎回思ってる」

「やっぱ詢子さんの娘だったわけあるわね」

「ほむら、その度にオレのハートブレイクされるのヤなんだけど」

「安心しなさい。その時は私とまどかで弄ってあげる」

「慰めないの!?!」

「あなたにアメを与えないわ。ムチにはムチ。徹底的にいじめてあげて鍛えてあげる。そうすればソラの涙目が見れて私ハッピーよ」

「ゴリゴリ精神擦りきれてる度にお前がハッピーなんて解せぬ……………」

「そしてそのとき私がアメを与えて洗脳すればソラくんは私とほむらちゃんのモノになるね!」

「お前はお前で腹黒いしよ!?!」

さよなら癒し、ようこそ四面楚歌。

ママさんは味方かと思えば、涙目なオレを見たいとか言ってるし。ただ頭撫でるだけだし。

はあ……………なんにせよ。

「リフレッシュできるかなあ」

このフリーダムで、セメントで、ぶっ飛んだ連中と宿泊することで。あれ、なんか目にゴミが……………。

☆☆☆

脱衣所で服を脱ぎ、オレは湯船に浸かった。石でできた日本の露天風呂である。

「まさかママさんも一緒に入るとか言ったときは焦った」

一応みんなの保護者という立場で大人バージョンになり、チェックインした後、元の姿に戻った。

あのと看見た姿は将来優しい美人で母性的な女性になることを確信した。

そしてその後には鼻血を流しながらの混浴宣言でそれは台無しとなった。

いや成長記録をとりたいたいからってオレの精神年齢考えてよ。二十歳越えたお兄さんだぞ、もう。

他のみんなも悪ノリしてくるし。

ふと、誰かが入ってきた。若い男性二人だ。兄弟か？

「ふうー、さすが月村さん所縁の旅館だ」

「父さんなんかジジくさいぞ」

「なにを言う。私はまだ現役バリバリだぞ」

……………神よ。テメーはどんだけ試練を与えるつもりだゴルア。

あ。神は死んだんだ。下級だけど。

「ん？ 君は確か……………」

「ヒトチガイデス」

「いやまだ何も言っていないんだけど」

「ワタクシロバートジョンソンドス。ニッポンノオンセンスバラシイダス」

「ダスってなんだダスって。というか温泉って言ってる時点で思い切り日本人だろ君は」

「アーアー、キコエナイ。ニッポンゴワカラナイ」

「耳ふさいで現実逃避しないでくれないか……………」

「まあそう言うな恭也。彼も緊張しているはずだス」

「父さん悪ノリしない」

冷や汗止まらない。

天敵の拠点にいるなんて、このままでは月村組にエンカウントするのも時間の問題か。

ちくせう。まさか月村家の本拠地に来てしまうとは、これが孔明の罠か！

おのれ月村。どこまで我が平穩を邪魔するか！

「私は高町士郎。こちらが私の息子の」

「高町恭也だ。これも何かの縁だ。よかつたら名前を覚えてくれないか？」

しかも高町親子だ。どうしようヤベー。とりあえず名乗るところ。

「ソラです。特技は変態変人に向かってドロップキックからのプロレス技をかけることです」

「どんな特技?!」

「ミイイイイプツ!と掛け声をあげてボディアタックするのが必殺技です」

「どつかで聞いたことある掛け声!」

「すばらしい特技だね。私もプロレス好きである妻にかけられたことがある」

「父さん、なにとんでもないことを息子や初対面の子どもにカミングアウトしてるの!?
というか母さんプロレス好きだったの!？」

まさか高町父がカミングアウトしてきた。やるな中年。中年には見えないお兄さん
けど。

「ちなみに夜のプロレスもしている」と

「そうだね。激しい方だよ」

「なるほど。これは脳内プロフィールに高町士郎という人をメモしよう。ある意味スゴ
い大人である」と

「誉められたぞ恭也。ふふん♪」

「いやなに誇らしくしているんだよ！ むしろ恥じる！ 爆弾発言したことを！」

「そして息子はツツコミ役、と」

「そこはメモするな！」

いや思い切りツツコミ役まっとうしてるじゃん。

恭也はハアハアと息を荒らしながら疲れた表情となっていた。

「やれやれこの程度で疲れるとはまだまだ未熟。修行し直したまえ」

「納得できん。そういう君こそどうなんだ」

「……………常日頃そういう変態と腹黒と変人によって振り回されている」

「……………なんかすまん」

「いや慣れてるから大丈夫。私、もう怖くない！」

「なんかすごい死亡フラグだよそれ。主に金髪ドリルな女の子の」

「恭也がメタいなあ」

面白そうに笑う土郎さん、あなたもそういう人と関わってください。

マジでゴリゴリ精神削られるから。

☆☆☆

高町親子と接点をもってしまったオレは第一回ソラクんどうしよう会議を開催するものの、ウーノというカードゲームによって全員欠席という結末となった。

おのれカードゲーム。

オレだけでなく罪のないみんなを巻き込むとは。

そしてそれを発案したさやかちゃんマジ策士。めちやめちや楽しいぞコラ。

こいつが孔明だったのではないかと地味に思った。アホだが。

「おっ？」

なんかティンツときた。みんなもそう感じたらしい。これは……………。

「敵？ はっ……………これがニュータイプ!？」

「そんなわけあるわけないでしょバカ千香。これはあれよ。虫の呼び鈴よ」

「どんな呼び鈴だよ。虫の知らせだろ、さやか。……………とここでマミ、虫の知らせってなんだろ。意味覚えてないや」

「色々台無しな杏子さんな件」

笑顔でそうツツコむマミさんも染まってきたなあ。そう思いながらオレ達は外へ向かう。

この反応は……………魔力のぶつかり合いだ。誰が戦っているんだ？

「あ、ヤバい。カメラ持ってくるの忘れた。ちよつと待ってて」

「何撮るつもりだお前」

「パンチラ」

「相変わらずな千香な件について」

第九話

真つ黒な夜空に浮かぶキラキラした星空。

そんな静かで幻想的な世界とは無縁に、桜色と金色の魔力がぶつかり合う。

お互い真剣に戦っている二人の少女は数回魔力弾を撃ち合つて、杖を構え、戦う相手を見据える。

「どうしてジュエルシードを集めるの!？」

チヨポポポポポ

「話しても……………わからない」

ズズズズズ、フウ……………

「話し合わないと何もわからないよ!」

あ。マミさん、そのせんべえとって。ありがと。

「話したところで何もわかってくれない!! だから……………」

バリバリ、ポリポリ、ムシヤムシヤ

「だからってこんな……………つてうるさアアアアアい!!」

うなーと手を振り上げ、怒る高町。

おや、ついに高町さんの娘がぶちキレちゃったよ。やだやだ、最近の若い子ったら。

「そりゃ怒るよ! 人が真剣に戦っているのになにお茶しているの!?! なにしに来たの!?!」

何しに来たか、か……………。それぞれの目的を話すと以下の通りである。

杏子「暇潰しにきた」

さやか「面白そうだから見にきた」

マミさん「お姉ちゃん、ちよつと心配になって来ちゃった」

ほむら「気にせず戦いなさい。今、まどかとジューズを賭けてるのよ」

まどか「必ず勝ってね金髪ちゃん!」

高町に味方はいないや。ちなみにオレはお前に賭けてるから絶対勝てよコラ。

「金髪のお姉さん以外まともなヤツがいらない！ あとほむらちゃんに勝手に賭け事してるの!？」

「気安く名前を呼ばないで。あなたごときのミジンコが名前を呼ぶなんて頭が高いは」「何様!?! 何様なのあなた!?!」

それが今世のほむらである。ほむらの師はとんでもないものないもの彼女に教えてしまったね、これは。

ツンドラ通常運行である。

あとその高松と金髪。千香がお前らのスカートの中を狙っている。

「ツ!?! / / /」

「高町だよ！ というか天ヶ瀬さんなにしてるの!?!」

「美少女のパンチラは金になる。コレクションになる。五月六日に聖伴ムツツリ商会で売買予定。カミングスーン！」

「やめてほんと！」

スタンダードな千香はやはり変態である。聖伴ってそんな団体あったかなあ。

あの千香だし、ないなら作るな絶対。

あ。ちなみにここにくる途中、小動物と犬が戦っていたけどマミさんが拘束した。

………亀甲縛りで。

「ユーノ君が!？」

「アルフが!？」

「何かが目覚めそうとか言ってたけど………マミさんなんてことしちゃったんだ」

「ごめんなさいソラくん。ひどいことしたからせめて気持ちよくと考えて

………」

何を思って気持ちよくさせようと思ったのだろうか。

「余計な気づかいだよ! とんでもないことしてくれたよほんとー!」

「とにかくアルフを早く解放………え? 別にいいって? なんで? えっと、気持ち

ちよくなってきたからもういいって? わかったアルフがそう言うなら私は………」

「フェイトちゃん気づいて! アルフさんが手遅れになる前に!!」

カオス。そして変態が増える。変態ってバイオハザードするのかな。

今度研究してみよう。

「そこまでだ!」

と言つて現れたのはオリ主くん。なんか服がボロボロなんだけど、どうしたのだろうか。

「草太くん!」

「草太!」

「待たせたね。天道が邪魔——ぐぼっ!!」

「草太アアアアア(くウウウウん)!?」

登場早々マミさんのマスケットが火がついた!

登場早々退場させるなんて、マミさんさすがにひどくね? 今の。

「だつてなんかムカついたもん♪」

「かわいらしく満面笑顔で答えるものじゃないから。普通に殺人だから今の」

「魔力の弾だから大丈夫!」グツ

「サムアップしてもらっても……………」

ほら見ろ。親の仇を見るようにオレを……………オレつすか?

「なんでオレ? いやマミさんだから。犯人はこの人だから。実行したの見たでしょ」

「クスンツ……………実はソラくんにそうしないとおっぱい揉むぞとマミさんは脅されて

……………ニヤリツ」

「誤解を招くこと言うなまどか! つーかお前笑ったとこ見たぞ今。黒い方の!」

「あら、揉みたいの? ごめんなさい後六年待ってて。そしたら揉ませてあげる」

「マミさんなに言ってるの!?!」

まどかよ、どうしてオレを窮地に追いやる? そしてマミさんその発言いろんな意味

でアウトだから！

「サイテー……………」

「女の敵だね……………」

「誤解されちゃった!? てか、お前ら会話聞いてただろ」

節穴じゃないのこいつらの耳。つーか聞く耳もたずかよ！ つていきなり攻撃して

来やがった!!

空中に跳んで魔力弾の攻撃を避けることができたが、今度は金髪少女が大鎌の魔力刃でオレを地面へ叩き落とした。

さらに極太の砲撃魔法がオレのもとに追い打ちしてきた。

やむ得ず、神器で砲撃魔法を解錠でキャンセルし、金髪少女が放ってきた三日月の斬撃が迫ってきたが回避。

なんとか避けられたけど一杯一杯だった。

オリ主くんだけでんだけパワーアップして、コンビネーション発揮すんだよコイツら。敵同士なのかホント。

「お姉ちゃんとして見過ごせないわね、それは……………」

そう言つてマミさんはマスケット銃で高町達を牽制し、誘導させた。

誘導したふたりを待っていたかのようにリボンで二人を縛り上げることに成功した。

やはり、ベテランの魔法少女だったただけである。

さらにリボンで無数のマスケットを創造し——つて！

「ちよつ、やりすぎじゃないかそれ!？」

「甘いわソラくん。女は甘やかしたら最後付け上がる生き物よ。殺るなら徹底的によ」
「字が物騒だし、改めて思った。女つてマジで怖い!!」

まどかとはむらというドS姉妹をつい思い浮かべてしまった。

あいつらマジでオレをイジルことに対しては全力だからな……………。

すると、マミさんは金髪少女のもつジュエルシードを奪う。何するつもりだ？

「これね。二人が争う理由は」

「それは危険なものです！ 渡してください！」

高松……………あ。間違えた。高町はそう言うがマミさんは真剣な表情のままだ。

マミさんは正義感の強い女性だ。つまり少女同士の争いの種となるものを見過ごせないのだろう。

「争う原因があるなら……………」

そう言つて空へ放り投げる。リボンから巨大な大砲を造りだし……………つてあれは。

「消えなさい♪」

笑顔でティロるマミさん。

ジュツツツドオオオオンと遙か上空で爆発したジェルシードはたぶんその理不尽さ泣いていると思う。

ママさんの火力は神器使いの中では随一だからな。

そして、どうしよう。どんな恐怖の魔王も真つ青になるぞ今の。

現に高町なんかジェルシードと同じ末路を思い浮かべたのか、めちやくちや震えているし、金髪少女なんか呆けているし。

「さてと……………もう喧嘩しない?」

「はい……………」

「ソラくんにひどいことしない?」

「ち、誓って」

「誓いなさい。今すぐ」

「誓いますから銃をこちらに向けないで!」

魔王だ。魔王がいる。ママさんマジ魔王。

あれ?

そういえばこの世界って高町が魔王になる物語じゃなかったっけ。

んじゃ、今日から魔王少女友江ママがはじ

バンバン

「何か考えた？」ニコッ

「イイエナニモ」

マジで顔のすぐ横で撃たれるとは思いませんでした。

「いやー、ママさんってマジパネエです。そのうち魔王少女って………がふっ」

あ、眉間撃たれた。さすが敢えて地雷に踏みに行くさやかちゃんクオリティ。

死んでないけどめちやくちや痛そうに悶絶している。同情はしない。自業自得だも
ん。

「そういえば千香は？」

「千香ちゃんならそこにのびてるオリ主さんの恥ずかしい写真撮ってるよ」

「誰か止めろよ！」

ホント誰か止めて！ 女性の下着を被せ始めたあの変態だを止めて！

オリ主くんが社会的に殺される！

「ふふ、いつも通りねみんな——あちっ？ なにしてるのかしら」

カチツ、バババババババババババババババババババババババババババババババ

ババババババババババババババババババババババババババババババツツ！！

「きゃあアアアアアアアアアア！！」

「にやアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

一斉放射!?! 全身くまなく直撃してるよ! つーか、なんでなのママさん!?

「ごめんなさい。いつのまにかソラくんに向けて魔法を撃つ準備してたから、ついやつちやつた♪」

「いやかわいらしく言っても怖いよこれ! つーかこの二人生きてるよね!?!」

「せっかく準備していたマスクETTを無駄ならなくてよかつたわあ……………」

「恍惚とした顔しないでください!」

ママさんの中にナニカが目覚めた。ヤベー、ドSが三人になった。

ドS三姉妹にならないだろうか。オレは将来を不安をいだきながら、頭を抱えた。

もうやだ。心労が増えてばかり。

ちなみにボロボロになった高町達は夜明けまでリボンに縛られていた。オリ主くんは吊らされていたし。

(??サイド)

ちくしよー、この正答はオリ主である俺様がモブごときにやられるとは
.....。

ババババババババババババババババババババババババババババババ
ババババババババババババババババババババババババババババババツツツ!!

「ええ?」

ちよつ、一齐にこちらに魔力弾が迫って——————

ぎやアアアアアアアアアアアアアアアア!?

もう一人踏み台役の転生者、天道衛。全身打撲および骨折により全治五ヶ月。

哀れ、彼の登場はまだまだ先である。

第十話

天気はやや曇天。それでも学校があるため登校する。

温泉旅行から帰ってきたオレ達は再び学校にいく日々が始まった。

ここ最近高町からよく見られてる。

これはもしかしてオレの時代来たコレ!!と思う人がいるかもしれないが、全然違う。好意どころか憎悪を感じるくらいの敵意だよこれが。

まっ。まだかわいしいくらいだ。

それよりスゴいのを体験してるから。戦場では常に殺意と敵意の渦の中にいたオレにとつては石ころ同然である。

ちなみに過去一番は悪魔ほむら。あれは冷や汗どころか、魂まで握りつぶされるかと思つた。

だてに神様、墮おとしてないよあれ。

もう彼女で体験したくないけど。

オリ主くんが話をつけて近づかせないようにしているから今は大丈夫だが。

まあ、なんにせよ。静観あるのみだ。

閑話休題

バニングスがキレた。以上。

「詳しく説明しなさいよ。さやかちゃん、それだけでわかる頭脳じゃないのよ」

「アホの子だから?」

「シバくぞ」

腕まくりして脅してきた。

怖い怖い。さて説明すると高町が固くなに何かを隠していたことに腹を立ててバニングスの堪忍袋がキレたのである。

ありがた迷惑だと思った。

いくら友達とは言え、隠し事の二つや二つでキレないでほしい。むしろなぜ信じてあげないのか謎である。

「そりゃあ大切だからこそ想って感情が爆発しちゃったんだよ、きつと」

「まあ、わからないことないが周りに当たり散らさないでほしい。不愉快だ」

「よし、ならばこのさやかちゃんが癒してあげよう。税込み百五十円で」

「ノーサンキュー。つーか、ジューズ一本の値段と同価値の癒しなんか頼りにならない」
軽口を言いながらいつもの昼食場所に向かった。関係ないしなオレ達には。

「……………っ」

「ありま」

教室を出ようとしたらバツタリ遭遇。どうする？

ま、スルーの一択だが。

「待ちなさいよ」

「なんだよ」

バニングスに呼び止められた。なぜか敵意あるまなざしも兼ねて。

「あんた、なのはがああなったの知ってるでしょ？ そうでしょ!」

「知るか。つーか邪魔。オレは今すぐ食欲を満たしたいんで」

「ふざけないで!」

そう言つてのばされた手をさやかが払いのける。

彼女はいつもならオチャチャけているが今は、すごいニッコリと笑っている。

うわー、目も笑ってね……………。

「八つ当たりなんてひどいねあんた。ソラが何をしたって言うの?」

「そ、それは」

「別に友達を想うのは悪いことじゃないけど、ソラを巻き込むのはやめなさい。こいつは関係ないわ」

冷たくそう言い、さやかはオレの手を引く形で昼食場所に向かった。

やれやれ……………こいつもこいつでオレを悪く言われるのが限界なのかもしれないな。かっとな。

☆☆☆

放課後、買い物物の当番だったのでオレはさやかと杏子と一緒にメモに書いてある通りに目的のモノを揃えた。

「なあ、なんか世界がモロクロになってね?」

「そうだね。こう……………なんか魔女の結界のような……………」

「マジでか。また魔女が出てくるのか? 助けてー正義のアホ。さやかちゃん」

「ふはははは、よかろう助けてしんぜよう。ていうか、さりげなく馬鹿にしてない？」
「つてチンタラ漫才しているんじゃないよ!! 誰かが魔法の結界を発動したんだ!」

要するにここはバトルフィールドとなったのか。

ふむ、第一次ほむさや大戦のときにこれが自宅で発動してほしかった。

あのとき、結局タンスとソファァーが犠牲になったし。

君たちと過ごした二年間は三秒くらい忘れない。

「むむ、なんか魔力の波動が。これはなんぞ?」

「いやん。魔力の風が。あたしのパンチラはレアだよソラ」

「ノーサンキュー」

「オイこら! なんで『目がアアアアア目がアアアアア』しているのよあんた。目が腐るって意味じゃないわよね!」

いや確かにスカートの中を見てラッキーと羞恥の感情が起こったけどさ。

水色のシマシマはなんというかその……………。

「最近コイツが鼻血出した下着は黒とピンクの普通の下着とか、セクシーな下着だぞ」

「何さりげなくカミングアウトしちゃってるのかな杏子さん!」

「くっ、さすがほむらとまどか……………あたしの一步も二歩の先に進んでアダルティな

下着を装備するなんて!」

「悔しがるどころそこ?!」　つか、あいつらそんな下着穿いてるのかよ!」

魔力の暴風というBGMの中で意外すぎるカミングアウトの嵐に巻き込まれた。

そういえば、下着だけは見ないでねって言われてたけどまたまた見たあのセクシーなものあいつらのモノなのか?

鼻血も吹くほどの大胆なモノだったし。

そんな謎が謎を生む中で、オレと杏子、さやかは爆風が起きたところへ向かった。到着すると。うん、なんか光ってるし、浮いてるな。

「さやか、あれってジュエルシードだよな?」

「そうね。七つ集めると願いが叶うかな?」

「いや某神龍でないから」

杏子はツツコミを入れながら、神器を召喚し、さやかも召喚。それぞれ武器を創造した。

オレも召喚しようとしたが、再び魔力の突風で飛ばされそうになった。

「ソラはあれを封印して!」

オレは頷くとまた突風がきた。さやかはサーベルを野球選手のようにスイングした。

『『フォルテツシモ』!!』

刹那、大音量の音波が突風を打ち消した。

さやかかの神器『無限の音楽』は大音量の音波や振動などを操作する音の力を操る能力がある。

ちなみにサーベルは魔力の塊でできているらしい。

「オラ、捕まえた！」

杏子はアミコミ結界でジュエルシードを捕らえ、こちらに向けて放り投げた。充分だ。

ビルからビルへと猿のように跳び、オレはそのまま剣先をジュエルシードに向けて差し込み、回した。

グサリと刺したとき、ジュエルシードの鼓動は徐々に小さくなる。どうやら治まったみたいだ。

「さて……………どうすんだコレ」

「先生ー不法投棄がよろしいかと」

「同じく」

「採用。だけどポイ捨て駄目だからな」

「杏子にだけ言われたくない」

「テメーら帰ったら一回話合う必要があるな」

杏子に注意されたくない。だって、お前の前世浮浪女子中じゃないか。

そんなわけで思いつきりどっかにぶん投げて逃亡開始。なんかヤな予感するもん。

その予想通りに後ろから高町の声が聞こえたが、無視だ無視。

砲撃を撃ってきたとき、杏子ときやかがキレて、お返しとばかりに槍やサーベルを投げて、阿鼻叫喚になった光景は見えないことにした。

地獄絵図に説明はしたくない。

やつば女って怖いとまた思った一日でした、まる。

(??サイド)

とある艦にて次元反応をキャッチした。しかし、すぐに消えたことに目を丸くすることになる。

そしてその艦は行き先を管理外世界、地球に向けて発進するのだった。

一方、神威家では――

「ぐおっ!?! 配管工のおっさんが!」

「桃色生物がやられた!」

「亀さんがんばって。いやほんとマジで!」

「ふっふっふっ、今よ! ショータイムよ!!」

「「きやああアアアア特殊部隊のオッサンやめてエエエエ!!」」

テレビゲームで遊んでいた。段ボールのオッサンを使うほむらちちゃんマジ強す。

第十一話

綺麗な青空に広がる世界。そんな世界で飛べるとは素晴らしいことである。今まさにオレはそんな状態である。

こんにちわ、ソラくんです。

さてみなさん。今、オレは何しているだろうかわかるだろうか。

ヒントは目の前に高町と金髪少女とオリ主くんがいて、動けない状態です。お分かりだろうか？

「家から出たら拉致られた件……………」

「黙ってる」

厳しいオリ主くんである。背後から攻撃するなんて不意討ちとは卑怯なり。親御さんは泣くにちがいない。

「親はいない。死んでる」

「あつそ。で、暇だ。携帯ゲーム持ってくればよかった」

「……………お前は一応辛い過去とかに同情しないのか？」

「同情したところでなんになるの？ あとぶっちゃけお前の過去なんか知るか。興味の

ない人の過去なんかどうでもいい」

そもそも眼中にないし。

オレの答えが気に入らないのかオリ主くんの表情は険しい。いや基本そんなもんだろ。知らないのになんで同情しなきゃならん。

つーか、なんで一触即発なの高町と金髪少女は。

はっ、謎は解けた！

「修羅場か……………！ すばらしい……………」

「オイなんだその顔は。愉快そうに顔して」

「いやいや、まさに一人の男を巡って争う女性の姿はとても美しいと思って」

「本音は？」

「もつと醜く争え、馬鹿共！」

「最低だなお前！」

何を言う。まどかならば、さらに場を混乱させるために暗示をかけたオカマの人を参戦させるだろう。

質の悪いことに最後に残らせるのはそのオカマだろうな。

何を隠そう、ヤツは愉悅のためにそこまで考える腹黒い女だからだ!!

……昔は純粹無垢だったのに。

若干黄昏していると、いきなり黒い衣装を着た少年が割って入った。……誰あれ？

「クロノ・ハラオウン。十四歳の管理局執務官さ」

「労働基準法を問いたい年齢だなオイ」

どうでもいいけど、なんか金髪少女を捕まえようとしていた。しかしオリ主くんはヒーローのように止め、勝手に戦いを始めやがった。

オイ、オレは放置かよ。

「うーんつと」

とりあえず光の縄を解錠し、自由の身になった。一目見たらだいたい術式もわかるし。

『あ、ソラくん大丈夫？』

『遅いテレパシーだな』

『ティヒヒヒ、ごめんね。ちよつと人探しに時間かかちやつた♪』

人つて誰だよ。なんか嫌な予感するんだけど。

すると、猛スピードでオリ主くんに向かっていく浅黒なマッスルさんがいた。

え、まさか……。

「ダアアアアアリイイイインツツッ！」

「ぎやあアアアアア！ 誰だよあんた!?!」

「しどい！ あちきという身がありながらそこ美少年とよろしくしてたのネエン!?!」

.....

『.....オイもしかしてアレはお前の差し金?』

『匣にはもってこいの人材だね♪ 暗示をかけたオカマさん役に立った?』

『阿鼻叫喚へと変貌したわ!!』

やはりこいつはただでは済ませない。予想通りにしてくれたことにオレは嘆息を吐いた。

『あ、それと今すぐそこから離れてね』

『え。なにをするつもり?』

『オリ主くんと黒い子もろともブツ飛ばすから♪』

『なにおっそろいこと言っちゃってるのこの娘!?!』

マジギレしちゃってる!?

って遙向こうにピンクに光る何かが!

あ。これはヤバい。マジだわ。

「オリ主くんー! 早く逃げてねー! 今から悪魔がそこら一带ブツ飛ばすからなー!」

「ちよつ、逃げるな!」

しかしスルーでござる。だって命大事もん。

というわけで、オレは脚力を駆使してそこから遠くへ離れた。

ヤバいやバいやバい! もうそこまで

ジユツツツドオオオオオオンンン
!!!!

——その十秒後、ピンクの無数の矢が雨のように落ちてきて、そこら一带を文字どおりブツ飛ばした。

それはもう核兵器のごとくの威力で。

走馬灯の中でオレは、その攻撃はかつてほむらを助けるために撃ったキュウベえ殲滅

の魔法だったと思い出した。

と、言っても生きてるけど。

その余波でオレの身体も空へ投げ飛ばされ、どこかの家の屋根に受け身をとらない形で叩きつけられた。

「イッテー……………」

屋根からブツ飛んだ一帯を見ると黒いモノが三体あった。間違いない。高町とオリ主くんと少年だ。

マッスルな男性は……………あ、いた。なんか正気に戻ってどっかに行っちゃった。

なんであいつだけ無事？ 変態だからか？

「あ、よかった。逃げ切れたんだね」

ピンクの悪魔がニコニコしながら舞い降りた。

まだか神モードと言われる円環の理の衣装をきたまだかだった。全力全壊のときに見せる姿だ。

「死ぬかと思った」

「ひどい人達だね。ソラをこういうことするなんて」

「いや犯人お前だよ」

まだかにツツコむが彼女は口笛を吹きながら誤魔化す。拳骨を落としたい。

「どうせならどつかのヒーローのように助けてほしかった」

「その助け方をすれば惚れる？」

「惚れはしないけど見る目が変わってた」

「なんてこつたい。ますますフラグ立てて、即ほむらちゃん共々結婚というハーレムルートが潰えちやつた……………」

「自重してよほんと」

ハツチャけるヤツの暴走は誰にも止められないか。まどかは元の姿に戻つた。

『少しいいかしら？』

「よし、助け方はさておいてお札に何か叶えてあげよう」

「結婚して！ むしろ抱いて！」

「あと九年待て淫乱」

「くっ……………法律国家め！」

『ちよつといいかしら？』

「ならギャルのパンティをもらって！」

「なにその新しいウーロン。与えるパンティってなんぞ。ていうか何気なく脱がないの」

「くっ………理性め！ 私の邪魔を!!」

「いや邪魔するわマジで」

『あの……聞いてる？ ねえ』

「翠屋のシュークリームでどうだ」

「三色味のを二つ」

「例の高いのか。ま、いっか。ついでにママさんのを一つずつ買いにいくか。杏子が何かとうるさそうだし」

「やったー♪ ソラくん大好き！」

「うおッ!? いきなり抱きつくなよ！」

「えへへへ、照れてかわいいよソラくん♪」

「たくっ」

「ううううときだけ甘えてくるから無下にできない。

「ソラくんの背中って暖かいね。ふぁー眠くなってきたよ……………」

「寝ろよ。送ってやるから」

「ありがと……………スースー」

「お疲れ様……………まどか」

眠る彼女を愛しそうに見ながらオレは眠り姫を背負い翠屋に向かった。
こういうときのまどかは子どもらしくてかわいらしいよな。

きれいな青空が広がるそんな世界で、そう思う一日だった。

『話を聞いてよ………クスン』

知らない間に知らない女性が映るウインドに気づいたのは翠屋のシュークリームを買った後だった。

え、この人誰？

第十二話

宇宙戦艦とは男子にとつて心が燃える素材だったりする。

今まさにオレはちよつとだけ感激している。

現在、昨日出会った女性と取引してオレ達は管理局の艦にいた。オリ主くんはいるが寝ている。

え、なんでつて？ うるさいから杏子がワンパンしちやつた。

高町もそれを見て震えながらもオリ主くんを背負っているし。それからユーノくんというフェレットは人間だったと暴露された。

どうでもいいけど。

「……が艦長室だ」

クロノ少年は扉を開けた。そこには見事なくらい似合わない和室だった。なんか間違つた知識外国人辺りが集めそうなものばかりだし。

「……苦労様クロノ。ささ、座つて座つて。私はこの艦の提督のリンディ・ハラオウンよ」
そう言つて艦長である女性はお茶を作る。………緑茶に砂糖を大量に入れるもの
だっけ？

「少しいいかしら？」

「えっと、なにかしら？」

「あなた、お茶を馬鹿にしてるでしょ？　そうでしょ。そうと言いなさい」

「あ、えっ、その……………」

まさかのママさんガチギレ。

そういえばママさんってお茶にはうるさかったな。

特に紅茶が専門だったりするが、リンディ提督が使う砂糖はそれなりのブランドだったはず。それが逆鱗に触れたようだ。

そして、小一時間経ってやっと終わった。

「で、ではロストロギアのジュエルシードの話に戻すわよ……………」

「休憩とった方がよくね？」

さやかの一言で休憩タイムに入った。

閑話休題

ジュエルシードの話を要約するとなんと願いを歪んだ形で叶える願望器らしい。どこの聖杯だよ。

それからジュエルシードの案件は管理局が預かるらしくオレ達は帰っていいらしい。

高町達は納得してないみたいだが、別にいいや。

「よし帰るか」

「えーこの宝石貰っちゃだめなのかよー？」

「文句いわないの杏子さん。ここはプロに任せるのが一番よ」

「そーそー早く帰って大乱闘しようよ！」

「ほむらちゃん、帰ったら一緒にシヨツピングしに行こ♪」

「ええ♪」

満場一致。んじゃ、お疲れ様でしたー。

「ちよつと待ちなさい。あなた達はなのはさんの友人じゃないの？」

「「「「うん」」」」」

全く部外者だし。それにしてもなんだ、その協力してくれないのって言う目は。

さやか「こんな頑固娘が友達なわけないでしょ」

杏子「どうでもいいし」

ママさん「関係ないし、ソラくんをいじめの子だし」

まどか「ちよつとね……………」

ほむら「生理的に無理」

お前から容赦ないな。

ほら見ろ。高町が泣きそうだぞ。

……………まで露骨に嫌われたらなあ。同情しないけど。

「もう少し残ってくれませんか。あなたに聞きたいことがあります」

とある映像がうつし出された。これはまどかのデストロイアローだな。

「その技名はやめて」

「事実だろ。調子に乗って円環の魔力を使ったからこうなったんだろ」

「はりきり過ぎちやつて……………ティヒ♪」

「許す！」

「ほむらが言うのかよ」

まあ、なんにせよ。説明しなきゃならないんだな。

「……………いつは神器って言う武器の力だ」

オレは神器について語り始めた。

神器——

自身の魂を武器にした姿で、召喚術によって初めて出せる。

武器それぞれの能力や形状は違うが、共通点があるとすれば身体スペックの上昇。超人クラスもなれないことはないが、召喚術という力で魔力の魂として具現化しているため、魔力が減り続けているし、尽きれば消えてしまうのも自明の理である。

例外としてあげると、まどかは元々神様みたいな存在だったため、円環という無尽蔵の魔力が使えるのでいつまでも具現化できる。

そして、その力をフルに使ったので辺り一帯を吹き飛ばすことができたのだ。

「概念に干渉できる神器もあれば、時を操作する神器もある。それを使う者を神器使いと言われている」

「それじゃあ君達はロストロギアを所持しているのか!？」

「まあそうなるか」

方や時を操作できるし、方やリボンでいろいろできる人がいるしなあ。

するとクロノの少年は立ち上がり、

「艦長、今すぐ彼らを拘束すべきです！ ロストロギアの不法所持です！」

「不法所持って……………。仕方ないだろ。自分の魂を武器にした姿なんだから。壊れたり、奪われたりして死ぬリスクあるし」

「そんなことで許されるか！　こんな危険な人物を、化け物はこうそ——」

チャキ、カチャ、ジャキツ、スチャツ

オレ以外のみんな神器使い達が一斉にクロノ少年の頭や首を向けて武器を向けた。

杏子「オイ…………今なに言おうとしたテメー」

さやか「いやーさっすがに今のはさやかちゃん的に見過ごせないなあ……………」

ほむら「まどかを化け物呼ばわりとはいいい度胸ね。あとソラも」

マミさん「ふふ、おイタする子にはお仕置が必要ね……………」

まどか「ティヒヒヒ♪　殺っちゃうよ？」ニコツ

千香「覚悟はできた？　懺悔は済んだ？　なら死ぬゴミ」

合計六人の殺気に囲まれていた。見事にぶちギレてるわこれ。

クロノ少年なんかめちやくちや緊張した表情しているし。反抗しようと杖を取り出そうにも、取り出せる隙すらないしな。

戦ったとしてもこいつらには絶対勝てないのに。

やれやれ、仕方ない。

「はいはい。そこまでだみんな。若造をいじめてあげるな」

「ぼ、僕は君より歳上だ！」

「年齢の話じゃないって。戦士としての歴史さ」

オレの話を聞いてくれたみんなは武器を引いてくれた。クロノ少年は思わずへたりこみそれを見下ろす形でオレは言う。

「オレ達はこう見えても人間じゃない化け物や化け物以上の化け物を倒してきた」

オレは英雄と言われるなら、彼女達は歴戦の猛者どころだろう。

そして、何回も魔女という化け物戦ってきたその経験が彼女達には残っている。

だから勝てない。勝てるはずもない。

さて、その念には念を入れて。

「もしそれでもオレ達を管理とか抜かして、平穏を乱すなら覚悟しろ——
徹底的に滅ぼしてやるよ青二才」

凄まじい殺気を当ててからオレ達は部屋から出ていった。

(リンデイスайд)

一瞬だけ殺された幻覚を見た。

息が詰まる場所だった。

あんな殺気を持つ子どもがいるなんて……………。

「はあ……………はあ……………」

「クロノ、部屋に戻って休みなさい」

「わ、わかり……………ました……………」

さすがのクロノもキツイか。唯一震えながらも正気だったのはなのはさんと草太くんだけだった。

何度かそういう経験があるのかしら。ならば協力を申請しよう。

もしかすると敵と神威くんが組むという最悪な未来が起るかもしれないし。

私はそんなことを考えながら、事件の解決策を考えるのだった。

「あ、忘れてた。ジュエルシードを返した代わりにシュークリーム代の一万五千円を立て替えてください」

帰ってきた神威くんのその一言で全員がズッコけたのは言うまでもない。

第十三話

曇天の空。今日はあまり出掛けたくない日である。

だが、今日は新発売のお菓子があるのでスーパーに行くことにした。

「一緒にきてくれませんか」

ところがどっこい。扉を開けると、金髪少女が玄関前にいた。オレはそのまま扉を――

「なにスルーしてんだい！」

「離せ！　ただでさえ管理局という労働基準を無視した鬼畜組織にバレたつてのにこれ

以上面倒事はノーサンキュー！」

「グググググッ！」

力と力のぶつかり合い。この勝負引けば負ける！　負けてたまるかアアアア！！

「なにしてんの？」

さやかが現れた。ソラは協力を求めた。

「面白そう！」

スカウト成功！　すると金髪少女まで参加してきた。

ぐっ、ならば——いでよ杏子たん!

召喚術でリビングにいる杏子を召喚した。まあただの転移だけどね。

「おっ、なんかおもしろいことしてんじゃん! 負けるなよさやか、ソラ!」

「わかってるわよ!」

「おう!」

オレ達神器使いの友情パワーで徐々に閉まる扉。どうだ参ったか!!

「くっ、このままじゃ……………」

「誰か……………誰か……………助けて!」

天は彼女を——

「諦めないでフェイト!」

——見放さない。ナースキャップを被った女性が助つ人に来た。

「えっ? リニス……………あれ?」

「前を向きなさいフェイト！ これを逃したら機会はありませんよ！」

「はっ、そうだね！ わかった。がんばってみる！」

「その意気です！」

徐々に閉まっていた扉が再び開け始めた。

「おのれニャン吉。裏切るか！」

「私は元からフェイトの味方です！ あとその名前なんかヤです！」

「なんだと？ オレのお気に入りの名前だぞ!? メスオスにも付けられるお得な名前だぞ!」

「だからってニャン吉はないでしょ、ニャン吉は！ これからはリニスと呼んでくださいソラー！」

「嫌だ！ ニャン吉はニャン吉だ！ こうなったらこれが閉まればニャン吉！ 開ければリニスって呼ぶことを賭けた勝負じゃアアアア！」

「望むところです！」

綱引きもといドア引きが始まる。負けられない……………この戦い！

「あれ？ なんか主旨が変わってない？」

「気にするなさやか！ あの猫の名前を賭けた一世一代の勝負だぞ。気を抜くな！」

「そうね！ わかった！ ちなみに本音は!!」

「アタシも実は気に入ってる名前なんだアアアアア！」

熱血要素を交えた勝負は白熱する。オレは、絶対、負けない！

「なにこの熱血展開」

「まどかさん、お茶できたわよ。あら、お客様？」

「うん、どうしようかコレ」

「そうね……………よし！ 殺っちゃって♪」

「オツケー！」

「最近のマミさんは私達に毒されてきたわね」

ピンク色の地獄がオレ達に降り注いだのが、この直後だった。マジで死ぬかと思っ
た。

最近、容赦ないねマミさん。

☆☆☆

オレ達は金髪少女の住居に来ていた。ラスボスのラストダンジョンっぽいのでさやかが宝物を探そうとしていたが、リニスに止められた。

「ニヤン吉つて名前気に入ってたのになあ」

「諦めてください」

ここに来るまで金髪少女とその犬になぜリニスが生きているか聞かれたので答えた。

なんでもまどかがさやかと出かけていたときに衰弱した使い魔を発見。魔力の枯渇による衰弱だったので優しいまどかはそれを助ける。

しかしヤツはいたずらっ子だ。

魔力を与えすぎるということで、起きて早々魔力酔いをさせるといふ鬼畜所業を行って、しばらく寝込ませた。

「反省している……………でも後悔してないよ！」

サムアップした彼女にヘッドバットしたことは悪いと思っていない。そのせいでリニスが記憶の半分を喪失したんだぞ。

まあその後、喋って人間になれる万能猫という形でなんやかんや飼うことになった。

まさか記憶を取り戻したら、あら不思議。金髪少女の親族だったとは。

「あの………金髪少女じゃなくてフェイト・テストロッサですよ」

「ごめん。オレは知り合い以外の金髪の女に私怨で名前を呼ばないことにしてんだ。諦めろ」

「ひどッ!」

そうは言ってもお前さんさつきからリニスの後ろに隠れて嫌そうな顔してんじやん。

そのせいでオレのハートもダメメージ有り。

くっ、これが呪われた身体の運命か!!

「厨二くさいからやめなさいバカ」

「容赦ないなーほむら」

「当たり前よ。………厨二に恥ずかしい目にあつたことがあるのよ」

数あるループした世界の一つのこと言ってるだろうなあ。

ちなみにママさん。「ひどいわねその人」って言ってるけど、たぶんあなたのことを言ってるのだと思うから。

リニス「そろそろです。準備はいいですか?」

ほむら「OK。いつでも殺れるわよ」

まどか「先手必勝だね♪」

さやか「ふっふっふっ、このさやかちゃんの実力を見せるときだね」

杏子「オイ、お前ら何と戦うつもりだ？」

やる気じゃない殺る気満々な彼女達を止める杏子。あと千香なんか鼻の下を伸ばしてなに考えているんだ？

まあ手にある写真がロクなことじゃないって証明してるけど。

(プレシアサイド)

フェイトを使って神器使い達を招待することに成功した。

彼と彼女達の力があればアリシアが生き返るかもしれない。それが駄目でも他に方法を知っているかもしれない。

そんな期待を胸に私は顔をあげる。そこにいたのは――

「みんなお姉さん、友江マミ！」

「元氣百倍、正義の味方！ 友江さやか！」

「じよ、情熱少女……………友江しよ、杏子……………」

「天使な笑顔であなたを魅了、朱美まどか！」

「シスコンで何が悪い？ クールビューティ朱美ほむら参上」

マミさやか「五人！」

杏子まどかほむら 「「揃って!」」

「「「ピユエラ・マギ・ホーリー・クインテット!!」」」

.....。

五人の少女がそれぞれ衣装を着てポーズをとっていた。

あ、そういえば、昔アリシアもテレビでよく見ていたわね。
確か、プリプリでキュアキュアな少女戦隊を。

「リアクションが薄い!」

「くっ、何が悪かったのかしら.....」

青髪少女と金髪ドリル少女は悔しがり、

「は、恥ずかしいわ.....」

「よくがんばったよほむら。アタシがアンタを褒めてやるから泣くな。ていうかアタシが泣きたい」

「涙目なほむらちゃん.....萌える!!」

羞恥に苦しむ赤と黒の少女。それを見て鼻息を荒くする桃色の少女。

うん……………なにこのカオス。

「恐らく萌え萌えパワーが足りぬからじゃ」

「「は、博士！」「」」

「いや博士って誰だよ。つーか千香かよ」

博士と名乗る白衣を着て、ちよび髭つけた少女に赤い少女はツツコむ。

そんな博士の傍らには死んだ目をした犬耳をつけた少年がいた。哀れ見えたのは気のせいではない。

「ポチ、例のモノを」

「わかったワン。あとお前後で覚悟してろよゴラ」

ポチは最後に物騒なことを言いながらカバンからジュエルシールドを……………つて！

「なぜジュエルシールドがここにあるの」

「ちよつと深海から一つとつて来ました！」

「さりげなくすごいこと言ったわね！ な、何に使うつもりなの!？」

「ふっふっふっ……………聞きたいかい？ その紫ガール」

寒気ははしる。嫌な予感がして一步下がる。

「喜びたまえ紫ガール！ このジュエルシールドを使い、今日からピユエラ・マギ・ホーリー・クインテット一員となるのだ！」

とんでもなく恐ろしいことを言い出した！

「グフフフ………：熟女のコスプレは一部のマニアでは高額品。そしてその一人である私にはご褒美！」

「ここまでゲスい女子は初めてみた」

少年から呆れの嘆息が吐かれた。止めるつもりはないみたい。

に、逃げないと！ 主に貞操と大人の矜持を保つために——つてリボンに縛られた!?

「ふふ、ようこそ。ピユエラ・マギ・ホーリー・クインテットへ！」

「歓迎するわ後輩」

「じゃ手始めにパシリからだね」

「最近親友のまどかの豹変の愚痴を聞いてもらおうよ」

ただの子どもじゃなかった。こいつらは魔王の団体だったのよ！

私は今となってはともなく後悔した。

「と、止めないのリニス？」

「ええ、これも天命。仕方ありません。というか今までの怨みを晴らすチャンス」

「リニスって意外に黒かったんだねえ」

味方に助けを求めようにもリニスがそれを邪魔してくれた。

番外編その一

まどかの追憶

最初にソラくんと出会ったのは、夢の中——ほむらちゃんがループする前の世界だった。

キュウベえと契約するときに、彼は私に向けて考え直せって言われたっけ？

そのときの私は、先輩や親友、そして友達となってくれた女の子を失っていたから冷静じゃなかった。

見知らぬ年下の彼に八つ当たりしてしまい、後味が悪い形で契約し——
魔女になった。

魔女となった先は覚えていないけど、円環の理になってから世界は滅んでいたらしい。

後からなって知ったものとは言え、罪悪感がとてもあった。

あ、話を脱線しちやったね。夢の中で出会ったときの彼が現実でも出会えるとは思っても見なかったから、思わず叫んじゃったね。

そのとき、マミさんやさやかちゃんに誤解されて、射撃と撲殺のデュエツト攻撃は今でも目に浮かびます。

それから、彼と知り合ってから色々あった。

マミさんが死ぬ直前で現れて、神器で魔女を倒したり、さやかちゃんを魔女から魔法少女に戻したり、ワルプルギスの夜と戦うときなんかすごかった。

ゲームに出てくる主人公のように、飛ばされたビルを足場にして、近づいたところで全てを開くもの神器の力で倒しちやうもの。

でもやっぱり最後は無理でした。私の魔女の姿——救済の魔女が次元を越えてやってきた。

ハッピーエンドを認めない世界のルールが最後の敵でした。

マミさん、杏子ちゃんがやられて。

さやかちゃんも魔女化してでも勝とうと戦ったけれど、バラバラにされて。

残ったほむらちゃんソラクくんは満身創痍の身体で魔女と相対していた。

私は嫌だった。自分のために犠牲になることが……………。

だからキユウベえと契約した。

過去も今も未来の魔女が、いなくなるようにという願い元の契約を。

そして、その代償が私の概念化ということを。

全て受け入れた。世界が改変される前、ほむらちゃんが悲しそうだったけど、笑顔で抱き締めてあげた。

概念化したとき、ほむらちゃんは私のためにここまでがんばってくれたんだと知った。何回もループして、私やみんなが死ぬところを何度も見て、苦しんでいた。

彼女の辛かったことへの同情と責任感かもしれないけど、彼女を助けられて満足だった。

い、良い雰囲気だったけれど………その………キスとかしてもおかしくなかったと思う。

——まあ、ほむらちゃんの他にいた部外者がそれを邪魔してくれたわけだけどもソラくんがいた。あの場所に。

彼は異世界から来たから、この場所にいられるそうさ。

なんかあまりのデタラメさと台無しにしてくれた呆れのせいで雰囲気はぶち壊しだった。

そのとき、彼は嘆息吐きながら私に後悔してないか聞いてきた。後悔してない。偽善じやないのかと聞かれたが、これが正しい選択だと私は言った。

彼は一息ついてから、言った。いや宣言した。

「いつかほむらと一緒にお前をここから連れ出してやる！　さんざん人を心配させてきたことを後悔させてやる！」

まるで負けず嫌いな子どものようだったけど、それがとてもカッコよくて、印象に残った。

子ども頃に見た白馬王子様の絵本があった。その話に憧れがあった。うん、だってまだ夢見る少女だもん。

彼は王子様じゃない。ソラくん本人もそう言っていた。

王子様はほむらちゃんと言ったときは笑えたけど、なるほどほむらちゃんが王子様って女の子だけど少ししっくりくる。何度も私を助けようとしてきたヒーローだから。

そして白馬はソラくん。王子様の相棒で、遠く離れた果てしない道のりを駆けて、私を助けにきてくれる。

そのときに恋に落ちたかもしれない。

初恋は、おかしいかもしれないけどほむらちゃんだ。だってここまで真摯になってい

たから惚れないわけない。

けどその次に好きになったのがソラくんだった。初めて好きになった異姓に私はそのときドギマギした。ソラくんとはむらちゃんがいなくなつた後でもドキドキが止まらなかつた。年下だけどね。

ソラくんはその後、師がいる世界に行つて戦争しに行つた。そのとき悲しかったのは言うまでもない。もう会えないときえ思つた。

………ソラくん。私はまた君に出会えてほんによかつたよ。

だから覚悟してね。私の師匠に教わつたタママ流花嫁術でソラくんをオトす!!

番外編その二

ほむらの追憶

それは小さな背中の中の少年。まだ青くさが残る年下の少年だった。

初めて彼と出会ったのはループする前の世界だ。まどかを止めようと必死だったのが今でも目に残っている。

結果、失敗して遡ることになったけど。

目が覚めればいつもの病院でいつものベッドだった。私は魔力で視力を普通にしてまどかを助ける計画を考えていると、何かを踏んだ。

踏み心地がよかったから何度も踏んでいたが、正気に戻ったとき、それが例の少年が失神していたのだとやっと気づいた。

思わず叫んで乱射したことは今でも黒歴史である。

それから巴マミ——いえ、今は友江マミだったわね。

彼女に警告したが、どうやら敵対関係だったためか拘束された。

私はまたか、と悔しげにリボンを解こうと躍起になった。

そのときにそこに現れたのも彼だ。彼の剣で、私は開放され、彼と共にマミさんを救出した。

異世界から来た彼というイレギュラーが私に希望を与えてくれた。さやか、杏子、マミさんを助け。

そして、念願のワルプルギスの夜を倒すことができた。

これでキュウベえの野望は潰えた。そう思っていた。

——— だけど、世界はまだかを普通の少女であることを許さなかった。

まだかの魔女が現れたのだ。キュウベえの推測によると世界のルールが彼女を生かさないとつもりらしかった。

まだかは死ぬか魔女になるかの運命しかなかったのだ。

もちろん戦った。最凶の魔女と。しかし仲間がやられ、ソラと私とまだかしか残されてしまった。そのときの悔しげに歯を食い縛る満身創痕なソラは覚えている。

結局、まだかは契約し、円環の理となつてソラと約束した。

私と一緒に円環の世界からまだかを連れ出すつて、私は男じゃないのに王子様つて言うのは笑えた。まだかも笑っていた。

それからソラは戦争に旅を出た。

私も私でまだかが守ろうとした世界で、戦い続けて

—キユウベえに囚われた。

囚われた世界は私が望んだ世界だった。とても優しく甘い世界で幸せだった。

それを壊したのもソラだけだ。

ピユエラ・マギ・ホーリー・クインテットと名乗ったときに私達の後ろへ落ちてきたらしい。

再会した彼は私達より背が高くなり、幼い少年から大人の青年らしさをもつ顔立ちになつていた。

そのときの私達を見て呟いた一言がある。

「……………ないわー」

何がないのよ!! わ、私だつてまだ夢の中とは気づかなくてノリノリだったけどその一言はひどいわよ!

まあ杏子のワンパンで追い払われたけどね。

マミさんと戦つたときなんか時を激しい銃撃戦で止めた弾を動かそうとしたら、彼がそこにいて、それでその……………時を動かさしちゃつて大変目にあわせちゃつた。

そのときマミさんと目を合わせて、思わず名前で呼んじやったことがある。

本人は剣一本でなんとかしたみたいだけど、一本でなんとかしたソラはもはや人外と

言われても過言じゃないと思う。

それからキウウベエの策略を破綻させるために魔女化し、まどか達に助けられて――
私は彼女の人間だった記憶と一部の力をもぎ取った。

魔女化によってか、はたまたソラと出会う前から私の負の感情は濃い呪いとなっていたのだ。

そう………既に狂っていたのだ、私は。

全てはまどかを元に戻したいが故に、愛故の行いだった。

全てうまくいき、まどかは人間に戻り、私は悪魔となった。

これでいいと思っていた。しかしソラは否定してきた。

私がいる世界にまで来て、私に勝負を挑んできた。

私は邪魔するソラが許せなかった。

憎かった。

嫌いになった。

だから、殺すつもりでその勝負を受けた。

怒りで冷静な考えが出来ていなかったのだ。

だから気づかなかった。

ソラの考えを、そして——最初から勝つつもりの勝負じゃなかったことを。

勝負はあっさりついた。私の魔法の姿や使い魔、そして時間操作で徐々に追い込まれ、弾丸が急所を貫いた。

彼はスゴかった。全てを開く者神器の力を使わず、何度も傷つきながらも、私に何かを伝えようとしていた。そのときそれがわかっていなくて、とどめの一撃を撃った。

これで倒せた。そう思っていた。

「ほむ……ら……。悪魔なんて……なるな……。」

立っていた。血塗れの満身創痕の姿で。

そのとき恐怖が生まれた。

得たいのしれない化け物を相手しているみたいだった。

私は徐々に近づく彼にへたれ込んで後ろへ逃げた。彼は私を見下ろす形で言った。

「ああくそ……お前……を……一人に……したくなかったのになあ……悔しいなあ……。」

それでも最後は笑った。

「でも……………その役目は……………おひめさま……………のあいつに……………任せるか……………」

そう言つて、神器を天へ向けて暗い夜空を青空にした。まるで私の闇を消すかのよう
に。

そして神器は消えて、彼は後ろへ倒れた。

私はようやく思い知る。

——今まで誰が私やまどか達を助けようと躍起になっていた？

——今まで誰が無器用な私につきあってくれた？

誰よりもほかならぬソラではないか。

——ただど死んだ。誰が殺した？

——ワタシガコロシタじゃないか……………

自覚したとき私は声にならない叫びをあげた。

殺してしまった。

相棒だった彼をこの手で。

王子様が白馬を殺してしまったのだ。最悪のバッドエンドだ。

私は悪魔の力で何度も彼の名前を叫びながら、生き返らそうとした。

けれど、不可能だった。

理を覆す存在なのに。

理を反逆する力があるのに。

その理由を知るものが現れたのは、不可能だと思い知ったときだった。

天ヶ瀬千香——いえ千香だった。

彼女曰く、全てを開く者神器が誰かに継承され、魂がないため生き返らないだそうだ。

それから私は彼の魂を取り戻すために躍起となっていた。

愛しているのはまだかだけど、恋した初めての人は——ソラだった。ほんと今さ

らよね。

そして全てを開く者神器の継承者だったのはまだかで、彼女と戦うことになった。

そこからのお話はまた別の機会にするわ。

あまり良い思い出じゃないしね。

私は今でもその死に際の際の彼の笑顔は忘れられない。

そして、私は転生できると知ったとき、彼を取り戻す決意をした。

今度は見失わないわソラ。もう二度と離したりしない。

第十四話

「汚された……汚されちゃったよう……アリシア……」

おぼさんのコスプレ劇場が終わり、千香はホクホクと満足した表情をしていた。

プレシアさん、三角座りでマジ泣きしているし、カオスな現場になってしまったのでオレは流れを変えるために口を開いた。

「いい加減に立ち直ってください露出女」

「あなた達、私をそんなにいじめて楽しいの!？」

涙目でなぜか怒られたし。

「んで、オレ達になんの用か説明してくれ。さもなければこの写真を管理局に送りつける」

「やめて！ ホントお願い！」

さすがにこの写真をばらまかれたくないの、プレシアさんは金髪少女を部屋に戻してから話を始めた。

大切な娘を蘇らせるためにクローン造って、ジュエルシードを集めてアルハザードに行こうとしていたが、オレ達の力を知り、娘を蘇らせる神器はないか聞いてきた。

「可能と言えば可能だ。だけどたぶん無理だ」

「どうしてよ!」

納得してないプレシアさんにオレは説明することにした。

それぞれの世界にはそれぞれのルールが存在する。

人を生き返らせる、過去を改変するなど理を覆すものを禁止したり、容認したりする世界があるがルール通りではないもしくは、反則を行えば、それを阻止する力が発動する。

その名前は抑止の力だ。

かつてキュウベえが推測した力である。ワルプルギスの夜を倒した後、救済の魔女が現れたように。

それは本当にあるとオレの師匠から後から教えられたしな。

「そんな……じゃあアリシアは……」

「絶望することはないさ。これは仕方ないことだから」

あるときオレは神器の力を使って戦ったから抑止の力が働いたのだと思う。ほむら達と一緒に挑んだがあれは絶対に勝てない相手だ。

負けるのは仕方ない。

勝てると思ったらまどかのような大量の因果を持ったルール通りの願いかほむらの理

を反逆の力のみだ。

もうほむらには反逆の力はないが。

絶望したこの人をオレはあまりに不憫にあることを教えることをした。

「まあ、あくまで神器による蘇生は無理って話だけだ」

「えっ?」

「神器はこの世界のルールでは反則だがアルハザードの技術は反則じゃないつまり蘇生することはできるはずだ」

まあ蘇生そのものが反則なら不可能だが。

それにアルハザードに行ける事態はオレの神器全てを聞く者を使えば可能かもしれない。

だけどオレはあえて教えないことにした。

喜びに声をあげているプレシアを見ると、まどかが肩をつつく。

気づいているのだろう。

「どうして? ジュエルシードを使わなくてもソラクんの神器なら」

「……………まずプレシアさんが言ってる場所があるとは限らない。リニスから聞いた話じゃ、おとぎ話とも言われてるしな」

いくら異世界とさえいって、空想の世界は無理だ。前にさやかに頼まれたが神器は応えてくれなかったし。

「それに……………」

「それに？」

これがオレが一番で、プレシアさんに対して快く思わない理由。

「気に入らないから」

死人を蘇らせる？

ふざけてるとしか言いようがない絵空事だ。ご都合主義は本の中の話で充分だ。

たとえ死ということを否定することができたとしても、生き返ったそいつは普通からすれば化け物に変わらない。

それにフェイト・テスタロッサを娘と見ず、道具としか見てない彼女の目にムカついた。

少しだけ自覚しているみたいが、完全と少しでは月とスツポンくらいの差がある。

過去にとらわれ、今を大事にしない人間が未来を、幸せを掴めない。

絵空事ばかり見る人間に、オレは快く手を貸さない。

「ひどいか？」

「……………ううん。ソラくんは怒りはもつともだしね」

かつてオレ達は精一杯生きていた。ほむらなんかは簡単に大切な人が死んでいる光景を目の当たりしてる。

だから気に入らない。気に入らないから教えてやらない。

ご都合主義を信じてるこの女に助けることを。

オレは聖人君子でもヒーローじゃないからな。

まどかは無言でオレの手を握り、オレはそれを握り返すのだった。

☆☆☆

プレシアのジュエルシード集めはリニスに頼まれる形で協力することになった。あくまでお世話してくれた借りを返すためで、ジュエルシードが集まったらおさらばする予定だ。

「リニスは残るんだな」

「はい。私の大事な家族ですから」

そう言ってオレ達に別れを告げて、時の庭園に残ってプレシアのお世話をすることになった。少しツライが彼女の意思を尊重したくて何も言えなかった。

「そういえば海から拝借したってことは残りも海にあるのか?」

「そうだね。たまたま潜って見つけたんだよ」

「いや潜るって海底までよく息が続いたな……………」

「変態に不可能はない!」

「んなわけあるか」

「バレた? いやー神器の力でちよつとね」

大方守る力で酸素ボンベを作って潜ったのだろう。オレと千香は魔法を使って、海の上空で金髪少女が魔法を撃つのを待っていた。

残りのメンバーは時の庭園で優雅にお茶をとって歓声するとか言ってたな。

ちくせう、まさかジャンケン負けた上に千香と組むことになるなんて。

「こんな美少女と一緒にいるのに何が不満なの?」

「ぬかせ変態。お前が美少女だったらカエルは美女だ」

「それひどくない!?! あ、でもなんかジュンときた。もっかい言って」

「この……………変態!」

「ハアハア………いいわ。もっと罵ってちょうだい！」

「もうやめて。ソラくんのライフはもうゼロよ………」

こいつの変態性が増す中、金髪少女がジユエルシード強制発動成功。
んで合体して水龍が出現。

オイ、龍が出現って、初っぱなからハードじゃねえかい。

「でも倒せない………ってことはないでしょ？ 英雄さん♪」

「そだな。んじやとつと終わらせるか。いつも通り」

オレ達は神器を召喚し、水龍に向けて言った。

「精一杯生きただろ？」

「悔いはないでしょ？」

「なら、安心してとつと死ね」

物騒？ これがおレ達二人の戦場の頃に言ってた決めセリフだけど、何か？

番外編その三

千香の追憶

……ボクは造られた人間だ。

守備神器人造人間——コードNo. 14

ドレステンという研究所でボクは造られ、訓練し、戦場に投げ込まれた。

たくさんの人をサポートしたり、時には殺した。

当時のボクはみんなが知るほど感情豊かな変態ではなく、冷酷で無表情な少女だった。

この神器はボクの心の壁を表していたと思う。何者にも侵入を許さない心の領域。だから誰もボクの領域には入って来れない。そう思っていた——

——彼が現れるまで。

その少年は目が虚ろだった。目がギラギラしていた。当然のことだ。こんな戦争に参加すればそうなるのも無理がない。

自分で言うのもなんだが、こんな少年でも戦うのかと少しは思っていたりしたが、戦闘になると同時にボクはいつもの『道具』となった。

仲間？ そんなものはいなかった。

ボクは彼らにとつてただの人形で肉欲を晴らす道具でしかなかった。

それがボクにとつての日常であり、いつものことだった。

「死ねクソガキイイ！」

汚い言葉で神器を振りかぶる。少年は刃がないカギのような剣で彼を斬った。血が飛び出していないから死んでないが致命傷と思っていた。

ドサツ

しかし彼の方が倒れた。驚いた。あんな武器で倒せるなんて思っても見なかったのだから。

残りの中の一人が我こそがと思つてか斬りかかる。その少年は彼も斬った。

そしてそこでボクと彼らは気づいた——既に二人は殺されていたのだ。

少年の剣は魂を肉体から切り離すものだと思った。故にボクを盾にして彼らはやり過ごそうとした。

「だから?」

ボクの神器は突如解除……いや、その少年の言葉で言えば解錠され、キャンセルされた。

そう、その少年の神器の能力はカギの性質だった。味方の彼らはボクを残して一同は逃げ出した。

けれどその少年は誰一人逃がすことなく、命乞いもした者も、関係なく全て平等に殺した。

返り血はなく、無血の殺人技にボクは初めての感情が芽生えた。

——恐怖

自分には生存本能があつてのことだろうが、ボクはその感情に戸惑いを感じて蹲っ

た。

怖い。恐い。逃げたい。

命乞いをしてさつきのことを考えれば無意味である。

彼も必死だからだ。

だから殺される——自分は敵だから。

「ちよつと待とうぜソラっち」

「その名で呼ぶな変態」

「ノエルって言うてるでしょ。まあ否定しないけど」

綺麗な緑の髪を靡かせた女性がとなりの少年に話しかけていた。

「んー、気に入っちゃった。ねえねえ、ソラっち。この子うちの弟子にしているー？」

「こいつは敵だ。殺さなくてもいいのか？」

「殺しちゃイヤン♪ だってこの子ってあなたと歳が変わらないじゃない♪」

少年は頭を抱えて呆れだした。

なんとなくだけど、この少年はあの女性によく振り回される立場のようだ。

「あなた名前は？」

「……………No. 14」

「うーん、こんな美少女に適当な番号名とはなかなかの外道なことをしてるわねー。そ

れじゃあ、お姉さんがつけてあげる♪」

「ろくな名前つけるなよ」

「最近のソラっちのセメント率にお姉さん挫けそう」

名前？ このボクに……………？

言い様のないナニカが沸き上がる。このドキドキとワクワクするような感じは……………ああそうだ。

これは後になってこの女性——ボクの師匠となる人に教えてもらったことだけ
ど——

「『千の花の香り』を持つような女性になってほしいからあなたの名前は今日から『千香』
よ♪」

——期待と喜びだ。

その後、ボクは千香となり、師匠に引き取られ、ソラと一緒に過ごすようになる。

師匠はいろんなことをボクに教えてくれた。

神器の応用、ボクの長所と短所を伸ばすトレーニング方法。

そして——『変態の素晴らしさ』

え？ 最後のおかしい？

師匠は戦場では『混沌の神器使い』と呼ばれるほどの変態だったからこれが当然じゃないかな？

メイド服で基地をぶっ飛ばす人だし、よくソラも絡まれたり、巻き込まれたりしたなあ。

そんな新しい日常が始まってボクに感情が生まれた。

けれどある日、ボクは敵にさらわれた。

食糧を確保するところを油断して捕まってしまったのだ。

彼らはボクをあ的女性に師事されていることをいいことに改めて利用と考えていたのだ。

ボクはそれを拒んだ。当然だ。感情が生まれたボクは師匠を裏切ることにはできない。

しかし研究所のリーダー兼軍曹であるオークの神器使いは記憶消すとか言い出し、さらにはボクを犯そうした。

感情のないボクはかつて肉欲を晴らす道具だったが、今のボクは感情がある一人の『女の子』だった。

怖くて、泣き叫んだ。悲鳴もあげた。

嫌だ嫌だと叫んだ。

けれど助けはなく、服を引き剥がされ、そして――

「あ、やっと見つけた」

――ごめん。訂正。

助けはきた。イカ焼きをくわえながらソラが壁を突き破って現れた。

なぜ彼がそれを加えてたかと言うと実は神器で消費したエネルギーを補うためだ。

どうやら、『ドコでもドア』でボクを探していたのだと後になって師匠が教えてくれたが、今このときのシリアスという空気が彼のイカ焼きで台無しになった。

さらに彼はあろうことか、

「今日はお前が食事当番だろ。早く帰って飯にしてくれ。お前の師匠も待っているから」

とほざいた。

杏子ならグーパン。ほむらなら蜂の巣にされても無理のない発言である。

皮肉なことにボクはこのとき初めての怒りを吐き出した。

罵倒した——そして喜んだ

泣いた——嬉しくて

まるでヒーローが助けにきた彼へ求めるような感じがした。これがどういう気持ちかわからなかった。

もちろん、敵は大激怒。オークの神器使用とその手下がソラに襲いかかる。

——手下との勝負は一瞬でついた。

疾風のごとく居合い斬りで駆け抜け皆殺しにした達。

オークの神器使いは狼狽したが、自身もソラに挑んだ。

体格の差を考えて勝てると思っていただろう。しかし、ソラは体格の差は関係ない。

彼が得意とするのはジャングルファイト。ちよこまかと動き、足を封じ、手を封じ、そして神器を封印した。

もう神器は使えないただのオークとなった。それはソラに命乞いをしていた。

自分が奪った財宝や奴隷にした姫騎士などの人達をやるか言っていた。

ソラはそれを笑顔で頷いて、

「じゃあ、お前を殺してそいつらを奪うよ。お前だってそうやって満足に生きてただろ？」

——だから安心してとつと死ね。クソザコ

その言葉を聞いてオークは断末魔をあげて、ただの肉塊となった。

魂を切り離しただけでなく、彼は魔法で身体をバラバラにしたのだ。

彼にとつて、最も許せない敵だったのだろう。その後、奴隷した人達を勝手に生きるように言つてソラとボクは帰つた。

「なんであんなことしたの？」

奴隷のある一人のことについてソラに聞いた。

その人はある国のお姫様で完全に身も心もあのオークに犯された哀れな人だった。

お腹にはその子どももいたらしい。

けれど彼はその子どもだけを殺した。当然、お姫様は発狂したかのようにソラを責めた。

対してソラは馬の耳の念仏。

お姫様の言うことに耳をくれず、そして――

『その愛つてホントの愛なの？　そう思っているなら亡くなったあんたの父親に同情されるな。オレなら、滑稽でバカだなんて笑つてやるけど』

その言葉でお姫様は泣き崩れて何も言わなくなった。

ボクはソラがなぜあんなことをしたのか聞いた。彼は答えた。

「怨まれてもいいから生きてほしかつたつて思つたから。それがあのオークに奪われた王様の願いだったしな」

彼はドコでもドアで訪れたとある家に、来たときにその王様と出会ったらしい。そして願いを聞き入れてその王様は亡くなったらしい。

どうでもいいと言っておきながらも彼はその願いを一応聞き入れたのだ。

「死ぬってことは肉体だけでなく、精神的もあるんだ。だからオレは千香が生きていることがうれしいんだ」

彼はそう言つてそこから口を開かなかつた。結構恥ずかしがつていたと思う。

ああ、ボクが生きているということがソラはうれしいんだ。

そのときボクは恋をした。初恋だつた。

その後、ソラと離ればなれになり、そしてソラがいる世界にきたときは既に彼は死んでいた。

黒髪の一人の少女が殺したとすぐにわかつた。けれど怨む気が起きなかつた。

彼女は泣いていたし、そしてソラは満足な顔で逝つたから——

ねえ、ソラをもしまた会えるとしたら覚悟しておいてね。

師匠には恋愛は肉食系がなんぼらしいから積極的にアタックするし、ボク好みの男に
してあげる。

それがボクをまた一人にした罰だからね。

第十五話

水龍は龍らしくない触手を出して、オレ達に攻撃してきた。

オレは神全てを開く者器で切り裂き、千香は盾を使って、水龍に近づいた。

「んじゃ、金髪少女とその犬。さっさとそいつ離れてろ。お前魔力がなくなっているだろ」

「犬じゃなくて狼だっ!」

「まだいけます!」

「うーん、でもやめておいた方がいいよ? ソラに巻き込まれなくなかったら……:……:……:ね」

千香の声色は冷たく金髪少女に向かって言い放つ。

金髪少女は納得できなさそうな顔になったが、オレは気にせず、水龍に向かって斬り込む。

ギャアオオオオオ!!

咆哮をあげ、オレに食らいつく。

それを右へ回避した。

水龍の身体にできた大きな切り傷は水音を立てて、再生された。

「再生機能があるのか？」

「それじゃ、ボクが動きを止めて『閉じちゃって』よソラー！」

千香はそう言つて半透明の檻を造り出した。オレは剣先を水龍に向け、封印の波動を放つ。

水龍にそれが直撃した後に再び、接近。

「【エリアルブレード】！」

風の魔法を纏つた斬撃でその身体を切り裂く。

水龍は再生させようとするが、再生が発動はしなかった。

「お前の能力を閉じて封印した。解除したきゃオレの解錠の波動を受けなければならぬえよ」

ま、解除する気さらさないが。

オレは今度は電気の魔力を神器に纏い、首に向かつて投げた。

水龍の首は跳ね飛び、光の粒子を出しながらジュエルシールドへと変化した。

「【サンダーレイズ】」。神器をブーメランみたいに投げる遠距離専用の剣の奥義。ま、言つても理解しないと思えるけど」

オレは帰つてきた神器を受け取りながらそう言った。千香は一息をついて近づいた。

「やった？」

「いんや……………まだだ」

オレが否定した直後、ジュエルシードは今度は数本の竜巻へと変えた。

第二形態つてヤツか？ バラバラに分かれるなんて予想外だ。

「金髪少女に伝えてくれ。早急に手伝ってくれつてな」

本当の戦いはこれからだ。

(フエイトサイド)

彼の實力は圧倒的だった。水龍をものの数分で無傷で仕留めた。
すごい……………これが神器使い。

反則クラスの能力とその身体スペック。私やアルフが束になっても勝てない相手。
私は最初に彼と出会ったときに感じたのは忌避だ。

生理的というか、本能的に彼が気に入らなかつた。嫌悪と言っても違うない。

しかし今感じる忌避は別の意味かもしれない。

—— 畏怖だ。

尊敬と恐怖が混じった感情だった。

怖い、恐い、コワイ。けど、味方であれば頼もしい。

「おーい、お嬢ちゃん手伝ってー!」

彼の相棒がそう言って私を呼んだ。ジュエルシードは今度は竜巻に変わったようだ。

「いくよ、アルフ」

「はいよ!!」

私はその手伝いに向かい、竜巻と立ち向かう。

身体は魔力の枯渇でまだダルい……………けどお母さんのため!

「無駄無駄無駄無駄アアアア! 今のあたしは痛みに喜びを覚えた雌犬! こんな攻撃屁でもないね! ハアハア……………ていうかむしろもつと来いやアアアア!」

「アルフが……………私のアルフが知らないナニカに目覚めてしまった……………」

ほら、神威が顔をひきつらせて同情的な目で私を見てるじゃない。

かつてまともだった面影のない使い魔を見て、私は天ヶ瀬千香を怨みを込めた目で睨むのだった。

(フエイトサイドout)

「同士が増えた！ 万歳！」

「よし死ね」

千香を竜巻に向けて蹴り飛ばした。「あばばばば!?」と電撃を受けたような声をあげながら、竜巻に耐えていた。

そのとき聞こえた艶声と荒い息は聞かなかったことにしたい。

「ヤベーそのうちユーノ少年も目覚めてはなかるうか……………」

未来ある少年を修羅の道引き込んだかもしれない元凶は自身を巻き込んだ竜巻を一つ倒していた。

アルフという犬もなんかダメージ負いながらも、魔力弾で竜巻を一つ消しているし。

あいつら不死身じゃね？ というか変態属性つて無敵？

変態最強説が浮上する中、何やら空から誰かが降ってきた。

「時空管理局だ！」

「フエイトちゃん無事!?!」

「神威、なぜお前がここに!?!」

「おのれ、アルフ！ 自分だけご褒美もらってるんだ!？」

「ユーノ（くん）!？」

「彼は元からこうだったのかい？」

「違うと思う。つーか、ユーノ少年、もう手遅れだったのかい。」

金髪少女はなんか飼い主見つけた犬のごとく涙目ながらの顔を明るくしていたし、そんなに普通の友達ほしかったの？

すると、オリ主くんが状況を聞いてきたので答えてあげた。

「ありのままに言えば、プレシアさんに脅されて協力中。イコールフェイトという金髪少女の味方になった。そしてアルフとユーノを目覚めさせたあの変態はまた生身で竜巻に突っ込んだ模様」

「なんだこのカオス展開!？ 原作にはなかったはずだろ!？」

「いや原作ってなんぞ？ この小説はノリとカオスと変態でできてるギャグ有りシリアス少々ある作品だぞ」

「メタい発言禁止なの!？」

原作主人公にツッコまれたでござる。もう……………お嫁にいけない。

「ボクがもらってあげる!？」

「変態属性抜けたら、考えてやる」

「解せぬ。変態の何が悪い」

いや心労の五割はお前だから。ちなみに残りはキチガイ姉妹である。

誰か助けてマジで。

「とにかくとつと封印するか」

オレは竜巻に向けて封印の波動を撃つ。

するとあら不思議。封印されたジュエルシードが浮いてるではありませんか。

「さて残りは——つて終わつとる」

そりやそうか。高町や金髪少女のような高魔力保持者やクロノ少年やオリ主くんのような経験豊かな人材。

そして認めたくないが変態三人衆の活躍である。

あの三人の属性つて変態であるデメリットがある代わりに最強がついてるではなからうかホント。

「友達になりたいんだ、私。フェイトちゃんともつとお話したい。もつと仲良くなりた
いんだ！」

「なのは……………さん」

なんかドラマが始まつてるし。まどかとほむら辺りが画面に釘つけにしているだろ
うなあ。

と呑気に見てたらいつの間にか剣を向けられてた。

「動くな。お前にまだ聞きたいことがある」

「いや空気読めよ。あそこでドラマ始まつてるだから鑑賞させるよ」

「知るか。どうしてお前がまどかマギカのキャラと一緒にいる？ なぜプレシアに協力する？」

「答えを出すならあいつらは前世の友達で、プレシアさんは期間限定のアルハザードへ行ききのジュエルシード集めに無理矢理協力させられた歪な関係。理由はそれを断るとなんかうるさそうだったから」

「そんなこと信じられるか！」

「いやー事実なんだけど……………お？ まどか、どうした？ えっ？」

空から落雷注意ってなんだ？

ってプレシアさんが紫の落雷を金髪少女に当てちゃった！

ひどい……………それでも親か！と言いたいがどうせ親じゃないもん、娘クローンだもんとか言いそうだ。

プレシアさんマジパネエ……………。

「ズルいよフェイト！」

「プレシアさんこちらもバッチこい！」

彼と彼女の発言を聞かなかったことにしたい。これ以上犠牲者が出ないことを祈う。

「な、なんてこと——ぐは！」

「隙ありません」

オレはオリ主くんを殴り飛ばし、浮いてるジュエルシードに向かう。千香も同様に行動する。しかし、クロノ少年も行動してきた。

そしてそれぞれが何かを掴んで、通り過ぎた。

「チツ、半分しか取れなかったか」

「そう易々は取らせないさ」

不敵に笑うクロノ少年も半分か……………あれ？ んじゃあ千香は何を掴んだんだ？

あいつもなんか取ったみたいだし。

「美少年のパンティーゲットだぜ！」

「ブツ!？」

バーンと千香が出したのは、ヒラヒラ揺れるトランクスタイプのパンティー。

さすが変態。求めるものが違う。

「……………ノーパン少年、今すぐに残りのジュエルシードを渡せ」

「誰がノーパンだ！　というどうやってとった！　僕はズボンだぞ！」

「変態に不可能は………ない！」

「なんだそれ!？」

「座右の銘みたいなものだ。諦めてジュエルシード渡せノーパン野郎」

「ただの変態じゃないかそれ！」

「同士が増えた!!」

「仲間に入れるな！」

やはりこの展開は避けられない。

なんでだろう。こいつがいるとシリアスが続かない。

「次のターゲット………君に決めた！」

「私!？」

ポケットな主人公よろしくとばかりに、高町さんがロックオンされた。

「ふっふっふっ、小学生の生パンは最高級のご褒美よ………グへへへへ」

「誰かこいつ止めて………杏子さんヘルプー」

「あ、ちなみにその次はソラだから！」

ブルータスお前もか。カエサルさんと同じくと味方に裏切られた気持である。

オレがロックオンされてしまった。こうなったら是が是非でも高町に逃げ切っても

らわなければオレの下着と貞操が危ない。

千香が動きだそうとしたとき、足元から魔法陣が展開された。金髪少女やアルフからにもだ。

これって転移魔法？

「チツクシヨオオオオオ！ 目の前に、目の前にお宝があるのにイイイイ！」

邪神は消えた。悪は去ったのだ。いやすがに見てられないよなアレは……………。

そんなこと考えているとクロノ少年とオリ主くんがこちらを見て何か言いたそうだった。

ふむ……………何か言ってやるか。

「あ、どうでもいいけど高町の体重増えてたって千香が言ってた」

「ノオオオオオオオオオオオ！」

悪役らしくないって？

あいにくオレは悪役でもなければ正義の味方じゃないもので。

最後に見た高町の狼狽とオリ主くんの啞然とした顔は面白かった。

ただしユーノとアルフ。未だにプレシアさんのお仕置きに興奮してるお前はもうダメだ。

そう思う今日だった。

設定集その一

神器

魂でできた武器。召喚術でいつでも取り出せる。個人によって取り出せる武器が違
う。神器を抜き取られた者は必ず死ぬ。継承の場合は死ぬことはないが。

先天的に持つ神器は一人一つまでで、二つ以上の場合それは奪い取られたか、継承さ
せられたかの後天的なパターンしかない。

使用者の意思のみしか、その能力は発揮しないが、繋がりのある人物であれば使用で
きる神器があるらしい。

召喚術

繋がりのあるものを呼び出す魔法。異世界または死後の世界から呼び出すことが可
能である。召喚術で呼び出されたものは魔力によって顕現された魔力の塊のため、術者
の意思がなければ消えてしまう。同じ世界にいるものが召喚する場合、転移という形に
なる

全てを開く者

カギの形をした黒剣。『開ける』『閉める』というカギの概念を持つため魂を肉体から解放したり、抜き出した魂を肉体に封じ込めたりできる。ただし、使う度に魔力を大量に消費しやすい燃費の悪い神器である。

守護神の壁

千香の神器。敵意、殺意、悪意ある攻撃から護る概念を持つ盾。それ以外のものを攻撃は防ぐことができない。盾が発動すると半透明で半円のシールドが展開され、あらゆる攻撃を反射したり、防ぐことができる

慈愛の弓兵

まどかの神器。原作通りの弓だが、一本射てばビルを一つ半壊できる。雨のように射つことも可能のため、オーバーキルが可能。ただし貯めに時間がかかるし、使用者であるまどかが集中に時間をかけやすいため、時間がかかりかかる欠点がある

時を駆けるカード

ほむらの神器。その名の通りカードであるが、原作通り時間操作ができる。収納、加速、遅速、制止、逆行というふうにもコンのように使える。ただし、対象は一つのみのため使いどころによつて勝負が別れる

結んで開くリボン

友江マミの神器。魔力のリボンによる創造系で魔力の総量によつて強度が違う応用性の高い神器。

リボンって何気なく丈夫だったりするよね。

無限の音楽

友江さやかかの髪飾りの神器。音でできた無数のサーベルを創造することができ、また音の力を出せる。

ただし魔力の総量で出せる本数や音の力は違うし、燃費も悪い

幻想は現実に

友江杏子の神器。創造系の神器だが、ないことからあることに、あることからないこと。つまり現実と幻想を使い分けられることができる。応用性はあるのに本人の頭が悪い

ため、本人と槍の幻想しか使わない

魔力

精神力と体力を使って、混ぜたエネルギー。ソラ達がリンカーコアの存在を知ったとき羨ましいと思っっている

マジック

ソラ達の魔法と呼べる異能。魔法陣を浮かべ、そこに魔力を注げば発動する。

戦争の中でソラと千香は覚えたらしい。

あれ？ ということはソラと千香ってデバイス無しで魔法が使えるユーノ並にできる子？

異世界

ソラ曰く、平行世界と次元世界の総称。管理局でもては出せない領域。何かがあるのかわからない。

『ドコでもドア』

全てを開く者を使って開けた次元の扉。自分が行きたいところに行けるチートなドア。ただ、使うと魔力が消費するから多々使えないのが欠点。存在しないところにはいけない。

後にこれは恐ろしいほど活躍する。

ライン

スマホのアプリ。なぜか世界中だけでなく全次元世界に配信している万能アプリ。どこにいても繋がるという優れすぎたアプリ。

これも後に衝撃的な事実と活躍する予定

第十六話

戦いを終えて、高町にちよつとした復讐を終えたオレは時の庭園に帰つてきたとき、まどか、ほむら、マミさん、杏子が出迎えてくれた。

「ただいま」

「お帰りー。めちやくちや楽しめた余興だったよ。だがしかしこのまどかちゃんの前では所詮は余興。さあ、本番を始めよう……………ベッドで！」

「いい加減にしろ」

まどかをチョップで止める。ほぼ停車なしの特急並みの暴走している今日この頃な彼女に思わず嘆息を吐く。

ちなみにほむらが文句言いそうだったので、偶然もつてたチーカマを口に突っ込んでふさいだ。

もぐもぐと小動物のごとく食っているのがちよつと癒された。

「強引！ ソラくんだったら男らしくなつちやつて。お姉ちゃん、寂しさと嬉しさと複雑だわ」

「これは強引と言うべきかなあ……………」

「なんにせよお疲れ様」

杏子に癒される日が来るとは。なんかちよつと複雑である。

「それでフェイトな金髪少女？」

「いやフェイトでいいだろ。なんか母親にお仕置きされてる。……………胸くそ悪くなることだがな」

ま。家族のために奇跡を願ったこいつからしたらプレシアさんのしていることは許されないことではない。

かと言ってオレ達が言ったところで何も変わらないがな。

プレシアさん狂ってるし。

「それでアルフは？ あいつは黙ってるはずないだろ」

「ソラの言う通り代わりに鞭を受けてたんだけど、途中から悦び始めて、終いにはプレシアにもつと強くと懇願してきた」

……………。

「いい加減にウザくなつたからどつかに転移させたけど、帰ってきてまた転移の繰り返し。そして、キレたプレシアの最大電撃で高らかな艶声と共に転移していった。……………まだ知り合ったばかりだけど、あそこまでドン引きしたあの顔は初めてみた」

「うん、言わせてもらおうよ。どんだけ千香に染まってるんだよあいつ!?」

「つーか末期どころか進化してないか!？」

「さすが変態。レベルが桁違いだ……………」

「それでこれからどうすんだ?」

「管理局と敵対しちゃったんだけどほんとどうしよか……………」

「よくもやってくれたわねと言いたいわ全く」

「ほむらが呆れた半目で睨む。うつ、そんな目で見つめられると——

「興奮しちゃう!」

「よし黙れ千香」

「おぶ!?!」

腹部に裏拳が直撃が悶絶する千香。苦しそうなうめき声と興奮した荒い息が聞こえたりする。

「相変わらずなオレ達だな。」

☆☆☆

時間は進んで、オレ達はビルが並ぶ都市にいた。結界が展開されており、金色と桜色

の魔力がぶつかっていた。

金髪少女と高町が戦っているのだ。

「それで君達は人質をとられて協力させられていたのだな」

「……………はい、嫌がる私にソラくんが無理矢理」

「あらぬこと言うな、まどかさん」

「という願望があつたり……………ティヒ♪」

「昔のまどかが恋しい今日この頃」

円環の理になってからいろいろハツチャけたキャラになってしまったらしい。

なんでも並行世界の自分が統合した存在らしいから、たぶんその中にぶつ飛んだ鹿目まどかがいたのではないかとほむら先生の推測である。

チヨビつと怨むよ。ぶつ飛んだまどかよ。

ちなみに罪を全てプレシアさんに擦り付けた。うむうむ、安泰である。

「ちよつとひどくない？」

「罪悪感あるわね……………」

さやかとマミさんはどこか納得できてなさそうな表情だったが、これしか時空管理局から逃れる手はない。

まあ無理矢理引き込もうものなら、皆殺しだが。

「おお……………なんか無数の魔力弾を茶髪の少女に当てたぞ」

杏子の言う通り金髪少女が高町に最強クラスの魔法をぶち当てた。鬼だな。ていうか無事だった高町も高町だが。

「うわっスツゲー。マミのティロ・ファイナーレより大きな砲撃を撃つぞあいつ」

「あんなの防ぎきれないわねえ……………」

淡々と語るマミさんと杏子よ、それよりえげつない魔法があるピンクの悪魔をお忘れではないか？

「これが私の全力全開——の八つ当たり!! 体重を友達の前で暴露された乙女の怒り!」

八つ当たりって言ったぞあいつ。思いきり私怨だなオイ。

だんだんと集まるピンクの元氣玉が金髪少女に向けられる。

「スターライト・ブレイカアアアアアアアア!!」

高町の全力全開という名の滅びの一撃が金髪少女を飲み込んだ。

あれは防御するより回避する方が得策だが、バインドという拘束魔法で動けなかったようだ。

金髪少女にトラウマが残らないことを祈ろう。アーメン……………。

「ハアハア……………いいなあフェイト……………」

「なのは、次は僕にカモンツ！」

変態二匹は高町に向かってそう言った。顔を引きつつてるぞ、あいつ。

そしてアルフ……………せめて心配しろよ金髪少女を。海にプカプカ浮かんでいるから助けてやれよ……………。

まあなんにせよ。これで戦いは終わり——ジュエルシールドが奪われた。

抜け目ないねプレシアさん。オレ達はまだ協力しないけど。

☆☆☆

呑気に観戦してたら、アースラに隔離されてしまった。そりやそうか。こんだけ引っかけ回したら、信用されないよなあ。

「というわけでリニスさん。プレシアさんなにしてるの？」

『局員を蹴散らしてフェイトに真実を打ち明けてしまいました。なんで……………なんでこんなことを……………』

「あークローンだったぜってこと？ 大丈夫じゃね？ オリ主くんが慰めているし」

『慰めているって……………まさか!？』

「そう……………弱味につけこんであんなことやこんなことを!!」

『おのれ……………許せません! 今すぐ鉄槌をオオオオ!!』

電話が切れて、オレはマミさんに用意された紅茶を一口飲む。

「よし、これであいつに修羅場フラグ立った!」

「なんてことしてんだよアンタ!」

杏子にドロップキックされた。いと痛し。

「すばらしい、エクセレント。愉悦を楽しませるとはさすが私の嫁ソラくんだね♪」

「誰が嫁だ。婿にしろ」

「いやツツコむとこ、そこなの!? あと、最近のまどかの黒さに親友であるさやかちゃん

ドン引きなんだけど!」

さやかにまでツツコまれる。

最近まどかが黒いのはスタンダードだ。黒くした原因はほむらの影響だったりするけど。

オレ「さてさて、どうする皆さん? 帰るか観戦するか?」

ほむら「最後まで見届けるわ」

マミさん「私も」

さやか「あたしも」

杏子「当然」

まどか「修羅場見たいし」

千香「マイツチング予感がするから行く」

うむ、全員満場一致だな。最後のヤツはおかしな理由だけど。

オレは神器全てを明かすを召喚した。

何も無いところから鍵穴が現れ、それに向けて、神器から一筋の光が差し込む。カチャリと何かが開く音と共に開いた扉が現れた。

『ドコでもドア』

某タヌキが使っている秘密道具と同じ能力を持つ神器の力で作られたドアである。

「下手な転移より便利だよね。そのドコでもドアって」

「異世界にもいけるしね」

まあなんにせよ——オレ達はドアへ潜り抜けた。

そこを抜けると崩壊し始めてる時の庭園であつた。

「お人形さんがいっぱいだね」

「壊れてたヤツがほとんどだけだな」

杏子とまどかの感想を耳に入れながらオレ達は奥へ進んだ。

奥の間にはプレシアさんと金髪少女が何かを言っていた。オリ主くんは………やっぱりボロボロになって倒れていた。リニスが彼を踏んでガッツポーズをとっていた。

YOUWINってヤツがテロップに出てると思う。

シリアスとコメディが合わさったシユールな光景だなオイ。

「修羅場終わってたかー………残念」

「ま、いい気味だっと思える光景見るだけで良いじゃないかしら、まどか」

ドS姉妹通常運転である。すると、プレシアさんがジュエルシード六個を展開して、次元の狭間を展開する。

是が是非でもアルハザードに行くつもりか。

「そうは………させない！」

リニスに踏まれてオリ主くんがリニスを払いのけ、ジュエルシードに魔法当てた。プレシアさんは達成感で油断していたのか、防御を張ることができなかった。

「そんな………私の、私のジュエルシードが………」

射殺さんばかりとオリ主くんを睨むプレシアさん。それに対してオリ主くんは真剣な表情で言い出す。

「死んだ人間は生き返らないんだ。だからこそ、人は今を生きようとするんだ!! これ以上、フェイトを悲しませないでくれ!」

うん、正論だ。お前は正しい。認めるよ……………それは。

だけどお前は勘違いしてる。その正論が通用するのは正気の人間だけ。狂った人間には無意味さ。

何が言いたいって? そりゃ簡単さ。

「私はアリシアを……………そして失った時間を……………。あんな人形なんかより……………」

オリ主くんの言葉は狂人(プレシアさん)には通用しないってことさ。

もし、彼女にフェイトを娘のように愛する心が、過去を乗り越えられる強い意思があれば、通用していたはずだとオレは思う。

だけど、彼女には届かない……………そこにいるのは壊れた人間だから。

「やれやれ……………気に入らないから協力するつもりはなかったが……………」

オレは神器を召喚する。そしてリニスに近づく。

「リニス、プレシアさんの望みを叶えるべきと思うか?」

「思えません……………けれど、もう心も身体も限界なのですよ、あの人は」

「確か不治の病だっけ? 悪い。オレ達の中にそれが使えるヤツはいない」

「わかってました。だからこそ、お願いしていいですか?」

「……………わかった。終わらせてくるよ」

「フェイトには私から言っておきますから心置きなく……………」

リニスの言葉を聞き、オレはプレシアさんの前方に神器全てを開く者を向けた。

鍵穴が開き、ドコでもドアが出現した。

「これは……………」

「オレの神器の力で創ったアルハザード行き扉さ。一応やってみて成功したけどもしかすると失敗してるかもしれない」

「ほんと!? じゃあ……………じゃあアリシアは!」

「ただし、帰りのはない。片道切符の扉だ。ここに未練がなく、そして命を捨てる覚悟があるならその扉を開けろ」

「……………っ。……………」

「行くなプレシア! フェイトを残していいのか!」

プレシアさんはしばらく考え込む。オリ主くんは止めようと躍起になるが、千香がそれを止める。

まどかやほむらは高町を抑え込んでいる。

残ったメンバーはクロノ少年に対峙し、動かせない状況にした。

金髪少女はプレシアさんについて行こうとしたが、リニスに止められている。

これで邪魔する者はいない。彼女が選択する阻む障害はない。そして――

――扉のノブに触れた。

「……………いくわ」

「いいのか？」

「元から後に引けない身だし、病で少ない命よ」

「……………そうか」

やっぱり……………そうだよな。

かつてオレは大切と思うが故に狂ってしまった一人の少女を知っていた。

彼女は相棒だったオレですら殺すくらい狂っていた。

――大切だからこそ、目の前のものばかりしか見てなかったから見失ってしまった。

た。

まあ今じゃあドSで容赦ない女の子になっていたが。

プレシアさんがあの少女の姿と被って見えた。だからだろうか。なぜか最後には協

力したくなった。

「……………ありがとう」

彼女はそう言って、アリシアが入ったポットと共に扉の中へ消えていった。そのとき

見た顔はなぜか印象に残った。

☆☆☆

「なんであんなことをしたんだ!」

オリ主くんが責める声をあげた。

「プレシアを逃がすようなことをして許されると思ってるのか!」

「逃がしたつもりはないし、どのみち助からないらしいじゃねえか。なら、彼女が最期にしたいことをさせたまでだ」

「だからってこんなことしたのか! フェイトを一人にさせたのか! ふざけるなよ!」

.....

「彼女はフェイトと生きるべきだった! なのにお前は彼女の下らない我が儘に協力した! わかってるのか!」

.....今なつつた?

「下らない.....だど。じゃあお前はアリシアを蘇らせることができたのか? プレシアさんの狂気をどうにかできたのか?」

ふぎける……………ふぎけるなよ。そんな甘いことでどうにかできた人じゃない。

「お前にあの人がどういう想いで過ごしてきたのかわかるのか？ ぽっかり空いた心の隙間をどうにかできたのか!？」

「そ、それは……………!」

「オレにはわかる。あの人はほむらと同じだ。あのとき、止めていたら大切な人を失わずに済んだ。見失わずに済んだ後悔する彼女の気持ちがい!! お前みたいなお前みばかりの偽善者ごときが何をわかって下らない我が儘って言えた!？」

「思わずこの偽善者を殴った。彼が床へ叩きつけられたとき、オレはさらに言葉を投げ

る。
「フェイトを人形って言われてたな。その通りだよ。プレシアさんにとってクローンはクローンだったんだよ。娘の代わりにならなかったんだよ」

「お前……………自分が言ってることわかっているのか!？ フェイトの存在を否定しているんだぞ!」

「だってそうだろ？ 事実なのだから」

「つ……………」

「理不尽？ 違うだろ。これが現実だ。残酷で、冷酷で、救いようのないものばかりが溢

れかえっているのが当たり前の世界だ。そして弱いヤツが簡単に死ぬ」

心が弱いから壊れた。

立場が低いから虐げられる。

力がないから殺される。

「プレシアさんは心が弱かった。心が壊れていたんだ。耐えられなかつんだよもう。だから優しい過去に戻りたかった。取り戻したかつたんだろうよ、大切な人を。何もかも見失つてまでな」

オレはそう言つて、ドコでもドアを出した。すでに神器使い達は集まっている。あとは帰るだけだ。

「なんでもかんでも綺麗事でいくと思うなよ………青二才が」

捨てセリフを吐いてオレ達は時の庭園から出ていった。

最後の最後でとても胸くそ悪い結末となった。

番外編その四

前世の思い出

(??サイド)

本日は快晴である。そんな日を出かけられずしてはいられない。

鹿目まどかもまたその一人であった。

親友のさやかと共にシヨツピングに出かけて、少女らしく遊ぶことが彼女の今日の楽しみであった。

「ん？ あれって……………」

「あ、ソラくんだ！ おーい！」

そう言つて手をブンブン振る。

だが彼は気づいておらず、そのままどこかへ走つて去つた。

「むーなんだよー。こんな美少女二人を無視するなんて許せないわね。次会つたらとつちめてやる」

「あはははは……でもどうしたのかな？　なんか慌てていたみたいけど」

「ははーん……………」

さやかが目が怪しく光った。よからぬことを考えている証拠である。

「これはアレだね……………デートだね！」

「でででデート!?!」

「違うないよまどか。あんなに慌てて、しかもまどかやあたし達のようなかわいい少女に目をくれず、真つ先に目的地向かうなんてデート以外ないに違いないわ！」

「そ、そうかなあ……………」

さやかの直感は少し当てにならないと思っっているまどか。

まさにその通りだ。

だが、それでも暴走少女さやかは止まらない。

「もしかすと転校生とかな？」

「ほむらちゃん?!」

「だって普段から一緒にいるし、よく見かけるじゃん」

「あわわわ、そうなのかなあ……………」

「そんなわけないでしょ、美樹さやか」

凜とした声が彼女達の耳に入る。

そこには件の転校生、暁美ほむらが髪を流しながら立っていた。

「あれ？ 違うの？」

「私があんな子どもと付き合うはずないじゃない」

「じゃあ、ほむらちゃんは今何してるの？」

「私は彼が気になって追いかけているの。見滝原公園を見たとき彼が『気になることができたから、今日別行動でいい？』って聞いてきたものだから」

「ますます気になるなあ。………よし、あたし達も追いかけてやるわよまどか！」

「うえ!? それはだめじゃない、かな？」

「気が合うわね。散々振りまわされた怨みを晴らすネタを得るチャンスだわ」

「ほむらちゃんも!? というか私怨だよねそれ!？」

こうして三人娘の追跡が始まった。

☆☆☆

「知らないおばあちゃんと話しているわね………」

「穏やかそうな人だけど、知り合いなのかな？」

「あ。頭下げた」

「どうやら道を聞いてたみたいね」

『ありがとうおばあちゃん！』

『いいっていいって。孫みたいだねえ、ぼくは』

『お孫さんいるの？』

『いるともさ。最近、紅いの出したままで全く動かないのよねえ。テレビを直すように鈍器で殴ったのに』

『病院に連れて行けば元気になるよきつと！』

『そうねえ。試してみるよ』

「まどか、すぐに百当番。ソラの目の前に殺人犯いる」

「うん」

「さりと現行犯と会話したソラに戦慄が止まらないわ」

数分後、その人は捕まったことは言うまでもない。

☆☆☆

「あ、今度は杏子と話してわね」

「なにを話してるのかな？ あ。また頭下げたよ」

「いったい何を話していたか聞いてみましょう」

三人娘はソラに手を振る杏子に話しかけた。

「あ。お前らなにしてんだよ？」

「ソラの追跡よ。何か慌ててみたいだし」

「うん、急いでたし。もしかすると、ここに恋人がいたりして……………」

「そんなのお姉ちゃんは認めないわ！」

「いつの間にかマミさんがいる!?!」

さりとて参戦してきたマミにさやかはツツコミを入れていると、杏子は検討違いの答えを出した。

「なに言ってるんだよ。あいつは自分の家の場所を聞いてただけだよ」

「『家の場所?』」

「ほら、あいつって異世界に飛ばされて神器使いになったとか言ってたじゃん。なら、あいつの故郷があるなら帰りたいって思うのが普通じゃん」

「つまりここにソラくんの故郷が?」

「彼もこの出身だったのね」

まどかとはむらは納得した表情となった。しかしってマミとさやかは違う。

「でもそれってあたしのような幼なじみがいることあるってことでしょ？」

「義理の妹がいる可能性も否定できないわね……………」

「お前らの想像力にビックリだわ」

呆れる杏子にマミとさやかは彼女の手を引いてソラを追いかける。

「いくわよ佐倉さん！ そんな事実があつたらソラくんのお姉ちゃんとして黙ってはいられないわー！」

「つてオイ！ なんでアタシまで……………」

「なんか面白いことが起きそうだから行くわよ杏子！」

「野暮なことするなつて！」

口で止めようとするが行動派の二人は聞かず、そのまま杏子を連れて行った。

「……………どうしようほむらちゃん」

「追いかけるわよまどか。彼女達の暴走を止めなきゃいけないし、それに……………」

「それに？」

「そんな事実があれば脅せるネタが得られることじゃない」

「ほむらちゃん!?!」

やはりこの怨みを晴らせねばという想いと共に、ほむらもまた追いかけた。

まどかはそれを止めるために追いかけるのだった。

☆☆☆

普通の一軒家にてソラは立ち止まっていた。ベルを押そうかどうしようかとソワソワしていた。

「……ソラくんの……」

「さあさあ、蛇が出るか竜が出るか!？」

「たくつ、ほんとに知らねえぞ……」

「……ワクワク」

「はあはあ……止められなかった……」

曲がり角から覗く五人娘はソラがベルを押す光景を見守った。

ドアから出てきたのは穏やかそうな女性とその女性と手を繋ぐ小さな少女だった。

『か、母さん?』

『もしかしてソラ……なの?』

感動の再会に誰もが目を奪われた。しかし、邪魔する野暮な輩がいた。

「これって魔女結界!？」

「こんなところで!」

しかもソラの後ろから魔女が現れた。彼は神器を召喚し、母親を守ろうと戦った。あつさり決着はついた。猛者であるソラにとつてこの程度の敵は朝飯前だった。すぐに魔女結界は解除された。

『そ、ソラ……………なにそれ……………?』

『か、母さん……………これはその……………』

『やっぱりそうよね……………ああ、そうよ……………! あなたはソラじゃない!』

その言葉を聞いた五人娘は目を開いた。

『六年も行方不明だったのよ! そんな子が今更出てくるなんておかしいわ!!』

『き、聞いて——』

『消えなさい! 消えなさいよ過去の幻想!! この化け物!』

彼女はそう言って、玄関にあつたと思われる花瓶を投げつけた。

それはソラの頭に当たり、血が流れる。

なぜ彼女がそう言うのかという理由はある。彼女は愛すべき息子であるソラを失つてから夫だった人物と喧嘩別れし、狂ってしまった。

それを救ったのは今の夫で、一児の娘をもうけて幸せだったが、目の前に現れた彼女のトラウマである過去の幻想だった。

彼女はフラッシュバックしたのだと誤解したのだ。

そして、それはソラの心を傷つけるのには充分だった。

ソラは目を向けず、走り出した。

前を見ず、下だけを見ながら全速力で。

五人の少女達も追いかけた。

——そして、彼が転んだときに追い付いた。

「わかってた……………六年も行方不明だったもんな……………変わってしまったよな……………」

「ソラくん……………」

「化け物……………うん、化け物だよな……………神器使いは化け物だって師匠も言ってたじゃねえか……………」

顔が見えない彼の表情は解らなかったが、まどかは背中から抱きついた。

「もういいよ……………泣いていいんだよ？」

「……………泣きたくない。泣けばオレは……………強くなるよ……………」

「強くなかったっていい。悲しいときは泣けばいいんだよ。だから思いきり泣いて。――

――今なら私が隠してあげるから」

ソラの顔はまどかの胸で見えなかった。

それを理解したソラは――泣いた。子どものように。

いや、年相応に泣いたという方が正しいのだろう。

ほむらはやつと彼のことがわかった。

――彼はまだ子どもと変わらない年齢じゃないか。

誰かと遊び、誰かに甘えることが当たり前の子どものと変わらない年齢だ。

――なのに彼は楽しもうとすることがあれど、誰かに甘えたことがなかったではないか。

――それどころか怖くて、辛くて、苦しい環境なかで、泣いて当たり前な世界にいるのに関わらず彼は泣かずに必死に彼女達を助けようとしていたではないか。

それに気づいていなかった自分の不甲斐なさと彼の悲しみに、同情しながら目を瞑る。

夕焼け空に響く少年の泣き声――

それは前世で涙を流したとある少年の悲しい思い出——

第十七話

エピソード的な話をすれば、オレ達は管理局からお尋ねものにはならなかった。

理由はプレシアさんに全て擦り付けたことと、彼女がかつて巻き込まれた事件の真相が書かれた書類をリンデイ提督に渡したから。

いつそんなものを入れたって？

管理局まで行って、ほむらと一緒に時間停止で盗みましたが何か？

あ、そうそう。この一件でフェイトとアルフに敵視されました。

リニスとしては説得を試みたみたいだが、やっぱ母親を消した元凶だしねー。

つーか、肝心のリニスもプレシアさんで行っちゃったし。

あ。重大発表があつた。ほむら、よろしく。

「本日呪いは解除されたって女神様から連絡あつたわよ」

「やったね！ さよならモテないオレ！ こんにちはわモテ期なオレ！」

「あ、でもモテたら私とまどかが全力で邪魔するから。私達以外の別の人と結婚したらソラくん殺して私達も死ぬから」

「さよならモテ期。ようこそヤンデレ……………」

ガーン。まさかここに好意を持つ乙女がいたとは。しかも病んでいるほど。ちくせう。こうなったらマミさんが入れた紅茶で一息でい。

「うーむ、やはりマミさんの紅茶はおいしいなあ……………」

「ふふ、お粗末様。よかつたらお嫁さんにもらつてくれてもいいわよ?」

「あいにくオレはこんなできた人とは似合わないので」

ソファアでゲームしていたさやかが立ち出した。

「じゃあこのさやかちゃんがなつてあげてしんぜよう!」

「元氣すぎて処理できないから却下」

バツサリである。さすがのさやかもシヨボーンになる。

同じく座つていたまどかと千香が立ち上がる。

「さやかちゃんのだめなら……………!!」

「いやいやこの超絶美少女であるボクが!」

「お前らは論外。昔のまどかだつたら話は変わるけど」

「ほむらちゃん、昔の私つてなんだつたっけ!」

「今も変わらないかわいいまどかよ」

「それじゃあOKだね!」

「違うし。ていうか外見じゃなくて内面みるやお前ら」

ほむらがフサアと髪を流して言った言葉を否定し、オレは嘆息吐いて立ち上がる。
まあなんにせよ……………。

「帰ってきたなあここに」

さあ平和を謳歌しようか。

「ま、どうせトラブルに巻き込まれるだろソラって」

「誰がソゲフさんだと杏子」

よろしいならば戦争だ。オレ達は平和的にテレビゲームで雌雄を決することにした。

☆☆☆

快晴な天気にて二人の男女が町に出掛けていた。

今日はまどかと散歩出かけた。

普段はハツチャける彼女だが、デートしようぜと真面目な表情で言ったら赤面して了承した。こいつって案外に受け身に弱かったりするんだよな。

前世もそうだし。

そのとき見たはにかんだ照れた笑顔は忘れない。

そのとき見たほむらの嫉妬血涙も忘れない。

どつちに嫉妬してるのかは定かではないが怖かった。

「見て見て、これかわいいでしょ？」

「のろいうさぎか……。オソロかわいい言われる大人気の人形がここにあったとは」

「……………じー」

「わかった。買ってやるからそんな小動物な目で見るな」

「やったー♪」

「抱きつくなんて。たく……………」

子どもみたいに喜ぶ今日のまどかはかわいいなあ。いつも自重しないのに、こういうところがあるからオレを癒してくれる。

「許すまじ許すまじ許すまじ許すまじ許すまじ許すまじ……………」

あとほむらさんや、物陰から射殺さんばかりの目で睨まないで。お願い。マジで恐いッス。

「これは後で婚約指輪も買うべきだね！」

「たった今、ソゲフされた」

あばよ、幻想。こんには残酷な現実。

また自重しない娘に戻ったこの少女はいつたいどこに向かっているだろうか。

「私とほむらちゃんとソラくんのバージンロード」

「チェンジで」

そしてほむらさんや、どこからそのスナイパー銃を取り入れた？ またなんとか組団からか？

閑話休題

人形を買って、服も買った後、ソフトクリームを買いに言ったオレがまどかが待つべ
ンチに向かったが……………いない。

はて、どこに行つたのやら。

すると某残酷系魔法少女アニメの着信音が流れる。

最近流行の若手二人組の少女『倉リス』の着信音である。相手はまどかからだ。

オレはスマホの通話モードに耳に当てた。

『誘拐されちった、ティヒ♪』

「いや楽しそうな声で言うなよ。ていうか、なぜにそうなった!？」

『いやーなんか月村さんとバーニングさんが誘拐される光景目撃しちゃって、私の中に眠る正義の心赴くままにドロップキックで助けようとしたら捕まっちゃった♪』

「あのなあ……………」

楽しんでるなチクショウめ。こちとら心配してたのに、意外に呑気なヤツめ。

とにかく、場所を聞かないと。

『あ、こいつケータイ持ってやがる!』

『てめえ、いつの間に——おふうっ!』

『乙女の必需品に手を出さないで!』

『頭あ、無事ですかい!? 息子とたまは無事ですかい!?!』

『ちよつと新しい世界が見えた……………』

ヤバいな。いろんな意味で危ないし、バレた。

このままじゃ居場所がわからなくなる。そうなるとマズイな。

つーか、頭の急所に男として同情する。

『良いから寄越しやがれ!』

『あう……………絶対データ覗かないでね! 寝ているソラくんのあられの無い写真コレ

クシヨンが保存されているから!』

「今携帯持ってるヤツ、それぶっ壊せエエエエ！」

全力でスマホにシャウトした。

あられのない寝姿つてなによ!?

いつの間に撮ったんだよオイ!

そうこう言ってる間に通話がキレた。

……………うん、その携帯が破壊されていることを祈ろう!! 頭さんお願い!

まあ、それはさておき……………。

「つーか、最初からあいつに聞けばいいじゃん」

オレはその人物に電話をかけた。頼むぜ……………王子様。

(まどかサイド)

そして私のターン。私と月村さん達は廃工場でグルグル巻きに縛れていた。

テンプレ的に言えば、囚われたヒロインだね。

「私達をどうするつもりよ!?!」

「用があるのは月村だったが………まさかバニングスの娘まで捕らえることになるうとはな。まさか化け物とつるんでいるとはな」

これまたテンプレ展開だった。

バニングスさんが話している相手はいかにも悪者ですと言ってるような人だった。

黒スーツにサングラス。おまけに頬に痛そうな傷がある人って本当にいるんだなあ。

「さすがが化け物ってどういうことよ!？」

「知らないのか？　ククク、滑稽だ。滑稽だぞバニングスの娘！　まさか本当に何も知

らずそいつと関係をもってたのか!？」

「何がおかしいのよ!？」

「教えてやるよ。こいつの正体をなア!」

頭つぼい人が勝手に話始める。

なんでも月村さんは血を吸う吸血鬼という夜の一族という人種らしく、紅い瞳になったり、催眠をかけたり、そして人間とは思えないくらいに怪力があるらしい。

何度も月村さんは頭つぼい人にやめると懇願するが、ゲスい笑い声を出しながら最後まで言い切った。

酷い人だねー……………。

「んん？　なんですか？　黙っちゃって？　もしかして今さら恐ろしくなったのです

かア？」

「なんか私に変な誤解されちゃってる。心外な。そんな人達より怖い相手なんかいるのに。」

「バカ言ってるんじゃないわよ！　　すずかは私の親友よ！　　絶対怖がってやるものですか！」

バニングスさんは吠えた。

うん、さすが親友なだけである。彼女のそういうところが好ましいと思える。

私も親友を大切にする人だから。

「ククク、そうですか。でも残念無念。君達はここで殺されるのでーす！　　月村以外は用がないですからア!!」

そう言ってますマシガンやらライフルを構える黒スーツ達。

ちよつとマズイかも。さすがに一人を犠牲にする覚悟じゃないと乗りきれないかも。

「夜の一族の当主の座の交渉材料として月村ちゃんには人質になつてもらいまーす。けど、君達はいらない。バニングスは身代金を要求するのはまだしもこんなチンチクリンな少女が使えるはずないから殺しちゃうん♪」

「ひどい……………ほむらちゃんやソラくんだつて言われたことないのに！　『まどかつて幼児体型だよ』って言ってるのに！」

「いや対して変わらないって。つーか、さりげなく罵倒してるからひどいなそいつら」
同情的な目で見るなら殺さないでよ、もう。」

「あははは、ちよつとマズイね。うん、これはピンチだホント」

「なにカラカラ笑えるのよあんた!?! なんて銃口向けられているのに平気なのよ!?!」

「そりゃあ毎日見えますから。主にほむらちゃんがソラくんに向けている光景で」

「あいつ、ほんとなににしたの!?!」

バスルームでラツキースケベが起きちやつてね。なんで毎回、起きるのかな。

ソラくんってそういうスキル高いのかな?

「随分余裕じゃないですか。死ぬ覚悟ありますってことですかア?」

「冗談キツイですよキモイ人」

「キモイ人!?! 辛辣だね君!」

「そりゃそうですよ。だって月村さんの一家をストーリーカーレベルまで知っているし、しゃべり方が気持ち悪いですよ♪」

「君ってよく満面な笑みで毒が吐けるね!?!」

吐きますよそれはもう。姉に鍛えられますから♪

「それに私は一切死ぬ覚悟はありません。怖い時は怖いです。今でもビクビクしてま
す」

「じゃあ、なんで悲鳴の一つも上げないのですかア?」

「そりゃあそうですよ。もうすぐ王子様が来ますから」

この人達にメルヘンな娘って目で見られてるね私。呆れた彼らはトリガーを引こうとする。

でも怖くない。だって約束したから。

いつだって、どこにいたってあの人達は来てくれる。

ドツツツゴオオオオオン!!

「なんですかア!?!」

「大変です! 表にいた連中がバズーカで——ほむん!?!」

「部下一号オオオオオオ!?!」

ゴム弾が部下一号ドイツ語男の人に直撃した。

私は銃を使う人を知っている。ああ………やっぱり——

「ほら、来てくれた」

私の王子様と白馬が。

ヒーローとその相棒がそれぞれ信頼する武器をもってね。

第十八話

薄汚い廃工場にて、誰もが刮目した。ヒーローのごとくその男女は堂々と真つ正面から現れたのだ。

一人の少女はグロック17を片手に黒スーツの連中に向けて構え、もう一方の手で鎖を掴んでいた。

一応、鎖は武器ではない。

理由はもう一人の少年でわかる。

少年の片手にはカギのような黒い剣と——首には鎖で繋がった首輪。

ザ・ワンちゃんな状態であった。

「なんで神威に首輪がついてるのよ!?!」

バニングスのツッコミはもつともだ。なんでオレにこんなものがあるんだ？

「私の願望という名の趣味よ!」

「堂々と言えることそれ!?!」

「そう私の名前は朱美ほむら………趣味とネタには全力全開が私のモットー

よ!?!」

「力に注ぐ方向がなんか歪よあんた！」

「さすがお姉さま！ 同感だから後でそれ貸して！」

「朱美妹!?! あんた鼻息荒くして何するつもり!?!」

シクシク……………彼女達にとってオレはオモチャなんだね……………。

頼むからバニングスと月村。同情するなら助けてよ。

誰か癒しをください。

「逝きなさいソラ。かみつく攻撃！」

「ウガアアアアア！ もう焼けクソじやコノヤロオオオオオオオオオ！」

オレの怒りのキャパティシーは越えた。

どこぞのポケットに入るモンスターのごとくヤツらに向かって駆け出した。黒スー

ツ連中は撃ってきたが神全てを開く者器を盾にし、一人の男の頭にかぶりつく。

「ぎやアアアアア!?!」

「部下二号オオオオオ！」

「撃て！ 撃て！」

「だめです！ 撃てば部下二号まで巻き添えです！」

混乱した中でほむらもまたグレックで彼らの銃を撃ち落とした。

そして、茫然としていた一人に華麗に自身の美脚で踵落としを決めた。

「蹴り心地悪いわ。やっぱりソラじゃなくちや」

「気合い入れてあいつを満足させるやコノヤロオオオオオ！」

「なにそのりふじ——ぎやあアアアアアなんか吸われるウウウウウ!!」

とある吸血鬼さんから伝授してもらったエナジードレインという魔法である。

魔力、活力、生命力などあらゆる力を吸いとれる。

まあ絶対量までしか吸えないけど。

「こいつも夜の一族!?!」

「誰が淫乱だとオオオオオ!!」

「そつちの夜じやねエエエエエ!」

関係ねえ! 全員一人残らずぶつ潰す!

オレは次の獲物に噛みついた。

「ね? 王子様が来てくれたでしょ?」

「いやアレ王子様!?! 怒り狂った番犬にしか見えないのだけど!?!」

「王子様はほむらちゃんだよ。ソラくんは……………うん、その、犬でいいかも」

「そつち!?! ていうか神威は犬なの!?!」

あーあー聞こえない!

もう知るか! 全員倒れるまで噛みつき、吸いとる!

「どこの不良男児よあんた!」

だつて遊ぶ金ねーもん。さつき、まどかのデートでめちやくちや軽いもん財布。

「つーか、さつき聞いたんだけど月村つて吸血鬼? いやほんとマジ? 『WRYYYYY

YYYYY!』とか言つて時間停止できるの?」

「できないし、私デュオ様じゃないからね神威くん」

「じゃあ、『うー☆』とか言つてスペルカード使えるのかしら?」

「うちは紅い館じゃないよほむらさん。生まれ故郷は幻想卿じゃないから」

「じゃあ、血を吸えば目からビームとか、ボディービル顔負けの肉体変化が起きるとかは?」

「そんなイロモロ吸血鬼いないよまどかちゃん! ていうか、もはや元ネタはどこなのそれ!」

うん、さすがにないそれ。ボディービル顔負けの肉体変化が起きる吸血鬼とか見たことないし、見たくないよ……………」

結論。月村家化け物説は

「「化け物説ガセじゃん……………」」

「なんであからさまにガツカリされるの!」

全員から吐かれた嘆息に抗議してきた月村。いや……………だつてねえ……………。

「いやーなんか知り合いの仲間がこんなところにいたのかと期待してたから、ちよつとガツカリ」

「初めての吸血鬼がこんなのだなんてガツカリだよ。私のワクワク返してほしいよ」

「ガハラ先生の恋人の僕の仲間しよんと思つたじゃない。私もガツカリだよ」

「アリサちゃん、私もう泣いていい？」

もう泣いてるじゃん月村。バニングスのまつ平らな胸で。

あとほむら、まさかと思うけどお前がそんなツンドラになったのガハラ先生のせいじゃないよね？

恋人さんの下僕つてキスでシヨットな名前だった吸血鬼じゃないよね？

「なんなんですかア………なんなんですかアお前らア!？」

頭つばい人があげた疑問にオレ達は腕を組んで考えた。

なんだつて言われても。

「神器使い」

「元女神」

「元悪魔」

「ふざけてるのかテメーら!？」

どうやら怒らせたみたいなのでヒソヒソ話の会議を開始。

「オイどうしてくれんだよまどか、ほむら。お前らのせいであの人ら激おこポンポン丸じゃねえか」

「仕方ないでしょ。何者かって問われたら、最初に出てくるのは悪魔だし」

「同じく」

「統一しないと逆に混乱するじゃん。それに二人が言ったそれこの世界じゃかなりイタイぞ」

ヒソヒソ会議を始めていると頭っぽい人がキレ出した。

「ヒソヒソ話でデイスらずさつさと答えるオ！ 何者なんだよテメーらはア?」

「うっせーな。それを今デイスってるんだから黙ってる」

「ピーピーうるさいわね。グレックの実弾受けたいのかしら?」

「眼を扶るよ♪」

「なんで自分がここまで言われるの!? つーか最後のヤツめちやくちやコワツ!」

ツッコミうるさいなあ。ガムテープで黙らせるか?

「いやいつそ『閉じる』か」

「何言つて——……………? ………………!?!」

全てを開く者

神器を向けて封印砲発射。当たってガチャリと口から音が聞こえ、頭っぽい人の声は『閉じた』のだ。

声帯を閉じればそうなるわな。

「あ、今さらだけど一言で言い表せる言葉あるわ」

「奇遇ね。私もよ」

「それじゃあ一緒に言ってみようよ♪」

まどかの提案を飲んで、一息をついて言った。そのとき頭っぽい人は恐怖のあまり顔を青くしていた。

「「「化け物（さ）（よ）（だよ）」」」

それを聞いた頭っぽい人は恐怖のあまり、ブクブク泡を吹いて倒れた。情けないねえー。

「すずか無事!?!」

「助けにきたぞ!」

ありま、今さら救出かよ。さてと邪魔者はとつと退散

「あんた、うちのすずかになにしたのよ……………?」

えっ?　なんで睨まれてるの?　なんで銃口向けられてるの?

ちよつと整理してみようか。

泣いてる月村。

慰めるバニングス。

知らない少年とその武器。

……………明らかに悪役じゃね？ オレ……………。

「そうよ。月村さんに乱暴して『ズツキュウウウン』なキスを無理矢理したのよ。それで月村さんは泣いちゃって……………」

「なにあらぬこと言ってんほむら!? ってあれ？ さっきいた連中は!」

「時間停止で外に放り投げたわ。ソラを悪役にするため」

「なんでこんなことするんだよ!」

ほむらは、妖艶で、満面で、周りが魅了されそうな笑みで答えた。

「好きな子をいじめたいってヤツよこれは♪」

「シヤレになんねエエエエ!」

「オルアアアアアうちの妹泣かした男はテメーかアアアア!!」

「キャラ全然違ってないお姉さん!」

「ディア、マイ、シスタアアアアアアアア!」

ウガアアアアアアアマシソンの嵐がきたアアアアア!

オレはそれから逃走を開始するのだった。

「ほむらちゃん、さすがにやり過ぎじゃないかな……………」

「そうね。でもまどかかとデートした彼が少し許せなくてつい、ね。嫉妬しちやっただわ。」

まどかとソラに……。それに……。

「それに？」

「今泣いてるソラはめっちゃくちゃかわいい！」

「同感だよ！」

ほむらサムアップ。まどかサムアップ。

「これはまどかの魔法少女で涙目に匹敵するわ！ 激シャよ激シャ！」

「なんか不穏な発言あったけど、私も激シャ！ そして泣いてるソラくんを慰めればベッドインになるという策略完成！ まどかちゃんマジ策士！」

「私も混ぜてねまどか」

「いいよ♪」

本人そつち退けてなにやってんだお前らアアアアア!?

前半ちよつと反省したのに、後半で台無しだよ！

「離して恭也！ ここで妹を犯したこいつを亡き者しなくちゃいけない使命があるのよ！」

「だからってここでRPGはシヤレにならんから！ というかソラくん逃げてエエエエエ！」

壁際まで追い込まれたオレはめちやくちや目がウルウルして泣いてたそうだと二人は語っていた。

ちなみにカオスな現場が収まったのは、数時間後の月村とバニングスの説得だったりする。

せめて早く止めてよ。え？　なんかキユンときたからあえてしなかった？

彼女たちの将来が不安になった。

第十九話

豪華な洋館のとある一室にて、青年と女性に相對する形で、オレ達はソファア―に腰かけていた。

青年の名前は恭也さんで、女性の名前は月村忍さんという、月村すずかの姉である。ていうか、この人シスコンだった。

バーサーカーと化したシスコンは恐ろしいと思った。

ちなみにあの後、誘拐犯達は月村家の関係者によつて連れて行かれたそうだ。彼らが日の光を浴びる日は来ないかもしれないと思つてたりする。

「話を始めよう———としたいが良いのかい？ 彼女達は……………」
「はい。これで良いです」

「うう……………頭がクラクラする……………」

「あうう……………いつになく容赦ない……………」

頭のタンコブを抑えて痛みを耐える二人の少女が絨毯に転がっていた。

そりゃあ、オレの全力全開ですから。

「ひどいわ……………女性に手をあげるなんて、いつからそんな鬼畜になったのかしらソラ……………」

「ほう？ オレに今までしてきたことを踏まえての発言なんだなそれは？ ならお前にはこの後にクラスメイトの前で公開オシリペンペンの刑を考えてやろうか？」

「ごめんなさい！ それだけは無理！」

ニツコリとほむらにそう言うとうと土下座してきた。

クールビューティーを貫いてる彼女でもさすがにこの羞恥と痛みは嫌なのだろう。

「うう……………でもこれも試練だよほむらちゃん。そうソラくんをお嫁入りするにはこんな試練を乗り越えなくちゃ！ さあ、カモン！」

「お前は全力全開のチョップな」

「ふぎやー！」

潰れた猫のような断末魔をあげて淫乱生物は地に伏した。

頭のタンコブから湯気が出ているのは気のせいじゃない。

「オレさ……………もう遠慮しないことにしたんだお前らに……………。千香は究極の変態だからいつも遠慮しなかったけど、もう我慢が天元突破しちゃった。女子だろうと、子どもだろうと、老人だろうと関係なくセクハラには遠慮なくツツコミとお仕置きしてあげる♪」

「ひう……………！」

おやおや、ほむらちゃんが怯えちゃって。オレはそんなに怒ってないからねー？

アハハハハハハハ！

「忍、どうしよう。ソラくんから般若の化身が出ているのが見えたような気がする……………」

「奇遇ね……………私もよ。なるべく彼はからかわないようにしないと……………」

二人は何を言ってるか僕わかんない。

閑話休題

二人の説教が終わり、オレ達はなぜ月村達と一緒にいた経緯を話した。納得してもらったが、月村をなぜ助けたか聞かれた。

「私は彼にお願いされたまですよ。まどかのついでよ、ついで」

「なんかクラスメイトがいなくなるのが少し嫌だったからなあ」

「ソラ、本音は？」

「ぶつちやけ、いなくなると恭也さんの妹さんにさらに目の敵にされそうだったし。正直、めんどいから」

「ぶつちやけすぎだろ……………」

そう答えると思わず手で顔を覆い隠す恭也さん。

いやー自分は正直者ですからねー。

「それに君が神威だったとはね。なのはから聞いた話と大分違うが……………」
「私もよ」

話が違うってなんだよ。ちよつと不安になってきた。

なので、どんな話ですかと聞いてみた。

曰く、私たちが気持ち悪い目で見てる。

曰く、女癪が悪い。

曰く、六人の少女をとつかえひつかえで侍らせている。

そんな誤解をされていた。なにそのクズ。オレはここまでひどくないはずだぞ。

とりあえず、その誤解を解くか。

「そんなわけないですよ。気持ち悪い視線ははつきり言えば、『邪魔、消えろ、どっか行け小娘』って言う嫌悪の視線でしたし、女癖は明らかに噂だし、六人の少女なんて勝手にこつちにくつついてくる友達ですから」

「物凄く毒を吐いたね君は。わかつたことがあるとすれば君はなのは達を嫌っているのかな？」

「あんだけ言われて嫌わないほどオレは聖人君子じゃないし、ましてやできた人間じゃありません。嫌らう者がいるならそいつのことは嫌いですから」

逆に言えば好意的であればそれなりに返すが。

ニツコリとそう言つて笑顔で返すが、オレの目は笑っていない。恭也さんもそれはわかつているだろうか何も言わない。

「だからと言つてあなた達二人を敵と見ませんし、嫌いにはなりません」

「どうしてだ？」

「神威と言う名前と聞いて警戒はしましたが嫌悪的な目でみなかつたからです。さらに恭也さんとは温泉で良好的でしたしね」

オレはそう言つて立ち上がる。

「さて、もう話すことはありませんから帰ります」

「そうは行かないわ。あなたには私達の秘密を知った。帰すわけにはいかないわ」

恭也さん達と同じく廃墟に突撃してきた二人のメイドが構える。一人は小さいがもう一人は大きな女性という姉妹と思われるメイドさんだ。

やれやれ……………。

「はつきり言つて分が悪いですよねそれ。未知なる力があるオレ達に挑むなんて。それにオレはバニングスや月村すずかを先に狙わないと思つてますか？」

「っ……………！」

「なんでそんな顔をしますか？　それが戦いというものです。生き残るためなら、誇りや名誉なんていららない」

というか戦争じゃ当たり前だった。

そして捕まった仲間を問答無用に仲間ごと葬ることが多かつた。幼い頃のオレはそれに何度も納得できず、抗議をしたものだ。

結果、大切な師を失つてしまったが……………。

「あなた達が敵対するならそれでいいですよ。こちらも全力で排除するまでです」

「まどかを傷つけるなら一族全て葬るわ」

「あの………物騒なこと言っていますけど、とにかく敵対してほしくないなあって私は思っています」

まあ、まどかは元来から優しい少女だがほむらはマジでやりそうだな。それからオレ達の間には沈黙が流れる。

「……………」

月村のお姉さんとの緊張はしばらく続いた――

「騒ぎに乗じて！」

「さやかちゃん参上！」

「助けにきたわよソラくん！」

――時に、それを見事にぶち壊してくれたよこの三姉妹と変態は！

「まさか天井から侵入するとはソラくんマジびっくり」

「どうしようほむらちゃん！ 見るからに高そうな天井壊しちゃった！」

「落ち着きなさいまどか。こういうときはソラのお小遣いから差し引けば全て解決よ」

「なるほど！」

「納得するな！ なんでオレ小遣い減らされるんだよ!？」

「まどかを泣かせるつもり？」

「真顔でグロツク17構えるなよ」

解せぬ。これ以上小遣い減らされたら、金欠どころじゃすまん。

「まあなんにせよ。お前ら今更来ても——」

そう言いかけたとき、オレの直感が危機を告げた。

すぐに神器を構えたが時すでに遅し。恭也さんがまどかを人質にとつた。

「心苦しいが……その武器を収めてもらおう」

チツ、見破られたか。この中で一番非力なのはまどかだ。

いくら殲滅力最強の神器使いでも彼女は物理的で殴り合うクロスレンジが苦手だ。

「はいはい、みんな神器を」

だけど甘いですよ恭也さん。ここにいる神器使いの中で一番役に立つ神器がある。

オレはそいつとアイコンタクトをとり、合図した。

カチリ

「やっぱ出してにおいて、警戒して頂戴」

その音が鳴り終わり、オレがそう言ったときには、まどかは既に恭也さんの手の中にはなく、まどかはほむらによってお姫様抱っこされていた。

「何をした!?!」

「ほむらが神器を使ってまどかを助けただけですよ」

「神器……だど？」

「魂を武器にした物。特殊な力がある武器です」

「……………」

「まだやるつもりですか？」

「……………いや、このまま戦えば明らかにこちらが不利だ。そうだろ忍？」

「ええ……………まさかこんな化け物染みた力があるなんて……………」

やや呆れ気味に戦意損失してくれたようだ。

「私達の秘密を喋らないほしい。これは警告であり、お願いよ」

「周りからしたらイタイイタイしい人と思われますから承りました。ちなみに夜の一族が吸

血鬼つてのも些かオーバーだと思いますしね」

「どういうことよ？」

どういうことって……………。

「本物にも会ったことありますよオレ」

「ええ!？」

「あ、私もあるよ」

「まどかと私が幻想卿に迷い混んだときにね」

「いやーあれはかわいい見た目で攻撃がめちやくちやエゲツなかったなあ」

そんな吸血鬼いたんだな。ポカーンとなぜか恭也さん達は呆然としていたが。

「んじや、帰るか」

オレ達はドコでもドアを展開してその場から去るのだった。

「見て見て。さっきのイケメンさんの技！」

「おお！ スッゲー！ ……………あれ？ どうしたのさやか」

「ものすごく……………頭が痛いです杏子先生……………ぐおお……………」

「さやかちゃんの規格外に開いた口が塞がらない」

恭也さんの技を一目見てコピるこいつやっぱ天才だよ。アホだけどね。

第二十話

やや曇り空な天気にて、オレはさやかと共に公園に向かい修行していた。

昨日覚えた『神速』という技をマスターするためだ。厳密には恭也さんからコピった技だけだ。

「あ、慣れた」

「規格外過ぎじゃね？ お前、前世でオレと剣の鍛練したときあつという間に追い付いたじゃん」

「天才完璧美少女さやかちゃんには不可能はない！」

「敢えて地雷へ突っ込む欠点さえなければね」

この前なんか体重のことでほむらと喧嘩したもんな。第二次ほむさや大戦は回避されたが、もうあれは勘弁してほしい。

「時間余ったね。どうしようかね〜？」

「チラチラたい焼き屋とオレを見んな……………」

わかってるって。オレはたい焼きが売られている屋台に足を運び、カスタードとアンコを二つずつ買った。

帰ってきたときにはさやかか知らない金髪オッドアイ少年に絡まれていた。

「貴様、おれ私の嫁になに話しかけている？」

「さやか、いつの間に結婚しちやったの？ お兄さんちよつとシヨック」

「んなわけないでしょ！ こいつがいきなり絡んできたのよ！」

そうなの？ てつきりそんな関係かと。

「あたしをなんだと思ってるのよ！」

「アホ」

「やっぱりかチクシヨウー！ てか、アホじゃないって言ってるでしょ!？」

「アホだからキュウベえに騙されたのにか？」

「うん……………そのせいで恭介取られちやって……………ああなんで契約しちやったのか
な私……………」

出た、鬱モードさやか。天真爛漫な彼女にとってこの話はトラウマである。タブーである。

ヤベー地雷踏んだ。

「貴様！ 私の嫁をなに落ち込ませてやがる!？」

「いやーまさか自分も地雷踏むとは思わなかったなあ……………失敗失敗」

「そのわりにはなんで笑顔!？」

「最近キチガイ姉妹にいじられる毎日でこんな愛玩生物いたら癒されるだろ普通」
 「動物!? 美樹さやかを愛玩動物扱い!?」

シユンツとなつたさやかはかわいいなあもう……………。

さてと、堪能したし。ちよつと真面目になるか……………。

「なんでお前がさやかの前世の名前知ってる?」

「貴様も転生者ならわかるはずだろ?」

「いっつ……まさか……………。」

オレが驚愕した顔になると偉そうな顔でオレと向き合う。

「そう我もまた転生者。名前は天道衛! そしてこの世界では——」

「さやかのストーリーカード!? 馬鹿な! こいつにストーリーカードついたことないのに!」

「オイイイイイいなに変な誤解してんだお前エエ!?」

「違ったの?」

「いやオレの中ではもうオリ主くん決まっているし、残るはストーリーカードと海蘊もずくしかいな

「い

「ちよつと待て! モブという役職は!? そしてなぜ海蘊もずくという役職が存在する!?!」

「さやかの親友兼泥棒猫さんにあつた役職を踏まえて」

「ワカメか!? ワカメことを言ってるよな!?!」

仁美のことも知ってるとはさすがさやかかのストーカー。マジ物知り。

「違うと言ってるだろう！ ストーカーから離れる！ 美樹さやかことはアニメ原作で知ってる！」

「ははは、なにを言ってるのだねボーイ。さやかがアニメの住人なわけあるかい」

「くそつ、もう許さん！」

なんかストーカーくんの背後から槍やら剣やら武器がたくさん出てきた。

「王の財宝の前にひれ伏せ！」

そして一斉に射出。一見逃げ場なしかと思われるが、バラバラなタイミングで発射されてきているため、僅かな隙間があるのでまだ回避できる。

というかこれと似たビームバージョンの神器使用と戦ったことある。

あのときは神器をマジでバットののように打ち返すしかなかったなあ。

そんなことを考えていたオレはヒラリヒラリと回避し、さやかかの方に近づく。

「バイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊す
……………ブツブツ」

トラウマでさやかに眠るバイオリン破壊症候群が再発したようだ。そんな彼女の耳元にオレは呟いた。

「あいつ、バイオリンたしなんているらしいよ」

「ブロークン・オブ・バイオリイイイイイイインツツッ！」

覚醒。

説明しよう。

さやかちゃんも過去のトラウマにより発症したバイオリン破壊症候群でバーサーカーと化し、バイオリンをたしなむ者及び持つ者を殲滅する能力があるのだ！

つまるところ……………計画通り。ニヤリッ。

「グルアアアアア！」

「なにイイイイイ全ての王の財宝を掴んで投げ返しているだっ!？」

「ユルサンゾオオオオオ！」

「み、見えなくなっ——くペ!？」

さやかがストーカーくんの背後を取り、背中に飛び膝蹴りを決めた。

こっかばつぐんだ！

「おのれ……………このオリ主である我が……………我が……………」

「うーん、このまま帰すのもなんか厄介そうだし。よし、いきなり襲ったお前さんには罰を与えよう」

オレはニコニコしながら神器でストーカーくんの身体に差し込む。

グツと苦痛に苦しむがそのまま神器を回して、ガチャリと閉じた。

「お前の………王の財宝だっけ？ あれと残りものも使えなくしたから」
「な、なんだと!? くそつ、ホントかよ!」

ストーカーくんはオレの胸ぐらを掴んで抗議してきた。

「さっさと解除しろ! でないと——」

「でないと………どうする?」

オレは手でゆっくりとストーカーくんの掴む指を一本一本服から離していく。

「今のお前はなにもないただの人間だろ? そしてもう特別でもない」

「っ……………!?!」

「しかもモブとたいして変わらない、一般人とたいして変わらないただの普通の子ども。そんな子どもが能力を封印した化け物を脅すなんて……………随分無謀で勇敢だねえ」

ニタリと笑ってやるとストーカーくんは尻餅ついて後ずさる。ブルブル怯えた彼にオレはさらに追い撃ちをかけるつもりで、神器の剣先を彼に向けた。

「これって封印だけでなく、肉体から魂を切り離せることもできるんだぜ? つまりリアルな幽体離脱ができるんだぜ?」

「あ、あああ……………」

「んじゃ、一回——シンデミル?」

「うああああああああああ!!」

恐怖に歪んだストーリーカーくんはオレから逃げ去った。別に殺すつもりは最初からないので追わない。

転生者とはいえ、あれはトラウマは確実だな。本物の化け物と出会って改心することを祈ってやろう。

「グルルル、おのれ……………バイオリンめ……………あたしから初恋奪ったバイオリンめ……………」

とりあえずこのパーサーカーを止めるか。ちなみにアンコとカスタードのたい焼きを食わせたら元に戻ったけど。

☆☆☆

本日は晴れなり。夏休み前の初夏にダルそうに学校に来たオレはボーと空を眺める。クローラーがガンガン効いていたことに密かに喜んだりする。

ちなみに昨日出会ったストーリーカーくんもとい天道衛くんは今日は休みらしい。女子には人気らしかったのがっかりしていたと杏子は語る。

あいつ、どっかで見えたような……………ま、いつか。

今はこのユートピアを楽しもう。あークーラー気持ちええー。

「ソラ、海にいくわよ」

「唐突すぎますな、ほむらさんや」

「そう、私の名前は朱美ほむら」

「また始まった……………」

「唐突と理不尽という名の元にソラを生き埋めにするお茶目な女の子」

「お茶目という次元じゃねえだろそれ!？」

「好きな人ほどこいじめたい乙女心よ」

「お前の乙女心は重すぎる!」

いつも通りなオレ達である。ということで明日は夏休みである。

海に行くことになった。

さしてきて、どうなることやら。

「まどかがアダルティなビキニに挑戦させようかしら」

「よろしい説教だ」

ほんっといつも通りだなオレ達って。

閑話 とある転生者の改心劇

我^{おれ}………いや我^{われ}の名前は天道衛。転生者だ。

神のミスというテンプレな転生をした。いやあの老人はワザとそうしたと言っている。
たな。

あの神は死んで代わりに女神という上級神がこの世界に管理しているらしいが今はどうでもいいか。

とにかく我は最強の特典とニコポ、ナデポという特典をもらい、髪も派手にしてもらい、リリカルなのはの世界に転生した。

既になのはとフェイトは病院に入院している間に、モブ………いや天宮草太か。それによって恋人という関係をとられてしまい、当初予定していたハーレム計画が遅れてしまった。まだニコポとナデポがあるから大丈夫、そう信じていた。

しかし、二日前に起きたヤツのせいでは我は全て失った。

美樹さやか^の恋人である。上条恭介ではなく、銀髪で青目の男である。

美樹さやかがこの世界にいるとは思えなかったが、特典で彼女をモノにしようと近づいたが、ヤツが現れて、我をストーリーカーと見るわ、美樹をキャラ崩壊というか暴走させ

るわで敗北した。

今思えばカオスである。さらにヤツは私の特典を封印まではしたのだ。私はそれに怒りを覚えた。

しかし、ヤツは悪びれることもなく、恐れることなく、我を『ただの人間』と断言した。

特別じゃなくなった？

ただの人間………だと？

それじゃあもうオリ主ではないのか我は………？

そう思うとさらに自分のことを化け物と宣言した。

考えてみてほしい。

特別をも剥奪する未知なる力に恐怖を覚えぬ者はいないだろうか？

私は恐怖した。目の前にいる化け物は我に剣先を向けた。

「一回——シンデミル？」

私は逃げ出した。惨めに、情けない姿で。

もう会いたくない。怖い。誰か助けて！

私は恐怖に支配された心で家に閉じ籠り、翌日。学校も休んだ。

もう我はなのはを、フェイトを、アリサやすずかを嫁とは言えない………。

——なぜから、もう特別じゃないから

☆☆☆

数日後、我は学校をサボり交差点に来ていた。

もう死のう……………。特別じゃない我はもう生きる価値も未練もない……………。

そう思い、信号機が赤になったところで横断歩道を歩き出そうとした。

「アホなことやめんかい！」

関西弁の少女が我の袖を掴んで止める。少女は車椅子を乗っているため、足が不自由だと思った。

「離してくれ……………特別じゃない我はもうこの世界に必要とされないんだ……………」

「だからって死ぬんか!? ふざけんなや! そないなことで死んで悲しむ人がおるで!?!」

悲しむ人……………か。

「我にはいない、そんな人……………」

「えつ……………?」

「我の家族はな……………両親が既に離婚して、引き取った父親も女遊びばかりするクズ

みたいな男だったんだ……………。おかげでクラスからいじめられるわ、借金で働かされるわで散々だった……………」

なんで前世の話をこの少女に話しているのだろうか？

でもまあ、事実だ。今も両親はいない。いなくてもトラウマで甘えることはしなかつたと思う。

「親戚に引き取られた後も、身内から疎まれて、引きこもった。だけど、そのときに見たゲームで我は感動した」

そう、ありきたりな物語だったが、ヒロイン達と共に戦い、そして悪を滅ぼす姿が憧れた。

いつかそうなりたいと夢を見ながらも一度がんばった。

結局、交通事故で死んで転生したが。

「転生した後、この世界で我はそうなるような能力をもらった。ああ……………そうだ。そうだった……………我は……………」

——誰かのヒーローになりたかつたんだ

そう呟いて理解した。

モテモテじゃなくていい。

お金持ちじゃなくてもいい。

家族がいなくてもいい。

誰かに見てほしかったんだ。

誰かに認めてほしかったんだ。

誰かに理解してほしかったのだ。

ただ純粹になりたかったんだ。そんなヒーローに……………。

「だけど……………特別じゃない我はもう——」

「……………れるやん」

「？」

「ヒーローになれる！」

関西弁の少女は我の手を握りしめる。柔らかく暖かい手だ。

「ヒーローはな、特別じゃなくてええねん。無力でええねん。その人の心が救われたな

らソイツはヒーローやねん！」

「でも……………だけど……………」

「誤解してるねん君は。ヒーローは完全無敵じゃなくてもええねん。人間でも、普通の

人でもヒーローにはなれるねん!!」

「あ……………」

前世で言っていたヒロインの言葉と同じだ——

その言葉を聞いて我は、絶望の淵から戻りたくなかった。

「我には……………もう力がないぞ」

「力がなくても大丈夫。守れることができる」

「我には……………悲しんでくれる人はもういない」

「なら私が悲しんだら。思いつきり泣いてやるで」

「我は……………我は……………」

「うん……………うん……………」

——生きて……………いいのか？

そう呟くと彼女は太陽のような笑顔で、

「もちろんや」

彼女の言葉が我を救ってくれた。もう絶望しない。

我の心は救われたのだ——彼女というヒーローに。

——何か成さなくてもいい。

——何も力がなくてもいい。

——誰かを救う意思と根性——そして優しい心があればヒーローになれるんだよ。

かつて、前世で両親が離婚する前に出会った同級生が言っていた言葉を思い出しながら彼女に頭を撫でられた我は久方ぶりに泣いた。

☆☆☆

こうして我は生きる決意とヒーローになる決意を胸に、慢心して怠った身体を一から鍛え直した。

特典も女神によって変えてもらった。

ダライラマ球体はすばらしい。短時間で鍛えられる。

「あ、おかえり衛くん」

「ただいま——はやて」

そう我を助けてくれたのは少女と一緒に過ごしている。今度は我が彼を守るために。

「お疲れさま。今日はどないやった？」

「やはり師か誰か見てもらう人がいないといまいちというところだ」

「うーん、ごめんなー。私の知り合いの中にはいないで」

「わかっているさ。君にここで住まわせてくらしいの贅沢を味わっているんだ。これ以上の贅沢はいらないさ」

「ほほう、この美少女と共に住むことがうれしいと?」

「そうだが?」

自分で言っておいて顔を紅くするはやて。ああ、幸せだ。

こんな幸せいつまでも続いてほしい。

「そういえばアイツも転生してるかな?」

なあお前も元気にしてるか? 我が友——

——
一ノ瀬ソラよ。

第二十一話

海——それは母なる地球が七割を占める青き世界の源である。

青い空、白い雲、そして——水着のお姉さま。

すばらしい。絶好の海日和である。

今こそ、オレの双眼鏡が火を吹くときなり！

「オイこら。ここに美少女達がいるのに他に目移りするな」

「ああ！ オレの双眼鏡が！」

おのれ、さやか。セパレートな青の水着で我輩の娯楽を消すか。

「だが許す。かわいいし」

「よろしい。さあもつと見てちようだいな。そしてメロメロになりなさい！」

「あ、ごめん。あと六年くらい経ってからメロメロになるわ。子ども体型に欲情できないから」

「解せぬ」

いや悔しがってもらってもねえー……………。

オレってロリコンじゃねえし、欲情したらしたらで大問題だし。

あと子どものオレってまだまだ欲情という言葉は程遠い。思春期になってからの話だそれは。

「おいおい、なんでさやかか落ち込んでるんだ？」

「自分の不甲斐なさに愕然としているのさ、杏子さんや。にしても……………」

「な、なんだよ？」

「お前もお前でいいな」

「なっ!？」

杏子の水着もすばらしい。赤を基調とした競泳用の水着である。

恥ずかしがるその姿がその魅力を更に引き出す。

「あ、あう……………」

「なにこのかわいい生き物。千香、写真」

「富竹フラッシュユ！」

「どっから出てきやがった!?! ていうか撮るな!」

スクール水着を着た千香が杏子の萌え写真を撮る。それを取り替えそうと必死になる杏子だが、また撮られて吠える。

威嚇発動。

しかし、哀れなことにその姿もまた千香にとって格好の撮影対象である。

「千香の水着、あれってワザとか？ ご丁寧に『あまがせ ちか』とひらがなで書かれてるっ」

「くっ、さすが千香ちゃん！ 私のポジションやすやすとるなんて！」

「せっかくの水着だが、まどかよ。今の発言で台無し」

かわいいピンクのフリフリ水着だが、残念発言で台無しである。

一緒に来たほむらは黒のセパレートでスリムさを表現している水着だ。

そしてマミさんはやはり黄色のビキニ水着。同年代と比べると少し大きな胸にオレもタジタジである。

「なに鼻の下を伸ばしているのかしら」

「いひやいでふ、ほむらしゃん」

「なら、私に向かってその美しさを。まどかにはかわいさを称えた発言しなさい」

「鼻血が……………出そうです先生」

「よろしい」

「よろしくないと思うんだけど！ ってなんでほんとに鼻血が出るの!?!」

「さつき食ったチョコレートで」

最近、まどかがツッコミ役に戻ってくれてうれしい今日この頃。

これでオレの苦勞と負担が減ってくれるとうれしいなと思うのだった。

☆☆☆

ビーチバレーとは一種の遊びである。ビニールでできたボールをバレーと同じく地面に着けば負け。

顔を狙うラフプレーも許されている。

「どおりやアアアア!!」

「ヒデブツ!」

その今まさに中学生らしき男子が杏子にラフプレーされている。

杏子さん、ビニールで出来てるよねそれ? ズゴオンって音が顔面からしたよね今。

「トシオクウウウウん!」

「あのアマもう許さねえ! 美少女だからって顔面ばかり狙ってくるなんて————興奮するじゃないか! さあ今度はオイラにカムヒア!」

「山崎!! お前そんな性癖だったの!」

オレが昼飯を買い出しに行ってる間になんか六人娘が中学生の不良共にナンパされていたようで、デートをかけた勝負をしているらしい。ちなみに五対零で圧勝中。

「マミ! 確か、バレーって相手を全滅する競技だったよな?」

「全然違うわよ!？」

「友江杏子、そうよ。ビーチバレーとは相手を殲滅するのが真骨頂。さあ、薙ぎ払いなさい全てを！」

「ほむらさんも乗せないで！ バレーってそんな物騒なスポーツじゃないから！」

時既に遅し。杏子のサーブが不良中学生Aをぶっ飛ばした。いやー人って綺麗に飛ばなあー。

「見てまどか！ 人がゴミのようだよ！」

「遊んでないで止めてよ千香ちゃん！」

「バルス！」

「ぐあアアアア目が目がアアアア!？」

「さやかちゃん、ノリで千香ちゃんの目に海水をぶつけないで！」

まどかとさやかと千香がミニコントをしていることを尻目にオレは青空を見ることにした。

現実逃避？ 違うね。俗世から逃れたいのさ。

閑話休題

そんなカオスな展開後の昼食を食べたあと、オレと杏子は海にポツカリ浮かぶ岩まで競争していた。

他のみんなは水かけやら、写真を撮るやら忙しい。なので対戦相手は杏子オンリー。勝負の結果は敗北。

あと少しで勝てたことにちよつと悔しい。

「はあはあ……速い………」

「伊達に魔法少女やってねえからな♪」

「関係ないと思うが………」

這いつくばったオレを見下ろす彼女は優越感に浸る笑顔をしていた。うぐ………
悔しいなあホント。

「………なあソラ」

「なんだよ………今ホントに疲れてるんだから」

「いや別にそのままでもいいからさ。聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと？」と聞き返すと杏子は少し不安そうな表情をしていた。

「たまに、さ。こんな幸せいつまでも続くのかなって思っちゃうんだ。アタシ達って何気なく悲劇的なことばかりあったからさあ」

「………そうだったな」

前世の杏子の両親もその悲劇の一部である。信じていた自分の願いを否定されるような形で彼女の両親は自殺した。

「あのときの杏子って素行悪かったな。今は丸々してるけど」

「う、うっせえな！ 別にいいだろそんなこと。とにかく、たまに不安になるんだ。また誰かがいなくなるのかなって……………」

顔を下に向けた杏子の表情は見えない。けれど、迷子になった子どものような顔をしていると思えた。

そんな彼女の手を握った。

「大丈夫。オレはいなくならない」

「ソラ……………」

「オレは死なないし、どこかにいかない。いなくならない。約束する。だからさ——」

——いつものように笑ってくれ

一息ついてオレの願いが口に出た。杏子だけでなくみんなに対してでもある願い。

オレはもう見失いたくないゆえの願望だ。

杏子はオレの目を見ずに握った手だけを見ている。その顔は紅く染まっていた。
「照れてるのか？」

「ばっ、そんなわけないじゃない！」

「わーお、怒った杏子たんかわいいー♪」

「て、テメー！」

手を上げながらオレを追いかけてきたのでオレは海へダイブして逃走開始。

「はっはっはっ！ さあ、ここまでおいでよハニー！ 私を捕まえてごらん？」

「絶対許さねえ！ ボコボコにしてやるから待ちやがれエエエエ！」

顔を真っ赤にした杏子はオレを追いかける。

辛気くさい雰囲気はもはやそこにはなく、あるのは友達とじゃれ合う二人の男女のみだった。

「おのれ、私を差し置いて杏子ちゃんとラブコメしちゃったって……………」

「まどか、協力するわ。さあ、駄犬にお仕置きの時間よ」

「お姉ちゃんを無視して杏子さんと遊ぶなんて……………ふふ、悪い弟ね……………」

鬼ごっこが終わったら、そこにいたのは本物の鬼だった。

その後にリアル鬼ごっこが始まったのは言うまでもない。

第二十二話

夏休みは終わって始業式。展開が早い？

いやだって、あんま話すことないじゃん。主に馬鹿やらかしたのは千香とかだし。宿題もみんな協力で終わらした。

杏子ときやかかが全く手をつけてなくてオレが徹夜するはめになったがな。

そのときぶちギレて涙目になった二人は忘れない。

そして、季節は秋。紅葉が舞うこの季節にはいろいろな催しがある。

食欲の秋、読書の秋、それから――

「第四十六回！ 聖伴小学校運動会の幕開けです！ 司会は私、三年四組の早乙女和子

とー」

「事嶺儀礼だ」
ことみねぎらい

「ハイそんな事嶺さん、今日みなさんに一言お願いしますー！」

「なるべく物品と施設を壊さないでほしい。あとなるべく安全に競技を行ってほしいものです。ぶつちやけ事後処理がめんどういです」

「はい、リアルで生々しい大人の事情を知って士気が高くなったところで最初の競技に移ります！ ゆけ、若人達!!」

士気高くならねえからなそれ。つーか、早乙女先生テンション高いな。

何か良いことであつたのかい？

「なんか彼氏できたみたいだよ」

「どうせ別れるだろ」

「何気なくひどいわね、まどかとソラ」

ちなみに通算二十の失敗例があつたりする。

早乙女先生の失敗談のせいで大半の女子生徒が男性恐怖症になつたりしないよな？

閑話休題

競技を終わらせ、前半の最後の競技である騎馬戦となつた。その代理としてオレは参加することになった。

まさか中沢くんが怪我して欠場というアクシデントが起こるとはな。

おのれ、石ころ。たった一つで中沢くんを戦闘不能にさせるとは。

「はっはっはっ！ 現れたわねソラ！ ここで雌雄を決してやるわ！」

「テンション高いな、さやか」

「ぶっ潰してやる！」

「お前は単純に怖いよ杏子」

やる気と殺る気満々な彼女達を尻目に馬役である名も知らない彼らに激励をかける。

「とりあえずあいつらに遭遇しないよおー頼むわ」

「俺らタクシーじゃねえよ！」

「ちなみに遭遇したらいけに——じゃなかった。緊急脱出するから各自備えてろ

よ」

「いま生け贄って言ったよな!？」

「さあ、なんのことやら？」

ピストルが鳴り、競技が始まった。

最初に襲ってきたのは名も知らない別クラスのとある少年。そいつが帽子をとろうする。

これを取られたら当然負けが確定する。

オレはそいつの手を掴み、こちらに引っ張る形で馬ごと崩した。

「死ねや！ 優男オオオオオ！」

「うぎやアアアア！」

どこからか凶悪な掛け声に思わず反応するオレ。

あ、オリ主くんが杏子の凶手に倒れたんだ。思いつきり殺意が込められてた拳だったと思う。

何がそんなに気に入らないのかは少しわかってたりはする。

杏子つて口先だけのヤツは嫌いだしな。

高町も心配するような声をあげるが、さやかは心配して気を取られた月村とバニングスを倒した。

ヤバイ。杏子とさやか以外は倒せたけど、残りはオレを含めた三人しかいない。

「あとはテメーだけだぜソラ？」

「ふっふっふっ、この美少女コンビに勝てるかな？」

「自分で美少女とか恥ずかしくない」

「……………ちよっぴり恥ずかしい」

じゃあ言うなよ。

つて、杏子め。予想通りにオレの馬は崩された。

確か地についたら負けだよな？

やれやれ……………。

「なっ!?!」

誰かが驚愕した声を出した。

そりやそうだ。

オレは他の騎馬戦選手の騎馬に飛び乗ったからな。

「くらえや!」

「甘い!」

オレが乗ってた騎馬戦選手は崩されたが、杏子の騎馬を崩すことができた。

オレは最後の一人のところへ飛び乗った。

杏子もまたさやかかの騎馬に飛び乗ったようだ。

「ワリーさやか。助かった」

「いいって。でもさすがソラだね。ジャングルファイトが強いだけある」

「アイツのエキスパートだからな」

さやかと杏子の二人は体勢を立て直したか。

そして、周りが静かになる。緊張が周りを支配する。

冷や汗が落ちた————
刹那、動き出した。

「はアアアアア!」

「どりやアアアアア！」

オレと杏子は同時に飛び出し、帽子を奪った。

「チツ、引き分けか」

「さすが杏子だな。ギリギリだったぞ」

「アタシもさ。良い勝負だったぜ♪」

オレ達は握手してお互いの健闘を称えあつた。周りの歓声が一斉に沸き上がる。

「スツゲー歓声」

「ああ……………」

「そりやそうだろ。あんだけ動きまわつたらな」

体育教師の円山先生が拍手しながらやってきた。

「お前らの戦いは素晴らしかった。小学生とは思えないくらいの働きを見せてくれた。

だから——失格」

「は？」

先生の一言に歓声も静まった。

「いやなんでって顔をされてもルールには殴る蹴るもしくは他人の馬に乗ることを禁ずるって書いてあるからな」

マジで……………？ オレと観客達はガックリしている中、杏子は挙手。

「先生、それじゃあ屋上で決着つけていいですか！ アタシの熱いハートが冷めてない！」

「冷めろ。頼むから」

「お前まだ元気だな……………。ちなみに騎馬戦はうちが負けた。」

「先にさやかからやればよかったなあ……………。」

第二十三話

少し太陽が隠れた天気の中で、昼食を終わらせてから後半戦。

白熱したリレー戦が終わり、借り物障害物競争という種目が始まるうとしている。

借り物競争と障害物リレーを混ぜた競技である。

「ちなみに封筒に入っているお題の変更は無理です。何か質問は？」

「先生ーなんであそこにも危ないですと言えそうな刺が生えているのですか？」

「レプリカです。リアルではありませんが死ぬほど痛い罠なので綱をしっかり渡ってください」

「そんな罠しかけるなよ！」

思わずツッコんだオレは悪くないと思う。

なんだこの配管工事のオッサンが挑むステージは?!

しかも最後の坂道なんかヌルヌルテカテカしたもので濡れているんだけど!? なに

これ、どこの芸能界!?

「まどか、あなたこの競技参加するのかしら？」

「ううん。ローションが出ると聞いてやめた。ヌルテカちよつと苦手だから」

「シヨボーン……………」

「でもソラくん出るよ！」

「さあソラ！ その濡れた姿を私達に見せてちょうだい！」

「見せるつもりないし、カメラ構えるな！」

ほむらは一体何を撮るつもりだったんだ？ つーか千香も準備するな。

そう思いながらオレはスタートラインに立った。ピストルの合図で一斉に走り出す。

そこそこな速さで走って封筒を手にした。

「さてとお題は？」

以下がお題。

『やあやあ、この封筒を開けたというラツキーボーイは君だね？ 君は運がよい。思えば私の伝説が始まったのは十二世紀……………いや十六世紀だったかな？ とにかく私は』

うん、これは……………はつきり言おう。

「うつつぜエエエエ！ お題読むのにどんだけ時間かけるんだよ!？」

他のヤツもそうだし！ ええい、二枚あるからさっさと二枚目を読む！

『ギャルのパンティー』

「誰だアアアアこれ書いたバカはアアアアア!?」

「ちなみに今回封筒のお題を考えてくれたのは天ヶ瀬千香くんだ」

「千香テメエエエエ!!」

テヘツと茶目つ気ありありな顔で目を逸らす千香。

あとであいつ絶対シバく!

くつ、とにかくギャルのパンティーを誰かにお願いしないと。

「だ、誰か……………その……………女性の中に……………えつと」

言えるかアアアア!! 公衆面前で言えるもんじゃねエエエエ!

ガク……………もう駄目だ。こんなのオレにはできないよ……………。

オレは膝について愕然としていると誰かが肩を叩いて励ましてくれた。その人は――

「お困りみたいね」

「ま、ママさん……………」

「お姉ちゃんが力を貸してあげるから元気出して♪」

微笑を浮かべて、彼女が励ましてくれる。

「でも……………これは！」

「ソラくんが何に苦しんでいるかわからない。けれどお姉ちゃんはソラくんの味方だから。どんなソラくんでも受け入れるから、ほら。言ってみてちょうだい♪」

「ま、マミさん……………」

勇気が出た。希望が沸いた。あとは根性を見せるだけ！

「マミさん、お願いします」

「はい、なんでしよう？」

「その……………あの——」

——い、一緒に来てくれませんか？

オレが出せたお願いはこれが最高である。

いや普通に下着貸してって言ったら、変態じゃん。

☆☆☆

「ぎやアアアア！」

「マアアアアア！」

綱渡りの障害を乗り越えたが、オレの後ろには未だに阿鼻叫喚な世界がある。

よく乗り越えたと言いたいオレである。

スネちやまいた気がする？ ああさつき落ちたヤツね。

どうでもいいだろ。

「んで最後の関門のローション坂道か」

「なんで最初は普通なのに、最後の二つの関門だけハードなのかしら？」

いや、ママさんのツツコミ通りだけどき、中間もかなりしんどかったよね？

なんで配管工から巨大な食虫植物が出てくんだよ。

まあ、それはさておき。これに乗れれば勝利はない。

「だけど、越えられないことはないけど」

「へ？」

オレはママさんをお姫さま抱っこして坂道を飛び越えた。あまり長くなくて助かった。

「そ、ソラクくん、降ろして！ は、恥ずかしいわ！」

「無理。拒否。とつと行かないと杏子が来やがる」

振り返るとそこにはカツラを手にした杏子がいた。

「追い付いたぞソラ！」

「くっ、ヤバいな！ ……………ていうかそのカツラ誰のだ？」

「教頭先生から拝借したぜ！」

「だから泣いてるのね教頭先生……………」

マミさんの言う通り、三角座りでさめざめ泣いてる教頭先生いと哀れ。

とりあえず忘れてやるのが優しさだ。

「この勝負もらった！」

「オレを足で勝とうなど笑止千万。小学校の頃の疾風の異名を見せちやる！」

「お前いまも小学生だろ!？」

杏子にツッコまれた。

だよなー。そうこうしているうちにラストスパートである。

最後の全力疾走である。

「うオオオオオ！」

「どりやアアアアア！」

そしてゴール。勝ったのは――

——オレだ。

「はえーなソラ……………はあはあ」

「伊達に駆け抜けてないからな」

「いい加減降ろしてくれないかしら。……………ものすごく恥ずかしい」

「ママさん真つ赤になった顔を覆い隠している。そんな萌え萌えなママさんに千香のカメラが光を出す。」

「歓声はやはりすごい。特に女子の。やはりママさんのお姫さま抱っこが原因かもな。」

「次は勝つ」

「望むところだ」

「オレと杏子。親友であり、悪友であり、ライバル関係のようなオレ達。」

「そんなオレ達はニシシと笑い合うのだった——」

「ソラくーん？ 帰ったらちよつとお話しよーねー？」

「……………」

まどかは死刑宣告を、ほむらが重火器を並べて帰りを待つていた。

「解せぬ……………」

思わず空を見上げる。改めて、オレは今の光景を見て、思う。

千香に写真を撮られて、ついに恥ずかしくなって逃げ出すママさん。

腹減ったとぼやく杏子。サクサクとチョコ棒を食うさやか。

良い笑顔で待ち迎えるまどかとほむら。

うん、いつも通りに――

「カオスだなオイ……………」

その感想は騒がしい雰囲気の中に消えていった。

番外編その五

マミの追憶

彼と最初に出会ったのはまだかさんに絡んできたところだったかしら。

まあ小さな子どもとは言え、強引そうだったので私ときやかさんと一緒に撃退したわ。

そしていつものように二人の少女を魔女体験ツアーに参加させたわね。まだかさんに励まされた私はそのとき、心の余裕ができていたため油断していた。

お菓子の魔女の脱皮と唐突の噛みつきにはさすがの私も死を覚悟した。

「アベン死マリアアアアアア!!」

テンション高めに魔女にドロップキックされて助けられた私は思わず、悲鳴を上げたのは悪くないと思う。

いろんな意味で新しすぎて私とまだかさんときやかさんは呆然とした。

そのとき現れたほむらさんは手で覆い隠して呆れていた辺り、彼の独断と暴走だった

みたい。

「んじや、正義の味方のソラくんのヒーローショーにご賞味あれ！」

悪ふざけしているように見えたので注意しようとしたわ。けど、彼の手には黒いカギのような剣が握られていた。

キュウベえ曰く、理解できない力らしい。

お菓子の魔女はソラくんと戦い、そしてソラくんはお菓子の魔女の口に飛び込んだ。

まどかさんは悲鳴をあげた。

当然だ。小さな子どもが目の前で食べられたのだから。

魔女は新たな獲物を探そうとしたとき、急に苦しみ出した。

遂には倒れてしまい、魔女の腹が盛り上がり、そして出てきたのは——ソラくんだった。

「うえーヌルヌルしてキモい……。ほむらー後でシャワー貸してよ」
「貸してあげるけど、自分がしたことを少し考えて……。」

そのとき見たほむらさんのゲンナリした顔は忘れられないわ。

だって、正義の味方を自称する少年が腹からぶち抜いて魔女を倒すなんてドン引きレ

ベルよ、もう。

それが彼との本格的の出会い。

寝泊まりをどこにするか彼に聞いてみたが公園で寝るとか言い出したのは驚いた。いくら慣れてるとは言え、さすがに心苦しいと思ったので、私は彼を引き取ることにしたわ。

料理を喜んで食べていたし、寝顔がかわいくてもうつつ最高だったわ！ 写真にとりたいくらいだったわ！

彼は私のことを間違って「お姉ちゃん」って呼んだときにした恥ずかしそうな顔はエクスレント!!

お持ち帰りしたいレベルだったわ！

まあ、弟ができたみたいだったのでともかわいがったわ。

その後、いろいろあつて杏子さんと仲直りして、さやかさんの魔女化から救ったわ。

彼の本当の親のやり取りを見たとき、私は胸が締め付けられた。生きているのに、彼という存在が否定されたかのように見えた。

だから私は積極的に彼に関わることにした。

ワルプルギスとの戦いはなんとか勝利したけど、抑止の存在に私は殺された。

そして改変された世界でまどかさんのことを忘れたまま、生きていき、ほむらさんに

改変された世界では自分が魔法少女だったことも忘れた。

元々、憧れだった普通の少女のままで生きていくことになったのだ。

けれど、初めてまどかさんと出会ったとき全てを思い出した。

そしてソラくんは死んだんだと知った。

カツコよくなった彼に気づいてもえなくて拗ねられたこともあったが、再会してしばらく経って亡くなっていたなんて……………。

私のソウルジェムはとても濁り出していた。けれど、そのとき思い出したことがある。

まだ子どもの頃だった彼が私が魔法少女の真実に絶望したときの話だ。

私はまどかさん達の励ましの言葉を聞けず、引きこもった。そのとき彼は言ったのだ。

「مامィさん、立ってください。あなたにはまだ足があるんだ。生きるだけの力があるんだ。前だけを見て歩いて生きてください。オレはお姉ちゃんみたいな人が魔女になって死ぬことは見たくないです……………」

生きる気力が沸いた。彼に必要とされている。それが私の生きる理由だった。

けど、その彼は死んだ。絶望した。
けれど、だからこそ、私自身に問う。

——私は何のために生きる？

答えは簡単だ。

彼が守ろうとしたもののために戦う！

気力が沸いてきた。濁っていたソウルジエムが輝きを取り戻した。

私は彼のお姉ちゃんだ。だから、私は彼の遺志を守る。

それがお姉ちゃんの役割だから。

AS編 災難の次は受難
第二十四話

やや夕暮れのくもりな天気。

秋の季節から冬の季節に近づいた今日この頃。

空は雲で太陽が隠れり、出てきたりと繰り返す晴れである。

オレは最近買ったコタツの装飾品もとい食料であるミカン箱を買いに行っていた。

やはりジャンケンに弱いなオレ。

「そして世界はモノクロである。いやモノクロじゃなくて若干ピンク？ どうしよう、淫乱空間に迷い込んだっぼい」

実況しても状況は変わらなさそうだし、とりあえず歩いてみる。

ふと、背後に気配を感じて振り返る。そこにはポニーテールなお姉さまと赤毛おさげがいた。

「お前には悪いが魔力を奪わさせてもらおう」

魔力泥棒ってヤツか？ これが最近の犯罪なのか？

まあいい。とりあえず

「変態がいるー!?! 誰か助けてー! シヨタを狙う痴女とロリがいるー!」

「誰が痴女だ!」

「誰がロリだとこの野郎!?!」

憤慨している彼女達。

やっぱり助けは来ないか。近所のおばさま辺りも来ないとか薄情な住居区である。

そういえばこれどっかで見たことあると思えば、もしかして魔女結界みたいなもんか?
?

とにかく青の国家公務員にスマホ、スマホつと。

ドコオンツ

とつさにさがるといきなり赤毛ロリのハンマーが目の前に下ろされる。

危ないなコノヤロー。

「仲間に連絡はとらせねえよ！」

「国家公務員は仲間じゃないよ。ってああ！ ミカン箱が……………」

見事に果汁が散つてペチャンコ。ヤベー置いて回避するじゃなかった。

「何しやがる赤毛ロリ。お前のせいで定価345円のミカン箱が台無しじゃねえか」

「誰がロリだ！ 馬鹿にしてるのかてめえ?!」

なんかどつかで聞いたことあると思えば杏子みたいな口調してるなコイツ。

オレはその場を右へ飛ぶ。さつきいたところにポニーテールなお姉さまが斬りかかる。

「バリアジャケットを纏わないのか？」

「なにそれ？ そんな防具服っぽいのがあったら戦時中に使いたかつたんだけど」

「こいつ管理局じゃないみてーだな」

あんなキチガイ組織と同じにされるとは侵害な。

とりあえず味方を呼ぶために、召喚術発動！

魔法陣が地面から浮かび上がる。

「転移魔法?! いや……………違う！」

「見たことねー魔法陣だな」

彼女達はオレの召喚術に驚いている。見たことないってことはオレと同じ神器使

いつてわけではなさそうだ。

「これは召喚術。異世界の住人や神器を魔力の塊で具現化させる魔法さ。まあ、この住人を召喚するから転移になるけど」

「馬鹿な………シヤマルの結界をも無視する転移魔法だ?!」

おー出てくる出てくる。魔法陣から現れたのは――

「ハアーイ♪ 正義の変態 千香ちゃん召喚! 月に変わって、お仕置きよん!!」

「なんでお前だアアアア!」

「イナバ!」

思わず召喚されたお面つけた変態にドロップキックをくらわした。

ゴロゴロ転がってそれから復活した。

「杏子かマミさん辺りの武道派ベテラン組を呼んだつもりなのになんでお前だよ!? 盾

専門はお呼びじゃねえよ!」

「ふっふっふっ、ソラの近くにロリと巨乳の反応を感じたから変わってもらったんだよ

！」

「どんな索的能力だよ!? チエンジだ!」

「断る! 現にたわわに実ったお姉さまと着せ替え人形にしたいロリっ子が目の前にいるじゃない! 揉んでいじって写真撮るまでボクは帰らない!」

「敵だぞコイツら!?!」

「敵だろうと味方だろうとセクハラする——それが千香ちゃんクオリティ!!」

「帰れ変態! そして色んな意味で帰ってこい過去の千香!」

元々クールで人形みたい少女だったのに、師が師だったので今の変態ドM少女になっ
てしまった。

頼む……………あのときの千香、帰ってきてホント。

「てめえら、アタシ達を無視してるんじゃねえよ!!」

「うっせえロリ! 今この変態に説教してるんだ。しばらく黙ってる!」

「むしろ説教という名のお仕置きをお願い! 調教バツチこい!」

「シリアス展開のときは自重しろ変態!」

「うがアアアア! 無視してんじゃねエエエエ!」

赤毛ロリがハンマーから葉莖を射出させる。

すると、ハンマーが変形させ、ロケットの噴出のような勢いでオレ達に向けて降り下

ろした。

「ラケーテン・ハンマアアアア！」

砂煙が舞う。赤毛ロリは直撃した手応えありとニヤリと笑っていた。

——だが残念。物理と魔法は千香の前では無意味である。

「な、なんだこの防壁!? アタシのラケーテン・ハンマーを防いだ!？」

「この程度の衝撃で壊せるほどボクの神器は弱くないよー♪ ね? ソラ」

「まあな」

千香が神器で創ったシールドで防いだ直後。オレは赤毛ロリの背後にいたポニーテールの女性に斬りかかる。

「くっ!」

「おらよつと」

「っ!」

剣で防いだ彼女を飛ばしてオレはもう一度召喚術を使う。

「させん!」

女性はオレの召喚術を妨害しようと接近してきた。さすがに止めに来るか。

かと言ってオレは止めない。なぜなら、あいつがいるから。
「なっ!!」 ヴィータの攻撃を防いだ防壁か!」

ポニーテールの女性を球体の防壁に、その進行を阻んだ。

ご名答。千香の神器は何も攻撃を防ぐためのものではない。
敵を拘束する檻にもなる。

それが『守護神の壁』の応用した使い方である。

再び地面から魔法陣が展開される。喚ぶのはオレが知る最高の剣士。騎士には剣士ってな。

「つーわけで来い——最高の剣士様!」

魔法陣から現れたのは青い短髪。いつも家で着ているラフな冬の服装をした少女。
そんな最高の剣士様は——

「モシヤモシヤ」

オレのうめえー棒食ってた。

「つてそれオレが買ったコーンポタージュ!?!」

「あ、ソラ。やつほー」

「やつほー……………じゃねえよ！ なに人のお菓子食ってんだよ！ それ杏子に見つか
らないように隠したヤツじゃね?！」

「いやーお腹空いちやって、ついね。あとで買ってあげるから」

「それ昨日までの期間限定だからもう売ってない!」

「え、そなの？ んじゃ、あたしと一緒にお風呂入る許可を与えよう。さやかお姉さまが
ゴシゴシしてあげる♪」

「いらねえよ！ マミさんかお前は!」

あの人もあの人でナチュラルに入ってくる。

いくらみんなのお姉ちゃんだからって異性と一緒に入っちゃいけません!

男の子だつて恥ずかしいです!

「見るからに失敗したようだな」

「ゲツ、関羽」

「誰が関羽だ。私の名はシグナムだ」

「シグナル?」

「違うつてジニナルよ」

「オイこら貴様ら。なに勝手に名前を改変しとる。そして青髪少女、貴様のそれは許せ
ん。ぶつた斬る」

解放されたポニーテールの女性は青筋を浮かべながらさやかを見据える。逆鱗に触れたなさやか。

ま、どのみち戦うことは避けられないし、別に問題ないか。

「さやか、頼むな。オレこういう騎士っぽいあんま相手したくない」

「苦手なの？ ソラにも苦手相手いるんだね」

「昔、悪逆非道って言われるくらいのイタズラしてやって追いかけられたトラウマある」

「あんた何したのよホント!？」

若さ故の過ちというヤツさ。

まあなんにせよ………オレは神器を召喚し、赤毛ロリと相對する。

さあ、始めようか。

「充分生きただろう？ 満足しただろう？ なら安心してとつと死ぬ」

「上等だ返り討ちしてやる！」

神器とハンマーがぶつかる。サポートは任せたぞ千香。

「ごめーん、なんか結界張った人見つけたから——潰してくるよ」

と久しぶりに冷えた一言を吐いて、戦いの地に向かう。

やれやれ、仕方ない。あまり一人で戦いたくないが、やるしかない。

——こうして、それぞれの信念と思惑がぶつかり合った戦いが始まった。

第二十五話

生き物のいなさそうな静かな世界で、オレ達は空中戦をしていた。

オレが斬り込むと赤毛ロリもといヴィータはハンマーで防いだり、回避したりする。

こいつ、見た目がこんなのくせに動きは歴戦の戦士だな！

「なんか不穏なこと思ったか？」

「直感スキルは高いロリだなと」

「なんだとてめえ!？」

一旦離れてヴィータは魔力で球体を数個造り出した。空中に浮かぶ赤い球体にハンマーをぶち当てて発射。

「ゲートボールか！」

ゲートボールの魔弾をオレは右へ左へとヒヨイヒヨイ避ける。

ああくそ、なんとか避けることはできるが元々オレは空中戦が苦手な神器使いだ。

別に浮遊魔法が苦手ではないが、神器を使ってる間に魔法はあまり使いたくなかったから空中戦の練習はしてない。むしろオレはビルや建物を使って飛んで戦うジャングルファイトが得意方だ。

「隙あり！」

「ゲツ」

二個だけ回避できない球体がオレの目の前にあつた。
仕方ない。戦時以来だが——

「『跳ね返せ』！」

防壁を展開し、球体を防ぐだけでなく——”跳ね返した”
跳ね返した魔弾はヴィータのハンマーによつて弾き出された。

「なんだその魔法は!? 見たことねえぞ!」

そりやそうだ。オレ達が使う魔法とこの世界の魔法は違う。

デバイスという補助機はなく、脳裏に描いた魔法陣を展開する——それがオレ達の魔法『マジック』だ。

「チツ、自分の攻撃でやられて——」

「たまるか……………つてか？」

「っ!?!」

補助マジックを使い、速さを高めたオレはヴィータの背後をとる。

振り向き様にハンマーをオレにぶつけようとするが、それは既に”予想”している。その前にオレはデバイスに向けて神器を差し込み、封鎖した。

「なっ、デバイスがスリープモードにさせられた?！」

パソコンで強制停止させるようにデバイスを機能停止させることができた。自らの相棒が停止したことでヴィータは落下していく。

本来ここで落下させてミカン箱のようなスプラッタな結末にしたいが聞きたいことがあるので、クロノ少年のモノマネのバインドで拘束してから地にゆっくり下ろす。

「さあ話してもらおうか。お前らの目的を」

「くっ、誰が!」

「くらえ! 『フォルテツシモ』!!」

ズドオオオオオン!!

轟音と煙と共にシグナムがヴィータの前に吹き飛んできた。

「ガハッ!」

「シグナム!?!」

さやか of ヤツ。最大奥義でぶっ飛ばしてきたな。

オレがシグナムのデバイスも機能停止にしてからバインドで拘束していると、さやかが着地してきた。

「空に飛んだり、剣がバラバラになったりと苦労したわよ。あの人がかなり強かったし」

「それでも勝てたお前はスゲーよ」

空へ飛べないハンデを抱えながらも勝てたこいつに健闘を称えて頭を撫でた。

照れ臭そうに笑みでさやかはオレに言う。

「それじゃあうめえー棒の件許して」

「だが断る」

「解せぬ」

食い物の怨みは深いでござす。

きやアアアア!!

「この悲鳴はシヤマル!?!」

「てめえらシヤマルに何しやがった……………」

「……………」

「いやなんだその『またヤツか』って顔!? なんだよ、シヤマルに何が起きたんだよ!?!」
懇願するかのようにヴィータは聞いてきた。その答えを出すかのようにシヤマルが
シグナムと同じく飛んできた。

—————
バニーガールの姿で。

「は?」

「うう……………まさかこんな格好させられるなんて……………もうお嫁にいけない
……………」

「シヤマル、なんでそんな格好してるんだ!?!」

「むしろ何があつたか教えてほしいよう……………」

オレもだよ。どうやったらこうなるんだよ。千香もさやかと同じように着地して彼
女達の疑問に答えてくれた。

「よくぞ聞いてくれました。これぞ師匠直伝、名付けて『高速着せ替えアタック』だよ！
ちなみにそれは師匠お気に入りのコスだよ！」

「あなたの師匠はとんだスケベオヤジだよ」

「師匠は女だよ？」

「あなたの師匠はとんだエロオヤジだよ！」

さやかがツツコむ。

ろくなこと教えてないなあの人。戦時中にお世話になったけど、ほとんどがギャグとノリで敵を殲滅してたな。

しかもほとんどがメンタルブレイクという名の強制コスプレだったりする。

ついた異名が『混沌の神器使い』である。

光と闇ではなく、場を混沌させるカオスな神器使いと称えて。

オレの師匠もよくそのことで愚痴とか言ってたな。

「ふっふっふっ………ええのうええのう。この乳に、腰、そしてヒップ。美女のコスプレは一番でゲスう♪」

「フラツシユするな変態。本人の意思関係なく撮るなよ」

「恥ずかしい………でもなんでだろう………この羞恥心に爽快感があつて、新しい何かが………」

「シャマルというお姉さん、頼むから目覚めるな！」

これ以上変態が感染するのだけはやめてほしい。

「これで一件落着だね！」

「落着じゃねえよ!!」

「あべしっ!!」

オレとさやかかの拳骨ツツコミで千香は地面とキツスした。

とんだ置き土産を残してくれたよ。

オレとさやかは目覚めそうなお姉さんを正気に戻そうと奮闘するのだった。

第二十六話

シャマルさんを正常に戻し、オレとさやか、千香はドナドナのBGMを流しながら、彼女達の一軒家にお邪魔するため向かっていた。

やんちゃ娘三人に叱ってもらおうと思つてのことだ。

いやーわかつてくれて何よりだ♪ お兄さんはうれしいぞー♪

「久しぶりにソラのガチギレの拳骨を見た」

「自重しないとイケないかなあと思つたボクであつた」

何を言つてるかな二人はー？

オレはそんなに怒つてないよー？

反抗と言ひ訳ばかりなヴィータちゃんに拳骨おとして気絶した光景を見たシグナムさん達が怯えて教えてくれたなんてことないよー？

「あのお願いだからその笑顔やめてほしいわ……………」

「あははは、何を言つてるのかなシャマルさん？ ……………オレの笑顔、そんなに嫌なも

のデスカア……………」

「どうしよう……………めちやくちや怒つてるこの子」

いざ行かん。ミカン箱の怨みと三人娘の親の説教へ！

閑話休題

とある一軒家にて、三人娘の保護者的な人が彼女達を説教していた。ていうか、その

「こんな身で母親とか。そりゃ、やんちゃになるわー」

「誰が母親や。あんたと同じまだピチピチの九歳や」

「ピカピカじゃね?」

「よろしい戦争や」

車イス少女こと八神はやては彼女達、ヴォルケンリッターという守護騎士達の主らしい。

まさかこんないろいろ小さな少女が闇の書というロストロギアの主とは誰も思うまい。

「ごめんなあソラくん。うちの娘達が迷惑かけて」

「良いって別に。345円払ってくれたら許す」

「あのミカン箱って何気に人気やしなあ。………まだ売つとるかなあ」

「主はやて！　ここは私が責任をもつて！」

「シグナム、誰が正座解いてええって言った？」

あ、シヨボンとシグナムが落ち込んだ。

さすがみんなのオカン。車イスでありながらもそのオーラは偉大である。

「ただいまー。今日の鍛練はザファイーラのおかげでうまく——あ………」

「ん？　お前は確か………」

記憶の隅にある断片から索的。検索結果一つ。

「さやかのおストーリーカーくん！」

「最初に思い出すのまさかのそれ!？」

「違うの？　んじや、三丁目の夕陽ヶ丘にいる田辺くん？」

「誰だよソイツ!？　我は天道衛！　貴様のクラスメイトだろう!？」

「………ああ！　確か運動会で杏子の騎馬に最初に轢かれた押谷くん!？」

「天道衛って言うてるだろ！　お前の耳は大丈夫か!？」

失礼な。オレの耳は五十メートルも離れた場所からでも音が聞ける優れものだぞ？

ただどうでもいいヤツの名前が覚えるのが苦手なだけだ。

「さりげなくひどいな貴様……………」

「いやー♪」

「誉めとらん！」

そんなやり取りに呆れるはやて達だった。

え？ これが普通じゃないの？

☆☆☆

闇の書——魔力を蒐集を集め、666ページまで蒐集すれば、絶大な力を得るとされるロストロギア。

とりあえず聞きたいことができたので八神に聞いてみた。

集めたら神龍出るの？

「いやドラゴンでボールなお話ちゃうから出ないちゃうん？」

「そーなの？ チツ、願いたい事あればギャルのパンティーお願いしたのに……………」

「どこの喋る豚だお前は」

千香を叩きながら状況を整理。

闇の書は魔力蒐集しないはやてにムカついて宿主の彼女の魔力を吸いとる。

結果、下半身不随に陥る。

このままでは死ぬとメデイカルなシャマルの診断で守護騎士達は『蒐集のような迷惑を他人にしないほしい』という願いを無視して犯行に及ぶ。

「……………要するにだめじゃんお前ら。お母さんの言うこと聞かないと」

「このままはやてが死ぬのを見過ごせって言いてえのかてめえは!？」

「そこまで言っていないけどさ、せめて蒐集行う前に専門家に聞こうとしろよ。蒐集以外の方法があったかもしれないじゃん」

「ていうか、なんか聞いた話じゃ管理局の人にも蒐集しちゃったそうじゃない。犯行に及んで、もう専門家にも頼れない詰みの状況に陥っちゃってるじゃないこの馬鹿ちん達」

さやかは毒舌に「ウグツ」と守護騎士達はグウの根も出せなくなる。

「今回は管理局に通報しないけど次は襲うなよ。襲うならオレの仲間達以外と生物だけに限定して、ひっそりと蒐集して」

「同じく。千香ちゃんと良い子のみんなと約束だよ」

「黙認するんだあんた達。まあ、私もこういう重い事情があるなら仕方ないなあーって

思つてゐるけど」

「さあ帰るべ、帰るべ。オレ達はリビングの扉を開けようとした。」

「待つてくれ！」

衛が制止の声をかけて、いきなり土下座してきた。

「別にお前らのしてること通報する気はさらさらないけど？」

「違う！ そうじゃない。貴様に……………いや神威に頼みたいことがあるんだ！」

「頼みたいこと？」

「はやてを……………私の恩人を救つてくれ」

衛曰く、命の恩人であつて自分がなりたかつたモノを思い出させてくれた彼女を助きたい。そのために強くなろうとして鍛練をしていたらしい。

「今まで学校を休んでた理由はそれか。」

「どうやら頑張つていたみたいだ。」

「だからつて犯罪者になれつて言うのか普通？ 巻き込まれた通りすがりのオレ達に？」

「随分自分勝手なお願いだな」

「ああそうさ！ そうだよ！ 私は貴様に頼みたいんだ！ エゴだ。醜いお願いだ！

でもこのままはやてを失いたくないんだ！ 我を、我を死ぬことを悲しんでくれる彼女を！」

「頼む!! この通りだ!!」

真摯に頼む衛にさやかと千香は無言で、土下座の彼を見下ろす。

オレも口を開かない。ただ彼の言葉を聞いていた。

「神威……………貴様の力は恐ろしくもすごい。そのすごい力が我にはない。羨ましくらいだ。だから、どうかどうか……………」

「はあ……………やれやれ……………」

どうしたものかねえー。面倒事は関わらないつもりが、ここまで真摯に頼まれたら――

——
関わりたくなっちゃったじゃねえか。

「さやか、千香。まどか達を呼んでくれ」

「そうね。そうしまししょうか！」

「やる気が出てくるね！」

それぞれがやる気満々である。

八神家VS管理局。

言葉からすれば圧倒的な差を感じるが、負ける気なんて全くない。

むしろ上等。敵は強大、だがオレ達は無限大だ。

「ありがとう……………ありがとう……………」

天道は泣きながらオレにお礼を言ってくる。

まあなんにせよ……………こんな真剣なヤツに協力してもあいつらも文句は言わない
だろ。

なんやかんやで言ってお人好しだからな、みんな。

第二十七話

まず結論を言わせてもらおう。オレ達も蒐集活動することになった。

八神はどこか納得していなかったが、最終的には衛の熱意に負けて、魔力を持つ生物ならば、蒐集していい許可をもらった。

まどか達を八神家に呼んで事情を説明すると予想通り、協力してくれると言っていた。

まどかやマミさんというお人よしがいると思えるが、ほむらまで乗り気に賛成したのは意外だった。

なんでもジュエルシードの事件で余った取引材料がまだあるからであるらしく、いつでも脅せる武器らしい。

「お主もワルよのう越後屋」

「いえいえ、お代官様ほどではなく」

「知ってるのが意外」

「病院でよく水戸黄門見てたから」

まさかの意外な事実である。ちなみにオレ達のおくどい顔を最初に見た八神は少しドン引きだったとか。

失礼な。この美少年と美少女にドン引きとは見る目がなさすぎる。

まあ、どうでもいいエピソードだが。

すると、魔法陣が現れる。

衛がオレ達に鍛えてくれと言ったので、とある無人世界では衛くん魔改造計画を開始した。

彼にはこれと言った武器がないので、槍の杏子、剣のさやか、マスケツト銃のマミさん、弓のまどかという風に相手したり、教授してもらっている。

名付けて『経験値を高めようぜ作戦』だ。え？ ネーミングセンスない？

文句があるなら命名したまどかまで。

グロック17とデストロイアーチャーでおもてなしします。

普段はボロボロになって帰ってくるのが毎日の彼であるが、今日は疲労困憊だがボロボロではない。

成長している証拠だろうな。

「まどか、どうだったかしら？」

「うーん、なんか弓を使うのはしつくりこないとか言ってたね。やっぱりザフィーラさ

んみたいな拳で戦うのがしっくりくるらしいよ」

「ファイター拳士ってヤツか」

「うちのところにはないタイプよね……………」

拳で語る神器使いはここにはいないしな。まどかが「そうだ」と呟いて、携帯を取り出す。

「拳で闘うことを得意とした最近知り合ったオジサンにお願いしよう」

「まどか、まさか援交じゃないよな？」

「許せない……………まどかを汚したその男を始末するわ……………」

重火器を取り出すほむらにまどかは「違うから仕舞って」とお願いした。

ちよつとホツしたりする。そこまで彼女は間違っていないようだ。

「その人は女の人に興味ないよ」

「なら、オレみたいな男なのか!?　こんな美少年を狙うオッサンなのか!？」

「ソラくんはイケメンじゃないし、男が好きなホモじゃないから安心してよ」

「さりげなく傷ついた。ほむら、胸かして。泣きたい」

「どろろ」

胸に抱きついてさめざめと泣きます。

こやつもノリノリである。

「あとでソラくん、お話しね」

「解せぬ」

「とにかくその人はね——」

まどかがその人についてオレとほむらにヒソヒソ話した。

……………うん、その……………なあ。

オレ達二人は衛に向けて一言を言った。

「衛、フアイト」

「あなたのこと忘れないわ」

「貴様らいつたい誰を紹介するつもりだ!?　そしてほむら殿、それ相手が死ぬ間際の一言だからな!」

ツツコむ衛にオレ達は彼がそのオジサンのようにならないように祈った。

フラグじゃないよなこれ?

☆☆☆

とある休日。ほむらとデパートに向かった。

買いたい本が今日発売という理由もあるが、こいつと久しぶりに出かけたかと思っただからだ。

「どういう風の吹き回しかしら。ソラが私のような完璧で最高の美少女を誘うなんて」

「お前って相変わらずだな。ボツチの原因じゃねそれ」

「あら、私をボツチ扱いとは失礼ね。許せないわ。その無礼の報いとして差し出しなさい……………指を」

「折るのか？ 指を折るつもりなのか!？」

オレのリアクションが面白いのか微笑を浮かべる自称美少女。

その微笑は文字通り周りを虜にするほどであった。

「ふふ♪ やっぱりソラのリアクションはいいわ。いじめがいがああるわ」

「歪んでるなお前」

「ええそうよ。私は歪んだ女で面倒な女よ。構ってくれないとイタズラするわよ」

「ハロウインは先月やったからな。はいはい、さっさといくぞ」

「冷たい男ね。昔は熱血だったじゃない」

「……………青くさい覚悟はもう捨てたんだ」

頭に？ 浮かべてほむらはしばらくオレを見る。

やれやれ、話しておくか。そう思っただけオレは会話を続けた。

「オレはさ。いろんな人と出会って、いろんな人を助けて、まるでテレビのヒーローのようになつたと錯覚していたんだ。誰でも助けることができる正義の味方みたいにな。けど、まどかの概念化という悲劇は阻止できなかった。そのときの教訓で『救えない人もいる』を学んでいたはずだったんだ」

けどオレはそれを理解せず、戦争では意味のない不殺ばかりしか行わず、神器使い達を殺さなかつた。

師匠とはそのことでぶつかったこともあつた。

『オレは人を殺さず、戦争に勝つ』

そう言つて師匠の耳を貸さず戦い続けた。

師匠も半場呆れた形で、オレの意思を尊重してくれたけど。

なのに……………

「それが間違いだったんだ。戦争はなんでもありの殺し合うものだ。だからオレはもう戦えないと勘違いして放つておいた神器使い達の報復にあつた。そして――

――師匠はオレのせいで死んだ」

あのとき師匠はオレを庇って戦死した。瀕死だったと勘違いして死んだフリをしていた敵がオレに攻撃してきた。

その致命とも言える攻撃から庇って、胸を貫かれてオレにあるモノを身体に埋め込んでそして力尽きた。

敵にとって師匠はかなりの猛者で名声を得たと思つて歓喜の声をあげた。

オレはただ泣き叫んだ。そして聞きたくないものを聞いてしまった。

『こいつはラツキーだ！ あの閃光を討ち取れた』

『しかもガキを守つて死ぬなんてバカにもほどがあるぜ！』

………その嘲笑を聞いたとき、オレのナニカがキレた。

怒り、憎悪の赴くままにオレは敵を殺した。皆殺しにした。

一人残らず、魂を肉体から切り離した。

血を一滴も流さず、残されたのは——魂を失つた人形と師を失つて泣く一人の子どものみ。

だが、その子どもの中には少年らしさの夢も希望はなく、ただこの悲劇をなくすために敵対者に対する怒りしかなかった。

「だからオレは『救いのヒーロー』と青くさい不殺の信念を捨てて、敵をただ抹殺し、蹂

躡る『英雄』になろうと思っただ」

ヒーローと英雄はどこが違う。

ヒーローは周りから頼られ、誰もが親しみを持てる存在だ。

しかし英雄は違う。周りから讃えられ、誰もが畏怖を持つ存在だ。

どちらも憧れるものだが何かが違う。

「……………」

ほむらはオレの話を聞いて地雷を踏んだと思っっているのか気まずい表情になった。

なので——そんな彼女を乱暴に頭を撫でる。

「そんな辛気くさい顔をやめろよ♪」

「ひゃっ！ い、いきなりなにをするのよ!？」

「辛気くさい顔をする女に渴をいれた」

「レディの頭を強引に撫でるなんて最低よ」

「はっはっはっ♪」

「笑わないでよ！ もう……………」

膨れっ面になって拗ねたほむらに悪かったと言って頭を下げた。

「神器使い達の戦争は終わった。そして、オレの子ども時代はあの戦争で終わったんだ。だから心配する必要はもうないよ」

「そういえば、心だけでなく身体も変わっていたわねあなた。ほんと一見誰だかわからないくらい……………その、カツコよく……………なっていたわね」

「そんなによくなっていたか？」

「そりゃ、仲間の女の子達によく見られていたけど、あんま実感なかったからなあ。」

戦争の世界とほむら達のいた世界との時間の流れはかなり違うらしく、十年間の時間の流れはほむらの世界ではまだ四ヶ月くらいしか経っていないかったらしい。

そのとき彼女達と再会したとき、オレが誰なのか全くわからなかったらしい。

「再会したときのお前らはあまり変わって……………いや変わっていたな。あのとき見たオレは変わったとしか言いようがない……………」

「あ、オレはママさんとまどかにのせられて、その……………」

指と指をツンツンして恥ずかしがるほむらに萌える今日このごろ。

まどか曰く、これは『ほむほむモード』らしい。

昔の彼女がこういう気弱で恥ずかしがり屋だったそうらしく、たまに失敗したり、図星を付かれたりしたらなるらしい。

ほむらって冷たい勘違いされがちだけど、実は人付き合いが苦手で不器用なんだよ

な。

ほんとは知り合った友人やまどか達に優しい少女である。

「ほむら、オレは変わったことに後悔してないよ。そりゃ辛いことが今まであったさ。けれど、今は助ける力がある。知り合いを助けることができればそれでいいと思ってる」

「見ず知らずの人を助けないの?」

「知らん。その辺りはママさん、まどか、さやかを担当さ。見ず知らずの相手を感じ謝されたところであんまうれしくない」

「同感とは言わないけど、わかるところがあるわ。でも、もしその人が知り合いの知り合いだったら?」

「……………助ける、かも?」

「クス、ふふふふ……………」

「笑うな!」

くそつ、一本とられたし、なんだよこいつの笑う顔。

見れないくらい……………かわいじやねえか……………。

「あーやめやめ。さっさといくぞー!」

「はいはい♪」

「あーくそ、笑うなよもう……」

照れくさいったらありやしない。オレはほむらの顔を見ることせず、彼女の手を握り、スタコラ目的地向かった。

——そのとき周りの視線は、『姉と弟と出かけている家族』を見守る暖かいものだったと思う。

「あつた。湯煙殺人事件簿」

「それっていつも風呂場から推理を始める覗きで変人探偵の物語じゃない」

「意外に面白いの。つてお前もなに買ったんだ？」

「世界の拷問のやり方シリーズ第六巻。あなたのお仕置きのパリエーションを増やした
くて」

「命の危機が増えたオレに全国の銀髪少年は泣いた」

番外編その六 前半

とある神器使いの最期

黒髪の青い瞳の青少年ことオレはドコでもドアから飛び出した。

戦争を終えたオレは再び見滝原にいる彼女達に会うために、ドコでもドアを使った。

そう使つて見滝原にいるはず——なのだが。

「えっ？　(´・ω・´)？」

砂漠だった。辺りはビルの瓦礫やら廃墟の瓦礫がひよっこり浮かんでいる程度である。

「なんだってこんなところに——つて、あれつて……………」

無数の目に囲まれた一人の少女が寝ていた。その人物は黒のロングストレートであり、時間遡行者である少女——

「ほむらっ？」

相棒である少女は眠っている。しかしただの眠りではない。これは……………。

「久しぶりだねソラ」

「出たなナママノ」

やっぱりこいつが原因かインキュベーター。

魔法少女を量産し、魔女に変えるために暗躍していたはずだったがまどかによって、魔法少女はなくなり、魔法少女は消えるという運命になった。

そして、こいつは魔獣から生み出されるグリーンフィードを宇宙の延命エネルギーとして集める使命になったはずだが、

「今回なにしゃがった」

「なに、ただの実験さ」

「実験？ 相変わらず好奇心だけは正直だな」

「そういう君は口が悪くなつてないかい？」

当たり前だ。戦争で成長した子どもだからなオレは。

キュウベエの実験内容を聞いてみると円環の理である鹿目まどかを把握すること。そして把握できれば干渉し、支配できるのではないかと思つている。

「お前、それほむらの逆鱗にモロに触れてるぞ。殺されるどころじゃ済まないぞ

……………」

「しかし不可能ではない。だからこそその実験なのだから」

くだらない……。……。オレはそう思って神器を召喚する。

「僕を始末するつもりかい？ 無駄だね。僕の身体は」

「あいにくお前の実態を知ってるからやる気はねえよ。でも、まあ……。……。殺せないことはないぞお前」

「どういうことだい。ぜひとも説明してもら」

グシヤ

オレはヤツが言い終える前に蹴り殺す。本気の蹴りでヤツの頭は豆腐のように飛び散った。

「オレとお前はそういう仲じゃねえだろ。だから教えてやるもんか。……。……。今度、お前がもしオレの友人がこんな実験に巻き込むから覚悟しろ。本気で殺してやる」

そう言つてオレは解錠し、ほむらの中にダイブした。

厳密に言えば、ほむらの擬似的な魔女結界だが。

☆☆☆

真夜中の満天の星空。ビルがやや光るインスピレーションは綺麗な夜だ。
そんな夜空を――

「なんでさアアアアアア!?!」

現在進行形で落下中!!

いやなんで!?! 人の心や夢の中にダイブってスカイダイブするってことが基本なの
!?!

オレは成すすべなくそのままとあるビルの前に落下してしまった。

てか、骨折はしてないのは奇跡じゃね? 伊達に戦争生き残ってるだけある肉体である。
る。

「いつてエエエマジで効くわこれ……………」

そう言ったとき、目の前で煙幕が上がり。

「「「ピュエラ・マギ・ホーリー・クインテット!」」」

オレの目の前に五人の友人達が揃ってカッコつけていた。

——再会初っ端からツッコみたいところはいろいろある……………。

ピュエラ・マギ・ホーリー・クインテットってなに？

新しい戦隊ヒーロー？

っーか、まどかときやか。お前らって消えたよな？　なんで実態化してるんだよ。

なによりほむら。お前、そんな気弱そうな少女だっけ？

うん、とにかく総合的に言わせてもらおうと——

「ないわ……………」

痛々しいです。これが友人だと思いたくなくらい痛々しいです。

「誰だてめえ!」

「ひでぶ!」

なぜか杏子さんに殴られてビルまでぶっ飛ばされ、叩きつけられた。

あれ？　オレってもう友人じゃないの？

そう思うと少し泣きたくなったオレだった。

☆☆☆

夜は明けて朝である。通行人が行き交う並木通りだが……………。

「メチャクチャキモいよこの通行人達！」

なんで顔無し!? のっぺらぼうが最近の流行なの!?

妖怪達に支配されたのか見滝原よ!

てか、普通の人はいないのか!?

「なんだよこの歩くホラー……………。もうこの通行人達皆殺しにしてやろうかホント……………」

物騒なことを言っていると見たことある三人の少女達が目に入る。

まどか、さやか、マミさんだ。

とにかく呼んでみた。しかし、怪訝な表情をされた。気になったので、オレは近づくとにした。

「どうしたんだよ。こんなに呼んでいるのに」

「あの……すみません」

「どちらさまですか？」

……はい？

「えっ、マジで覚えてない？」

「あなたのような好青年見たことないし」

「なんで名前を知っているのかちよつと気味悪いです……」

「新手のナンパくん。さっさとここを立ち去ることが身のためだよ」

さやかがそう言ったとき、オレは駆け出した。

泣きたい……。友人に忘れ去られるなんてかなり泣きたいです！

そしてその日はインターネットカフェに引きこもった。リアルな引きこもりである。

閑話休題

「そんなこんなで状況は変わらないので探索である」

真夜中の世界でオレは廃墟のような場所に来ていた。いくらほむらの中の世界とは言え、オレを覚えてないのはおかしい。

改変された世界でもマミさんと杏子はオレの知り合いだったのに。

とにかくそれが知りたいために探索である。

すると、あらまあ。銃声が鳴り響いているではありませんか………つて誰か撃ち合ってね？

とうか世界ってこんなにモノクロだっけ？

「あ、マミさんとほむら見つけ」

とにかく会話しようと思つくとカチツと音がなり、止まっていた銃弾と魔弾が動き出した。

「あ……………」

「ちよつ、マジかアアアアア!?」

シヌシヌシヌシヌウウウウ!

オレは神器を召喚して、迫ってきた全ての弾を弾き返した。

ビームで戦う神器使いの悪夢の再来だった。マジで一斉掃射だもん。

そして全ての弾を弾き切ることができた。

「ぜえぜえ……………死ぬと思つたー」

「また会ったわね」

「巴マミ。彼は？」

「先日、私と鹿目さん、それに美樹さんにナンパしてきた人よ」

「まどかにナンパした……………ですって？」

そう言つてグレットク17を向けてきた。無表情だからシャレにならんし、マジで怖いよそれ。

「あなたは何者なの？ どうしてあれだけの銃弾と魔弾を防げたの？ というかもう人外ね」

……………。

「まどかにナンパする愚か者がいるとは思わなかったけど、巴マミの反応を見たところ失敗してストーカーに成り下がったようね。さっさ失せなさい変態。二度と私達に関わらないで」

……………はあー、まさかここまで忘れ去られるわ、貶されるわ、変態扱いされるわでもうオレのライフポイントはゼロだわ……………はっはっはっ。

ブチンツツ（何かが切れた音）

「ぶぢけんなよお前らアアアアア！」

「「っ!?!」」

ぶぢギレたオレの怒鳴り声で二人は萎縮する。

「誰がストーリーカーで変態だ！ んなもん千香かとその師匠がポジショニングしとるわボケ！ あと誰がまどかやさやかみたいながキスタイルにナンパするか！ するんだつたらせめてバママミくらいより上の大人のお姉さまを口説くわ!! 自意識過剰なんだよお前らは！」

「誰が自意識過剰よストーリーカー！」

「うっせーボツチ！ お前はスツ混んでろ！ もしくわ黙れ、ていうか死ね！」

「逆ギレ!?! そしてかなりの辛口!?!」

ほむらがツツコむがオレは気にせず、言い切る。

「もういい！ だいたいほむらの中だかなんだか知らないけど、通行人がのつぺらぼうの妖怪ワールドに我慢できん！ お前ら含めて血祭りじやアアアア!!」

オレはあるだけの魔力でマジックを発動しようとした。

「ちよつ、あんた落ち着いて！」

「静まるのですう！」

さやかと銀髪少女に止められた。ほむらとマミさんは手を握り合い、ガタガタブルブルと震えていた。

離せエエエまだ怒りが収まらないんだよオオオ!!

「ていうか、ほんとに誰?! あんたみたいないなイケメン知らないよ、あたし！」

なんだとコラ。だったらまた名乗ってやる！

「オレの名前はソラ！ 『全てを開く者』の神器使いにして戦場では『無血の死神』って呼ばれてた！ よく覚えてろ!!」

「……………は！」

「えつ……………」

「……………マジ？」

「し、死神さんなのですか？」

上からほむら、マミさん、さやか、銀髪少女である。

ってオイ、オレのこと忘れたのじゃなく。まさか……………。
そう思つてオレは自ら青い瞳を指さす。

「オイ、オレの特徴幼い頃から変わつてないんだけど？」

「ああ、確かにソラ（くん）だ（わ）……………」

「みんななんて嫌いだい……………」

もういじけてやる……………。

閑話休題

オレがママさんに慰められている間に、ほむらとさやかは逃げ出した。

なんかバツが悪そう見えたがもういいや。もう知らないや。

「まさかここまで成長してたなんてお姉ちゃんも驚きだわ」

「お姉ちゃんつて自称するなら最初に気づくべきだと思うんだけど？」

「うっ、痛いところ付かれたわね」

「あと人外つてなんだよ。さりげなく言われたけど、あんたらも人外染みた動きしてるだろ。ママさん達にだけには言われたくない」

「どうしようべ……………。ソラくん本気で拗ねちゃった」

セメント率をあげたオレに狼狽するマミさん。すると、逃げ出したさやかが戻ってきた。

「なぎさーただいま。無事にほむらを——」

チャキ

さりげなく帰ってきたさやかの首に神器を向ける。よし、脅して尋問しよう。

「さりげなくに戻ろうしてるんだお前？　よし、今すぐにお前らがどんな状況を答える。ハイカイエスのどちらからだ」

「いや、気づけなかったのは謝るけどさ、ソラもソラで全然違う別人になってない!」

「はっはっはっ、戦争で成長すればこうなるのは当たり前さ。ちなみにまどかを殴ればみんなが元の世界に戻るなら殴るし、ほむらを倒せば元の世界に戻るなら、オレは容赦なくシバキ回して泣かす」

「容赦なさすぎるわ!　あんたこの短い期間で何があったのよ!　昔は純粋で天真爛漫な少年だったでしょ!」

「お前からしたら短い時間の流れかもしれないけど、こちらは十年間の月日がながれてるんだよ。オレつてもう二十歳なんだよね」

「見た目も心も変わりすぎよ……………。昔のソラが恋しいよ……………」

「そうね、バイオレンスになっちゃったわね……………」

さやかとマミさんは嘆息を漏らす。バイオレンスカ？

これが今のオレのスタンダードだけど。

その後、さやか、銀髪少女がどんな存在なのか知った。

さやかは円環の理で消えた後に、まどかと同じ円環の理の一部となっていたそうだ。

「銀髪少女とさやかはまどかの荷物持ちって役割とバックアップみたいなもんか」

「銀髪少女じゃなくてなぎさなのです！」

「黙れ元お菓子の魔女。また口の中に突っ込んで中からぶち抜いてやろうか？」

「ひうつ。さやか、この人怖いのですう……………」

「コラ、怖がらせるようなことしないの。この子は敵じゃなくて味方なんだよ？」

なぎさはさやかの後ろに隠れて、オレはさやかに注意された。

そうは言っても初対面のヤツを警戒する癖は治らないものである。しかも元お菓子の

魔女だしな。

「これからどうするんだ？」

「あたしとしてはここも悪くないって思ってるんだけど」

「だが、あいつは真実を、現実を求めている。そうだろう？」

さやかは頷く。ほむらもまた元の世界に戻りたいのだろう。

「あいつのソウルジェムはもう限界だったのよ。そこをキュウベえにつかれて捕まって

「こんな仮想世界に捕まっちゃった」

「……………」

「ねえ、ソラ。お願い、あいつを解放してやって。まどかもそれを願ってここに来て記憶を失ったんだ。だから、あいつを救ってやって」

「……………最期まであいつと一緒にいるつもりさ」

なんせあいつはオレの相棒なのだから。最期まで見届けるつもりさ。

——
な——んて思っていたことがあった。

このときなんでほむらのことをちゃんと理解していなかったのだろうか。

番外編その六 後半

☆☆☆

その後、マミさん達と別れて花の丘に来ていた。そこにはほむらとまどかが百合百合しい展開をしていた後に、ほむらは何かを確かめるためにまどかと離れた。

遠目から見た情報だから正確じゃないかもしれないが。

さてと、仕事仕事……………。

「みイイイつけたアアアアア!!」

スツツツパアアアアアン!

「きゅぷいイイイイイ!!」

修羅の如く、まどかと一緒にいたキュウベえを満面の笑顔でハリセンでぶっ飛ばして
駆除した。

ふう、いい仕事した♪

「ちよつ、あなた人のペット何してるの!？」

「えっ? これこのキモい生物がペットなの? だとしたらないわー……………。これをペットにするなんてないわー……………」

「なんで私、知らない人にここまで言われなくちゃならないの!？」

「プツ、ハハハハハ」

真剣に怒った彼女にオレはその常識的なツツコミにおかしくなっちゃった笑う。彼女は急に笑いだしたオレをプンスカと説教し始める。

そう、これが鹿目まどかだ。

他人にいつも優しく、自己を蔑ろにしてしまい、オレが救えなかった少女。

ただどここでは概念の存在ではなく、一人の少女に戻っている。

だからこそ、オレは彼女にある質問をした。

「鹿目まどか、お前は人生は尊いと思う? 友人や家族は大切だと思う?」

「えっ? それは大切だし、人生に関してはまだわかんないけど……………つてなに話を

———

「オレは人生は尊いものだと思う。人って簡単に死ぬし、大切なものも簡単に失う。現にオレは家族を失ったし、大切な人も失った」

オレがそう答えるとまどかの口は塞がった。

思い出すのは戦争を初めに駆け抜けた頃。

未熟で天狗になっていた青二才は、完全無欠のヒーローと勘違いして大切な人を失った。

「だからこそ、尊いからこそ、今このときを生きても、そして最期には笑える終わり方を指すんだ。それがこの質問に対してのオレの答えだ」

オレはそう言って彼女にカギの形をした首飾りを渡して背中を向けた。

「答えはのんびり探せばいいさ。この質問は個々によつて違うからさ」

「あなたはいつたい……………」

オレか？ そうだな。いつも通りに答えてやるか。

オレは最初の頃のように、イタズラが成功したかのような笑顔で答えた。

「オレは神器使いのソラ。ソラって呼んでくれ」

「ソラくん……………つてええ!?! あソラくんなの!?!」

ブルータスお前もか。オレがソラだと思つてなかつたみたいだ。

ていうか、そんなに変わってるの？

閑話休題

時間は進んでほむらの結界が決壊していた。

隕石つてマジで落ちるんだな。見滝原に直撃した無数の燃えた岩を見てそう思った。

「とうかあれがほむらの魔女化？」

「厳密には魔女になりかけだけどね」

「なあ、コイツ誰だ？ マミときやかにやけに親しそうだけど」

「テイヒヒヒ、ソラくんだよ」

「はいイイイ!? どんだけ成長してイケメンになつてるの!?!」

そんなに変わつてるのオレ？

「なんといいかわい外見がワイルドでカッコいい姿だし」

「目元が大人の男の人らしくていいよね」

「……………性格が結構変わつてたのはシヨックだけど」

「それでも外見の総合的にみればバッチリイケメンよ。お姉ちゃんとしては光源氏の気持しが今ならわかるわー♪」

以上が上からまどか、杏子、さやか、マミさんの感想である。

マミさんだけでなくまどかにも獲物を見る目で見られた気がする。

女子つて何気に食欲だよねー。まあ……………なんにせよ。

「とつと終わらせて帰りましょうか、ね!!」

オレ達は魔女の使い魔達に向かっていった。

—— さやかが自分の魔女を出し、魔女と使い魔を相手し、杏子となぎさがそれをサポートする。

—— まどかとマミさんがオレをインキュベーターの封印まで連れて行く。

それぞれの役割分担をして戦いに挑んだ。

こうやって一緒に戦うのはワルプルギス以来のことだなあ。

「そしてオレはその封印を解くという役目なんだが」

現在進行形で状況を言おう。 ……かなり多くの使い魔に追われている。

『いやなんでオレに集中してるの!? 私怨か? 今までの怨みか!』

『そういえば出会った頃からソラくんってほむらちゃんを振り回していたなあ』

テレパシーでまどかがそう言った。

こうやって味方や敵の攻撃に巻き込まれないように遠くから指示してもらっている。

ちなみにまどか。 たぶん魔女になったもほむらはオレの神器の恐ろしさを本能的に

感じてると思う………そうだと思いたい。

『あ、ソラくん今からそこにマミさんがティ口るから離れてね♪』

「それを先に言えエエエエ!!」

発射されたときに指示されて危なくも回避できた。

あと少しで使い魔と同じ末路だった……………。

『オイこら！ それを早く言え！ あと少しでマミるところだったぞ!!』

『ごめんごめん。でも涙目なソラくんのギャップに私のハートにキュンときた!! だからワンモアプリーズ!!』

『もう一回死にかけろってかお前!? てか、お前そんなキャラだったか!』

まどかの将来にツツコまずにはいられない。てか、マミさんお願いだからもう一度撃とうとしないで。

え？ なんか失礼なことを言われた気がしたから？

スゲー、直感スキルが半端ねー。

「ソラ、そっちに使い魔行つたよ!!」

さやかがそう言ったのでオレは神全てを開く者器で目の前で槍を突き出そうとした使い魔を細切れにした。

それから杏子となぎさが援軍にきたところをなぎさの襟首を掴み、

「くらえ、なぎちゃんボール!!」

「なんでですかあ!?!」

使い魔達に向けてぶん投げた。直撃して怯んだところをなぎさを回収して、使い魔達

を切り裂いて前へ進む。

「味方を投げるなんてどういう神経しているのですか！」

「使える手っ取り早い武器があつたらお約束だろ」

「なぎさは武器じゃありませんよ!？」

「んじや、使えるペットで。マミさんに飼われていたらこれぐらい当然だろ?」

「マミはそんなことしませんよ!!」

「あ。まず、というわけでマミさんによろしく!!」

「またですかぁー!?!」

そんな会話をしていたら今度は集団でこちらに向かってくるメガネ兵士の使い魔。

なので、文字通りお荷物ななぎさを、次はマミさんに向けて投げた。

キヤツチしてくれてひと安心なところで使い魔が襲い掛かる。

そこを杏子が槍で振り払い、さやかも援軍に来てくれた。

「んじや、いくよソラ!」

「合わせろよさやか、ソラ!!」

そつちもな、と答えて次々と来る使い魔を切り裂いた。

しばらくしていると、今度は無数の弓矢が襲い掛かってきた……………つて!!

「ごめーん。ソラくんを助けようとして加減間違えちゃった♪」

「やりすぎだバカヤロー!!」

シャウトしながらその魔力の弓矢を弾くオレ達であった。

こんな風にして、時には危機を救い、時には危機から救われ、時には危機に陥れられる。

最後のは確実にまどかやママさんのせいである。まどかはなんかワザとつばいし。

遠距離の人はたまに怖い。

そして遂に封印が見えてきた。しかし魔女がこちらを邪魔しようと手をオレに向けた。

——やめて、私はこの世界で死ななきゃならないの

そんな言葉が聞こえた気がした。

「死なせるか……………」

それに自然と言葉が出た。

「死なせてたまるかよ。まださよならも言わずに、ここで終わるとか言うなよ!!」

お前がここで魔女になっておしまいという結末は絶対認めない。

オレとお前でまどかを迎えに行くってオレは宣言した。だから——

「まずはそのふざけた鳥ルールをぶち壊す」

オレは封印に向けて神器全てを開く者を投げた。魔女の手を突き破り、封印に突き刺さって、ガチャと音が鳴る。

それから開いた封印に向けてまどかは外にいるインキュベーターを駆除するために弓矢を放った。

——そこには一緒にほむらがまどかと一緒に弦を引いていた気がした。

☆☆☆

まあ結果、暁美ほむらは救われてこの世界のルール通りに円環の理に導かれる。

そんな結末を迎える——

——
そうなるはずだった。

——
そうなると思っていた。

オレ達は暁美ほむらと言う少女を理解していなかった。

ずっと一人で戦い続けて、誰にも頼ることがなかった彼女。

そんな彼女を支えていたのはたった一人の大切な少女、鹿目まどかだった。

しかしその少女は概念となって世界から消えた。

ほむらはそれに果たして納得していただろうか。まさしくその答えが今、目の前にあつた。

魔女化した力よりおぞましい呪いと邪気が彼女から放たれており、円環の理を鹿目ま

どかという少女の記憶から切り離れた。

——そして世界はまた改変された。抑止の力は発動することがなかった。

——それすらも無効にし、理（ことわり）を覆す力……………反逆の力

キユウベえはそう名付けていた。

結果、杏子となぎさ、そしてマミさんは魔法少女であることを忘れ、唯一覚えていたさやかも、その力で忘れさせられた。

そして肝心の鹿目まどかもまた一人の少女に堕された。

暁美ほむらという悪魔によって。

神は悪魔によって、堕されたのだ。

これがこの物語の結末。

ハッピーエンドかバッドエンドかどっちなのかわからない結末。
オレとしてはほむらの想いを受け入れたい——……………。

「だけど納得できない」

彼女のエゴと歪んだ想いが納得できない。

それに悪魔の力を持ち続ければ……………とオレはそう思つて彼女がいる空間に訪れた。

そこは真つ暗な夜空の世界。深淵の闇という言葉がふさわしいくらいの闇の空だ。

「あら、何しにきたの？」

「お前を戻しにきた。ほむら、悪魔の力なんか捨てて普通の女の子になつてくれ」

そう言うのと彼女は笑い始めた。

嘲笑。どうやら馬鹿にされているようだ。

「無理よ。この力はまどかのためにある。まどかと繋ぐ愛の力よ。それを捨てるなんて

馬鹿にもほどがあるわ」

その言葉を聞いて理解した。

——ああ、そうか……………もうお前は狂つているんだな……………。

もう知つてるお前じゃないんだな。なら、やることは簡単だ。

「……………なら喧嘩だ。決闘だ。お前が負ければその力を自分の意思で捨てる」

「ソラ、何度も言わせないでほしいわ。これは——」

「捨てる。じゃないと切り離すぞ——魂を」

齒軋りしたほむらは手で顔を覆い隠して、言った。

「ならあなたを殺す。殺してやるわ……………！ 私とまどかの阻むあなたなんて……………大嫌いよっ!!」

ちよつと傷ついたけど、やる気なつたようだ。

ほむらは手を上げると、黒い沼から彼女の魔女とその使い魔が現れた。

「これは……………」

「円環の理の一部の力よ。私と私の魔女がお相手してもらおうわ」

ほむらの姿もまた変化した。いつもの魔法少女服ではなく、背中に黒い翼を生やし、黒いドレスを着た姿だった。

まどかの逆バージョンみたいだな。

「やれやれ……………この軍勢で神器でなんとかなるかねー」

オレは神器を召喚して、そうぼやいた。

だけど今回は神器の力を使うつもりはない。

使えばいつでもほむらを普通の女の子に戻すことは造作ではない。

だけどそれでは意味がない。

それはほむらがしたように誰かの意思を奪ったことと同じじゃないか……………。

「……………なあ、今まで一緒に戦ってきてくれてありがとう。お前がいたからオレはい

ろいろひどい目にあつたけど、友達や師匠に会えることができた。この戦いはたぶん最後……いやオレの最期の戦いになるかもしれない。だからお礼を言いたかつたんだ。お疲れさま、そしてオレの力を与えてくれてありがとな……」

神器に向かってそう言った。

もしこれに意思があれば答えていたかもしれないが答えは返ってこない。

所詮神器は魂の武器で道具だ。

だけど、オレに、とつてこれはもう一人の大切な相棒だ。別れのあいさつをしたかつたんだ。

「精一杯生きただろう？ 満足して生きただろう？ なら、安心して——とつと死ね」

ほむらに対してではなく、自分に対しての言葉。

さよならの言葉。

そして最後の戦いが始まった。

兵力も、火力も圧倒的。羽虫が人間に挑むようなものだ。

……勝つつもりはない。けれど、負けるつもりはない。

ただ彼女にオレの想いを伝えるだけ！

「ぐぐっ！」

腹部に衝撃が走る。ラクガキのような使い魔の突進にやられた。

飛ばされたオレの背後にメガネ兵隊達が銃口を構えていた。

「だ、りやあアアアア!!」

遠心力を使って発砲する前に斬撃を飛ばした。無惨な姿を確認できた。

ざまあみろ！

だが、安心するのも束の間、今度は魔女が拳を降ろしてきた。オレは降り下ろした拳に飛び乗り、魔女の顔面に向けてフルスイング。

……大してダメージ受けてなかった。いやどつかの銀色の侍じゃないから無理だよなそりや。

ゴツと迫ってきた魔女の手に叩き落とされた。今ので肋骨が……やられた。「いつてエエエ……だけど、まだ動ける！」

身体が動く限りオレは戦い続けてやる。

立ち上がったとき、使い魔達は一斉にオレに飛びかかった。

それをオレは、薙ぎ払い、蹴り飛ばし、殴り飛ばしたりして払いのける。

迫り来る使い魔達を尻ぎ払い、どんどん魔女に再び近づく。

「はあアアアア!!」

師匠直伝『斬鉄剣』。

本来は居合い斬りの構えから行うものだが、中途半端のまま覚えてたからそのままの状態から行うことにした奥義。

そしてこの奥義の真髄は——斬れないものは………ない。

魔女を斬った。バターのように三角の形に分けてバラバラにしてやった。使い魔も大半を倒している。

よし、後は………つかい——

パンツ

脚を刺された。

手を刺された。

片目は潰されたが、頭だけ刺さなかったのは、オレをただでは殺さず苦しみながら死なすことの意味表示なのかもしれない。

痛い、苦しい。

だけでもまだ動ける。激痛にさいなまれながらもオレは倒れた身体を動かした。

「あ、がアアアアアア！」

獣の雄叫びのように上げて、オレは周りにいた使い魔達を切り裂いた。

——まだ……………まだ伝えてないんだ！

血をたくさん流し、息を荒らしながらオレはそう思つて前を向いた。そこにいたのは

「驚いたわ。これでもまだ生きているなんて。けど、これで……………」

——おしまい。

そう呟いたほむらは引き金をひいてオレの胸に向けて発砲した。
避けることができず、オレはその銃弾を受けた

ダンッ

—— だけど倒れてやらない。倒れてたまるか。

後方に倒れそうになったが足を前へ踏み込み、耐えた。

オレはほむらを見る。驚愕と恐怖に歪んだ顔をしていた。

オレが化け物に見えるのだろうか。だけど、もう満身創痕なオレに戦う力もしゃべる力は……………もうないと思う。

「ほむ……………ら……………。悪魔なんて……………なるな……………」

それでもオレは伝えるために口を開く。

——これはオレの願い

「ああくそ……………お前……………を……………一人に……………したくなかったのになあ……………悔しいなあ……………」

——これはオレの後悔

「でも……………その役目は……………おひめさま……………のあいつに……………任せるか……………」

——そしてこれはオレの彼女へのバトンタッチ。

お姫様——鹿目まどかが暁美ほむらをなにもかも戻してくれると信じてオレは保険をかけた。

オレが死んだとき、まどかの首飾りに『全てを開く者』が宿るようにした。

これは神器使い達の継承である。自身の死を悟ったときにこうして神器は受け継がれるのだ。

だけどオレはまだまだ未熟者。もしかすると不完全で失敗してるかもしれない。それでもまだお前がこれを使ってくれんことを祈って託そうと思った。

伝えるべきことを伝えてオレは最後の力を振り絞り、空に向けて解錠の波動を撃つた。

暗い夜空が青空になった。綺麗な青空へと戻ったのだ。

ほむらも見惚れるくらいの綺麗な青空————最期にオレは……………これが見たかったんだ。

……………だつて暗いままなんてなんか寂しいじゃないか。

それを最後に、身体は力が抜けて後ろに倒れ込もうする。

……………マミさん、すみません。いつか約束していたお茶会には行けそうにありません。

ん

……さやか、ごめん。オレはお前と一緒に恭介の演奏会いけないや

……杏子、悪い。約束していたケーキバイキングは一人で行かせることになりそ

うだ

……そして、ごめんなまどか。交わした約束はほむらだけ行かせることになりそ

うだ

オレはもう……みんなと一緒ににはいられない。交わした約束は果たせない。

あーくそ、悔しいなあ。涙を流したい。

けど、満足だった。ほむらにオレの想いを伝えることができたのだから。

——だからこそ、オレは最後の最期で笑った。

優しく、満面の笑みでほむらの前で笑い——そして死んだ。

——そこから先は何も覚えていない。

オレという『神器使いのソラ』が亡くなったのだからどうなったことなんかことはオレ本人にはわからない。

けれど、これがあの子ども頃に見ていた夢で、起きたらいつものように………また彼女達と会って遊びたいなあ………。

.....
ま、そんな都合のいい夢のはずではなく。オレの物語はプロローグへ

第二十八話

どんよりと曇った天気。今日は洗濯日和ではないことに残念である。

その夜はとても綺麗な星空が覗かせていたが。

「管理局にバレた」

「ええー」

そんな夜中のとある一室にて、灯りをつけずろうそく一本の会議という変な演出をしていた。原因は停電だったりする。

なんかどつかでドンパチして誰かが電柱を壊したとかなんとかと、近所のオバサン達の話していた。

そんな状況でないわーという感じにオレ達がシグナムを半目で見ると、彼女は目を逸らしてやり過ごそうとする。

オイこら、こっち見ろや。

「仕方ないだろう。ヴィータが高魔力を持つ人物を見つけて、魔が差したのか襲ってな
……………」

「またお前かPSO」

「アタシはゲーム機じゃねえ!」

ヴィータが反応する反抗する彼女に半目で睨む。

「なら改名するかなんとかしろ。お前のせいで犯罪が警察官より質が悪い組織にバレたんだから」

「うぎぎぎ………何も言い返せねえのが悔しい」

「なら、悔やむ前に反省しろ青二才」

「うわアアアアアんはやてエエエ!!」

ついには泣いてしまったヴィータがはやてに泣きついた。

「こら、ソラくん。女の子を泣かしたらあかんで」

「泣かすもなにもこいつの自滅だ。悪い子には徹底的に反省させるのがオレのモットーなんでな」

「ちよつとひどいんちやうん、それ」

「甘い。まどかとはむらなら、オレを反省させるどころか………………青少年未満ではお見せできないことをしでかすからな………」

「ソラくん、なんでメチャメチャ震えてるん!? 何があつたん!?!」

ガタガタブルブル。

思い出せばベッドの上で迫る二人の鬼の恐怖。貞操は守りきれたがあと一步のどこ

ろで全てを失うところだった……………。

「泣きたい、叫びたいのにあいつらはギャングボールを用意して……………」

「わかったから泣かんといて！ メチャクチャ不憫やから！」

「はやて、ぎゃんぐぼーるってなんだ？」

「そこだけ食いつかんといてヴィータ！」

実は純粹無垢な少女、ヴィータちゃんだった。

大丈夫、それは杏子も知らない知識だから。だからいつまでも純粹無垢でいてください。

そして、誰か癒しをください……………。それがオレのお願いです。

☆☆☆

とある次元世界にて、綺麗な青空が広がる天気の下でオレはマイクを握っていた。

「遂にやってきました衛くんのおデビュー戦。試合時間は六十分一発KO有り。では選手を紹介しましょう。赤コーナー『我こそ主人公。モブなど雑兵などにすぎん』。好少年のオリ主くん。青コーナー『愛ゆえに我こそ有り。邪魔する者は指先一つでKO』！ 覇王を目指す少年、衛くん。実況担当はわたくしこと自称みんなの弟兼苦勞人の神威ソ

ラと解説は」

「みんなの天使なマスコット、朱美まどかが担当します」

「……………君たちは何をしているんだ？」

「特別ゲストにクロノ少年ことクロノ・ハラオウンが担当します」

「さりげなく混ぜられた!? ってどこから出したそのゴングと解説席!」

クロノ少年は敵でありながらもオレ達にツッコむ。そのツッコミはあつぱれなり。

なぜこんな状況になったかと言えば、いつも通りに蒐集活動していたら守護騎士達がクラナガンという都市に誘導されてしまい、待ち伏せしてたアースラ組に足止めされる。

さらにはヴィータ達に襲われた鷹松……………あ、間違えた。高町とフェイト達がリベンジしたくてパワーアップして挑んできた。

オリ主くんもパワーアップしていたため苦戦というより大ピンチという展開だったため、衛くん魔改造最終段階を終わらせたオレ達にSOSをシャマル先生が送ってきた。

まさか、ラインでSOSとはさすがのオレも驚いた。次元世界共通だったのかラインって。

スゲーなオイ。

「なんで君達がここにいるんだ？」

「友人の衛くんをお願いされて協力している。今回は自分達の意味だから捕まえていいよ」

「なら——つ!? こ、これは……………」

杖を取り出してこちらを捕縛しようとするクロノ少年に管理局の汚職と秘密裏に行われた人体実験が記録されたファイルを見せる。

「ただし、今回はこれを提出するから見逃してくれ。リンデイ提督と交渉したい」

「そんなことできるはずがない！ 君達は犯罪者なんだぞ!？」

「さっき言ったけど捕まえていいよ。でもその代わりオレ達を捕まえたら管理局は神器使い達の管理という名目でオレ達に人体実験を行うかもしれないし、このファイルだって家宅捜査という名目で処分されるかもしれない」

「くっ……………」

「悔やむところ悪いけど、これが今の管理局なんだ。だから信用できないんだ。クロノ少年とリンデイ提督以外はね」

取り出した杖を仕舞ったクロノ少年。どうやらしぶしぶながら納得してくれたようだ。

「今回は引き下がる。だが、いずれ君達を捕まえてみせる！ 僕が変えた管理局で」

「それは楽しみだ。いつかかかってこい。オレ達神器使いをな」

クロノ少年は上にながって管理局を変える目的ができたそうらしい。いつかオレ達とぶつかるかもしれないな、これは。

「奇妙なライバル関係ができたの邪魔して悪いんだけど、オリ主さんと天道くんの戦い始まるよ?」

遂にか。さてと、やるか♪

「それではレフリーの千香! あとは頼んだ!」

「まっかせなさい!!」

テンション高めにレースクイーンの姿で登場してきた千香。

セクシーに見えるが、ヤツからすれば今日はこれが萌える服装と想つてのことらしい。

男としてはうれしいが残念な思考の美少女である。

「なんて大胆! くっ、これはあとで私もバニーガールの姿にならねば」

「ここにもいたか、残念美少女が」

まだかさん、頼むから今日も自重してください。

そんな願いを込めてチョップでツッコむのだった。

ちなみにパワーアップした二人のお相手はシグナム、ヴィータにさやか、杏子とほむ

ら達がしてゐる。

時間稼ぎのつもりがただいま現在進行形にボコボコだったりされていよ、あの二人。

(衛サイド)

とあるビルの屋上というステージにて、私の目の前にはかつてにつつき敵だと思つていた少年、天宮草太がいた。

バリアジャケツトを展開し、剣を持つその姿にかつての我ならば慢心しながらも足がすくんでいただろう。

だが、なぜか怖いという恐怖はなくむしろ、修行の成果が楽しみという感情がある。

「なんで君は神威達に協力する？ 彼は極悪人なんだぞ！」

「我が友を侮辱するな天宮。我こそがこちらから頼んだのだ。むしろ我らが極悪人である。貶すならば我にしろ」

「信じられるか！ どうせはやてをモノにするためにしたに違いない！」

はやてをモノ……………だと？

「ふざけるな貴様。はやてはモノではない！　はやては人だ。我が恩人だ！　貴様のよ
うな何も知らぬ人間が語るな！」

「踏み台の言うことなんか信用できるか！　お前ははやての友達かもしれないが関係な
い！　間違ったことは必ず止めなきやいけないんだ!!」

天宮は中段の構えをとる。

もはや舌戦は無意味か………。ならば我も拳を固めるまで。

「ならば止めてみせよ。我はもはや慢心せぬ、見下さぬ。弱者として、強者たるものに立
ち向かうのみ」

真のヒーローとは弱者のために拳を振るう。たとえどんな状況だろう、どんな環境だ
ろうと彼らはそれをやめない。

なぜなら『ヒーロー』だから。

「礼を言うぞ天宮。我は貴様と出会い、我が友と出会い自身の本来の夢と目標を思い出
せた。そして無力な弱者と知り、一から鍛え直した」

杏子殿の槍術、さやか殿の剣術、マミ殿の銃、そしてまどか殿の弓術を教授させても
らったとしても我はその戦い方が合わなかった。

才能がないと自覚していたとしてもここまでとは思わなかった。絶望もした。

しかしまどか殿の紹介で我は生涯の師となる者に出会うことができた。

そして極めることが遂にできた。

「天宮よ。貴様は力の源はどこにあると思う？」

「？ 心だろ。そんな簡単なこと」

「そう力の源は心と言える者もいる。しかしそれは人それぞれである。我が友、ソラならば力の源はここと言うであろう」

我は自身の胸を軽く叩く。

天宮が「俺と同じ」とほざいたが否定した。

神威ソラは答えた。力の源は魂である、と。

折れない、屈しない、たとえ絶対的なモノが立ちはだかることになるうと最期の一瞬まで挑み続ける鋼の魂（信念）である。

無論、彼に慕う少女達も同じ考えである。

「しかし、我は我が友と貴様の考えとは違う」

「それじゃあお前の力の源はなんなんだよ」

「よくぞ聞いてくれた」

我は師から教わって、一つの真理にたどり着いた。

我は未だバリアジャケットを展開していない。否、最初から必要ない。

バリアジャケットなどただの動きやすい服装に変わる程度の認識でしかない！

インテリジエントデバイスだったがソラの知り合いである女神に頼んでストレートデバイスに変えてもらった。

小うるさいデバイスなど必要ないからな。

「刮目せよ！ 我がたどり着いた一つの境地を！ 今こそ答えよう我の力の源とは！」
そのとき、我は師と最初に出会ったときのことを思い出した。

走馬灯のように。そう、師は言った。

『見よ、我が輩の芸術的肉体を!!』

——芸術的な『筋肉』こそ真理であると!!

「そう我の力の源こそ! 『筋肉』である!!」

そう叫んだときバリアジャケットは展開され、肉体が普通の小学生から大人になり、一般人とは思えない位に筋肉が盛り上がった。

これは大人モードと言われる変身魔法である。

そしてバリアジャケットも変化した。

上半身は開いた学生服でズボンはレギンス。我が動きやすいように改良したのだ。

そして両手には『錬成陣』が込まれ、掌を開閉できるグローブがはめ込まれていた。

「スピード、パワー、そしてテクニクの全てが必要なのは筋肉である！　それが我がた

どり着いた一つ真理なりイイイイ!!」

「いったい何があったんだお前に!?!　いつもなのは達につき回っていたお前はどこにいった!?!」

「そんなもの筋肉の前では無意味！　マッスルパワーの前では性欲、食欲、睡眠欲のあらゆる欲は抑制できる!!　見よ、この芸術的肉体を！」

「見たくないし、服着ろ！」

せつかく見せているのに、ツッコまれたのが解せぬ。しかし、この芸術的筋肉を隠すなど笑止千万である。

「うわー、スッゲー筋肉……………」

「やっぱりアームストロング少佐を紹介して正解だったね！　ようこそイロモノワールドへ！」

「何があったんだ彼に!?!」

「落ち着いてクロノ少年。オレも現実逃避したいんだから」

ふふん、それぞれ開いた口が塞がらないようだ。では行くぞ天宮！
愛と筋肉の戦士の我の前にひれ伏せ！！

第二十九話

激闘の轟音が鳴り響く中で、あつという間に衛とオリ主くんの戦いは中盤戦に持ち越した。

オリ主くんが剣を降り下ろせば、衛は腕で受け止め。

衛が上段蹴りを放てば、オリ主は動体視力と直感で回避した。

「普通はその腕は斬れるだろ!？」

「マッスルパワーの前では無意味! 鋼の肉体の真髄を見るがいい!」

「こいつ、どうかしてるよ!」

オレもそう思う。

後、なんか目がおかしいのかな?

衛が五人になった。いやマジで。

「僕の目はどうかしてるかな。天道衛が五人に増えたように見えるのだが」

「アームストロング少佐の秘技の一つの残像拳だよ!」

「いやあり得ないだろ! 残像って実体のない分身だよな!? あれ、思いきり実体になってるよな!」

クロノ少年の言う通り五人同時でオリ主くんを集団リンチしてる。実体なければあの四人はなんなんだよ……………」

「なんかオレより強くなってるね？」

「そうだねー。肉弾戦に持ち込まれたらおしまいだよ、あれ」

まどかの言う通りである。

衛が一旦距離を取り、それを追撃するオリ主くん。衛は一息を入れて、叫ぶ。

「マッスルスパーク!!」

「ぐあああああ!」

「出たアアアアア身体の生態電気を放出させる奥義マッスルスパークだアアアア!!」

まどかのテンション高めに解説する通り、身体から放電され、オリ主くんは感電してしまい、クラクラと空中に浮かんでいた。

「あれって人体でもできるの? 解説のまどかさんや」

「今の天道くんは千香ちゃんレベルの変態だから当然できるよ」

「ああ、そうなのね……………」

やはり変態は最強か……………。もうやだ……………。

非常識過ぎて精神が摩耗して正気になれないや……………。

「もー疲れた……………」

「ソラくん、休みたいなら今日は帰って私とベッドインしようよ！」

「君は公務員面前でなにを言ってるんだ!？」

「ああ、そうだね。もうそれでいいや……………」

「神威!? 帰ってこい! 頼むから!」

もう何も怖くない。

全て委ねようと思った。すると誰かが優しく顔を抱いてきた。

「ソラくん、もうがんばらなくていいわ。あとはお姉ちゃんが守ってあげる」

「ああ……………お姉ちゃんの身体、暖かいや……………」

甘いニオイがするな……………。後、最近大きくなつた微かな膨らみが心地よい。

「ソラくんの甘えさせるなんて好感度上昇をはかるなんて、ママさん恐ろしい子!」

「ふふ、弟を甘えさせるのまもお姉ちゃんの特権です♪」

まどかが吠えているがなんにも聞こえないことにした。

あーなんにも聞こえないー。ボクわかんない……………。

「フオオオたぎって来たぞ天宮アアアア!」

「こいつ化け物か!?! 俺のダークインパルスを生身で受けきつただと!?!」

「お返しだ! ゆけい、芸術的な錬成物達よ!」

轟音と共にオレのSUN値が元に戻った。

はっ、オレは何を!?

正氣に戻ったとき、衛はビルの瓦礫を打ち込み、ポーズ取ったマツスルの銅像達を鍊成し、それをオリ主くんに向けて発射。

なんとか避けることができたが顔がかなり引きずって、苦笑をしていた。確かに当たりたくないなあれ。

「あ、ママさんもういいです……………」

「あら、残念」

「正氣に戻ったね……………あと少して洗脳しようと考えてたのに」

「何気に恐ろしいまどかに戦慄を覚える」

そんなやり取りしていると、衛は真っ直ぐにオリ主に突っ込み、正拳突きを構えをとる。

「くらえ、師匠直伝! マツスルウウインパクトオオオオオ!!」

「ぐ、アアアアア!?!」

その正拳突きでオリ主くんはビルを貫き、地面に叩きつけられた。

ジュツドオオオオオオンとどっかの野菜屋人のような音と共に砂煙が舞った。

砂煙が晴れたとき、オリ主くんはピクリとも動かなくなつたが、千香が近づいて生存

確認。

あ、なんとか生きているらしい。

「見たかこれこそが芸術的筋肉と芸術的奥義！ エクセレントエレガントな
りイイイイ!!」

「無駄に暑苦しいなオイ」

ポーズをとる衛にツツコむ。

するとオレの眩きと同時にオリ主さんの元に新たに二名が叩きつけられた。

フェイトと高町だ。アルフは千香によってビルの屋上でしばられてハアハアと興奮
した息をあげている。

そういえば、千香が『アルフは縛って目覚めさせる』とか言ってたな……………。

あいつ、戦いの最中レフリーだけでなくそんなこともしてたんだな。

「全滅だな」

「全滅だね」

「帰りましょうソラくん」

「いやそう簡単には帰せない。同行してもらおう」

今さら、クロノ少年は仕事しようと杖を構える。ぶつちやけ、オレらにはこんな結界
意味ないし。

というかね——

「衛くんが結界壊そうとしているよ?」

「えっ?」

指さす方向には正拳突き of 構えをとる衛。

「マッスルウウインパクトオオオオオ!!」

ガツシャアアアアンツ!!

ガラスが割れるような音がし、結界は壊された。アースラ組や守護騎士達も啞然である。

後から聞いたけど、あの結界結構頑丈だったらしい。

それを物理的に破壊したらそりゃビビるわな。

その隙にドコでもドアを展開してオレ達神器使いは逃げるのだった。

☆☆☆

「フハハハハ! 見てくれはやて! このエクセレントな筋肉を!!」

「ホンマ誰やあんた!! 私知ってる衛くんやないで!」

帰ってきたら、はやては目を開かせて驚愕していた。

そりゃあ、草食系主人公的な少年がいきなり筋肉至上主義者にならな
あ……………。

「まどかちゃんいつたい誰を紹介したん!? 何があつたんや衛くんに!」

「彼はアームストロング少佐という元軍人でマッスル至上主義者の錬金術士の教えを受
けて筋肉を武器にするマッスルファイターになつたんだよ!」

「なんでそんな人を紹介したん!?!」

「おもし——……………彼のためだからだよ♪ ティヒヒヒヒヒ♪」

「今、おもしろいっていいかけたよね!?!」

相変わらず黒いよまどかさんや。はやて、ホントにごめん……………。

「いやソラくんが謝ることないで。ていうか、なんかザフィーラと仲良くなってるし」

「あいつの人間形態ゴツイからなあ」

二人同時に嘆息する。すると、ほむらが爆弾発言を投下した。

「そういえば、天道衛とソラって前世の世界で会ってたわよ」

「……………え?」

「時々、彼が前世の友人の言葉を口に出していたから気になって、女神さんに電話したら
彼って幼稚園の時にソラと出会っていたらしいわ」

「……………」

つまりあれか？ オレは前世の友人を変態にしてしまったってことか？

……………アハハハハ♪

「八神、首吊りの縄ある？」

「しつかりしい！ 簡単に死んだらあかんで！」

「大丈夫。友達を変態にしたから、もう何も怖くない……………!!」

「なんか知らへんけど、それやめて！ マミるって絶対！」

マミるってマミさんのことかなあ？ もうどうでもいいやー。

その後、オレは現実逃避し、暴走したほむらとまどかと千香をはやて一人が阻止してくれたいらしい。

ありがたやーありがたやー（ぶっ壊れ）

第三十話

だんだん寒くなる十一月の末。

その日の夕方、オレと杏子はミカン箱を買いに行っていた。

先月はヴィータとシグナム達によってぐちゃぐちゃにされたため、今回は杏子が付いている。

ぶっちゃければ、杏子にとって食べ物を粗末にされてたまるかという理由もあつての同行だと思う。

一緒に行くと言い出したときの恥ずかしそうな顔は気のせいだろな、きつと。というわけでコタツの装飾品もとい食品購入というリターンマッチである。

ミツシヨンであるブツは手に入り、あとは帰宅すればミツシヨンコンプリートだ。

「つてなんか魔女結界出てね？」

「あーもしかしてさ。誰か絶望したじゃねーの？」

「高松かフェイト辺りじゃない？ 一応、魔法少女だし」

「……………あえてスルーしてたけど、これ魔女結界じゃねーからな。あと高松じゃなくて高町な」

「安心しろ。オレもあえてわかっててボケたから」
「だろーな」

はっはっはつと談笑するオレ達の目の前に仮面をつけた男が現れる。なんだこいつ？

「闇の書に近づくな。さもなければ災いに巻き込まれるぞ」

「災いつて……………ねえ」

「アタシ達の前世の成れの果てが災いだったし、あんま怖くないし」

「というわけでやり直せ。テイクツー、アクシヨン」

「いや、なに普通にやり直しさせるのさアンタ達」

仮面の男にツッコミを入れられた。今のでわかったけど、こいつ実は女じゃねえの？

しゃべり方がそうっぽいし。

「ソラ、こいつ女じゃねえの？　しゃべり方がそうっぽいし」

「あ、それ地の文で言ったからもういいよ」

「メタいよアンタ！　というかあつさり見破られた!？」

「えっ、正解だったの？」

「アタシはてつきり今流行りのオネエという男性かと」

「心も身体も女だよあたしは!!」

そう言うものの男声でその口調は、ねえー……………。

「うわっ、ということはいつ自分で言っておいて男装してるじゃん」

「この変態!!」

「アンタ達そんなにあたしをいじめて楽しいの!？」

オレと杏子のコンビネーションで彼女のメンタルのライフポイントはゼロである。

遠くから「もうやめて! ロッテのライフはゼロよ!!」って聞こえた気がしたが聞きたくないことがあるので聞くことにした。

「んで、なにしに来たんだ変態」

「あんた容赦なく傷ついた女の子の心を扶えること言うわね!」

「あいにく、変態にひどいめにあってるから容赦ないんだわ。あ。あと杏子も容赦なく頼む。あいつらの抑止力が増えたらこちらも助かる」

「アイアイサー♪」

「ウガアアアア! もう許さない!!」

遂にぶちぎれた男装少女がオレ達に向けて回し蹴りを放つ。

オレ達はそれをそれぞれ左右に分かれて回避し、さらにオレに追撃してこようとす
る。

オレはその場に飛び引こうとしたが、魔力の鎖に巻き付かれた。

「バインド？ もう一人いるんだな」

オレは咄嗟に杏子とアイコンタクトをとり、追撃の拳を腹部に受けた。

いつたいなあー。

でも杏子はオレの考えを理解して、すぐさまに民家の屋根に飛び乗って移動した。

頼んだぞ杏子。

「さーてと、どうしようかねー」

仮面の男装ヤローの追撃は続いていた。

オレはあえてバインドを神器で解かず、そのままの状態で左右に身体を動かして回避する。

「あ、オイ。そこミカン箱あるから気をつけ」

「はアアアアア!!」

バチャ、ベチャ!!

「……………オイ、またか」

手を額で覆い隠したかった。また潰されたよ定価314円。どうしよう、これ杏子のぶちギレフラグだよな？

「オレはもうしーらないっ」と

「なっ!」

召喚した神器全てを開く者を手に取り、バインドを解錠した。

ガキイイインツ

拳と神器がぶつかり、金属音が鳴る。

「くっ、なんだよそれ!」

「神器。魂の武器って説明するのもこれで何度目だよオイ。もう面倒だから時空管理局のクロノ少年に聞いてくれ」

「クロ助を知っているのか!」

「えっ、まさかの知り合い? あのヤロー、暗殺者まで用意するとはもう許せん。ミカン箱一年分を賠償金として請求してやる」

というわけで邪魔な拳を弾き、仮面の男装ヤローに神器を挿し込み、かかっている魔法を全て解錠する。

ガチャリと音が鳴り、男装から猫耳美少女にシフトチェンジしたことに少し驚いたが、すぐに動きをバインドで封じる。

「な、なんで!?! 魔法が解けた!?! しかもこの術式はなんなんだよ!?!」

「知らなくて当然だろ。ここにはない世界の魔法で創ったバインドだから」

「ここにはない魔法って……………」

「聞きたいことがいろいろあると思うけど、あつちも終わったぞ」

昆で巻かれたもう一人の仮面の男装ヤローが杏子に連れて来られた。

「アリアー！」

「ごめん……………こいつの魔法に翻弄されて……………」

「幻想共をナメるなよ。さてとソラ。そういえばミカン——」

そう言った杏子に無言でオレは潰れた無惨なミカン箱に指をさした。

ついでに「こいつらが原因」って言っておいた。

「てめえら……………食い物を粗末にするなって母ちゃんに言われなかったのか……………」

「ああん？」

「ひいー！」

「ソラ、バット出せ。こいつらボコボコにしてやる！」

というわけで家にあつたバットを召喚して貸した。

一応、バリアジャケット的なものをきているし、衝撃だけで大丈夫かもしれないけど。

「結構打撃性のある武器になるんだよな、あれ」

「ちよつとあんた止めなさいよ！ この赤毛、目がマジよ!?!」

「あ、無理。こいつを食い物に対する怨みは深海より深いし、あと」

「あと……………なによ？」

「せっかく並んで買ったオレ達の苦勞……………どうしてくれるんだ。あ？」

「こいつもキレてた！ つてお願い、女の子が女の子を殴るシチュエーションはさすがにえぬ——にやあアアアアアアアアアア!!」

ロツテとアリアという猫耳美少女達は杏子が気が住むまでしばかれた。

え？ オレはどうしてたって？

携帯でラインしてましたが、なにか？

☆☆☆

縄で縛った猫耳美少女達を八神家に連れていき、八神達に事情を説明した。

ものすごくかわいいそうな目で二人に同情していた。

そんなにひどいことしたかなあ。

「いや、抵抗できへん少女達に容赦なくバッドでシバくなんてさすがにひどいで」

「神威家の逆鱗に触れた馬鹿共の当然の末路だろ」

「エゲツないで……………」

「というか、あやし達も最悪あなってたこと？」

ヴィータもなつていたかもしれない末路に少し震えていた。

大袈裟だなあ。ズタボロのボロ雑巾になった程度なのに。

「大袈裟や！　大惨事や！　ちよつと自重してほしいくらいやで!!」

「八神、一番ひどいお仕置きはマミることだ」

「それ聞いたことあるけどどういうことなん？」

「主に芋虫の化け物にこいつらの頭を食い潰させる♪」

「笑顔で悲惨なこと言うなや！　あんたもあんたでエゲツないで!」

「悲惨な死に方させることがマミらせることさ」

「あかん。誰かこの人止めて……………」

おやおや、猫耳少女達が怯えているねえ。別にするつもりはないのになー。

チャキ

だがしかし他は別だが。ほむらはグロックを猫耳姉妹に向ける。

「さて、さつさとあなた達の目的を話さない。答えはイエスかハイよ」

「拒否権ないし、グロック17構えないで！　それは質量兵器よ!」

「質量兵器つてなにかしら？　これは火薬が入ったエアガンよ。撃てば一撃で天国へ

逝ける優れものよ」

「死んでるよねそれ!」

「ほむらがアリアに脅迫もとい尋問を行っている。彼女はやれやれと嘆息を吐き千香を呼んだ。」

「あ、ヤベ。あいつら終わった。」

「千香、あなたにこの子達に変態の恐ろしさを教えてあげなさい」

「アイアイサー♪ ゲヘヘ、さあ姉ちゃん。お着替えしましょうねー？」

「離しなさいよ！ あんたなにをするつもりよ!?!」

「ちよつとした着せ替え人形になってもらうだけだから不安ならなくていいよ♪」

「離して！ やめてよ!」

「あ、私も協力するで」

「ロツテを連れて八神と千香は台所へ消えて行った。」

「そして——数分間、ロツテの悲鳴が響いた。」

「ちよつとロツテになにしたのよ!?!」

「……………」

「目を逸らすほどのことされてるの!？」

「いや別に肉体的にひどいことはされてないよ……………たぶん」

「自分でお願ひしたのもなんなのだけど、ちよつと罪悪感あるわ……………ごめんなさい」

「あの人達ほんとロツテになにしてるの!？」

アリアのツツコミが終わると同時に目が虚ろで縄から解放されたロツテがフラフラとアリアの前まで歩いて倒れた。

その後にホクホクと満足した二人が出てきた。

「うう……………アリアあ……………あたし汚されちゃったよー」

「ギリツ、あんた達なにをしたのよー」

射殺さんとばかりに八神と千香を睨むアリア。二人は笑顔で、

「コスプレ写真会!!」

サムアツプで返した。

ポカーンとアリアが唖然とするのも無理はないと思う。

「いやー素材がよくてバニー、婦警、ブルマ、裸ジーンズ、巫女、花嫁、墮天使エロメイド、裸エプロンなどのエクトセトラをいろいろ着せることができたよー」

「さすが千香ちゃんやで。絶妙なアングルとコスチュームを用意するなんて、もう匠の域やで！ 特に墮天使エロメイドは素晴らしい!! 猫耳とメイド服は萌え素材やで！」

「そういうはやてこそチョイスとポーズの要求が素晴らしかったよ！　ちなみにボクは裸エプロンがよかったです!!」

鼻息を荒くするほど彼女達は熱が籠った会話をし、ガツと握手した。変態とエロオヤジの友情である。

とうか八神つてエロオヤジだったんだな。

「ちなみに管理局と全次元世界にアップする予定」

「焼き増し可能で十二月九日にアップ予定。カミングスーン!!」

「いやああああああたしの黒歴史がああああ!!」

「ロツテしつかりして!!」

そりゃ、全国ネット以上の驚異だなオイ。遂に発狂したぞロツテ。

まあ、なんにせよ……………。

「ついでにアリアも撮ってやれば?」

そう言った直後、獲物を見る目でアリアを見る二人。

失言?　いいえ、ロツテのためを思つての道連れです。

「……………ナイスアイデア」

「あ、あなた!　なんて恐ろしいことを!?!　あつ、ちよつ、やめてエエエエ離してエエエエ!!」

アリアが台所へ消えて行った後、オレとほむらは音楽機器を取り出して悲鳴を聞かないようにした。

あ、『倉リス』っていいな。

ほむらは『ビーンズ』聞いているし。

第三十一話

どこか曇り空な天気。今日は一雨が降ったり止んだりする天気である。

ロツテ、アリアの目的はどうかやら闇の書の封印らしいとわかった。闇の書には完成したら全てを破壊し尽くし、さらには転生機能で主が死んだ後に他の主に取り移る尻軽機能がついていた。

浮気的な本である。

そして壊れた彼女達の心に漬け込んで尋問するなんて、ほむらマジ策士。

まあなんにせよ。

「ややこしくなってきたなあ」

闇の書をはやてごと封印するのと、闇の書を破棄してシグナム達を殺すこと。

どっちが最善なのかねえ……………。

そう思いながらぼんやりとまどか達と昼食をとっていると、オリ主くとたかま

……………なんだっけ？

「高町なのはなの！」

「おおっ、思い出した。高松なのぼだな。うん記憶した」

「微妙に違うから！ 高町だから！ なのはだから！」

「なのは、早速ペースをとられているぞ……………」

それが安定のオレクオリティである。呆れながらオリ主くんは話を続ける。

「今度はなに企んでいる？」

「なーんにも。今どん詰まり状態で悩んでいる最中なのよねー」

「嘘つけ踏み台野郎。どうせはやてを手込めにしたと考えているのだろうか？」

「そうなの!? 妻として浮気は許さないよソラくん！」

「いつからまどかはオレの奥さんになった。というか、おあいにくオレは人の大切な人に出すほど外道じゃないから」

くだらないと言わんばかりに半目でオリ主くんに返した。オリ主くんは完全にこちらを敵意している。

「しょもない……………」

「神威、お前の野望は俺が必ず止めてみせる」

「野望ってなに？ ハーレムウハウハ帝国とか言うなよ。つくつたらつくつたらでまどほむコンビがデストロイしてくると思うからつくくる気なんてさらさらない」

「がーん！」

「なんで千香がショック受けるの？」

「みんながソラのハーレムパーティなら、その一員としてボクが被写体として撮ってあげるのに」

「R指定になりそうだから却下」

千香の写真は全年齢対象ではない。

しかし、最後まで高町は微妙な顔をしていたな。昔あつた敵意はどこいった？

☆☆☆

今日、八神が入院した。

急展開すぎるかもしれないが、闇の書の魔力吸収が増加したらしい。ロツテリア姉妹の暴露で空気読んで吸収のレート上げたな。

オレとさやかと千香はその御見舞いに病室に向かった。

「はやてー御見舞いにきた……………よ?」

八神の病室にいたのは、月村と……………えつと……………なんでいるんだ。

「オイこら、なんで私の名前が言えないのよ」

「ソラ、確かバーニング竹田だよ」

「違うわよ。確か竹田バーニングよ」

「どっちも違うよ！ 何よその竹田とバーニングを合わせた芸名!? バニングスよ、アリサ・バニングス！」

「「アリさんマーク？」」

「引越し業者でもないわー!!」

うなーと手を振り上げ、目をつり上げて怒るバニングス。

うむうむ、いつも通りである。

「バニングスと月田さんはなんでここにいるの？」

「今度のターゲットは私!!」

この漫才は永遠に終わらないでござる。

閑話休題

バニングスと月村は八神の知り合いのようだった。

ということはいずれにしても高町達に気づかれる可能性がある。

リーゼ、アリア達は帰したが写真で黙らせることができる。

だが、八神の友人となると記憶を消すかしないと高町達に闇の書の主が誰かバレてしまふ。

「厄介なものだ……………」

「そだね……………」

公園のベンチに座って、オレと千香は憂鬱そうに嘆息を吐く。白い息が空に舞い上がる。

現在、オレ達はさやかに八神の護衛を任せてこれからすることに対しての話し合いをしていた。

「闇の書を消すか、はやての死を待つか……………か。どちらも嫌だねー」

「かと言ってオレの神器を使えば八神から闇の書の呪縛を切り離せば、闇の書は転生する可能性がある」

「どこが悪いかわかればソラの専売特許が使えるのにね」

オレの解錠は対象がわからないと発動しないし、闇雲使ったとしたら八神に悪影響が及ぼすかもしれない。だから今は迂闊に手は出せないのだ。

「ソラ……………」

「わかってる。やられたな」

いつの間にか結界に覆われており、オレ達は孤立していた。空から飛び降りたのはオ

り主くと高町か。

「なんのようだ？　こちらはちと虫の居所が悪いんだ」

「お前をここで止める。原作をこれ以上めちやくちやにされてたまるか」

「原作原作って、ここは原作とは違うって何度言えばわかるんだお前」

もはや呆れたため息しかでない。オレは神器を召喚し、戦闘準備に入る。

神器を召喚した千香も高町に飛び込んでいき、スタンロッドを降り下ろす。

あれが戦時中の千香の戦い方だ。本来、スタンロッドじゃなくてナイフだけど。

「はアアアアア!!」

遅い。ぬぶい攻撃をオレは避けて、飛び上がる。

「かかった!」

「んー?」

設置されたバインドに身体を捕らえられたようだ。うーん、別に驚異じゃないし、早く解錠――

ザシユツ

「コフツ……………!?!」

ナイフがオレの腹部に突き刺さった。オリ主くんが投げたモノで……………まさか、あいつ……………!

「お、前殺すつもりで……………!!」

「これもはやてのためだ」

何が八神のためだよあのヤロー。

バインドを解錠し、ナイフを抜いた。しかし身体が痺れて上手く動けなくなっていた。

……………毒が塗られたナイフか!

くつ、飛んでいたら落下する。

高度を下げようと気をとられていたとき、オリ主くんの剣が降り下ろされた。

キインツ

全てを開く者
神器でそれを防ぎ、金属音が鳴り、オレは地面に叩きつけられた。

オレは肺にあった息を吐き出されてしまった。

「このデバイスは殺傷設定にしている。神威、お前だけは絶対に仕留める」
そう言つてオレを見据えるオリ主くん。

本気のような……。

そうくるならこちらも答えたいところだが、毒で身体が上手く立てない。

オリ主くんは四つん這いとなつたそんなオレを見下ろし、剣を振り上げた。

「死ね」

断罪の剣はオレの元に下ろされる。

ああくそ、ここでオレは……………。

そう思い、目を閉じる。走馬灯を思い出していると金属音が鳴り響く。

「千……………香……………？」

無表情な千香がオリ主くんの剣をオレを苦しめたナイフで防いだ光景を最後にオレは氣を失つた。

(千香サイド)

高町なのはどの戦いをどう面白おかしくしよう画策していた中、ソラが刺された。

——そのときボクは目の前の小娘のことなんかどうでもよくなった。

ソラを殺そうとしてきたあの男に、ボクの全てが冷え込んだ。

感情も頭も全て。

オリ主くんの剣を受け止めたとき、ソラの意識がなくなつたのか目を瞑った。

ボクはオリ主くんの剣を弾き返して、殺意込めた目でみた。

「くっ、天ヶ瀬さん！　そこをどいてくれ！　こいつは殺さないと全てをめちやくちやにする！」

めちやくちやにする？　なにわけの分からないことを言ってるのこの男は？

そんなことでボクのソラを傷つけたの？

「君は………許さない。泣いても、許し請おうとも、ボクは君を潰す………」

ボクは毒のナイフを構える。

戦時中に愛用したナイフは今は持っていないけど、刃を神器で纏った毒のナイフなら非殺傷設定にできるし、毒もまわらないはずだ。

ソラならたぶんこんなヤツでも許すだろう。

だけどボクは違う。立てないようにしてやる。

うん、そうしよう。

「だから安心してとつと死ぬ。クソザコ」

かつてオークに向かつて言った言葉をオリまくんに向けていい放つ。

ボクはオリまくんの目の前まであつという間に接近した。

ボキィ!!!

彼は剣で応戦する前にボクは彼の腕を掴み、その間接技でへし折る。

「がアアアアア!」

利き腕を破壊された後にボクはそいつの鳩尾に蹴りを放つ。

空気を吐き出され、後方へ飛んだ。

「まだまだよ。まだ終わらさない」

また失つてたまるか。ソラを失うなんてもう嫌だ。

冷たくなったソラをボクは何もできなかった。何も返せなかった。だから……………。

「ボクはソラの敵を排除する。それでソラが生きていけるならボクは人形でもなんでも

なつてやる」

起き上がるオリ主くんにもた接近した。オリ主くんは今度は、すぐに剣を降り下ろしたが、ナイフで受け流した。

毒のナイフは脆く砕け散った。安物だねこれは。

けれどどうでもいい。後は打ち込むだけだから。

神器守護神の壁で纏った拳をオリ主くんの鳩尾に打ち込む！

「がはっ!？」

浸透剄という中国拳法の奥義を打ち込んだ。その打撃はバリアジャケットという防護服を貫通するし、内部も破壊する。

血を吐いて、オリ主くんは白目を向いて事切れた。チツ、動けたらもう一回ぶちこんでやるのに。

「草太くん!」

「別に心配する必要はないよ高町なのは。内蔵に攻撃したけど命の別状はないよ」

ボクはそう言ってソラの神器を拾う。うん、まだ使えるみたい。

すぐにシヤマルに見せれば大丈夫かな。

ボクはそう思い、ドコでもドアを展開した。

すると、高町なのはに呼び止められて振り返る。

「千香ちゃん、その私……………」

「君は悪くないよ。悪いのはそいつだから。あと、そいつに伝えておいてね。次にソラを殺すつもりなら——」

ボクは一息入れて言った。

「——君の大切な者全て殺される覚悟してね」

凍えるような一言を最後にボクは高町なのはを背を向けた。

第三十二話

目を覚ませば知らない天井だった。真っ白な天井で殺風景な部屋にオレはベッドで寝ていた。

病院か……？

あれ、オレは……………。

「気がついたのね！」

「よかった、よかったよう……………」

まどかとほむらがベッドに寝るオレを押し倒すような形で抱きついてきた。

うん、とりあえず——

「いたたたたた!! ほむらお願いお腹からどけて！ あとまどか、鼻息を荒くしながら

抱いてくるな！ 怖いマジで！」

「ソラちゃんと規制事実つくるチャンスだよほむらちゃん！」

「了解！ みんながいない間に畳み掛けるわよ！」

「確信犯!?!」

って服を脱がしにかかるなアアアア!! 誰かヘルプ!!

ガラツ

唐突に病室の部屋が開き、そこにいたのは、シヤマルさんと衛だった。

「……………お邪魔みたいね」

「うむ、さすが我が友。二人の少女を両手に持つとはなかなかの甲斐性がありだな。我はその功績に免じて今日のはやての面会で貴様の武勇伝を語ってやろう！」

「そうじゃあ、ごゆつくり……………」

「シヤマル先生カムバアアアアアアツク!!」

無慈悲に閉められた扉。脱がされる衣服。そして襲い掛かる肉食少女達。

今日ほど貞操の危機を感じたことはなかった……………。

その後に来たママさんとさやかに救われた。

千香が当時の状況をこう語っていた。

「カオスだね!!」

お前が言うなとツツコミたかったが精神的に参っていたので叶わなかった。

閑話休題

オリ主くんに刺された後、オレはシャマル先生に応急措置されて病院に搬送されたらしい。

搬送された後にほむら、さやか、杏子、マミさんがオリ主くんブッコロ宣言しようとしたがそれをまどかと千香が意外にも止めた。

理由を聞くと、

「ソラなら殺されたとしても許すと思うから」

「うん、ソラくんって根は優しいから」

二人の少女の理由に凶星を付かれたオレは目を逸らさずにはいられなかった。

優しいって………いや、さすがにオレもやる時はやるよ？

ただまあ、生きているから許してやろうかなって思っている程度だし。

その後の二人は「だから今日は熱い夜を過ごそう!!」と同時に言い出した。

いろいろ台無しである。

返せよオレの感動。

まあ、なんにせよ。

「生きていることはすばらしい………」

さやか「あ、こら杏子！ それはソラのために剥いたリンゴだよ！」

杏子「いいじゃんカテーこと言うなよ、さやか」

こちらの見舞い品を物色する少女達。

マミさん「はい、ソラくん。アーン♪」

まどか「マミさん、その役目は私のものだよ？」

マミさん「ふふ、弟の看病はお姉ちゃんの特権というものよ。残念だけど、譲れない

わよまどかさん」

まどか「よろしい。ならばお姉ちゃん戦争だよマミさん」

ほむら「私も同盟として参加するわ」

マミさん「かかって来なさいな、シスターズ。お姉ちゃんがお相手させてもらうわ」

第一次姉妹戦争を始める少女達。

千香「さあ、ソラ。こっち向いてー。そしてセクシーなポーズを!!」

カメラを構え、何か要求する少女。

もう一度言おう……………。

「生きていることはすばらしい……………!」

「ソラくん、しっかりして! 現実逃避しないで!」

「ごめんシヤマルさん、オレはこのカオスな空間に耐えられないよ……………。もうゴールしていいよね?」

「ゴールってなに!? 何をゴールするの!？」

姉妹のようにじやれあう杏子とさやか。

まどほむ同盟VSお姉ちゃんママ。

変な写真を撮ろうとする千香。

全くもって癒しがほしい今日この頃である。見舞いに来ていたシャマルさんが唯一のオアシスです。

「しばらく戦線復帰できないなあ」

「毒はもう抜けたって聞いているけど大丈夫なの?」

「まあね。抗体もできたし、次くらっても平気」

「神器使いってこんな規格外な人達ばかりかしら?」

顔をひきつらせて苦笑するシャマルさんに対して千香は「いやソラとうちの師匠だけだから」と首を振るう。

失礼な。オレの師匠は毒よりキツイ病原体を敵にぶちこまれたときに、戦いながらその病原体に順応していたぞ。

「人間じゃなくて人外ね」

「解せぬ。まあそれはさておき、八神の闇の書の件はどうかするか考えている?」

「管制人格を目覚めさせて、対話してどうにかするということにしているわ」

「管制人格？」

「闇の書を管理するAIよ。私たちと同じプログラムで感情もあるわ」

ふうん。そんなのがあるのか。というかそれかそれかなんとかなるなら良いのだけど。

「タイムリミットも近い。だから私達は全力ではやてちゃんのために蒐集しなくちゃいけないわ」

「なるほど？ で、オレ達の魔力をいただきたいと？」

シャマルさんは頷く。

「リンカーコアの摘出は激痛らしいわ。それでもお願い。はやてちゃんのために……………」

シャマルさんは頭を下げてオレ達にお願いした。

いや、それよりも聞きたいことがある。

「リンカーコアってなんぞ？」

「リンカーンのコアじゃないの？」

「リンカーンの核ってあったかしら？」

「違うわよ。魔力を作り出す器官よ？ 知らないの？」

ほむらとまどかの発言にシャマルさんは否定する。

知らないも何も……………。

「オレ達リンカーンなコアないもん」

「えっ?」

オレ達の魔力は体力と精神力を混ぜて初めて生み出されるものだ。だからそういう便利器官あれば、是非ともほしいなそれ。

「……………それじゃあ、どうやって蒐集しようかしら?」

「……………あ……………」

結局、魔力を放出するという形で蒐集しました。

まどかの無尽蔵魔力量にシャマルさんびっくりらしいです

第三十三話

シンシンと降る雪は止み、そして真つ暗な夜空となった。

本日はクリスマススイブである。

サンタという真つ赤に着た小太りのオジサンが白い袋に入れたプレゼント持って、良い子に配るといふ行事がある夜であるらしい。

オレも千香とその師匠と一緒にクリスマスパーティーをしたものだったがただのパーティーではなかった。

なんだよサンタコスで爆弾を敵陣に投げつけるって。どこのテロリストだよ。

八神に教えられて初めてサンタがテロリストではないことに気づいた。

顔をひきつらせていたなあいつ。

「というわけでまどかさんや。どうしてこう外が騒がしいのかね？」

「さあ？　なんか魔女結界みたいなのも張られてるし」

「なんですと？　それはまずい。早く魔法少女杏子たんを呼ばねば」

「のんきに言ってるねえで早く外に出ろ!!　あと杏子たんって言うなー」

お茶を飲んでくつろいでいたら、杏子が扉を開けてシャウトしてきた。

やれやれ………なにが起きているのやら。

そんなこんなでオレはダルい身体を動かすのだった。

と言つてもほぼ完治してるけどね。

閑話休題

外に出れば、高町と衛とオリ主くんが銀髪巨乳なお姉さんと空中戦戦していた。

「これはどういうことだ？ よし、さやか。三十文字以内で説明させてみせよ」

「無理」

「ではママさん」

「無茶ね」

「むむ、これは仕方ない。それではそこでリボンで縛られたロツテりあども。十文字で説明しろ」

「略すな！ てか、なんであたし達だけハードル上がってるのよ!？」

「いやテメーらが原因だろ」

杏子がツッコんだ理由は、このロツテリあ姉妹が八神の目の前で守護騎士達が消える光景を見せて絶望させた。

結果、八神が銀髪お姉さんに変身し、全てぶつ壊してやるという願望の元でオリ主くん達に戦いを挑んだ。

フェイトもいたらしいけど、吸収されて銀髪お姉さんの中にいるらしい。

うん、とりあえず。

「八神って魔法少女だったの？」

「ツッコむところ違うし、魔女じゃないから、あれ。管制人格ってこの馬鹿猫姉妹が言うてるわ」

「なんでこんなことしたのか聞きたいんだけど、事態が事態だからスルーな。ぶつちやけ、どうでもいい」

ほむらと会話しているとロツテリあ共が騒ぎだした。

「どうでもよくない！」

「私達にとつてこれはお父様の悲願だった！ それをどうでも——」

アリアがそう言う前にオレはドコでもドアを展開。

彼女達の襟首を掴み、引きずってドアまで近づく。

「あのさ、オレにとつてあんたらの悲願とかそんなもん関係ないし、どうでもいいんだよ

ほんと。重要なのはお前らがオレの知り合いをヒデーこととして泣かしたことで充分だ。ギルティ、有罪。さっさとどっか行つてろ、邪魔だから」

冷たい声でそう言うのと完全に沈黙した。

ほんととはぶん殴りたい衝動に駆られているのだが、我慢。

それに事態は深刻化している。

オリ主くんや高町はボロボロだし、唯一まともなのは衛くらいだ。

だけど、ときたまにしてくるオリ主くんや高町への攻撃を守ろうとしているから体力の消耗が激しい。

そろそろ加勢しないとまずそうだ。

「んじゃ、行つてらっしゃい。アースラにご案内つてね♪」

「んなっ!?!」

「あ。お前らのこと、さっきほむらがラインでリンディ提督に説明したから、今頃お前のお父様も捕まっているんじゃね?」

「おのれ!」と言わんばかりに睨み付ける猫姉妹。オイオイ、これでもまだ序の口だけ?

「そんで千香。スタンバイできた?」

「オツケー! 猫姉妹の黒歴史は今管理局のホームページにアップロードしたから!」

「にやあアアアア!?!」

当然の報いである。オレはやかましい猫姉妹をドアに放り投げて、閉めた。

よし、うるさいのが消えた消えた♪

「ときどき、アタシはアンタら二人がこえーと思う……………」

「甘いな杏子。うちの師匠なら社会的に抹殺したら、今度は経済的に抹殺だぞ」

「あ。うちの師匠なら洗脳だねその場合」

「アンタらの師匠も師匠でこえーよ!!」

杏子はツッコむ。

そうなのかねー? まあ、なんにせよ。

「んじゃ……………行くかみんな」

「うん!」「ええ」「オツケー」「もちろんよ、ふふ」「さあ始めようか♪」

神器使いのオールスター達の舞台は幕をあげる。

悲劇的で、喜劇的で、笑劇的なシナリオですぜ、お客さん。

「あ。今ならオリ主くんもろとも殺れるんだよね。撃つていいかな？」

「手伝うわ、まどか」

「やめんかドS姉妹」

この二人がオリ主くんを陰で抹殺させないようにしようと思ったオレだった。いくらなんでも必死に戦っているときに暗殺されるのは悲しすぎる。

第三十四話

雪が降りそうな夜空にて、三人の少年少女達と銀髪の女性が空中に浮いていた。

一人の少年と少女はボロボロでもう一人の少年は疲労で息を荒げている。女性はまだまだ余裕そうである。

ピリピリとした空気である。

そんな一触即発な状況の中に、飛行魔法を付与されたオレ達はそこに割り込む形で女性の前に現れた。

「綺麗な夜空になにしているのかな？ あいにく今日はクリスマススイブだから良い子は

帰るのが一番だぜ？」

「我が友!？」

「神威!？」

後ろの二人の驚愕の声を無視し、オレは神器をバトンのように回していると女性が聞いてきた。

「お前がソラか……………。主がお前のことに驚かされていたみたいだが全くその通りだ。お前の魔法はこちらの技術ではあまり使えない」

「真似事ができる辺りで充分なんだけどな。それで圧倒してたし。……………んで、大人しくしてくれないってお願いの返答は？」

「ノーだ。我が主の願いを叶えるため、お前も眠れ」

そう言つて女性はオレに向けて雷のマジック——『ボルト』を放つ。

オレの得意魔法を使えるのか……………。

オレはその攻撃を避けず、そのままにしていた。

なぜかつて？ 答えはすぐに起きた。

「君ごときの魔法じゃあ、ボクの盾は貫けないよー？」

千香は障壁でオレに向けられた魔法を防いだ。信頼できる戦友は揃っている。だから負ける気なんて全くない。

と、その前に……………。

「衛ーちよつとこつちに」

「我が友！ 前だ！」

衛の声がした直後、そこで前を向くと、銀髪の女性がオレに本を向けて——

——そしてオレはフェイトと同じように吸収された。

え、マジで？ どうしよ。

☆☆☆

いつの間にか眠っていた。目を開けた。

そこには――

――死んだ師匠が目の前にいた。

めったに見せない笑みを浮かべてオレを撫でてくれた。
そういえば、子どもの頃によく頭を撫でられていたな。

――目の前にバラバラに別れる前の優しい両親がいた。

その人達は優しい笑みを浮かべてオレを見てくれた。

そういえば、こうやって泣いてたオレを慰めてくれたっけ。

そこは幸せという夢のような世界だった。亡くなった友達もいた。亡くなった戦友がいた。

師匠はオレをまた撫でてくれた。

嬉しかった。そして――

「消えろ幻想」

——ムカついた。オレは神器を召喚し、師匠を切り裂いた。両親も切り裂いた。彼らは「なぜ!」という表情をしていた。そんなの簡単な話だろ。

「さんざん嫌というほどオレは現実を見てきた。だからこそ、幸せなこの世界が憎い。嫉妬するほどムカつく。だから全て壊す」

子どもの頃にあった理想と心は既に捨てた。殺された。

そう、オレは英雄。

『無血の死神のソラ』だ」

全てを壊した後、オレはドコでもドアを展開して夢の世界から出た。

☆☆☆

「ただいまー」

「あ。おかえりー」

いつも通りにそういうとまどかは返事してくれた。

そんなまどかの返事を聞くと、銀髪の女性が驚いていた。

オイオイ、帰ってみるとさやかとシグナムが戦っており、他の連中も守護騎士達と戦っていた。

まどかの説明によると、管制人格の女性がオレ達を倒すために召喚したらしい。

どうやら蒐集した魔力から神器使い達の情報を得て、それを判断した上で召喚したようだ。ご苦労なことだ。

「なぜお前がここに!?!」

「普通にドア開けて帰って来たのだけど?」

「普通じゃない! お前は幸せな夢を望まないのか!?!」

「夢? ああ。あれのことね。ムカつくほど良い夢だったかもね。否定しない。あれは深層心理の願望かもな」

「だけど、とオレは続ける。」

「オレの夢はこいつらと馬鹿やって、笑って、泣いて、怒って、喜んでいられる今このと

きを生きてることだ。幸福な幻想ごとくときでオレは眠つてたまるかよ！」

そう言ううと女性は何しうに歯を食い縛る。

んで、まどか。「プロポーズされちゃった……………！」とか言つて頬を抑えてブンブン首を振るな。

プロポーズじゃねえからな。……………そうだからな！

「うう、やつとソラくんのデレが見れて私は幸せだよー……………」

「はあ、もういいや。衛ー、ちよつといいかー？」

衛はザフィーラと戦っていた。ザフィーラを蹴り飛ばした彼はこちらに振り向く。

「今、ザフィーラと筋肉で語り合つておる!! あとで——つて我が友!」

「ちよつと八神起こして来て」

「しかし、そんなことが」

「できるからさつさと起こしてこい。異論は認めん」

オレはそう言つて神器を衛に投げ渡した。

「お前が行きたい場所を思い浮かべろ。そしたらそれは応えてくれる」

「行きたい……………場所」

衛は目を瞑り、神器をなにもない空間に向けた。ザフィーラが妨害しようとするが、杏子が加勢にきて防がれる。

「我は、我が望むのは——はやての夢」

ガチャリと音がしてドコでもドアが展開された。

「その扉に飛び込め！ 八神がきつといるはずだから！」

オレの声に答えるかのように、衛はドアに飛び込んだ。

ドアは光の粒子となって消えて行った。

「まさか……その力で………」

「そ。オレは吸収されても、すぐに出られるの。理解した」

「ならば、お前から消すまで」

物騒なことを言っただくさんの魔法陣を展開する。

やれやれ、仕方ない……………本気でいくか。

「まどか、『コネクト』って魔法知ってるか？」

「確か、千香ちゃんが自身の魔力を他者に供給させる魔法だつて。はっ、まさか。ソラク

んは私に魔力奴隷になれと!? だめだよ！ 奴隷はソラクんの専売特許なんだよ!」

「専売特許じゃないし、奴隷になれとか一言も言っただけ、とりあえず自重しろ！」

頭にチョップを入れてから、オレは自分の魔力とまどかの魔力のラインを繋げる。

まあ、魔力タンクって意味なら間違っただけ。

「今回出すとっておきは、はつきり言っただけ全てを開く者を神器を出しながらだとめちやくちや燃費が悪

すぎるんだ。本来ならこれは超短期決戦用なんだ。だからお前の無尽蔵魔力が必要だ」
「そうなの？ でも大丈夫なの？ ソラくんのとっておきつてちよつと危険な気がする
……………」

鋭いな。確かにリスクはある。なんせ、アレは筋肉痛を引き起こす神器だから。

「大丈夫。無茶はするけど、死にはしないさ」

そう言つて頭を撫でて安心させる。さてと……………。

「待たせたな」

「なに、お前のとつておきが気になつたからな。お前の神器はカギのような剣と知つて
いる。確かに概念にすら干渉できるその力は危険だが、当たらなければ意味がない」

確かにそうだ。それは師匠にも指摘された。

だからこそそのとつておき。

—— オレのもう一つの神器^{とつておき}

「来い—— 『閃光の衣』」

オレの声と共に、祭礼儀ように使われそうな黄色のマントが纏われる。光を表したよ

うなマントである。

「馬鹿な………神器は一人一つまでのはずだと！」

「後天的に得る人がいるんだよ。まあだいたいそれは奪った神器か、継承された神器さ」

オレの師匠は死ぬ直前にオレに神器を継承した。

『閃光』の名を持つこの神器を。その意思を。

「いくぜ」

オレは神器を構えて、銀髪の女性に突っ込んだ。

第三十五話

(管制人格サイド)

神威ソラ。主曰く、規格外にして型破りな男である。

彼とその取り巻きのせいで天道衛が変態化し、なぜかザフィーラも筋肉至上主義者にシフトチェンジしてしまった。

どうしてこうなった………と嘆いていた。

そんな怨敵のような相手と戦うことになった。

私は魔法陣を展開し、突っ込んでくる彼に備えた。

「いぐぜ」

……………え？

突如、彼が私の目の前に現れた。いつのまに!?

テスタロッサのような速さで移動したのか!?

私は信じられないかと思いつつながら魔力刃を展開し防御体勢に入った。

「おらー!」

「くっ!」

彼の斬撃をそれで受ける。予想以上のパワーアップしていた。
「チツ、叩き落とせなかったか」

なんとというトップスピードとパワーだ。

私の肉眼では追えなかったとは。

相当のスピードの上に子どもとは思えない力になっているに違いない。

それに――

「まさかスピードだけでなくテスタロツサと同じ魔力変換資質があるとはな」

「まりよくへんかんししつ？　なんぞそれ。オレは単に電気属性を身体と神器に付与しただけだし」

だとしたら厄介だ。魔力を変換してないとしたらそれは魔力無しで電気属性の攻撃ができるというわけだ。

「この神器の真髄はまだまだこれからだぜ？」

そう言った直後、再び見えなくなった。

ヤツの動きを計算し、予測――完了。魔力反応を察知し、彼の居場所と目的がわかった。

北北西からの奇襲か！

「そこだー！」

私が放った魔力弾は移動し終えた彼の元に向かって行って直撃——し
なかつた!?

魔力弾がすり抜けただと!?

「どっこだ!」

辺りを見回す。発見した。

三時の上空に——

「()でーす」

「いんや()()や」

「いやいや、()こだって」

しかし四方八方から声が聞こえた。改めて見回した。

なんと、彼が分身をしているではないか。

「馬鹿な………なんだこれは………」

「これが『閃光の衣』の真骨頂——影分身。高速の果てにある移動をした結果に生ま
れるオレの残像達さ」

くつ、魔力反応を追おうとしても無数に反応が点滅を繰り返すばかりだと!?

こんな隠し球があるなんて!

「いや、待て。ならばお前の魔力供給の人物から狙えば——!?!」

私に向かつて魔力弾が飛んできた。

「ふふ、遅くなつてごめんなさいソラクん」

友江ママか！ ヴィータが負けたのか!?

「ええ。あの子つたら人の話を聞かずに罾がある方へホイホイと向かつてくるものですから。思つたより早く終わったわ♪」

「耳が痛い話だ……………」

ほら、と友江ママはリボンと煤巻きにされて目をグルグルさせたヴィータを見せる。

呆れるほかはあるまい。

「さてと、弱点はもうないぞー?」

「っ……………」

彼の声ができる方向を見る。いつの間にか朱美まどかを友江ママのところ連れていた。

「早くしないと主ごと葬りそうだと衛。ま。お前ならできると信じてるけど」

彼はクククと笑つて、朱美まどかと友江ママを含めて彼は私に向かつて言う。

「充分生きてでしょ?」

「満足して生きてしょう?」

「そういうわけだから——」

「二」——安心してとっとくたば（れ）（ってね）（りなさい）「二」

処刑申告された私の震えはまだ止まらない。

……………そして戦闘中に天宮草太が神威ソラによつて使い捨て装甲盤されていたことも忘れない。こいつ鬼だ。

（衛サイド）

真つ暗な闇の中を我は進む。

その空間は足場はなく、浮いて前に進むようなところだ。

我は今、はやての夢に向かっている。

一寸先も真つ暗な世界で一人だけで進むのは心寂しいが、友に背中を押された我には怖いものはない。

「どこまであるのだ。この闇は？」

「そだねー。わたしちよつと疲れちゃったー」

「そうか。……………は？」

我の後ろに誰かいたか？

いや、確かここにいるのは我だけのはず……………。

「ここだよん♪」

「っ!？」

我が声が出た方向に振り返ると、「やつほー」と手をヒラヒラしたフェイトが
 ……………いや違う!

フェイト・ハラオウンは夢の中にいるはずだ!

ではこの瓜二つの少女は誰だ!?

「貴様……………何者だ? この天道衛が気配に気づかずに背後をとるとは」

「あれれー? 警戒されちゃった? ごめんねーちよつとイタズラしちやおうと思って
 てね♪」

ありえぬ。イタズラのつもりで我が気配を察知できなかつただと?

師に認められた気配察知だぞ? それを気づかせないコイツはいつたい……………。

「天道衛くんで合ってる?」

「そうだ。その名で名乗った通りだ。貴様は何者だ?」

「わたし? ふふん、わたしはねー」

その少女の名前はハーレムという下らない願望をかかっていたかつての我が知って
 いる名前——

本来は生きてるはずがない少女の名前——

その少女は口に出したのだ。

——
アリシア・テストロッサ、と

第三十六話

(はやてサイド)

それは、とても幸せな世界だった。

シグナムはいつものように朝早く起きて、新聞を読んでいた。

その次に起きたシャマルは家事をしていた。料理はしてなかったことにちよつとホツした。

ザフィーラら狼形態で床に伏して、あくびをしていた。

最後に起きたヴィータは眠そうに顔を洗いに行つて、戻つてきた。

いつものように朝食が始まる。幸せな一日が始まる。

………せやけど、なんやろ？

なんか足りへん。

何かを忘れてるような………。

『主、せめて幸せな夢の中で眠つてください。後は私があなたの願いを叶えます』

眠っているん？ 私……………。

ああ、でもそれもええかも……………。

辛い現実よりここがええかも……………。

せやけど、なんか物足りへんのなんでやろ？

何が足りへんやろ……………。

私はそう考えながら、幸せな夢の世界を

「足りないもの？ それは筋肉だ!!」

——ぶち壊された。というか強引に抜け出された。

「はやてよ！ 足りないぞ 我という筋肉キャラが！ なぜ我が出ない!?!」

寝起きを叩き起こされたような感じな私は不機嫌になつていたので言い返した。

「あつたりまえ!! 前の衛くんならまだしもなんや、そのキャラ！ なんで変態になつてんねん!?!」

「変態で結構！ 我が筋肉キャラであれば変態でいい!」

「肯定すんなやアホオオオオオ!!」

返せ！ あの頃の衛くんを！

返せ！ あの幸せな夢を！

「あの、主。今一度」

「あんたは黙つときい！ 私はこの変態化した少年に言わなきやあかんことあんねん!」

「よろしい。筋肉論破の始まりだ!」

マッスル・ロンバ

「せやから、筋肉から抜け出さんかい!!」

「あの……………私は……………」

「黙ってる(や)」

私達が真顔でそう言うのと隅に行つてシクシク泣き始めた。

なんや、メンタル弱いなあの子。

とにかく私達はお互い譲れないものの言い争いを始めた。

絶対、元に戻したる!

(フエイトサイド)

幸せな世界だった。プレシア母さんがいて、リニスがいて、アルフがいて、アリシア姉さんがいる。

家族団欒で朝食をとり、外へ出かける。

私という存在が認められているようだった。

だけど……………これでもいいのかな?

何か忘れてないかな……………何か……………。

「せーかいだよフェイト。お姉ちゃんが花丸あげちゃう」

次の瞬間——遊んでいたアリシア姉さんが魔法の槍で貫かれた。

そして、その次に母さんが。

次々と私の大切な人が串刺しにされた。

「誰が……………誰がやったの!」

私はその怨敵を睨むように見た。

しかし、それはすぐに驚愕に変わった。

「やあやあ、久しぶりになるのかな。愛しの我が妹ちゃん」

「そんな……………だって……………」

「あんな幻想共と一緒にしないでよ。わたしが正真正銘のアリシア・テストロツサだよ

ん♪」

お茶目にウインクする彼女はとても恐ろしい何かに見えた私は尻餅をついて動けな

かった。

「あります。腰が抜けちゃった? もしかして感動のあまりに?」

「いや感動のあまりに腰が抜けるって初めて聞くのだけど……………」

「それじゃあ、トイレが我慢できなくなったとか?」

「なんで是が是非でも恐ろしい何かを見てこうなったことを認めてくれないかな」
「それがお姉ちゃんクオリティだから!!」

「どうよ!？」と言わんばかりにサムアップするアリシア姉さん。

いや、一言感想言わせてもらおうと何それなんだけど……………。

そんな呆れている私に姉さんは頬を掻きながら口を開いた。

「ま、わたしはフェイトに激励とママの遺言を伝えに着たんだよねー」

「ママのつて……………もしかして母さんの?」

「イグザクトリー♪」

ウインクしながらアリシア姉さんが地に降りたつて、私の手を引いて立たせる。

「あの人はわたしを生き帰らせようとして、成功した。けど、今度は帰り方がわかんないし、おまけにもう死に体だった。アルハザードの技術をもつてしてもママの病気は治すことは難しく、しかも身体にとっても負担がかかるものだった」

「じゃあ、母さんは……………」

「安らかに眠って埋めたよ。アルハザードにある墓場にね」

やっぱり、亡くなったんだ。

私はそれを知って絶望した。けど、そんな私に姉さんは手を握ってくれた。

「でもね。最期の最期にあの人は後悔してたよ。フェイト、あなたにひどいことをし

たつて………」

「えっ？」

「リニスの言う通りにはしていれば良かった。フェイトをしつかり愛してやればよかった。それが唯一の未練だった』って言つてた。ママは後悔し、未練を残して逝つたんだよ。ま、わたしとしてなんで最初からそうしなかつたって怒りと悲しみがあつたけど』
そう言つて背後を向いてケラケラと笑つていた。

けど、それが演技に見えた。

だつて涙声だったから………」。

「だから遺言に『フェイト、今までごめんね。愛していたわ』って残した。あんまり、フェイトにとって実感わかないかもしれないけど、確かにそう言つてたよ」

実感したよ。私は愛されていた。

それがわかつたとき、涙が湧いた。

だけど、力が湧いた。勇気が湧いた。

もう絶望しない。だから、どこまでもいける。

「およ？ 持ち直しちゃつた？ んじゃ、激励はいらないかもねー」

「激励つて、姉さん何を言うつもりだったの？」

「いんや、絶望してるフェイトに言いたかつたんだよ。ある人が残した名言」

姉さんは一息入れて口に出した。

私はそれを聞いて別れのあいさつを済まして姉さんはここから出た。

姉さんは今、お世話になっている科学者のところに戻らないといけないらしかったから、別れは辛かった。

けど、姉さんの言葉は今でも思い出せる。

「『立って前を歩け。あなたには立派な足があるじゃないか』……………か。そうだね……………」

私には進むための足がある。

掴むための手がある。

胸には不屈の心がある。

だから私はバルディッシュを構えて、魔法を放つ。

「ありがとう、母さん。そして姉さん……………」

そうやって私は夢の世界から脱出した。

第三十七話

(衛サイド)

真つ暗な世界で女性が一人、少女が一人、そしてマッスルな大人が一人いた。
うん、それ我だ。

大人モードの我が公衆の面前でこういう状況にさらされていたら、まずは警察に通報されるだろう。

そのときは潔く補導されよう。しかし、警官達に筋肉のすばらしさを演説するつもりである！

それくらいに筋肉に自信はある！

「もーゴールしてええよな……………」

「主?! しつかりしてください、主!」

今このとき、我ははやてに筋肉のすばらしさを演説した。

そのすばらしさにはやても納得してくれたようだ。

……………目が虚ろだが。

いや、決して洗脳なんてしてないぞ。

だが、しかしまどか殿に教わった方法の演説をするとどうしていつもこうなるのだろうか？

この間、シグナムもはやてと同じ状態だったし。

「やはり原因はあの淫乱ピンクやな!!? おのれ、あんのピンクの悪魔め、衛くんをこんなにしたばかりではなく余計なアビリテイを追加してくれて!!」

「ピンク? 悪魔と淫乱はシグナムのことか? ヤツは武人としてすばらしい女性だがまさか淫乱で悪魔だったとは……………」

「ちやうわアホ! ピンク!!シグナムちやうわ!!」

怒られた。解せぬ。

「はやてよ。早くここから出るべきだ。みんな待つてる」

「嫌や。衛くんは変態になった現実なんて嫌や……………」。それに外は辛いことばかりやから出たくない!」

ふむ、現実……………逃避か。

無理もない。目の前で家族を失ったのだから……………。

逃げたくなるのも仕方あるまい……………。

「そうです。だからおねむ——ブム!」

「貴様は黙つてろ。眠ることを決めるのは、はやてだ」

我は余計なこと喋ろうとする管制人格の口を顔を掴んで黙らせる。

む？　なんで泣いておるのだコイツ？

あと若干、頬が紅くなつてる？

まあよい。我ははやてに伝えることを伝えるまで。

「はやて、それが現実というものだ。友達が変態化する、家族を失う……………辛いことばかりが支配する世界だ。そしてそれはいつ起きてもおかしくないのだ」

それでも、と我は続ける。

「生き続ける。辛いことがあるば、笑い飛ばせばいい。失つて悲しいことがあるば泣いて、すつきりしたら次のことを考えていけばいい。我はそう思うのだ」

「……………でも私は」

「我ほど強くない、と言いたいつもりらしいがそれは違う。我は確かに変態だ。認めよう。ただどそれが無ければ我は逃げ出していたんだ」

「えっ……………？」

「変態は最強。だから大丈夫と思つているから平気と思うことにしたのだ。本当ならば、我はザフィーラと戦わず逃げ出していた。我はな、臆病なんだ。変態じゃないホントの我は臆病で弱いちっぽけなヒーローに憧れるただ一人の子どもなのだ」

そう言つて大人モードを解除した。するとどうだろう、私の足は震えていたではないか。

変態でなくなると、怖い、逃げたい気持ちが沸き上がっているのだ。それが身体に表れているのだ。

「今でなお、この場所は怖い。我が友ならば、やる気になればはやてごと管制人格を殺すだろう」

「そんな……でも」

「でも、はないんだ。あの男は切り捨てるものは切り捨てる。理想ではなく、リアリティだけを求める男だ。そりゃ、切り捨てたことは悲しむかもしれんが、切り捨てたことに後悔しない」

一度、我が友と口論にそのことになったことがある。しかし彼はそれでもねじ曲げなかった。

なぜ、と聞いてみたが我が友には凄惨な前世があつた。

そう、彼は救いのヒーローであろうとしたばかりに大切な人を失つた。

だからヒーローにはなれないし、なりたくない——
確かに彼はそう言つた

彼はヒーローになることに諦めた一人の子どもだったのだ。

「故に我が友は大切な人——愛する者を守るためならなんだって切り捨てるつもりだ。友達も、自身の命も」

「そんなのって……………」

「ひどいか？　しかし、それは人間にとって当たり前なのだよはやて。利己的で、醜い。他者を助けるお人好しだって、結局のところ自己満足でしかないのだ」

はやては優しすぎる。知らない他者に対しても優しすぎる。

その証拠に蒐集活動に人は含まれていなかった。

だからこそ、彼女はもう少し利己的であってほしいと我は思っている。

「はやて、それがこの夢から覚めたときに待つているかもしれない世界の真実だ。苦ししい、辛いことばかりだ。それが『生きる』ってことだ」

彼女は既に絶望しきっていた。彼女にまだ伝えるべきことを伝えていない。

「わかつてくれたか？」

「……………わからへん。わからへんよお……………」

泣いてる彼女を我は優しく抱き締めて撫でた。我が子を慈しむ父親の心情が少し理解した。

彼女には耳が辛いことだろう。

「はやて、ここに残りたいと思つたか？」

「うん………せやけど残つたら、殺されるし………」

「そうだな。だから——私もここに残ろう」

えつ、と顔を上げたはやては我を見る。我は最初からそのつもりなのだ。

「我ははやてのヒーローになりたいたいのだ。『みんな』ではなく『はやて』のヒーローになりたいのだ。我ははやてが死ねば辛い、泣きたい、最悪また自殺を考へるだろう。当然だ。我にとって恩人であり、大好きな人が死ぬことは辛すぎる」

だから、と続ける。

「我も一緒にいるから死にたいと思わないでくれ」

そう言つたとき、はやての顔は下に向けていて見えなかつた。

だけど、小悪魔的な笑みを浮かべてきた。

「それって告白のつもりかいな？」

「んな!?!」

し、しまった! 思えば恥ずかしいことを何気なく言つてしまった!

なんてことだ! 我は………我はいつたいどうすれば!?

「クスクス………」

「ぶぶ、あはははははー！」

「わ、笑うな！ その管制人格もだ！」

二人の女性に笑われるとは……………ちよつと死にたくなつた。

「こちらこちら。私だつて衛くんが死んだら辛いんやから。だからそないなと言わんといてや」

「はやて……………」

「うん……………勇氣でた。せやから、ここから出よ？ 二人なら大丈夫やから」

笑みを浮かべて我に手をさしのばした。その笑顔は太陽のようにまぶしいものだった。

「そうだ……………我はこの笑顔を見たくて、そして守りたいのだ。

さし伸ばされた手を握る。

「よーし！ あんたもこつから出るからついてきい！」

「わ、私もですか!？」

「あつたり前や！ つて名前なんなん自分？」

今さらとツツコむべきところだが、今の我らにとつてそれは無粋なことだ。

我らが行く道は絶望ではなく、希望の可能性がある未来だから――

「あの、私。名前はないんですが。付けてくれませんか？」

「ならば、我が名前をつけてあげよう！」

「主……………お願いします。私は筋肉な名前をつけられたくありません……………」
「大丈夫やから泣かないの」

「なぜか私の命名が拒否された。解せぬ。
プロテインという名のどこが嫌なのだ？」

第三十八話

辺りに黒い煙が舞い上がる中、オレ達は銀髪女性と対峙していた。

「こいつ、もう公式チートじゃね？ 何回叩きつければ諦めるんだよ。キュウベえかこいつは」

「あれはある意味無敵だったけど、これはモノホンだねー」

「まどかさん、大丈夫？」

平気、と答えて、いつもの笑みを浮かべるがしんどそうに見える。

いくら円環の魔力が無尽蔵だからって生成に必要なものは精神力と体力を混ぜたエネルギーである。

それを休み無しでオレに供給しているのでさすがに疲れるのは無理ない。

「そろそろ、まどかがダウンするな。あいつらまだかよ………」

「ソラくんの神器って長期決戦では使えないのよね？」

「オレの魔力量は平均の上だから、さやか無限の音楽の神器と同じで神器全てを開く者は燃費が悪いんだよ」

神器を剣として使うなら問題ないが、カギの力を使えば大幅に魔力は消費するんだよな、これが。

「咎人に滅ぼしを——」

「またスタラだよ、スタラ」

「スターライト……略してスタラだね。もうこりこりだよ……」

「いちいち『^コ団^ネ結^クせよ』解かないとまどかが対抗できないからな。……めんどくさい」

憂鬱そうにオレとまどかは溜め息を吐いて、まどかがそれにいつでも対抗する準備に入る。

ドンとこいという気持ちで『^コ団^ネ結^クせよ』を解いたとき、突如、銀髪女性が急に呻きだした。

「どうしたのアレ？」

「生理かな？」

「陣痛かしら……？？」

「まどか、下ネタ禁止。あとマミさん、それ予想の斜めを行きすぎてる」

なんでいつの間にか妊婦になってんだよ。

戦う妊婦なんて新しすぎ——いや待て。ソゲフの人はそんな人と戦っ

ていたって女神から聞いたことある。

これが時代か……。

オレ達は納得したかのようにウンウン頷いた。

『いやなに納得してんねん、あんたら。そんな時代はまだや。世界崩壊のときにくる時代やから』

『はやて、我が思うにそれはメタいぞ』

はやてと衛のテレパシーが聞こえる。どうやら上手くいったみたいだ。けれど、オレってテレパシー送るの下手だからなあ。

なので、オレはスマホを取り出してライトに書き込む。

『無事?』

『うん。というかなんでリインフォースの中でライトが繋がってるんや!?』

『それがライトというアプリだから』

『ライトは次元を超えるアプリか………なんか燃えてきた!』

『あなたのせいで衛くんが、変なスイッチ入って腕立て伏せし始めたで!?』

ライト内ではもはやカオスとなっていた。すると、見慣れた少女達が揃った。

「終わったぞ」

「シグナム強かったあー。何回危なかったことか」

「シヤマルを縛って、吊るしてきたよ♪」

上からザフィーラと戦っていた杏子。

シグナムと戦っていたさやか。

そして我らの変態、千香である。どうしてだろう、シヤマルが大変なことになってる
ビジョンしか思い浮かばない。

とにかく倒された守護騎士達は光の粒子となって消えていっただろうな。現に
ヴィータもそうだったし。

『というわけで神器使い軍団揃ったけど、どうすればいい?』

『殺さない程度に全力全壊』

『把握。まどかのオーバークルでテイロってやる』

『手加減してや!?! ほんまにな!』

そんなに心配することないさ八神。ちよつと臨死たい——じゃなかった。黒焦
げになる程度だから。

「神威くん」

高町もきたか。

「その……………この間はごめん……………。わ、私が草太くんを止めなかったばかりに
……………」

「別に気にしてない。止めようが止めまいがお前がどうにかできることじゃないって

思ってたから」

「で、でも……………」

「くどい。期待してないって言ってるのがわからないのか？」

高町はションボリと落ち込んで黙る。まあ、ちよつと励ますか。

「別にお前のことが憎いからこんなこと言ってるじゃねえよ。言いたいことが言えないお前があいつの暴走を止めることなんて、はなつから期待してないってことさ」

——言いたいことが言えない。

これはオレの予想だが、高町はかつて土郎さんが入院していたから一人ぼっちだった。

家族に迷惑かけたくないばかりに『良い子』を演じようとして、自分を殺していた。

公園にいたのはその殺していた自分が我慢できず爆発した証拠だ。

「ち、違うの！ 私は……………」

「違うない。なら、なぜ一言も喋らず静観していたんだ？ オレが殺されそうになったとき」

「それは……………」

「ほらみろ。お前は何も言えない。失うことを怖れて、躊躇う臆病なガキだ」

キツと睨んできたが、歯を食い縛って悔しそうにしていた。

「こいつはまだまだ子どもという証拠だ。」

「オレを睨んだところでお前が臆病であることは変わらないし、お前が否定することはできない。そうだろう？」

「なら、神威くんはどうなの………………。失う怖さを知らないでしょ!」

自分はなんなんだって言う反論か。オレは鼻で笑って言い返した。

「んなもん知らないさ。オレは既に失ってるから………………。大切な恩師が」

「え……………」

「失う怖さより先にオレは自分の求めた理想のせいで大切な人を失った話だよ」

地雷を踏んだと思うたのだろうか高町は俯く。しばらく、無言になりオレは嘆息を吐いて口に出した。

「高町、失う怖さは確かに恐ろしいさ。だけど、それに怖がって何も言えなくなってしまふといつか後悔することになる」

「後悔すること……………」

「それを知ってる女の子を知ってるんだ。だから——変わる勇氣を持って。お前はまだまだやり直せるから」

かつて晝美ほむらが後悔したことを彼女が同じ後悔しないことを祈りながらオレは目をつぶってそう言った。

「変わる勇氣……………」と呟いた高町はしばらく無言になり、目を瞑る。

目を開けたとき、彼女の表情は暗いものから決意ある少女に変わった。

彼女は強くなるだろうな。

そう思っていると、まどかの神器が発射準備ができた。

本人曰く、なぜかデストロイアーチャーのときだけ円環の理と同じ格好になってしま
うらしく、今まさにまどか神になっている。

「未来永劫に魔法熟女（笑）が生まれないのなら——私が絶望する必要はない！」
「そこでネタを入れるお前もお前だよ……………」

なんだよ魔法熟女（笑）って。

魔法少女が成長したら魔女って言い回しじゃなかったのかよ。キユウベえじゃない
けどさ。

そんなこんなで銀髪女性がオーバーキルに倒され、魔法陣から銀髪女性と八神を含め
た守護騎士達。

そしてマツスルポーズでアピールしながら衛も現れた。

……………そんな登場の仕方をした衛は八神にドロップキックされるのは無理もない
と思う。

すると、銀髪女性だった闇の書は何かに変身しようとしていた。

銀髪女性ことリインフォース曰く、彼女を苦しめていた暴走体らしい。

クロノ少年やユーノ少年が駆け付けた。

なんか知らない杖を持つてる辺り、新しい武器らしいな。

役者は揃った。

あとは拍手喝采の喜劇の結末か、涙頂戴な悲劇の結末になるかの二択だけだ。

「あれ？　そういえばオリ主くんは？」

「来る途中、杏子ちゃんがワンパンで沈めたの」

高町がそう言ったので、杏子を半目でみる。

「だってアイツ、ソラの悪口ばっか言うんだもん」

ブリツ子ぶるな。だが許す。

第三十九話

クロノ少年やユーノ達がやって来たとき、銀髪女性ことリインフォースだったものは身体が変化し、オレ達の知る魔女の姿になった。

ただの魔女ならよかったのにとオレは思う。

相手はどこから得た情報なのか——ワルブルギスの夜舞台装置の魔女だ。

しかもバリアらしきものが張られており、パワーアップしているようだ。

「なんの冗談だよ……………」

「そだね。私としては久しぶりだけど」

「私もよ」

まどかとはむらの眩きに元魔法少女達はウンウンと頷く。

まさか相手は超弩級の魔女となるとは……………。

「ほえー、あれが魔女なの？」

「そういえば千香って初めて見るんだっけ？」

「うん。でもボクとしてグラマーなお姉様を期待したのに、現れたのキモい物体だなんて……………」

「がっかりするのは別にいいけどあれ一応魔法少女だったヤツだからな？ キモいはさすがにひどいからな？」

「くつ、せつかく用意したカメラが無駄じゃないか！ お姉様のアダルトボディを期待したのにー！」

「だからカメラ持ってたのか」

ホント相変わらずな千香である。

にしてもこいつが相手か……………。

「ふるポッコに持ってこいだな……………」

「だね……………♪」

「ええ……………」

「ふふ……………」

「全くよ……………」

「そだな……………」

上からオレ、まどか、ほむら、マミさん、さやか、杏子である。

敵も味方も「え？」と啞然としていたが。

「アレと戦うん？」と八神が聞いてきたので神器使い達は「もちろん」と答えた。

「当たり前だ。久々の魔女退治だ。みんなグリーンシードほしいかアアア!？」

「「「「おー!!」」」」

「魔法の裸体みたいかー!」

「「「それはヤダ」」」」

「解せぬ」と千香は自分の発言に賛同してくれなかった神器使いのみんなに対して拗ねた。
いや魔法つて裸体あんの?

あれがデフォルトじゃないの?

まあそれはさておいて、続き続き。

「魔法をぶちのめしたいかー!!」

「「「「おおー!!」」」」

「よろしい。ならば始めらよう。魔法ふるボツコタイムじゃアアアアア!!」

「「「「レッツパーティーイイイイ!!」」」」

「もう八つ当たりよ、もオオオオオオ!!」

元魔法少女達のキャラ崩壊し、憤慨した千香を含めてワルプルギスの夜に向かっていく。
く。

「んで、お前らどうすんの?」

「……………あ」と残りは眩いて気づいて向かって行った。

うむうむ、さてとオレも祭りに参加するか。

「というか、なんなんやこのメンツ。どういう組み合わせやねん」

「鬼畜、百合、変態、ロリ、筋肉、常識、なののを組み合わせたドリムチーム」

「カオスすぎるわ！ 後、なののってなんなん!？」

「高松——あ、間違えた。高町やまのの語尾だ」

「なのはなの——!!」と聞こえたが気がした。気のせいだと思うことにした。

☆☆☆

その後、リンデイさんの通達があり十分後に暴走するらしい。

その前にこいつを消さないといけないが、再生機能があるため、完全に消さないと危険らしい。

というわけで問答無用にぶつ潰せという話である。

ワルプルギスの夜は使い魔を出してきた。

久しぶりにみたがやっぱり不気味である。

そんな使い魔をさやかは切り裂き、杏子は串刺し。

まどかは射殺し、ほむらとマミさんは射殺する。

ホント容赦ないなオレ達。

首を飛ばしているオレも人のこと言えないけど。

「本当に久方ぶりだね！」

「あのとときはまどかは戦えなかったな。どうだ今の気持ちは？」

「サイツツツコーーーだよ!!」

いつも無力で儂げなだった彼女が今ではこうして戦っている。

そんな姿にオレは笑みをこぼす。

………もうそんな面影全くないけど。いろんな意味で。

「開けるまどか！」

「了解！」

まどかが女神モードになって、チャージし始める。最大威力の弓矢を生成するためだ。

しかしワルプルギスは海中から大きな岩々を浮かび上がらせ、それをぶつけようとしてきた。

使い魔達だけでなく、厄介な物理攻撃を含めてオレ達に迫る。

魔法少女だった頃のほむらはこの圧倒的な攻撃に苦戦し、敗北してきた。

カシヤン

だからこそ、彼女が止めるべき攻撃だ。

ほむらの時間停止でその攻撃は動きだけを止める。

神器使いとなった彼女はモノクロの世界にしなくても、一つの対象に絞って停めることが出来るのだ。

せめて使い魔達だけでもとワルプルギスは思ったのか、使い魔が一斉にオレ達二人に迫る。

「あらあら、ここから先は通行禁止よ?」

ママさんの一言と共に使い魔の脳天を撃ち抜かれた。

それだけでなく高町やフェイト、シグナム、ヴィータが使い魔達を退けてくれる。

「オラ、とっと道開けろ!!」

「まどかとおソラのお通りよ!」

「新婚さん、いらっしやーい!」

杏子とさやか、千香が背後からきた使い魔を退けてくれた。

ちなみに千香。誰が新婚だコラ。

「これが私とソラくんのバージンロードだね！」

「ほむらはどうするんだよ」

「大丈夫！ 既に夫として入籍予約してるから！」

「浮気すんなよ婚約者」

サムアップするまどかに呆れながら、オレは神器の剣先をワルプルギスに構える。

「いっけー!!」

「デストロイアーチャー!!」

「その呼び方やめて！」

まどかがツツコミながら流星群のごとくの弓矢を放った。

ワルプルギスに張られていたバリアは破られた。

よし、道はできた！

「封印します、ってね!!」

封印の波動がワルプルギスに直撃する。マミさんが試しとばかりに巨大砲撃（ティロ・ファイナレ）を放つ。

ワルプルギスの腕が少し欠けていた。バリアが張られている代わりに身体の耐久力が弱くなってるのか？

まあなんにせよ。これで準備はできた。

「やっちまえ！ 主人公共！」

オレの合図と共に、三人娘。

高町、フェイト、八神が最大魔法を撃った。

ドゴオオオオオオンン！！

……………うん、なんか原爆並みの爆発音が鳴った気がする。

というか未だに真っ白な光柱がワルプルギスにいたところに立っているし。

「魔女って使徒なの？ なんか十字架の光柱が立っている気がするんだけど」

「んじや、あいつらはエヴァか。オイ、初号機。もう一発いけるか？」

「初号機じゃないもん！ なのはだもん！」

膨れっ面にプンスカ怒る高町。冗談だって。

というか仕舞いに暴走状態や覚醒状態にならないだろうかと少し期待してたりする。

来る日は来なそうだが。

「若干残ってるな」

「うん、今も苦しそうだね……………」

「そりゃあ再生機能を封印したからなあ」

といわけでもどか、と言って彼女の目を見る。彼女は無言で頷いた。

元の魔法少女の衣装に戻った彼女は弓矢を引いて「ごめんね………」と呟いた。

やっぱり変わっていてもこいつは優しい女の子だと思った。

「もう充分だろ？ 精一杯がんばって生きてだろ？ だからもう安心してとつと——

—死ね」

オレの一言を最期に闇の書の擬似暴ワルプルギス走の夜は完全体にこの世から去った。

終わったのだ………なにもかも。

第四十話

エピソード的な話を話せば、ロツテとアリアに指示を出していたお父様ことグレームというオツサンが違法のためクロノ少年に捕まった。

彼自身も後悔していたらしく、管理局を辞めることにしたらしい。

いや、あなたの辞職程度で八神家は治まると思わないと思うなあ。

家主の八神はやてを除いてだが。

それにしてもオリ主くんの殺人未遂も許されるとは思わなかった。

普通は少年院行きだが、管理局では魔力量が高くなおかつ優秀な人材という理由のため、無罪放免にしたらしい。

まどか達が憤慨したのは言うまでもない。

まあ、高町達もオリ主くんの信念に少し疑問を持ち始めたことだし、それでいいだろう。

そして、オレ達に重大な選択が残っていた。

☆☆☆

雪景色が広がる世界にて、オレ達神器使いとクロノ少年を含めた高町達魔導士組。

そして八神を除いた守護騎士達が、人の気配がない森にいた。

どうやら闇の書の防衛プログラムという八神を苦しめる元凶がリインフォースにまだ生きており、それは取り除くことができないくらい深いところにリンクしているらしい。

結果、リインフォースは闇の書もろとも消えないといけならしい。

守護騎士達もそうなるのかと彼女達自身が聞いてきたが、どうやら闇の書から切り離して独立させたららしい。

「衛はどうしたのだ？」とオレはリインフォースに聞いてみた。さつきから見当たらないが……………」

「眠っている主のところに置いてきた。彼には既に言っている。筋肉の演説ができなくて残念だと言っていたがな……………」

「それは聞かなくて正解だと思っぞ」

オレはやれやれと白い嘆息を吐きながら呆れる。

あいつの筋肉至上主義はたぶん永遠に変わらないだろう。

でも意外な話、あいつは変態という仮面を被った普通の少年だったということだ。

変態Ⅱ最強という自己催眠してチキンハートを無くすとはなかなかである。

「お前には感謝している。主を救ってくれてありがとう」

「救ったのは衛さ。あいつがいなきや、ホントにバッドエンドになってたよ」

「だが、きつかけを与えてくれたのはお前だ。……………ありがとう」

頭を下げるリインフォースに照れくさくなってオレはそっぽを向いた。

美人に感謝されたんだ。仕方ないだろ。オレだってこんな人に感謝されたら照れくさくなるって。

それに……………また感謝されたな。

プレシアさん以来だな。

「そういうえば、プレシアさんのお墓ってどこか聞いたのか？」

「……………ある次元世界に移したって今日アリシアからラインが届いた」

フェイトは素っ気なく答えた。オレがしたことは許されないといい気持ちがまだあるのかもな。

どうでもいいけど。

「神威。あなたのしたことは許せない。私はたぶん永遠にあなたを恨むと思う」

「だろ。お前の母親をどっかにやった張本人だしな」

「だけど……………ね」

「ん？」

「少しずつ、あなたを許していこうと思う。それがアリシアの願いだから」

目を瞑り、今ここにいない姉を想うフェイト。

アリシアめ、余計な気遣いを……。オレは別に恨まれてもなんでもないので。

「あーソラくん照れてるー♪」

「……………うつせえ。ほつとけ」

「あら、そんなこと言うソラにはお仕置きではなく、誉め殺しという罰を与えるわ。光栄に思いなさい」

勘弁してくださいほむら様。もう羞恥心で死にそうです。

オレは土下座してほむらの罰を勘弁するようお願いした。

……………みんなに笑われたことがかなり恥ずかしいです先生。

「お前にそんな顔があるとは意外だな」

「笑うな！ たくつ……………。これから自分が逝くつていうのに何のんきに言つてやがる」

「そうだな。最期におもしろいものも見せてもらった。もう……………悔いはない」

ラインフォースはそう言つて高町とフェイトをお願いした。

そろそろか。ラインフォースが消えるときが。

そして――

「ちよつと待ってや！」

―― 衝に車イスを押された八神が来るときが。

甘いなりインフォース。お前の主は厄介なほどの優しいヤツだ。

「あ、主?!」

八神は一刻も早くとばかりに前へ前へ行きすぎて遂に前のりに倒れてしまった。

まだ立てない彼女はそれでもリインフォースに近づこうとする。

リインフォースはそんな八神に近づき、身体を支える。

「自分が消えるとか言わんといて! アンタは私の大切な家族なんやで!」

「主、しかし……………」

「なんも言わんといて! 消えることは許さないで! ずっといるんや! これから

も、いつまでもや!」

年相応なワガママなお願いだ。

だが、現実是不変わらない。リインフォースは消えない限り防衛プログラムは復活はする。そうすればまた八神を苦しめる。

だからこそ、彼女の意思は堅い。

「主、ワガママを言っただけじゃありません。私はこれ以上あなたに迷惑かけたくありません」「迷惑やない！　迷惑なんか……………」

「わかってください。私も、私も生きたいです……………こんな優しい人に出会ったのにお別れしたくありません……………」

でも、とリインフォースは続ける。

「でも、運命は変えられません。私はいなくならなければなりません」

「リイン…………フォース……………」

「私は世界で一番幸せな魔導書です……………。ありがとうございます……………私の優しい主様……………」

そう言っただけでリインフォースは八神を衛に任せてそこから離れた。

彼女は覚悟を決めた。高町とフェイトはそれに答えなければならぬ。

「しっかし、最後の最後に彼女の本音が聞けたなあ」

「うんうん、感動的だね。千香ちゃんちよつと感動しちゃった」

でもな、リインフォース。お前は唯一誤算を犯した。

どんな誤算かって？

「んじゃ、やりますか」

「がんばってねー。全てを台無しにするのが変態の役目ですから♪」

「オレは変態じゃねえから」

オレは神器を召喚し、高町達が魔法を放つ前に——リインフォースを刺した。

神器使い達は嘆息を漏らし、それ意外はオレの凶行に驚愕していた。

「その呪縛……………解錠してやるー」

オレは神器を回すとリインフォースの身体から何かが開いた音が鳴る。

すると、リインフォースの身体は光出し、タイツ姿から真つ裸になった。

オレは神器を抜き、そのまま苦しそうに浮いている闇の書に向けて斬りかかる。

「この女を道連れにすることはオレが許さん。だから安心してとつと死ぬ、害悪」

オレは闇の書を真つ二つに切り裂いた。そして、とどめとばかりにまどかが弓矢を放つて闇の書は欠片を残して消滅した。

ナイスまどか。残り物を殲滅してくれて助かった。

「な、何が起きたのだ？ 私に……………」

「バグに侵された管制人格からお前を『解放』した。プログラムだったから簡単にできた

「よ」

要するに融合機能を失った魔力があるプログラムである。シグナム達と同じ存在と
考えてもいい。

そのことを八神達に説明した。

「それじゃありンフオースは……………」

「死なないよ。ほら、何か一言言つてやれ」

オレの言葉と同時に八神は衛の腕から飛び出して、リインフオースに飛び込んだ。

感動のあまり涙まで出す始末だ。

「我が友よ、ありがとう……………」

「感謝する必要はないだろ？　だってあいつは言ったじゃねえか」

—— 『生きたいです。別れたくないです』 ってね。

それにな、リインフオース。

運命は変えられないかもしれないけど、その果てにある『結果』は変わるもんだぜ？

オレは不敵に笑いながらそう思うのだった。

「よっしやあ！ 真っ裸なりインフォースと幼女なはやての百合百合シートのシャツ
ターチャアアアンス!! 富竹フラツシユ！」

あ、ヤベ。こいつ忘れてた。そしてほむらさんや、どうしてオレにアイアンクローす

るのですか？

「女性を丸裸にしておいてまだそんなこと言えるのね。ケダモノにはお仕置きよ」

「本音は？」

「たわわに実った果実に対する八つ当たり」

オレは「解せぬ」と一言残して、意識がブラックアウトした。

その後の展開は衛から聞いたけど、写真撮られてアースラで販売されたりインフォースは羞恥のあまり高町直伝のスタラをその場で撃つたり、八神がその写真をオークションで競り落したり、残りはマミさん主催の優雅なお茶会していたそうだ。

やはりカオスで終わってしまった。

あ。ちなみに写真見てわかったけど、リインフォースって脱いだらスゴいんだ。意外にあるよあの子。

第四十一話

その後、管理局で裁判が開かれて八神はやての罪を裁こうとしてきた。だがしかしそこにいたのは弁護士（秘書メガネモードの）朱美ほむらと七三分けにした髪型をしたオレである。

リーガルな弁護士のごとく、口八丁と管理局の汚職を暴露。しかも情報操作とでつち上げの証言でギャラリーを味方につけ、管理局の立場を悪くさせた。

裁判長が実はDMと暴露されたときに見せた周りの反応は地味に笑えた。シーンと静まつたり、クスクス笑っていたからな。

検察側は旦那さんの浮気現場を見せてやると女検事は「ちよつと退出します」と行つたきり帰つて来なかった。

気になったので衛に頼んで、リアルタイムのSYURABAにギャラリー席のみなさんに見せてやると結構盛り上がった。

そして旦那さんの浮気相手は男であったことにオレは戦慄を覚えたよ。なぜかギャラリーはお構いなしに「いいぞ、もつとやれ!!」などと盛り上がっていたけど。

ミッドつて性別の壁を余裕で越えてくる都市なのか？

旦那さんの「ぼくは男がいいんだよ!!」という発言が忘れられそうにないや
……………。

あと、あの検事は後に『寝取られ検事』というあだ名がついたとか。広めたソースは
もちろん千香である。

ちなみに裁判長の青年期のラブレター朗読会をしようとしたが、彼は涙目で「勘弁し
て、もうお願い」と懇願してきた。

その場で発表はしなかったが、後で都市にばらまいてやった。

悪魔？ はて、賄賂で八神をはめようしていた外道には良い末路だと思えますが、何
か？

そんなこんなで前代未聞の裁判は勝訴という形で八神と衛は無理に働くことは無く
なった。

ただ守護騎士とリインフォースはしばらく働くことになったが。

☆☆☆

除夜の鐘が鳴り終わり、新年の始まりである。

我が家では羽根つきやらカルタなどのゲーム三昧な正月を過ごした。ちなみにおみくじを引いてみたが、吉であった。

縁のところ、『女難に注意』と書かれていたが今さらだと思う。

そして今現在もほむらと千香と一緒に、コタツでダラダラしていた。

「コタツはすばらしい……………」

「ネコの気持ちかわかるわ……………」

「ネコと言えばあの猫耳姉妹ネットアイドル扱いされてたよ」

千香の言う通り彼女達はネットの中ではじゃん吉姉妹というコスプレ名で次元世界に広まっていた。

記者達の会見で本人達は否定しているが、思いつきり顔を載せているためバレバレである。

そのときの会見でグレアムさんが「娘が遠い存在に……………」と呟いて黄昏てた。

ものすごい誤解された光景を見てオレとほむらとまどかが笑った記憶はまだ新しい。

「ケケケ、まだまだネタを残ってるからジャンジャンホームページに送るよー」

「どれくらい残ってるの？」

「三年分」

千香の言葉にオレ達二人は猫耳姉妹に同情した。自業自得とは言え、こんな変態に目

をつけられた二人に合掌。

「まあなんにせよ。今年の抱負どうするのお前ら」

ちなみにオレは平温か日常である。日常茶飯事にトラブル巻き込まれるのもうやなんだけど。

すると、ほむらはババツと書き初めし、オレに見せた。

「まどかと決めたわ。ソラを奴隷モにする」

「その抱負オレとしてはヤなんだけどそれ。オレに人権ないじゃん」

「人権？ ペットに人権はないわ。あるのは所有権のみよ」

「相変わらずのDSなこと……………」

オレが呆れていると千香も書き初めし終えた。

「ボクはソラが変態化すること！ カモン同志！」

「千香ハザードにならん。それが死んだ師匠の遺言書にもあったからな」

「おのれ……………どこまでも邪魔するか『閃光』め!!」

「お前どこのラスボス？」

オレのツツコミを無視して千香は自らのコレクションを整理し始めた。

海や運動会の写真もあるな。主に女子の。

「知らない子もいるな……………。ちゃんと許可取ったのか？」

「盗撮つてすばらしい！」

「許可とれよ犯罪者!!」

オレはツツコミという形で千香の脳天に全力チョップを入れた。

——まあなんにせよ。

そんな正月を過ごすのだった。

☆☆☆

そして、春は訪れた。今年でمامィさんを除いたオレ達は四年生である。

ホント昨年的一年間はいろいろあった。

自殺しようとしたらこいつらと再会して、プレシアさんの願いを叶えたり、闇の書に巻き込まれる形で協力することがあった。

八神は今では歩けるようになって、衛と付き合うことになっている。

なんでも正月に衛が告白したらしい。筋肉さえなければ衛は見た目も中身も美形だしな。

そのとき千香が録画して八神家で上映したエピソードがあったりする。最後まで八神達はいじられまくりだったなああれは。

それから今でも守護騎士達は罪を償うために無償奉公で管理局に働くことになってるらしい。

リインフォースは無限図書館に働くことになったらしい。まあ、元デバイスという機械だったわけだし演算能力が高いので重宝されているらしい。

ときどきしか帰ってこない守護騎士とリインフォースに八神は寂しいとぼやいて衛に甘えていたが。未長く爆発してろバカツプル。

高町とフェイトとオリ主くんはどうしたって？

本格的に管理局に働くことになったららしい。高町は無茶しがちなのが心配だとフェイトは言っている。

高町とフェイトから敵視されることが無くなったため、バニングスや月村も敵視されることは無くなった。

オリ主くんは未だにオレを敵視してるが。それでも高町とは良好な関係らしい。

そして、始業式が終わった後。

オレは一人屋上に来ていた。

「さーて、これからどうしようか？」

リリカルなのはこの世界の世界の重要な物語が二つ終わったため、オレはこれからのことを考えていた。

まどか達の平行世界に行つて魔女を蹂躪する？
それとも全く新しい異世界に行つて冒険する？

まあなんにせよ。

「中学卒業してから考えるか」

オレは笑みを浮かべて彼女達と話し合おうと屋上から出ていくのだった。

——残されたのは桜が舞う一筋の風だけだった。

—— だけど、オレは甘かった。

ヤツらはただ黙って見ている組織じゃなかったことを。ヤツらすでに計画を立てていたことを。

GOD編 いつだつて不幸はある

第四十二話

やや曇りな天気。曇天より遙かにマシだがそれでも嫌な天気である。

闇の書。かつて八神を苦しめたロストロギア。

確かにオレとまどかが消滅させたがその残骸は残っていた。

なぜそんなこと言うかって？

そりゃ簡単な話だ。

「殺してやる！ みんなみんな殺してやるウウウウ！！」

目の前に師匠を失ったときのオレが神器構えているからだ。

さつきリンデイさんからラインが届いて、どうやらみんな偽者と戦っているらしい。

え？ 急展開すぎる？

ダラダラと伸ばすより端的でわかりやすいほうがいいだろ？ それに……………。

「自分自身と戦えるなんてレアな展開じゃねえか！」

偽者はオレに斬りかかってきた。オレは背後にドコでもドアを展開し、偽者を誘った。

砂漠の無人世界に誘い込んだオレは偽者を空中へと蹴り飛ばす。

「くそ、がアアア!!」

「ギャーギャーとうるせえな。発情期ですかコノヤロー」

オレは文句を言いながら、神器を召喚し、いつも通りの言葉を言い始める。

「充分だろ?」

「殺す! お前だけは絶対!」

なあ、昔のオレ。怨むのは良い。悔いるのはいい。

「もういいだろ?」

「間違っていたんだ! お前らを生きることを許したらいけないかったんだ!」

だけどな……………絶望して気づいたならいつまでもそうするな。

変われよ。

今度は見失わず、失わないように。

「だから安心してとつと死ね過去の遺物」

「敵は、皆殺し、だアアアアア!!」

オレと偽者はぶつかった。

一つは純粋な怒り、もう一つは純粋な殺意。

今と昔の戦いが始まった。

(まどかサイド)

私とほむらちゃんは今、昔の自分達と対峙していた。

魔法少女だった頃の自分がなぜいるのかわからないけど、彼女達が敵だと言うことは丸わかりだ。

「もう誰にも頼らない……………まどかさえ救えれば、もうそれでいい……………」
「なんで……………なんでこんなひどいことをしたの……………」

悪い夢を見ているような彼女達の言葉にふと私はほむらちゃんに聞きたいことができた。

「ほむらちゃん、今もそう思うの?」

「愚問だわ。今は頼れる人達がいる。味方はまどかだけじゃないもの」
「ティヒヒヒ、そうだね♪」

私達は神器を構えて口に出した。

「だからさっさとどっか行って、過去の遺物さん達」
私達の戦いの火蓋が切って落とされた。

(千香サイド)

そしてボクのターン。ボクと杏子、さやかは今まさにそれぞれの自分の偽者達と対峙していた。

「杏子、ボクはボクの相手するから他の人お願いね」

「なんでだ？」

「あれはボクが変態になる前の一番危ない時期だからだよ。なにもかも中途半端だからどんな手を使っても殺すつもりで来るよ」

杏子とさやかはゾツとした表情をしていた。どんな手を使ってもという言葉は一見簡単に見えるが、ホントに最悪な手段だ。

味方でさえも道具に使うようにする——それを当たり前に実行していたのがあのボクだ。

「ていうかアレ、ホントにアンタ？ 百八十度全然別人じゃん」

「師匠の変態演説でこうなった。録音あるから聞く？」

「全力でお断りよ」

さやかに拒否られた。解せぬ。

なーんてシリアス展開が台無しにされたところで戦いは始まった。

………さあ、殺してあげる。昔のキャラもみんな、みんな台無しにしてあげ
る♪

第四十三話

砂漠の世界で金属音が鳴り響く。

オレの偽者は神器の力を使えないのか、斬撃ばかりだった。

好都合。オレは偽者の斬撃をヒラリヒラリと回避し、右顔を殴る。

ズザザと地面を滑らせ、止まったところでこちらが攻める前に偽者が攻めてきた。

「くそー！ くそくそー！ なんて当たらねえんだよ!!」

「そりゃ、冷静じゃねえから太刀筋が単純だもん」

だから簡単に避けれる。

オレは大振りになってできた隙を使って、斬り上げた。

そのまま偽者の神器は弾かれ、手から離れた。

「これぞまさしく『あつという間に』ってヤツだな!!」

オレはそのまま連続斬りを放つ。全てを開く者神器の力を使つてないし、刃の部分で斬つてない

ため、打撃系になつてるがそれでも多くの打撲傷ができる。

「が、アアアアア!!」

偽者はなりふり構わず飛びかかろうとしてきた。

オレは神全てを開く者器の力を使ってその胴体に一閃。

偽者は糸が切れた人形のように力なく倒れた。

「これが今だ」

光の粒子となつて消えていくそう呟いてオレはドコでもドアを展開し、その世界から離れた。

なんか昔の自分つてここまで弱かったんだなと少し懐かしく思った。

(まどかサイド)

昔の私はそこそこ強い。この戦いで少しわかった。

「けど残念。私はもう魔法少女じゃないし、人間じゃなくなってるから」

円環の魔力を使い、空へ飛んだ私は最大出力の弓矢を向けた。

ほむらちゃんの偽者はそうはさせまいとグロックを構える。

カチリ

「そうはさせないわ」

時計が止まった音と共にほむらちゃんの偽者は動きは停止した。そしてそんな彼女

にほむらちゃんは容赦なくバズーカ砲を撃った。

爆発音と共にズタボロになった偽者のほむらちゃんに偽者の私が受け止める。

偽者であれ、傷つけたことに私は少し心を痛めた。ほむらちゃんも同じみたいだった。

「ごめんね……………」

そう呟いて弓の弦を離した。

矢は二人のところに向かい、凄まじき音共に二人は消滅した。

「嫌な戦いだっただね……………」

「ええ……………」

まるであったかもしれない未来を見た気分私達は勝利に対して晴れやかな心になれなかった。

(千香サイド)

そして再びボクのターン！

ヤッホーみんなのアイドル千香ちゃんだぞ☆

ただいまボクの偽者がボクを殺そうと白兵戦を挑んできます。マジモンのナイフ

でボクを猟奇的殺そうって話だね。

ところがどっこい、そんなちなけなナイフ技ではボクはあつたりませーん♪
理由はまだまだ未熟で単純なんだもん。

「……………捕らえた」

「およ?」

どうやらマジックで手を捕らえられたようだ。そして顔面に向けてナイフを刺そうと振りかぶる。

ガキインツ

しかしボクの顔面は鉄とぶつかったかのような音を立ててナイフを折った。

「っ!」

「どうしてって顔だね。答えは簡単。ボクの顔に神器を発動したんだよ♪」

謂わば、鋼鉄のフルフェイスマスクを着けた状態である。

ふふん、驚くのはまだ早いよん♪

「手が……………動かない? なんで?」

「そりゃ、僅かに動揺した隙を狙ってバインドで捕らえたもん。捕らえられたのは君なんだよ?」

と言いながらボクは容赦なく偽者の顔を掴む。

「いや……………まだ死にたく——」

ズバツ!!

何かを言う前にボクは彼女の首を切り裂いた。

噴水のごとく噴いた返り血がボクの顔に当たり、彼女はそのまま事切れた。

「アハツ。死にたくないって何を今更。ボクは戦うときは常に命をかけているんだよ。

……………ヌルイことを言うのは天ヶ瀬千香じゃない。No. 14だよ♪」

口についた返り血を舐めながらボクは、それを投げ捨てた。光の粒子になって消えていったからどうやら戦闘不能になればそうなるように設定されているらしい。

ボクは杏子やさやかかの偽者が戦う元に向かう。

さあ……………もつと殺り合おうよ。

命のやりとりをね……………。

第四十四話

オレはまだか達を探しに地球へ戻った。

空中にいるオレは状況確認のために、遠目から見ると、そこではやはり、あちこちに境界が張られているな。

それぞれが自分達の偽者と戦っているのだろう。

「つてこつちもか。休みがないなんて鬼畜だな偽者共」

「偽者じゃないぞ！ 力のマテリアル、レヴィ・ザ・スラッシャーだぞ！」

子どもっぽい口調をしたフェイトがいた。

いやでもフェイトって歳の割には大人に近いよな。

これが普通か。それよりもツツコミたいことがある。

まず髪まで青く染めている。

もう反抗期？ 早くね？

名前が厨二っぽい。中学二年辺りの病気に発症とは、いと悲し。

「オイ、フェイト。早熟だったせいで退化するなんてリンデイさん泣いてるぞきつと」

「僕はオリジナルじゃないぞ！ レヴィ・ザ・スラッシャーだ!!」

レヴィ・ザ・スラツシャーって完璧な厨二発症者である証拠である。

オレは暖かい目で彼女を論そうとすることにした。

「フェイト、人生辛いことあるけど生きてればいいことあるさ………だから、ね？ その名前はやめようね？」

「オリジナルじゃないって言うてるだろー!! もー怒った！ 部下一号やーておしまい!!」

なんか怒らせたみたいだ。すると、どこからか小さな影が現れた。

クリクリとした純粋な青い目。特徴的なアホ毛。そして手にはカギのような剣を
持っている。

………というかオレだ。しかも戦争行く前の。

「師匠！ こいつがどうかしたのですか？」

「ぼくのことをオリジナルって勘違いするんだ！ しかも頑固に！」

えっ、もしかして別人なの？

ということフェイトの二人目の姉妹ってことか？

そんなことを考えていると、小さなオレはオレ自身に神器を向ける。

あれも偽者か？ だとしたら驚異じゃないな。

「おい、その死んだ目！」

「えっ、ど(ど)ど(ど)？」

「お前だつて！ よくも師匠を人違いしてくれたな。オレが懲らしめてやる！」

あー、懐かしいな。あの頃のオレは子どもだったから「懲らしめる」とか言つて戦場で敵と立ち向かつていたな。

「覚悟！」

小さなオレは無謀にも突つ込んできた。斬り込むが、甘い。殺す気なんてない斬撃は軽々と避けれる。

レヴィというフェイトもどきは「やつてしまえ！」と歓声していた。

うん、とりあえず――

「邪魔」

「ゴフツ!？」

頭を掴んで腹部に膝蹴り。小さなオレは咳き込んだ。

オレは離れたヤツにあつという間に近づき――
全てを開く者
 神器で首を叩き折つた。

ボキツと嫌な音を立てて、小さなオレはそのまま下へ落下し、消えていった。

「な、なんてことをするんだ！」

「え、だつて偽者じゃん。死んだところで光の粒子になって消えるから別に問題ないだ

ろ？」

「そうじゃない！ 子どもを殺すなんて酷いよ！」

子どもねえ……。……。オレはおかしくなつて笑つた。フエイトもどきはそれに対してさらに憤慨した。

「何がおかしいんだ！」

「んなもんオレには関係ないな。オレは子どもが戦うなんて当たり前の戦争に参加してたからわかるんだよ。そんな甘い理由で生かしたところで報復される。そんなヤツがいたからな。もう死んでるが」

「っ……………」

歯を食い縛り睨み付けるレヴィ。

それに、とオレは続けた。

これがオレが小さなオレを抹殺する理由を口に出した。

「青二才の理想と信念はとうの昔に捨てた。だから気に入らないんだよ。……………昔の自分を見ていると殺したくなる！」

その理想のせいで師匠を亡くした。だから、オレはあの頃のオレに憎悪を抱く。

あのとき……。あんな考えさえなければ師匠は死なずに済んだのに……………。

「お前の言うことはわかるよ。正論だ。子どもを殺すヤツは外道つて言つてもいいだろ

うよ。……………けどな、そんな外道でいいよ。外道らしく惨めな最期が来るまでオレは大切な者を守るって決めてるんだ」

だから敵は殺す。女だろうが子どもだろうが老人だろうが戦場に立つ敵であれば全て殲滅する。

それが今のオレの信念だ。

「……………部下一号の仇をとってみせる！」

「仇討ちならご勝手に。ただし——やれるもんならな」

オレは神器を構えるとレヴィはフエイトと同じ戦斧を構える。

双方、飛び出そうとしたとき熱光線がオレに向かってきた。

その魔法をオレは神器全てを開く者で解錠でキャンセルした。

熱光線を撃ってきたのは……………高町？

いや、高町は短髪じゃないし何よりもあの騒がしさがなく、物静かだ。

「シユテルん！」

「ミシユラン？」

「どうやったらそう聞こえるのですか？」

高町モドキは呆れながらそう言った。

オレってどうでもいいヤツの名前覚えるの苦手なんだよね。

「さりげなく最低ですね神威ソラ。私の名前はシユテル・ザ・デストラクター。理のマテリアルです」

「血？ 物騒なマテリアルなこと」

「その血じゃありません」

間違えちった。テヘツ。

「ここまで気持ち悪い『テヘツ』は見たことありません」

「やっぱかわいくないわな、これ」

「なに普通に会話してるのシユテル！ こいつ部下一号を消した敵だよ!？」

レヴィはそう言つて戦斧を構える。しかしシユテルはそれを手で阻む。

「やめておいた方がいいでしょう。彼は魔導士ではなく神器使いという未知の化け物です。彼の能力を使えば私達なんてあつという間にスプラッタにされるのがオチです」

「化け物は否定しないけど、見ず知らずのヤツに言われるなんて、ちよつとシヨック」

「嘘を言いなさい。現に不敵笑っているでしょう?」

おや、顔に出てたみたい。

シユテルに指摘されて自分は笑っていたことに気づいた。オレって狂っているのかねえ？

「ま、どつちでもいいか。向かってくる敵だったら殲滅するだけだし」

「こちらとしては見逃してほしいですね」

「あ。別にいいよ。オレ達に危害を加えないなら、何もしない。約束するよ。それにそちらはなんか目的とかありそうだしな」

オレがそう言うのとシユテルは「感謝します」と言つて飛び去つた。

レヴィは「必ず仇討ちしてやるー！」とアツカンペーしながらシユテルに付いて行つた。

「ま、できればまた戦うことがないことを祈るよ」

オレとしては連戦は勘弁だ。あんまり戦いたくない。

オレの弱点が浮き彫りするからな。

その後、みんなと合流してオレ達はアースラに保護されるという形で入艦した。

「あ。フェイト、お前ってアリシア以外に姉妹いる？」

「いないけど……。あ、もしかしてレヴィに会った？」

「まあな。次会ったら調べるか……。血を全て抜き取ってからそのDNAを」

「母さん、この人いますぐ止めて！ レヴィがスプラッタになる！」

リンディさんに殺人はダメよと怒られた。

冗談だよ。ブラックキューモアなのになあ。

第四十五話

アースラのとある一室。オレ達はそこで軟禁状態であつた。

なんかまた事件をむちやくちやにされたくないそうらしい。

「ヤベツ、このカエルつえーぞー！」

「杏子、ちよつと待つて。今爆弾で………つて誰よ！　ここに落とし穴しかけたヤツは!？」

「あ、ワリ。アタシだ」

「あーもう、ホントチームワークないね。あたし達!」

そう言つて携帯ゲーム機に必死になる杏子とさやか。

ゲームの中ではそうだがリアルではかなり相性いいのにな。

ていうか、いつ持つてきたそれ。

「お茶はいかがかしら？」

「ありがとうمام子さん。そこに置いといてください」

「ふふ、わかりました♪」

مام子さんもいつの間にか用意したティーセットでみんなの分の紅茶を入れてくれた。

そういえば紅茶以外は魔力でできてるんだっけ、これ。

「ソラくんソラくん、見て見て！ ほむらちゃんに将棋で勝ったよ！」

「くっ、油断したわ……………。まどかのキュートな仕草ばかり目を移らせてしまっていたわ……………！」

「ティヒヒヒ、これも計画通りってヤツだね！」

と笑顔を浮かべるまどかと悔しそうに拳を握るほむら。

いやまどかかってボードゲームはあんまり強くなかったよな。

どんだけ気を捉えすぎなんだよ、ほむら。

あ、ほむらもそれほど強くなかったな。

魔法少女の時代のトラウマなのか、なんかあんまり捨て駒を使いたくない傾向あるからな。

肝心の千香はガ○ラの手入れをしていた。

……………誤字ではない。カメラじゃなくてマジのガメ○。

どっから仕入れてきたのやら小さなガメラの甲羅を綺麗にしてあげている。

あえてツツコンであげないが。

ちなみにオレは読書中である。前にほむらと出掛けたときに買った本を読み返している。

「うむうむ、今日も平常運転である」

「なにゆつたりとくつろいでるのですか!？」

なんかおさげなお姉さんに怒られた。

えつと確か、妹さんがエグザエルを探しにきたのでそれを追って同じく未来から機械の人間で名前が――

「マンマミーヤ林蔵さんだっけ?」

「誰よそれ!? アミティエ・フローリアンですよ!　というかあたしの妹はイケメングループは探しにきたんじゃないやなくて、無限魔力機関のエクザミアを探しにきたのですよ!」

「あ、ごめん。もっかい言って。『倉リス』のニューシングルの予定日を思い出してたから聞いてないや」

「あんたケンカ売ってるのですか!？」

「ケンカは売ってないよ。馬鹿じゃないの?」

うがアアアアと頭をムシャクシャし始めるマミヤさん――あ。間違えた。

もうメンドイからアミタでいいや。

とにかく彼女にマミヤさんは紅茶を渡した。それを飲んでやつと落ち着いてくれた。

「それでマミヤさん――……………ごめん間違えた。アミタさんでいい?」

「もうそれでいいよ……………。あんたがあたしの名前を覚えないだろうし」

いやーと照れくさそうに笑うと「褒めてない」ってツッコまれた。

そうなの？

ま、いや。なんかこの人が聞きたいことがあるそうだし。

「まずあなた達何者ですか？ どうしてここに軟禁されてるのですか？ あたしは艦内を自由にして良いって言われてるのに」

「自由にしたらオレとこいつらがやりたい放題するから」

「把握した。見てわかる通りフリーダムですね……………」

それがオレ達クオリティである。アミタさんは呆れながら聞いてきた。

「魔導士、じゃないね」

「正解。オレ達は神器使い。いわゆる魂を武器にしたモノで戦う化け物集団だ」

「なるほどね……………。今さらだけどあの○メラも神器ってモノなのですか？」

「いんや神器じゃない天然モノ。どっから仕入れてきたのか不明。てか、オレが聞きとえー。いつものトラブルの元があるから、胃も痛くなってきたし……………」

「あんたがこの中で苦勞人ってわかりました……………」

同情してくれたこの人がいい人だとわかった。

それからオレ達は情報交換するのだった。

「ソラーお腹空いた？　ちよつと料理作ったんだよー♪」

話を終えると千香が鍋をオレの目の前に出した。

「いろいろツツコみたいがどんな料理だ？」

「亀鍋」

「え？」

そういえばあの小さな怪獣どこ行った？

(衛サイド)

結界が張られた都市街にて我は大人モードになって戦いをしていた。

小手調べのつもりだったが、どうも我の偽物は下の実力のようなのだ。

ここまで弱かったのだな、我は。はやての偽物はなかなかだったが如何せん、どこか厨二くさいな。

それから我らはお互いの舌戦かっせんをしていた。

「おのれおのれエエエ!!　肉だるまの分際で王たる我おれに差し向かうとはもう許せん!

断罪してくれよう！」

「ぬかせ！ 王はこの闇統べる王！ ロード・デイアーチエだ！」

「ほぎげ、はやてモドキ。マツスルキングはこの我だ！ 見よ、このすばらしき筋肉を
!!」

「『そんな称号いらんわ！』」

我の偽者とはやてモドキにも怒られた。解せぬ。ちなみにはやては屋上で三角座りして構つてよオーラを出している。

うぬー……なんだこの保護欲的なモノは？

最初にはやてモドキもはやて自身に執心だったが、我の偽者の王宣言にこちらに参戦してきた。

なんでこうなったのだろう……………。

「まあよい。我の偽者よ……………貴様にはわからぬか？ この肉体美を、すばらしき芸術的な筋肉が！」

「たわけたことをぬかすな雑種。王は既に芸術的肉体がある者だ。そのような肉だるまが芸術など笑止千万だ！」

「全く」だとはやてモドキも頷く。……………貴様ら、よくも言ったな？

「貧相なスタイルの貴様らにだけには言われたくないな」

「なんだと!？」

同時にツツコむ王達（笑）。フン、ならば言わしてもらおうか。

「まずディアーチェだっけ？ ケツ、乳が足りん。はやてのスタイルはもう少しボリュームあつたと我われは思う」

「なんだと!？ 誠か!？ オリジナル!」

「知らんがな。てか、衛くん後でシバきな。意味ないと思うけど」

む、はやての触れてはいけないモノに触れたのか？

だが、しかし事実だと思ふ。我が変態化する前にははやての介護をしてよく裸を見ていた。今思えば恥ずかしいものだ。

「そして我われの偽者よ。貴様はアソコが小さいな!」

「どこ指さしとる貴様は!？」

「ちなみに我のアソコは筋肉という芸術に目覚めて進化した。水鉄砲からバズーカ砲となったのだ!」

「どうでもいいわ!!」

偽者はツツコむに対してはやてとはやてモドキは頬を染めていた。

はやては「バズーカ砲って……………」と顔を赤くして呟く。

驚くのは早いぞ、はやて。我が友は戦艦砲撃くらいあつたとまどか殿は言っていたぞ

?

しかしなぜまどか殿はその事実を？ まあいいか。

「思い知ったか貧弱共が！ 肉だるまと馬鹿にする暇があるなら乳なり筋肉なり増強するがよい！」

「思いつきりセクハラ発言するな馬鹿者！」

「もはや言葉は無用！ 王として貴様の血肉一辺も残さず消してくれよう！」
おもしろい。やってみろ！

我はそう言つて偽者の元へ飛び込もうとした——

「ねーちよつといーい？」

——がゆったりとした口調の同い年の少女が我らの目の前に現れた。その少女はおっとりそうな顔で見たことある銀髪。そして紅い瞳。

はて、どこかで会ったことのある人物か？

「パパがどこにいるか知らないー？」

「どけ、幼女！ 我の戦いを邪魔するな！」

我の偽者はわれそう言つて王の財宝をその少女に射出した。

おのれ、卑劣な！

我はそう思い少女の盾になろうとしたが少女は腕に盾を展開し、手を前に出して障壁を造り出した。

王の財宝は全てその障壁に阻まれ、力なく空から落ちる。

……それは見たことある障壁だった。

なぜだ。なぜ貴様が千香殿と同じ力が使える!?

「我^{われ}の………王の財宝がこんな容易く!？」

「弱いねー。ママ達に比べるとミジンコクラスだよキミ」

「な、なんだとこの——」

グサツ

偽者はそう言う前に少女がナイフで頭部を刺して、そのまま至近距離からの大型マスケット銃で身体ごと消し飛ばした。

一切の躊躇のない行動に我はすぐさま行動に移っていた。

このままではまずい、と。

「つまらないなー。ママ達との戦いで強くなりすぎたのかなー?」

「貴様………何者だ?」

我はそう言いながらはやての前に降り立ち、いつでも彼女を守るよう前で構える。

のんびりそうに見えるこの少女だが、コイツに隙を見せればいつでもはやては人質に取られそうだ。

「警戒しないでよ。昔の衛オジサン。ワタシは知り合いには手を出さないよー？」
少女はディアーチェには元から眼中などないかのように我とはやてだけを見て会話をしていた。

私の知り合いだと？ 我がそう聞くと少女は答えた。

「ワタシの名前はー『神威かむいてんき天気』です。この時代の衛オジサンとはやてオバサン、はじめましてー♪」

——予想通り。そしてある意味驚愕な事実が判明して。

その笑顔はどこか彼の面影を感じさせていた。

第四十六話

アースラのとある一室にてオレ達神器使いと魔導士組がそれぞれ揃っていた。

理由は衛と八神の前に現れた一人の少女とオレの関係だったりする。

「ふわーパパだー♪」

「オイ、初対面に抱きついてあまつさえ、パパとはなんだ。パパとは。オレは前世から童貞でピカピカの三年生だぞボケ」

「相変わらず知らない人には辛辣だねー。スリスリ〜♪」

「スリスリすんな!!」

自称オレの娘、神威天気はオレの胸にスリスリしてきた。

パパってなんぞ？ オレはまだ子作りした覚えはないぞ？

いつでもバッチこいつてヤツらは知ってるが。

「説明してもらおうよパーパ？」

「ひどい……………私達に秘密に子ども作ってたなんてひどいよー!」

「ほむらさんや、とにかく説明するためにも撃つ準備しないで。マジで怖い。あとまどか、お前もな。神器出していつでも滅ぼすようなことしないで」

グロックと神器を構える二人の修羅をなだめる。

第一に子作りできる年齢じゃないだろ、オレ。

「ママ達も相変わらずだねー。パパをいじめて楽しそう♪」

「聞きました？ ほむらちゃん。私達のことママですって」

「あーやだ。想像妊娠してできた子かしら？」

「移り変わり、はやッ！」

思わずオレはツッコむ。臨機応変なのはこのことだろうよ。

それから衛の彼女から聞いた話によるとどうやら彼女は未来から来たらしい。

いつものようにお昼寝していたら、謎の次元の渦に巻き込まれてタイムスリップした

そうだ。ほむらもびっくりな事実である。

ちなみにそれぞれに娘がいるらしい。彼女は姉妹の中で末っ子らしいが。

「未来のことはあまり言えないけど、パパはお母さん、まどかママ、ほむらママ、杏子マ

マ、さやかママ、マミママと今でも仲良しだったよー？」

「アタシ達も未来ではソラと一緒にってわけか」

「それ聞いて安心したー」

杏子は納得し、さやかはホッと息を吐いた。そういえばこいつって前世では失恋して

たよな。

まあ、それを考えると無理ないか。

「ちよつと待つて。お母さんつて誰かしら?」

ママさんは首を傾げて天気聞いてきた。

そうなのだ。お母さんだけ固有名がなくて誰なのかわからないのだ。

……………いや、ヤツつて予想はできてるんだけど信じたくない。

だって天気はいくらなんでもヤツとか離れているし、若干ゆつたりしたマトモな女の子だぞ?」

それが事実なら残酷すぎる……………。

「やあやあ、ボクのお手洗いの時になーにおもしろいことしちゃってるの?」

千香がハンカチで手を拭きながら入ってきた。

すると、天気はバツと千香に振り向いて、オレから千香へ飛び込んだ。

「おかあさー……ん♪」

「おお、いつからボクは母親に!? パパは誰! ソラだったら今すぐ寝室に行かせるよ

!」

「そこで何するつもりだ!」

「それはボクのうれし恥ずかしなご褒美タイム!!」

「わけがわからないよ!」

と聞きかえしたが、グヘヘへと妄想に浸る千香は聞いていない。
どうせ、ろくなことじゃない。

「うにゅーお母さんの匂いだー♪」

「ミルキーな匂いでしょ？」

「うん！」

「そういうわけでこの後、君にはこの衣装を」

「させるか！」

なんか際どいバニーガールの衣装を取り出そうとした千香に向かって拳骨を落とす
て失神させた。

なんかハアハアと息が荒くなつてた気がする。こいつ気絶してるよな？

まあなんにせよ、危なかった。もう少してこの子の将来に黒歴史が刻まれるところ
だった。

そんなやりとりがあつたことを気にせず天気はまたオレに甘えてくる。

「パパーおんぶしてー」

「いや身長的に無理が——……って聞く前に乗るなよ！」

揺さぶるが天気はコアラのようにガツチリとホールドして離れない。やれやれ

……しばらくそうさせるか。

オレは嘆息を吐きながらそう思った。

「にゅふふふ………お姉ちゃん達がない間に幼いシヨタパパにマーキングしとこ。あ、写真も撮つとこうかな」

背中から聞こえたこの発言でオレは確信した。

あ、こいつ千香の娘だ。だって初期のあいつにソツクリだもん。

☆☆☆

そんなこんなで千香の娘こと天気はさやかと杏子、千香と一緒に現在アースラ探検している。

何やら自分達が未来でどんなことしているのか気になるそうらしい。

でも天気曰く、あまり未来のことはしゃべれないらしい。

どうやら未来のことを口に出さないのが世界のルールであるため、それを破ると最悪抑止の存在が現れるらしいから、と未来のオレが言っていたらしい。

もう救済の魔女のような神話レベルの化け物はこりごりだ。

そして残ったオレ達はと言うと、

「よし、誰もいないな。うめえー棒買いにいくぞ」

「あ、私はマーブルチロル買いに行こ」

「まどかに付いていくわ」

「私は紅茶の材料ね。それじゃ、各自解散ね」

オレとまどか、マミさん、ほむらはアースラからこつそり抜け出してコンビニ前に来ていた。

だって娯楽やお菓子あんまないし、何より閉じ込められてつままないもん。

というわけで抜け出して好き勝手行動することになった。

今ごろリンディ提督辺りが胃を痛めているだろう。

ま、ドンマイを込めて焼き肉味のうめえー棒を買っておいでやろう。

「ていうかまた結界？ ヤバい。魔法少女がいるの？」

「魔法はいませんが魔法少女はいます」

上から声がしたのでその方向を見ると、高町モドキがいた。確か、名前は
.....

「シユテル・ダークネスだっけ？」

「シユテル・ザ・デストラクターです。ダークネスという名前じゃありません」

「んじゃ、イチイチ全部名乗るのがめんどういからテルミで」

「あなたにシユテルと呼ぶというセレクトはないのですか？」

無表情だが、どこか怒っているように見えた。

感情が希薄な少女だな。

「んで、そのシユテルちゃんがオレになんのようだ？」

「私達の目的のためにはあなたが邪魔です。ここで取り押さえます」

「邪魔ってオレってただの男の子なんだけどなー？」

ヘラヘラと笑って誤魔化そうとしたが、熱線がオレの真横を通過し、当たった地上が

爆発した。オレはその余波で少し飛ばされたが着地して神器を構える。

「オイオイ、冗談キツいね。いきなり発射するものかね？」

「します。なんせ、あなたはあらゆるモノを開閉できる『全てを開く者』の持ち主ですから。私達が求めるモノを封印する可能性がありますから」

なるほど、それは納得した。

シユテルがオレを襲うには充分な理由だ。

そして新たな疑問ができた。

……………なんでオレの神器の名前を知っている？ それは神器使い達や高町達を除外した知り合い以外には話していないことだぞ。

誰から聞いたんだ？

「聞いたというより闇の書から得た知識からですね。あなたは一度管制人格に取り込まれたそうですね？ そのときあなたの記憶が写し取られたというわけです」

つまり、オレの癖や動きも理解していることか？

やられた……………。

誰か一人がいるのはまだしも動きを見切られたオレ一人がこいつに挑むのは些か無

謀である。

いくらオレの神器全てを開く者の高性能であつても当たらなければ発揮しない。

「安心してください。あなたを殺すことはしません。ただ、捕らえるだけです。もし私達がそんなことをすれば確実に潰されますからね」

「それは確かにあり得そうあな………」

よくわかつてるじゃないか。

そう思つてオレは奇襲の斬撃を放つ。しかしあつさり回避された。その上、高町より速くなつていた。次々と斬りかかるが全く当たる心配がない。

オレはそんなシユテルの速度に怪訝な表情になつていく。

—— オリジナルよりも速い、だと？ ありえない………」

高町をベースに造り出されたこいつが高町より速くなるのは信じられない。

あいつは高い火力と防御力を重視した砲台タイプだ。鈍足のはずなのにオレより少し速く動いている。

なぜオレより速い、と聞くと彼女は答えた。

「私はある人の助言で気づきました。どうすればオリジナルより速く動けるのか？」

シユテルは目を瞑りながら答えが出たということ言った。

どういふことだとオレは聞いてみると、彼女は無表情だがどこか今にも自慢したい子どものような口調で言葉を出した。

「聞きたいですか？ 聞きたいですね？」

「あ、なんか嫌な予感がするから別に……………」

「仕方ないですね。答えてあげましょう」

聞いてよシユテル……………」

「私はレヴィのオリジナルの服装から私は学びました。『脱げば脱ぐほど速くなる』と」「いや速く——なるのか？ てか知らないんだけどその定義。なんかヤなんだけどそれ」

「速くなります。実証されてますから。そして恥女というレッテルが張られますね」

「レヴィが恥女って暗に指してないかそれ？」

「レヴィは恥女ではありません。純粹なアホの子です」

「とりあえず味方をアホとか言つてやるなよ……………」

オレは呆れた目で見ているとシユテルは続けて言い出す。

「私はバリアジャケツトの変更を試みましたが、どうも上手くいきませんでした。あと恥女というレッテルを張られたくないし」

「後者が本音だろ」

「認めます。けれど、私は諦めず今のままでどうやってレヴィのような速さになるのか
求めました。そして気づきました」

どうやって速くなるのか、と聞くと彼女は答えた――

「下着を脱げば、いいと」

――予想の斜め上な形で

「うん、ちよつと待て。今なんて言った？　なんか変なアンサーが聞こえた気が
……………」

「言いたいことは一つです。『パンツ　はかない』です」

「気のせいじゃなかった!?!」

シユテルの背後に褐色肌のホムンクルスがサムアップする幻想が見えた。

てか、恥女じゃん！　パンツ履かないとかノーパンで戦うつもりか、こいつ!?!

「どんな定義だよ！ 『脱げば脱ぐほど速くなる』という定義より恥ずかしいことだろ！」

「何を言いますか。これは既にレヴィが実証済みです。おかげでレヴィもノーパン主義者になってくれました」

「レヴィいいいいいい!!? お前も変態になってしまったのかアアアア!!?」

「あ、大丈夫です。レヴィは『面倒だったから』という理由で脱ぎましたし、元からレギンス派だったそうです。私のような『スースーする感覚がたまらない』という理由ではないので安心してください」

「それなら安心——………できるかアアアア!! お前がノーパン主義者になつてどうする!? 高町泣くぞ絶対!」

「ふあ………風でスースーする感覚が………たまりません!」
「サムアツプして答えるなよ!!」

まさかのフェイトの服装で感染するとは思わなかった!!

というか、よく考えたらこいつに助言与えたヤツは誰だよ!?

「天ヶ瀬千香です」

「またあんの変態かアアアア!!」

頭をグシャグシャするオレはもはや乱心である。

もうマテリアルがまともなのはディーアーチェシかないのか!?
そう思いながら目の前の変態に攻撃を続けるのだった。

(??サイド)

一方ソラが戦っている間に八神はやとディーアーチェは戦っていた。

「納得してくれへんのか……………」

「そうだな。 我の考えは貴様には相容れぬようだ」

お互いピリピリとした空気の中で一斉に魔法を放つ。

譲れない戦いはまだ始まったばかりだ。

「女の魅力は乳やろオオオオオ!!」

「ちがーう! 女の魅力は尻だアアアア!!」

という争いをしていた。なぜこうなったのかと言うと談笑していたらケンカになつたとか言いようがない……………。

そしてそんなケンカの中で衛は筋トレをしていた。
なにこのカオス。真面目に戦えよ、お前ら……………。

第四十七話

結界に張られた空はどこか暗い天気だ。

そんな中、オレとシユテル達が戦っているのは市街地である。故にオレにとって得意なジャングルファイトができるというわけだ。

しかしそんなオレでも弱点はある。

人外とか言われてるけど、弱点はあるのだよワトソンくん。

「チツ、さっさと当たれノーパン娘！」

オレはビルとビルの間を駆使して、空中にいるシユテルに向かって斬り込む。

しかしヒラリとかわされる。

「お断りします。当たれば動きを封じられるのでしょうか？ それとノーパンになった私は無敵です」

「どうでもいいわ！ しかもそのどや顔、腹立つ!!」

そう言いながら、シユテルは熱線を撃つがそれを神器でキャンセルした。

シユテルが言っていることは正解だ。

相手は生身の人間ではない。さらにシユテルはあくまで高町モデルのプログラムで

あり、中核的な存在ではないため、一撃で機能を停止することはできない。

できると言えば相手の動きを止めるのみだ。

「防御はしません。だけど、回避はします。それから攻撃する。それがあなたの攻略法です」

「ノーパンのくせによくできました……………よー!」

オレは雷のマジックをシユテルに放った。シユテルはそれをシールドで防いだときに、オレはすぐさま斬りかかる。

しかしシユテルはバックへ下がってから空へ逃げたため、斬れなかった。

「そしてあなたは飛ぶことは苦手。そのため、あなたは私を深追いはしない。なぜなら私のモデルである高町なのはの十八番に挑むという愚行ですから。むしろ自身の得意なジャングルファイトに引き込むつもりなのでしょう?」

シユテルはそう言ってオレへ熱線を撃つ。オレはまた神器でキャンセルした。

マズイ……………こいつはもしかして……………。

「気がついたようですね。そう、これがあなたの弱点。なぜあなたはあまり戦おうとしないか? そしてなぜあなたはもう一つある神器閃光のメントを使うことをしないのか?」

答えは一つ、とシユテルは続けて言った。

「あなたは長期決戦では戦えないから」

「っ……………」

そうだ。シュテルの言う通りオレは長く戦えない。

前世のオレはまどか達と会ったときは十二歳だったから魔力量はまだあり、戦時中のオレは全盛期とも呼べるくらいそれなりに長く戦えるほどの魔力量はあった。

——ところが今のオレは九歳の身体。つまりまだ子どもの身体だ。

そのため魔力量は少なく、あつても平均の上くらい。連続で神器が使える回数も大体三十回で限界になる。

だからこそオレは誰かがいないと長くは戦うことはできないし、一人で戦うときはできただけ早く終わらせるべきなのだ。

「……………さすがだ。よく研究してくれたもんだ」

「知のマテリアルですから」

無表情で胸を張るシュテル。

いや無表情で胸を張られてもなあ……………。

「どうせならまな板じゃなくてポインなお姉さまの方がよかった」

「決めました。あなたは後でシバきます」

怒りの琴線に触れたようだ。なんてこつたい。

すると、魔法陣が現れて八神モドキとレヴィが現れた。気のせいだが八神モドキは既にボロボロだったがヤバイ。

一対多数になった！

シユテルは時間稼ぎだったのか!?

「そうですね。あなたを確実に封殺するためですよ」

オレは後ろを振り向くとバインドされてしまった。その時に神全てを開く者器を落としてしまった。

視界に入ったのはアミエと似た服装を着た女性だ。どうやら彼女の作業らしい。

ピンクのロングストレートヘア。ゆったりとした顔立ち。

そう、アミエが言っていた特徴に合致していた。

彼女の名前はアミエから聞いている。

確か……………

「お前は、淫乱ピンクのキリン・オブ・スシタロー!!」

「誰ですかそれ!」

「えっ? 違うの?」

「キリエ・フローリアンよ！ どこをどう間違ったらシタローやキリンが出てくるのよ!?!」

「なつかしの感想欄参照。なんかオレのことキリンと呼ぶ人いたから」

「メタ発言禁止よ!」

おお、このツツコミは正しくアミタの妹っぽい。

お前のことアミタ探してそうだぞ？

「ツツコミで姉妹判断しないでよ！ てかお姉ちゃんと会ったんだ」

『『帰ったらお尻ペンペンしてやるー』って愚痴を言っていたな』

「あの人はお母さんか。いやお姉ちゃんだけど」

「オレの場合、自宅ではなくて公園でやることをオススメしたら快く頷いてくれたぞ」

「アンタ何しちゃってるの!?!」

もうやだコイツ、とキリエはさめざめと泣いて嘆いていた。そんなにひどいことしたかなあ？

なんかマテリアルズも同情的な眼差しでキリエさん見てるし。

「お、オホン。とにかく大人しくしていればこれ以上危害はくわえないわよ」

「あ、持ち直した。それからアミタから聞いたんだけど、お前ってケーキ食べ過ぎて」

「お願いだから誰か、この人黙らせて!」

素直な少女レヴィがキリエの言うことを答えて、背後からオレの口を手で抑えた。えっ？　なんでこんなデリカシーないこと言ったのかって？

……………アミタのシスコン話の逆恨みさ。一時間くらい話してたぞあの人……………ま、結局オレは白旗をあげて降参するのだった。

(まどかサイド)

私達は集合場所で揃っている中、ソラくんだけまだ来ていない。

すると、ママさんから着信音が鳴った。なんか渋くて懐かしい曲だったと思う。

「あ、ソラくんから電話だ」

「今どこにいるか聞いてくれないかしら」

「わかったわ」

ほむらちゃんに頼まれたママさんは通話を始める。

『あ、もしもしママさん？　ちよつとマテリアル捕まって来れなくなっただけど』

「さりげなくマテリアルに捕まったとか言わないで」

ママさんは呆れながらため息を吐いた。

ソラくんもしかして余裕なのかな？

「それじゃあ今すぐお姉ちゃんがたすけ——」

「マミさんがそう言いかけたとき聞いてしまった。」

『あ、ソラ！ 勝手に電話かけるなよ！ 君は捕虜なんだぞ！』

『うつせー。こちらら暇で暇で堪らないんだよ！ てか、背中に抱きつくなよレヴィ！』

『だってソラの背中暖かいもーん！』

『部下一号の仇はどうした！ オレは怨敵だぞ』

『えっ？ ……………誰だっけその子？』

『忘れ去られた!?!』

『過去は振り返らないのが大人の女性なんだよ、ソラ』

『こいつホントにレヴィ!?! 短時間で、ものスッゲー大人になってるのだけど!!』

電話から活発そうな女の子の声が出た。

それだけでなく……………。

『ソラ、ちよつと手伝ってください。この金庫開けたいです』

『どっから持ってきたその金庫!?!』

『ちよつとあそこにあるバニングスという豪邸から』

『盗むなよ!』

『何を言いますか。私達の行動には資金が必要です。ですから別に翠屋のシュークリー

ムが食べたいからというわけで持ってきたわけではありません』

『それが本音だろ！ わかったから返してこい！ あとで買ってやるから！』

『ところでソラ、ノーパンになりませんか？』

『ならねえよ!! 男のノーパンなんて誰得?!』

今度は知的そうな女の子の声。さらにさらに……………。

『苦勞をかけるな』

『いや苦勞をかけさせないように止めろよ王様。これだといつも通りの振り回されてる

オレだから』

『普段の貴様って苦勞人なのだな……………』

『そうなんだよ……………。最近、杏子の食べる光景が癒しになってるんだよ。あの幸せ

そうな表情が唯一の清涼剤なんだよ……………あははは』

『しつかりしろ！ なんか口から白いの出てるぞ?!』

『三途の川や……………』

『渡ろう!!』

『渡るな！ レヴィも悪ノリするな!!』

偉そうだが、面倒見の良さそうな女の子の声が聞こえた。

そう……………そうなんだね……………。

「ソラくん……………」

『ハッ！ ま、待ってくれ。これには訳が！』

「いやいや、もうわかってるよー」

「そうね。私も把握したわ」

「お姉ちゃんもよ♪」

私達三人は通話口にて、一斉に向かつて言い出した。

「敵は本能寺みうちにあり!!」

『いやアアアアアなんか知らないけど殺されるウウウウ!!』

『捕虜が暴走した!?!』

『だ、誰か取り押さえ、ふにや!?!』

『あ、キリエがシバかれた』

ブツ、ツーツー……………。

そんなカオスな展開が起こった後に通話が切れた。

さてと、帰ったらほむらちゃんやみんなと一緒に考えようか……………。

「題して『ソラくんお仕置き計画』を、ね♪」

「腕が鳴るわ」

市街地にて行きゆく人達は私達のオーラに怯えていた。
あーれ？ 私達、別に怒ってマセンヨ？

第四十八話

結界が張られた海上にて彼女達が捜していたシステムU—Dというモノを見つけ、それに向かっていた。

オレはバインドで煤巻きにされて、ブランブランと揺れながらシユテルに引つ張られていた。

「もうやだ……………早く逃げたい。システムU—Dなんかよりもっとおぞましいモノが来るから離して」

「だめです。あなたを自由にすれば何をしでかすかわかりませんから」

「何もするつもりないし、もうやる気が出ないし生きる気力もない……………ああ、もう誰か助けて……………」

「落ち着いたと思えば、なんか絶望し始めてるぞコイツ……………」

ディアーチエの言う通り、オレはもう絶望的な状況に嘆くしかなかった。

彼女達と再会したらまず折檻が待っているに違いない。それから暴走したまどかや千香達がオレを口では言えないことを……………。

いやマジでやるからね、あの子達。

えっ？ まさか……………

「私は……………目覚めさせるべきではありませんでした……………。私のシステムは壊れているのだから……………」

U—D曰く、彼女の今のプログラムは破壊と滅亡である。つまり、殲滅という行動しかなかったのだ。

紅い腕は槍となり、マテリアルズ達を貫く。マテリアルズは消えてしまったがどうやらまた復活するらしい。

「んで、あれ。どうすんの？ ぶつちやけ神器が使える回数は後三回しかないし」
「捕まえるに決まってるわよ。エルトリアの環境を戻すために、博士の願いを叶えるために！」

と向かっていくが防衛機能があるのか槍やら腕やら翼やらでキリエは苦戦を強いられる。すると、U—Dのヤツがどこからか縄を取りだし、キリエを縛り上げる。

なんであの子は亀甲縛り知ってるの!?

そのことを聞いて見た。

「天ヶ瀬千香の魔力から得た知識です。あとやってみたら意外に楽しかったです」

「悦に入った顔言わないで……………。無害そうな第一印象がペアになるから」

「実際には私は有害ですから。あ。あと、あなたが朱美ほむらにいじめられた時の映像

をリアクションに少しゾクゾクしましたので完全に目覚めたらいいじめようかと」
「ロックオンされちゃった!？」

おのれ、変態。こんな純粹無垢な少女を女王様に目覚めさすとは。

しかも、赤い魔力弾でキリエは落とされた。

やれやれとオレは呟いてバインドを解錠し、落ちていくキリエの首袖を掴み、空中に飛ぶ。

U—Dはそのまままた機能停止モードになり、球体へ閉じ籠った。

「さて、どうしたものやら」

オレはそうぼやきながらキリエを抱えてここから離れた。

「ソーラくんみーけっ♪」

「あ……………」

その後、まどか達にキリエを抱えてるところで見つかり、折檻された。
容赦ないよあの子ら……………。

第四十九話

折檻された後、オレ達はリンディ提督からお叱りを受けて、罰としてシステムU—Dの戦闘に参加するはめになった。

まあ、仕方がないか。好き勝手やったし、放っておくとここも潰されそうだし。

そんなわけでアースラ内の作戦会議に参加していた。

「先生ーその金髪ちゃんを着せ替え人形にしているんですかー？」

「千香、お前は黙ってる」

千香が悪ふざけするやら、まどかとほむらは完全抹殺を推奨するやら、肝心のマミさんがお茶会で和解というなんともファンシーな解決方法を提案するというものがあつた。

てか、マミさん。あなたは単にお茶会したいだけでしょ。

まあなんにせよ。

「いつも通りだな、アタシ達」

「そうだね。あ、杏子。そこ必殺技」

「おっしやあ！ 任せておけ！」

ゲームする二人がオレのセリフを言った。ちくせう、決めセリフとられた。てか、お前らもゲームしないで参加しろよ。あと杏子、こいつら一緒に止めて。

☆☆☆

時間は進み、海上。オレ達はマテリアルズとアースラから勝手に出ていったキリエが独断で金髪ちゃん（システムU—D）に挑んだらしい。

無謀なその戦いでシユテルとレヴィはディアーチェに力を託して消えてしまい、キリエはアマタに自身の武器を託して失神した。

なんかこちらをそっち退けてドラマが始まっていることがちよつと不愉快だが、とにかく金髪ちゃんに挑もうと思った。

「お前達にはおもしろいものを用意してやる」

って口調が変わってね？

とそう言ったとき金髪ちゃんは手を掲げて次元の渦を生み出した。そこから現れた

のは

「魔女!？」

「しかもあれって!」

「مامィさんとさやかかが驚く中でオレとまどかは出てきた魔女を見て驚愕した。」

——救済の魔女。

最強にして最悪の魔女だ。

だが、魔女の姿はオレが見てきた中で小さくなっている。

「お前達の魔力の情報をもとに造り出した闇の書の残滓だ。ただ、その魔女の生命を吸い取る力はないし、使い魔を生み出せない——」
「が、お前達には十分な相手だろ?」

嘲笑を浮かべる金髪ちゃん。お前の言う通りだ。

まさに相手は絶望の化身。

かつて世界の抑止力として現れた理不尽の権化だ。

だからこそ、リベンジが必要だ。

「衛、悪い。こいつは神器使い達だけでやる。これはかつて何もかも台無しにしたヤツなんぞな」

「心得た！ ならば金髪娘は我らでなんとかしよう！」

「パパ、手伝っていい？」

いいよと天気は答えて、オレ達は魔導士組から離れて救済の魔女に向かって行った。さあ、始めよう。

まどか「もういいんだよ」

杏子「充分だろ？」

マミさん「何も悲しまなくていいのよ」

ほむら「だけど覚悟しなさい」

さやか「後悔もしなさい」

千香「ボク達は遠慮しないよ」

オレ「だから……………」

「「「「「安心してとつと死ね」」」」」

オレ達がそう言つて、奇声を上げる救済の魔女モドキに挑んだ。

最終決戦が始まったのだ。

☆☆☆

まずオレ達ができることはまどかの一撃必殺の殲滅だった。

触手で攻撃してくるが、オレと杏子、さやか、千香がまどかに触れさせないように切り捨てる。

マミさんとはむらは救済の魔女を牽制し、あえて防御させることをしている。

そしてまどかのチャージが溜まったところでまどかは最大の一撃を撃った。

「えっ!?!」

「マジかよ……………」

一撃で葬ったはずが、なんとところどころ残ったところから再生していき、分裂していったのだ。

アメーバかこいつら。

だが、厄介な能力を持っているようだ。

「どうする?」

「どうするってわかってるだろ?」

オレがそう言うのと彼女達は頷いて、今度はオレのサポートにまわった。

救済の魔女達の触手が襲いかかる中、オレはその一つを足場にして駆け出す。やることはただ一つ。

機能停止させること。まどかの殲滅ではまた分裂再生するからオレの神器で再生機能と分裂機能を止める。

それしかこいつらを倒す方法はない。

「うお!？」

オレに向かつてきた触手が足場にしていた触手を刺して、切り落とした。

ヤロー、オレを近づけさせないつもりだな。

落下していたところで千香が防壁を足元に作り、足場に確保させる。

オレはそこからジャンプして今度はマミさんのリボンで作られたネットの道に飛び乗った。

救済の魔女への一直線の道をオレは駆け走る。

そうはさせまいと触手が一齐に迫る。

「ほむらー!」

「遅くなりなさい」

しかしほむらの神器でその動きはスローになる。

どうやら分裂したと言っても一つ一つに分かれたわけでもなく、魔女個人のリンクが

繋がっているようだ。

つまりこの魔女の分裂体は木の葉っぱのように、最終的にはその本体に繋がっているわけだ。

だから『対象の一つ』として触手の全てがほむらの神器で遅延することになったのだ。
「その触手邪魔だよ〜」

いつもののんびりとした口調でオレ達は天気の神器を始めてみた。

彼女の背景には盾、槍、昆、剣、マスケット銃、弓、斧が花のように展開された。

「いくよ……………『七つの宝箱』」

天気はそう言ってオレに迫り来る触手を切り裂き、撃ち抜き、なぎはらってくれた。

オレは彼女にお礼を言っただけで迷わず前へ進む。

「本体の再生が止まれば、お前の分裂体の機能も止まる……………ってか！」
遂に目の前まで来たオレは飛び上がる。

そしてその顔面に神器を挿し込み、回した。

ガチャリと扉が閉まる音がしたとき、分裂体も消滅した。

封印完了だ。オレはそこからそのまま落下して言った。

「マミンさん、まどか。あとはよろしくー！」

巨体なマスケット銃とその弓矢のような弾丸をセットしたまどかかとマミさんが救済の魔女に向けて、技名を言つて発射した。

「テイロ・デュエツト!!」

分裂し、一斉に向かつていく弓矢のような弾丸は救済の魔女を覆い隠し――

――ほとんど面影を残さない形で弱りきらせた。

「合わせろよさやか!」

「ええ! あんたもよ!」

とどめとばかりに杏子は自身の幻想を多数造りだし、さやかも無数のサーベルを展開した。

そして、さやかの無数の斬撃と杏子と多数の斬撃が救済の魔女を完全に細切れにすることができた。

「やったね!」

「そうだな」

神器でクツションをつくってくれた千香が寝転んだオレにハイタッチしてきた。

それに答えたとき、オレの苦渋の思い出の一つに決着がついた気がした。

それから金髪少女の戦いも決着がついていた。

第五十話

エピソード的な話をすれば、無事にU—Dことユーリは救われ、アマタとキリエは仲直りし、マテリアルズはエルトリアに行くことになった。

その別れの途中、知らない金髪オツドアイの少女に声をかけられたがまどか達によって折檻されてあんまり記憶にない。

誰だったんだろあの子。

あとユーリとシユテルにロツクオンされた。

「遊びに来てね」と言われたがエアトリアに遊びに来たが最期——いじめられ、ノーパン信者になる末路しか想像できないんだけど。

唯一の癒しがアホの子レヴィとはこれ如何に。

そんなこんなで、天気を含めた未来組は次元の渦が生まれたので帰ることになった。

まだ名前は知らないが、どうやら高町達の知り合いみたいだからいずれ出会うだろう。

ちなみに高町達やまどか達は今回の事件の記憶を封印された。理由は未来に影響を与えるかもしれないとか。

なので誰も未来組のことを覚えていない。

—— オレを除いて。天気曰く、オレが覚えていても未来に影響がないようだ。

口が堅いと信頼されているのだろうな。ま、未来のためにこの事件は天気が産まれるまで記憶の奥に仕舞い込んでおこう。

こうして事件は終わりを迎えた——

☆☆☆

あれからさらに二年が経ち、オレ達は六年生になりマミさん一足早く中学生になった。

そして今日は修学旅行の日である。

え？ また展開早い？

そろそろ作者的には入りたい章があるらしいって女神が言ってたからそうなのだろう。

「んで、部屋割りがこうなった」

お茶の間という部屋で、オレはお茶をすすりながら部屋割りメンバーを見回す。

「まどか、一緒にお風呂はいりましょう」

「だからってその水中カメラいらさないよね？ あ、でも後で貸して。ソラくんのセクシーシーン撮りたいから」

「よしてきた」

「やめんかいアホ共」

八神が朱美姉妹の暴走を止めてくれた。できれば衛もストッパーになってほしいが、あいつは駄目だ。

なんか指で腕立てやっっているから。

「なんでこんな組合せやねん！ 私、なのはちゃん達の班の方がよかったで！」

「仕方ないだろ。五人制の班分けだし、あいつらはあいつらでオリ主くと組むことになったし。てか、お前。衛と離れたくないって駄々こねてただろ」

「そ、それはそうやけど……………」

モジモジと照れる八神の背後に誇らしく胸を張る衛。

何この美女と野獣な組合せ。

「とういかなんで早乙女先生もこの班にすること了承してくれたんやろ？ なんやかんや言つてこの組合せなんか問題あると思うし」

「全くだ。なんで色情魔やら筋肉馬鹿の班にしてくれたのだろうな」

「いや人外のソラくんが言える立場やないやろ。なんやねん、毒を食らっても平気に動

ける身体って」

八神に否定されて少しへこむわ。

というわけでまだかさんや胸を貸してください。泣きたいから。

「もう……………ソラくんだったらこんな人前で……………ポツ」

「あ、やっぱほむらでいいや。なんか貞操の危機を感じたから」

「解せぬ」

ほむらは快く胸を貸してくれたのでさめざめ泣き始めた。

背中ほポカポカとまどかに叩かれている。

地味に痛いです。

「ちなみに我が友を含めた三人がまとめられたのは、貴様らが問題児共で括られているからだそうだと早乙女教師は言っていたぞ」

「「解せぬ」」

心外なという表情でオレ達三人は衛を見つめた。

すっかり見てくれなかった。許せぬ三十路前の女教師。あとでゲテモノのおもちやをカバンの中に入れちやる。

ちなみに千香は他の班に入ってる。持ち前の明るさが効をさしたが、誰かが変態化しないか心配である。

☆☆☆

修学旅行の行き先は京都である。京都タワー、金閣寺、銀閣寺、清水寺と寺やら名所たるところがさまざまある。

そんなわけで清水寺に来たオレ達は絶景を目の当たりにしていた。

「見て！ 人がゴミのようだよ！」

「ネタにはしるな、まどか！」

某飛行石を題材にした天空城の悪役キャラになりきる彼女にチョップを入れる。

涙目でオレを睨むがそれはほむらにとっては萌えだぞ。

現にめちやくちや写真撮ってし。

「平和だなー」

オレはそう言いながら空を見上げる。綺麗な青空がどこまでも伸びていきそうなのな快晴の天気だった。

「ソラくん、衛くん止めてや！ あの子、なんか高台から背筋しようとしとるで！」
「やっぱこうなるか……………」

やはり閉めはカオスである。

ちなみにお風呂でも千香が暴走していたと追記しておく。

堂々と男風呂に突撃しようとするかなあ……………普通。

—
そして時は流れる。

第五十一話

桜が舞う暖かな季節。今日はオレ達の卒業式だ。

彼女達と再会して早くも三年も経っていたんだな。

八神や衛は管理局に就職し、高町達も本格的に入った。

そういえばオリ主くんは二年前に入っていて、今では部隊長らしいな。

どうでもいいが。

そんな新たな門出を迎えて、オレは校門を出た。

既にまどか達は学校を出て、それぞれ思い出の地に向かっていた。たぶん、ふけつて
いるのだろう。

目をつぶれば、前世の記憶を今でも思い出せる。

あの頃はまだまだ青くさい少年だったが、それでも千香やまどか達と一緒にいた時の
思い出がたくさんある。

笑って、泣いて、喜んで。

辛くて絶望して、それでも生きようとして、転生した果てに今のオレはここにいるん
だ。

だから、これからもずっと彼女達と笑い合おう。
友人達と楽しもう。

——それが今のオレの生きる活力だから………。

だが、その考えは甘かった。

いやホントに甘かった。どうしてあの組織を放っておいてしまったのだろうか。

未知の力がオレ達が狙われるのは必然だったはずだ。

だからこそ、この目の前の光景が証明していた。

——オレ達の家が管理局の魔導士達に破壊されていた。

結界はオレ達の家だけ張られておらず、そこだけを破壊できるように設定されていた。

オレ達の居場所と思い出が破壊されていく……………。

まどか達は？

みんなはいつたどこに行ったんだ？

そう思っただけがその光景を信じられなくなり、フラフラとそこから去ろうとしたと

き魔力弾がオレに直撃した。

オレはそこから壁に叩きつけられた。

「く、が……………」

「ようやく来たか神威。待ちくたびれたぞ」

オレ達の家を破壊することを指示していた男が起き上がるオレの前に降り立った。

オリ主くんだった。

オレ達の全てを破壊したその男が目の前にいた。

「ロストロギア不法所持の罪でお前も管理局に連行する」

「ちよつと待てここは管理局外——」

オレがそう言いかけたとき、あることに気づいた。

そのことをオリ主くん聞いてみる。

「オイ、まどか達は？ みんなはどうした!？」

「神器使い朱美姉妹、友江三姉妹、そして天ヶ瀬千香は既に眠らせて、拘束してから管理局に連行した。今頃、独房の中だろう」

それを聞いてオレは愕然した。

管理局の独房ということは実験場に送られることは確定しているだろう。

神器を使えなくされ、非道な実験を行われて嘆きオレの助けを求める——そんな

最悪なビジョンが思い浮かんだ。

……………もはやオレには絶望しかなかった。オレにとって彼女達は本当にオレの生きる活力だったから。

「総員構え！ 狙いは神威ソラ」

魔力弾一斉放射の号令を出すオリ主くん。

……………そうか。そうだよな。

所詮、オレは英雄の強さを持つ者だ。だから強い、恐れられる。

平穩なんて遠いかもしれない。

「撃てエエエエエ!!」

オリ主くんの号令で一斉放射が始まった。非殺傷なのか痛いだけの魔力弾だった。死ぬほど痛いレベルらしいがあんまり痛くない。

なぜかって？ それは簡単だ。もっと『痛い』のを味わったから。

だから痛くない——むしろ鬱陶しい。

「なっ?! どうして魔力弾の嵐の中で平然と立って歩けるんだ!」

オリ主くんは狼狽するがもう遅い。

オレは神器を召喚し、オリ主くん達の部隊に剣先を向けて宣言した。

「お前らは逆鱗に触れた。オレの大切な者に手をかけた!! だから————殺す。とつと死ね!!」

オレは涙を浮かべながら、駆け出す。

————その涙は悲しみ故か、はたまた怒りなのかは……………もうわからない……………。

第五十二話

—— ああ、またこの世界か………

真つ暗な世界にオレはいた。ここはいつも夢で見る世界。

暗闇の中の自分、誰もいない世界。何もない世界。

そんな世界で、誰も存在しない一人ぼつちな自分。

—— オレはいらないの？ いちやいけくないの？

かつて母親に拒絶されたトラウマがフラッシュユバツクする。

その時は彼女達がいたから乗り越えることができた
の彼女達はいない。
………が、そ

—— 目の前の敵が全て奪ったんだ

だから憎い、許さない、救わない、殺す。

敵は殺さなきゃ、殺されるは自分だけではない。……大切な人まで奪われてしま
う。

だからオレは敵を排除する。

……暗闇の世界。それが今のオレの心象風景。

ふと、空から光が射し込む。見上げると、見えてきたのは青い空。
その光に当たると少女がいた——まるで天女のように
黒い長い髪に細い身体。

いつもクールでいつもオレをいじめて楽しんでるが、オレが一人ぼっちのときには必ずいてくれた人。

前世のときから鋼の心と意思を持ち、ホントはオレと同じ寂しがり屋で不器用だけど可愛い女の子。

その少女がオレに手を差し伸ばす。オレはその手を掴むと暗闇の世界が払われ、綺麗な青空が広がる湖の水面の上にいた。

……………明るく美しい心象風景となったのだ。

———彼女がいたからオレの心は晴れた

———彼女がいたからオレは『いつもの』オレでいられるんだ

そう、その少女の名前は……………

☆☆☆

真つ赤に燃えるオレの家のごとく、オレの憎悪は燃え盛っていた。

魔力弾がたくさん向かってきたが、肩に当たろうが膝に当たろうがお構い無しにオリ主さんの部隊に向かっていった。

「なぜだ！ 神威ソラは魔法が効かないレアスキルがあるのか!？」

隊員の一人がそう言うのでオレは答えと共にその隊員に斬り込む。

「身体を貫けない魔力弾なんてBB玉と同じなんだよ!」

神器でその隊員の魂を身体から切り離した。

糸が切れたマリオネットのように彼は崩れ落ちた。

それを確認した隊員達はオレから距離をとった。

「っ！ 全員殺傷設定にしろ!」

隊員の一人が死んだことを知ったとき、オリ主くんは今さら本気で殺しにくる気になった。

遅いんだよ……………——なにもかもな！

「らアアアアア！」

次のターゲットを決めたオレはそろっている隊員を二人共斬った。

結末は最初と同じで、隊員達はオレに殺傷設定の魔力弾を撃った。

「……………逆効果だったの。『跳ね返せ』!!」

オレはその魔力弾達をマジックでまるごと隊員達に跳ね返した。

隊員達は胸やら肩やら貫かれて苦悶を浮かべる。その隙にオレは三人の隊員達を斬り捨てた。

「残り……………十五人」

燃え盛る家を背景に自身の唇を舌で舐めふく。

隊員達は徐々に恐怖に煽られてガタガタ震えていた。

「誰一人逃さない。蹂躪し、徹底的に排除してやる」

皆殺しだ！とそう叫ぶと遂にオリ主くんの隊員達は我先にとオレに背中を向けた。

本来、部隊でオレに挑むことは有利に事を運べるがその部隊は瓦解した。

もはや、ザコを刈り取るだけの作業にすぎない。

オレは逃げ出している隊員達に向けて、多数の雷のマジックを放ち、近くにいる者は

斬り殺した。

あとはオリ主くんだけか。

そう思っていると高町のスタラクラスの砲撃がこちらに飛んできた。

魔法名は覚えてないが高町スタラくらいある魔法らしいが、オレに対しては無意味である。

——オレはその魔法を神器でキャンセルしたからである。

キャンセルされた魔法は消滅し、空中にいる疲労したオリ主くんに向かってジャンプし、蹴り落とした。

「ぐは」と肺から息を叩き出されて、地面に寝転ぶオリ主くんに向かってそのまま飛び蹴りを決めた。

今度は口から血を吹き出した。だが、まだ止めない。

オレはオリ主くんの首を掴み上げ、ティーバツティングのように身体を神器で打つ。

ボキツ、メキメキ!!

嫌な音と共にオリ主くんは近所の壁へ叩きつけた。壁は瓦解し、オリ主くんを下敷きにした。

オレは再び近づき何度も何度もオリ主くんの顔を蹴り続ける。

殴る、蹴る、殴る、蹴るの繰り返し。骨を折り、砕き、そして使えなくさせる。

それから剣らしきデバイスも拾い、握りつぶした。そこから機械的な断末魔が聞こえたがどうでもいい。

これでヤツに武器はないしな。

「オイ、まだ生きてるだろ？ まだ動けるだろ？ そうだろ！」

「あ、が……………も、う……………やめ……………」

「やめない。止めない。お前をぶちのめすまでやめるかよ！」

オレは瓦礫に埋まった彼の身体を力一杯蹴った。

瓦礫は吹き飛び、オリ主くんは路上で地面に転がった。

「気は済んだよ。あとはお前を殺す。……………絶対に」

今のオレは師匠を失ったと同じ顔をしていると思う。

修羅となったオレは神器を上げて、転がった彼を斬り下ろす作業に入ろうとした――

——しかし、神器が握られた腕にピンクと金色のバインドが巻き付いた。

「もうやめて！ 草太くんを殺さないで！」

「神威、もう罪を重ねないで！」

高町とフェイトだけでなく、衛や八神もいた。

しかし今のオレにとつて、それはただの雑音でしかなかった。

うるさい者でしかなかった。

「邪魔すんな……………殺すぞ」

オレの殺気を込めた声に高町とフェイト、八神の震えは止まらなくなった。

バインドを引きちぎり、オレは今度こそオリ主くんを殺そうとしたが、今度は身体に衝撃がはしり、足が地面を滑らせる。

「衛、なんのつもりだ？」

「純粹な少女の願いを聞かぬ愚か者を飛ばしただけだ」

「ほげけ。敵の声をイチイチ耳を貸してられるか。その間に殺した方が効率がいい」

「やはりか……………」と衛は呟く。

八神は微かだが、衛はもう気づいているようだ。

——そう、もうオレは衛達は味方には見えない。

頭に血が上ってる？ 違うね。オレは冷静で、ちゃんと考えてるよ——敵を

どうやって排除するかをな。

もう周りはただの敵だ。それ以上もそれ以下でもない。殺すべき対象でしかない。

「ならば友として間違ったことを止めるまで」

「やってみるファイター。お前の筋肉がオレにはどれほど意味ないか教えてやる」

オレはそう言つて神全てを開く者器を捨て、そのまま前に突っ込んで衛の身体に拳を埋め込んだ。

「カフツ！ くつ、なん——グガ!？」

踏ん張ろうとしたところでオレは地面に手をつけて、逆立ちのような蹴りを顎に向けて放つ。

蹴り上がった衛をオレは離れた場所から手に召喚し、衛の身体へフルスイング。

防御体勢に入ったが、お構い無しに結界に張られた民家へ叩き込んだ。

衛はフラフラしながら立ち上がる。

まだ戦えるか……………。

「なんでなん!?! 衛くんがなんであんなにダメージ受けるん!?!」

八神は疑問の声をあげた。

確かに物理攻撃において衛の耐久力はすさまじく、大抵の攻撃はあんまり効かない。

「だが、よく考えてみるよ八神。オレがやってきたことを」

八神に向かつてそう言うのと彼女はハツと何かに気づいた。

やっと気づいたか。

岩やビルを切り裂ける腕力。ビルからビルへと跳ぶほどの脚力。

神器使いはこれをできてしまうくらいの身体能力が隠されているのだ。前世でも、正

直これには驚いたが同時に恐怖があつた。

なんせ、やろうと思えば人を簡単に腕力で殺せるのだから。

でも、もうオレにはもうそんな恐怖はない。躊躇もない。

敵が鋼の肉体ならばなおさらだ。鋼ごと潰せばいい話だ。

「だが、しかし……………それでも我は諦めぬ……………」

「いや諦めろ。お前が相手しているのは神器使い達から英雄とうたわれたた化け物だ」

オレは衛の前まで近づき、そして最大威力の斬撃を身体に与えた。魂は切り離して
ない。

しかし、かなりのダメージが衛に受けたはずだ。

「が……………は……………」

現にバリアジャケットは解除され、その身体は倒れた。

これで邪魔者は————いない。ヤツを殺すだけ。オリまくん

「……………だからそこで寝てろ。オレがヤツを殺すまで」

オレはそう言つてオリまくんに向かおうとするが、足首を掴まれた。

衛はまだ諦めていないようだった。

「このまま……………では、貴様は我らの元からいなくなってしまう……………そんな気が

するのだ……………」

……………うるさい。放っておいてくれ。

「だから……………頼む……………怒りをしず——」

「……………うるせえよ」

……………もういい。こいつから殺そう。オレの頭はもう衛を邪魔者でしかない。だから排除する。

八神の悲鳴がしたが気にしない。向かってくるなら八神もみんな殺すだけだ。

オレはその手始めに神全てを開く者器を衛に向けようとした——

ガシツ

——そしてまた彼女に止められた。

「なんで……だって……お前は……」

「私をナメるんじゃないわよ。あれくらいで抜けられないじゃあ魔女を単身で倒してこれなかったわよ」

彼女はいつもの顔でそう言った。

「だから落ち着きなさい。あなたは一人じゃないから……」

彼女はそう言つてオレを後ろから抱き締めた。

暖かいその身体で、オレの冷えた心は暖かくなつていった。

「もういなくならない……………」

「ええ」

「どこにもいかない……………」

「どこに行つても探してあなたを見つけるわ。だから、こつちを向きなさい」

オレは彼女の指示に従い、顔だけ振り向いた。

——柔らかな感触が唇に押し付けられた

キスされたのだと、唇が離れたときにオレは気づいた。だけど羞恥心はなく、胸が暖かくなるモノだった。

「ありがとう……………」

「ええ、どういたしまして♪」

涙を流してオレは純粋な感謝を彼女に伝えたと、彼女は見惚れるくらい綺麗な笑顔で答えてくれた。

彼女がいるからオレは『いつもの』の自分でいられる。だから、オレは『いつもの』の自分に戻るのだった——

「もう一回するわよ、ソラ。……………ハアハア」

「いやなんで興奮してるの!? 今、キスとかそういうことしてる状況じゃ……………
……………っていきなり顔を掴んでるの!? ちよつ、強引すぎ……………ムウウ……………
!?!」

その後、『ズキュウウウウン』な熱いデーパーキスされたり、首にキスされたり成す
術すべなくほむらにされるがままに蹂躪された。

……………ほむらつて実はキス魔なんだね。

てか、いつか貞操が奪われるそんな気がするよ……………。

そう思う今日この頃でした、まる。

第五十三話

ほむらに諭されたオレは神全を聞く者器を戻して彼女に向き合う。

まさかベロチュウーされるとは思わなかった……………。オレのファーストがこんな形だなんて…………。

うう、もうお婿に行けない。

「とか言いながら私にキスをしつかり返していたじゃない」

「仕方ないだろ!! お前にいいようにされるのが気に入らなかつたんだから!」

「なかなか情熱的なベーゼだつたわよお…………」

「恍惚した顔でオレを見るな!!」

顔を赤くしてほむらに文句を言うが、そんなオレを彼女は『羞恥で焦る弟』を見る目でクスクスと微笑で返してきた。

くつ、恥ずかしい。いくら壊れていたとは言え、ほむらに弱みを握られるてしまうと
は……………。

まあ、今のオレの心も怒りや憎悪はなく、ただ彼女がいるという安心感に溢れていた
が。

彼女がなぜ無事だったのか一から聞くと眠らせる直前に時を止めて逆に振り返りにしたそうだ。

振り返ちした局員は今頃、公共の場で真っ裸にされているらしい。

哀れ、局員。青い公務員に見つかれば事情をどう話しても変な人扱いで牢獄行きだろう。

「さりげなく、えげつないなお前」

「ほむんっ」

「いやえっへんじゃなくて——ッ！」

オレ達に向かつて魔力弾が飛んできた。それをオレは神器全てを開く者でキャンセルした。

どうやらオリ主くんが放った弾だ。立ってオレ達に手を向けてるからな。

「天宮！ いい加減にせぬか！」

「うるさい！ 俺の正義に踏み台が口出しがするんじゃない！」

衛の忠告を無視し、オリ主くんは再びオレ達に向けて魔力弾を撃つ準備に入った。

……………もういいだろうか。こいつの行いと言動にもう我慢できない。

オレの怒りを察したのか、ほむらはオレの手を握りじつとオレの目を見ていた。

オレはそれを笑みを浮かべて答えた。

「殺しはしないさ。でも………殺すより残酷なことをする」

オレの憎悪は完全にオリ主くんに向かっている。止まることはない。

オレは放たれた魔力弾を切り裂き、そしてオリ主くんの身体に神器を刺し込む。

「ガッ!？」

「お前の特典は永久封印確定な。もう二度と力なんて触れさせない」

まず力を奪う。それなら抜いた神器をまた刺し込む。

「グッ!？」

「お前の身体の自由を封印した。これでお前はしばらくの間は身体が思ったようには動けない」

「て、てめえ!! こんなことをして!」

「まだ終わっていないぞ? これが最後だ」

オレはドコでもドア展開し、オリ主くんの首根っこを掴んで言い始める。

「お前には異世界に行ってもらうよ。この世の地獄と言えるくらい」

「な、なんだと? どこに行かせるつもりだ!？」

オリ主くんが狼狽しながら聞いてきた。そんなもん決まっている。

「ニューカマー達が蔓延るカマランドという世界だ」

「どっかで聞いたことある単語！」

「お前にはイワンコフさん達を含めたニューカマー達のいけに——
モノとして向かってもらう」

貢ぎ

「生け贄って言いかけたよな今!?! いや、待て！ 頼むからそこだけは……………」

「じゃあな……………クソヤロー♪」

笑顔でオリ主くんをその世界へ放り投げた。

……想像するだけで恐ろしいな、これ。

「なんで………なんでこんなことをするの!？」

「ひどい! あんまりだよ!」

高町とフェイトはそう言つて非難してきた。

オレとほむらは彼女達に振り向き言つた。

「ひどい? あんまりですつて? それはどの口言えるものかしら」

「お前から管理局は正義とか言つてオレ達の平穩を乱した。そしてオレとほむらの大切な人を奪つた——これに対してお前らはどう答えるつもりだ?」

高町とフェイトは口をふさいでしまった。

そうだろ。どちらが先に出したのか明白なのだから。

「あと八神。お前もリンディ提督辺りからオレ達を捕縛するように言われているだろ?

道理で隙を狙つて魔法を撃つ準備してるはずだ」

八神はオレの指摘された通りだったため、悔しそうに目を瞑り杖をしまった。

「よく聞け魔導士^{管理局の犬共}。お前らはオレ達の逆鱗にふれた。虎の尾を踏んだ。要するにだ——

オレはそう言つて三人娘達に向けて言つた。

「覚悟しろ。たとえ、友人だろうが知り合いだろうが関係ねえ。向かい来る敵は老若男女問わず皆殺しにしてやる……………!!」

たぶん、オレの顔はとても恐ろしいものだったと思う。

オレは鋭い殺気を込めてそう言うのと彼女達は萎縮してしまいへたり込んだ。

「リンディ提督に管理局への宣誓布告とそう伝えなさい。一応、知り合いとしてのよしみよ」

ほむらがそう言い終えたとき、ドコでもドアを展開してその場を去った。

——しばらく、彼女達の顔は見るのがなさそうだな。

☆☆☆

とある廃墟にて、オレ達は身を隠して女神に電話をかけていた。

事情を話すと意外な事実が待っていた。

『天ヶ瀬千香の活躍で朱美妹や信号機姉妹が異世界へ転移したわ』

「ホントか!? ……………あ、だけど肝心の千香は」

『なんかジエイなんとかっていうリリなの第三期のラスボスと仲良くなつて無事らしいよ』

「ホントなにやってるのあいつ!？」

「どうやって仲良くなれるのよラスボスと……………」

オレ達は千香の予想外すぎる功績に思わず呆れて手で覆う。

たまに真のラスボスがあいつじゃないのかって思うときがあると思つていたが……………ゴツドよ、そこは願いを叶えなくていいです。

『いや神のアタシも予想外すぎて、あんぐりよ』

「心を読まないで」

『とにかく彼女達がいる世界世界をそれぞれメールで伝えておくから行き先をよく覚えておきなさい』

そう言つて通話が切れて、メールが届いた。

マミさん、杏子、さやかは同じ世界にいるがまどかだけは違う世界にいた。

しかも、オレ達にとってかなり因縁のある世界だ。

「マジかよ」

「どこまでも縁が深いわね……………この町とは」

まどかの居場所は——見滝原。

千香を除いたオレ達の生まれ故郷だった世界の町だ。

「おまけに平行世界だ。ほむら、これはちよつとステータスダウンも考えなきやならないぞ」

「どういうことかしら?」

「オレ達はまだ中学生に上がる前だが神器使いだ。その身体スペックあるし、まだ人間であるお前は魔法少女としてのデメリットがないから存分に戦える」

「何が言いたいなのよ?」

「平行世界に渡る場合はその世界の住人として憑依するということなんだ」

ほむらも気づいたようだ。

つまりほむらが平行世界に渡れば、その世界のほむらの身体に憑依して過ごすことになる。その世界のほむらはまだ魔法少女だから、そのデメリットを抱えることになるのだ。

「その世界の経験や記憶は共有されるけど、肉体はその世界のスペックになってしまふ。つまり魔力なしではいられない身体にまたなるんだ」

ほむらとしてはもうゾンビみたいな身体にはなりたくないと思っていた。

だからオレは彼女が平行世界に渡ることを止めさせようと思っていた。

だが、彼女は言った。

「いきましよう」

「いいのか？」

「ええ。魔女になる可能性が秘めた身体にまた戻るのは怖いけど、まどかが待っている。もう離れたくない大切な人だから……………」

オレは震えるその手を握り、彼女に勇気を与えようした。

震えていた手は徐々に静まり、彼女は決意を秘めた目をしていた。

オレはドコでもドアを展開して、彼女の手を握りながら前に出た。

「いくぞ、相棒」

「ええ！」

さあ、冒険の始まりだ。

こうしてオレ達はこの世界に別れを告げたのだった。

空白期 やりたい放題だヤツフウウウウ!!

閑話 それぞれの立場

(??サイド)

天ヶ瀬千香。

神器使いである彼女は管理局に捕まる際に、まどか達にあらかじめ仕込んでいた送還術の札を発動させ、それから自身も送還術を発動した。

そのとき見た彼女を捕まえて喜んでいた馬鹿^{部隊の上司}は爆笑モノだったと彼女は自負している。

そんな彼女はちよつとだけ懸念していたことがあった。

送還術である。召喚術とは違い、自身を別の世界へ跳ぶ術式は星の位置によってランダムで決まってしまうのだ。

つまりまどか達をバラバラにしてしまったことが唯一の懸念なのだ。

(ま、ソラがそのうち集めてくれるねきつと)

そんな自信がどこからあるのか聞きたいところだが、今はそれは後にすべきである。今、座っている彼女の目の前には白衣でパープルなマッドサイエンティストが座っているのだ。

「で、スカさんはボクをどうしたいのかな？」

「君達の神器を調べたいね。この世界には技術だからね」

「うーん、ぶっちゃけそれはほぼ不可能だね。これってどちらかと言えばオカルトの部類だから科学的には限界があるよ」

「この世界は魔法を科学的に解明したんだ。不可能じゃないだろう？」

「ごもつともだね、と千香は薄く笑って続けて言い出す。

「ボクの前世は造られた命だったんだ。オカルトって言われたらそこでおしまいだけど、どうかな？ プロジェクトFで『ボク』を作ってみない？」

彼女は前世の自分——人造神器使いを造りだそうと提案したのだ。

プロジェクトFはただのクローンではなく、その人の記憶、能力を完全にコピーできる技術だ。つまり、人造神器使いも造れる可能性があるのだ。

しかしプレシアのような天才ではない限り不可能な違法研究のため、あまり試す科学者はいない。

「それはどういう意味かな？ 千香くん」

「そだねー。提案とも言えるし、取り引きとも言えることだけど単調直入で言う」と

ま、要するに、と千香は続けて言った。

「ボクの友達になつてよ」

「……………それはなぜかね?」

「ボクって師匠から性質が受け継がれててね。——

『混沌』。要するにボク

はボク達をバラバラにしてくれた管理局をめちやくちやにしたいんだ。あ、面白おかしくするつもりで」

千香の言葉にジェイル・スカリエツティは笑い出す。

彼女はなんと言った?

混沌を求めるとは——なんとも面白いじゃないか!

スカリエツティはそう思い、彼女に向かって言い出す。

「よかろう! 君と友達になろうじゃないか!」

「よかったー。提案呑んでくれなかったからソラにぶちのめされてたよ?」

「ソラとは君が話していた神器使用のことかね?」

「うん、そだよ。あの人敵には全く——ハッ、スカさん! テインときた。

プロジェクトF……………人造神器使いのモデルが決まったよ！」
「なに!? ならば話してくれたまえ！」

混沌とマッドサイエンティストの会話は続く。

天ヶ瀬千香。彼女はどんな場所でも変態化と混沌をもたらす少女である。

☆☆☆

友江マミは記憶を無くしていた。送還術の影響で彼女は記憶があやふやになり、自分の名前以外しか思い出せなくなった。

加えて彼女がいる国は妖精という耳が細長く、人間達の背中に羽が生えた種族達が住むところで、疎外感に苛まれた時期があった。

そんな彼女は妖精の国の王女に保護され、侍女として働いていた。

「かれこれ一ヶ月ですぬ姫様」

「もう、マミさん。二人っきりの時はアスナって呼んでよ」

「ふふ、ごめんなさいね」

すると、マミは具合が悪そうに頭を片手で抑える。アスナは心配そうな目で見つめる。

「……………また例の発作？」

「そうね……………もう嫌になっちゃうわ」

「駄目よ。それが記憶を取り戻す大事な兆候だつて医者も言つてたじゃない」

「そうね。ごめんなさい……………」

するとお茶室に誰かが入つてきた。金髪のロングで顔立ちが整つた長身の妖精だ。

名前はオベイロン。次期妖精王として候補が上がっている実力者である。

「アスナ、話にきたよ」

スマイルを浮かべて話しかけるがアスナはそっぽを向いて話そうとしない。

アスナはオベイロンの許嫁であるが、アスナは彼のその軽そうな雰囲気と人間を見下す視線が気に入らなかつた。

「なんだよ。お話しようじゃないか」

「あなたとはしたくないわ」

「そんなこと言わずに——！！」

近づこうとしたオベイロンにマミはマスケット銃を彼の顔に向けて威圧する。

「お戯れすぎますわ、オベイロン卿。アスナ姫は今日は具合が悪いため、お引き取りくだ

さいませ」

「……………野蠻な種族め、僕の邪魔をするのかい？」

「野蛮で結構。私はアスナ様を守れるならどれほど罵られようと姫様のために尽くすまでです」

スカートの裾を掴んでお辞儀するマミの言動にオベイロンは舌打ちしながら出ていった。

アスナはそんなマミに憧れの視線を向けていた。

「どうしました？」

「いやマミさんって強したたかな女性だなーって……………」

「ふふ、お姉ちゃんですもの。……………あら？」

「どうかしたの？」

「いえ……………なんでもないわ」

首を傾げるアスナにマミは窓から見える空を無意識に見ていた。

(私が弟がいたかしら?)

その認識が後に彼女を元に戻すきっかけになるとは誰にもわからなかった。

☆☆☆

妖精の国の騎士を精銳に集めた部隊があった。そこにいる者達は国境を越えようと

してくる侵入者達を排除するのが役目だ。

その部隊に友江さやかは隊長であるリーファ・アルヴェイムをサポートする副隊長に所属していた。

「お兄ちゃん……………」

その隊長はどこか暗い声で義理の兄を想っていた。その兄が今日、国境を越えて侵入してきたらしいのだ。

「元気だしなよりーファ。お兄ちゃん見つけたらすぐに国境から出せばいいんでしょ？」

「簡単に言わないでよ。人間だからと言ってあの人は神器使いよ。そう簡単にはいかないでしょ」

「でもあたしも神器使いだもんねー」

さやかは記憶を失わず、リーファに拾われてその実力を妖精王アバロンに認められ、副隊長に抜擢されたのだ。

彼女の目的はママの記憶を取り戻すこととソラの再会である。

だからこそ、大きな組織に所属した方が見つかりやすいのではないかと思つてここに入隊したのだ。

(ソラ、ママさんの記憶はあんたの手にかかっているわよ)

今日も彼女は空を見上げる。綺麗な青空で彼女は彼女の英雄を待つ。

☆☆☆

友江杏子もまたこの世界にいた。彼女は猫耳族という村に拾われ

「獲物だ！ やっちまえ！」

「「おオオオオオ!!」」

族長になってた。その支えであるシリカ・ユールベルは眩く。

「杏子さん今日も元気だなあ」

後に彼女がどうなるかは——実はもう決まっていたりする。

☆☆☆

とある一軒家にてピンクの髪の少女が目覚めて、急いで学校の支度をした。

昨日みた変な夢のせいであまり眠れなくて、寝坊したのである。

（なんで私があんなに変な人になってる!? てか、知らない男の人めちやくちや疲れて
そうだったなあ……………）

もしかして平行世界ではああなっているのでは？とそう思うと若干、憂鬱になる。

だが、学校の授業という使命があるため急いで学校へ向かう。

『ティヒヒヒヒヒ♪』

変な自分の笑い声がしたのは気のせいだと思いたくなくなった鹿目まどかだった。

——そして、その日。転校生と出会い、仲良くなり、彼女はある事件に
巻き込まれる。

だが、不安になることなかれ。

最高にして最強の味方がこの地に来るのだから。

第五十四話

春風の暖かい晴れの天気の世界。

そんな世界へオレはドコでもドアから飛び出た。着いた場所は見滝原中学校前だ。

「? どういうことだ? 師匠から憑依する形で平行世界に渡ると聞いていたのに」

憑依ではなくオレ個人の身体でこの世界に渡れたのだ。

ありえない。ならば、ここはどここの平行世界なんだ?

服装もオレがここに来る前に着替えていた黒を基調にした服装だ。

つまり、オレが異世界に来たという証拠である。

「つて……………まずほむらを捜さない」と

思考をすぐに切り替えてオレはほむらを捜しに向かう。さすがに学校の中には入れないが今は午後三時。

つまり授業が終わって放課後であるはずだ。

予想通り、校門からほむらが出てきた。

しかも、まだかやさやかがいる。

あのさやかはたぶん平行世界のさやかのはずだ。

たぶん、オレと面識はないと思うな。

それはさておき、先にまどかを見つけたほむらにオレは手を振る。

「オーイ、ほむらー！」

呼んでみたが——無視された。

あれ？ どっかで体験したことあるなこれ？

デジャブ？

「無視すんなよ、なあ」

と近づいて話しかけるとなんか不審者を見る目で見られている。

えっ？ なぜにそんな冷めた目で見るの？

「誰？ あなたなんか知らないわよ、変質者さん」

一蹴されてその後、オレに見向きをせずにそのまま背中を向けた。

……………さて、なんか叫びたくなってきたなあ。

オレも彼女達に背を向けて、誰もいない空に向かって叫ぶ。

「またかアアアア!!」

ぶちギレていた。もうなにもかもに。

「またヤツの実験か！ ああの白いナマモノの仕業の世界か!? しかも今度はのつべらぼうじゃないだけマシだけど、何回オレは忘れ去られるんだよオオオオオ!!（※番外編その七 前半より）」

頭をくしゃくしゃしながら叫ぶ今日この頃。

まさか、ほむらがキユウベえに囚われて実験されている平行世界に来るとは！

もう乱心である。皆のもの戦戦いくさのときじゃアアアア!!

「こうなったらあの白いナマモノをぶつ殺す！ もう容赦しねえぞゴルアアアア!!」

ここにキユウベえ駆逐宣言を発表する。

すると、肩を誰かに叩かれてしまう。

「ちよつといいかな?」

その後、青い服の人に事情聴取されることになった。

そりゃあ、中学校の前でブッコロ宣言したら通報されるわな。

☆☆☆

どうにかして少年院行きは避けられて、オレは町を徘徊していた。

どうやって青い服の公務員を説得したって？

……………魔法って便利だよー（黒い笑顔）

「それより寝床捜さないよ。このままではホームレス中学生になってしまう」

とは言ってもそろそろ夕方である。ママさんのところにお邪魔したいが、今のオレは小学生ではなく中学生の身体だ。

泊めてもらおうにも思春期に入ってるオレを疑うどころか即通報だろう。

「ほむらもほむらで見つからないし。どうしたものか……………」

すると、なにやら人気のないところが騒がしい。

というわけでそこに向かうと、中世の貴族の日常を描いた衣装を着た魔法少女とほむら、まどか、さやかが相対していた。

唯一ほむらだけが魔法少女の衣装を着ているが、二人は衣装を着ていない。

えっ？ 誰なのあの人。なんか水晶球を浮かべて不気味なだけ。

てか、まどかとさやかは魔法少女じゃないのか？

そう思うものの、平行世界とはいえ知り合いを襲われているのは嫌なものだ。

助太刀すると決めてオレはほむらに向かつてきた水晶球を切り裂いた。

水晶球は硝子のように割り散り、消えていった。

魔力でできてるのか、これ？

「貴方……………何者なの？」

「そういうお姉さんこそ何者なの？ グラマーなスタイルしてなんてイタイ格好してる

とか恥ずかしくないの？」

「いや、さりげなくそんなこと言われても。後、私はまだ中学生だからまだ大丈夫のはず

……………！」

「明らかに魔法少女の賞味期限が近づいているだろ。十六歳で魔法少女はもはやコスプレ

レの域だから。現実見て慎ましく行動しろよコスプレ女」

「この人めちやくちや容赦ないんですけど!?!」

ツッコむ白髪のお姉さん。

なんか気品を感じるからお嬢様ってことかな？

そんなお嬢様がコスプレとか……………オレが親だったら泣くね、絶対。

「り、両親はもうこの世にいないから大丈夫よ！ 友達も理解してくれてる人だから平

気よ！」

「とか言っただうせ友達がいなるときに、『パパママ』って実はさめざめ泣いてる

じゃないの?」

「なんでそれを知ってるの!」

「それはマジなのかよ!」

思わずお姉さんにツッコむ。

冗談で言っただつてもりがまさかの本気だったとは。

うん、わかった。この人、生粋の天然お嬢様だ。

ほらみる。今にもゆでダコのように顔が真っ赤になつてゐるぞ。

するとお姉さんはハッと正気に戻して「コホン」と前置きする。

「こんにちわ、救済の魔女さん」

なんか勝手に話を始めてきた。

あ。ほむら、ちよつと取り出してほしいのがあるのだけど。

「今日は貴女に用があつてきたわ」

うん、それぞれ。貸してよ。

「救世のために——え?」

オレは白髪のお姉さんにRPGを向けて、

「発射!!」

「きゃあああああ!」

ズガアアアアアン!

白髪のお姉さんはそれを避けたため、路地裏の壁を破壊した程度で終わった。

「チツ、外したか」

「外したか、じゃないわよ! いきなりなに撃ってるのよ!」

「え? だつてお前まどか達の敵だろ? なら、味方のオレが先手必勝でぶち殺すのが当たり前だろ」

「だいたい合ってるけど、さりげなく恐ろしいこと言っちゃってるよ、この人!」
恐ろしいの?」

そう言つてまどか達に聞くと全員に頷かれた。

解せぬ。ま、いつか。

「それに魔法少女かなんか知らないけど、あんたみたいな清楚なお嬢様がそんなコスプレ格好なんて……………改めて言うわ。……………ないわー」

「否定された!?! なんですよ!」

「いやだつて童顔だけど身体がグラマスなお姉さんじゃん。もうちつとアダルテイな格好してくれないとそれだとただの痛い人だ。通称バママミ二号だ」

「ひどくないですか貴方!?!」

「さりげなくバママミを痛い人扱いしてるわよね。それに関して否定できないところがあ
るけど」

口を開かなかつたほむらも中々のセメント発言である。

「さて、住所と氏名、電話番号もしくは親戚のでもいいから教えろ。親御さんに説教して
ものわらないと」

「いないわよそんな人！」

「あつそ。んじや、電話番号と住所教えろ。番号がわかればイタ電のコンボしてやるし、
住所がわかればうちの知り合いがクリスマススイブでよくやってた爆撃テロしてやる」

「めちやくちやよこの人！　というか前半がかわいらしくなるくらい後半がリアルで怖
い！」

お姉さんも思わずシャウトする。

それがオレクオリティである。

問答無用で相手を倒す。理由なんて倒してから考えればいいし。

「もう怒りました！　顔見せのつもりでしたが、まず貴方から救世の礎になってくださ
い！」

お姉さんはオレに向けて水晶球を発射する。

なんか某砂使いのようだなあと、思いながらオレはそれを全て切り裂いて言った。

「ナメるなよ小娘。お前ごときオレ一人でなんとかできるよ」
「……………改めて聞いわ。貴方、何者なの？」

固唾を飲むお姉さんの質問にオレは不敵に笑って答えた。

「神威ソラ。『無血の死神』って呼ばれる——通りすがりの神器英使雄いだよ」
いつも通りでいつものように敵を蹂躪すればいい。

それだけの話だろ？

第五十五話

(曉美サイド)

夕暮れとき。私とまどか、美樹さやかは魔女結界に巻き込まれ、なんなんく魔女を倒した。

しかし、その後に美国織莉子と名乗る魔法少女が現れ、まどかを排除すると宣言してきた。私にとってそれは許せないことだった。

だから、疲弊した身体であろうと戦う準備に入っていたがさつき出会った銀髪の男が私の間に入ってきた。

本当に訳がわからない。なぜこの男はここにいるのか、なぜ助けにきたのかという疑問が渦巻くが、鹿目まどかの味方ということが理解できた。

そして彼はあろうことか魔法少女で単身で挑むつもりらしい。

やめなさい、と口に出そうとしたが彼の手にカギのような剣が現れた。

それは未知の力だった。

迫り来る魔法をキャンセルするという驚異の力を見せてくれた。

「それで金平糖さん……………だっけ？」

「織莉子です！　ちゃんと覚えてください！」

「失礼、嘸みました」

「違う。ワザとよ」

「かみまみた！」

「ワザとじゃない!?!」

「嘸んじやつたぜ☆」

「なぜカツコよく言ったの!?!」

「気分で」

そう言つて彼は美国織莉子の魔法をヒラリと回避していた。

……………なんかというか美国織莉子が遊ばれてる感があるわね。

現に彼は彼女のリアクションをケタケタと面白がつているし。

「というか貴方、覚えるつもりないでしょ！　さつきから織莉子つて言ってるのに『金平糖』や『オリゴ糖』つてなんで甘いものオンリーな名前ばかりで間違えるの!?!」

「いやーオレつてなんか知らない人の名前覚えるのが苦手で……………。あ、アダ名なら覚えられるからミクちゃんでもいい？」

「馴れ馴れしいわよ！　どこのボカロなアダ名よ！」

「んじや、世紀末英雄伝説リコたんで」

「リコたん何者!?　どんなことしたら世紀末って言うものがつくのよ!？」

「たつた一本の大根で不良、外道、そして善良な一般市民を惨殺した驚異の少女につけられる異名だ」

「なんかイヤだ、それ！　てか、善良な人を殺つちや駄目でしょ!？」

ヒラリヒラリと水晶球を避けて楽しそうに笑う愉快犯。

もう美国織莉子は涙目である。

「もう、これにくたばっちゃって!!」

「おろ?」

避けるはずだった水晶球が彼の目の前にタイミングよくきた。

——まるで彼の動きを読んだ』かのよう。

直撃した彼は爆発に巻き込まれた。

「ハアハア……………早く予知を使えばよかったわ……………」

「なるほど、それが当たった理由か」

「はい!？」

砂煙から彼が擦りきれ、ボロボロな服装で現れた。

……………普通、目の前の爆発に巻き込まれたら身体が弾け飛ぶものじゃないかしら？
私は神威ソラの人外染みたそのハイスペックに呆れていた。

まどか達はハラハラドキドキと歓声していたが今ので、啞然としていた。

「人外か何かですか、貴方!?!」

「ひどいなー。オレは人外じゃなくて善良な一般市民だぜ？　なあ、世紀末英雄伝説リコたん」

「そのアダ名だけはやめてちょうだい!」

彼女はもはや最初にあった自信に満ち溢れた脅威の面影なく、ただのいじられる女子中学生へとランクダウンしていた。

彼と関わればああなるのかしら……………。

そう思うとなぜかゾツとした。

神威ソラ……………なんて恐ろしい男……………!

「なにやら変な誤解されてるようだけど、織莉……………り…………………………オリゴ糖さん」

「完全に私の名前覚えてないでしょ、貴方!?!」

「いやごめん。それより聞きたいことがあるけどいい?」

平謝りしながら彼は美国織莉子に「なぜ鹿目まどかを狙うのか?」と聞くと彼女はそれに答えた。

「さっきのように私には未来予知ができる力があります。その予知で鹿目まどかは魔法少女となった後に、世界を十日間で滅ぼす最悪の魔女になる可能性が秘めているからです」

数あるループの結果と同じ結末のことを彼女は話していた。

そうまどかだけを助けるために、色々な人を切り捨ててしまい、私はたった一人でワルブルギスの夜に挑んだ。

その結果、完敗し、まどかを契約させてしまったのだ。

この人はそうなる結果を見たのに違いない。だからまどかを狙った。

私がそう予想していると彼は「ふーん」とつまらなそうな顔で言い出す。

「で、それが世界の救世になるってこと? だとしたら、くだらないね。ああ、くだらない」

「なんですって!?!」

「だってそうだろ? お前は人類のためだからと大層なことを抜かしてまだ何も知らない罪無き少女を亡き者にしようとしている。……………それをくだらない以外に何があ

る?」

「貴方に、貴方にあの魔女の恐ろしさを知らないからそんなことが言えるのです！ あんな化け物みたいな魔女に誰も勝てるはずがありません！」

美国織莉子は興奮して言い返したが、彼は予想外なことを言い出した。

「んなもん、オレとほむらが知ってる！」

「なっ……………?!」

美国織莉子だけでなく、私も驚愕した。

あの魔女と戦ったことがある？ しかも私と？

いやそんな記憶は一切ない。

彼は私がそう考えていることを気にせず、続ける。

「鹿目まどかが救済の魔女の魔女になる可能性はある。だけど、それはあくまで魔法少女である鹿目まどかだ！ ああ、認めよう。魔法少女の彼女を魔女にさせないならお前のすることは確かに救世であることを認めよう。だが、今のこいつは『ただの普通の女の子』だ！ 無限の可能性を秘めた女の子の命を誰も奪う価値なんてない！」

美国織莉子は彼の言葉に反論しようにも言い淀む。

正論だからだ。反論の余地もない。

それに、と彼は言い始める。

「どんな理由であれ、どんな世界であれ、オレはもう鹿目まどかがいなくなることは許さない。たとえ、オレを知らないとしても、オレが鹿目まどかを知ってる限りオレは彼女を失うことはもう嫌だ。地獄だろうが修羅の道だろうが、それで彼女が助かるならこゝとん付き合つてやる」

強い決意が彼の目にあつた。その決意に美国織莉子はじつと見据えて、やがて目を瞑り言い始める。

「いいでしょう。今回は引きます。ですが、私があなたの考えを認めただけではありません。それをわかつてほしいです」

「いいぜ。元からわかり合ふなんてことができるのか思つてねえよ」

だからと彼は続けて言った。

「勝負だ小娘」

彼は不敵に笑いながら、「フン」と笑う美国織莉子が去るのを見守つた

………つて！

「なんで見逃すのよ！」

私は彼の頭を叩いた。

熱血展開に流されてしまった私も私だが敵をあっさり逃がしてしまう彼に私は怒りをあらわにするのだった。

「ギャーギャーうっせなあ。黙らないとノーパンの刑にするぞコノヤロー」

「変態！ 乙女の秘拠に手を出すなんて最低ね、あなた！」

「最低ですが何か？ というかオレ、みんなから外道とか鬼畜だって言われてるから今さらだしなあ」

「なに懐かしんでるの、あなた!？」

あの頃は若かったなあというな表情をする彼に片手で頭をはたいてツツコんだ。

もう一方は魔法少女の秘拠を護るためであるスカートを守るためである。

油断したらあのワキワキしている手が私のスカートの中に手を出すだろう。

「冗談だって」

「ホッ……………」

「鹿目か美樹にやらせる」

「まさかのあたし達!？」

「あ、それおもしろそうだね。ティヒ♪」

「まどか!？」

美樹さやかと一緒にツツコンでしまった。

まどか、私は思うのだけど、あなた出会ったときからたまに変なことを言うわね。

いったいこの時間軸はどれだけ私のSUN値をゴリゴリ削らせ、ソウルジエム濁らせるのだろうか……………。

そう思う今日だった。

(ソラサイド)

オレ達はほむらの家に向かっていた。

魔法少女というものを知られてもう隠し通せないと判断したほむらが、オレというものが何者かと言う説明を聞くと同時に説明するらしい。

まあ隠すことないしな。

オレはそう思いながらほむらが玄関の扉を開けるのを見守った。

すると、彼女は石のように固まった。何やらびつくりするものを見たようだ。

そう思い、オレは心配している鹿目まどかを横目にほむらを固まらせた元凶を視界に入れることにした。

「あら、おかえりなさいソラ。夕飯できてるわよ」

………うん、ほむら——いや暁美を固まらせるのには充分なものがそこにいた。

フライパンを片手で、セーラー服を着て、その上にエプロンを着けた朱美ほむらがそこにいた。

「先に夕飯にする？ お風呂にする？ それとも……………わ・た・し？」

「いろいろツツコみたいことがあるけど、言わせてもらう。なんでセーラー服なんだよ!? お前、ここに来る前プライベート用のワンピースだったじゃねえか！」

「突っ込みたいなんて……………やだ、いやらしいわね、ソラ」

「その突っ込みじゃねエエエエボケのツツコミだアアアア!!」

オレがシャウトしたのは悪くないと思う。

いやだって、再会したらなんかいつの間にかコスプレしてんだぞ！

どこから持ってきたとか、なんで着ているのか、そりやあツツコミを入れられずにいられるか！

しかも、なんか女性陣から白い目で見られ始めているし！

話聞いてた!?

「ソラは私のこの格好……………嫌？」

「全然！ ありがとうございませす！」

「神威ソラ……………あなたって人は……………」

暁美は何やら冷たい視線を向けるが、仕方ないだろ！

黒髪で美少女の上目遣いに拒絶できるはずがないだろ！

そりゃあ思春期に入る男子ですからねオレも！

「ほむらちゃんがもう一人……………いやでもそのセーラー服はグッドだよ！」

「まどか、今はそういう問題じゃないわよ。転校生を元に戻さないと」

「駄目だよさやかちゃん！ ここは写真を撮らなきゃ、もう一人のほむらちゃんを使っ

ての黒歴史を捏造できないよ！」

「あんたつてそこまで黒かったっけ!？」

もう一人の自身の恥態に呆然とする暁美。

写真を撮ろうとするが美樹に止められるまどか。

そして再び料理を続けて、謎の液体を作り出すほむら。

……………要するにだ。

「カオスだなあ……………」

とりあえず、オレは暁美の家にお邪魔してリビングにあつた雑誌を読み始めることにした。

現実逃避？ 違うな。雑誌を読みたくなつたんだよ……………半分だけ。

第五十六話

カオスな状況から小一時間後、オレはほむらの夕飯で半分死にかけながらも平らげて、説明会を始めた。

まず魔法少女についてである。これはキュウベえが話していた通りのことをそのまま暁美は説明した。

うん、どうやら真実まで話すつもりはないようだ。

この世界のママさんと接触する可能性がないとも限らないから最善と思って策だろ
う。

だが、彼女は忘れてはいないだろうか……。自身に危害がないのなら、問答無用な
う一人の自分に。

「で、魔法少女は絶望したら魔女になる。そういう仕組みらしいわよ」

「えっ?」

「ちよっ!」

まさかのほむらのぶつちやけである。まどろっこしいことするのが、なんかシヤク
だったのだろうか。

「そんな……それじゃあほむらちゃんは……」

「いや、その……平気よ！ ほら、ソウルジエムが真つ黒に濁るまでが期限だから安心してまどか、さやか」

「そのソウルジエムがあなたの本体なのよね。ゾンビ少女暁美ほむらちゃんって感じに」

「ただけぶつちやければ気がするのよ、あなた!？」

暁美はほむらにツッコむ!! こうかはいまとつのようだ。

ほむらは髪を流しながら暁美に反論する。

「うるさいわね、暁美ほむら。同じほむらとして落ち着きがないなんて恥ずかしいと思わない?」

「悪いのはあなただからでしょ！ 隠したいこと全て話しちゃってそれで巴マミに知られたらどうするのよ!」

「大丈夫よ。そのとき私の最近大きくなったバストのことを話せばいいわ。ほら、同じあなたより五センチ大きいBカップよ」

「それ全然解決策じゃないし、さりげなく自慢されて腹立つ!」

さすがの暁美もぶちギレである。隠したいこと全てぶつちやけるし、自身のコンプレックスのことを言えば、そうなるのは当然である。

あ、今さらだけど確かに違うよなこの二人の胸と髪型。

暁美はロングストレートだけどほむらはポニーテールだ。

なんかほむらのうなじがグツと来たとおれが思ったのは秘密だ。

「それから美樹さやか。あなたの幼馴染みが自殺しようとしてたわ」

「まさかのトンデモ発言!?! えっ、恭介は大丈夫なの!?!」

ガツかんばかりに美樹はほむらに詰め寄る。ほむらは平然と「大丈夫よ」と言つて続けて言った。

「バイオリンができないことに絶望して屋上で飛び降り自殺しようとした彼を私がコブラツイストで止めたわ。過呼吸になっても『あなたが、泣くまで、やめない!』って言つてマジで彼が泣くまでやめなかったわ」

「オイ、さりげなく殺しにかかつてるわよね? 人命救助で止めるどころかいろいろ意味で停止するよね、それ!!」

「それから彼は話してくれたわ。バイオリンが引けないから死んだ方がマシだって。私はその腹が立ってコブラツイストをリピートしてやったわ」

「いや怪我人になにしてんのよあんな!?!」

美樹がそうツッコむ。怪我人だろうが子どもだろうが容赦ないからな、こいつ。

いったい誰のせいだ………あ、オレのせいかな。コブラツイスト教えたのオレだ

し。

「それでマジ泣きする彼に新たな生きる希望を与えたわ」

そう言うのと美樹のスマホから着信音が鳴り始める。それに出るとなんと例の幼馴染みだった。

『やあ、さやか。僕、今日退院するみたいなんだ。左腕が動けるようになったしね』

「ウソ!? もう動けないはずだったでしょ!」

『うん。だけど、アケミさんからいただいた秘伝の書によって僕は一つの真理に辿り着いて動かせるようになったんだ』

美樹は今にもほむらに泣き出しそうに感謝を込めた目で見つめる。

………だけどなんだろう。嫌な予感がする。主に真理という部分に。

どつかで聞いたことあるし………。

「それじゃあバイオリンは続けられるんだね!」

『……………いや、僕はもうバイオリンをやめるよ。それにわかつたんだ。本当に大切なモノを』

美樹は「えっ?」と期待するように上条に聞く。彼女の顔はまさに恋する乙女だ。

ドキドキしているのだろうか。……………なぜか『さやか』じゃないのにモヤモヤしたけど。

それから会話は続く。

『さやか………僕の本当に大切なモノは』

「うんうん！」

『それは』

——筋肉だつたんだ!!』

「うんうん——うん？ 恭介、もっかい言つて？」

『筋肉。マッスルだよ、さやか！』

「ワンモアプリーズ。……う、ウソって言ってくれない?」

『いや本気さ僕は。筋肉とはあらゆる力の象徴。神経なんて筋肉さえ使えばすぐに再生できるんだよ! さやかか言う通り、奇跡とマッスルはホントにあったんだ!!』

やっぱりかアアアア!! 変態化してるよ上条が!

ほらみる! 美樹のヤツ、ポカーンとした顔をしているよ!

てか、『奇跡と魔法』じゃなくて『奇跡とマッスル』になつちやつてる!?

『へい、恭介! 一緒にマッスルトレーニングしようぜ!』

『OKマイク!』

「マイクって誰!? 恭介今どこにいるの!？」

『マイクは同じマッスルチームの一員さ。彼は病弱だったけど、アケミさんの秘伝の書で見滝原病院のみんなが元気に腕立てをしているよ!』

「病院なのそこ!？」

病院全員が筋肉に汚染された!?

どうしよう。もうあの病院行けないよ。

『それじゃあ、これから筋肉演説会があるから切るね。さやか、今まで応援してくれてありがとう! さやかか言う通りバイオリン以外にやれることっていっぱいあったよ!』

「ちよつと待てエエエエエ筋肉演説会って何よ!？」

『魔法漢女マツスルグレネードともえさんという筋肉史上最高の人が行う筋肉ムキムキな人が行う演説会さ！　そこでたくさんの同士がいるんだ！　だから行かなきゃ！』

それじゃ！とスマホから聞こえて、通話が切れた。

美樹はしばらくポカーンと口を開いてそれから深呼吸。そして、ほむらの両肩を掴んで言い出す。

「あんたなんてことしてくれたのよオオオオオ!!　恭介がホントの意味で遠いところに行っちゃったじゃない！」

「そんなこと知らないわよ。私はただのまどかに『絶望した人がいたら、これを使って助けてあげて』ってプルプル震えて口を抑えながら言ってたからそうしたまだよ」

「ま〜ど〜か〜！」

「ええ!?　私そんなこと一言も言っていないよ!？」

とぼっちりをくらって焦り出す鹿目。

てか、まどかのヤツとんでもないものをほむらに託してたんだな。

……………絶対、『おもしろそう……………!』と思つて渡したに違いない。ほむらの話の中にあつたように、笑いに堪えながら言つてたのがその証拠だ。

「つーか、親友とバイオリンの次に筋肉にネトラれるとか、どんだけお前ネトラレ属性ついでるんだよ」

「美樹さやかかのポジションはエロゲで言えば、ネトラレるヒロインよ。ほら、私達が知ってるさやかも主人公上条恭介を助けようとキュウベえに騙されて、最終的には堕ちていたじゃない」

あ、なるほど。つまり淫乱というわけか。わかります。

ほむらと話し合って納得した。

「誰が淫乱だゴルア！ 誰がネトラレ系のヒロインですって!? あたしはもっぱらの純情系ヒロインじゃアアアアア！」

「さやかちゃん落ち着いて！」

今にも襲いかかろうとする美樹。

それを止めようとする鹿目。

そしてオレ達は器に入ったお茶を飲んでゆったりするのだった。

「いや、なんであなた達そんなに余裕なのよ」

「常にそれ以上の衝撃的なことが日常だったから」

「わけがわからないわ……………」

オレ達の言葉にゲンナリする暁美だった。いや、お前も千香とかに絡んでみるよ。

常に衝撃と貞操の危機という恐怖が待ってるから。

あ、そういうええほむら。エロゲってなんだ？

オレはそう聞くとはむらは髪を手で流しながら答えた。

「私とまどかの聖書バイブルよ」

「聖書？ えっ、アダムとイブとかのヤツの？」

「あなたも杏子と同じこと言うわね。まあ、知りたかったらベッドに来なさい。どういうことか身体で教えてあげるわ」

「あ、やっぱいいや。なんかわかった」

主に貞操の危機ということが。

オレがそう言う。「解せぬ。どうすればソラを誘い込めれるかしら」と呟くほむら。

せめて本人がいなくてところで言ってください。お前のその野獣が狙う獲物を見る目が恐いんだよ。

「とかいよいよ加減に話を戻そうよ。つまり魔法少女はゾンビで、進化したら魔女という怪人になるってこと。わかったか？」

「誰がゾンビよ！ 後、ハシヨリすぎよあなた！」

暁美がツツコんだが無視して今度は、オレ達の正体と神器使いの話、オレ達の目的を話すことにした。

涙目で『構ってよオーラ』だしても無駄だよ、暁美。

☆☆☆

「ホントに平行世界の私なの……………?」

「なんか……………その……………」

「ぶっ飛びすぎよ」

それぞれの感想にほむらはムツという表情をしていた。

いや、そりやそうだろ。平行世界のオレがブツとんだキャラになってたらオレも驚くわ。

「鹿目まどかや美樹さやかはまだしも、断崖絶壁女に絶望されるのはシヤクだわ」

「誰が断崖絶壁よ!」

「違うの? なら、ボツチ女ね。所詮友達もその二人しかないのでしょ?」

「あなたが言える義理はあるの!」

「フツ、甘いわね。私には残り四人の友と呼べる人がいるわ。二人しかないあなたと比べて二歩先にいるわ!」

「なん……………だ?!」

ドドーンと胸を張るほむらと愕然とする曉美。

同じ顔なのに違うのは性格と胸だけなのに、その性質だけは同じだ。

てか、なんだこの低レベルの会話は。

「お前ら二匹共ボツチ仲間のくせに言い争うなよ」

「誰がボツチですって!?!」

「んじゃ聞くけど小学生の時にいた友達の数を言ってみろ」

「……………」

「オイ、こつち見ろや二人共」

顔だけ明後日の方向を向ける二人に呆れながらオレは脱線した会話を戻す。

オレが今、話していたのはオレ達の正体と神器使いということである。

次はオレ達の目的だ。

オレはまだか達の今の状況を説明し、そして異世界の旅について話した。

「あれ……………でも神威、さんでいいのかな?」

「神威でいいよ。オレとほむらはまだ年齢は中一くらいだから」

「つまり年下なの!?!」

「まあな。でも敬語は使わないぞ? めんどくさいし、イチイチですますつけるのがう

ざったい」

「ぶっちゃけすぎだよお……でも神威くんってそのわりには大人っぽいよね」

まあ鹿目の言う通り、オレの精神年齢はもう大人だからな。

おっと脱線したな。

「それで鹿目は何に疑問を思ってたんだ？」

「えっと平行世界に渡るとその世界の人に憑依するんだよね？　じゃあ、なんで神威くんやそっちのほむらちゃんは憑依じゃなくて個人として存在するの？」

鹿目の疑問は最もだ。だからこそ、ある仮説がある。

「まずオレのことを説明すると、世界のルールとして二人以上の同一人物は存在できないから、平行世界に憑依という形で渡るんだ。だからオレという者が存在しないこの世界はオレ個人がこうやって存在することになるんだ」

本来ならば、オレはまだか達の世界では子どもの姿になっているが、今のオレはここに来る前の姿だ。

つまり、この世界にオレは存在しない。

——では、ほむらはどうなのだ？

その世界にいるにも関わらず、彼女は憑依せずに個人として存在している。

矛盾が起きるのだ。

「だけど、オレはその矛盾に仮説立ててある答えを出した。

「ほむらの場合は仮説だけど、たぶん朱美ほむらは前世の頃——つまり暁美ほむらだった頃に円環の力の一部をもち取って『悪魔』に昇格したことがあったんだ。だから、そっちの暁美とは別人ということになってると思うんだ」

「と言つてもあくまで仮説である。ホントにそうとは限らないが鹿目達は納得してくれたみたいだが、まだ疑問がある。

「これは仮説ではなくて確証を得る疑問だ。それをほむらに聞いてみた。

「ほむら、一ついいか？」

「なにかしら？　いつ初夜の準備するかってことかしら？」

「お前さんだけ発情してんだよこの思春期女。いやそうじゃなくて………み、み………」

「美国織莉子？」

「そうそれ！　その女のこと前世のループであったことがあるか？」

「忘れてたわね」と暁美に言われたが無視する。

すると、ほむらは答えてくれた——
——予想通りの答えで。

「そんな人、知らないわ。誰かしらその人」

まだか達が驚愕していた。

当然だ。いくら平行世界とは言え何百回のループ中でその人物に出くわさないということはありえない。

そしてその返答でオレは遂に答えにたどり着いた。

ほむらが悪魔だったからという理由だけでなく、ここがただの平行世界ではないことを。

「……………一度、師匠に聞いたことがある。平行世界の中にはまた違う歴史を持つ世界があると」

「ソラ、何か知ってるの?」

「ああ。ほむらの知る歴史と暁美の歴史の違いでオレははつきりした。この世界はただの平行世界じゃない」

三国志の歴史人物が正史である男ではなく、女になったり、その歴史が全く違う結末を迎えて新たな世界を造り出すという平行世界がある。

その名は――

「『外史』。ここは誰かの願いによって造られた平行世界なんだよ」

師匠、どうやらここはこの物語を完結しないと出られないみたいです。
外史って入ってしまうと完結するまで外から出られないんだよな。

オレは憂鬱そうな溜息を吐くのだった。

第五十七話

外史——それは想いによつて作られた歴史。

例えば、織田信長が生きていたらとか、豊臣秀吉の祖先が天下を取り続けていたらとかなど、たくさんの人々の想像と願いによつて作られる。

その世界は一種の物語みたいなもので、終わりを迎えると消滅するらしい。

そして、消滅したその世界からまた新たな外史が生まれるという循環された仕組みとなつている。

謂わば、正史が樹木とすれば外史は葉っぱみたいなものだ。枯れたらまた新しいものが作られるというわけだ。

「そんな話、信じられないわ。……………彼女達が作られた存在だなんて」

ペランダに出てオレはほむらに外史について話した。

さすがに外史の住人にこの話をするのは気が引けるし、信じてもらえず変人扱いされるかもしれない。

そして、ほむらは外史について信じられないようだ。

それもそうだ。想いによつて存在する世界なんて見たことも聞いたこともないもん

な。

「じゃあ、いつどこで生まれたか覚えているのか、両親の顔とか覚えているのか聞いてみるよ」

「わかったわ」

ほむらにそう言うとな彼女はリビングに入って暁美と美樹と聞いていた。

すると、暁美と美樹は首を傾げて「うーん」と考え込んでいた。

「ド忘れしたのかしら」と暁美はそんな解釈して納得していた。美樹も同じように頷く。

ほむらは「ありがとう」と言っておれの元に帰ってきた。

「……………本当だったわ。一彼女達は両親の名前や生まれた場所も覚えてなかったわ

《……………》

そう、これが外史の特徴である。

登場人物以外の人物は設定だけしかなく、その人個人は存在しないのだ。

『鹿目以外の両親は設定でしかない』

これがここが物語の世界であると証明している。

「さすがの私も前世でどこに生まれたのか、両親の名前も覚えているわよ。だけど彼女

達は知らないのね？」

「ああ。読者視点からして余分な情報だったから、切り落とされているんだよ。両親の個人情報も別になくても大丈夫だからな」

「……………なるほど。それでここが物語の世界であると仮定すると、どうなるの？」

ほむらの疑問にオレは柵に背中を預けながら、夜空を見上げるようにして答えた。

「オレとほむらが『登場人物』という枠に当てはまっていることになる。だから、ほむらは憑依しなかったんだ。『朱美ほむら』という登場人物だから」

「なるほど……………」

「それに外史は終わるまで出られないんだ。見ろよ。いくら神器を使っても見滝原や風見野以外の場所へ行けるドコでもドアが現れない」

そう言いながらオレはアメリカ行きなどのドコでもドアを展開しようとするが、ウンともスンとも言わない。

それもそうだ。この世界には風見野と見滝原しかないのだからな。

「厄介ね」とほむらは呟いて目を瞑り、考え込む。

「ま、外史がどうかとかという話はこの際どうでもいい。オレとほむらが存在するって言う事実があればそれだけでいい。問題はまどかだ」

「まどかが問題？」

「ああ。あいつの場合よくわからないんだ。外史がこうしてオレやほむらを登場人物と認めて存在しているが、未だにあいつと会っていないからどんな状態なのかわからないんだ」

外史はあくまで平行世界だから憑依しているのか、はたまた別の何かになっている可能性はある。

「あいつはかつて円環の理という概念だった。お前と違ってあの概念化は実体がない。最悪、そうなっている可能性もないとは言えない」

「そんな……………」

「でも元に戻せるはずだ。この外史に来てからお前、反逆の力が戻ってないか？」

そう、こいつから僅かだが恐ろしい感じがする。

前世で感じたものだ。

ほむらは試しにオレの手を握り、何かを念じる。

すると、だんだんオレの身長がほむらより小さく……………つて。

「なにすんねん！」

「試しにソラの身長をあの頃に戻したいと念じたらそうなったの」

「なんで試そうと思ったんだ!？」

「なつかしいし、かわいいから♪」

「オイこら離せ。抱きつくくな！」

スリスリ頬ずりし始めるほむら。柔らかいものがオレの腕に当たっているが、小さくされたのであんまり喜べない心情だった。

ちなみにその後、オレはほむらに鹿目達の前に出されて彼女達にいろいろされた。頭撫でるな、頬擦りするな、プニプニすんな！

☆☆☆

翌日、曉美の家に泊まらせてもらいオレとほむらは探索に出かけた。

朝になるとオレの身体は元通りになっていた。

どうやら理を覆すと言っても、僅かしかないため持続性がないようだ。だけど、ほむら曰く、まどかを実体化させることは可能なようだ。

悪魔の力ってマジ便利。

ちなみに外史の設定をまとめるところだ。

1 『神威ソラ』と『朱美ほむら』という登場人物として存在している

2 『朱美ほむら』は若干ながらの反逆の力を持つ

3 『朱美まどか』が『鹿目まどか』として存在しているのか、円環の理として概念化しているか不明

よつてステータスダウンはない。むしろほむらがパワーアップしたくらいだ。

「まずどこにいくつもりなの？」

ほむらがオレにそう聞くとオレは「町に行つて泊まれる場所を探す」と答える。

暁美にこれ以上の迷惑をかけたくないからだ。

一応、オレ達は女神のおかげでお金に心配することはないが、寝床となる場所がない。加えてまだ中学生に上がる前だからホテルなどで泊まれるところない。

妥当なところになると廃墟の工場になるな。

「いやよ。こんな美少女を工場なんか寝かせるつもり？」

「地の文読むなよ。つか、仕方ないだろ。第一、オレ達は本来保護者がいないからホテルに止まれない立場なんだぞ。最悪通報されるぞ」

「そこはあなたの魔法でなんとかしなさいよ。催眠やら洗脳やらの」

「とんでもないこと言い出すな。てか、それはあくまで最終手段だからな？」

と言つてもホテルにチェックインできないわけでもない。オレかほむらが変身魔法で大人になれば良い話だ。

だけど、オレはまだしもほむらは時間操作以外の魔法が不器用のため、持続時間がかかり短いそうだ。

オレの場合、神器の燃費のことを考えないといけないからあまり使いたくない。

もし、またあのコスプレお嬢様と戦うことになれば、エンスト状態になってしまう可能性があるからな。

「こうなったら佐倉杏子のホテルを乗っ取るわよ。放浪娘のくせに泊まってる場所は無駄に豪華だから大丈夫のはずよ」

「なに恐ろしいこと言っちゃてるの、この子……………おつ？」

魔女結界が現れた路地裏があった。

誰かが戦っているとなると、杏子がマミさんくらいだな。

暁美はなんかまどか達と出かけてここにはいないし。

「というわけで」

「突入ね」

二人のどちらかは知らないけど、助太刀しますか。

☆☆☆

魔女は既に倒されていた。

えっ？　なんでそんなことがわかるかって？

なんかそれらしき細切れの残骸があつたんだもん。

そして戦っていたのはマミさんだったが血を流して地に伏していた。

出血がひどくないが時間の問題かもしれない。

そんな彼女の前に黒い衣装を着て眼帯をつけた魔法少女が立っていた。血がついてる鍵爪があるとすると、マミさんを傷つけた犯人らしいな。

「あれー？　なんで一般人がここにいるのかな？」

「別にここは関係者以外立ち入り禁止じゃねえだろ。オレ達がここに来ようが勝手だろ」

「何しにきたの？」

「そこに倒れてる巨乳な姉さんを引き取りにきた。一応、親族だから」
嘘を言つて誤魔化そうとして近づこうとしたが、鍵爪を向けられた。

チツ、駄目だったか。穩便に済ませたかったのだけどなあ。

「てか、バマミさんで会つてる？　ソックリさんじゃないよね？」

「正真正銘本人よ……………あなた達はいつたい……………」

瀕死の巴さんに聞かれたのでオレ達は顔を見合わせて、それから答えた。

「通りすがりです」

「この駄犬の飼い主よ」

「オイこら。なに初対面にあらぬ誤解を植えつけようとしてんだよ！」

「あら、違うのかしら。なら、奴隷で手を打ちましょう」

「いや大して変わってねえだろ！ 犬から人間になっただけだろ!?!」

「そう、私の名前は朱美ほむら。……………ソラを隷属させないと不安になっちゃおう女王様よ」

「あらやだ。この子かわいい」

指をモジモジさせながら答えるほむらにグツときた。

さっきのセリフがなければ……………さっきのセリフさえなければよかったのに！

「もーいいかい？」

「まーただよ。後、五時間くらい待っててくれ」

「そんなに待てないよ」

眼帯魔法少女は律儀に待っててくれたが、どうやらこれ以上は待ってくれないようだ。

「あ、ヤベ。どうしようほむら。今日の寝床探してないや。このまま戦って夜になつたらどうしよう」

「なら、公園で寝ましよう。布団はソラ、あなたよ」

「ワイ、助かったー♪ ……あれ？ それってオレは冷たいベンチか地面で寝てろってこと？」

「レディに地べたで眠れというのかしら。生意気ね布団の分際で」

「ほむらのDSさに全国の男子諸君は泣いた」

軽口を叩きながらさめざめ泣いたフリをしていると眼帯魔法少女——もうめんどいから眼帯少女でいいや。

眼帯少女がオレ達に向かってきた。

「私を無視するなアアアア！ 後、眼帯じゃなくて呉キリカだ！」

「クレヨンきりか？ なんだその某人気漫画と同じ名前は」

「呉キリカだつての！ もう怒った！」

「細切れにしてやるー！」と叫びながら眼帯少女が迫ってきた。

「やれやれ」と嘆息吐きながら余所見していたオレに巴さんが「危ない」と叫ぶ。

ほむらさんや、一発たのまー。

「了解」

「へっ？」

巴さんと眼帯少女がすつとぼけた声をあげた。

理由は明白。

ほむらの神器からマシンガンが出てきたから。

「蜂の巣にしてやるわ」

「えっ、ちよっ、待って!」

眼帯少女の言葉は虚しくもマシンガンが容赦なく火をふいた。

彼女はその銃弾の嵐が終わるまで背中を向けて逃げるしかなかった。

「おースゲー。マシンガンの弾を一つも当たらず避けてやがる」

「死ぬ。とにかく死ぬ。今すぐ死ぬ!」

両手のマシンガンを眼帯少女に向けながらほむらはそう叫んでいた。

平行世界とは言え、彼女は鹿目まどかを失うことは嫌らしい。

だから容赦しない。まどかのためなら問答無用で敵を排除する。

それがほむらちゃんクオリティである。

「あ、巴さん。あのいかにも厨二そうな眼帯少女の目的わかる?」

「えっと……彼女は魔法少女狩りの犯人で………つてそんなことより、あの人ホント

に晧美さん?! めちゃくちゃ楽しそうに撃ってるのだけど!」

「……………あれは晧美ほむらじゃありません。『朱美ほむら』というあなたの知る彼女か

ら180度逆走して誕生した最強のシスコンです」

物騒なことを言うが涙目で現在進行形で逃げてる彼女に恐怖心どころか説得力の欠片もないな。

「えつと、く……………く……………なんだっけ？　もう眼帯少女より厨二少女の方がいいかな」

「オイこらア！　人の名前をものの数分で忘れるなよ！」

「いやーオレつてどうでもいいことは覚えてないんだよねー。そんなことより、ほむらが本気になったよ？」

「えっ？」とほむらに振り返る眼帯少女。ほむらの両手にあるのはマシンガンではなくロケットランチャーが握られていた。

そしてトリガーが引かれて発射。眼帯少女が爆風で見えなくなった。

「呉さんが死んだ!？」

「この人でなし！」

「ほほほほ、勝てばいいのよ勝てば♪」

ほむらさんマジ外道なり。

どこそのマダムのように笑うほむらにオレはノリでツッコんだ。巴さんはマジだけど。

「もうやだ……………こいつら……………」

爆風が晴れたときいたのは、頭がチリチリヘアーとなって涙を浮かべた眼帯少女だった。

えっ、生きてるの？　なんで？

第五十八話

路地裏の魔女結界にてオレ、ほむら、巴さんは敵である……………えっと……………。

あ！ そうだクレヨン一世だ！

「いや誰だよそいつ！ 私の名前は呉キリカだつて！ 頭悪いのかい君は!」

眼帯少女は無事だった。

理由はほむらが入っていた武器がこの世界に来てからバグってしまった、当たっても絶対しない非殺傷設定のイロモノ武器になっていたのだ。

いわゆるギャグ補正の兵器である。それを知ったほむらは申し訳なさそうにシヨンボリと落ち込みながら後退してくれた。

一緒に戦えないことが残念で仕方ないのである。

さて、オレは巴さんとほむらの前に立ち、眼帯少女の言葉に答える。

「心外な。オレはこれでも頭が良い方だぞ。社会のテストの歴史人物の答えに全て歴代仮面ライダーの名前を載せるくらいの良さだぞ！」

「何しちゃってるのあんた!? どの国にそんなバカテス回答するバカがいるのよ!」

「HERE!」

「っ！」

ほむらの叫びにオレは咄嗟に身体を逸らさず、そのまま後退。

斬撃は予想より早くオレの身体を掠めて、服を切り裂いた。

「速くなつた？ 速度上昇させる魔法少女かお前」

「そんなこと誰が答えるか！」

そりゃ、もつともだ。

そう思っていると眼帯少女は愚問に答えず、どんどん斬り込む。

徐々にオレの身体は裂かれ、遂には胸辺りを浅く斬られてしまった。

「ヤツベー。毒ないよねこれ？ 毒状態で戦うのちよつと嫌な思い出あるんだよね」

「そんな姑息な手は使わないよ。まあ、彼女のためなら使うことは躊躇わないけど」

ほう、彼女ねえ……………。

どうやらこいつの狩りは誰かに命令されたか、お願いされたものようだ。

つまるところ親玉か協力者がいるわけかい。

「んー、大方情報が集まったし。そろそろ反撃いくかー」

「ふーん、今まで逃げてたくせに今さら戦うつもり？ 今の君の速度は一般人くらいな

んだよ？」

「それくらいのスレータスダウンしてたのオレ？ ヤベ、これで鹿目まどかでさえ負け

たらマジでへこむ」

ちよつとシヨックを受けていると眼帯少女は気にせずオレに向かって鍵爪を降り下ろす。

「じゃあそのまま死になよ!!」

その鍵爪がオレの頭部を切り裂こうと迫り――

ガキイン!

——来る前にオレは神器で止めた。

眼帯少女は目を丸くしながらオレの顔を見ていた。

「おかしいか？ 『オレがお前の斬撃に追い付いたことが』」

「っ!!」

眼帯少女は咄嗟にその場を後退し、オレに警戒心をあらわにする。

「……………いったい何をしたんだ君は」

「なーに、単に魔法で速度を上げただけだよ」

補助系マジック——『レベルアップ』。

パワー、スピード、思考速度を高める魔法だ。

本来なら、大工稼業が使う魔法らしいが、戦時中はよく使われていた。

ただまあ、燃費の悪く疲労が溜まりやすい魔法だったので

短い時間しか使えないが——

「単時間で済ませるには充分だ」

オレは横構えを取り、いつでも斬り込めるように飛び出せる準備をした。

「訂正するよ。お前は子どもじゃないよ。むしろ子どもには勿体ない」

「へえ？ それで子どもじゃない私は何？」

何って？ そんなの簡単な答えだろ。

人形

こいつは傀儡だ。自分の意思なんて考えてない。ただ主人のことしか関心のない駒だ。

オレは眼帯少女に向かってそう言うと彼女は笑い始めた。

「なに言ってるんだい。駒でいいじゃないか。それこそ、私は主人の愛だと考えているね」

「愛？」

「そう！ この身は全て彼女のためにある！ 愛のためにある！ だから私は彼女の傀儡でいい！ 愛してくれるのであれば私はそれでいい！」

「だから君を殺す」と眼帯少女はそう最後に言つて斬りかかる。

それを防いで「狂っているわ」と呟く巴さんを横目にオレは思った。

一見、狂っているように見えるが見方を変えれば献身的な愛だとオレは思う。

ほむらの愛——もはや狂愛きやうあいとも言えるその愛は他人のことを考えず、自分が満足すればそれでいいと言える。

究極の自己満足であり、想われる人にとってはありがた迷惑な話だ。

しかし、間違つているとは言えない。なぜなら、『彼女は彼女を愛している』からだ。オレは悪魔となることは否定しても、それだけ否定しようとも思わなかった。

別に相思相愛でなくてもいい。

その人を想い、愛してさえいればそれが愛なのだから。

愛は様々な形があるのだから。

だから、認めよう。彼女の自己満足の愛は本物であると。

「なーんか嫉妬しちゃうなその彼女に。その献身的な愛をくれよ、オレ達にも」

「嫌だね。第一君が気に入らないし」

「あらやだ失恋しちゃった。ほむらさんや後でその胸貸して泣かしてよ」

「いいわよ。目の前で浮気したソラにお仕置きしてからね」

「解せぬ」とオレが呟くと神器ごと後方へ飛ばされた。

そのまま眼帯少女は左横から斬撃を放つ。

それを防いだらオレはさらに質問する。

「で、その献身的な愛にオレ達殺されちゃうの？ 理不尽すぎやしませんかい」

「関係ないね。私は君を殺せばそれでいい！」

問答無用ってわけか。それはなんとも——

「同感……………」

「っ!？」

オレはニタリと笑うと眼帯少女は後退した。あれま、どうやら殺気が滲み出ていたみたい。

「いいねえ……………愛のために問答無用か。実にシンプルだ。しつくりくる」

「だけど、とオレは目を瞑りながら続けた。

「それは単にお前だけじゃないってことさ。オレは大切な……………大切なあいつらを守るなら外道だろうが鬼畜と呼ばれていい」

だからオレはあいつらための英雄になる。

あいつらが望むことをして満足させる。

「だから安心してとつと死ぬ小娘。オレの大切なモノリストにない人形には用はない」
いつも通りにオレは斬り込みにかかり、いつも通りにほむらは「告白されたわ」と頬
を染めながらイヤンイヤンと首を振る。

いや告白じゃねえから。だから「拳式はここにしようかしら」とか呟くな。

中学になる歳になってからマジで貞操の危機を感じる今日この頃である……………。

第五十九話

魔女結界が徐々に崩壊していた。その幻想的な空間が壊れ始める光景はどこか、夢を叶えられなかった少女達の絶望を表しているかのようだった。

そんな空間の中で、オレの神器と眼帯少女の鎌爪が金属音と火花が散る。優勢劣勢なのは明白であった。

「どうしたどうした？ お前の愛はその程度か！」

「ガハッ！」

開いた横腹に蹴り込み、眼帯少女を空中から叩き落とした。

優勢なのはオレだった。

その要因は二つ。

一つはこの魔女結界はジャングルジムのようになっているため、上手く飛び回れること。

二つ目は——戦いの経験。

一応、言っておくがオレは強化魔法をかけているが今は、眼帯少女とは同じ速さだ。

だが、こいつは魔法少女狩りを暗殺的なやり方ばかりをしていたのか、それとも戦闘

が早く終わらせていたのかわからないが、戦いの経験がまだまだ浅い。

だから、身体スペックは互角だったが経験の差で翻弄されているのだ。

常に自分より強い相手と戦う毎日だったオレが日の浅い未熟な小娘に負けるはずがないのだ。

慢心してないけど。

「くっそオオオオオ!!」

激昂しながら闇雲に斬りかかる眼帯少女。

ぬるい。鍵爪を受け流して開いた胴体に掌底を叩き込む。

咳き込む隙にオレは眼帯少女に斬りかかるが、彼女は上手く身体を捻り、転がってから立ち上がる。

魔法少女って頑丈というかゾンビ体質だから普通のようにはいかないよなあ。

「私は負けるはずはいかない! 愛の力が負けるはずが!」

はあ……………またか。さつきから愛だ、愛の力だって。

「お前さあ、愛の力が万能だと思ってるけど、それ大きな勘違いだぞ」

「なんだと!? 私の愛を否定するのか!?!」

「いや否定しないよ。むしろ『良いんじゃないね』って思っている」

だけど、とオレは続けてから駆け出す。あつという間に眼帯少女の前に着き、言った。

「なんでもかんでもそんな幻想が通用すると思うな。圧倒的で、理不尽な存在の前ではお前の愛は——通用しない」

そんなご都合主義を否定するかののように眼帯少女をそのまま力強く蹴り飛ばした。今のであいつの肋骨はやられたな。

後はどう料理するか——

「むっ?」

そう考えているといきなり水晶球がオレに向かってきた。それを切り裂き無力化するといつの間にか壁までいた彼女の姿がない。

「またお会いしましたね神威ソラ」

その声はつい最近に聞いた覚えのあるヤツだった。

そう、確か………えっと、そうだ!

「マッスルグレネードともえさん!!」

「全然違います!!」

おや、違った。どちらさまだっけ?

「美国織莉子です! 貴方、本当に私の名前を覚えてないのですね!」

「あ、悪い。なんか織莉子って名前珍しいし、ぶっちゃけ覚えにくいんだよね」

「覚えにくいからってどこをどう思い出せばマッスルグレネードという単語が出てくる

のですか!？」

ツツコむ美国なんたらさんはもはや涙目である。

そんなに覚えててほしいの？

「そうじゃありません……………そうじゃ……………ないもん……………」

「ヤベー幼児退行しちゃってるよあの人」

「どこかキュンと来るわね。ギャップ萌えてヤツかしら」

ほむらの感想には同意である。というわけでこれからもビシビシいじってやるから覚悟されよ。

「いじらないでほしいわ！ これ以上シリアスを台無しにしないで！ 私の立場ないじゃないー！」

「織莉子……………既にシリアスはあの黒髪で殺されてるよ……………」

瀕死の状態でありながらツツコむとはあっぱれな眼帯少女である。

「くっ、今日のところは退かせてもらうわ！ 次はこうは行かないわよ！」

「はいはい、じゃあな○サシとコジ○ウ。次はニヤー○連れて来いよ」

「ロケ○ト団じゃないわよ!!」

そう言っ立ち去る前にオレはほむらに頼んで、神器からRPGを出してもらった。

「くらえ」

「えっ?」

「ちよつ、また——」

トリガーを引いて発射。凄まじい音と爆風と共に魔女結界は完全に消えた。

たぶん、あいつらは生きている気もするな。

だつてバズーカ砲で生き残っているし。

「おいほむら。これだけマジ殺しの威力じゃん。なんでRPGだけは殺傷設定なんだ?」

「さあ? 古来からRPGは最強の兵器だからじゃないかしら」

「いやそんな逸話ないから。古来じゃなくて文明兵器だから」

「マジになった文明だからこそ、成せる威力じゃないかしら」

「把握」

「把握じゃないわよ!」

軽口を言つてると巴さんがやつと口を開いた。

「なに平然と、逃げようとする人達に撃つてるのあなた達!」

「知るか。こちとら逃げ出す相手もお構い無しにぶつ飛ばすのがポリシーだ。敵には容赦せぬ。それに敵前逃亡をはかったヤツらの落ち度だ。これが軍なら軍法会議モノだぞ」

「軍は関係ないわよきつと！ てか、あなた達何者なのホント!？」

何者かと巴さんに聞かれた。なのでオレ達は同時に一緒の答えを出した。

「通りすがりの小卒です」

「嘘おつしやい！」

なぜかオレ達は傷負いの人に説教されることになった。

解せぬ……………。

☆☆☆

巴さんを治療した後、オレ達は彼女を家まで運び、オレ達について説明した。

「平行世界の住人なんて……………あまり実感がわかないわ」

「つて言っても事実だしなあ。オレ達の神器が証拠だし」

オレが唸りながら考え込むとほむらがチョンチョンと肩をつつく。

「だったら巴マミの技名ノートに載ってた名前全て言つてあげたらどうかしら」

「朱美さんなんでそのことを知ってるのかしら!？」

あ、ここのマミさんも厨二なんだ。

オレ達の知るマミさんなら笑つて懐かしむが、ここのマミさんはあたふたしていな

んか子どもっばい。

そんなに恥ずかしいなら処分すればいいじゃん。

まあ、そのノートに乗ってる名前全て覚えてるけど。

「えっとまずは最初に思い付いた技名は」

「やめて！ 信じるから。信じるからこれ以上は言わないで！ 羞恥心でソウルジェム

が濁ってきてるから！」

「あら、新しいわねそれ。ソラ、続行しなさい。キュウベえですら知らない事実を知る

チャンスよ」

「よしきた」

「きゃあアアアアアアアアア!!」

その後、羞恥心でマジでソウルジェムが濁り出し、魔女化寸前までいったところでグリーフシードで浄化した。

羞恥心でグリーフシード使うはめになるうとは予想外だ。

閑話休題

「グスン……………もうやだこの人達……………」

「巴さんマジ泣きでオレを睨む。いやオレのせいだよ。」

「ひどい男ね。あなたこそ女の敵よ」

「まさかの裏切りにオレのハートはブレイク。巴さん、胸借りていい?」

「なっ、精神的の次は肉体的に辱しめるつもりなのね?! エロ同人誌みたいに!」

「いや、しねえからね。てか、ここのマミさん結構耳年増じゃね?」

同人誌らしきモノがあつたし、しかもタイトルが『禁断の愛 くバラは散るく』といういかにもオレの貞操が危なそうである。

なぜか知らないけど、尻がムズムズしたし。

「さて冗談はこれぐらいにして、巴さん。一つ提案あるけどいい?」

「何かしら?」

「魔法少女……………やめたくない?」

オレの言葉に巴さんは目を開いて、困惑した顔になる。

そりゃそうだよな。

彼女にとつて魔法少女は誇りあるモノである。

が、その同時に——恐怖の象徴である。

常に命をかけなければ魔女とは戦えない。そんな恐怖と戦い続けた彼女にとつてオ

レの言葉は甘美なものである。

「……………お断りするわ。助けてもらったとは言え、あなたの言葉はまだ信用できない」
まあそうなるわな。まだ説明してないもの。

「まあそう言いなさんな。最後まで説明を聞いてから考えてもいいだろ？」
オレの言葉に巴さんは耳を立て始める。

さてオレが説明することはどうやって魔法少女を普通の少女に戻せるのか？

『普通の』とは言えないがそれでも魔女化するリスクはなくなるし、魔力の代わりに生命力で魔法が使える体質になるだけだ。

オレの神器——『全てを開く者』で、まずソウルジェムの機能から魂を解放する。
例えるならソウルジェムは卵と考える。そして、その卵の中身を魂と考える。

もし卵を割ればその魂がグチャグチャになってしまう——つまりその魂が死ぬと考えればいい。

では割らずに取り出すにはどうすればいいのか？

簡単な話だ——『箱のように開ければいい』。

卵に箱のように開けるといふ概念を与えれば、それは卵の形をした箱と同じ機能にな

り、その中身を取り出せる。

後は取り出された黄身黄身はどうなるか？

肉体と魂には精神という糸で繋がっている。ゆえにその糸が肉体へ引つ張られていき、あるべき形に戻る。

こうして魔法少女は普通の少女に戻れる。

肉体さえあれば魔女でも元に戻せる。これは前世のさやかに実証済みである。

しかし、魔法少女とは違い、最悪のデメリットがある。

魔女の場合、魂はグリーンフシードになっているため、その器にグリーンフシードを入れて封印するという仕組みになっている。

しかし、それは臭いものに蓋をしたことであるため、魔女特有の殺人衝動、破壊衝動が起こりやすく、人間社会で生きている中でそれは致命的である。

最悪、理性を失って暴走することもあり加えて、器である肉体が弾けとんで魔女化するという事態がある。

まあ、その人もまた魔法が使えるわけだが。

「そんな力があるなんて……………」
それに魔女が魔法少女のなれの果てだなんて……………」
それじゃあ私は……………」

また濁り始める巴さん。

というわけでほむらさんや。お願いします。

「了解」

バチン!!

ほむらはそう言って巴さんにビンタした。

えっ、励ましてつてお願いしたのになんで？

「巴マミ、確かにあなたは今まで人間だった魔女達を討伐してきたわ。けれど、彼女達にはもう理性はないし、考える力もない。絶望を振り撒く災厄に成り下がってしまったのよ。だからあなたが負い目を感じる必要はないわ」

「けど……………！ 私は！」

「そうね。あなたには負い目になるかもしれない。だからこそ、生きるのよ」

「生きるですって……………?」

ほむらの言葉に巴さんは耳を傾けた。

「そうよ。今まで殺してきた魔女、魔法少女だった人達は生きることができなくなつた。ならば誰がその想いを受け継ぐの？ あなたが死ねばその生きたかった想いを誰が受け継ぐの？」

「あ……………」

ほむらは巴さんの手を、まるで子どもを諭す親のように握り語りかける。

「生きなさい。魔女になんかならず、彼女達のために」

「グスツ……………あけみ……………さん……………」

巴さんは涙を流す。その涙を隠すようにほむらは彼女の頭を抱きしめる。

まるで親子のような光景にオレはしばらくじつと見守るのだった

「つてなんだこの蚊帳の外感。ドラマ展開にオレは寂しくなる」

「なら、こつちに来なさい。……………いじ^愛めてあげ^しるわ」

「慰めてよ」

そんなこんなで巴さんが泣き止むまで軽口を叩いているのだった。

第六十話

巴さんのお宅で一泊してからオレはほむらと分かれて行動していた。

今日はバラバラで行動して情報収集するらしい。

ちなみに白いナマモノらしきものがペランダに見ていたらしいが、ほむらが駆除したそうだ。

巴さんに気づかれず、サイレンサーを使つての暗殺にしたほむらに恐怖を覚えたのは気のせいではない。

いつかヤンデレ化して、知らぬ間に撃たれそうだもん。

現在オレは公園でブラブラしていた。

「はっ、しまった。今日はロツキー春限定のイチゴ味の発売だ。なんてこつたい。このままでは売り切れてしまう。といわけで佐倉たん、アディオス」

「待ちやがれ。誰が佐倉たんだバカ」

襟首を掴まれて逃げれなくなった。なんかブラブラしていたら、佐倉に見つかり絡まれた。

財布は五百円しかないぞ。カツあげするなら他を当たれ。

「財布が狙いじゃねえよ。キュウベえが言つてたイレギュラーのお前と話があつてきたんだよ」

「話？」

佐倉曰く、どうやら美国なんたらさんとは因縁があるらしく、その情報を提供してくれと言つていた。

「なら、お菓子よこせ。トリック・オア・トリートだ」

「いやギブアンドテイクだろ、そこは」

などと美国の情報を提供していると「キョーコー！」と少女が佐倉にトテトテと走つてきて飛び付いてきた。

佐倉はやれやれと仕方なそうに頭を撫でてあげていた。

馬鹿な……………そんな……………。

「いつも腹を出しながら寝ていて、全自動料理処理機で、女性らしさのかけらもないあの杏子が一児の母親だ?!」

「いろいろツツコミたいところがあるが、まず言つとくけど、アタシはまだ子ども産んでねえよ!!」

「なん……………だと。義母だ?!」 お前はこれ以上属性を増やすつもりか! あの変態を萌え殺すつもりか!」

「ねえシヨウコ。もえつてなあに？」

「ゆまもこいつのデタラメを耳を貸すな！　つか、余計なことしやべってんじやねえよテメー！」

佐倉はゆまという少女との関係を話してくれた。

なんでも彼女は家族と魔女結界に囚われ、両親を目の前で喰い殺されたそうだ。

普通の少女ならば、泣きながら親戚に預けられることになるそうだが彼女は違った。

——ドメスティックバイオレンス

両親の愛を受けず、虐待されていたのだ。しかも親戚などおらず、誰も彼女を引き取るところはなかったそうだ。

だから彼女は両親が殺されても泣かなかった——

だから彼女は捨てられることを嫌がった——
役立たずという言葉に敏感だと佐倉は語っていた。

「ふーん、で？　哀れだと思った佐倉は引き取ろうと思ったわけね。なかなかいい話じゃないか」

「……………テメーはなんとも思わないのか？」

「まあね。他人の家庭なんてどうでもいいし。ましてやオレは育て親に対して良い感情はない」

オレも拒絶されて捨てられた身だからな、と最後にそうしめた。

佐倉は沈痛そうな表情をしていた。地雷を踏んだと思っているそうだが、別にそうは思えないけどな。

オレとしてはもうどうでもいい過去なのだから。

「お兄ちゃんもいじめられてたの？」

「いじめられてないさ。オレが勝手に化け物になって帰ってきたら、拒絶されただけさ」
「そうなんだ」

「そうなんだよ。だからこのお話はおしまい。このお姉ちゃんに美国オリゴ糖の話をしなきゃいけないんだから、お嬢ちゃんは待っててくれ」

「むーお嬢ちゃんじゃないもん。ゆまだもん！」

ゆまちゃんがそういうと佐倉は驚愕した顔でオレを見ていた。オレなんかしたのか？

「驚いた………ゆまは人見知りするヤツだから初対面のお前には心を開かないと思ってたけど」

まあ『開ける』ことが得意だからなオレは。

そんな感じで、ゆまちゃんを交えて美国オリゴ糖の話をするのだった。

「後、オリゴ糖じゃなくて織莉子だから。糖分じゃなくて人だからなソイツ」

えっ？ そうなの？

また間違えたのオレ？

☆☆☆

集合場所にほむらと再会したオレはまずしたのは情報交換だった。

鹿目家は相変わらずで、志筑仁美も変わらずいた。

それからオレは佐倉とゆまちゃんについてほむらに話した。

「まさか、ここの佐倉杏子が子持ちとは。さすが外史。予想の斜め上をいくわ」

「いや違うから。義母的というか義姉的ポジションだったからな」

「ソラ、負けてられないわ。今すぐあなたと合体したい」

「そんな機能ないからな？ てか、お前創世記のロボットアニメ見ただろ」

「ここの私の家にDVDがあつて。私、見たことなかったからつい……………」

人が一生懸命情報収集しているのに、こいつと来たらどうも暁美の家で志筑、美樹、鹿目を含めた暁美と一緒に合体アニメを見ていたそうだ。

とりあえず軽く注意するとシユンとなるほむらに萌えを感じてしまった。

しかし、あやつ合体アニメを見ていたのか。ほむらはそんなアニメ見たことないようだから新鮮なことだったに違いない。

「合体という単語にまどかのことを妄想してしまったは」

「ナニを妄想したのかあえて聞かないとして、それであの眼帯少女と美国……………みくに……………なんだっけ？」

「織莉子じゃないかしら？」

「あ、そんな感じ。そいつらに会った？」

「会ったら今度こそバズーカ砲で一掃してやったのに、全然来なかったわ」

ほむらは悔しそうに顔をしかめる。

言ってることがめちやくちや物騒だなオイ。

えっ？ オレも？

ハテ、ナンノコトヤラ。

「とにかく、まどかの情報は無しってことか……………やれやれどこにいるやら」

オレは背を向けてぼやいているとほむらがオレに声をかけた。

「この世界のまどかとは……………いなくなることはないのよね？」

「……………わかんねえ。外史は正史と違って抑止の存在や世界のルールがないんだ。た

ぶん、オレ達が介入しても鹿目まどかが死ぬことはないと思う」

「じゃあー」とほむらが咲く花のように笑った。

平行世界とは言え、彼女が死ぬことは許されないようだ。

「ま、目的は変わらずまどかを捜すことだ。何か手がかりはなかったか？」

「ないわ。……………でも」

「でもっ？」

「こつちのまどかの純粹さに癒されたわ」

「仕事しろや」

否定はしないけどな、それは。どこに置いていったんだろうあの純粹なまどかは。

こつちのまどかとトレードしたいと思う時もある。昔のお前らが恋しいよ。

……………でも、まあ今も嫌いじゃないけど。

「ふふ……………ツンデレね」

「うっせえ。とにかくまだまだ散策するぞ」

「はいはい」

まるで弟を見守る姉のような彼女の微笑みに照れながらオレは先へ進む。

……………いつものように明日を求めるように。

「あ、今日の寝床どうするか決めてないな」

「よし、まどかのお宅にこの巨大シャモジで突撃するわよ」

「いやするなよ。普通に迷惑だから」

どこからとってきたんだ『突撃テメーの晩ごはん』という巨大シャモジ。

第六十一話

天気はややくもり空。しかし青空がところどころ見えってるそんな天気だ。

昨日は佐倉のところで止めてもらい、そして今日オレとほむらは見滝原中学校に来ていた。

魔女の反応がその学校に出たらしく、オレとほむらは佐倉とゆまちゃんに付いていくことになったのだ。

その際にドコでもドアで来たのは言うまでもない。

「なんでママミのテリトリーに魔女結果が……………」

「さあね。だけど、ここに魔女がいて知らない一般人が巻き込まれてるのは事実だしな」
オレはそう言ってドコでもドアを展開する。ほむらは魔法で造り出した弓を持ち、頷く。

この弓矢はつい最近、重火器が使えなくなった彼女が初めてまともに覚えたクリエイト系の魔力の弓と矢だ。

モデルは間違いなくまどかの弓だろうな。

「んじゃ、オレ達はいいつらのいる教室に行くから」

「ちよつと待てよ。とか言いつつ実は魔女のところに行くんじゃないかねえの?」

「あいにく、オレ達が求めるものはグリーンフィードじゃない。だろ? ほむら」
「ええ」

疑う佐倉にそう答えてオレ達はドコでもドアで鹿目がいる教室の中へ向かった。

そこにいたのは白いマシユマロみたいな使い魔が現れていた魔女結界の中だった。

今、まさに早乙女先生を背中から襲おうとしていた。

「はいはいー全員席についてー」

「は?」

喰い殺そうとした早乙女先生を突き飛ばして、変わりに腕を噛みつかれた。

痛い。でも腕は喰いちぎられることも食い潰されることもなかった。

どんだけ丈夫なんだよオレの身体。

「みなさん、こんにちは。臨時講師の神威先生です。みなさんとは同期ですが気にしないでください。ちなみに教科は魔女討伐です」

「同じく朱美ほむらよ。字はこう書いて、曉美じゃなくて朱美よ。間違えないでも、その絶壁少女と一緒にしないでよ」

オレは腕をガジガジ噛まれながら、ほむらは黒板に字を書きながらそう名乗る。

ほかーんとクラス全員はオレ達を見ていた。

気のせいかもしれないが暁美が「なんでここにいるのよ!？」と言った顔で見ていたと思う。

あれ?　なんかミスった?

「それよりソラ、腕から血が流れているわ。大変。今すぐ犬の唾液で消毒しないと」

「なんであえて犬の唾液をチョイス?　消毒どころか変な病気に感染するわ」

「あなたの場合、感染した病気をレジストしそうだが」

「あれ、なんでわかったの?　昔、不治の病って呼ばれた病気をレジストしたのを」

「やっぱりあなたは人外よ……………」

呆れた顔でほむらにため息を吐かれた。

解せぬ。そして失礼な。うちの師匠はそんな病気をあえて感染して武器として戦っていたぞ。

「それよりいつまで嘔まれてるつもりなのよ。さっさとそのサンプルを使って授業を始めたさ」

「それもそうだな。イテーだろコノヤロー!!」

オレは使い魔の頭を思いきりぶん殴り、引き離れた。

それから使い魔を握り、教台に固定してナイフを取り出す。

「みなさん、魔女という生物を知っていますか?　知らない人はそこにいる美樹と鹿目

と曉美に聞くように。質問は後で聞き付けるから黙って今は聞いておけ。話を続けませんが、今回はその魔女の使い魔の生態を講義しようと思います」

そう言つて暴れる使い魔を腹部をブツ刺して解剖し始める。

「あら、神威先生。他の使い魔があなたに付いてますわ。意外にも使い魔にはモテモテね」

「あんまうれしくないけど……なるほど。道理で頭や首や足が痛いわけだ。とりあえず、他はいらないから消しといて」

「了解」

ほむらはそう答えて弓矢でオレに取り付いていた使い魔を一掃してくれた。

とりあえず授業を再開。使い魔は既に事切れており、解剖された腹部から黒い液体が垂れ流し状態であった。

「これが使い魔の体内です。ノートに取るのもよし、スマホで残すのもよし。自由に記録してください。あ、後この黒い液体は飲み物じゃありませんので飲まないように。ご飯と一緒に食べたならなんか鬱な食事になりますから」

「なんでそのことがわかるのよソラ」

「前世で若干シャルロットの黒い血を飲んでわかった」

キンコーンカンコーン。

チャイムが鳴り、オレは解剖した使い魔を窓ガラスが割れるほど投げ捨てて、ハンカチで手を拭いて言い出す。

「今日の授業は終わりです。では次の授業はほむら先生が行う『鹿目まどかの生態』があるのでみなさんがんばってくださいね」

「ビシビシいくわよん♪」

ほむらはウインクして授業は終了。退室、退室つと。

「ちよつと待って！　なんで私を研究対象にされてるの!?!」

オレが教室に出ようとする、鹿目がツッコんできた。チツ、バレたか。

ハツと我に帰った早乙女先生もオレに対して質問攻めを始めた。

「あなた達は何者ですか、なんで暁美さんが二人いるのですか、そもそも魔女と使い魔ってなんですか、先生ってなんですか、てかあなた達はどこの学校の人ですか!?!」

「うるさいですよ。いつも三ヶ月で彼氏としようもない理由でフラれる婚礼期を逃しそうで中沢くんに出しそうな勢いのある早乙女和子先生」

「なぜか辛辣な紹介!?!　てか、中沢くんを狙っていたのがなぜバレたのよ!?!」

「センセエ!?!」とどこかの男子生徒がツッコんでいる声が無視してオレは会話を続けた。

「みんなから陰でヒス子って呼ばれてますよ。いつもヒステリックに彼氏の話をしていますから」

「そんなはずはありません！ そうでしょ、みんな!？」

.....

シーンと静まる教室と目を逸らすクラス全員。

早乙女先生は段々と涙を浮かべる。

「あ、あれ？ そうなの？ 私って陰ではそう言われてるの？ やだ、目から汗が

.....」

「現実見ろよヒス子」

「うるさいわね！ 別に生徒に愚痴を言いたくて毎回授業の前に彼氏の話をしているんじゃないわよ！ どうやったら長続きするのよ！」

「理想が高い」

「妥協しない」

「だからフラれるんだ(の)よ」

オレとほむらの言葉をとどめに早乙女先生はORZになってしまった。

事実だろ。

「それより生徒を避難させろよヒス子。お前教師だろ。さつさと生徒を体育館に案内しろ」

「そんなことわかってわよオオオオオ!!」

逆ギレしながら早乙女先生は生徒達を体育館へ連れていく。

体育館には既に魔法で造った認識障害がある。人間以外には認識されない結界でな。

「さてオレ達も移動したいところだが……………」

「ちよつとあなた。髪型を変えなさい。私と同じ格好だとまどかが間違えるでしょ」

「お断りだわ絶壁さん。鹿目まどかが私を曉美ほむらと間違えようがソラとまどかに好

かれるこの美しい髪型を変えないわ。むしろ、美少女であるこの私と間違えられるだけ
光栄に思いなさい」

「黙りなさい。何様よあなた」

「ほむら様と呼びなさい絶壁」

「よろしい戦争だ」

「上等。かかつてこい」

とほむらが指をちよいちよいと挑発し、暁美は拳を構える。

……………なんだこの新旧タイトルマッチもどきは。

「オールドほむらちゃん対ニューほむらちゃんの対決に私の心は踊るよー」

「ちよつとまどか！　なんでこんな時にあんた目をキラキラさせてるの!？」

「さやかちゃん、古いヒーローと新しいヒーローの対決はいつだって心踊るものなんだ

よー！」

「いや確かに心踊るかもしれないけど、なんかアツチは重火器とか出してマジなんだけ

ど!？」

「ティヒヒヒ……………いいよお、いいよおほむらちゃん達。できればあの衣装が擦りき
れてセクシーシーンを見せてくれるのかなあ……………」

「戻ってきてまどか！　なんかあんたらしくくないわよ!？」

「まどかさん、写真は撮ってもよろしいですか!？」

「仁美、あんたもかアアアア!!」

唯一の常識的少女美樹は変態達にツッコむ。

……………確信したこともあるが

とりあえず、言わせてもらおう。

「なんだこのカオスは……………」

オレの眩きは銃撃戦の音でかき消されるのだった……………。

☆☆☆

それから暁美達と別れてオレ達は巴さんを探すことにした。行く先々は使い魔に襲われる一般生徒達。

無視したいけど目覚め悪いから助けてあげていた。

……………ホントに目覚め悪いから助けてるんだぞ？

「ツンデレごちそうさま」

「やかましい。お前も助けているじゃねえか」

「か、勘違いしないでよね！ 別にあなたのためじゃないからッ」

「モノホン初めて見たけど、なんか違和感あるよな」

「そうね。これは私のキャラじゃないわ」

「誰かを指名すると言えば杏子ね」と答えてマシユマロっぽい使い魔を射殺す。

串刺しつて………なかなかエゲツないこと。

「そう言うソラだつて握り潰したり、蹴り潰したりしてるじゃない。人で例えたらもはやグロ注意よ」

「いやなんか無駄にモチモチしてるから、こつちの方が手っ取り早いと思つて」
「せめて神器で討伐して」

呆れた顔でそう言うほむらに「はいはい」と答えた。

すると白い塊がオレ達の前に現れた。

「やあ、神器使い達だっけ？ はじめまして。僕は」

「失せろ」

「消えなさい」

「最後まで言わせてよ」

白い塊ことキュウベえを罵倒するオレ達。あんま時間かけたくないからイラだってるんだよ。

「ひどいじゃないか。君達は初対面に対して友好的にはならないのかい？」

「安心して。あなただけよ」

「感情を精神疾患扱いするバカ共にはお似合いの対応だ」

「わけがわからないよ」

問答無用。理解できないならそれまで。

オレ達はキュウベえを無視してそのまま先へ進もうとする。

「神威ソラ。君には魔法少女を元の普通の少女に戻れると言っていたね」

「まあな。魔女も戻せるぞ？」

「それはこちらとしてもいいことだ。だけど、魔法少女で無くならせる力はない。だから排除させてもらうよ」

キュウベえが何を言いたいのかわからなかった。こいつには戦闘能力がないはずだ。

だから排除できないと思った。

「ソラ、それでもなさそうよ」

ほむらが指さす方向には多数の魔法少女達が待ち構えていた。

……………そうだった。こいつは人を騙すことに関しては詐欺師レベルだったな。

「騙してないさ。単に君が魔法少女達にとって障害になると言っただけさ」

「思いつきり誤解招く言い方だなオイ。もういい。お前後でぶち殺す」

そう宣言してオレ達はそれぞれの得物を構える。

大方、この魔法少女達は『正義感の強い』ヤツらだろう。

「だけど、残念。ここは特撮現場でもなければ、ヒーローショーでもない——ただの戦場だ」

そう言う魔法少女達が一斉に向かってきた。

——上等。返り討ちにしてやるよ！

オレはそう思いながら立ち向かうのだった。

第六十二話

(??サイド)

暁美ほむらは自身の魔法で鹿目まどかを閉じ込めた。

一種の時間結界なモノだが、しばらく経てば消えていくだろう。
なぜ彼女がこのようなことをしたのかは明白な理由がある。

——これ以上、彼女を危害を加えさせないために

——この事件を決着をつけるために

そして………来るべき災厄を乗り越えるために、彼女を生きて帰すために——

「私は……にいる」

自分にそう言い聞かせて彼女は扉の奥へ進む。

ここに魔女がいるのかしら、と彼女は思っていると、目の前には二人の少女がいた。美国織莉子、呉キリカ。

彼女のたつた一人の友人を狙う敵だった。

「ようこそ」

美国織莉子は暁美ほむらを歓迎するようなことを言い出すが暁美ほむらの表情は変わらない。

「この魔女結界を解きなさい。あなた達が関与しているのでしょう?」

「何のことかしら?」

惚ける美国織莉子に暁美ほむらは沈黙しながら、あるモノを仕掛けた。

ボンッ!

彼女が得意とする爆撃である。当たれば確実に亡き者にする。

「あらあら怖い子ね。はじめから話し合うつもりなんてなかったでしょう?」

しかし爆撃に巻き込まれず、美国織莉子と呉キリカは健在していた。再び時間魔法と爆撃で仕掛けるが。

——当たらない?

不可解な現象に暁美ほむらは目を見張る。

そんな彼女に美国織莉子は口を開く。

「貴女のことは知っているわ。」

——あの場所に居た子。世界の終末に」

暁美ほむらの表情が変わる。

この女、なぜこのことを？

彼女はそう考えていると美国織莉子は話を続ける。

「私は何度も繰り返し返しあれを視ては現在いまを動かし、世界を救う方法を探した。——

そしてあれが何であったのか知った」

「……それが、それが理由で学校に結界を敷いたの？」

「驚いたわ。あなたは『あの場所にいた』貴女なのね」

そう答えると暁美ほむらは今度はグロックを取り出して美国織莉子に向けて放つ。

「ならば私の話が理解できるでしょう。終末を避けるため、世界を救うため鹿目まどかを排除する！」

しかしそれは呉キリカによつて防がれた。暁美ほむらの返答とも呼べるその行動に美国織莉子は嘆息を吐く。

「あれを見て尚、鹿目まどかを諦められないのね。残念だわ」

暁美ほむらの決意ある目は変わらない。

すると美国織莉子は別の方角を振り向く。

「あら。新しいお客様が来たわ。貴女方は私とお話ししてくださいのかしら？」

三人の少女——バمامミ、佐倉杏子、千歳ゆまが現れる。

「おかしいわね。どこにも魔女の姿がないわ」

「知ったことかよ。織莉子を倒して終いだが！ そうはいかないわ。まずこの結界をな

んとかきなきや」

バمامミと佐倉杏子は意見のぶつかり合いを始めて千歳ゆまはオロオロし始める。

それを見て美国織莉子は涙を浮かべる。

「……なんだい。今更べそをかいてごめんなさいってか？」

佐倉杏子の問いに美国織莉子は答える。

「……………可哀想にあの嘘吐きに騙されて真実に耳を貸そうとしない——哀れな子達」

美国織莉子はそう言うのと呉キリカは口を開いた。

「四対か……いや、あの鬼畜相手にも勝てなかった私は足手まといかな」

——魔法少女のままじゃね

その言葉に暁美ほむらと美国織莉子は気づいてしまった。呉キリカは続けて言い始める。

「そろそろだ織莉子。もう私は結界が張れるくらい引つ張られてるのだから」

「……………っ！」

「大丈夫。私は何になっても決して織莉子を傷つけない」

その言葉に暁美ほむらは確信した。

（まさか……………この結界を作っているのは）

呉キリカは最期の言葉を吐き続ける。

「いや、むしろこうなることでキミを護ることができれば、私は——安

らかに絶望できる！」

呉キリカのソウルジェムが飛び出し、そこから現れたのは——魔女。

「キリカ、真に絶望するのは貴女じゃない。真実を知るあの子達よ」

目を瞑れば彼女は思い出す。

議員の娘である美国織莉子の願いは自分の生きる意味を知りたいということだった。

彼女に張られたレットテルのせいでいつも彼女は『美国』の娘で個人として見られてい

なかつたのだ。

そして最悪なことに父親が汚職して自殺という最低最悪な結末により、彼女の信頼も失墜し孤独な毎日を過ごすこととなった。

そのとき現れたのがキュウベえだった。キュウベえは絶望した彼女に希望を与えて、それからまた絶望に落とせばいいという合理的な思考で契約に迫ったかもしれない。

美国織莉子はキュウベえと契約し、そしてこの世界の結末を知った。

(この世界を終わらせない。私が生きている理由——それはこの世界を救うことだ)

そう思いながら彼女は絶望した少女達の姿を——

「へーああやって魔女になるんだ」

「なんかヤダな」

「佐倉さん、魔法少女が魔女になること知ってたの？」

「まあな」

「そうだよー♪」

——訂正。絶望せずに談義していた。

「なんで絶望してないの貴女達!?!」

もはやツッコまねずにはいられなかった彼女は三人娘の答えに耳を疑った。

「神威ソラと朱美ほむらのお話しを聞いて」

「同じく。アタシの場合、見滝原中学校に行く時に」

「あ、ゆまもキョーコと同じく」

まさかのあの少年が関与していたとは誰も思わなかった。

そしてそれを聞いた暁美ほむらは「またか……………」と呟きながら手で顔を覆う。

「それより魔法少女から普通の少女に戻れるって聞いたけど、アタシはやだなー。この力、便利だし」

「あら。なら、うちに居候すればいいわよ。家事を覚えてアルバイトさえしていればうちに居させてあげるわ」

「ええー？ 働くのかよ……………」

「働かざる者食うべからずよ。あ、ゆまちちゃんは叔父にお願いして小学校くらい通いさせてくれるはずだわ」

「キョーコと離れないならそれでいいよ！」

「ふざけないで！」

と後の生活について話し合う三人娘に美国織莉子は声をあげた。

「魔法少女を元の少女に戻せる？ そんなご都合主義があるわけじゃないじゃない！」

「いや現に経験したとか言ってたぞアイツ」

「というか今の私、この力は魔力じゃなくて生命力で発動しているのよ。ちよつと目眩が……………」

「オイオイ、大丈夫かよ」

バママミは疲れていそうな顔で佐倉にもたれかかる。

それを見た美国織莉子は愕然とする。

「なんなのよ………なんなのよ貴女達！ どうして絶望しないのよー！」

絶望して魔女になった呉キリカのこともあつてか、彼女は声を荒げた。

すると千歳ゆまは口を開いた。

「ゆまはね。この事実を知つてね。いつかは魔女になるんだって思ったんだ。だけど、お兄ちゃんが言ってくれたんだ。

『いつかは今じゃない。人はいつか死ぬんだから、最期には笑つて過ごせるようにしようぜ』って。

その言葉にゆまは励まされたよ」

「あ、アタシも」

「私もよ。ほむらさんに慰められた後に言われたわ。いつも思い出しておけて。あの人、意外にお人好しじゃないかしら？」

「あ、なんかゆまもわかるー！」

そう言つて三人娘は笑顔を浮かべる。もはや彼女達には絶望という言葉はない。

希望に満ちあふれていた。

「……………誰がお人好しだ。オレはそんなもんじゃねえよ」

不服そうな声がした時、そこには神威ソラと朱美ほむらがいた。

「たくつ、あの小娘共。人がせつかく普通に戻してやったのにギャーギャー喚きやがって……………一人くらい魔女にしてやろうか！」

「とか言いながら一人残らず戻したくせに、全く相変わらずのツンデレねソラは」

「はいはい……………ツンデレで悪うございました」

軽口を言い出しながら彼は続けて美国織莉子に向かって言い出す。

「やっと追い付いたぞ美国織莉子……………。お前にたどり着くにはちよつとこの生徒を犠牲を出しちやつたが、追い付いたからには逃がさねえよ」

神威ソラと朱美ほむらはそれぞれの得物を構えて言い出す。

「……………ここから先は私達のゾーンよ」

「……………ここに入ったら、オレ達のルールだ。とつと終わらせてやるから覚悟しやがれ」

この物語にもはや悲劇はない。

ましてや、喜劇というわけでもない。

ただあるのは——英雄とその相棒が行う化け物退治である。

第六十三話

魔女結界。

それは魔女が造り出す趣味の部屋プライベートルームのようで胃袋にあたる結界である。

そんな空間にオレとほむらは魔女となった眼帯少女と美国織莉子と相對していた。

「覚悟しなさい。美国……………みくに……………オリゴ糖だったかしら?」

「違うわよ。えっと……………三和オー莉子だったかしら?」

「なに言ってるんだよ蒔田織莉子って言う名前だろ」

以上が上からほむら、巴さん、佐倉の順番でお送りする名前当てゲームである。

誰一人名前があっていないや。

「なんで貴女達にも忘れられてるのよ!?!」

思わずツツコむ彼女に、三人の少女達は答える

「いやだつてアタシ名前しか覚えてないし」

「ぶっちゃけ、覚えてもなんか意味なさそうと思つて……………」

「ソラの物忘れがうつつたのよ」

美国織莉子はプルプルと震えて、それからオレに向かつて指をさして言い出す。

「貴方のせいよ！ 彼女達、私の名前覚えてくれないじゃない！」
「ええー……………」

まさに理不尽である。責任転嫁である。ひどい女である。
名付けて、RSHである。由来はローマ字からの頭文字から。

「そう言うなよ世紀末英雄伝説、美国織莉子さん」

「だから私はそんなアダ名——ちよつと待つて。貴方、今なんて？」

「えっ？ 世紀末英雄伝説」

「違う。もつと先よ！」

「美国織莉子さんつてところ？」

美国さんは涙を浮かべてオレを見る。

えっ？ どしたの？

「やつと名前を……………名前を貴方に覚えてくれましたわ……………」

「えっ？ そんなにうれしいの？」

「当たり前です！ 覚えてくれないことがどんなに悲しいことか貴方にわかります！
間違えられる気持ちわかりますか!?!」

過去に何があったのかどうでもいいけど、なんかトラウマがあったみたいだ。

てか、魔女も腕を口元に抑えて感動しているし。

「シユールな光景ね……………」

「そだねー。あ、ほむらちゃん。こっちで私達を守ってね？」

「そんなの当たり前よ、まど……………か？ へ？」

暁美は「ヤッホー」と手をヒラヒラする鹿目を見て石のように固まった。

「なんでここにまどかがいるのよ!？」

「ティヒヒヒ、私の前では魔法なんてチョチョイのチョチョイだよ!」

「いや、何その某洗剤キャラみたいない方でナチュラルにここにいるのよ! あそこは安全だと思ってたのに!」

「いやー。でも気になって気になって、つい来ちゃった♪ ティヒ♪」

「いやついという勢いで来ないで! 心臓に悪いから!」

「許す!」

「あなたが言うの、もう一人の私!？」

困惑する暁美と小悪魔的笑顔で鹿目を許すほむら。

まさかこうもリアクションが違うとはな。

……………前世でどんだけ変わったのかよーーくわかった。

「あの……………一応シリアス展開なのだから、もっとシビアになってくれかしら……………? キリカも魔女になってるのに、さつきからオロオロしてるわよ!」

「いやすまん。あれが『あいつら』のスタンダードだから。ああやって場をカオスにするんだ……………いつも」

「ああ、なんてこと……………。もう諦めた目をしてるわこの人……………」

諦めを肝心なんです。

オレはそう思ってから「オホン」と息を吐き、それから言葉を続ける。

「さて仕切り直ししようぜ」

「いや仕切り直せるのこれ……………?」

「仕切り直ししようぜ!!」

「あ、強引だこの人」

頼むからツツコまないで。

さつきから後ろで暁美がほむらとまどかに何かされて悲鳴をあげてるから!

もうなんだよこのカオスは!!

『いやだいたいキミのせいだと私は思う』

「魔女がしゃべった!?!」

この日初めて敵と一緒にツッコんだ。
いやなんで魔女が喋れるの!?

☆☆☆

カオス的な現場は治まり、人語が話せるようになった眼帯少女こと呉キリカはなぜ話せるようになったのか説明する。

元々、キリカは望んで魔女になったものようだし、あと織莉子さんを認識できるようになっていた。

だから喋れるのも時間の問題だったようだ。

さすがが外史。予想外なことがあるところだ。

てか、前例のさやかと同じ現象だったわ。

魔女のさやかを元に戻した似たときと症状だよ、これ。

『とにかく仕切り直しだ織莉子！ 早くしないとシリアスがまたシリアルになっちゃう

よー!』

「ええ、そうね!」

「いや危惧すると、そこ!?!」

どうやら織莉子さん達は自分達のペースを守りたいみたいだ。

魔女であるキリカは次々に使い魔を呼び出し、埋め尽かささんばかりと出てきた。

「これはちとキツイな……………」。オイ、曉美。お前は鹿目を守れ。巴さんと佐倉、ゆまちゃんを使い魔を減らせてくれ」

「あなたは どうするつもり？」

「化け物には化け物が相手……………ってな」

オレはそう言いながら『団結せよ』でほむらの魔力を繋げる。

ほむらの魔力量は確かに多いが円環のまどかと比べるとあまり意味がない。

本来、これは魔力供給として扱われる魔法だからな。

だけど、オレは他の用途を見つけることができた。

「いくわよソラ。『団結せよ』……………開始」

ほむらもまたオレの魔力を繋げる。すると、オレ達に変化が起きる。

銀髪だったオレの髪が黒くなり、ほむらの黒髪が銀髪へと変わる。

———そう、これが『団結せよ』の新しい使い方。

「名付けて『シンクロ』ってところかな？」

「あらやだ。銀髪になるなんて私も不良になったものね」

「いや自衛隊から重火器盗んでたお前は既に不良って言えるレベルじゃねえから」
軽口を叩き合いながらオレ達は続けて言い出す。

「いくぞ相棒！」

「ええ！」

全ては鹿目まどかのために……………。

オレ達と戦いは始まった。

☆☆☆

シンクロ——それはお互いに『コレクト団結せよ』を使い、繋いだ者の特性を得るとい
オレが作り出した魔法だ。

今のオレには『全てを開く者』だけでなく、ほむらの『時をかけるカード』の力も使
える。

と言っても長時間の展開は無理だから早いとこ決着つけようと思う。

オレは魔女と戦い、ほむらは織莉子さんと戦うことで決めて駆け出す。

「【アクセル】！」

オレはまず時間魔法で走る速さを加速させ、魔女に向かっていく。

そのとき織莉子さんがオレに向かって水晶球の魔力弾を放つ。

「そうはさせないわ」

ほむらはそう言つてそれを『全てを開く者』の力を乗せた弓矢でキャンセルした。

キャンセルされた魔力弾は完全に消滅する。仮に巴さんのようなリボンを再利用す

る特性があつてもこれならば、後ろからやられる心配はない。

「らア!!」

オレはそのまま魔女に斬り込む。魔女は両手の鎌のようなもので防御した。

『く、う……………なんて力なんだキミは!』

「はっはっはっ、伊達に魔女の腹に突っ込んでそこから這い出たことがあるんだぜ!」

『いやそれどんな倒し方!? それ聞いたら私、どうなっちゃうの!』

「……………ニヤリ」

『ちよっ、何その邪悪な笑み!? 全然、救いのヒーローに見えないんだけど!』

なにを誤解しているのか知らないがオレは救いのヒーローじゃありません。

敵を徹底的蹂躪する英雄です。

そう思いながら攻撃を続ける。

右から左へ、左から右へと斬りかかるがなかなか当たらない。

まあ、往來の魔女とは違って、女性の身体をそのまま縦に複数くつつけたスリムな魔女だから意外と速いんだよねこれが。

そうこうしていると今度は魔女がオレに斬り込む。

【停止】

時間は止まり、モノクロの世界へ。

ほむらの時間停止である。唯一の欠点はほむらと違って十秒以内しか停止できないことである。

オレはその場を放れてから、そのまま時間切れで停止は解除する。

魔女は目標を失ってキョロキョロするがオレは悪そうな笑みと目を光らせて、そのまま織莉子さんのところへ蹴り飛ばす。

うむ、会心の一撃である。

『うわアアアア織莉子避けてエエエエ!!』

ほむらと撃ち合いをしていた織莉子さんがそのまま巻き込まれそうなところをその場を飛んで回避。

壁らしきものに魔女がぶつかりフラフラと立ち上がる。

チツ、あともう少しでまとめて潰せたのに。

「容赦ないわねソラ」

「当たり前だ。向かってくるヤツは徹底的に潰す。文字通りにしてやろうとしたのに運が良いヤツらだこと」

「そうね。特に彼女の予知は厄介ね。先回りされて逆に追い詰められそうになったところであなたが飛ばしてくれて助かったわ」

「ありがとう」と呟いてからほむらは再び構える。

「どうやら相手はまだまだやるつもりだ。」

「決着の時だ。ほむら！」

「ええー！」

オレはそう言つて今度は織莉子さんに向かって駆け出す。

魔女のキリカはそれから守ろうと織莉子さんの前が出るが——狙い通り。

「っ?! キリカ、そこから離れて!」

織莉子さんは予知で気づいたがもう遅い。

ほむらから放たれた弓矢が魔女に突き刺さる。

——さて問題だ。この弓矢はどんな特性があつたかな？

正解は魔女の身体の変化に現れた。

魔法の姿が消えて、グリーンフィードが現れた。そして、そのグリーンフィードはそのまま吸い込まれるかのように呉キラカの肉体へと還っていった。

「まさか……………そんな!」

「そういうことさ。オレの神器は魔法を普通の少女に戻せる力がある。そして今リンクで繋がっているほむらはそれが使えるんだよ」

オレはキラカからこちらへ振り向く織莉子さんに向かって、言葉を続ける。

「運命は線路みたいなもんだ。都合のいいような行き先にはいかないかもしれないし、線路（運命）はねじ曲げることとはできない」

だけど、と彼は続ける。

「ポイントを切り替えることで何かが変わるんだ。行き着く結末駅が違うように————結果は変わるんだ」

オレは神器を振り上げる。

「変えられない未来があるなら、変えられない運命があるなら————まずそのルールをぶち壊してやるよ!!」

オレは織莉子さんを上から斬った。彼女はそのまま目を瞑り、そしてそのソウルジェムが彼女の身体の中へ消えた……………。

「ソゲフさんもびつくりな決めセリフだね。私、ジュンと来ちやった♪」
「まどか、最後の最後でそれは台無し発言よ……………」

鹿目の最後の発言は聞かなかったことにしたいよホント。

……………さて、さっさ『ヤツ』をあぶり出すか。

第六十四話

さて魔女結界は消えて、織莉子さんとキリカを縛り上げて一件落着
と思われた。

「なんで魔女結界が解除されないのかしら？」

「一応、キリカが人間的な魔女だからじゃない？」

「よし、殺るわよ」

「やめんかい」

とりあえず、バズーカ砲を取り出すほむらを止める。

悔しそうにオレ達を見るが無駄だ。

そのバインドは圧倒的なものでない限り、力技でやっても解けないようにしているし、何よりもうこいつらは魔法少女じゃないから無理だろう。

「さてとさっさと仕事するか」

後ろ頭を掻きながらオレは神器を――

——鹿目まどかに向けた。

「えっ?」

「な、何をしているのよ!」

最初に反応したのは曉美だった。それもそうだと守ろうとした少女に矛を向けているからな。

「……………ずっと疑問に思ってたんだ。ときどき鹿目の言動がオレ達の知るまどかに似ていることが」

「ちよつ、ちよつと待つて。私がソラくんの知る私に似ていたって? そんなわけない

よ。私はいつも通りだよ!」

「……………ごめなさいまどか。それはフォローできないわ」
「ほむらちゃん!?!」

ガンとショックを受けるまどか。

いや、それ仕方ないだろ。

あんな淫乱と愉悦を求める者はオレ達の知るまどかしかいねえから。

前世のまどからしくないから。

「それにまだあるぞ?」

「な、何かな? 私、別に変なこと——」

「わからないか? お前はなんで今、オレを『神威くん』から『ソラくん』って言い変えた………朱美まどか!」

オレはそう言つて神器で斬りかかる。

——するとどうだろうか。

魔法少女でもない普通の少女がその場を後退して回避したではないか。

その動きは歴戦の戦士に等しいものだった。

「ティヒヒヒ、バレちゃったみたいだねー。さっすが私の嫁だね!」

「ま、まどか?」

「ノンノン。私は鹿目まどかじゃありません♪ 私の名前は朱美まどか。朱美ほむらの双子の妹です♪」

困惑する曉美にまどかはチツチツと指を振り否定した。

「それにしてもよく気づいたねー。私が鹿目まどかの中にいることを」

「なんで鹿目まどかの中にいるって気づいたのは簡単だ。ここが平行世界——そう
だろ？」

「そだね。まさしくルール通りってことだね。まあほむらちゃんが憑依しなかったのは
イレギュラーだったみたいだけど」

カラカラと笑うまどかにオレは呆れた顔をしていたと思う。

「でも久しぶりにパパとママの娘になれたし、たつくと会えた。………充分な幸せ
だったよ」

「恋しいか？」

「ううん、恋しい気持ちあるけどもう未練がないよ。円環の理になってから私は寂しい
ことに慣れてたから」

その言葉は聞いた者には悲しそうに聞こえるが、オレとほむらには「大丈夫だから」と
いう気持ちで伝わった。

——なぜなら彼女はもう一人じゃないから

——オレ達が隣にいるから

だから大丈夫。そう断言できる。

「そしてたつくんの萌え萌えなコスプレ写真撮れたし!!」

「ちよつとこつち来ようか」

オレは彼女が取り出したカメラを奪って問答無用に握り潰した。

たつくんの黒歴史は守られたのだ。

まどかがさめさめ泣いていたけど。

☆☆☆

それからほむらはまどかを鹿目から切り離し、概念ではなく実体化させた。

鹿目はもう一人のキヤラ崩壊にフラフラしていたな。

さて朱美まどかを見つけたことだし、あとは大団円を迎えるだけだ。

「出てこいよキュウベえ」

「やれやれ、こちらとしてはどちらもやられていたらよかったのだけど」

白いナマモノが姿を現した。

「オレをそこらの魔女や魔法少女と一緒にすんな。ただでさえ、化け物共とドンパチばっかりな毎日をしてたからな」

「そんな日常で生き残れた君にはわけがわからないよ。本当に何者なんだい？」
ガラス玉のような目をしたこいつにオレはいつものように答えた。

『無血の死神』神威ソラだ。ここにはない次元で英雄って呼ばれてるからな」

それを聞いたこの世界の魔法少女達は驚愕していた。キュウベえのみ興味深そうにオレを見ていたが。

「なかなか興味が沸くね。その別次元から来たというところが。ぜひとも紹介してほしいものだよ」

「あいにく紹介するつもりはないし、それに——手遅れだよお前は」

オレはそう言つてドコでもドアを展開した。

行き先？ そんなもん決まつてる。

「んじや、インキュベーターの母星に向けて。……………まどか、頼む」

「オツケー!!」

オレがニタリと笑いながらまどかにそう言うと、まどかは女神モードになり弓を構える。

ドコでもドアが開くとそこには見たことのない星があった。

ドアからはスングイ吸引力が起きてるけど。

「一矢一殺。……………ぶつとんじやえ♪」

弓が引かれて流星群のごとく、その星に降り注ぎ——そして遂には崩壊した。

それを確認したオレはドアを消すと、まどかとほむらは「イエーイ♪」とハイタッチする。

これで魔法少女システムとインキュベータの量産ができない。

「ななな、なんてことをしてくれたんだ!」

「およ? 端末のお前まだ生きてるんだ」

青い顔をするキュウベえにオレはキョトンとした顔でヤツを見る。

ま、どーでもいいか。

「こんなことすれば宇宙の寿命が!」

「んなもん、終わらせていいだろ」

「なっ!?!」

驚いた顔をするキュウベえを無視して、オレは言葉が続ける。

「だって宇宙に寿命があるなんて実感ないし、それは今じゃないだろ? なら、問題ないだろ。命はいずれ終わるモノなのだから」

終わりは誰だってある。

だからそれまで必死に生きて、泣いて、笑って、怒って、喜んで、最期には「生きて

いてよかった」と言えるように過ごしていくものだから。

「ぶつちやけ、お前がすることはただの生存本能と自己満足だ。大義名分掲げているけど、お前らは単にしていることは死にかけて今にも苦しそうになつて命を無理矢理生かそうしているものだ」

オレはそう言つて、キュウベえが文句を言い出す前に神器へ挿し込む。

「僕はこんなんじや」

「死なないだろ？ だけどなあ——お前の意識を閉じれるだろう？」

この神器で統合意識体であるインキュベータの意識を閉じればどうなるのかなあ——？

オレの言葉を聞いてキュウベえは顔を真っ青にして言葉を出す。

「や、やめ……………」

「おつ、最期の最後で命乞いかい？ だけど残念。——……………お前は絶対殺すつて宣言したのだから」

ニコリと笑つてオレはそいつの意識を『閉じた』。

意識を失つたキュウベえは人形のように動かなくなつた。

「知つてたかキュウベえ。命乞いって恐怖という感情から来るもんだぜ？」

もう動かなくなつた人形にそう言つて背中を向けた。

——よかつたなキュウベえ。感情を持って……………。

そんな皮肉を吐きながらオレはキュウベえを魔法で消滅するのだった。

こうして、この物語はエピローグを迎える。

第六十五話

エピローグ的な話をすれば、暁美達は日常というものを取り戻し、学校も再開された。見滝原中学校で行方不明者が少数ながら出た事件だが、なぜか誰も『首謀者』を覚えていないようだ。

不思議だなあー。

「とか言いつつソラが記憶操作したからでしょ」

「あり？ バレた？」

ま、敵とは言え、アフターサービスみたいなことをさせてもらったわけだ。

誰のことかかって？ わかってるだろ？

「ま、織莉子さんやキリカの記憶してここに転校させたからなあ。キリカの魔女としての衝動も一般社会にはあんまり影響なさそうだし」

「それで結局助けたのね」

「あくまでオレの気まぐれさ。……………別にいいだろ」

オレはそう言っただけでほむらとまどかからそっぽを向いた。後ろにいる彼女達からクスクスと笑い声が出ている。

………笑うなよ。

「ごめんごめん。それでソラくん、次はどこにいく?」

「マミさん達がいるところさ。あいつらの居場所は異世界だ。…何が起きるかわからないが………それでもいくよな?」

「当然♪」

彼女の返答を聞き、オレはドコでもドアを展開した。

屋上からオレはふと、暁美と鹿目達が織莉子さんとキリカにバツタリ遭遇する光景を見た。

そこには険悪な雰囲気はなく、仲が良さそうな光景を見てオレは呟いた。

「よかったな………幸せになれよ、みんな」

——それは前世のオレが求めた光景

——果たせなかった結末を果たせたことにオレは満たされて、オレ達はこの世界から出ていった

『あ……………』

『どうしたの、ほむらちゃん？』

『……………いえ、誰かがこちらを見て笑っていた気がするの』

『うれしそうだね♪』

『うん……………だって笑っていた人はきつと……………』

彼女達の会話はオレには聞こえていない。だけどそんな会話をしているんじゃないかと思っている。

———そんな終わりを迎えるのだった。

(??サイド)

真つ白な空間にて、大きなテーブルに席をつく三人の女性がいた。彼女達は水晶球からソラ達の様子を見ていた。

「ククク……………そう終わらせるといふわけか。やるじゃないかい英雄」

「……………」

「おや？ 不服かい？」

「ええ……………あんなやりたい放題な外史を見せられたら気分が悪いわ」

「まあ、なあ……………。そりゃあ、お前の分身みたいなものだからなあ。なあ、

美国織莉子さん」

女神は不敵に笑いながら、どこか不機嫌そうな美国織莉子を見ていた。

そう美国織莉子と呉キリカは確かにほむらの世界にも存在したのだ。

彼女達はソラと遭遇しなかった理由はある事件でソウルジエムを破壊されて死を迎えたからだ。

そしてその死後、管理人として生まれ変わり、外史を見守る役割を持ったのだ。

ただ美国織莉子は名前を改名し、本来の名はプライベートでしか名乗らないようにしていた。

「その名は随分と懐かしいわね。今は別の名前で呼ばれているのに、なぜ今となって呼ぶのかしら?」

「単なる気分さ。にしても正史の暁美ほむらに『忘れ去られた』ってのは意外だったな。ま、数あるループのうちにあつたたつた一つの結末だったかしらねえ?」

「知らないわ。そんなこと今はどうでもいいもの」

美国織莉子は席を立ち、扉があるところまで行つた。

「管理人の仕事かい?」

「ええ。『彼』^{あの子}の外史は全て終わらせたし、後は『彼』^{あの子}を元の世界に還すだけよ」

「おやおや、随分とお気に入りみたいじゃないかい」

「当たり前よ。だって彼は私達の『切り札』ですもの。おかげで安定した形で終末を迎えたわ」

「お前がそこまで言えるほど男か……。ぜひとも見てみたいものだ」

舌舐めずりをする女神に織莉子は呆れながら嘆息を吐いた。

「あげないわよ。だからちよつかい出さないで」

「おやおや……。アタシは別にちよつかい出そうとは思ってないわよ?」

「捕食者みたいな目でどの口を言うのかしら」

やれやれと言いながら彼女はその世界から出ていった。

「うーむ、不機嫌だねー。全く別にいいじゃないかい。そちらの英雄を遊び相手にしても……………」

「まあまあ、織莉子にとって——いや管路にとって彼は最高の人材だから」

「と言いつつテーパールに鍵爪立てないでくれないかい。それ、一応高いんだからキリカ」
鍵爪を立てながらキリカは歯を食い縛りながら涙をタパーと流す。

「うう……………だつて織莉子が……………織莉子が知らない男に執心なんて……………」

「そういえば一目惚れとか言つてたわね……………」

「これが……………ネトラレつてヤツなんだね……………。美樹さやかはこんな感じだったんだ……………」

「いや元からアンタら付き合つても結婚とかしてないでしょ」

「だけどこの感じ……………いい！　こう虚無感があつて、大切な者がスウツて抜ける感じが！」

「アブノーマルだなオイ!？」

「なんでこうなったのかしら」と女神は嘆息を吐いた。

昔は普通だったのに、どこから現れたノエルという神器使いによつてDMの変態化したそうだ。

たまに一人で縛つて放置プレイを楽しむのが最近の日課だったりする。

余談だが当初、これによって織莉子は胃薬を大量に購入することになったそうだ。
変態マジスゲーと苦笑していた記憶が今や懐かしい。

「つーか、さっさと追いなさいよ。アンタあの子のボディガードでしょ」

「ハッ、いけない！ このままでは織莉子にお仕置きされてしまう！ ……………あ、でもそれも……………」

「はよ行け！」

女神はそう言ってキリカを蹴り飛ばした。イスから飛ばされてそのまま扉にぶつかったが、彼女は息を荒くさせて興奮していた。

こうかはいまひとつのようだ。

というテロップが流れていたと女神は思いながらキリカを立たせる。

「ハアハア……………なかなかよかった！」

「なんかソラの気持ちかわかってきたわ。……………そりゃ、大変よこれは」

「失礼な。でも織莉子が不機嫌になる理由はわかると思うよ」

「どうして？」と女神が聞くとキリカは答えた。

「ほら、私達って最期は不幸せだったじゃん。分身みたいな者が幸せになって自分が不

幸になるってなんか気に入らないじゃん」

「それもそうね。わかる気がするわ」

「でも同時にこう思ってるじゃないかな？」

——もう一人の私を幸せに導

いてくれてありがとうってね。私も実はそう思っているんだよねーこれが♪」

ニシシと笑うキリカがそう推測するが、女神もそう思っていた。

彼女はここに出るとき、最後は口元を緩ませていたところを見たから……………。

「んじゃ、行つてきまーす。お土産話を楽しみにしててね」

そう言いながらキリカは扉を開けた——

「あ、織莉子からさつきラインが届いたんだけど。仕返しにソラの行き先をハイスクールなどころに変更したって」

「あのヤロー……………」

キリカの発言に女神は拳を固くした。

(ソラサイド)

「で？ それがおレ達が悪魔や墮天使や天使がいる世界にいる理由？」

『そーゆうこつた。……………すまないねホント』

スマホから女神の謝罪の言葉を聞いて、ありがとうと答えて通話をきった。

なるほどねー。んじゃ、ほむら、まどか。

いつせーの言うぞ？

はい、いつせーのーで！

「「あんのオリゴ糖めエエエエエエエエエエ!!」」

冥界という場所の空でオレは美国織莉子が笑顔でサムアップする幻覚が見えた気がした。

ちなみにその世界から出れたのは約一年間である……………。

ここにも戦争があつて参加するはめになろうとは……………。

(??サイド)

とある少女が送還術により戻つてきた。その少女はソラがいた外史にて彼を見守つていた少女である。

外史では四、五歳前後の肉体だったが、実年齢は九歳だった。しかも前世の年齢を合わせるそろそろ中学三年あたりである。そんな彼女の服装はフリフリの猫耳パーカの魔法少女の衣装である。

「ただいまー。うーん、久しぶりに子どもの気分を味わえたよー♪」

「ごくろうさま。君のおかげでソラが無事なことがよくわかつたよ♪」

彼女と会話していたのは白衣を着た『混沌』をつかさどる神器使い——天ヶ瀬千香である。

今の彼女はやや女性に近づいた体系であり、肩にかかる長さの短髪の髪型にしてい

た。

「それにしてもあのお兄ちゃん、強かったなあ。どうやったらあんなに強くなれるのかな？」

「H A H A H A、その前に君は子どもっぽい口調を直さないかね。中学三年くらいの年齢でそれは恥ずかしいよ？」

「子どもじゃないもん!!」

ベーと少女は千香に向かって言った。そんなところを見て千香は「まだまだ子どもだなあ」と微笑むのだった。

「それじゃあ、しばらくゆっくりしていいよ——

「はーん♪」
—— 『ゆま』 ちゃん♪ もうすぐに『彼』は完成するから♪」

—— 物語は止まらない。彼女の登場は必然である。

閑話　なのはちやんがなのはさん——じやなかつた
『なのは様』に変わるまで

(はやてサイド)

ソラくんがここから去ってから一ヶ月後、中学を入学して楽しく過ごすはずの私達だったが、なのはちやんだなけは病院にいた。

理由は天宮草太を捜すためにあらゆる任務をこなしていた。

小さな情報でも彼女は天宮草太に関すること全ての任務へ没頭していた。しかし、休み無しのぶつ通しな毎日のため徐々に疲労が溜まり、そしてその任務帰りにアンノウンに襲撃されて——墜ちた。

重傷を負った彼女は目を覚ますことなく、未だに眠りについていった。

フエイトちゃんはその看病のため、仕事帰りに毎日寄っていた。そのため、昨日行われた執務官の試験が落ちたそうだ。

悪いことばかりで私は思わずため息を吐いてしまった。

私は現在、衛くんと一緒に病院にいた。なのはちやんの様子を見るためにや。

成長してからの衛くんは普段は細い身体に見えるが脱いだらすごい。極めつけに大人モードはモリモリや。筋肉がビツシリやったで。

中一でこれだけの筋肉ある男子はそんなにいないやろな。

ちなみに私達も成長しとる。一番成長しとつたのはフェイトちゃんやな。

なんやねん、あのおっぱい。うらやまけしからんから何度も揉んだで。

柔らかさ弾力は素晴らしかったと言っておこう。

さて、話を戻すで。私は花瓶の花を替えるためにいつもの花束を持っているが、衛くんは月刊『マツスラーズ』という謎の雑誌を持っていた。

もしなのはちゃんが目を覚ましていたら渡すつもりらしい。

オイこら。なのはちゃんを筋肉フェチにするつもりか、あんたは。

「何を言う。筋肉こそがあらゆる病魔に対抗できる人間の武器だぞ！」

「知らんがな。てか、絶対なのはちゃんは筋肉信者にさせへん。あんたが捕まえた犯罪者達のような信者にさせへん」

「彼らの事情聴取に私の演説を聞かせただけだぞ」

「それで刑務所が筋肉を育てるジムへ変換したことを忘れてへんか？」

そんな劇的ピフォアフターは嫌やで。この間、その刑務所行つてダイナマイトボ

デイの署長を見たときはビビった。

すごく遅い胸筋やつたと追記しておく……………。

私はまたため息を吐きながら、親友の病室を開けた。

「なのはちゃん、起きとるー？　ってまだ寝とるから仕方——」

「あ。おはようはやてちゃん」

「——な……………い、で。……………へ？」

なのはちゃんがは起きていた。ミイラのように包帯が包まれているが、しつかり起きていた。

そんな……………これは、まさに——

「筋肉だ!!　筋肉が高町を起こしたのだ!」

「んなわけあるかい、ドアホ!!」

せつかくの感動を台無しにしたアホにツッコむ私だった。

☆☆☆

なのはちゃんが目が覚めたが彼女の傷はリンカーコアにまで影響していた。

もしかしたら、もう魔法が使えなくなってるかもしれないという可能性があった。

なのはちゃんはそれを聞いて絶望した。私達がお見舞いに来る度に痛々しいくらい
の作り笑顔で出迎える毎日だった。

こんなときに天宮くんがいたら、どうしたんだろうと時々考えてしまう。

私は放課後の屋上で、天宮くんならなんとかしたんじゃないやろかと衛くんに聞いて
みた。

「さあな。結果は違うかもしれぬが高町は変わらぬままだろうよ。高町は我が友曰く、
『臆病者』だ」

「なのはちゃんが臆病者？ でもなのはちゃんつて……」

「戦うときは勇敢に見えるが、それは彼女の廻りに仲間がいたからだ。ヤツはそれを失
うことを恐れて、真つ先に自分から誰かを守ろうとしていた。つまり、逆に言えば、誰
かが自分から離れることを恐れているのだ」

「私達は別に離れていくつもり……」

「ない、だろうな。しかし、高町はそうとは思えぬ。なぜなら、彼女は知っているのだ。
いや、植え付けられていると言ってもいいだろう。彼女は『孤独』という寂しさを知っ
ている。さらに『死』という予想外な形で離れていくことを知っている。土郎さんが一
時期大変だったことを踏まえて、な……」

反論できへんかった。私も孤独を知っていたからや。

—— 寂しいことは辛い

—— 誰かがいないということとは空しい

孤独は人を弱くさせるモノやった。ママさんもそういうことを話していたことがあった。

あの人も理解者がいない毎日を過ごしていたみたいで孤独やった。

誰もいないということとはとても悲しくて寂しいことや。

「ヤツは魔法があるから自分を見てくれる、認めてくれると勘違いしている。魔法の依存から抜け出さない限り、ヤツはあのままだろうよ」

衛くんはそう言つて青空を見ていた。まるで、誰かを想っているように見えたのは私は気のせいじゃないと思つた。

☆☆☆

それからさらに一ヶ月後。なのはちゃんは何かを決意してリハビリを始めた。

原因はフェイトちゃんの激励だった。

『立って前を歩け。あなたには立派な足があるじゃないか』

その言葉になのはちゃんに火がついたんじゃないかと桃子さんは言っていた。

衛くんの言った通りに魔法の依存から抜け出せていないようだけど、私はこれでいいと思う。

なのはちゃんが元気になればいいと思っていたからだ。けど、衛くんは微妙に不満そうな表情だった。

どうも彼としては根本的な解決がまだじゃないのかと思っっているようだ。

まあ、あんまり気にしていないそうやったし。

それから中学三年になったある日、遂に天宮くんの情報が入ったそうだ。

彼がいる次元世界を管理局は発見したそうだ。

なのはちゃんとフェイトちゃんはその情報を頼りにその世界に向かったそうだ。

なのはちゃんはまだ完全に魔法が使える状態ではないため、一応衛くんも護衛として一緒に行った。ちよつとなのはちゃんに衛くんを取られることを嫉妬したけど、彼女達の初恋の人が見つかってホンマによかったと思うわ。

私は彼らが喜んで帰ってくると期待した。

だが——それが——失敗やと、気づいて——いなかっただが——

なのはちゃんを天宮くんを迎えに行った翌日、再び入院した。身体は無事で、リンカーコアは影響もない。

問題はどこの病院に入院したかという話だ。

まさか……まさか精神科の専門病院に入院するとは思わなかった……。

フェイトちゃんも同様だった。しばらく入院という名の引きこもりとなり、病室から出てこなかった。

おまけに天宮くんを迎えに行った局員全員が心を病んで精神科に入院した。いわゆる鬱状態やった。

唯一無事やった衛くんに事情を聞いてみた。

すると、彼は言った。

「……………我はホントに筋肉バカでよかった。あれは常人にはキツすぎる……………」

ホンマに何があつたんや!?

「思わずそうツッコむと衛くんはとある写真を見せてくれた。どうやら天宮くんがいる次元世界の写真だった。

私はそれを見て理解した。

……………なのはちゃん、ご愁傷さま。

その写真に写っていたのは変わり果てた天宮くんやった……………。

つまり、なのはちゃんは予想の斜め上をいく失恋をしたんや。

閑話休題

なのはちゃんが退院してから私と衛くんは病院の屋上に呼び出された。フエイトちゃんは未だに引きこもりになっている。

なんか、怪しい漫画を集め始めているとクロノくんは言っていたが、私にはどないし

ようもない。あんなトラウマを見せられたらしばらく放って置きたいで。

「はやてちゃん、私ね。気づいたの。私にとって魔法がどういものかを」

「なのはちゃん、もしかして……………」

変わり果てた天宮くんの再会という失恋で彼女は自分にとっての魔法がどういものかとなのかを悟ったようだ。

私は衛くんと言った通りに気づいたことが嬉しかった。

しかし、肝心の衛くんは無言で目を瞑って腕を組んだままだ。

「私にとって魔法はね……………」

「うんうん！」

「快樂を得るモノだったのお……………♪」

……………え？

今、彼女はなんと言ったのか理解できなかった。

私はもう一度聞くと、恍惚した表情で彼女は語りだした。

「私は魔法で空を飛ぶことが好きだったけど、最近になつて誰かを撃ち落とすことがもうサイツツッコウに楽しくなつてたんだ！ それには最初は否定していたよ？ そんなのおかしいから。

——でも砲撃を放つ度の爽快感がだんだんと堪らなくなつてきて否定するのはもうやめたよ！ 神威くんが言つてたように私は変わろうと思うの！」

「なんでやねん！」

なのはちゃんの『私、生まれ変わります宣言』にツツコむ。予想の斜め上になつておつた！

しかもこれからのことを考えるととんでもないことをカミングアウトしとつた！

主に犯人確保の方面で！

「なんでそないなこと考えるようになったんや!？」

「天宮くんを撃ち落としてから。——スカッとしたなあ♪」

「だろうね！　いろんな意味で！」

まさか失恋でなのはちゃんがおかしくなろうとは思ってもみなかった。

こんな形で変態が感染するとは思わなかった！

「あはははははは♪　これからもバンバン撃ち落とすよ。楽しい楽しい砲撃の始まりなのです、にばー☆」

「なんか知らへんけどなのはちゃんが変になったアアアアアア!？」

なのはちゃんの後ろに角が生えた巫女のスタンドが見えた気がした。しかも『あうあう』と唸っているし、頼りない。

私が愕然している中で、衛くんが肩を叩いて言った。

「ようこそ、イロモノワールドへ」

「やっかましいわボケエエエエ!!」

私のシャウトが綺麗な青空に響き渡るのだった……………。

なお、フエイトちゃんが退院したとき彼女もまたなのはちゃんと同じように私達を呼び出した。

————そのとき彼女がシヨタとロリに目覚めていたとは思いませんでした………。

第六十六話

(??サイド)

とある森の中で騎士甲冑を纏った兵士達と黒のコートを着た黒髪黒目の少年が黒い片手剣を構えていた。

キリト・ユウキは精霊部隊に囲まれていた。

彼は大切な幼馴染みを取り戻すために妖精の国に不法入国した。

だが、それを遮るかのようにこのように妖精の騎士達が現れ、戦いの毎日をごっこしていった。

捕まれば牢獄。最悪殺されることだつてある。

だから彼はこのように戦つては逃げ、逃げては戦う毎日をごっこした。

そんなイタチごっこが一年間続き、遂に追い込まれてしまった。今は亡き、師に育てられたとは言え、精神的にも体力的にも限界は近づいていた。

「遂に追い込んだぞ『黒の剣士』！」

「同胞達の無念を晴らしてみせる！」

数は三十人前後。このままでは確実に捕まる。

キリトはそう思いながらも黒い剣を握る。

するとどこからかドアが現れ、そこから二人の少女と一人の少年が現れた。

「あのヤロー、よくも着替えを隠しやがって………。おかげで変な服を着ることに
なつて、みんなから爆笑されたじゃねえか!!」

「ふふ、ソラ。かわいかったわよ」

「そうだねー。特に着ぐるみのソラくんってなんか新鮮だったよ♪」

こんな緊迫した状況の中で現れたのまだ自分と変わらない歳の少年少女達だった。

キリトは会話する三人に「ヤバイ」と思つて向けて警告した。

「おい、その三人！ 早くここから逃げるんだ！」

「はっ！ 今さら遅いぜ！」

そう言つて精霊部隊の一人がピンクの髪少女に羽を飛ばたかせながら向かつてきた。
た。

ピンク少女はそれに気づいて――

「きやつ、害虫」

「ぶげら!!」

顔面ワンパンで部隊の男を殴り飛ばした。それを見た三人以外の全員が目を見張った。それだ。

「それもそうだ。いかにも無害そうな少女がワンパンで兵士を殴り飛ばしたのだ。それも害虫と呼んで……………」。

「うう……………ほむらちゃん、タオルない？ 汚れが落ちないよ……………」

「かわいいそうに。ほら、ハンカチよ」

「とか言いながらオレの服を差し出すな」

漫才している彼と彼女達に今度は二人の兵士達が少年に斬りかかってきた。

銀髪の少年はそれを見て嘆息を吐いた。

「やれやれ……………どうやら物騒なところにきたようだねー」

と言いながら斬りかかってきた兵士の一人を蹴り飛ばし、もう一人を殴り飛ばした。

その間、約三秒。

——強い

キリトは純粹にそう思った。たった数秒で倒したこの少年は自分の同等……………いやそれ以上かもしれない。

さてと、銀髪少年は呟いて手を鳴らし始めた。

きつとここから決め台詞を吐くに違いないとキリトは期待していたりした。

しかし少年は、

「金目のモノ、全部だしな。さもなきや半殺し。出しても半殺しだけどな」

「追いつくぞよ!?!」

その発言にキリトは思わず、ツッコんだ。
金目のモノを要求するヒーローなんていないしね……………。

(ソラサイド)

なんかドアから出てみたら変人達に襲われた。耳の先が長くて、羽が生えて飛んでい
る種族なんて見たこと——あ。あつたわ。

前世の戦争でいたな、こういう種族。

確か妖精って種族だったな。

「何かしらこのハエと人間が融合した種族は」

「私は蚊と人間が融合したモノかと思ったよ」

「例えが最悪だな、オイ」

ちなみに返り討ちした兵士達を縛って身ぐるみを剥いだ。

財布もたんまりあって、よきかなよきかな♪

「というかソラ、この種族知ってるのかしら？ モスキートじゃないの？」

「妖精という名前の羽が生えた全裸で踊り出す変態種族だ」

「どんな種族だよ！ つーか、全裸関係ないし！」

兵士の隊長っぽい人がツツコむ。いや現にパンツ一丁だろお前ら。

「ふん、野蛮な種族がどういうつもりでこの地にきたのかは知らないが覚悟しろ。我がやられても青き騎士と金色の騎士様が——がふ!?」

「ごちやごちやうつせーな。とりあえず四天王フラグ立たせる前にこれでも食つてろ」
隊長っぽい人のうるさい口をタバスコの瓶で詰め込む。

「か、からアアアア!! ひさま、何を飲まへた!?!」

「タバスコ。プレミア限定の『情熱の君へ』って言う商品だ。とある外道で愉悅の探究な神父も絶賛してたとか」

「ほんなもんのまへるなアアアア!!」

うるさいなあ、とまどかはそう言つてどこからか取り出した鈍器で笑顔で頭を殴つた。

端から見たらサスペンスだよこれ。

隊長っぽい人物はそれで白目を剥いて失神した。頑丈でよかつたな、コイツ。

「さてと……………お前も財布だしな」

「俺もかよ!?!」

今までスルーしていた黒髪少年に財布を催促する。

さもなければ、後ろの二人がカスベ的な現場を作り出すようだから。

「いやピンクの人はまだマシだけど黒髪の方はシャレになってねえから！ 銃を持って
る時点でマジ殺しだから！」

「見事なツツコミね。どうかしら？ 私の第二の下僕にならない？」

「ならねえよ！」

「残念ね。第一の下僕であるソラにお友達ができるチャンスだったのに」

「誰が下僕だ、ゴラ」

誤解を植え付けようとするほむらに呆れながらオレは黒髪少年に神器を向ける。

「今の聞いた話を無視して金だしな。こっちは無一文無しからのスタートなんだから、
恵め」

「なんていう上から目線?! くっ、俺はここで立ち止まるわけには行かないんだ！」

と言つて黒い片手剣を構える。

おやおや、やる気満々だねー。

「こっちも立ち止まるわけには行かないんでね。オベ……………なんだっけ？」

「オベイロンのところよ。そこにマミさんがいるって女神のメールにあったでしょ」

あ、そういう名前だったな。

オレが納得していると彼は構えを解いた。どうしたんだ？

「いやアンタもそこに行きたいって言うならお願いしたいことがある。俺もそこに連れ

て行つてくれないか？」

「どういふことだ、黒髪少年」

「黒髪少年じゃなくてキリトだ。そういうアンタは？」

「神威ソラだ。それでこつちの髪も頭の中もピンクなのが朱美まどか。その黒髪でドSな発想ばかりしているのが朱美ほむらだ」

そんな自己紹介をするとまどかとほむらがブーブー文句を言ってきた。

「失礼な。私のどこがピンクなの？ 私はソラくんと淫らな関係になりたいだけだよ？」

「まどかの言う通りだわ。淫らでおもちゃな関係になりたいのよ私達は」

「どのみちピンクだしドSじゃねえか」

オレは呆れているとキリトは「なんかわかってきた」と呟いた。納得してくれてお兄さんは嬉しいです。

「俺の目的は幼馴染みを取り戻すことなんだ。だからそこへ行きたいんだ」

キリトの話によれば幼い頃、一緒に過ごしていた幼馴染みはこの国の王女様でどうやらオベイロンによって無理矢理婚約させられたらしい。

オベイロンはそれなりの有力な貴族のため、この国の現王——アバロンも認めているらしい。

「んで、その婚約をぶっ壊したいと？」

「ああ。アスナを取り戻したいんだ。……………やつと両想いだとわかったのに」

ほうほう、これは身分違いというか種族違いの恋ですなあ。

まどかやほむらも口元を隠してニヨニヨしていた。恋バナは女性にとって蜜の味です。

「だから頼む！　この通りだ！」

土下座するキリト。異世界でも土下座は共通なのだろうかとふと思っていたりする。当然、オレ達の答えは決まっている。まどかやほむらもオレに向かって頷いていた。

「だが断る」

「ええ!?!」

「いや当たり前だろ。初対面に何お願いしてるんだよ」

真摯なお願いが必ずしも通用すると思わないことだね、お兄さんや。ガツクリしたキリトに向かってさらに言葉を続ける。

「しかし困ったなあー。オレ達妖精の国の地理とか知らないしー」

「そうだねー。来たばかりだしー」

「よーし、そこにいる黒髪のお兄さんに付いて行こうー」

まどかとそういう棒読みな会話するとキリトは顔をあげて目を丸くする。

「ということでオレ達がお前を連れて行くんじゃない。お前が『オレ達を連れて行くんだ』。だから案内しろ。指示くらい聞いてやるから」

オレは最後にそう言って剥いだ身ぐるみを整理し始めた。

「えっと……………つまりどゆうこと?」

「鈍いわね。要するにあなたに協力するから衣食を保証しなさいってことよ」

「そうなのかな？ 俺はてつきり……………」

「断れたと思ったでしょ？ 当然よ。ソラは見ず知らずの人を助けるほどお人好しじゃないわ。だけど、目の前であんなに助けを求められたら無視するほど落ちぶれてないわ」

「ソラくんはツンデレキャラだからねー♪」

「オイこらまどか。誰がツンデレだ。」

「オレは単にマミさんへの最短距離へ行けそんな人材がほしくてキリトに頼んだだけだ。」

「とか言つて実は衛くんの面影を思い出したんじゃないのー？」

「ぐっ……………」

「凶星だね♪」

「ニツコリ笑うまどかにオレは目を逸らした。……………くそ、凶星付かれて恥ずかしいな、全く。」

するとほむらが手を叩いてこちらを向けるように催促する。

「はいはい、ストロベリーな空間は宿屋でしてちょうだい。あ、ソラは後で私の部屋に来なさい。たつぷりお仕置きしてあげる」

「解せぬ。まあ、なんにせよキリト。道を案内してくれ。お前今まで逃げてきたけど、

ちゃんと前に進んでいただろうか？」

「ああ。任せろ！」

こうしてオレ達の異世界の冒険が始まろうとしていた。

「それよりこの兵士達どうするつもりだ、ほむら？」

「とりあえず放置よ。そして鼻にワサビ塗ってあげなさい、まどか」

「ティヒヒヒ、まつかせさーい♪」

「さすが鬼畜姉妹。アフターケアが半端ねえ」

第六十七話

ややくもり空な天気の中でオレ達はさつそくピンチである。

なんか水着っぽいお腹を出した服装で槍のような武器を構えた猫耳な女性達に囲まれていた。お腹壊すぞお前らとせひとも言いたいファックションである。

ちなみななぜかまどかとほむらだけはその槍を向けられていない。オレとキリトのみである。

「これが異世界のファックションだと？ まどか、ほむら気をつけろ。お前らは水着ファックションで過ごさないといけないみたいだぞお二人さん」

「あらやだ。それが本当ならどうしようかしら。私、水着持っていないわ」

「そうだねほむらちゃん。いつか着ようと思っていたビキニは家に残したままだし………………。こうなったら下着姿で！」

「いや、冗談だから。羞恥心を持つとうな、まどかさん」

とりあえずまどかを抑えながらオレ達は談笑していた。

「いやなんでこんな状況で普通に会話してんの!？」

という危機感のない会話していたオレ達にキリトがさすがにツツコんできた。

それがオレ達のスタンダードなのさキリトくん。

すると猫耳の小さな茶髪の少女が前に出てきた。鉄の胸当てでお腹が出た赤を基調にした服装だ。肩には小さなトカゲいた。

そんな小さな少女だが一見気弱そうな印象だが、今の彼女には女性達をまとめるリーダーの雰囲気がある。

この少女がこの女性達の長かなんかだろうな。

とりあえずまず聞きたいことがあるのでその少女に聞いてみた。

「なんですか？」と聞いてきたので、オレは最初の疑問を口に出した。

「そのトカゲ………非常食か？」

「トカゲじゃありませんし、ドラゴンですから。あとピナは非常食じゃありませんよ!」

「いやなんか焼いたらうまそうだなーって………ジュルリ」

「この人マジだ! ピナを食べるつもりだよ!」

おお、見事なツツコミだ。誰かに訓練されている者だろう。

「というかまず質問するところ違いますか!?! どうしてこんな目にあっているのか疑問はないのですか!?!」

「いやーこういうの日常茶飯事だったからなー。ぶっちゃけ慣れてるし、やってきたら女性だろうが子どもだろうが返り討ちにしてパンツ一丁にさせてた」

「容赦ないよ、この人!」

顔を赤くして茶髪少女はその小さな胸を抑えながらツツコむ。槍を構えてた女性達もそんな未来を予想したのか震えていた。

神威ソラは老若男女問わずに追い剥ぎを返り討ちにして無一文にさせる男です。

「まあ、この際オレの話はどうでもいいとして、そこどけてくれない? オレ達このガイドのお兄さんに案内されてるところなんだよ。遊びのコスプレ集団は帰れ。むしろ、そうなら本場の人に謝れ」

「その『こすぷれ』という単語は知りませんが、なぜかバカにされてる気がします。」

青筋を立て始める女性達と茶髪少女。今にも襲いかかつてきそうさだ。

「つてオイ! この人達猫耳族だぞ! ケンカ売っていいヤツらじゃない!」

「知るか。こちとら売られたケンカを買うのが主義だ。猫耳族なんてどうせあんまり強くないだろ」

「いやそうなんだが……………コイツらと敵対するとこの国と敵対するのと等しいんだ」

えっ、マジで?

コイツらつてそれなりの権力者なの?

キリトは続けて言葉を出す。

「なんでも猫耳ファンクラブという謎の団体が敵対組織を滅ぼしているんだ」

「聞いて損した……………」

「そしてその団体はとある国の魔王を倒したという伝説を残し、古代壁画に載せられるほど古くから伝わる団体なんだ」

「ファンクラブが伝説ってどんな言い伝えだよ!？」

「ちなみにこの国の王様もファンクラブの一員らしい」

「アバロン王オオオオ何やってのあんたはアアアア!？」

何やってんだよ、国の最高責任者!!

ある意味終わってるよこの国!

「そ、そうです……………にゃん。私達と敵対するとこの国と戦うことになるのです!

……………にゃん!」

「いや、なに今さらキャラ付けしてるんだよ、お前。普通に喋っていいだろ」

「その……………この国の法律で『猫耳族は必ず語尾にニヤンをつけるべし』って書かれて
います……………あう、恥ずかしいです……………にゃん」

「もう滅びろこんな国!!」

心からそう思うオレだった。ファンクラブが伝説を残すなんてなんだその新しいレ
ジエンド。

閑話休題

そんなこんなでオレ達は猫耳族の根城にしている村に向かっていた。

オレ達の目的は一つ村長に会うことだった。理由はなんで男ばかり狙うかということを知りたいからだ。

「ここが猫耳族の村か？」

「はい……………」

「よし案内しろ」

「わかりました……………」

チラホラ他の種族を見かける中で、猫耳族の部隊長であるシリカについて行き、村長の家までやってきた。

ちなみにその部隊はオレ達の後ろを鳴の子どものようにについて行ったりしていた。

「族長ー、いるかー？ ブサイクな族長ー！」

「ちよつ、いきなりなんてこといってるのですか!？」

「えっ？ 美人なの？」

「美人というか美少女ですよ！ しかも強くてカッコいい私の憧れの女性です！ あなたなんかケチヨンケチヨンにしてしまいますよ！」

「あつそ。ブサイクー！ さつきと出てこーい！ デブなのか、お前はー？」

「人の話を聞いていましたか!?!」

シリカがオレにツツコむ。しかしオレはそれでも罵倒はやめないまま、そのまま続ける。

すると、ほむらが彼女の肩を叩いて口を開いた。

「無駄よ。ソラは基本信頼してない人の言うことは聞かないわ」

「納得できませんけど、女性に対してめちやくちや失礼なこと言ってますよ!?!」

「それが彼の作戦よ出てきたところを————殺る。私もそうするわね」

「なにこの人達、スゴく怖いんですけど!」

それがオレとほむらくオリティであるのだシリカちゃんよ。

すると、コテージから物音が聞こえ始めて、赤い髪の少女が出てきた——

「うっせーな!! 誰がブスだとデブだとコラ! アタシはまだまだブクブク太ってねえよー!」

—————ええ?

「……………ええ?」

出てきたのは見知った顔の少女——友江杏子であった。
え？ どゆこと？ 誰か説明プリーズ。

☆☆☆

村長こと友江杏子はオレ達が異世界やら平行世界に行っていた間に起きたことを話してくれた。

なんでも猫耳族の村に来て、盗賊達に襲われていたところを助けてしまい、その後村長に任命されてしまったらしい。

杏子としてはさっさとどこかに行きたいが、どうも生来のお人好しというか世話焼きがそれを邪魔してしまい、行くにも行けなかつたらしい。

この集落では男の装備品を奪って売るといふ遊びが有り、それが楽しくてだんだんとオレ達に会うことを忘れていたらしい。

「いや猫耳族って盗賊なの？」

「一応、法律では公認されているからたまに迷い混んでくるところを襲撃してる」

「なるほど。そうやって猫耳と尻尾をつけ、セクシーな服装で襲っていたと……………」

まどか並の肉食系だこと」

「うっせえ……………」

顔を紅くしながらそっぽを向く杏子。

いやいや似合ってるぞ？

同じ水着のようなお腹を出した赤い服で猫耳と尻尾をつけているその姿は野良猫のような魅力を感じさせていた。

つけ耳とつけ尻尾をなのに違和感を感じさせないのはこいつの素材の良さが発揮されてることだろう。

オレがニヨニヨ笑っていると杏子は嘆息を吐いて言い出す。

「んで、アンタ達はなんでシリカに首輪をつけてるんだ？」

杏子が指さす通りシリカにかわいらしいハートの首輪がつけられていた。

「聞いてください杏子さん……………。この人達、私を人質にして族長と話をつけるとか言い出して、挙げ句の果てには首輪を付けられてしまいましたあ……………」

「あ……………それはアンタの運の悪さだ。悪い、コイツらは次元が違うほどの鬼畜だからその首輪は取らせてくれないだろうな……………」

「そんなあ……………!？」

シリカは涙目で杏子に助けを請うが哀れ、杏子は目を逸らす。キリトだけは頭を撫で

るなりして慰めていた。

さすが色男、ヒューヒュー。

あと杏子、失礼だな。オレは人畜無害な少年だぞ。

「いやテメーも同じだからな、人外」

「解せぬ。まあなんにせよ。杏子を見つけたし、とつとここから出るぞ」

「いや……………アタシもそーしたいのだけど……………」

どこかバツが悪そうに返す杏子にオレはふと疑問を感じる。

それを答えるかのようにシリカが答えた。

「私達の掟で村長だけはこの集落を離脱できないのですよ」

「マジかよ。んじや、族長をやめさせる方法はないのか？」

「えつと村長を倒すことです。けどその村長を倒せば新たになる村長はその倒した人

になります」

つまり、倒したヤツが族長になるってことだ。どうしよう、サクリファイスしか思い

付かない。

「最悪キリトを生け贄にするか……………」

「オイこら。なにとんでもないこと言ってるんだアンタは」

「こちらを睨むキリトから目を逸らしているとシリカは「たぶんダメです」と言い出す。

なんでだ？

「男の人は村長になれないという掟なのですよ。この一族は女尊男卑という習わしがありますから」

「あー……………だから男だけ狙ってたのねー」

納得したところでオレ達は頭を悩ませる。このままでは杏子はこの集落から出られないし。

仕方ないな……………。

「そういえば嫁入りした人は村を出てるのか？」

「そうですね……………掟には嫁入りした者は村から出ることが義務付けられていますし……………え？ まさか……………」

それを聞いてオレはニタリと笑う。そして杏子に向かって言い出す。

「杏子、嫁に來い」

「へ？」

「「はいイイイイ!?」」

オレの爆弾発言に三人の連れは驚くのだった。

シリカは「なんかヤバイことをやってしまった」という表情をしていたが。

第六十八話

猫耳族の掟

それは猫耳族が守るべきルールである。破れば罰則を与えられ、恐ろしい罰が待ち構えている。

以下がその掟である。

1 女は男より強く有り、男は女を支えるものであれ

2 族長は必ず女であり、敗北した者は勝者に族長の座を譲ること

3 婿入りのみ集落に残り、嫁入りは外に出なければならぬ。理由？ 嫁入りつてなにか屈折したつばいよね

4 サンマは塩で焼き、醤油かポン酢で食せ!!

5 結婚する前に決闘して勝った方に嫁入り婿入りすること。あ、引き分けはノーカン

以上がシリカが持ってきた掟を記した書物である。

………とりあえず言おう。

「なんだこの現代っ子つばい掟!?! ホントに昔の人が書いたモノなのかこれ!?!」

「そうですけど……………」

「しかも3はなんかフレンドリーっぽいし、4は完全に好みの問題だろ！」

「サンマはポン酢ですよね！ あの若干の酸っぱさがたまりません！」

「知るか！ オレは醤油だけどね!!」

なんとという重みもなんにも無さそうな掟である。

軽い……………軽すぎるぞ猫耳族……………。

「というか罰つてなんだよ。生爪を剥ぐとかそういうものか？」

「そんな物騒なことはしません！ ノーパンの刑がスタンダードです！」

「どんなスタンダード!? いやお前らがノーパンしたら駄目だろ!! 水着っぽい服装で

ノーパンしたら完全に下半身剥き出し状態だからな!」

「ちなみに一番重い刑は猫じやらしで弄ばれることです。この間、杏子さんが実行して

いて一人の若い少女が満たされた顔で倒れました……………」

「倒れるほど遊んでいたの!? てか、一番重い刑が猫じやらしで遊ぶことなのか!」

「ただだけ緩いの!? つーか、ノーパンの刑がこの中で一番辛い刑じゃねえか！」

「猫じやらしを甘くみてはいけません！ あのブラブラ動いてモフモフ感のある拷問兵

器は猫耳達の天敵です！」

「いや天敵じゃねえだろ。どちらかと言えば遊び道具だろ」

もはや呆れるしかない。

というか今の状態を説明すると5の結婚するためにオレと杏子は戦うことになった。オレが勝てば全て解決するわけだが……………どうも杏子としては納得してなさそうな気がするなあ。

「待たせたな」

杏子が魔法少女の衣装で槍を肩に担いでやってきた。オレは神器を召喚する。

「んで、八百長する予定は？」

「あるわけねーだろ。アタシはアンタと戦いたくてウズウズしてんだよ」

「お前シグナムの戦闘狂が移ったのか？」

「いんや、アンタはノーマルさ。手合わせしたい相手がいたらウズウズするだろ？」

ニカツと笑う杏子にオレは「それもそうだな」と目を瞑って微笑んだ。

そういうえばこうやって杏子と戦う機会はなかったな。

「さてと……………覚悟はいいか？」

「もちろん。アンタもできてるだろ？」

「当たり前だ」

「それなら、始めよう」

ああ、そうだな……………。

オレ達の口角が上がり、一斉に言葉を出す。

「……………久々の潰し合いをな!!」

オレと杏子の得物がぶつかり合った。

☆☆☆

まず先制してきたのは杏子である。

右手だけで槍の突貫でオレに突いてきたが、それを身体を捻りながら神器で受け流し、そのまま蹴り上げようとした。

しかし、杏子は残りの片手で受け止め、その勢いを利用して空中で飛び上がりそのまま宙返りしながら足をつけて着地。

そこへオレが右へ左へと袈裟斬りをしたが、ヒラリヒラリされて距離をとられた。「ヒュー、やるねえー。ヒヤヒヤしたよソラ」

「嘘つけ元魔法少女。たった一人で化け物を狩ってたベテランのお前があ程度の斬撃でヒヤヒヤするもんかよ」

「バレたか」と杏子はいたずらっ子な笑みを浮かべる。

小手調べで反撃してみたがそう簡単にはいかないか。

「んじゃ、そろそろ………いくよー」

杏子の神器が光り出し、複数の杏子が現れた。

前世で見たことある魔法——『ロツソ・ファンタズム』

幻想という名の分身がオレの目の前に現れたのだ。

「「さあ。どうする！」」

分身達が一齐に得物を振り回す。

分身達と戦うにはオレはまず意識しなければならぬことがある。

まず、集団行動でのコンビネーション攻撃。

コンビネーション攻撃は他人と合わせて初めて成り立つが自分自身である分身は容易く合わせることができするため、相手を牽制しながら隙を簡単に作り出せる。

そのためオレは杏子達を集団にさせず、バラバラにさせなければならない。

もう一つある。それは視界が広がることだ。

なんでも『ロツソ・ファンタズム』の分身は本体の視界と繋がっているため、杏子には複数の視界があると考えられているらしい。

そのため、奇襲は行えないし、分身に奇策で倒してしまうと瞬時に見破られてしまうリスクがあるのだ。

「だあ、くそー！ 面倒な技を！」

「隙あり!!」

横風ぎの一撃を神器で受け止めるがそのまま横へ平行に飛ばされる。しかも飛ばされたところで待っていたのは槍を振りかぶる分身の姿。

背中からの衝撃を受け、上に飛ばされた。

「い、つつ………」

「とどめだアアアア!!」

最後に待っていたのいつの間にか上空にいた本体。

オレは彼女の渾身の突きで地面へ叩きつけられた。

幸いなのはこれが模擬戦形式の決闘であり、命のやり取りを行わないことなので杏子の突きは先端の刃ではなく、柄の部分の突きであったため死にはしない。

けれどかなり痛い。激痛に苦悶する。

皮肉なことに模擬戦形式のためオレの得意な開け閉めや魔法はほぼ相手を殺すためなので使えないし、第一杏子の機動力の前ではまず当てることが難しい。ただでさえ、杏子が五人になったのだから。

それもまだまだ分身作っているし、三十人の杏子と戦うという最悪のビジョンが浮き上がってきた。

さすがにベテランで自分のことをよく知ってる相手が三十人となると倒せなくなる。

「だとしたらオレがこ^{全てを開く者}れを使うのは限界があるなあ……………」

オレは神器を戻して素手の状態で深呼吸し始める。

杏子は「諦めたのか？」と不敵に笑うがオレはそれを否定した。

「お前とじゃあオレの神器は相性最悪だ。だから師匠の神器を使う」

オレは師匠の神器閃光のマントを召喚し、身体に電気を纏う。

この神器の特性はトップスピードを高め、そして一つ一つの攻撃に電気属性を付与させる。

お分かりいただけただろうか？

今度はオレがスピードで杏子を翻弄するときだ。

「っ……………!? 速い！」

「ひとつっ!!」

まず槍を構えていた杏子の一人の腹部を殴る。すると煙のように消えていった。

今度は分身の杏子二人がオレに向かってきたが、ムーンサルトで回避し、それから拾った石ころを身体に当てる。

この石ころには電気属性が付与されているため、当たればスタンガンと同じように失神してしまう。

案の定、杏子二人の分身は消えて残りは八人くらいになった。オレは怯んでいる隙に

杏子達の一人にエルボーする。

「なっ!?!」

そのエルボーは避けられることなく受けるはずだった——が、幽霊のようになり抜けて行き、そのまま足を滑走しながら通り抜けた。

「言っただけどアタシの神器は『幻想は現実』だ。文字通りに幻想は現実になり、そしてその現実になった幻想を『元に戻せる』」

要するに幻想という幻に一時的に戻して分身を維持させたということか。オレの一撃一撃が必殺だからこそその得策か。

………やられた。これは仮にオレが神器で防全てを開く者ごうにもすり抜けて当てられるし、槍を掴もうにも掴めないという可能性が出てきた。

武器を奪って戦うことは最初からできないということか。

「まだいけるだろソラ?」

「まあな………。んじゃ、全力でいくわ」

オレは最大出力の電気を纏い、杏子に向かっていく。

これは師匠もしていた最強の肉体強化である。短時間でしかも使用後は身体が上手く動かせることができなくなるが、最初よりも段違い速いし、力も違う。

まさしく一撃必殺となる強化である。

オレは次々に作られていく分身を倒しながら、遂に杏子と一騎討ちとなった。もはやお互い体力と魔力が限界だが、オレ達が目指すものはただ一つ。

「勝つのはオレ（アタシ）だアアアア!!」

杏子の槍とオレの拳はぶつかり合い、砂煙が舞う。

そして膝についていたのは——オレ。

立っていたのは杏子だった。

「村長の勝ちですか？」

「……………いえ。違うわ」

ほむらがそう言うと同時に杏子はそのまま背中から倒れ込む。それをオレはなんとか受け止めてあげた。

ふう……………ぶつかった後のお互いの一発でオレは腹部をやられてつい膝をついたが、杏子は鳩尾を当てたから失神してしまった。

軽い電気だから大丈夫だと思うけど。

「ホント……………めちゃくちゃ辛かったな今回は」

オレは思わずため息を吐きながら綺麗な青空を見上げるのだった。

……………とても晴れやかな結末だったと思う。

(杏子サイド)

決闘の後にアタシ達は村長を辞任したことを集落のみんなに伝えた。村のみんなはガツカリしていたが、結婚することを発表するとなぜか喜ばれた。

まさか近所のオバサンやオジサンが涙を流すくらい喜ばれるとは思わなかった。

「あの杏子ちゃんに貰い手がいてよかった」という発言は気に入らなかったが。

まあなんにせよ。結婚式はすぐに行われて、それから宴会が行われた。

どんちゃん騒ぎでソラはオジサン達に絡まれたりしたが嫌な顔をせずに、楽しんでいった。

アタシもアタシでオバサン達に夫婦円満のコツとか教えてもらった。

なんでも最初の夜が肝心で、円満の要なのかがよくわからなかった。

どういう意味かわからないし、聞いてみても子作りの行為らしいが違うだろ、絶対。

子どもって親父やお袋曰く、コウノトリさんが運んでくるもんだろ。

ま、どうでもいいけど。

それからアタシとソラは二人つきりで寝ることになった。

オバサン達にがんばってと言われたが何をがんばるのかわからないし、別にもう戦う必要はないだろに。

「にしても遅いなアイツ……………。一緒に寝るとか言つてたのにどこで油を売つてやがる。」

他の女の子と仲良くしてるのではないか、と思うとなぜかモヤモヤとした気持ちになつた。

やつと帰つてきて文句の一言を言つてやろうとした瞬間、ソラが抱きしめてきた。

「しよーこ、ちゅーしよ。ちゅー」

「は？ えっ？」

いきなりのキス宣言にアタシの頭が沸騰した。ちよつと待て！

なんでこんなこと言つてんだコイツ!?

「てか、目が虚ろだぞソラ！ 顔も赤いし、なんか酒クセエ!!」

「えへへへ……………さつきシリカにお水をもらつたらあ、なんかフワフワした感じになつてえー」

「アイツ、何してんのホント!?!」

とんでもないことをしてくれたと内心毒づいているとソラに押し倒された。

「ちよつ、まだアタシには心の準備が!」

「準備もくそもあーりましえん。ぶつつけ本番が現実なのが世の中なのでえす」

もはや死刑宣告等しいことを言われ、顔が迫つてきた。

どうする!?! このままでもいいのかアタシ!?

『あー、いんじゃない?』

『かもしてやれ』

『大丈夫だ。問題ない』

アンタら真面目にしやがれ! てか最後のなんかのフラグ!!

などと脳内会議を繰り返していると誰かが入ってきた。

顔をその方向に向けるとまどかとおむらだった。

「ちよつとアンタ達! ソラの目をさま——」

「なんてこつたい……………ソラくんがまさか杏子ちゃんで性欲を晴らそうするなんて」

「仕方ないわ。杏子だけだと重荷になりそうだから手伝ってあげるわ」

まさかの止める気ゼロ!?

なんかやる気満々だし、ソラが言つてた猛獣が獲物を見る目になつてないかこの二人
!?

「さあ、ソラくん脱ぎ脱ぎしましょうねー」

「ぬぎぬぎっ!」

「寝るときは服を脱ぐのが当たり前なんだよ♪」

そう言ってから衣服を脱ぎ始める三人。つてソラ騙されてるって!!
つーか、なんでアタシも!?
えっ、ちよっ、まっ……………

ここから先はあんまり覚えていない。だけど苦痛と達成感、そしてなぜか満たされた
ということとは覚えている。

番外編その八

閑話 杏子の追憶

ヤツと最初に出会ったのはさやかをボコボコにしたときだった。

ふざけた子どもだと思い、お灸を据えてやろうとしたが、逆に翻弄されて返り討ちにされた。

最初のアイツはムカつく子どもだった。いつか、仕返ししてやると報復を誓ったことは今でも覚えている。

まあ、すぐに再会したけど。

ほむらと一緒にいるところを見て、ほむらもコイツの仲間だと思った。

だけど、ほむら曰く、協力関係だけどちよつと人選ミスったかも……とぼやいていた。

オイ、なにしたんだお前。

しかも名前を微妙に間違えてたし。あんこじゃなくて杏子だったの！

全く、アイツはいつも人の名前を間違える。なんで覚ええないのか不思議だ。

まあ、アタシのことはしっかり覚えてくれたけど。

その後、さやかにアタシの祈りを打ち明けたときアイツも一緒にいた。けど、アイツは子どもらしくなくこう言いやがった。

「杏子の祈りは間違つてないよ。誰かを想う祈りは間違いなはずはない。父親にわかつてもらえなかつたけど、オレは杏子の祈りを肯定する。絶対に否定してやらない」

理想的で子どもみたいな言葉だつたけど——初めて認めてもらえたことにアタシの心は満たされた。

泣いたときはソラが頭を撫でてもらった。……………い、今思えば恥ずかしいな。

それからアイツと友達になっていろいろ遊んだりしたな。思えばアイツつてダンスゲームが苦手みたいだった。つまるところ、ヘタクソだった。

そのとき拗ねた表情は年相応な顔でよかつたと思う。

それからワルプルギスと決戦。

勝てたけど、抑止の存在が現れてアタシは死んだ。

しかしまどかによって世界は改変され、アタシとマミは生き返つたが、まどかと過ごした時の記憶を無くし、さやかとまどかが消えた。

改変された世界でしばらく過ごしていると今度はほむらが囚われて、ナイトメアと戦う日々が始まった。

ソラもこの世界に来たとき、誰だかわからないくらい成長していた。殴つたことは

「ないわー」という発言の罰だと思え。

そして、ソラは死んでアタシは虚無に支配された。

悪友であり、親友だった少年がもういない。求めることができない。ああ、そうかアタシ——ソラが大好きだったんだ。

そのときアタシはアイツが好きなだと自覚した。

それからほむらを救ってアタシ達は女神と出会って転生した。

なあ、ソラ……………また会ったら覚悟しろ。

必ず振り回してやるかな！

だけどその前にまどか達の変態行動を止めねーとな……。ソラが鬱になる。
オイ、誰だここまで改悪したヤツらは？

第六十九話

決闘から翌日。オレは朝陽によつて目が覚める。

あれ？　なんだここ？

知らない天井に一種の疑問感じて次に感じたのは肌寒さとなんか変なニオイだった。

「えっ？　なんで裸なの？　てか、いつの間に脱いだ？」

オレが疑問に思っていると、オレの布団をモゾモゾ動く物体がいた。とりあえず、気になったので布団を引き払う。

そこにあつたのは瑞々しい肌に、情熱的な赤い髪。

普段はポニーテールなのに下ろされた髪が彼女を大人に近づくと少女だと思わせる。

単刀直入で言おう。杏子である——……………全裸の。

「あつれー？　オレの目がおかしいのかなー？　なんで裸の杏子がいるのかなー？」

あー……………これは夢だ。そうに違いない。

だから杏子が右になら、その左でモゾモゾしている二つはたぶん気のせいだきつと。そうに違いない。

「よし寝よう。おやすみなさい……………」

「二度寝は健康によくないわよ」

左から声がしたのでギギギとブリキ人形のごとく振り返る。

そこには黒髪美少女ことほむらが生まれたままの身体をタオルケットで隠していたではありませんか。

ほむらのとなりにはニヨニヨしているまどかが寝ている。彼女も杏子とほむらと同じでなぜか生まれたままの姿である。

「えっ? どゆこと? なんで三人は裸なのかな?」

「私の口から言わせるつもり?」

「いやいやいやいや! なんで嘘だ! 絶対嘘だ! だってオレはシリカからもらった飲み物を飲んでいこう寝たという記憶が……あれ?」

そういうえばシリカからもらったあの飲み物なんかのお酒らしいって言ってたような。それからオレは杏子に絡んで……それ以降の記憶がねえ!?

「ま、まさか……」

「ソラ、あなたがどんなに甲斐性なしだろうがどんなに優柔不断であろうが言いたいことは一つよ」

「……………教えてくださいほむらさん。その一言とは?」

彼女は乙女のようにモジモジしながら恥ずかしがりながら爆弾発言を落とした。

「スゴく……………遅しくて、激しかったわ……………」

「ノオオオオオオオオオオオ!!!」

なんとというかやってしまったそうなの。ちなみにまどかと杏子も同じ感想だったそうなの。

ママさん、さやか、千香。ごめなさい……………。

神威ソラは昨日をもって童貞を卒業しました。

師匠……………オレ、どうすればいいのかな……………？

閑話休題

朝食を食べた後にオレは木の影で三角座りしていた。

いやだつて考えてみるよ。三人の美少女に手を出したんだぜ？

端から見れば最低最悪な外道じゃねえか……………あ。でも外道はもう言われてたか。

主に初対面の猫耳族のみなさんに。

「性的な外道にはなりたくなかった性的な外道にはなりたくなかった性的な外道にはなりたくなかった性的な外道にはなりたくなかった………ブツブツ」

ブツブツと言っているとキリトが杏子とまどか、ほむらに話しかける。

「オイ、ソラがぶつ壊れてるぞ？ 何があつたんだよお前ら三人に。昨日一緒に寝ただろ？」

三人娘の返答は以下の通り。

「う、うっせえ………なんでもねえよ………」

「えっと………その………」

「………ノーコメントだわ」

このような返答にキリトは「わけがわからないよ」とどつかのナマモノと同じセリフを呟くのだった。

マジでどうしよ………。オレ達まだ中二の年齢なのに………。

「そ、それよりもシリカ。悪いけど、アタシ達もう行くわ。アタシの仲間——

——いや、家族が待っているからさ」

少し寂しそうに杏子が言うのとシリカはしばらく考えてから「わかりました」と悲しそうに呟くのだった。

それから猫耳族の新しい族長が杏子が決めて送迎会を行い、午後になつてからオレ達

は村の入り口まで出た。

ちなみに新しい族長は杏子の次に強い人である。清楚なイメージを感じさせるのになかなかの力持ちらしい。

「ホントに世話になったなあ……………ここには」

「杏子さんにとつて思い出の場所になつてゐるんですね」

「まあな。うん、色んな意味で思い出の場所だ。……………色んな意味で、な」

顔を紅くしながらオレを見る杏子に目を逸らす。

……………直視できねえーよ。あんなことあつたら。

「ホント何があつたんだソラ」

「……………聞かないでくれ」

「わけがわからないよ」

普通の男ならば「うらやまけしからん」と血涙を流すような出来事だが、残念美少女と関係を持ったものだからうれしくなくないと思うのはオレは贅沢者だろうか？

日頃から受けるセクハラとドS行為の心労が常に側に起きるといふことを考えるとため息が出る。

「まあなんにせよ責任はとるつもりさ。大切なヤツらだし」

「さすがソラくんだね。三人の女の子と関係持った鬼畜少年とは思えないくらいに」

「……………」

「オイ、今のでソラがハートブレイクされて木陰で三角座りし始めたぞ……………」

「大丈夫。ワザだよ」

「ワザなの!？」

「これでソラくんは私達には逆らえないことになったよ。つまり常に私達が優位なんだよ。やったね私!」

「この人めちやくちや腹黒い!!」

キリトの言う通りオレのメンタルがまどかの言葉でブレイク。もうこいつらには何を言っても逆らえなさそうだ。

てか、杏子。肩を叩いて「気にするな」とか言わないで。

その優しさが今ではものすごく辛いです……………。すると今度はほむらは口を開く。

「安心しなさいソラ。私とまどか、杏子は別にあなたを貶めるようなことやイタズラに苦しめるようなことはしないわ。純粹にあなたと結ばれることを望んでいたのよ」

「そうなのか……………?　なんか少し安心した」

「シリカがソラにお酒を渡すように施したのは私だけだ」

「真犯人はお前か!!」

「当然よ。結ばれること望んでいたからこそそのまどかと考えた策略よ」

ウインクするほむらにちよつとドキツとしたが、まさかの策略にオレは愕然とする。
嵌められたアアアアア……………。

「まさか杏子が先にソラと一緒にいたのは意外だったわ。おかげで最初にいただかれたのは杏子だったし」

「あう……………し、仕方ねえだろ……………。一応、あの村では夫婦なんだし……………」
指をツンツンしながら恥ずかしがる杏子の姿に少し癒されながらオレは次の目的地をキリトに聞いた。

この森を抜ければ街があるらしい。

やれやれ、森から抜けるとしたらどれほどの距離を歩かないといけないだろうか。

「いやー何週間かかるのやら」

「待つてくださいい！」

入り口付近でこれからのことを考えているとシリカがピナを肩に乗せて出てきた。

「あの……………私も連れて行ってくれませんか？　もしかしたら役に立てることがあるかもしれません」

オレはなぜついていくのか理由を聞いてみた。

彼女はこの村を出たことがなく、世界がどういいうものかまだ知らないらしい。なので

自分を鍛える名目を掲げて杏子———というかオレ達についていくことを決めたらいい。

「辛い旅になるかもしれないぞ？　主にキリトが」

「まさかの俺かよ!？」

「望むところですよ！」

「いやシリカも頷くなよ！」

鋭いツツコミを放つキリト光景を見てから密かにガッツポーズをとる杏子。たぶん、杏子の心情としてはツツコミ役が増えて万々歳なところだろう。

よし、まどかとはむらの暴走をこの二人に任せて新婚旅行に行くぞ杏子。

「よっしやあ！　ハワイ行こうぜ!!」

「いや何他人任せてるんだよ。アレはアンタらでなんとかしろよ」

キリトにそう言われた。解せぬ。

☆☆☆

シリカのペット兼友達である小さなドラゴン———ピナはどうやらこれが普段の姿ではないらしい。

シリカの神器『偽りの仮面』で変化したサイズらしい。

その元の姿に戻したらあら不思議。全長十メートルの巨龍になったではありませんか。

そんな巨龍に乗ってオレ達は一直線に街へ向かう。

「スツゲーデカイな、この非常食」

「だから非常食じゃありませんから！」

「えっ？ そうなのかシリカ？」

「杏子さあん!？」

まさかの杏子もオレと同じ思考に驚きである。そういえばこいつって大食漢だったよな。

ママさんが食費でたまに怖いってぼやいていたなあ。

「これならすぐに着きそうだな。ありがとなシリカ」

「い、いえお役に立ててうれしいです……………」

キリトの笑顔でシリカは頬を染める。こやつにニコポがあるのか？

しかしヤツは鈍感という名の難攻不落の要塞である。超ど真ん中で攻めない気づいてくれないだろうなあ、シリカの恋は。

「ってソラくんソラくん」

「なんだい、まどかさんや」

「前方からなんか来ているのだけど」

まだまだ距離があるが、確かに空中に飛んでいる何かがいる。

人型で羽のある人種……妖精しかいないな。

しかも騎士甲冑を来ているからたぶんどつかの部隊だろう。

「予測されていたのか？ マズイな……。シリカ、頼むけど」

「その必要ないぞキリト」

オレがそう言うとはむらが神器からバズーカ砲を取り出して、妖精達に向けて発射。

ドガアアアアンツツツ!!

爆発音と爆煙と共に妖精達が次々に落ちていった。

「よし、道が開いたな。ナイス、ほむら」

「容赦ねえなアンタら!! てか、大丈夫なのあの人達!?!」

「知るか。あ、しまった。財布くらいスツとけばよかった。シリカ、リターン。無事な財布ちゃんを我が手にしたい」

「追い剥ぎ(こ)でもやるのかよ!?! ホント徹底的だなソラって……。……」

呆れるキリトとシリカ。結局リターンせずにそのまま街へ向かった。

下では失神せずに生き残ったヤツがいたので、オレはまどかに頼んで追い打ちにデストロイアーチャーで森の一部ごと吹き飛ばした。

残っていたのはピクピクと動く黒ずんだ人型と荒野となった森の一部であった。

問答無用？ 今更だろ。それがオレ達だ。

(さやかサイド)

「先陣の部隊がロスト。銀髪少年がピンクの少女に何かを指示を出した後、全滅模様です……………」

あたしは部下の一人の伝令を聞いて嘆息を吐いた。どうやらソラ達はここに来て私達の仲間の部隊を襲ってやりたい放題しているようだ。

……………これでは再会が牢獄になってしまいそうだ。

「まさかお兄ちゃんが……………そんな……………」

「あー、大丈夫だつてリーファ。たぶんあたしの知り合いが全てやったことだから」

「どんな知り合いなのよ!?! 部隊の衣服や財布を剥いでパンツ一丁になる隊員や黒ずんで瀕死になった隊員はさっきのを合わせて三十人よ!?! 中にはピンクにトラウマを植え付けられた隊員がいるわよ!」

「もうそうなるのかー……………あははは」

もはや苦笑しか出まい。しかし幸運なことにこちらに向かつて来てるようだ。

接点して丸め込めばソラ達とは敵対することはない——はず……………。

「大丈夫かなあたし達……………ソラって敵にはとことん容赦ないから……………」

「あんたの知り合いがキチガイということがよーくわかったわ……………」

だけど負けるつもりはないわとリーファは神器『風魔の刃』を召喚した。

確か、風を操作する能力だっけ？ たぶん空中戦ではソラ達は勝てないと思う。

それくらいリーファは強い。

……………だけどあのソラだ。相手が有利な土俵をどうにかして自分の有利な土俵を

作り出す可能性はなきにしもあらずだ。

「あたしもよ……………絶対負けないんだから……………」

だからこそ、あたしはリーファをサポートすることを改めて決意するのだった。

「た、隊員から報告！ ピンクの閃光がこちらに向かっていている模様！」

「え？」

ドガアアアアンツツツ!!

——直後、まどかの魔力矢の爆撃が舎屋を襲ったのだった。

……………とりあえず再会したら一発殴ろうと思う。

番外編その九

閑話 さやかかの追憶

彼と最初に出会ったのはマミさんと一緒にいたとき、まどかに絡んできた。その少年がソラだった。

まあボコボコにしたのだけど。

そのあとに恭介の病院でグリーンフィードが羽化し、マミさんが魔女と戦うことになった。

魔女の脱皮でマミさんが死にそうなところを、まさかのドロップキックで助けた。

いやどんなヒーローよって思ったわ。アベン死マリアってなによ。

そんなマリアいたら物騒すぎるわ。

まあそんなこんなでも私も魔法少女となり、戦うことになったが魔法少女の真実にあたりは絶望した。

さらに恭介を親友にとられたという絶望に嘆き、魔女となった。あたしの自業自得なわけだけど。

そのときの記憶は曖昧で覚えてない。けれど、杏子を傷つけ、まどかも傷つけようと

していたことは覚えてる。

ソラが登場したとき、彼はがむしやらにあたしを止めようとして、神器をさしこんだ。思えばあれがソラの初めての閉錠——いわゆる魔女の封印だったと思う。

当時のソラは『全てを開く者』を完全に理解していなかったので、それができたのは奇跡がホントに起きたんだとあたし思う。

元に戻ったときに彼はほむらを呼んで、元に戻った肉体に——ソラがキヤラメルクラツチとほむらが海老反り固めをしてきた。

「人に迷惑かけたのどこのどいつじゃアアアアア!?」

「ニギヤアアアアアア!!」

いやーマジギレだったわ、あれは。プロレス技をかけられたのは本気で心配してくれてたと思いたい。

殺されるかと思うくらい本気だったのだから。

その後、ワルプルギスと抑止の存在と戦って敗れて、あたしは円環の理に導かれることになった。まどか曰く、あたしは魔女の力がある人間だったかららしい。

そのとき謝ってきたが、あたしは許した。もう恭介達には会えないけど、それでいいんだと思ったから。

あたしの初恋は終わって、新しい恋を始めようと思っていた。

そしてソラと再会したときは驚いた。外見も中身も変わっていたからビックリした。あの小さな子どもがイケメンになってたのも驚いたけどね。

でもほむらと戦って死んだことを知ってあたしは恭介をとられた感じを思い出した。そのとき気づいたのだ。あたしはソラが好きになっていたんだって。

でも全ては遅すぎて……くやしかったよ。彼を失ったことがとても堪えた。

まあ意外すぎる失恋で絶望したけど、ソラが残した遺志を継いであたし達はほむらを救うことができた。

ねえソラ。もしまた会えるとしたら、またどこかに行こうよ。まどか達も連れてさ。

でも、まあ………バイオリンが嫌になったのは、ちよつと言えないかなー………
あはははは………。

あんまり思い出したくないし。

第七十話

街にどこかの部隊の舎屋を吹き飛ばしてからオレ達は街に入り、広場まで来ていた。先ほどの射撃で広場にはあまり人が少なく逃げ出す人達ばかりである。

うむうむ、さすがまどかの射的である。おかげで誰にも悟られず、どうどうと侵入できた。

「いや悟る以前にぶっ飛ばしてるよね？ 混乱に乗じて入ったよね？」

「バレてるだろうけど都合。向かってきたら財布を拝借してやる」

「うわー……………考えが完全に犯罪者だ……………」

「キリトさん、それは今更ですよ……………」

キリトとシリカはゲンナリしながらオレに呆れていた。何を言う。オレは犯罪なんてしてないぞ。

乱暴な人達からただ永久にお金を借りているだけだ。

「どこの幻想卿の魔女っ子だよお前は。それよりこんな往来のところで大丈夫なのか？」

騎士達に見つかからないのか？」

「大丈夫だって。こんな混沌とした状況でマヌケな騎士達は気づかないって」

「誰がマヌケですって？」

オレ達の声がした方向を振り返ると金髪ポニーテールの妖精が腕を組ながら空中で仁王立ちしていた。

空中で仁王立ちしているため、なぜか威厳を感じさせた。

「誰だあいつ」

「さあ、あんなうらやまけしからん胸を持つて女の子は知らないわ。ムカつくわね、あの胸」

「とりあえず胸がムカついた。ほむらちゃん、あの子殺つとく？」

「賛成。殺るわよ」

「ストツプ・ザ・お前ら。てか大半が嫉妬だろそれ」

「むき出しの殺意に金髪巨乳に向ける。確かに腕を組んでるおかげで胸が強調されるな。」

すると金髪ポニーテールは顔を紅くて、胸を抑えながら口を開いた。

「あ、あんた達どこ見て言ってるのよ！ 私だつて大きくしたくてしたわけじゃ

……………」

「それは宣戦布告ということだね。貧乳達に対する挑発だね。ほむらちゃん、どう思う？」

「ギルティ。死刑よ。おっぱいが大きくなったからって調子乗らないでほしいわね無駄脂肪」

「ただ胸にコンプレックス感じてるのよあんた達!」

ほむら達はどこからか出したハンカチを噛み締めながら羨ましそうに金髪ポニーテールを見る。

どうでもいいけど大体の金髪の少女って巨乳率が高いのかな？

マミさんもどちらかと言えば巨乳だし。最後に見たときにはDくらいあるって言うてたし。

「つか、杏子は気にしないんだな」

「当たり前だろ。別に胸が大きかろうが小さかろうがソイツを愛してくれさえ言えば問題ねえだろ」

「なんと遅い発言。ちなみに杏子は胸が大きい方？ 小さい方？」

「……………この間、計って見たらちよつと大きくなつた。道理で肩こりがあるわけだ」

「まさかの裏切りにまどか達がお前のことを敵意を込めた目で見てるぞ?」

とぼつちりにバツが悪そうに目を逸らす杏子。しかし、彼女達の眼差しは止まらない。

そしてなぜかシリカも自身の胸を触りながら愕然としていた。戦力が圧倒的なのに、カオスなのはこれ如何に。

「とうかさつきから胸ばっかりの話じゃない！ いい加減に真面目にやりなさいよ！」

「知るか話題の元凶。お前のおっぱいが大きいからこうなったんだが。終わらせなければお前が終わらせろ金髪巨乳」

「誰が金髪巨乳よ！ あたしの名前はリーファよ!!」

「リー……………ヤベ、忘れた。ワンモアプリーズ」

「こんなに短いのに忘れちゃうの普通!?!」

「どうでもいいヤツの名前を覚えるのが苦手。それがソラクオリティ」

「あんたが最低なのはよくわかった」

「杏子、誉められたぞ」

「いや誉めてねえだろ絶対。てか、なんだこのグダグダ感」

全くである。シリアスは実家に帰ってシリアルが仕事をしている状況である。

しかしそれがオレ達の普通である。グダグダで、馬鹿らしくて、時には真剣になるのがオレ達だろ。

「さて話を戻すけど、お前だけで来たというわけじゃないよな？」

「当たり前よ。既にここは包囲済みよ。諦めて大人しくしなさい」

「「ヤダ」「」」

「まさかの即答!？」

当たり前だろ。高々ザコに囲まれたところでオレらが屈するはずがないだろ。

オレはりー……………あ、思い出した。リーファか。覚えた。

とにかくリーファに向かって言葉を出す。

「というわけで無理矢理だりなんだりしてみろ。ただし、無事では済まないが」

「言ってくれるじゃない。望み通りしてあげる」

「でもその前に」と今度はキリトに視線を向ける。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんのことを諦めてくれないかな。これ以上ここにいてもいずれ

は……………」

「無理だよりーファ。俺はアスナを助けるって決めたんだ」

「お兄ちゃん……………」

悲しそうに呟くりーファ。どうやらこの二人は知り合いみたいだ。

きつと兄妹のように仲がよかったのだろうな。オレには関係ないが。

「というわけでほむら、発射よーい」

「オーケー」

たかないなあ。

「とうわけでシリカ、キリト。悪いけどあいつは任せた。オレだとまず手加減できないし、苦手なことだ」

「わかった。だけど他は任せただぞ」

キリトはそう言つて神器『ダークパルサー』という聖剣を召喚した。

確か持ち主の『スピード』を徐々にあげていく時間差系の神器だ。

十分くらいになるとオレの目で終えるのはやつとなくらいな速さになる。

まあ、別にキリトの剣術は中々だし、まだ奥の手があるし大丈夫だろ。

「さてととつと終わらせて……………——っ！」

オレは咄嗟に後ろに退くとオレがいた場所にサーベルが突き刺さる。

まさかあいつがリーファと一緒にいるなんてな。

「久しぶりソラ。とりあえず殴らせてくれない？ さつきの魔力矢の怨みを込めて」

「久しぶりさやか。断じて拒否。そこにいたお前が悪い」

売り言葉買い言葉で睨み合うオレ達。いつの間にかまどか達は部隊と接点し、戦いの火蓋を切っていた。

うん、とりあえず……………。

「いくわよコノヤロー!!」

「かかってこいやアホ女!!」

目の前のアホを大人しくさせることだ。

☆☆☆

戦いの火蓋は落とされた。オレとさやかかの神器はそれぞれの攻防をしていた。

袈裟斬り、切り返し、突き、右から左や左から右への一閃、または上から下へ、下から上への斬撃を放つ。

たぶん剣術に置いて上なのはさやかだ。

断言できる。認めよう

だが、剣術が上だからと言ってオレより強いとは限らない。天才が必ずしも凡人より上とは限らないように。

「『プレスト』!!」

音楽用語で確か、『速く急に』という意味だ。恭也さんの『神速』をコピーして名付けた技だろう。

文字通り、さやかが消えた。いや見失ってしまった。

だからこそ、オレは僅かに感じた気配と空気の流れを感じて即座に防御に入った。予想通りにさやかは側面からの斬撃を放ってきた。

「よくわかったわね！ あたしの攻撃！」

「こちとら自分より早い敵をぶつ潰しているんだよ！ そう簡単にいくか！」

そう言い返して反撃。さやかはそれを受け流したりして回避する。

『無限の音楽』はオレの『全てを開く者』と同じで燃費の悪い神器だ。

つまり、さやかはオレと同じく長期決戦には向いてないのだ。

だからこそ、オレは神器全てを開く者の力を使わず持久戦で挑むつもりだ。するとさやかは左手にサーベルを創造してきた。

『『テンペストーズ』!!』

「ゲッ！」

意味は嵐のように激しくだ。

両腕が消えたかのような速度の連続斬りがオレに襲いかかる。防御しようにも速さ過ぎて防ぎきれず、その斬撃でオレの身体は次々と切り傷ができた。

「どうよ！ あのお兄さんの『神速』という技を使って出せた、あたしの技は！」

「さすがしか言いようがねえよ。普通その腕は使い物にならないのにな」

斬撃が治まった時には、さやかかの両腕は無事だということが確認できた。神器使いとしての恩恵があるからの影響かもな。

ヤバー、余裕で勝てる気がしなくなってきた。

「クソツ……………アホくせに剣術に関しては天才だなお前」

「はっはっはっ！ 天才美少女剣士さやかちゃんに不可能はないのー！ あとアホ言うな」

「んじゃバカで」

「バカもアホも同じでしょ！ とうかソラはあたしのことをそうでしか思えないの!?!」

「えっ？ 今更気づいたの？ やっぱアホだお前」

「うがアアアアア！ あんた絶対許さない！」

うなーと腕を上げて憤慨する、さやか。するとザコを蹴散らし終えたまどか達がこちらに加勢してきた。

「ソラくん、大丈夫？」

「さやかの際でソラを追い込むなんて……………やるわね」

「いやそりやそうだろ。もうさやかは素人じゃないし、初見でアレは無理だろ」

それぞれが感想をもらす中、オレはやれやれと嘆息を吐く。

「まだ手を出すなよ。これはさやかとの喧嘩だ。どっちが参ったって言うまで戦うつもりだから」

「そう、けどさやかに言いたいことがあるから先に言わせてもらおうわ」
ほむらとまどかは合掌して言い始めた。

「ごちそうさま。ソラくんのアレ、よかったわよ♪」

まさかのカミングアウトですか!?

ほら見ろ！ ポカーンとしてるぞさやかが！

「そうね。まどかはいただいていたけど、私は美味しくただかかれたわ。悔しいわ。ソラ、今夜はリベンジよ」

「やかましい!! お前らはなんで目の前で艶話を人前でするのかな!」

「それはさやかかネットラレ系エロゲーのヒロインだからよ。ほら、キュウベえに騙されて精神的に堕ちてたじゃない」

「肉体的にもな! 魔女化したことがいやらしく聞こえるからやめろよ、それ!」

「やめないのが私クオリティ。どう?」

「最低だったよ!」

ほむらにツッコんでいるときやかがワナワナと震え出した。

「じゃ、じゃあ何? ソラはもうまどか達と……………その……………関係を持ったの?」

「杏子もよ」

「あう……………」

顔を紅くしながら顔を隠す杏子。オレはオレでさやかから目線を逸らすだけである。

「ふ、ふふ……………そう。そういうことならあたしもウカウカしてられないわね。この勝負に勝てたらソラをもらおうよ!!」

「さやか、それ負けふらぐよ」

「『テンペストーゾ』!!」

ほむらのツツコミを無視して再び放たれた嵐のような高速連続斬撃。オレはやれやれと一呼吸して、横への一閃を放つ。

ガイイイインツツツ!!

そのたったの一撃で連続斬りを打ち消した。

「くっ……………」

「なんでつて顔をしているな。まあ、確かにあれは見えない部類の斬撃だ」

けど、とオレは続ける。

「大体どういふところを狙ってくるのかがわかれば後は実戦経験で得た感覚の出番だ。対処法は容易い」

「……………さすがは英雄つてことだね」

「後、二回目で目が慣れたからもう感覚がなくても対処できるかも」

「訂正。あんたやつぱり人外よ!」

「失礼な。オレは立派な人間だぞ。しかも普通の」

「どこの世界にあんな高速斬撃を目で追えるヤツがいるのよ!?!」

なぜかまどか達にも頷かれた。解せぬ。

「だけどまだまだ…………！」

「いや無理だろ。お前の神器はオレと同じく燃費が悪いし、魔力が減れば減るほどその力は弱くなる。見てみる。サーベルが刃こぼれし始めてるぞ」

オレの言う通りサーベルが刃こぼれし始めたていた。『無限の音楽』は魔力が少なくなればなるほど、その力は弱くなる。

つまり、二回連続の大技を使ったせいで魔力の限界が近づいていたのだ。さやかはただでさえ、魔力量は元魔法少女の中では多いとは言えないからな。一幕置いていれば、まだ戦えていただろう。

くつ、と悔しくもらしながらさやかは膝についた。

「オレの我慢勝ちだぜさやか」

「ええ………降参よ」

そう言ってさやかはサーベルを地に刺して白旗をあげるのだった。

「だけどもどか達を抱いたことは見逃せない」

「マジでー……………。で、罰はなんぞ？」

「……………ここ、今夜。宿で、一人であたしのところに来なさい」

えっ？ 何その嫌な予感を思わせる罰は。主に貞操の。

第七十一話

(キリトサイド)

俺は妹分であるリーファと戦っている。

片手剣と片手剣との剣同士のぶつかり合い。

剣の腕は互角だが差があるとしたら、神器の性能だ。

俺の神器は主に徐々に速さをあげていくがリーファは風を操るといふ自然現象に干渉する力だ。

魔法で空中で同じフィールドにいる俺だが空中戦では明らかに不利である。

シリカの援護射撃のおかげでなんとか保たれているが時間の問題だろう。

ズタボロな俺にリーファは口を開いた。

「もうやめようよ……………。お兄ちゃんじゃ、あたしに勝てないよ」

リーファが辛そうな表情で俺に言う。彼女もホントはこんなことしたくないはずだ。

けれど、彼女は第二王女として責務と部隊長としての責務によって俺を拘束せざるおえない。

俺だってリーファと戦いたくない。けれど――

「諦められない。交わした約束を果たさないといけないんだ……………!!」

鼓舞せよ、奮い起たせよ!

神器の性能で差が出るなら、俺は自慢の剣術をもう一段階あげるだけだ!

俺の左手に魔法陣が浮かび上がる。光と共に現れたのは黒色の片手剣。

そうこれは俺の先生から受け継いだ神器――『エリツシユデータ』

黒と空色の片手剣。それが俺の本来のスタイルだ。

「二刀流……………後天的に得たんだねその神器」

「まあな。俺がリーファに勝つには剣術しかないってな」

二つの神器を召喚しているからタイムリミット時間制限は限られている。それまでまに決着をつけ

る!!

「いくぞ!!」

俺は構えるリーファに向かっていこうとして――

「あ、キリト。ちょっと待て」

——ソラが待ったの声を聞いた瞬間、リーファにピンク色の巨大な魔力矢が直撃して爆発した。

「リーファあああああ!?!」

「あー、どうしよソラくん。せつかく良いところなのに撃ち落としちゃった……………」
「気にすんな。そのときは『大☆勝☆利!!』と決め台詞を吐けば全て丸く収まる」

「大☆勝☆利!!」

「よろしい」

よろしい……………じゃエエエエ!!

アンタら人の妹に何してんだよ!? 撃ち落として丸く収まる問題じゃねえだろ!?

「知るかボケ。ボーしてたそいつが悪い」

「いや、不意打ちは卑怯だろ！」

「キリトくん、世の中にはこういう格言があるんだよ？」

それはなんだとまどかに聞いてみるとソラと一緒に答えた。

「卑怯汚いは敗者の戯言たわごと」

「最低だよ、アンタら!!」

それからリーファを放っておいて俺はソラに襟首を掴まれて、引きずられながらその場を去った。

リーファ……………生きていろよ……………。

「てか、なんでリーファの同僚まで連れて来てるんだ？」

「拉致に決まってるでしょ。これ以上襲撃されないように、ね」

ほむらの言ったことに戦慄を覚えるのだった。

え？ この青髪の人もソラの仲間だって？

拉致というより取り戻したってみたい感じだな……………。

(ソラサイド)

さやかを拉致して街から脱出したオレ達は平原にいた。遠くから見れば山あり、岩ありというゴツゴツしたものが見られる。

「飛んでいけないよな、さすがに」

「この人数ですとピナでは山はさすがに……………」

「きゆるる……………」

落ち込むピナにキリトは「仕方ないさ」と撫でて励ましていた。

早くここから遠くへ行かないとさっきの妖精達が追ってくるだろうし

……………あ。

『ドコでもドア』で行けるじゃね？ あれって一度見た場所ならば、ここへ来たみたいにあバウトなどところに行くことなく特定できた場所へ行けるし。

「あ、それならちようど良くアバロン王の城の写真が」

「グツジョツブさやか。これなら直接行ける」

えっへんとさやかが胸を張る。すると、キリトとシリカがポカーンと口を開いていた。

え？　なんでそんなに驚いてるの？

「いや俺達ソラの神器の名前知らないし、そんなに便利なものだとは……………」
「とうかわざわざピナが運ぶ必要とかなかったのでは……………」

シリカの言いたいことはわかるけど、それはちよつとリスクが高いんだよな。

『ドコでもドア』は一度見た場所で初めて位置とか特定できる。逆に言えば位置が特定できなければその場所のランダムのところへ行くことになる。

開けたところが行きなり、敵陣の拠点だったりすることもある。

「さすがに敵陣に殴り込みになる形は怖いですね……………」

「ちなみにオレとほむらの場合、そんなところへ行つたら真つ先に潰す」

「潰せるのですか!? 無謀ですよね、それ!」

いや関係ないから。オレとほむらがいれば真つ先に爆撃と魔法の応酬を開始するとシリカに伝えた。

それを聞いたキリトとシリカに苦笑されてしまった。

なんでだろ?

「いやアンタらの非常識さに苦笑するのは当たり前だろ」

「あたしも杏子に同意よ。ちよつとは自重しなさいよ」

二人に説教的な形で言われてしまった。解せぬ。

まあなんにせよ……………。

「ママさん連れ出すか」

オレがドコでもドアを展開するとみんなは頷いて「応！」と返事した。
決戦は近い……………。そんなに気がした。

「あ、リーファが追い付いてきた」

「なんですと、さやかさん どうしましうかい」

「拘束しちゃつていいわよ。あたしが許す」

「よしきた」

「なんかさやかも染まつてきたなあ……………」

杏子がそう呟く通りだと思った。

リーファがどうなったって？

まどかがカスペみたいに背後から鈍器で殴つて、煤巻きにしてキリトがお姫様抱っこする形で連れていくことになったけど？

最近の女の子は物騒です……。助けてマミさん。

(??サイド)

「はっ！ 誰かお姉ちゃんを呼ぶ声が!？」

「いや、ママさん。それよりアスナ様を静めて。誰かが間違ってお酒を渡したから」

なにやらママさんにSOS信号を受信したようです。しかし、彼女がいるところも戦場だった。

アスナが魔法でオベイロンをぶっ飛ばそうとしていたからである。

誰か、止めてよ。

第七十二話

青空が広がる心地よい天気。そしてその日当たりが絶好とも言える城下町にオレ達はいた。

リーファはとりあえず、前日の宿屋でキリトの説得で大人しくなっていた。まあ、さすがに敵陣の拠点で兄貴分であるキリトを捕まえたくないのだろう。

んで、今現在オレとさやか、杏子は変装して街道を歩いていた。メンバーはバラバラに別れて情報収集していた。

あちこちには妖精がおり、少数の中には猫耳族など他種族がチラホラいた。

「杏子、そんなに食べ物買って大丈夫なの？」

「大丈夫だって。ソラの財布から出しててるから」

「オイこら。なに人の財布で食べ物を買ってんだお前」

コツンと叩いてからオレは嘆息を吐いた。

先日、オレの財産は女神のおかげで換金されてリリカルな世界と同じく財布が潤いに満ちていた——が、そこにまどかが財布を握られてしまいおかげでお小遣いはリリカルな世界にいた頃と変わらないようになった。

ああ、恐ろしきかな。カカア天下。

「そういえば、まどかのヤツどこ行った？」

「なんか珍しい大人のオモチャがあつたから買いにいったんだけど………ソラ？ 大人ってオモチャで遊ぶのか？」

「杏子、知らなくていいよ。てか、お前はずっと純粹でいてください」

土下座するくらいの勢いで杏子に懇願した。杏子は頭には『？』と浮かんでいるような表情をしていた。

これ以上、変態はごめんである。

「ちよつと待つて。あたしはまどかと違ってノーマルよ！」

「昨日の夜のことを言つてもか？」

「あれは………その………エへへへ………」

「ニヤけるな」

さやかつて実はMだった。あんまり言いたくないけど、縛つてみたら結構よかつたらしい。

かと言つてユーノ少年のような壊れすぎてるMじゃなかつたが。

「だつて大好きな人と結ばれるのつて幸せなのよ。ハッピーなのよ？」

「ネトラレてるくせに」

「よろしい。戦争よ杏子」

ファイティングポーズをとるさやかと杏子にオレは呆れながら口を開いた。

「落ち着け。二次創作界の百合カップル」

「誰が百合カップルよ!!」

知らないのか？ リリカルな世界では二次創作のこいつらは有名なくらいカップリングされてるんだぞ？

「あたしはノーマルよ！ てか、いつの間に創作対象されてたのよ!!」

「大体小五辺りから。ちなみに始めたのは千香だ。『財布と欲望が潤されるでござる、ゲスゲスゲス』って言ってた」

「あんの変態腐女子めエエエエ!!」

「ちなみに一番人気はクロノとユーノのカップリングだった。どうも腐女子同好会という組織があつて、そこで大人気作だったそうぞ。『受けがユーノで、攻めがクロノは神!!』だったとか」

「どうでもいいわ!! てかうちの学校にそんな組織があつたのが驚きよ!!」

さやかの言う通りである。

まさか危ない視線を感じて探ってみるとあら不思議。そこにあつた部屋からは同性愛を描いた同人誌ばかりが発見された。

その魔窟から逃げ出してしまったオレは悪くない。うん、オリ主くん（故）と衛くん
ののカップリングが描かれていたプロットがあつたけど無視したのも悪くない。

え？　なんでだつて？

オレに実害ないから。

一時期オレとユーノのカップリングが誕生していたのが、当然、販売阻止した。

あれは思い出せばヤバイ。まさかの高町の目の前でユーノをネトラレるという色んな意味でひどい作品だった。

オレはノーマルだし、他人の大切な手を出すほどゲスじゃないからな。

そんなことを話してゲンナリするさやかと嘆息を吐く杏子だったが、ハツと顔をあげて辺りを見回した。

「ソラ……………」

「わかつてる……………。いつの間にか囲まれてる」

見回すと甲冑を着た妖精達がチラホラいる。気づいてないつもりらしいが戦場を駆け抜けたオレにはすぐにわかる。

「どうするっ？」

「路地裏に逃げ込んで撃退しよう。ここでは目立つ」

さやかと杏子は頷いてからオレ達は一斉に路地裏に駆け込んだ。

すると甲冑を着た妖精達もまたオレ達を追いかけてきた。

よし、後は……………。

「甘いわよ」

「ぬお!？」

建物から狙撃にオレはすぐさま跳び退いた。杏子達も狙撃を受けたが神器で弾いたようだ。

「シノンの狙撃に反応するなんてなかなかな人達ね」

先ほどオレ達に向かって言った人物がオレ達の前に現れた。その人物はオレ達がよく知る女の子。

知ってるマスケット銃をこちらに構えているが、コルセットではなくメイド服という格好で、特徴的な金髪のくるくる巻きのヘアースタイルの彼女はオレ達には笑顔を向けず、敵意のある顔で見ている。

「マミさん……………なのか?」

「あら、名乗った覚えはないのだけど知り合いなのかしら?」

「オレだ。ソラだ!」

「ソラ……………そら?」

マミさんはしばらく思案顔になったがその後、言った言葉にオレの心に衝撃を受け

た。

「『そんな男の子。知らないわ』。知り合いだったのかしら？」

……………ふう。

オレはとりあえず深呼吸、深呼吸して——して……………。

「……………グスン、グ……………」

……………なんでかな。涙が止まらない。もうやだあ……………一人になりたくないよう……………。

「泣いちゃった!? なんで!?」

「うわー、ママさん泣かした……………」

「ヒデーな、オイ……………」

「「……………」」

「なんでみんなから白い目で見られなくちゃいけないの!？」

周りから受ける白い目にマミさんが常識的にツッコんでいた。

オレのハートはブレイクされて崩れていた。主に心労とショックで。

ああ、ホントに疲れたなあ……………。

なんかもうどうでもよくなってきたなあ……………。

第七十三話

(マミサイド)

私達は今この国を騒がしている不法侵入者を追い込むことができた。

彼らがなんのためこの国に入ってきたのかはわからないが、姫様の婚姻ももうじきであるため、不穏な存在は無くした方がよいとアバロン様は仰ったため、メイドである私やシノンも参加することになった。

シノンは私の一つ下の同期で、彼女が得意とするのは狙撃である。侵入者を路地裏に追い込みそこで彼女の狙撃で意識を奪う算段だったが、相手は私達より上手だったようだ。

なんと簡単に回避されてしまったのだ。

侵入者の一人は私のことを知っていたが、私は知らない。そう答えると彼は………
なんでか泣き始めた。

トラウマ———というか地雷を踏んだようだ。

その結果、私は周りから白い目で見られてしまった。

え？ 私が悪いの？

てか、あなたただんだけメンタルが豆腐なのよと言いたくなかったが、彼は泣き言のよう
に口を開いた。

「もうやだよ………。今朝からまどかにお尻を撫でられるし、ほむらにはマーキングと表して踏まれるし、さやかと杏子は助けてくれないし、いつもセクハラばかりしてくる千香がいなくてヤツホーイだったのに………。最悪だよ………」

「あなた達いつたいこの子に何してたのよ！」

彼はもう幼児退行していた。

そのことを批判するかのようには赤髪の女の子と青髪の女の子に指をさした。

「いや……それはあたし達が悪いわけじゃ………」

「主にまどかとほむらが原因じゃ………」

「言い訳無用！ こうなるほどになるくらいほつたらかしにしてたあなた達も同罪です
！」

「うっ」と罰が悪そうに顔を逸らす彼女達。反省はしているようだ。

私はそれを確認してから精神が幼児化した銀髪の少年の頭を抱きしめる。

「もう大丈夫よ。お姉ちゃんがいるから安心しなさい」

「うう………お姉ちゃん………オレ………オレ」

「思いきり泣いていいのよ。我慢しなくていいのよ。だけど泣き終わったらウジウジせず元気になりなさい。男の子だから………ね？」

「うああああん!!」

顔に似合わないくらいのみつともなく彼は泣き始めた。

とても辛かったのだろう。

とても苦しかったのだろう。

私達のそんなやり取りに赤髪の女の子や青髪の女の子だけでなく、騎士のみなさんも感動して涙を浮かべてハンカチを拭いていた。

もう大丈夫だから。お姉ちゃんが慰めてあげるからね？

私はそう思いながら胸の中で彼の背中を優しく撫でて、慰めるのだった。

「いや、なにこの茶番。マミ先輩、なに敵を慰めてるのですか？」

「黙りなさいシノン。彼を最優先に慰めなければならぬのよ。お姉ちゃんとしての使命が私をそうさせるのよ」

「いや、知らんがな……………」

なぜかシノンに呆れられるはめになった。私のどこが悪いのだろうか？

というかなんで私はこの子のことを『弟』と思っているのだろうか？

そんなことを思っていると黒髪の少女とピンクの髪の少女が現れた。

それから優しい声で泣きじやくる少年に話しかける。

「ソラくんー？　なーにマミさんのところで泣いてるのかなー？」

「お仕置きの間よ」

ビクツと銀髪の少年は反応し、彼は私の胸から離れて一目散に逃げ出そうとしていた。

しかし、彼は黒髪の少女が投げた鎖で身体を拘束されてしまった。彼の顔はとても蒼白でガタガタ震えていた。

「あは♪　震えちゃってかーわいい♪」

「いじめがいがあるわあ……………」

恍惚した顔で二人の少女は震える少年を見つめていた。

……………なぜか知らないけどどこかで見たことある光景だと思った。

あと、少年の震えた姿にキュンツときたのは秘密だ。

「嫌だ……………嫌だ……………」と少年は呟くが無情にも鎖を引かれていき、彼女達の元へ着いた。

「いくわよ、さやか、杏子。ソラも回収したし。後はキリトと合流するわよ」

「はいよ」

「なんかこれでいいのかな感があるのだけどさやかちゃんはまだもう気にしないことにした」

杏子とさやかという少女達は微妙な表情で彼女達のところへ飛んで向かった。

「助けてお姉ちゃん！」

……………その言葉を聞いたとき私は思わずマスケット銃の引き金を引いた。

魔弾は黒髪少女の元に向かったが、魔力の弓矢で弾かれた。

「どういうつもりかしら友江マミ。あなたには『コレ』と関係ないはずよ」

「え？ まさかの『コレ』扱い？」

「ソラくんが怯えてるじゃない。いったい何をしたらそうなるのか教えてほしいわね」

「あれ？　なんで敵の子の名前知ってるの？」

度々入るシノンのツツコミに私は足元への発砲という脅迫で黙らせる。

人の会話中は余計なツツコミはいらないのよシノン？

「さっさとその子を解放しなさい。でないとお姉ちゃんは許さないわよ？」

「あら、ソラの名前ですら覚えてない人が今更、お姉ちゃんぶるなんてね………………。どうかしてるわね」

「どうかしてるのは認めてあげるわ。だからさっさと解放しなさい、黒い子」

「お断りよ」

「離しなさい。聞こえないのかしら？」

お互い青筋を浮かべて睨み合う私達。視線が火花が散るような幻想を私は感じた。

騎士のみなさんやシノンもなぜかオロオロと困った表情をしていた。

すると向こうから足音が聞こえてきた。どうやら私達の援軍が来たようだ。

黒髪の少女は残念な表情で嘆息を吐いた。

「ほむ……………どうやら時間切れね。次に会った時があなたの年貢の納め時よ」

「上等よ。私はお姉ちゃんよ。弟を必ず悪女から救いだしてみせるわ!!」

宣言するかのようには私はマスクेट銃を彼女に向ける。彼女は口角をあげて「楽しみにしてるわよ」と答えて仲間を連れて去った。

その時間こえたソラくんの悲鳴が私の心を締め付ける。

「必ず救いだしてみせるわ……………待っててね！ ソラくん!!」

「なにこのドラマみたいな展開は!?! てか、あの男の子がヒロインポジション!?!」

ツッコんだシノンに私がマスケット銃の引き金を引いたことに罪悪感がなかった。
私は悪くないもの♪

(ソラサイド)

ハッ！ オレはいつたい何を!?

気がつくところそこは大理石でできた建物ばかりの古代ギリシヤのような町にいた。

どうやら知らない間にほむら達に連れて来られたようだ。

「気がついたか？ よかった。さっきのお前はなんか……………その……………」

「言わないでくれ……………たまにああなるんだ……………」

「たまに!?!」

大体小四の夏辺り頃に起きるようになった。なつかしい。その時はよくママさんに

慰めてもらっていた。

あの人の母性が半端ないのは気のせいではないと思う。

そういえばなぜ心が軽いな……。誰かに慰めてもらったのかな？

「いや確かにあの胸で慰めてもらったからうらやま……。ゲフンゲフン。癒されて当然だろ」

「癒されていたのか？ なーんか記憶にないんだけど……」

オレはそう思いながら巻かれた鎖を力技で引きちぎり、身体を鳴らす。

それからキリトに状況を聞き出した。

オレ達は一度態勢を立て直すために、天空都市『アインクラッド』に移動したらしい。

そこは様々な事情で移住せざる得ない人達や種族が集まるところで、軍隊は連合組織と名乗って活動しているらしい。

なるほど、つまりここはキリトの根城ということだろう。

……。……。……。いつの間にか巻かれてたんだオレ？

「それは……。……。いや思い出さなくていい。俺から見ても黒歴史確定だから……。……。」。やめて。その気まずい顔で同情するのはやめて」

正直辛いです、と呟いているとどこかへ出かけていたまどか達が帰ってきた。

傍らには赤毛の無精髭を生やしたオジサンらしき人物がいた。

「まどか、お前それはないだろ。そんなオツサンに乗りかえるなんて初体験を共有した身が悲しい……………」

「安心して。私はソラくんとはむらちゃん一筋だから。というかハーレムエンドを目指しているから攻略しても見捨てないよ」

「オイオイ言いたい放題だな……………。つて誰がオツサンだ。オレはまだ二十歳だ。てか、まどかちゃんの野望が凄まじいし、遅しいなオイ」

それがデフォだからな、まどかは。伊達に詢子さんの娘だったわけである。

「話が脱線したがこいつはクライム。俺の仲間さ」

「クライム？ 犯罪者が仲間とはキリトも悪よのう」

「いやクライムだから。犯罪者のクライムじゃないから」

失礼。大体初対面は名前をよく間違えるのがオレである。

こんなことになったのは戦争後だからなあ……………。人をあんまり信じられなくなつてた時期だし。

「そんなそんなクライムがオレになんのようにだ？」

「別にとつて食おうつてわけじゃねえからそんなに警戒すんなつて」

「どちらかと言えば私が食べる方だけだ」

「まどかちゃんは静かにしような……………」

ゲンナリとした表情でクラインはそう言った。

歩きながら理由を聞くと、どうやらまどかから小一時間の自慢話とほむらの萌えポイント歩きながらしたらしい。

あまりの残念美少女に彼は第一印象が台無しだ、とぼやいていた。

「それはご苦労なこった。だから安心してこのまま犠牲になれ」

「すんなりと犠牲とか言いやがった!?! いや助けるよ! あの自慢話の無限ループから!!」

「知らなかったのか? 魔王からは逃げられないのだ」

「知らねえよ!!」

クラインがツツコむが無視する。いや魔王から逃れられないのは事実だし。そんなやり取りしていると目的地に着いた。

その中に入ってからキリトは渋い顔でオレ達と一緒にいたがなんでだろ?

オレ達が謁見の間らしきものに着くとオレを含めたまどか達の顔がピシッと固まった。

理由はそう目の前の人物。

——艶やかな白い髪

——ビキニ水着のような服装で、情熱の人特有の褐色肌
——スタイルも抜群だ。毛というものは毛は足にはないそんな
——

……………漢女。

漢おとしのような女性ではなく、女性のような漢おとしである。

スタイル抜群？ そんなもん筋肉モリモリのダイナマイトボディに決まってるだろ。

杏子「スゲー……………」

ほむら「確かにこれはスゴいとか言いようがないわね……………」

さやか「あまりのイロモノさにさやかちゃんはあるぐり……………」

まどか「スゴく……………いいね、その筋肉！」

「「まどか!？」」

筋肉フェチのヤツには魅力的なボディだろう。そういえばあいつのタイプって細

マッチョだったっけ？

肥満体型にあえてなろうかかと最近考え始める今日この頃である。

「それでクライイン。あの座ってる化け物は何者だ？」

「誰が化け物ですってエエエエエ!? しどい！ アタシは純粋な漢女おとめなのに!!」

「鑑見てこい」

即倒するほどの迫力満点のジユ○シツクパークが見られるから。

「彼……………じゃなかった。彼女はうちの連合の最高責任者のジャンヌダルク三世だ

……………」

キリトはゲンナリとした顔で答えた。なんとなくだが、これが連合を治めるリーダー
 というのはさすがにひどい。

漢女がリーダーで始まる軍隊ってどんな強くて変態な組織だよ。

「これがジャンヌダルクって……………」と呟くほむらと「しかも三世って……………いやな
 にこの180度違う、三世は」と愕然するさやかを尻目にまどかに杏子は首を傾げなが
 ら聞いてきた。

「じゃんぬって誰だ？ どつかで聞いたことあるな」

「私、知ってるよ。よく縄プレーで興奮しながら国に勝利をもたらして、魔女と蔑まれて
 からも罵倒に興奮しながら逝った人だよ、杏子ちゃん」

「そうなのか!？」

「嘘を教えるなよ!!」——あ、いや待て……………そういえばあの人も魔法少女だったから、事実……………かも?」

「やめて。あたしの知るジャンヌダルクが別の何かになるからやめて」

さやかに肩を揺さぶられながらオレは「それは保証できない」と呟くのだった。

とりあえず、言わせてもらおうよ。

「歓迎するわよん♪ ウフン」

作者、ちよつと楽屋に來い。

そう思いながらジャンヌから放たれたウインクという暴風を受けるのだった。

第七十四話

目の前のジャンヌという名の化け物にある意味目を奪われたオレ達はこれからのことを話した。

オレ達はママさん奪還でキリトはアスナを奪還。

ジャンヌはオベイロンの陰謀を阻止したいとか言っていた。

詳しい話を聞こうと思ったが、もう日が暮れており、明日の会議で話すらしい。

それから部屋を案内されて羽を休ませてもらえらることになった。オレ達にとってゆつくりできる部屋を用意されたことは喜ばしいことだ。

またお風呂や食事も豪勢だったのでよかった。

余談だが杏子の食漢っぷりが発揮され、料理長も苦笑せざるなかつたと思う。追加が出るほどだったからな。

「んで今現在、宛がわれた部屋にいるわけだが……………」

「ほむらちゃん、例の写真撮れてる？」

「ええ、バツチリと。ソラの写真も撮れたわ」

「あんた達なにを撮ったの？」

「「黙秘権を行使する!!」」

「いやホントなにを撮ったの!?! 逆に気になるんだけど!」

なぜこいつらと同室なんだよ……………。誰か……………。癒しをください……………。

「アタシの胸かしてやるから、泣いとけ」

杏子の優しさに思わず泣いてしまったオレである。

まあなんにせよ。夜はすぐに過ぎていった。

閑話休題

翌日の会議室にて、オレ達は集まった。

「おはよう。勇者ちゃん達」

「おはよう。あと勇者ちゃんはやめろ」

「あら、お気に召さないかしらん？」

まあな。勇者つてなーんか正義感の塊というか独善的な存在というのがオレの印象だし、あんまり呼ばれたくない。

だから魔王か帝王で頼む。

「あ、それじゃ私は美少女女神で」

「私も美少女悪魔で」

「美少女剣士と呼ばれることをさやかちゃんは所望する」

「アンタら無駄に美少女つて言う単語に括るな………………。ちなみにアタシは美少女シスターで」

うむうむ、女の子は大体呼ばれたい単語ランキングにランクインしている言葉である。当然だろう。

「ちなみにアタシはどうかしらん？ 美少女？ 美女？」

「「究極合成魔獣アルティメットキモス」」

「だあるえが、『おばあちゃんを見た、未確認生物キモス』ですってエエエエエ!？」

「「「自覚してるじゃん」」」

「ムキヤアアアア!!」

ハンカチを噛み締めるジャンヌにオレ達は目線を逸らす。

だつて事実じゃん。

「お前よく堂々と言えるなそんなこと……………」

「言いたいことをハッキリ言つてやれつてよく師匠に謂われてたからな」

「それでキレイたら襲つてきたらどうすんだよ?」

「え? 普通に殴り返して、骨か関節を外して、後は湖か海もしくは山に捨てるけど?」

「なに当たり前に恐ろしいこと言っちゃつてるのお前!」

「あ、これも師匠から教わつたことだから」

「アンタの師匠こえーよ!!」

クラインがツッコむが怖いのかこれ? ノエル(変態)の場合、社会的に抹殺できる写真を撮られたりするのだけど、オレはそっちの方が怖い。

「まあいいわん。オベイロンの目的は他国への進軍みたいなのよん。それも奇襲のような形でね」

「他国への進軍つて……………確か妖精の国つて不可侵条約で国境に関所があるから奇襲なんてできるはずが……………」

キリトの言う通り、他国の国境にはそれぞれ関所があり、通行税は取らないものの、通行書がなければ侵入できないシステムである。

キリトはこれが理由で密入国したらしい。どうもアバロン王とオベイロンに顔を知られているため、警戒させないように考えたようだ。

リーファの計らいによりアバロン王やオベイロンにはまだ知られてないらしい。

「そうアタシもそう思ってたわ。だけど間者の報告でそうはいかないことが判明したのよん」

「どういうことだ？」

『『全てを開く者』』。その神器の力が彼は保有しているそうよん』

「『『え!』』」

驚いた表情でまどか達はオレを見る。まだ説明してなかったけど、色や形は違うものの神器は複数存在する。

オレやまどか達の神器はたった一つ——というわけではないのだ。

まあ、オレ達の神器はどちらかと言えばレアな部類だから滅多に同じ神器は見られないが。

そのことを説明すると納得した顔でホッと息を吐いた。

なんでだ？

「いやソラくんがオベイロンと影で繋がっているという疑いがあつたから……………」
「ねえよ。大体、知らないヤツに手を貸すほどオレはお人好しじゃないし、どちらかと言えは千香がやりそうなことだ」

「……………そういえば千香ちゃん、リリなの第三期の黒幕と友達になつたんだっけ」

はあ、とオレ達は千香の非常識さに呆れながらジャンヌの言葉に耳を傾ける。

「話を続けるわよん。最初に言っておくけど、オベイロンは神器使いじゃないわ。どちらかと言えば一般兵士と変わらないわ」

「じゃあなんで『全てを開く者』が話に出てくるんだ？　神器使いじゃないのに」

「その『全てを開く者』は神器じゃないのよん」

神器……………じゃない？

いったいどういふことかと聞くと予想外の答えがかえつてきた。

『転移結晶』という魔道具を応用されて作られたと思われる魔道具——アタシ達は『転移の扉』と呼んでいるわ。この扉は城門サイズで大部隊の軍隊を移動させれることができるわ」

つまりオベイロンがその気になれば首都や重要拠点を占拠できるという可能性が出てきたということだ。

「けれど、まだまだ不安定で量産化はまだされてないのよ。アスナ王女との婚約はその

資金と技術力の向上の目的ね」

ジャンヌの説明でキリトは拳に力を入れていた。

怒り——アスナとの婚約はそんな目的のためか、と言わんばかりの感情が彼から感じた。

「ジャンヌ。聞きたいことがある」

「何かしらん？ スリーサイズならベッドの上で大歓迎よ」

「死んでももらえない情報だ。知らなくていい。オレが聞きたいのはオベイロンの最終目的だ」

オレの言葉にジャンヌは口角をあげる。こいつはわかっていたな。オベイロンの最終的な野望が。

キリト達は頭に？をあげていたが、まどかはオレに聞いてきた。

「ソラくん、それってどういうこと？ オベイロンの目的って進軍でしょ？」

「ああそうだ。だけどそれは足掛かりに過ぎない」

資源や物資を支配し、自国の戦力と持久力をあげる。これは戦争を始める前の下準備だ。

そのことをまどか達に説明してやった。

「戦争の下準備ってことは、敵国はこの世界の人達のこと？」

「最初はな。だけどそれが終われば次はどこになる？」

「それは……………」

まどかが気づいたようにほむら達も気づいたようだ。そしてそれを知ったさやかと杏子は険しい表情になっていた。

「まさか……………そんな……………」

「たぶんお前の予想通りだよ。ヤツの目的は『転移の扉』を使った

オレがそう言うと言とジャンヌは「正解よ」と答えた。

これは最低最悪の事態が起きているに違いない。

異世界の進軍でその世界の住人に迷惑をかけるだけでなく、抑止の存在の出現で大虐殺もありえるのだ。

「ま、なんのために異世界を征服しようかと思つたのかは知らねえが………」

やること決まつてる」

「ええそうね。それでソラはどうしたいのかしら？」

ほむらにそう聞かれてオレは笑みを浮かべる。

愚問だな。当然やることはシンプルで簡単な目的。

「決まつてるだろ？ オベイロンの野望をぶち壊す」

敵は決まつた。確定した。

敵は強大、だがオレ達の力は無限大。

全力全壊で敵対する者はなぎ払うだけだ。

オレはそう思いながら拳に力入れるのだった。

(?!:サイド)

王座の間にて、一人の王が命を散らした。

その光景を見た王女が泣き叫ぶという地獄絵図。

そしてその王の命を散らした元凶——オベイロンは高笑いしていた。

「くひゃひゃひゃ！……これで僕がこの国の王だ！ 目指すのはこの世界——いや異世界全てを統べる王!!」

友江マミはその光景を見てグツとマスケット銃を握りしめる。ここでオベイロンを退治したいが王女は今はどうしようもない状態で、その上オベイロンの配下が多い。

いつの間にかアバロン王を支持する者がオベイロンへと鞍替えしたみたいだ。

(耐えるのよ今は……………。きっと誰かが彼の野望を阻止してくれる……………!)

その想いは明日に叶うとは彼女はまだ知らなかった。

第七十五話

天気は雨。曇天に覆われた空の下にてオレ達はアバロン王の城——いやオベイロンの城まで来ていた。

今日、朗報があつたのだ。アバロン王がオベイロンに殺されて国はオベイロンが乗つ取つた、と。

ジャンヌはこれを好機と見てオレ達に襲撃の先陣を選んだ。

ちなみにドコでもドアで城内の侵入はバツタリ遭遇というリスクがあるため、城の前までにした。いきなり接敵はキツいだろ。

「皮肉ね……………お姉ちゃんの結婚には納得してなかったけど、騎士としての役目を果たそうとしたあたしがまたここに戻ってくるなんて」

「リーファ……………」

「大丈夫。あたしのお姉ちゃんを踏み台としか見ない輩には躊躇しないよ」

さやかに向かつてそう言うリーファだが、自国の第二王女である彼女は気乗りしないものだろうな。

そんなことを思いながら木でできた橋の上まで来た。そこにはトゲトゲ頭の男とそ

「こここの部隊が待ち伏せていた。」

「ワイは暁部隊隊長キバオウ！ 賊共め、ここでお前の年貢の納め時や!!」

「……………いやマジで誰、あれ。」

キリトに視線送るとさあ、と手をあげていた。

有名どころか知り合いじゃないしな—。

「あいつは確か……………ごめん、リーファ知ってる？」

「特効部隊のキバオウよ。ほら、よく演習でさやかがコテンパンしていたザコよ」

「ああ！ あのウニ野郎ね—」

「誰がウニやねん!!」

さやかに詳しく聞いてみるとどうやらきば……………——忘れた。面倒だから松

ぼつくりでいいや。

松ぼつくりは何度もさやかかの部隊に嫌みや冷やかしにににに来ていたという嫌がらせをしていたそうだ。

『女の部隊なんかへなちよこやろ』とかほざいた結果、遂にぶちギレたさやかが演習中で松ぼつくりを含めた部隊を蹂躪してコテンパンにしたそうだ。

松ぼつくりザマア、とオレは思ったのは悪くない。

「その女共が裏切ってくれたおかげで遠慮なくやれるわ！ 覚悟しい！」

こうかはばつぐんだ!!

「ワ……………イは、松ぼつ……………くりや、ない……………ブツ」

「黙れって言うてるだろバカ」

とどめに再び顔を踏みしめて松ぼつくりは今度こそ戦闘不能になった。

とりあえず邪魔なのでオレは倒れた部隊を全員、橋から投げ捨てた。橋の下は湖だから死にはしないだろう。

溺死になることは知らないけど。

「よし行くか」

「お前の鬼畜さに改めて恐怖したよ……………」

呆れた表情でキリトにそう言われた。

まだか、ほむら。オレは鬼畜だろうか？

「ぬるいわね。私なら落とした後に手榴弾を投げ込むわね」

「私ならもう一回魔力矢を撃つよ」

だつてよ、キリト。

と言ったが彼は冷や汗を流しながら無視してズカズカ前に進むのだった。いとかなしである。

閑話休題

まさかの正面突破にアバロン軍達はパニックであった。

普通は正面突破で突入しないからなあ……………。

ちなみにドコでもドアで連合の援軍部隊を連れて来ていたりする。

「よし、ザコは連合に任せてオレ達は」

と言った矢先に何者かが斬りかかってきた。銀髪長髪の美形青年である。

その斬撃はキリトによって防がれた。美形さんは一旦退いてオレ達に向けて言い出す。

「見事。なかなかのお相手だとお見受けする」

「アンタ、何者だ？」

「失礼した。お初にお目にかかる者がこのようなことをしたことは確かにいただけいな。わたしは銀貨部隊のディアベルと申す。貴公に決闘を申し込む」

指名されたのはキリトだ。オイオイ、乱戦の中で決闘するつもりかよ。

「大丈夫だ。任せろ」

「……………勝てるのか？」

「勝てるじゃない。勝つんだよ——俺は」

キリトはそう言いながら神器を召喚した。

『ダークパルサー』と——パワーを徐々に上げていく神器の『エリツシュデータ』。

まさかのスピードとパワーを高める神器が揃っていた。キリトはどうやら二つの片手剣という二刀流のようだ。

魔剣と聖剣の二刀流使い。聖騎士や魔剣士が見たらケンカが勃発しそうだなとオレは思った。

そして、それが神器使いキリトの本来の姿だとオレは次の光景を見てそう思った。

ディアベルに向かって「おオオオオオ!!」吠えながら駆け出し、右手の魔剣で斬り込み、ディアベルの盾が防がれたとき、左手の聖剣で斬りかかる。

その繰り返しも言える攻撃がディアベルを防戦一方にさせた。

もはや防御を捨てた回避と攻撃しかない。

袈裟、突き、上段斬りから下段斬りと連続斬りがディアベルの盾を徐々にヒビを入れている。

「ぐっ、だがまだ——」

『スターバーストストリーム』……………」

キリトから技名が漏れたとき、キリトの斬撃が高速の十五連撃へと変わった。

『エリツシユデータ』の能力が最大限に発揮されたのか、スピードは高速へと変わり、『ダークパルサー』の能力が発揮されたのかパワーがこれまでと桁違いになっていた。

二、三の斬撃で盾は砕け散り、剣で防御を謀ろうとするディアベルだかもはや遅い。十五連続の残りの斬撃が彼に襲いかかる。

「がアアアア!!」

全て受けたディアベルはキリトがとどめの蹴り与えて、後方へ吹き飛び、壁に激突した。血は流れているが死んでいないようだ。

意識を失った彼に向かってキリトは言葉を出す。

「俺はアスナを助ける……………どんな相手だろうと戦つてやる」

決め台詞乙。オレはそう思いながら足を次のところへ向けるのだった。

☆☆☆

城内に侵入したオレ達は先へ進む——が、また誰かが待ち伏せていた。

今度は初老の男性に片手には真っ白な剣が握られていた。

あの剣に……………オレの長年の勘は何か嫌な予感を感じさせた。

「こんにちわ諸君。私はオベイロン直轄の護衛騎士、名はアーサーだ。君達が来るのを

待っていたよ」

アーサーの言葉を聞いてオレ達は一斉に神器を構える。

こいつは………強い。間違いなくオレの直感がそう告げていた。

「しかし多勢に無勢ではいくら私も骨が折れる。よつて——分断しよう」

アーサーが指を鳴らした刹那、ガタツとオレとほむら、まどかの床が扉開きになった。

ちくしょう、やられた!!

「では良き御旅を………」

「覚えていろクソジジイ——!!」

オレ達三人は空しくも悪態をつきながら落ちてゆくのだった。

第七十六話

(アスナサイド)

さつきから外が騒がしい。なんなのかしら。王座の間まで聞こえるこの騒ぎはいつたい……………。

するとマミさんがマスケツト銃を取り出して、王座の間から出ていこうとしていた。

「マミさん?」

「姫様、しばらくここにいてください。私は外の騒ぎを治めてきます」

優雅にお辞儀をし、武装メイド隊を連れて彼女は自身の戦場へ向かっていった。

もしかして……………この騒ぎはキリトくんが?

そうだとしたら私は喜ぶべきなのだ。しかしマミさんのことも考えると……………。

私はただ二人の無事を祈るのだった。

(ソラサイド)

薄暗い地下にてオレ達三人は前へ歩いていった。地下はまるでドーム状のような天井で迷宮のような壁で覆われたつくりだったので抜け出すことは困難だった。

「とりあえずドコでもドアを——」

「ソラくん、そこから離れて！」

まどかの言葉に反応したオレは咄嗟に引くと銃弾がオレがいた場所に飛んできた。

——狙撃………いったいどこから？

オレはそう思いながら辺りを見回す。

次の弾丸がまどかに向かつて飛んできたのでオレはそれを弾いた。

「狙撃手がいるようだな。確か………誰だっけ？」

「よしのんだったと思うわ」

「いや違うからほむらちゃん。シノンちゃんだよ。私は覚えているよ」

まどかはライバルを見つけたかのような表情で言っていた。そういえばまどかつて後方支援タイプの狙撃手みたいな立ち位置だっけ？

まあ自分と同じくらいの強さの相手を見つければ試したくはなるわな。

「だから一対一でやらせて」

オレ達の答えは当然決まっていた。

「だが断る」

「なんで!?!」

ほむらと一緒に言うとまどかがツツコんだ。なんでってそりやあなあ
.....。

「まどかが勝てるイメージがわからないわ」

「例えるとあれだ。スナイパー持ったゴルゴV S たわしを持ったゆるキャラぐらいの難易度だ」

「それって無理ゲーってこと!? ひどい言われようにまどかさんは泣きたくなくなりました……」

プクツと頬を膨らませるその姿に萌えを感じていると再び狙撃がきた。

無粋なヤツめ。というわけでほむら、お願いね。

『リリース』

カチャンと音が鳴った瞬間、魔弾が発砲されたところへ吸い込まれるように逆行していった。おかげ居場所が特定できた。

まどかが頼りないというのが理由だけではなく、ほむらの逆行があれば最初からこれは勝負にならないのだ。

「といわけだ。撃て」

「こうなったら八つ当たりだよ!!」

まどかの流星群のような魔力矢が放たれた。あつという間にその場所が吹き飛び、残されたのは香ばしいにおいになったポロポロのシノンだった。

そんなシノンにゲシゲシと踏んでいるまどかを尻目にオレは彼女達に向けて言い出

す。

「よし、シノンを縛ったら人質にして先に進むぞ」

外道？ はて、なんのことやら？

☆☆☆

そんなこんなでドコでもドアを使って地下から抜け出し、オレ達は広場に出た。

そこには待ち構えるように武装したメイド達が整列していた。

「これぞまさしく冥土界だね……………」

「上手い。山田くん座布団一枚」

「誰が山田だ。ま、冥土に送ろうものなら返り討ちだけど」

何て言う軽口を言っていると、武装メイド達の中からマミさんが前へ出て現れた。

「昨日ぶりね……………暁美さんと、鹿目さんでしたっけ？」

「!!」

マミさん、まさか……………前世の記憶を？

いやまだわからない。オレはとりあえず彼女を話し合うことにした。

「マミさん、なんでこいつらの前世の名前を知ってるのかわかりますか？」

「あら、前世からのお友達だなんて電波発言にもほどがあるわよ、ソラくん」

「いやオレ、不思議くんじゃありませんから。とういかなに近づいてきてるのですか」

「近づかないと頭をナデナデできないでしょう?」

「え、なにこの人。なんでオレにだけフレンドリーなの?」

オレの頭を撫でながらまだか達にはマスクを構えている器用さに脱帽ものである。

なんでまだか達だけに敵意を表しているんだ……………。

「なんで私達にマスクと銃を構えるかは置いといて、マミ。大人しくソラから離れなさい。さもなければシノンの顔に油性ペンで鼻毛を描くわよ」

「あ、じゃあ私はおでこに肉を」

「マミさん助けて!!」

ある意味危機に瀕した彼女はマミさんに助けを請う。

「お断りよ。どうぞ、好きにしていいわ」

「マミさあん!?!」

裏切られたシノンの顔はまだかによってどこから取り出した油性ペンで鼻毛や肉を書き出し始めて……………。プツ。

もうあれは女性として終わってるくらいに落書きだな。

メイドのみなさんも笑ってるし。

「茶番はそこまでにしましょう。あなた達の目的はわかりませんが——

—— 姫様に害なすものには変わりません」

だからとマミさんはオレの頭を撫でるのをやめて、両手にマスケット銃を構える。

「排除します」

「やれるものならやってみなさい」

ほむらはまどかかを退かせて前に出た。マミさんの対戦相手は決まった。

「私が相手よ。かかってきなさい」

かつて激しい銃撃戦を繰り広げた二人の戦いが始まろうとしていた。

「……………これとれるかなあ」

「さあな。まあ、洗えば落ちるんじゃないやね？」

「石鹸で落とさない限り落ちないペンだからね。ティヒヒヒ、自分でも傑作だよ、これ」

「お前の笑みに邪悪なものが戻ってきたと思うのはオレだけか？」

シノンの落書きはなかなか落ちなかったことをここに追記しておく。

第七十七話

銃撃戦再びである。

どこかのヤサイ星人のように発砲したところを足や手で逸らし、そこから発砲するが相手にも足や手で逸され、お互いかすることなく、無傷で撃ち合っていた。

「つてめちやくちや危ないんだけど……………」

「いくらなんでもこんな広場で撃ち合いは勘弁だよう……………」

とぼやきながら召喚した『ガイアの盾』という魔道具の壁に隠れながら彼女達の戦いを見守っていた。

「シノン、今こそお前の雄姿を」

「見せないわよ。行けっつか？ あ的地獄へ逝けっつか？」

無理か。周りにいたメイドさん達もあの二人の攻防で緊急退避しているからいないし。

てか誰か彼女達を止めてください。

これじゃあ、前に進めないから。

そんなことをお構い無く彼女達の攻防は続く。しかも言い争いをしているし。

「ソラくんは渡さないわよ!! お姉ちゃんとしてあなたの好きにはさせないわ!」
「はっ、私はソラとは相思相愛の主従関係よ。今さらお姉ちゃんぶつても無駄よ!」

普通は相思相愛の恋人じゃね?

あ、恋人はまだどかって決めてたな、あいつ。

「そうなんだ。あ、ちなみに私の場合はお嫁さんがほむらちやんでソラくんは愛人だよ」
「知るか。つーか浮気すんなよ。どんだけ黒いんだよ、お前」

「不倫と浮気の背徳感ってたまにいいよね、ティヒヒヒ」

「駄目だこいつ。早くなんとかしないと」

オレがそう言っていると広場がモノクロの世界になる。オレはシノンとまどかに触れて、時間停止の呪縛から逃れさせた。

「止まった? 世界が?」

「久しぶりに見るねほむらちちゃんの時間停止。というかなんでソラくんには効かないの
だろ?」

それはたぶんオレの神器（全てを開く者）のせいだろう。この神器は『概念』にも干渉できる代物だ。

『止める』という概念にオレは無意識に『解錠』させて自分だけ動けるようにしているとオレは推測している。

まあ前世で時間遡行もほむらに巻き込まれる形で遡ってたからな、オレ。

撃ち合いはさらに白熱し、ほむらとマミさんが跳んで撃つては回避、撃ち返しては回避されるという攻防を繰り返していた。

終いには銃弾で描かれた花のような形の線上が出来上がった。

「なつかしいなあ……………。確か、これが解除された後に嵐のような銃弾に巻き込まれたんだよなあ……………」

「よく生きていたねあんた。どうやって乗りきったの？」

「全部打ち返したただけだけど？」

「どんな人外よ!？」

そこまで驚くことだろうか？

オイ、まどか。なに人を「相変わらずの人外」って言ってるんだ。オレはまだ人間やめてないぞ。

「はあはあ……………」

「ふうふう……………」

カチヤン

「危ない！」

ほむらの声が聞こえ、顔をあげた。

そこにあつたのは——鮮血。

その血をマミさんは顔に浴びて呆然としていた。

「マミさんの血でもオレの血ではない……………朱美ほむらの血。肩から切り裂かれた彼女はマミさんにもたれ掛かるように倒れた。」

「ほむ……………らさん？」

「ぶ、じみたい……………ね……………」

ほむらを斬った相手は黒いパーカーを着た男で再び彼が持つ片手剣でほむらとマミさんに斬りかかろうとしたところをオレが神器で後方へ飛ばした。

「マミさん！ 止血！」

「あ……………う……………」

「良いから早く！ でないと手遅れになる！」

クソッ！ ほむらは血を流しすぎている。早いとこ止血しないとホントにヤバイ。

目の前の敵に集中しているとほむらが弱々しい声でオレに話しかけてきた。

「そ、ら……………私は平気よ……………」

「しゃべるな！ 今マミさんが止血してくれている！」

「ふふ……………焦らなくて、も……………大丈夫よ。ゲホゲホ」

吐血するほむら。マミさんが必死で止血しているが彼女は風前の灯火。

「こんな……………こんなことってありかよ!？」

歯を食いしばっていると「そら」と声をかけられたので振り返ると、ほむらはニッコ

りと微笑みかけて、オレに手を伸ばしながら言葉を出す。

「大丈夫……………私は死なないわ……………だから泣かないで、戦って……………。みんなを……………」

————おね、がい……………」

ほむらはそう言つて目を瞑り伸ばした手が地についた。

……………なんだこの感情は。

前にも感じたことが————ある。

「すいまやせん兄貴。仕留め損ねました」

「別にいい。おかげで戦う相手が減つて好都合だ」

「あ、あなた達は指名手配犯の殺人ギルド！」

部下に続いて今度は三十人くらいの同じ服装の集団が現れた。

ママさんの言葉にオレは心当たりがあった。

殺人ギルド『スコープオン』。

金で雇われればなんでも暗殺する殺人ギルドだ。つい最近、どこかの貴族を殺害して

指名手配されていた。

「なぜあなた達が？」

「そりゃあオベイロンが俺達を雇ったからに決まっているだろ？ 依頼は友江マミの暗殺だからな」

リーダーの男が説明するには、オレ達の襲撃を合わせて

暗殺する予定だったそうさ。オベイロンはオレ達の襲撃を見越して、雇ったそうさ。

「だがまあ、その嬢ちゃんのおかげで友江マミは疲労で長く戦えないみたいだな。おまけに治療を専念しなきゃならない状態だしな」

「クツ」と悔しそうに睨むマミさんを見てリーダーは下品な笑みを浮かべる。

「感謝すんぜ嬢ちゃん。そのお礼に真っ先殺してやるから」

———
今、こいつなんつった？

オレは神器を握る力をさらに込めながらフラリフラリと前に出た。

「なんだこのガキ？」

「……………す」

「は？ なに言ってるんだ？」

「どうでもいい。殺れ」

リーダーの指示に従い、部下がオレに向かって斬りかかる。

オレはそれを神器で受け止めて、止まったところを——首に向けて手刀を放った。

「ガフ……………？」

「なっ……………」

斬りかかった部下は首を貫かれて死んだ。

殺したのはオレ。

それが信じられないようにリーダー達は見ていた。

あ、そうか。やつと思いついた……………。これはあの時と同じだ。

——師匠を失ったときの憎悪だ

オレはママさんに振り返って言い出す。

「ママさん……………ここから先はオレに任せてください。ほむらを連れて逃げてください」

「だけど、それだとソラくんが！」

「オレは大丈夫です。無事に帰ってきます」

「そうじゃなくて……………わかったわ。ソラくん、一つお願いしていい？」

「なんですか？」と答えると彼女は辛そうな微笑みを浮かべて言った。

「私やみんなはいつまでもあなたの味方だから……………一人にならないで」

それを最後に彼女は振り返らず、ほむらを連れて逃げた。

—————いつまでもあなたの味方、か。

ママさんはオレが今からすることを理解しているのだろうか。

そう思うと笑みがこぼれる。自らを皮肉する笑みだ。

今からすることはママさんには見せられない。みんなにも見せたくない。

—————最低最悪な所業。

「よくもやってくれたな」

「それはこつちの台詞だザコ共」

「ザコ共、だと……………？」

「そうだろ。快楽で殺人を犯し、殺すとしても暗殺しかしない腰抜け共をザコと言わずしてなんというっ？」

「貴様………」と青筋を浮かべるリーダーだが、オレは気にしないし、どうでもいい。だって敵だから。

懺悔しても許しはしない。

後悔しても遅い。

ただ殺すだけ。

「だから安心して——とっと死ね、ゴミ共」

さあ始めよう。

あの時のように。

師匠を殺されたあの時の憎悪の赴くままに。

「敵は皆殺しだ………!!」

蹂躪が今まさに開始されたのだった。

第七十八話

蹂躪する。オレは周りを切り捨てる。

神器だけでなく拳を凶器に変え、貫き、抉り出して殺し。

時には普通の剣を握り、五体不満足へと変える。

オレの顔は返り血で汚れ、紅く染まっていた。

周りが逃げる——だがお構い無しに切り捨てる。

周りが命乞いをする——だが許さず切り捨てる。

大人しい龍の逆鱗に触れてしまった愚か者達は希望を踏みにじられ、絶望へと貶（おとし）められた。

「ハ、ハ、こんなことが……………」

最後に残ったのは『スコープピオン』のリーダー。

もはや戦意はなく、怯えた表情になっていた。

「……………死神らしくない殺し方をしてしまったな。まあいいか。どうせ昔の話だし」
「死神……………まさか、お前はむけつ——……………」

一閃。

神器で縦から斬るとリーダーは人形のように崩れ落ちた。

残されたのは顔は血で汚れ、身体は血で汚れていない——『死神』のみ。

「スマホ、スマホっと……………」

オレはまどかに連絡をとるため、ラインを送る。

返信にはほむらが治療のため、マミさんと一緒に医者のところに向かっているらしい。

……………予断を許さない状況らしい。

『そっか。んじゃ、ほむらを任せたぞお姫様』

『ソラくん……………どうするつもり？』

『ちよつと目的変更。オベイロンの野望は阻止するよ。けど——』

——敵対するヤツは皆殺しだ』

オレはそう伝えるとスマホを仕舞って一息をついた。

やれやれ……………ホントに面倒だ。

「う、オオオオオ!!」

「うるさい」

ボキイ!!

背後から来た残党の首へ蹴りを入れた。ボキイと嫌な音を立てて、そいつは絶命した。

「さてと……………連合の助太刀するか。一応、味方だし」

敵は殺すけどな、と誰も生きていない広場でそう告げた。

—— さあ、始めようか。最低最悪の争いを。

(キリトサイド)

俺とアーサーの戦いはかれこれ一時間くらいになった。

何合も斬り合ったがこれだけは確信があった——

—— 勝てる気がしない、と。

二刀流を駆使しても、意表をついても全て防がれ、反撃されて力負けしてしまう。まるで『アーサーには勝てない』というルールがあるかのように。

勝敗の壁が俺の前にあるかのように。

「クソツ……………はあはあ」

「若いながらなかなかの剣技だ。しかしそれでも私には勝てない」

『エックスカリップ約束されし勝利』

その白き光を放つ剣がアーサーの持つ神器だ。

この神器には『絶対に勝つ』という概念があり、持ち主に『敗北』はないという能力がある。

つまりアーサーには力『負け』、打ち『負ける』という文字がないのだ。

ジャンケンで絶対に負けないようにアーサーは負けないのだ。

「私には『敗北』という文字がないのだが、まさか執念だけでこうも長く戦えるとは……………」

だがこれまで、とアーサーは告げた。

そうだ。俺の身体は切り傷で血が流れ、服もズタボロ。

満身創痍な状態なのだ。

アーサーは神器を振りかぶる。

クソツ……………これまでか。

アスナを救うためにこれまで戦ってきた。諦めず、ただ前へ前へと進んできた。だけど、どうしようもない。なぜなら相手は絶対に『負けない』相手なのだ。歯を食いしばりながら悔やみ、俺に断罪の剣が迫る——

ベ
チ
ヤ
ツ

アーサーの顔に何か当たり、汚れた。それは血で汚れた人体の一部である——
腕。

誰かの腕がアーサーに当たったのだ。

「そいつを殺すのだけは勘弁な。そいつは味方だから」

俺はそいつのことを知っていた。

その人物はそう言ったが、いつものような気がなさそうな感じはなく、あるのは

——冷たい殺意

その姿に俺は思わず叫びたくなかったが我慢した。

………だつてそうだろ？ そいつが引きずっていたのは動かなくなった兵士の死
体なのだから。

「……………その者が貴公が殺したのか？」

「ああ。賊め賊めとかうるさかったから見せしめに片腕をその辺の剣で切り落として神器で殺した。ま、おかげで周りも戦意損失してくれてこちらが殺すのにも楽にはかどつたよ」

「戦意無き者まで殺したのか、貴様！」

「ああそうだけど……………悪い？」

ソラは無表情で言った。それを聞いてゾツとした。

自分がしたことに悪びれることなく、正しいのだと断言するかのよう。

俺が知る神威ソラじゃない気がした。まるで歴戦の猛者で、恐怖を与える死神。

なぜか味方なのに恐ろしいと思った。

「ここはもう戦場だ。立つ者全てが戦士だ。駒だ。軍師は勝利へ導き、王は兵を鼓舞させる。ならば兵の役割はなんだ？」

そんなの決まってるってソラは続けてそう言った。

「敵を排除することだ。敵対する者は殺す。女だろうが子どもだろうが関係ない。立つ者全てが戦士なのだから、殺されて当然だ」

納得できなかったが……………ソラの言葉は否定できなかった。戦場に立つ者全てが戦士だ。

だからそこで殺されても当然であり、相手を殺してしまふのも当たり前だ。

たとえ親族であろうと友人であろうと恋人であろうと、敵であれば自分か他のヤツの手にかかって殺されるだろう。

……………なぜなら戦争の敵^{相手}だから。

「貴様が手にかけてその者はこの国の未来を思つて志願した者だぞ。親族や恋人のために戦おうとした者をよくも……………」

「だから、何？ 素直に殺されてろつてことか？ ふざけるな、偽善ヤロー。それならこいつを殺して自分が生きるに決まつてる」

「外道め……………」

「よく言われるよ。んで、これからも言われ続けるつもりさ」

ソラは動かなくなつた妖精を投げ捨て、神器を構える。

「青い瞳、カギのような神器……………貴様、まさか『無血の死神』か？」

「どつちでもいいだろ。そいつはもう死んでるのだから。……………ま、そうだな。その異名をもう一度持つのも悪くない」

もう一度……………持つ？

どういふことか聞こうとするとソラは答えた。

「『無血の死神ソラ』の転生体、神威ソラ。要するに『無血の死神』そのものつてことさ」

『無血の死神』………つて確か神器使い達の戦争に返り血を浴びず、戦場を駆け抜けた英雄じゃないか！

まさかその英雄の生まれ変わりがソラなのか!?

「なるほど………それはなかなか厄介な………!」

「ま、今はどうでもいいから置いといてお前に言いたいことは一言。

——安心してとつと死ね」

そう言ってソラはアーサーへ斬りかかる。

今まさに死神と騎士の戦いが始まったのだった。

第七十九話

鳴り響く金属音。オレとアーサーの剣戟は火花が散るくらいの打ち合いだった。

アーサーが斬りかかればオレはそれを受け流し、オレが斬り込めばアーサーはそれを防ぐ。

奇襲も、意表をつくこともない純粋な剣術だけの勝負をオレはしていた。

「んっ?」

「気づいたようだがもう遅い。『約束されし勝利』!!」

アーサーの神器を受け止めていたオレだったが、急に押し負けてしまい後方へ飛ばされた。オレは足に地をつけて滑走させ、ようやく止まった。

「力負けしたのか……………?」

「どうだかな!」

アーサーがオレへ斬り込む。それを防御せずにヒラリヒラリと回避に専念した。

なぜか防御すれば押しきられる予感があったのだ。

この直感は長年培われた経験から感じてるものだ。

毒の神器を人目見たときこんな感じだったな。

「ソラ、そいつの神器は『絶対に勝つ』という概念が付与されてる!! 純粋な勝負を挑むな!」

なるほど、剣術がオレより上のキリトが負けた理由がわかった。受け流すことしかできず、攻めれば押し返される。

確かにそれは勝てないわな。

「だからどうした……………って話だ!」

「むう!?!」

オレとアーサーの神器がぶつかりあつたが今度は力負けせずに相討ちの形でオレ達は後方へ少し飛んだ。

驚いたヤツの顔はオレを見ているが、オレは気にせず斬りかかる。

再び力勝負になった同じ結果という形でオレ達は距離をとった。

「なぜだ……………なぜ私の神器が効かぬ!?!」

オレとの力勝負が納得できないのか、アーサーはオレに向かってそう叫びながら斬り込む。

確かに神器の能力は世界のルールと言つてもいいくらい絶対だ。

ただどアーサーは見過ごしている事実がある。それをヤツに向かって突きつけた。

「見過ごしている事実がある……………だと?」

「『絶対に勝てる』。確かにこれは持ち主が敗北することはありえない。だけど、それはオレが敗北に繋がるとは限らない」

「なぜだ？ 勝負とは勝つか負けるかの戦いのはず……………」

「それはトランプなどのカードゲームとかの話だ。今、オレが言いたいのは『なんでお前が勝つ』オレが負ける』って定義ができてることだよ」

例えばの話、オレとアーサーがジャンケンをするでしょう。アーサーは神器の力でオレに全勝する。それは確定事項だ。

——だが、オレは『全てのジャンケンに敗北』したわけではない。

ジャンケンにはアイコという引き分けがあるように、敗北も勝利もないルールがあるのだ。

『絶対に勝つ』 || 『絶対に負けない』というのがアーサーならば。

『アーサーに絶対に勝てない』 || 『アーサーに絶対に負ける』というわけではないのだ。

「というのがお前の『約束されし勝利』をオレの神器を使わずの攻略方法だ」

「……………待て、貴様。まだ神器の力を使つてないだと？」

「オレの神器つてかなーり燃費が悪いんだ。ここに来るまで結構使っちゃつて、後数十回くらいしか使えない」

だけどお前を殺せるには充分だ、とオレはアーサーに神器を向けていった。

別になめてるつもりはない。

アーサーは強い。手加減すれば殺されるのはオレだ。だからオレは今を全力で戦っている。………全力で殺しにかからないと勝てない。

「ならば使わせてみせよう！」

「上等だコラ!!」

アーサーが左からの逆袈裟斬りを放ち、オレは右斜めに神器を構えて受け流し、開いた胴体に蹴りを入れる。

アーサーは自身の足でそれを防御したので、オレはすぐさま掌底を打ち込む。

アーサーは肺から息を出されて後退したが、カウンターに腹へ蹴りを入れられてオレも息を吐き出された。

「くらえ!!」

体勢を立て直したアーサーの横一閃。

――― 防御すれば間違いなく飛ばされる

――― 全てを開く者 神器を使えば使用回数に限られる

ならば、とオレはそれを受け流す構えをとりながら、少し跳躍し、身体を地面に平行した。

迫ってきた斬撃の勢いを利用して回転してから着地した。

「なんと!?!」

「伊達に自分より力強いヤツと戦ってねえよ!!」

オレはすぐさまアーサーへ飛び込み、アーサーが防御の体勢に入ったところでアーサーに向けて神器を投げた。

アーサーは神器得物を投げたことに驚きながら、それを防ぎ神器を飛ばした。

——狙い通りに動いてくれて助かった。

オレはすぐさま横一閃の構えをとり、召喚術を発動。

アーサーはオレの神器全てを開く者に釘付けだったので出遅れた。

釘付けだった神器は消えて、オレの手元に現れ、それを握る。

「うらアアアア!!」

オレの全身全霊の斬撃をアーサーは間に合い、ガードした。

ニヤリと笑うアーサーだがまだ終わってない!!

オレはここで『全てを開く者』の力でアーサーの『絶対に勝つ』という概念を解錠でキャンセルした。

つまり今このとき『約束されし勝利』はただの剣となったのだ。ではオレの全身全霊の斬撃が直撃したアーサーの神器はどうなるか？

当然、弾き飛ばされた。驚愕してるアーサーに向けてオレはヤツの身体を数回斬り込む。その数回の斬撃で手足の動きを封印し、そしてアーサーの『約束されし勝利』の召喚を封印した。

「バカな……………この神器は……………」

「そう。お前の主人が保有している扉の元となった神器だよ」

オレは倒れたアーサーに向けて、神器を向ける。

「くっ……………私が……………私が負けるなど」

「ありえないってか？ 残念だ。『ありえない……………なんてことはありえない』。オレ

がお前に絶対に負けるなど『ありえない』

そう否定しながら突き刺した。アーサーの身体から魂を切り離した。

「ぐまあみろ。過信ヤローが」

オレはそう思いながら人形になってしまった騎士を冷たく見るのだった。

第八十話

戦いが終わった後にキリトはオレに対してあまり良い顔をしていなかった。きつと、まだ殺しを経験してないため、オレが人を殺したことに納得していかないのだろう。

それは正しい反応だ。オレもそう思う。

だけど、もうこの身は殺しに染まった。たぶん、オレはもう普通には戻れない。

けど、それでいいと思う。普通には戻れないかもしれないけど、『普通』を求めてはいけないと思わない。

それがオレの今の理想なのかもな。

そんなこんなでオレはキリトに肩を貸しながら王座の間までたどり着いた。ここにオレ達が求める者がいる。

——キリトはアスナを救いに

——オレはオベイロンをぶちのめすために

さあ準備はできたか？

オレがキリトにそう聞くと彼は不敵な笑みを浮かべた。

「当たり前だろ」

「なら、安心。ここから先はホントに血生臭い戦いだ」

暗に殺し合いを意味している。オレの魔力はもうあんまりない。

神器（全てを開く者）は後五回しか使えないからな。

さーて、蛇が出るか龍が出るか。

オレは扉を開けた。そこには

「さあ答えて。どこにギャルのパンティーがあるんだい？」

「知らねえよ!! てか、離せ! 僕を誰だと思ってる!？」

「え? ホント誰?」

「知らないのか!? 僕はこの——アツウウウウウ!!!」

……………オベイロンはいた。ただし足を吊るされた状態でパーカーで顔が隠した黒いレインコートを着た少女と同じ格好の少年という二人にいじられてる形で。

ボチャンと縛られたオベイロンが熱湯の釜に入れられた。グツグツ煮込んでいるからあれは熱いよ、きつと。

てか……………ホントなにこれなんだけど……………。誰か状況説明プリーズ。

ポカーンと呆然としてしているとドレスが崩れた茶髪の妖精の少女が泣いていた。

「う、うう……………」

「アスナ!? どうしたんだ!」

「キリト、くん……………私、汚されちゃった……………」

「つ……………! まさか、アイツに!?!」

ギロリと熱湯でどこぞの芸人のように氷に突っ込むオベイロンを睨む。しかしアスナは首を振る。

え、違うの?

キリトは詳しく聞くとアスナは答えた。

「あの……………パーカーを着た女の子に、その……………エッチな縛り方をされて……………」

「マジで!? つて汚されたと言うべきか、これは!」

「汚されたわよ! 主に私の常識が! おかげで……………ちよつと気持ちよかつたわあ……………」

「アスナさあん!? それ目覚めちゃいけないのですよ!?!」

「うるさいわね! そんなに文句があるなら縛りなさい!! むしろキリトくんならばバッチこい!」

「いやアアアアアアアスナが変態になったアアアアア!!」

シャウトしながら頭を抱えるキリトに、縄を出して危ない目をしながら興奮するアス

ナ。

……………なんか見覚えがあるパターンだな。

てか、アスナさん、もうやめたげて。キリトのライフポイントはゼロよ。

「ぜえぜえ……………おのれ、この女……………よくも僕にここまで屈辱を!!」

「まだ余裕みたいだね。じゃあ今度はこれどうぞ!!」

「アツツ、アチツ、おでんを顔にくつつけるな!」

見ろよ。オベイロンのヤツが今度は少年にグイグイおでん押し付けられてる。

あれって温めすぎると皮膚が火傷するよね。

うん、とりあえずオベイロンの殺意と敵意が消し飛んだわ。

だからあえて言わせてもらおう。

「なんだよこのカオスはアアアアアア!!!」

キリトにセリフをとられた。つーか、もはや魂の叫びだな、もう。

☆☆☆

カオスな事態が治まり、謎の少女と少年はオベイロンを縛ったままにして壁にもたれていた。

改めて二人の様子を見ると、少女の方がオレと同じ年くらいで、少年の方が二つ年下と見える。

まあ今はそれどころじゃないか……………。

ちなみにキリトはアスナに猛獣の如く押し倒されていた。

ベッドでやれ、ケダモノ。

「というわけで転移の扉について答えろ。アスナがキリトをいただく前に」

「僕のアスナがあんな……………あんな変態に……………くぼっ!？」

「どうでもいいだろ。あと常識的なヤツほど変態は感染しやすい」

例外をあげるとしたら現段階ではクロノ少年と八神辺りである。

二人が感染しなかったのはたぶんオレと同じ苦勞人だったのではないかと推測している。

まあ二人が変態達に振り回される未来は避けられないが。

「そういえばこの先祖って確かオークに犯されたあの姫だったっけ? ということは

淫乱化は遺伝子レベルってことか?」

「カルディナ様を知ってるのか!？」

「知ってる。だってオレが『無血の死神』だもん」

「なん……………だど!？」

オベイロンの顔が真っ青になっていたがオレは本で書かれたカルディナ姫が起こした国復興事業の歴史を思い出していた。

一度オークに滅ぼされた妖精の国はカルディナ姫の帰還後、国の復興事業を起こした。

……………服の下で縄で縛られた姿で。『縄の擦れ具合がよかった』と言ってたと記述にあった。

これを見て、まず目を疑った。キリトやリーファやシリカなどによく聞いていたと記憶している。

結果を言おう——みんな口を揃えて事実だった、と。

この本がおかしいのではなく全て事実だとキリト達は言っていた。

つい、頭が痛くなった。

だって王様はアイドル追っかけでその祖先は淫乱な変態だぞ？

どんな歴史だよと心の中でツッコんだよ、もう。

ちなみにこの人がかつてオレが助けたお姫様と知ったのは記述に『無血の死神がオレ達を蹂躪し、救いだした』と書かれていた。

……………たぶん前世で千香を救ったときの人だ、きつと。

「バカな……………『無血の死神』は死んだはず!!」

「生まれ変わって復活。まあ、一応前世の異名だけどもまた背負うことにしたけど」

「アーサーは……………アーサーはどうした?」

「殺した。それ以外ないだろ?」

オベイロンは悔しそうに「クソツ」と口に漏らす。

アーサーはオベイロンにとって最大の戦力だったと思う。

もう、問題ないだろと思ったオレは血走った目のアスナに衣服を剥ぎ取られて色々ヤバイキリトを救出しようとオベイロンから目を離れた。

すると、ヤツは縄をほどこいて何も無い壁のところまで来た。

「は、ははは……………くひゃひゃひゃ!! バーカめ、油断したな!! おかげで転移の扉の

前まで来れた!!」

扉なんてどこにもないはずの壁でオベイロンはそう叫ぶ。

なに言ってるんだ、あいつ?

「転移の扉はこの『全てを開く者』の神器使いを素体として作られたこの首飾りで展開するもんなんだよ!!」

「つまり……………その首飾りは」

「その神器使いから強奪した神器さ！ それを神器使いではない僕が使えるように改良したのさー！」

まさかこの世界にも『全てを開く者』を持つ神器使いがいたとは。

——しかしその神器使いはもういない。死んだ。ヤツの手によって。

なんてヤツだ。神器使いにとって神器は自身の命だ。

強奪されれば死ぬに決まってる。

「アーサーには騎士道に反するとかバカなことをほざいていたが、強奪の仕方を教えてもらったおかげでこの神器が使える！」

ガチャン

何かが開く音と共に扉が展開された。ドコでもドアのような扉だった。

そしてオベイロンはゲスな笑みを浮かべて、言った。
「じゃあな馬鹿共！　ここに戻ってきたらお前らを――」

言葉は最後まで続かなかつた。理由は明白、ヤツの顔に人間とは思えないくらいの太い腕が口を抑えたのだ。

オレはそれに見覚えがある。

だってあれは――

「あらん。良い男。草太くんくらいの美青年だわん」

「うむ、良いオノコだな。ガハハハハ!!」

—— オリ主くんをぶちこんだ悪夢の世界の住人だったから。

なんであの世界に繋がったのだろうか？

オベイロンが望んだ世界じゃないはず。

「あー……………やっぱりか。あれって神器使いじゃないヤツが使えるように改良したつもりみたいだけど……………世界のルールが許さない」

「つまりどういうことだ。パーカーの女」

「要するに抑止の力で彼が望んだところが、歪んだ形で叶えられたってことさ。彼が望んだのはきつと女性だらけの世界っぽいし」

なんかデジャブ（既視感）を感じた。

……………ジュエルシードもあんな感じで叶えるのかな。

「草太くん、お客さまよーん。相手してあげーん」

「はあーい♪」

扉の先にいたのはニューカマーとして新生したオリ主くんがいた
.....。

オベイロンは何かを訴えるようにオレを見ているがとりあえず親指を下に向けて返してやった。

うん、殺意はないけど殴りたいヤツだもん。

「やだ.....良い男。やらなにか？」

「ムウウウウウ!!」

じたばた暴れるがマツスルボディーの呪縛から逃れられない!!

あ、今ので首飾りがとれた。

それを謎の少女が拾って懐にしまう。

オレはどうしたかと言うと扉を閉めることにした。

だってあそこ完全にイロモノ魔境だもの.....。普通のオレが狂ってしまいそう
だもの.....。

「た、助けて！ 英雄なんだろうお前?!」

「違います。オレはただの中学生です。.....あ、中学通ってないや。今度、通信教育
で通わなきゃ」

「どうでもいいだろそんなこと!!」

「どうでもよくないよ。中卒ならまだしも、小卒で雇ってくれるところは絶対ないだろ。」

そんなこと言うオベイロンくんなんか嫌いです。だから助けませーん。

「ふざけるな! ホントにヤバいから助けてよ!!」

「さあ、俺の熱いペーゼを受けてみせろ!!」

「う、うわアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ギギギ、バタン。

扉は閉まり、消えていった。

悪は滅びた。とんでもない地獄へ逝くことで。

間違はなくオベイロンもオリ主くんと同じ末路になつてるだろう。

てか、これ確実に高町達を泣かせるな……………。意中の男性がニューカマーという変態になっているから……………。

「よし、帰るか……………」

「うん、そだねー」

「お腹空いた……………」

謎の少年がどうやらお腹を空かしているようなので、オレはほむらの面会を兼ねて、何かを奢ろうと思うのだった。

「ちよつ、俺を忘れてないかみんな!？」

「うふふふ……………キーリート、くうーん♪ ……………ジュルリ」

「あ、駄目アスナ！　そこだけはそこだけ——………ア————ツツツ
!!」

王座の間で誰かの悲鳴が聞こえたが気にしない。変態の餌食になった少年なんか知らないことにした。

閑話 混沌とした結婚式

六月半ば。私は衛くん^に結婚を申し込まれた。

私はしばらく悩んだりしたが、親友達に励まされてその婚約を受け入れた。

そこからはトントン拍子に話が進んで言った。グレアムおじさんや守護騎士のみんなは衛くんを既に認めていたし、衛くんには親戚が一人もいないためだっと思う。

そのときに私が暗い表情になったが、衛くんは気にする必要はないと言った。

そうやった………もうじきたくさんの親戚になる人達ができるんや。

そして今日、披露宴が行われた。

始まる前からたくさんの友人や知り合いに祝福された。何度も思わず泣きそうになつたで、ホンマ。

………天国のお母さん、お父さん。私は幸せになります。

だからいつまでも見守ってください。

☆☆☆

「えー、これより親戚からのお言葉です。まずは高町なのはさんから、どうぞ」「浮気したらいつでも呼んで。撃ち殺すから」

物騒すぎるわ！ てか、どんな祝いの言葉やねん。短すぎる!!

「次にフェイトさん」

「はやて、子どもが産まれたら写真を送ってね！ ロリシヨタ愛好会はいつでも子どもの味方だから！」

絶対任せたくない！ 教育に悪いから！

「では最後に……………誰だっけ？」

「早乙女和子です！ というか名前を忘れ去られてた!？」

「どうでもいいから、これで終了しまーす」

「なんで終わらせるの!?! 私、まだお祝いの言葉を何も言っていないわよ!?!」

呪いって言つとるやん。てか、あんたが持つてる藁人形とお札はなんやねん。どんだけ嫉妬しとんねん。

「それでは新婦新郎のお言葉を——」

「その結婚を待ってもらおうか」

知らない声がした直後、武装した集団が会場に乱入してきた。

「な、なんなんですか。あなたは！」

「黙れ。我らが用があるのはそこ八神はやてだ！」

リーダーらしき人物が私に向かって指をさしてきた。

「闇の書の主のせいで我らの親族が亡くなり、そして今日まで悲しみに耐えてきたが、それも我慢の限界！ 貴様が幸せになることが我らには許せない！」

………つまり、かつての闇の書の主や守護騎士によつて失った被害者達が私に対してテロを起こしたわけってことかいな。

なんちゆう、逆怨みやねん。

「てか、私が幸せになることのどこがいけないんや。幸せになることは誰にだって権利はあるで」

「黙れ！ 犯罪者が幸せになろうなど我らは許せん！」

「犯罪者だつて心を入れ替えて幸せになる権利はあるとちゃうん？ というか、どちらかと言えば私も被害者やし」

私が反論する撃ってきた。銃弾が私の頬を掠り、血が垂れてきた。

「ほぎげ。貴様は犯罪者だ。闇の書の主である貴様が全て悪い。だから我らは正義のため貴様を殺す」

「正義のために殺すとか、それはもはや正義やないと思うで。というか、一言ええか？」
「なんだ。遺言か？」

「いや、そうやなくてな——」

—— さっさと逃げないとあんたらお陀仏やで？」

えっ？とした表情になった直後、リーダーらしき人物が衛くん顔面を殴られた。

リーダーらしき人物が集団をボウリングのごとくなぎ倒していた。

衛くんはマイクを持って口を開いた。

「さて……今宵の披露宴だが貴様らに聞きたい。披露宴の『宴』とはどういう意味だ？

そう宴だ。今宵の宴が台無しになった。では中止するか？ 否、違う。我らが始めるの

は新たな宴ではなからうか!!」

オオオオオオと士気が上がる招待客。

「では始めよう！」

テロ^{バカ}集団を集団リンチする大会を!!」

その開戦宣言でテロ集団になのはちゃんやフェイトちゃんを含んだ魔導士達が襲いかかる。衛くんの隊員——通称『マツスラーズ』も参加していた。筋肉モリモリ集団やと言っておく。

「こんにちわ、解説の高町士郎です」

「同じく解説の高町桃子です。モモちゃんと呼んでね♪」

「そしてゲストは月村夫妻の月村恭也と月村忍です」

「いや父さん、母さん。なにしてんの!?!」

「プロレス解説」

そう言って来賓席を解析席に変える。人の結婚式に何しとんねん、このバカ夫婦は

.....

「食らえ！ 『筋肉バスター』!!」

「出たアアアア 『筋肉バスター』!!」

「素晴らしい技ね。あれは股にダメージと羞恥心を与える恐ろしき必殺技よ」

士郎さんと桃子さんの解説通り、『マッスラーズ』の一人が筋肉バスターをテロ集団の一人にかけた。..... M字開脚された股がとても悪夢やった。

「『筋肉ドライバー』!!」

「おおっと、こちらは『筋肉ドライバー』だアアアアア！」

「別名脳天ぶち抜き刑の刑よ。絶対脳天が無事じゃ済まないわよ」

またまた『マッスラーズ』の一人が頭から地へ叩きつけた。

なんちゆう恐ろしい奥義出しとんねん、この部隊は.....

てか、士郎さんノリノリやな。桃子さんもどっからかメガネ出して解説しとるし.....

「なぜだ！ なぜ闇の書の味方をする！」

よっぽど闇の書が憎かったんやと私は思うほど彼はこの惨状が信じられなくなっていた。

狼狽え始めるリーダーらしき人物に衛くんはマッスルモードで彼に指をさす。

「闇の書など最早存在せぬわ。ここに居るのは我が愛する妻とその家族のみ！ 逆怨み程度の憎悪で我ら八神家の鋼の絆に勝てるはずもないわ！」

「お、おのれエエエエ！」

リーダーらしき人物が私に向かって発砲した——が、衛くんの鋼の肉体で全て無に還した。

「ば、馬鹿な！ 質量兵器を拳圧で消し飛ばしただと!？」

「筋肉に不可能はないわ！ くらえ、『マッスルウウインパクトオオオオ!!』」

「ぐぼげはアアアアア!？」

衛くんの渾身の一撃でリーダーらしき人物が壁を次々に突き破りながら飛んでいった。そしてそれが止まったところには彼はもはや動きそうもないくらい重傷だった。……………。

あ、ピンクの砲撃が追い打ちに飛んできた。こら、あかん……………失神しても容赦ないわ、こいつら……………。

「はあ……………なんや混沌した披露宴になっちゃったなあ」

「仕方あるまい。それが今の我らのスタンダードだ」

「納得できへん……………」

なのはちゃんはバンバン味方ごと砲撃撃つとるし、フェイトちゃんは保護した子ども

達に富竹フラッシュしとるし、あと高町夫妻はまだプロレス解説しとる……………。

意外やったのは忍さんもプロレス好きだったってことやった……………。

そして身内にも変態化しとるヤツは二人おった。

例えばシヤマル。ナースっぽい魔法少女服を着て禍々しい注射器で砲撃を撃つとる。

「メデイカルビーム!!」

「アアアアアアアア!!」

撃たれた人はなぜかウツトリしながら倒れとる。

コスプレしたシヤマルの砲撃で悦ぶこのテロ集団がとても馬鹿馬鹿しいでホンマ……………。

こんなんやったら、シグナムのバトルジャンキーの方がまだマシやと思うのは私は末期やろか?!

もう一人はザファイラ。ノエルという人と出会って、彼は目覚めてしもうた……………。

「やらない?」

「アアアアアアアア!!」

……………筋肉だけやなくて阿倍さん化してもうた。今では阿倍さんともやり友らしい。

絶対私の旦那はこいつらにネトラレたくない。

まあ、なんにせよ……………。

「カオスやなあ……………」

遠い目をしながら、私は初夜で衛くんを襲って憂さ晴らししようかと考えるのやった……………。

「ゆくぞ、貂蟬！」

「ええ、いくわよん卑弥呼！」

「ラブラブハリケーン!!」

「ぐぎやアアアア!!」

どうでもええけど、知らない筋肉モリモリなオカマ達が竜巻を起こしてテロ集団を蹂躪しとつた。衛くん曰く、この竜巻に巻き込まれたテロ集団は熱い包容、ディープキス、耳をねぶられていたとか。

「誰や。こないな変態呼んだんわ」

「ノエルという千香の師匠だ」

また 変態か !!

第八十一話

エピローグ的な話をすれば妖精の国は滅んだ——わけではなく、民主制へと変わり、名家達が代党に政界に進出した。

まあ、わかりやすく言えば戦後の日本みたいな者だ。選挙で選ばれた名家や貴族が今度は国を支える政治家へとシフトチェンジしたということだ。

そこで起きる問題は民主制過激派だ。

彼らは生き残った王族が邪魔なため、王族の親族やその側近達を殺して二度と王制が起きないようにしようとした。

そのときにアスナとリーファが襲撃されたが………言わなくてもわかる
だろ？

まどかがどこから取り出したタバスコを目にぶっかける行為は、ちよつと同情した。

あれってめちやくちや痛いし、最悪失明するんだよな。

そんなこんなでアスナの顔見知りが何人か亡くなつてのハッピーエンドである。

えっ？ アスナがハッピーじゃないからハッピーエンドじゃない？

残念。オレ達は何も失ってないからピターでもバッドじゃない。

誰かが幸せになれば、誰かが不幸になる。

ま、そういうものさ世界つてヤツは。

オレ達は何も失ってないという理由があるように、ほむらは無事に治療が終わった。もう命に別状がないようだ。

病院の彼女はあの致命傷で死にかけた身体から数週間で峠を越えて元氣に戻って——……………いや若干落ち込んだ。

「医者から人外を見る目で『あんな重傷から生還した君の身体どうなってるんだ!』つて言われたわ……………まどか」

と言ってまどかに静かに抱きしめられていた。

失礼な。オレのどこが人外だ。オレはれっきとした普通の美少年だろ。

そう言うとなぜかみんなから「いや、違うだろ」とツッコまれた。解せぬ。

なぜか謎の少年少女は別に驚いていないが……………つてそういえば、こいつらの名前知らなかったな。

しかも翌日になるとどこかへ行ってたし。誰だったんだ、あいつら……………。

閑話休題

アインクラッドの広場にてオレやまどか達は集まっていた。次の異世界について話し合いである。

千香を探すのが最終的な目的だが、その前にヤツと組んでるジェイルという者と接触する必要がある。しかも犯罪者のため、管理局という鬼畜組織に捕まる可能性があるのだ。

だからこそ、まずどうするか、意見交換する必要があるのだ。

「というかほむら。お前、ホントに平気か？ 完治したとは言え、病み上がりだろ」

「安心して杏子。もう私は平気よ。ええ、人外って言われても大丈夫。もう私は何も怖くないわ……」

「ヤベーぞソラ。ほむらのヤツ、まだ気にしてるぞ……」

知らんがな。オレにどうしろと申すのだ。

「私を癒しなさい、癒すべき、癒しなさいよ、癒せ、癒すのよ」

「なにその五段活用。軽くホラーなんだけど」

「ギガロなんちゃらのとある眼鏡ヒロインが使っていた会話術よ。ふふ………これでソラはもう断れないわ。それでしょ？」

「いや普通に断るから。だが断るだから」

「どうしよう、まどか。論破されてしまったわ……………」

ほむらが涙目でまどかに助けを請う。ソースはやつぱりお前か、まどか。

「諦めないで。これはソラくんのツンデレなんだからいずれデレがあるから！」

「ソラ、今こそデレて!!」

「だが断る」

「チキショー!!」

愕然とするまどかとはむらにオレは呆れて嘆息を吐いた。てか、さつきから静かだと思っただらさやかと杏子は携帯ゲームで対戦していた。

我関せずのつもりか、お前らは。

「ママさん、ヘルプ。このカオスを治めるにはあなたの力が必要です」

「うーん、私にできるかしら……………」

「できたらデートしてあげてもいいよ、お姉ちゃん」

「はいはい、みんなソラくんのお話を聞きましょうね♪」

「「「移り変わり、はやッ!!」」」

全員がツッコむほどの手際の良くみんなにマスケット銃で脅迫するママさん。

さすがみんなのお姉さま。見惚れるくらいである。

「それじゃあ、この会議が終わったらソラくん……………手始めに一緒に風呂に入り

ましょ?」

「いやなんで? 何が手始めでお風呂なんですか?」

「それはがった——……………オホン。ソラくんの成長記録を見るためよ」

「なぜかわからないけど、鼻血が出るマミさんに恐怖してしまった……………」

背筋が凍るくらいの妖艶な微笑みだ。どこか妖しい美しさという魅力が彼女にはあつた。

……………鼻血で全て台無しだが。

「愛が鼻から出てしまったわ」とマミさんは言っていたが愛って鼻から出るものなのか?
?

そこんところどうなの杏子?」

「知らねーよ。そもそもなんの手始めにお風呂を一緒に入る必要があるんだよ?」

「さーな。でもやな予感がするのは気のせいではないと思う」

「気のせいじゃね? 姉弟でも未だに一緒に入ってる人とかいそうだし」

「なるほど。参考になつたぞ、杏子」

「いやいやないから、そんな姉弟。てか、あんたらの純粹さにさやかちゃん、泣けてきた」

口を抑えて涙を流すさやかとなぜか落ち込むまどかとほむら。

なんでこの人達はダメージを受けてるのだろうか。

杏子が首を傾げると今度はそれを見たマミさんが「グフツ」と言つて倒れた。

いや「グフツ」つてなんだ「グフツ」つて……………」。

「ま、まぶしいよ……………ほむらちゃん。私、杏子ちゃんの純粋な心に浄化されそう……………」

「ま、負けないでまどか！ 純粋な心なんて私達の色で染めるのよ！」

「そ、そうだね！ ほむらちゃんがいるなら……………もう私、何も怖くない！」

まどか、それマミるフラグだから。前世の平行世界でマミさんが言つてたフラグだから。

てか、やめろお前ら。なんか知らないけど、純粋な杏子を邪なモノで汚すな。

そんなことを思いながらオレは二人に拳骨を落として失神させた。死屍累々なこの場所でオレは嘆息を吐く。

「なんだこのカオス……………」

「いつも通りじゃんか」

杏子にツツコまれたのでござる。いや、そうだけどさー……………。

☆☆☆

ある程度、目的は決まった。

まず千香をシバく。

え？　なんでだつて？

第三期のラスボスと勝手に手を組んだから。おかげで衛と八神と戦わなきゃならぬい。

八神はまだしも衛の耐久力は殺すつもりじゃないと通用しないもん。

ギャグ補正はマジの中のマジじゃないと通用しないからな………。特に筋肉の変態とマゾの変態は。

じゃないとイロモノは何度でも復活する。ヤツらはゾンビのごとく復活する。

同志を増やすまで復活するハンティングゾンビゲームだよ。マゾ筋肉ハザードとはこれのことだよ。

ある意味ホラーである。

まあ、意見交換を終えたオレ達はアインクラッドの連合軍の宴会に参加するのだつた。

そのとき再会したキリトの顔が枯れていて、アスナの肌に艶があつたのはきつと気のせいだと思いたい。

その後、まどか達を含めた女性陣はなんかガールズトークにしに行つて今はキリトと

クラインの三人で飲んでいた。

お酒は飲んでいないから。成人してから飲むつもりだから。

「知ってるか、クライン……………。縄って縛れば縛るほど楽しくなるんだぜ……………」

「しつかりしろ、キリト!! なんか目が死んでるぞ!」

「いやー、たのしーなー。縛る役って結構ハマるもんだなー……………」

「なんかとんでもないこと口走っている!? お前、いったいアスナの嬢ちゃん何があつたんだ!」

「もうやだ……………アイツもう俺の知るアスナじゃないくらいのキャラ崩壊してるよ……………エへへへ、へへへ……………」

「キリトオオオオオしつかりしろオオオオオ!!」

キリトの口からなんか白いフワフワとしたモノが出てきた。そんなキリトの肩を揺さぶるクラインという光景にオレは苦笑した。

ご愁傷さま、キリト。君に幸あれ。

というか、なんか未来の自分を垣間見た気がするな。

オレもキリトみたいに汚染されるのだろうかと若干恐怖が生じた。

もう彼女達から離れられないのたら癒しを増やすしかあるまい。

憂鬱になったオレは嘆息を吐くのだった。

(まどかサイド)

やつほー。みんなのプリティー元女神のまどかちゃんだよ♪

……………あれ？ 期待してない。まあまあ、そう言わずに……………ね？

聞かない子にはもれなく私直々の魔力矢をお見舞いする所存です。

まあ、そんなことはさておき。私達はガールズトークをしていた。

みんなの顔を見るとほんのりと紅くなっていたのは、たぶんシリカちゃんが間違っ
持ってきたお酒の瓶のせいだと思う。

杏子ちゃんときやかちゃんはそれにやられてドンチャン騒ぎをし始めて、リーファ
ちゃんを困らせているし、マミさんとアスナさんは不気味なほど「ウフフフフ」と笑
いながらソラくんの写真を使って、お酒を飲んでないシリカちゃんを両脇に挟んで意中
の男性の萌えポイントについて語り合っていた。

笑い上戸だ。マミさんとアスナさん、笑い上戸だよ……………。

ちなみにほむらちゃんは飲んでるうちにダウンして寝ている。今のところお酒も飲

まずに無事なのはシノンちゃんだけ。

「よかったねー。シノンちゃん」

「は、はあ。………つてなんで私まで参加しているのですか？ 敵でしたよね、あたし」

「細かいことは気にしなさい。それにしてもこのジュース美味しいね」

「あの、それお酒ですけど………」

「大丈夫だ。問題ない」

「いや問題だらけですから。未成年が飲んでいいものじゃないですから。てか、この人お酒をがぶ飲みしてるのに、酔ってない!？」

それが私のママである詢子ちゃんクオリティ。

ママってホントに毎日飲んでるのに、あんまり酔わないんだよね。

まあ、大量摂取は例外だが。

「お酒強いんですね………」

「ママの遺伝子だからねー。それよりもシノンちゃんはこれからどうするつもりなの？」

「مامィさんがここを離れるそうですから、傭兵稼業しようかと」

「えー、なにその乙女成分ゼロな後生。彼氏つくりなよ、彼氏」

「あたしに何を期待してるのですか……………」

シノンちゃんは私に対して呆れたため息を吐いた。

むー、これ重要なんだよ？

私の知っている人は人でむしろバッチコイなのにいき遅れた女教師の話をシノンちゃんに話してみた。少しだけ考え始めたところ、別に異姓に興味がないわけではなさそうだ。

「好きな人というか気になる異姓はいるのでしょうか？」

「まあ、いないことはないですが……………」

「あ、シノンちゃんの好きな人はキリトくんだ」

「なんで彼だと決めつけるのですか。いや、そうですけど……………」

シノンちゃんの話によると彼はアスナさんを助ける随分前にここに来て、スランプで落ち込んだところを出会って友達になっていたそうだ。ママさんの襲撃で再会したときは驚いたみたいだけど。

「だけど彼にはアスナがいるし、もう諦めようと思っていま……………ぶむ」

シノンちゃんがバカなことを言う前に私はそれを（購入したての）スポンジで口を塞ぐ。

「ふざけないでシノンちゃん。恋は簡単に諦めちゃダメなんだよ？ むしろライバルを

出し抜き、抜け駆けするして得る挑むモノなんだよ」

「なんとというアグレッシブな思考回路。まどかさんはたくましいです。だけど、もうキリトはアスナと両想い……………あれ？　それでもない？」

シノンちゃんの言う通りだ。アスナさんの覚醒変態化によりキリトくんは彼女を受け入れようか、受け入れないか迷っているのだ。

だから、これはシノンちゃんにとってチャンスなのだ。

「シリカちゃんもああいうかわい容姿なのに、見ている番組は修羅場な昼ドラなんだよ。浮気、不倫バッチコイなテレビドラマだったよ」

「意外すぎて開いた口が治まらない……………。」ということはキリトが受け入れる前にこちらに振り向かせろってことですか？　猶予期間モラトリアムがあるうちがチャンスってことですか？」

「そうだけどシノンちゃん。誤解してるようだけど猶予期間モラトリアムなんてないんだよ？」

えっ？　とした表情になるシノンちゃん。それから徐々に不安そうな表情になっていった。

ふふ、私が言いたいことはね。

「猶予期間モラトリアムなんて関係なく、結ばれた後に奪えばいいんだよ」

「予想の斜め上の答え!!　しかも昼ドラ展開ですよ、それ！」

「シリカちゃんもそれに大いに同意してくれたよ。いやー、純粋な子ほどまどかちゃん色に染まりやすいね……………」

「この人、悪魔だ……………悪魔がいる」と失礼なことを言うシンノンちゃん。

私は悪魔じゃないもん。むしろ慈愛の女神様なのに。

まあなんにせよ。私が恋愛でアドバイスすることは一つ。

「略奪愛こそ恋愛の真理だね!!」

「絶対違います!!」

解せぬ。なぜか否定された。

おかしいなあ……………。ママもそういうつもりで恋せよって言ったことなのに間違っていたのかな？

(ソラサイド)

広場から離れ、オレは城のテラスにいた。

場が混沌化し、事態は治まることなく暴走する。

うん、終わりはやはりカオスだ。

……そして始まりは——不幸な災難だ。

「やあやあ、こんばんわボーイ。また会ったねー♪」

「やかましいパーカー女。お前は誰だ」

「パーカー女じゃないもーん♪ ま、自己紹介がまだだったね」

謎の女はパーカーをとって顔を見せた。

……やっぱりか。オレの予想通りだった。

聞き覚えのある声色、口調。

そして前世で見たことある容姿——答えは一つだった。

「やつほー、みんなのアイドル。天ヶ瀬千香、推☆参!!」

ポーズをとるそんな彼女にオレはニツコリ微笑んで……………。

「心配かけてんじやねエエエエ!!」

「ハウん!？」

思いきりひっばたいてやった。千香はそれを興奮しながら受け止めるのだった。

……………ガイヤよ、どうやらオレの心労に安息はないようです。

第八十二話

宴会から翌日のことだ。オレは捜していたバカを見つけたことができたが、どうも清香はオレに合わせた人がいるそうなので今日でこの異世界とはお別れだ。

宴会が終わった後にキリトはゲツソリと枯れていた辺り、また襲われたのでなからうかとオレは推測する。

まあ証拠もないから真実は闇の中だけだ。

それからシリカはどうもアインクラッドに住むつもりらしい。キリトと離れたくないと言っていたが、彼女の目が獣のようになっていたのは気のせいだと思いたい。

「略奪愛………寝取る………」とブツブツ言っていた発言は聞かなかつたことにしたい。

………キリト、お前に幸あれと心底祈っておく。

シノンはまだあ連合の傭兵になると言っていた。彼女なら、名のある狙撃手になるだろう。

さてアスナとキリトがどうなったかと言うと、まあ相変わらずということだ。

普段は大人しいがなんらかのスイッチが入ると、変態化するアスナに日々恐れること

だそうだ。

キリト、マジ強く生きるとオレは別れ際に言っておいた。彼がさめざめ泣いたのは無理はないと思った。

変態化したアスナとジャンヌという化け物と一緒に仕事をする毎日、はゴリゴリ削れるだろうしな………。

——まあ、なんにせよ。

ここで冒険した日々は良いも悪いも思い出となるものだった。

☆☆☆

千香と一緒にきたところはどこかの研究所だった。

彼女に着いていき、たどり着いたのは異質な実験室。

そこには千香の会わせたい人が居座っていた。

「ようこそ、神器使いの諸君。歓迎するよ!」

紫色の白衣を着たいかにもマッドな感じの男性がオレ達を歓迎するように、声をあげる。オレはまどか達の前に出て、彼に第一声をかけた。

「あんたが千香が会わせたいヤツ?」

「いかにもそうだとも。私はジェイル・スカリエツティ。悪の天才科学者を勤めている」

「なんですと? なら、シ○ツカーいるのか、シ○ツカーが」

「残念ながら黒いタイツ団体を雇える資金はないので雇ってないのだよ」

「シヨツ○ーって傭兵なんだ。てつきり雇用制の団体かと」

「その代わりと言ってはなんだがターミネータークラスのロボットをたくさん造っているよ」

「なにそのシヨツカーよりえげつないオーバーキル軍団」

「元々、宴会用に用意したものだだったが使われる機会がなくて、再利用しただけさ」

「宴会で何するつもりだったんだよ……」

「ククク………」と笑うスカさん。絶対ろくなことじゃないと思つた。

「本題に入ろうではないか。ソラくん、君の力を貸してほしい」

「断る。見ず知らずの相手に手を貸すほど暇じゃないんでな」

オレはそう言つて背中を向ける。次のスカさんの言葉でオレは足を止めることにな

る。

「管理局。君はこれを潰したい。そうじゃないのかね？」

「……………」

「君達の絆を引き裂こうとし、そして私腹で君達の力を手に入れようと手を出した愚か者達。」

——君はこのままで済ますつもりじゃない。天ヶ瀬千香という最後の仲間を入れた君が次にすることは管理局の『破壊』ではないかね？」

オレはその言葉を聞いてうつむいたまま——笑みを浮かべた。

なるほど……………ああ、そうだ……………。

「さすがスカさんってところか。オレの次の目的はお見通しってことか……………」

「ククク、天才をナメてはいけないよ、少年くん」

「そうだな。どこかでお前のこと甘く見ていたようだ。認めよう。お前は天才だ。だからこそ、余計に信用できない。天才がオレの力を貸してほしいだと頼むなど何かがあるに決まっている」

「ククク……………確かにそうだが千香くんの友人であるこの私は君や君の仲間に危害に加えるつもりなど毛頭ないさ。約束しよう」

千香の友達、ね……………。

なるほど、それは『信用』できるな……………。

理由は千香が通常通りということだからだ。それは千香に全く危害がなかったと意味する。この人が千香を保護したことを証明しているのだ。

オレは手をスカさんに差し出す。スカさんはそれに応じて握手した。

「オレは『無血の死神』の神威ソラだ。お前はオレの味方であると信じよう」

オレの言葉を聞いてスカさんは笑う。オレもつい笑みを浮かべてしまった。

……………やつとあの組織に復讐リベンジできるのだから。

オレ達が会話している時、まどか達はずっと静かだった。どこか納得できてなさそうな表情をしていたのは仕方ないとオレは思う。

オレが今からすることはテロだからだ。

「別にまどか達は参加しなくていいぞ。これはオレの私怨だからな」

「……………だから大人しくしてろと？ バカにしないでソラ。私はあなたの相棒。そうでしょ？」

ほむらはオレの目を見て言った。確かに覚悟がある目だ。

どうやら協力してくれるようだ。

「うーん、お姉ちゃんとしては間違ったことは正すべきだけどソラくん。止まる……………つもりはないでしょ？」

「はい……………」

「なら、止めないわ。危ないことは絶対しないと約束してくれなきゃ許さないわよ？」

下の子に注意するようにママさんはオレに言う。

オレがすることを納得したわけじゃないが、尊重するつもりみたいだ。

「あたしとしてはソラが良いんじゃないや。別に止める理由とかないし」

「さやか、それ思考停止の考えだから」

「許さん。このさやかちゃんが悪の組織を滅ぼしてくれようぞ」

「いや、どちらかと言えばこつちが悪だから」

という軽い漫才でさやかは協力に了承する。軽そうに見えて実は彼女の目が真剣な

のはオレだけが知る事実である。

「アタシはソラが無事で美味しい飯が食えたら別に良いよ。ま、要するにアタシ達にとって邪魔者は排除するってことさ」

「頼りにしてるぞ、杏子」

「応」と答えてオレは杏子の手にハイタッチ。こいつとの友情は変わらずだ。

……たまに愛情になるけど。

最後のまどかであるが俯いたまま悩んでいた。オレがこれからすることに対しての葛藤があるのだろうか。

そんなまどかにオレは彼女の頭をポンポンと叩く。

「ソラ、くん？」

「別にオレは管理局の全ての人間を抹殺するつもりはないさ。オレ達の命を狙う輩か、害なす存在のみは例外で、オレは基本殺しはしないよ」

管理局は敵だ。だから前世のオレは彼らを躊躇なく皆殺しにするだろう。だけど、まどか達がいるとなぜか考えが少し甘くなる。

別に殺す必要はないと思ってしまう。

………ハア、これじゃあ。戦場では生き残れないな。

オレはそう思っているとまどかは手を握って言う。

「私も協力するよ。だから無茶しないで……………」

オレが頷くと。パアツと花のような笑顔を向ける。ほむらがオレの背後に回り、まどかからオレを引き離す。

「なにしやがる」

「私の許可なくまどかとかとラブコメ始めることは許さないわ」

「嫉妬かよ?」

「ええ、そうよ。まどかとかあなたに対してね」

それはそれでかわいらしいこと。

てか、さつきから背中にか柔らかなものが当たっているんだが。

「当たっているのよ。ムラムラしたかしら?」

「むらむらってなんぞ? てか、まどかさんや。なぜ鼻血を出して、鼻息を荒くして近づいているのかな?」

「だって……………ほむらちゃんて拘束されたソラくんがいれば……………ムラムラせずにはいられないもん!!」

「これがムラムラか。そしてオレはまどかを迎撃する」

オレとまどかの仁義無き戦い———という名のキス阻止戦が始まった。キスしよと迫るまどかの顔を押しさえつける。

こちらが負けければ襲われる。こちらが勝てば安心……………ではなく背後にいるほむらの縄の餌食となる。

どうやらアイコンタクトでオレを襲う算段を立て、結託していたようだ。

なにこのバッドエンド確実の勝負。てか、襲う側なら普通逆じゃね？

「ふむ、これが彼らのデフォルトなのかね、千香くん」

「うん、基本。ソラが襲われて、セクハラされて、壊れていくところで杏子がママさんに癒されるといふ循環しているんだよ」

「なるほど……………ある意味サイクルされている。ところで千香くん、その写真とムチは何かね？」

「このムチでほむほむがソラを女王様プレイされてる様子を撮ろうかと」

「ククク、さすが私の友人。おのれの欲望に躊躇はないね!!」

いや助けるよ、お前ら。

オレはそう思いながらこの状況の脱出の仕方を考えるのだった。

ちなみに救出されたのはママさんがオレごとテイ口った時である。あの人、たまに笑顔でとんでもないことしてくるよ。

(??サイド)

とある世界の荒野にて、銀髪のお下げの少女は空を見上げていた。彼女の手には緑樹色の細い剣が握られていた。

彼女はこの世界の住人でもないし、ましてや『赤ん坊から始まった命』ではなかった。

——
転生者。

彼女を表すならそういう存在だろう。

「どこにいるの………『兄さん』」

一ノ瀬シイはやや暗い空を見つめながらそう呟くのだった。

閑話 悲劇の結末と災厄の誕生

(僕サイド)

初めましてみなさん。転生者の『僕』です。

神様のミスで、転生した僕ほりリカルなのは世界で非転生者の幼馴染みと暮らしていた。

原作には関わらない日常だったけど、幸せな毎日だった。

———
関わったばかりに。———
だけどその幸せはすぐに崩された。オリ主の『彼』と八神はやてと

ある日、いつものように幼馴染みの家に遊びにいくと、彼女は血を流しながら弱っていた。誰がやったのかはすぐにわかった。

あの仮面をつけた男性の仕業だ。

男性には僕には魔導士であることを気づいていたのだ。

皮肉なことに僕は優秀な魔導士であるが、治療魔法が得意ではなかった。

彼女を助けるという交渉の元で僕は闇の書の事件に関わった。彼に命じられたのは連絡したときにターゲットの魔力を蒐集することだ。

僕はその命令に従わざる得なくて、なのはとフェイトの二人の魔力を蒐集した。

親友である『彼』に理由を聞かれたが、仮面の男性のことを言われれば幼馴染みの命はなかった。だから僕は逃げ出した。

————そして、約束の時は来た。僕は闇の書である八神はやてを………この手で封印した。

なのはやフェイトに非難され、『彼』に目の仇にされ、僕は命からがら仮面の男性のところへ転移した。

——僕は約束を果たした………。だから幼馴染みを返してくれ。

たぶん、幼馴染みは僕を許してくれないだろう。怒るだろう。

それでも僕は幼馴染みに生きて貰いたかった。

男性は転移で彼女を連れてきた——………血まみれの磔の姿で。

「なん、で……………彼女は……………」

「返した、が何か不満でも」

「あるに決まつてるだろう！ これじゃあ死んで……………が!？」

ザシユツと腹に激痛がはしる。腹部からブレードが生えている辺りに貫かれたのだろう。

「約、束が……………ちが、う……………」

「黙れ、犯罪者。お前の約束など最初から知らん」

犯罪者?と聞くと、ウインドには闇の書の違法封印した犯罪者として僕はピックアップされていた。

「貴様はここで自殺し、この事件は終結するのさ」

僕を刺したもう一方の彼は「これでお父様が救われる」と言っていたが僕の頭は真っ白になっていた。

——最初から嵌められていた。この二人に

——それじゃあ、僕がしてきたことは……………親友達を裏切つてまで幼馴染みを救おうとしていた僕は……………

絶望——世界に対するものなのか、それとも自分に対するモノなのか……それ
れはもうわからない。

だけど、僕は何もかも絶望したまま——目の前が真っ暗に……なり……
そして倒れて意識が——

——オワツテモ、イイノカ？

誰か知らない声がした。不気味で恐ろしい声。
普段の僕ならそう思っている。なのに、なのに………ああ、なんでだろう。

——心地よい………なあ。

——フクシユウシタクハ、ナイノカ？ セカイヲ、コワシタクナイカ？

………壊したいよ。ああ、壊したい!!

僕から何もかも奪ったこの世界と全ての人間を壊したい!!
望むならこの世の全ての希望を絶望に染めたい!!

僕は憎悪に染まっていた。何もかも憎い。この世で幸せな毎日送る人間が。

—— ナラ、ノゾメ！ オレサマヲ！

—— 望もう、君になることを……………

—— ニクメ！ スベテヲ!!

—— 憎もう全てを……………そして——

—— 全て一つに、ナロウ、では、ないカ。

—— そして『僕』は死に……………——

—— 『俺様』が生まれた。

どういう存在かはわからない。どこから生まれ、どこから来たのかはわからない。けれど、わかっていたことは一つだ。

——この世が憎い。全てを破壊した。

起き上がった俺様は最初にしたことはブレードを刺した男の首を落としたことだ。

仮面の男性が死んだ男に対して名前を呼んでいた気がしたが、どうでもいい。すぐに衝撃波で顔を吹き飛ばした。

首から先が無くなった二人は人形のように仲良く倒れた。

俺様の手には魔力で生み出される剣——紅く光るその剣の名前はセイバーまだないが、名乗るならば『憎悪の証』と言っておこう。

そして衝撃波。これはどうやら魔力で起きる技らしいな。しかも衝撃波だけでなく、念動力（サイコキネシス）などの瞬間移動以外の超能力まで使える。

これは良い能力を持った。向かい来る敵の攻撃を念動力で返し、防御に回る敵には電撃などの超能力で殺せばいい。これならば——

「全てを壊せそうだ………ククク、あはははははははははは!!」

狂う、くるう、クルウ。

狂気が俺様を支配する。

狂喜が俺様を心地よくさせる。

目の前にある磔の死体はなんだったのか忘れたが全てを壊す手始めに念動力の衝撃波で吹き飛ばした。

——— さア、全てヲ滅ぼそうか……………

(??サイド)

真つ白な世界にて、円卓に腰かけた女性と男性がいた。

今まさにありとあらゆる世界の危機が誕生したことで行われた緊急会議である。

「神がたつた今邪神に殺されたわ」

女神はそう言って目をつぶる。それは彼女の知り合いを殺されたことを意味してい

た。

「まさか一介の人間が………転生者が、邪神にまでに進化して管理者である神を殺すとは……………」

「そうね。私も見たことないわ。あのような禍々しい存在は……………」

美国織莉子と男性は沈痛そうな表情をしていた。彼が邪神になった原因がひどいといしか言いようがない。

邪神になった彼に同情してない、とは嘘とは言えなかった。

「織莉子、感情で神に匹敵するようなことは確かにあるわよ。暁美ほむらが鹿目まどかを円環の理から普通の少女に戻したように、ね……………」

愛で悪魔となった少女のことを女神は知っている。

彼女は感情論という考えはないが、その感情で脅威になることは弁えている。

「で、結局。どうしようかしらん。この化け物のような存在を私達ではどうにかできないわよ」

「見た目が化け物のお前が言うな」

「だつるえが醜い海坊主ですつてエエエエん!? しどい、しどすぎるわん!! こんな純情な漢女を化け物扱いするなんてえ!!」

「漢女の時点でアウトでしょ」

呆れながらため息を吐く女神と頭が坊主で筋骨隆々なのに、女性の下着一丁の漢女『貂蟬』がハンカチを噛んで『キィィィ』という言葉わんばかりに悔しがっていた。

そんな漫才をしている中で、美国織莉子は口を開く。

「卑弥呼さん、あなたの意見が聞きたいわ」

「そうじゃな。オノコを集めてヤツを討伐するということをしようかとワシは考えておる。……………それにたくさんの傷ついたオノコをワシが癒せるしのお」

「そういえばコイツも漢女だった……………。ハア、それじゃあ欲望まるだし……………」

——あ——

その時、美国織莉子は何かを思いつき、愉快に笑みを浮かべる。それはとても楽しみな番組がテレビ欄にあったかのように。

「女神、貂蟬、卑弥呼。面白いことを思い付いたわ」

「なにその笑顔。……………でも楽しそうじゃない」

「この子、またろくなこと思い付いてないかしらん」

「うむ、そうじゃな貂蟬よ。……………いたずら心が全開のような……………」

三者の反応は一つは愉快そうにもう一つは呆れた表情だった。美国織莉子はそれに気にせず続ける。

「他の神を呼んでちょうだい。そうね……………最近、管理者となった龍と精霊達が蔓延

る世界の管理者を呼んでちようだい」

「まさか……………お主」

卑弥呼は何かに気づいたように織莉子を見る。

彼女は楽しそうに三人に向かって答えた。

「そう、集めるのよ——『主人公』達をここへ」

彼女が指した水晶に写し出した世界があつた。

……………それは今、ソラ達が住むミツドの世界だつた。

—— さあ、終幕の物語を始めよう。最後はオールスターですぜ、お客さん。

閑話 召喚されし者達

(精霊をデレさせる主人公サイド)

退屈だ………ホントに退屈だ。

琴里の精霊の力を封印してから面白いことはあまりない。

四糸乃を愛でていても——

十香を餌付けしていても——

——満たされない。なんとつまらない日常である。

「よお、四季。ちよつとはな——」

「ちようどいい殿町。お前の頭を刈からせろ」

「朝っぱらから俺の頭髮の危機?!」

頭を防御体勢をとるクラスメイトに俺はバリカンを取り出して狙いを定める。

「なんで唐突に俺の頭が狙われるんだよ!」

「つまらないからさ。とりあえず今日の目標はお前の頭を坊主にするんだ。よかったな。これでお前もスポーツマンとしてデビューだ」

「いや部活してねえし、スポーツマンⅡ坊主頭つてのはおかしいだろ!」

「ならお寺の人達か。ついでに出家してお前の俗物な頭も浄化してもらえ。浄化したらゲーム機も浄化してやる」

「髪と共に散らせてたまるかよ、俺の嫁を!」

コイツの嫁とは携帯ゲーム機にある恋愛シミュレーションのよくわからない萌キャラという変な女のことだ。顔はそれなりにいいのにエロゲ脳でコイツがモテないのは必然である。

「あーホントに暇だ。……どこかで爆破テロしてくれないかなー」

「なに恐ろしいこと言っちゃってるの!?! てか、仮にあつたとしてどうするんだ?」

「爆弾を解体して俺が作ったネバネバスライスを仕込んだ爆弾を仕掛けたヤツの自宅に送りつける」

「なにその嫌がらせ」

「しかも可燃性だから摩擦を起こせばボカんだ」

「嫌がらせじゃなかった! 倍返し!?!」

「そしてそれを町にも仕掛けてやる」

「ただの八つ当たり!？」

まあ後半は冗談だが、そんなことあればまず俺は犯人を『切り裂きたくなる』。そういう衝動——というか破壊衝動があるからな……………」

「なんか面白いことはないのかねえ……………」

と俺が窓から青空を見てしていると俺の机の下から幾何学な模様が浮かび上がる。

「おお!! なんだこれ!？」

「これは……………召喚陣?」

前世の記憶から知ってる知識から俺はこの召喚は異世界に繋がるモノだと理解した。

……………ふーん。誰だか知らないけど、面白いじゃん。

俺を召喚して使役するつもりだが、あいにく俺は使役されるつもりはないよ。

—— 誰にも縛られない

—— 誰にも止められない

そんな俺を召喚する馬鹿が異世界の向こうにいるなんて面白いじゃないか。

「いいぜ。乗ってやるよ、どこだか知らないご主人様よ。俺を従わせたければそれなりの——」

「シキーー！ 何があつたのだ!？」

と、そんなこと台詞を言つてるときに元精霊さんこと夜刀神十香が飛び込んできた。

あ。ヤベ………………。今、十香を抱き止めているから——

「な、なんだ。これはアアアアア!？」

「あー。やっぱ巻き込んだんじやうのよね……………」

そんなわけで俺と十香は異世界に行くことになった。

ま、いつでも帰れる設定だし。別に問題ないか。

飽きるまで遊んでやるか。

(マジな恋する世界ではオリ主的な立場な主人公サイド)

ワシこと北郷一刀は色のない高校生活を送っていた。

理由は……………まあ、愛する者達と別れて落ち込んでいるからだ。

オイ、情けないって言ったヤツ。ちょっと来い。

貴様らはわかつてないようだが、愛する者達がいる場所——いや世界は『外史』というところだ。

人の想いによって誕生する外史にワシはかつて四度訪れた。

——最初は王として駆け抜け

——呉では王の愛を学び

——蜀では王の成長を見て

——魏では王の変化を知った

その六つの外史でワシは愛する者達に出会い、恋をした。

しかし運命というモノは残酷だった。外史には終末があり、終末を迎えたため、ワシはその外史から弾き出され、次の外史を訪れることとなった。

……………恋した者達と再び出会えてもその者にとつてワシは初対面の男。

全ての外史ではワシは『天の御遣い』という肩書きを持ち、それぞれの外史では王だったり、王の補佐する者だったり、警備隊長だったりと外史によってその役割についていた。

まあ、その肩書きも元の世界に戻ったときには意味のないモノだが。

外史で得た経験は次の外史でも引き継げるようだった。ワシの知り合いによれば、本来は次の外史に渡れば記憶と経験はリセットされるようだが、ワシだけは特別に引き継げる体質だったようだ。

……逆に言えばこの体質が原因で辛いのだがな。

だってそうだろう？ 経験と記憶を継ぐということは恋した女性や愛してきた女性の記憶も引き継いでいるんだ。

大好きだった女性と何度も何度も戦わなければならなかったのだ。

元の世界に戻ったとき、管路は外史の記憶を消そうかと提案してきたがワシは逆に外史で得た経験と記憶を元の世界に持ち込みたいと願った。

故に今のワシは『俺』という一人称から老人のような『ワシ』というふうにならなくなってしまった。そりやそうだ。

合計百年以上の人生経験したわけだからな。

恋した女性達のように、いつかワシの仕えるべき主君が現れることを願って望んだ願いだ。

……だからこそ、ワシは色のない高校生活を送っていた。

編入したこの川神学園では強いヤツらはいるが、仕えるには青い連中ばかり。王才、軍才、武才を持つ者ばかりだがワシが望んだ主君がいない……………。

このまま現れぬならばいつそ、と思いビルの屋上まで来た。

しかし既に先着がいた。その人物は自殺志願者でもなく、ましてや人間でもない。

「あら、お久しぶりね。北郷一刀」

「……………」

「こんなところに来て景色を眺めに来たのかしら？」

「……………」

「だとしたら残念なお天気ね。せつかくの夕陽も見えないわ」

ワシはとっさに木刀をその女性に向けて振るう。しかしそれは眼帯の女性によって阻まれてしまった。

鍵爪で木刀はバラバラになり、ワシは後退して二人の女性を睨み付ける。

「…………なぜお前らがここにいる。管路、キリカ」

「あなたなら織莉子って呼んでいいわよ」

「黙れ雌狐。キリカより一番信用できないお前を名前で呼んでやるもんか」

「あらあら、ツンデレねー♪ まあ、今は別にどうでもいいわ。あなたに招待状を送りに

来たのよ」

「招待状？」

管路はワシに竹簡を投げ渡してきた。それを受け取り、読んだ――

「退屈そうなあなたには持つてこいな任務でしょ？」

「確かにこれはいい腕鳴らしになる。久方ぶりに身体が動けそうだ」

今まで憂鬱だったモノが吹き飛ぶくらい心がワクワクしていた。

……………やはりワシは望んでいるかもしれない。

今まで忌避していた——殺し合いを、乱世の世界を。

(原作主人公じゃない主人公サイド)

オレの名前は兵藤一誠。所謂、転生したオリキャラというヤツだ。

え？ オレが原作主人公？

違うって。原作主人公と同じ名前のオリキャラだって。現に赤龍帝は(TSされた)原作主人公が所持している。

なんでTSしたかはそれはまた別のお話だ。

さて、今オレは重大な問題に直面していた。今日、うちの義妹達の中学校入学式を見守った後に目の前にあからさまな罠が仕掛けられていた。

肉の下に召喚陣が敷かれている。

これは罠だ。オレを召喚するためのあからさまな罠だ。

ふっ………ぬるい。この兵藤一誠がこの程度の罠に引っ掛かるとでも——

「思っているのかアアアアア！ ……………モグモグ」

肉にかぶりついたとき、召喚陣が発動してオレは異世界に行くことになった。だつて仕方ないもの……………美味しそうな肉だつたもん……………。

(虚無^{ゼロ}の少女に呼び出される前の主人公サイド)

ワタシは眠りにつく。ヴァンパイアという化け物だが純粹ではないため、こうして眠りにつかねばならない体質のようだ。

ワタシがかつて仕えていたヴァンパイアの姫君ならば自由に長い眠りにつき、起きることができるとは、どうもワタシは人の一生が終わる歳になると長い眠りにつくという定期的なものだつた。

(……………む。何かに引つ張られているような感覚が。フツ……………誰だか知らないが

—— かつて虚無とガンダールヴと冒険してきたヴァンパイア

それぞれの主人公が一つの世界に集まるとき、『混沌とした物語』が始まる……………。

「キリトくウウウウん、私を縛ってエエエエ♪」

「又オオオオオまた発作かアアアアア！」

……………一人忘れていた。彼もまた喚ばれる運命の少年である——

「あ、召喚陣！ とウツ！」

「逃がさないわよオオオオオ!!」

「ぎゃアアアアアスナさんも付いてきたアアアア!?」

——ただしお供に変態が付いていた。

召喚陣に飛び込んだ彼に抱きついて一緒に喚び出されることとなったのだ。

彼に幸があらんことを我々は祈る……………。

外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年 その一

(究極の生命体サイド)

ヤッホー♪ 私の名前はノエル。

リリなのノメイドのノエルちゃんじゃないよん。千香の師匠のノエルたんだよん。まあ女性として色々ダメな私だが、最近は暇をもて余している。

つい最近はどこかの世界の戦場を台無しにし、どこかの世界の平和を台無しにし、どこかのお姫様と王子様の恋路を台無しにした。

それに飽きたらその世界の有りとあらゆる生命を死滅させちゃった♪ キャピ☆

さーで、今日はどこの世界に行こうかなー？

そうだ！ ソラちゃんと千香ちゃんが転生した世界に行こう！

きつと面白い世界だろーな♪

—— 彼と彼女には常に災難と混沌があるのだから♪

(とある一般人サイド)

—— 夢を見ていた

とある青年が小さな少年に戦い方を教える夢だ。

少年は泣きながらも彼に何度も何度も打ち込みをしていた。

殴られ、蹴られ、怒られても少年は彼に食いかかる。

ときには少年を猛獣の群れにぶち込んだり、盗賊の拠点にカチコミしたりとやりたい

放題な青年だった。

というか少年………よくついて行こうと思ったな。

俺なら絶対逃げ出しているぞ………。

それから少年が一人で戦えるようになったとき、青年は少年を旅立たせた。会話からすればどうやら視野を広げるのが目的っぽいな。

青年は悲しそうな表情で少年の旅立つところを見送った後、彼に話しかける女性ヒトがいた。

そうその人は――

☆☆☆

俺の名前は五木雷斗。私立聖伴大学付属高校二年で地毛が茶髪で黒目な普通の男子高校生だ。

……………今、DQNネームって思ったヤツ、ちよつと校舎裏に來い。

テメーらに説教してやる。

まあ、なんにせよ。至つて非日常なんて無縁な男子高校生の俺は普通の友達、普通の生活、普通の高校ライフをしているわけだが唯一『非』があるなら俺が記憶喪失であることだ。

……………そう、俺には十三歳以前の記憶がなかったのだ。この町に來て聖伴に転校してきた以外俺は何も覚えていなかったのだ。

——
両親に親戚の顔

——
生まれ故郷の場所、その光景

——
趣味や特技

などなど、名前や年齢以外が真つ白な状態だったのだ。

まるでそこから産まれた存在と言えるくらい不自然なのだ。

ま、だからと言って気にすることじゃないが。今が一番なのだから。

「ちよつと待ちなさい!」

金髪の美少女に声をかけられたが無視である。なぜなら彼女は俺にとってトラブルメーカーであるからだ。

平穩無事を望む吾が輩には触らぬが祟りなし——グエ。

「無視するな——!」

「ギブギブ………首が絞まってるう」

ちくせう。まさかコブラツイストを決められてしまうとは………。

柔らかな二つの塊に顔が当たって幸せな一コマに見えるがリアルでは彼女の制裁は痛いである。

「バニングス先輩。何故にこのわたくしめを引き止めたのですか？」

アリサ・バニングス。バニングス家の一人娘で世界の富豪たるお嬢様である。

彼女と出合いは世紀末英雄伝説みたいなチンピラに絡まれてたところで『助けられた』のだ。

誤字ではない。

『助けた』ではなく『助けられた』のだ。

まさか自分がヒロイン的な立場になるとは思わなかった。チンピラは単にカツアゲしてただけなのに、格ゲーのごとくバニングス先輩の怒濤のコンボで撃沈された。

昔、彼女は誘拐されたことがあるため、それ以来鍛えているとか。

格ゲー並の実力者にランクアップとはなんぞなり……………。

それはさておき、どうもチンピラにカツアゲされてオドオドしていた俺を情けなく思いう度々彼女に絡まれるようになった。なんで彼女はこうしてかまってくるのかは謎である。

「アンタ、明日の休日暇でしょ? その日はアタシの誕生日パーティーだからちよつとアタシの家に来なさい」

「ええー? そんなブルジョア達の集まるパーティーに俺が逝くなんて……………」

「字が違うよ」

「現れたな、紫ガール先輩」

「すずかっ呼んでよ♪」

紫ガール先輩——またの名を月村すずか先輩である。

俺は彼女を警戒している。彼女からだならぬ心配がするし。出会った当初、おもちゃを見つけた子どものような目で見られた。

完全にロックオンですね、わかります。

「それで紫ガール先輩もそのパーティーに行くんですね」

「うん、そうだよ。親友の十八になるパーティーに出席するのは当たり前だよ♪」

「親友じゃない俺が行っても意味ないと思いますのでバニングス先輩。俺はそのパーティーには……………」

と言いかけたときバニングス先輩はとても悲しそうな表情で俺を見ていた。

……………なぜだ。なぜ俺をそんなにパーティーに誘いたがる。

すると月村先輩が俺に耳打ちしてきた。

「それがね、そのパーティーはアリサちゃんのフィアンセを決めるパーティーでもあるんだよ」

「(なんですと? ならばおめでとうじゃないですか)」

「(もう……乙女心がわかってないなあ)」

呆れたと言われても男性に乙女の心理を理解しろとは酷だが。なんでもバニングス先輩は結婚するなら好きな人がいいという夢見がちな少女な考えをしていた。

リアルではほぼ不可能じゃないかな、それ。

だって仮に好きな人が庶民だったら彼氏が認められるのはハードなミッション以外の何物でもないじゃん。

「で。俺を誘う理由はバニングス先輩の恋人役をしろというワケですか?」

「そ、そうよ! だから来なさい!」

「だが断る」

「なんですって! どうしてよ!」

「俺にメリツトないし、美少女に釣り合うほどの美男子じゃないので。それに平穩第一の俺にとって明らかにテロとか強盗に襲撃可能性ありありな非日常のお誘いですから」

「このへタレ!」

「へタレ王に俺はなる」

ふざけて言ったら今度はアイアンクローされた。痛かったでござす。ちなみに結局パーティーに参加することになった。……………別に翠屋のケーキの誘惑に負けたわけではない。断じてそうではない。

しかし……………なぜバニングス先輩は俺を彼氏役に選んだのかな?

俺がパーティーに行くことを了承したときにとっても喜んでいたことと関係あるのかな?

(バニングスサイド)

今日、アイツにアタシの誕生日パーティーを招待するために声をかけた。

初めてコイツに出会ったとき、そこらのチンピラにヘコヘコするヘタレで男として情けないのかと説教したときだ。

彼はアタシの言葉を耳に流してばかりで聞こうという気は全くなかった。むしろ、やる気の無しの反論でアタシを余計に苛立たせた。

そのときにアイアンクローしたことは悪くないと思う。

そんな日常を繰り返しているとある日、アイツに絡んできたチンピラが集団を連れてアタシに御礼参りしてきた。

アタシはその集団と戦い、背後から近づく仲間に気づかず、頭を殴られた。意識を失い、手足を縛られたアタシは下品な笑みを浮かべてチンピラ達に制服を乱暴に破られた。

これから受けることは容易に想像できた。

アタシは小学校ときにあつた誘拐と同じようなことが起きて身体が自然が震えてきた。

——イヤ、誰か！

きつと王子様が来てくれる、とそんなご都合主義があるとアタシは密かに信じていたかもしれない。

だけど現実残酷で、そしてアタシは——

「突撃イイイイイ!」

……訂正。王子様はいなかったけど頭にパンツを被ったメイド服を着た変態がいた。

彼女はアタシを襲おうとしたチンピラにシャイニングウイザードで壁まで吹き飛ばした。

「にゅふふふ……いいね、いいね! 凌辱されるところを台無しにするこの空気いいね! そうだと思わないかい? 雷斗くん!」

雷斗? ヘタレがここに居るの?

アタシはそう思って瞼を開けて彼女を見ると――

——グツタリとした五木雷斗がいた。

返事がない。ただの屍のようだ。

そんなテロップが流れた気がした。しばらく呆けていたチンピラは激昂して変態に一斉に襲いかかってきた。

「危ない！」とアタシがそう叫んだとき、その変態は言った。

「大丈夫だよ。なんせ、私の知る『幼馴染み』は最高して最強のナイトだから♪」
刹那、変態に襲いかかってきたチンピラの一人が吹き飛んだ。

吹き飛ばされた理由は——

——グツタリしていた五木雷斗がそのチンピラを殴り飛ばしたからだ。

アタシがそのときそのチンピラのために説得したのは言うまでもない。

そんなこんなでアタシは後日、五木にお礼を言ったがその日のことを彼は覚えてないらしい。

なんでも彼を拉致してきた近所のお姉さんによつて意識を奪われ、目覚めると自宅にいて、朝になっていたらしい。

なにそのホラーと彼は乾いた笑いをあげていたが、アタシは深く言わなかった。

……理由はどうあれ、アタシはコイツに惹かれていた。

小学校の頃に誘拐されたときに同期生が言っていたようにアタシはコイツを王子様に見えたのだから。

ねえ、朱美妹。アタシも見つけたわよ。

アタシだけの王子様を。

外伝! 壊れた女性と忘れていた少年 その二

(雷斗サイド)

——夢を見ていた。

それは前に見た夢とは違い、青年の幼少期のようだ。

彼は普通の大人しい少年だった。

外に出る度に彼はしていることは木陰で読書ばかりだった。彼はなぜ友人と遊びに行かないか観察していると、子ども達は彼を恐れる目で見ている。

一人の子どもが化け物、叫び石を投げつけてきた。

——しかし、その石を少年は目をくれずに、当たる前にそれを掴んだ。投げた石がまるで見えていたかのように。

しかもパリパリと電気を帯びた石を地に向けて投げた。

当然、爆発して子ども達は雲の子を散らすように逃げ出した。

……だから彼は化け物と呼ばれていたのか。

そのせいで周りから疎まれ、友人ができないうだ。

両親は既に他界しているのか夕暮れになっても迎えに來ない。

少年はいつまでも一人だった。しかし、今日は違った。

なんと少年に声をかけてくる少女がいたのだ。少年は怪訝な表情で彼女を見る。

そして彼女は言った。

「遊ぼうよ♪」

その少女は誰かに似ていた。そう前の夢に出ていたあの女性と。

そう彼女は

☆☆☆

わたくしこと五木雷斗は憂鬱な夜を迎えることになった。今日はバニングス先輩の誕生日パーティーだ。

色んなVIPを迎える中で一般人が俺だけだ。

いや四人くらい一般人らしき人がいた。

「筋肉こそ至高」と言っつてそうな金髪的美青年。薬指には指輪をしていた。既婚者のようだ。

モデルのようなスタイルをしたロリシヨタについて熱く語っている金髪の女性。

健康的な体型をしているトリガーハッピーらしき女性。

それをまとめる短髪の苦労人な女性。彼女の左の薬指には金髪青年と同じく指輪をしていた。この人が彼の奥さんなのだろう。

なんとなくだが、強く生きろと思った。

……………なぜか美青年美女なのに、前に残念がついていそうな気がした。

この人達もバニングス先輩の友人か知り合いかはわからないが、パーティー招待客のようだ。

あとで話しかけようと思う。

まあ、なんにせよ。場違いな空気に呑まれた俺はどうしようか右往左往をしていると、バニングス先輩に声をかけられ、腕を抱かれた。

柔らかな二つの塊が心地よいでござる、と思つていると彼女を追つてきた金髪青年と比べるとやや下の美青年とその取り巻きが彼女に話しかけてきた。

「アリサちゃん、なんで逃げるんだよ？ 俺様と君は許嫁だろ？」

「誰がアンタの許嫁よ！」

ニヤニヤといやらしい目でバニングス先輩を見ていた美青年は俺に視界に入れると表情を変えて睨み付けてきた。

「なんだ貴様は？ 失せろよ庶民。貴様には用はないんだよ」

「失せたいんだけどこの美少女に逃げられないようにさせられているんだよ」

事実そうである。バニングス先輩のマシユマロにやられて動けないのだよ、ワトソンくん。

するとバニングス先輩は爆弾発言を投下してきた。

「この人はアタシの恋人よ!」

この爆弾で周りは静まりかえり、それから笑いが飛び交った。

そりや、そうだ。俺みたいなのツツ面草食ボーイが肉食系お金持ちのお嬢様が釣り合うわけがない。

なんかバニングス先輩のせいでスツゲー恥をかかされた。

「あー笑えた! そんな不細工がアリサちゃんとか釣り合うわけがないだろ?」

全くその通りである。そう言った美青年はアリサちゃんの手を乱暴に掴み連れていこうとする。

「さあ、こんな不細工と一緒にいたらアリサちゃんが穢れる。こつちにこいよ」

「離してよ! いやよ、離して!」

俺はやつと解放された——そう思っていた。

ザザツ………

頭にノイズが響く。

これは夢で見えていたと同じ……。

俺はその夢を起きた状態で見ているようだ。スクリーンに映された映画のように俺はその夢を見た。

——服を破り捨てられ

——無惨な格好で犯された夢で見た少女……………

——そしてポコポコになって倒れた少年が見ていたのは……………血塗
れの姿で犯した男達を原型のない肉塊した少女の姿

嫌な感じだ。少女がその日を境に狂ってしまった。

……………なぜだ? なぜ自分が少女が壊れたことを知っているのだ?

いや、そんなことはどうでもいい。

俺はバニングス先輩を助けないと。でないとあの少女のようになってしまう。

そんな気がしたのか、俺は美青年の腕を掴んでいた。

「なんだよ庶民。俺様になんか、イダダダダダ!」

自然と力が込められる。美青年の顔が痛みで醜く歪む。取り巻き達はそれには狼狽していた。

「離せよ！ このゴミ——」

言う前に俺は美青年の顔まで近づき言葉を吐く。

「死ねてえのか？ クソガキ……………」

明らかに自分じゃない自分が言った言葉だった。俺は平穩第一な人間なのに実は野蛮な男だったようですよ、顔も知らないお父様お母様。

その言葉に美青年の取り巻き達は息をのむ。殺気というものが俺に滲み出ていたのかな？

唯一平気だった美青年は激昂して俺に殴りかかってきた。

「んだと、このゴミがアアアアア！」

その拳を俺は顔で受けてしまった。あえてである。

しかもノーダメージだ。逆に美青年が手を抑えて声をあげていた。

弱いなこいつ。とりあえず、それなりの対価として俺は反撃に移らせてもらう。

「痴漢だアアアアこいつ痴漢だぞオオオオオオ！」

俺は美青年に指をさして叫んだ。

「なっ!? 俺様はそんなこと一切」

「その証拠にアソコがモツコリしているぞオオオオオ!」

「なに言ってるんだお前!」

「シクシク……みなさん聞いてください。アルベハイ家の長男がアタシのお尻と胸を触り出して、あまつさえアタシの大事なところを……」

「そんなことしてねえぞ!」

しかし無情かな。アルベハイ家の言い分とパーティ主催者の娘の言い分ではどちらも有利か明白である。そのアルベハイ家の長男は屈強な黒服の男性達に連れて行かれた。

何度も何度も反論をしていたがバニングス先輩のお父様が鶴の一声でその美青年は反論しなくなり、ポカーンとした顔になった。

これは間違いなく『お前に娘に相応しくない。なのでお前んとこの会社との取り引き打ち切るわ』と言われたに違いない。

まさしくザマアである。

「それにしてもバニングス先輩もかなりの役者でしたよ。特にウソ泣きがすばらしかったです」

「男なんて涙一つでチョロいものよ」

「それを男の俺の前で言っただけじゃほしくないです」

幻想がソゲフされそうだから。

「アンタに感謝しているわ。おかげで一番邪魔なヤツが消えてくれたわ」

「バニングス先輩って結構黒いですねー」

「アリサよ」

「へ？」

「……き、今日からアリサと呼びなさい！」

なんか知らないけど名前で呼び捨てとはちよつと厳しい。なぜならこの人は学校でも男と女の間では大人気なお姉様なのだから、常に親友以外には名前で呼ばれたことがないのだ。

つまるところ標的にされそうだから呼びたくないのは本音である。

しかし――

「わかりました。二人つきりのときはそう呼ばせてもらいます」

「~~~~~!?!」

言葉が不味かったのかアリサ先輩は顔が真っ赤だった。ヤバイ……………怒らせたかなー？

そう思う今日のパーティーだった。

そしてこれが――

——
五木雷斗の最期の日常だった……。

「して、アリサよ。この男は誰なのだ？」

「アタシが決めたファイアンセです」

「パピーは貴様を認めぬぞオオオオオ認めさせたければワタシを倒してからしろオオオオオ!!」

最後にアリサ先輩はとんでもない置き土産をしてくれたせいで彼女の父親と小一時間問いつめられた。

外伝! 壊れた女性と忘れていた少年 その三

(雷斗サイド)

——夢を見ていた。

それは荒野の話だ。青年が教えていた少年が青年の元へ帰ってきた。

青年は少年に戦うように仕向けていた。これから起きる戦争のためらしい。

しかし、少年はそれを聞こうとしない。彼には彼の理想のためがあるのか、人殺しはしたくないようだ。

少年の理想は間違っではない。ただ戦争においては不可能なことだ。

命のやり取りの地で殺さず、敵を倒すことは愚か者だと俺は思う。

いつか、きつとそれは少年自身が命の危機を体験することになる。

案の定そうなった。

………そして、青年が少年を庇う形で彼を守った。

少年は自分のせいだと何度も何度も青年に謝る。しかし青年は最期の最後で彼の頭を撫で、自分が持つ力を託して笑顔で逝った。

残された少年は呆然としていた。周りの敵らしき人物は嘲笑し、少年を殺そうとしてきた。

———そこで修羅が一人生まれた。

少年は自らの理想を否定し、人殺しした。もはや彼に迷いはなく、後悔もなく、ただ敵を蹂躪した。

命乞いや逃亡も関係なくの皆殺しだった。

青年が死んだ後に行われた大虐殺はなんと皮肉なモノだったか……………。

そうしているうちに少年に近づく女性がいた。

そう彼女は———

☆☆☆

アリサ先輩の誕生日パーティーが過ぎた後、俺は今度は月村先輩に連れられて喫茶店に

来ていた。

なぜ俺がここにいるのか？

理由はアリサ先輩のことについて話したいことがあるそうだからだ。

最近のアリサ先輩はおかしい。

ふざけた発言をしてるのに、制裁はなかっただ呆れるだけになったのだ。

あり得ぬ。あの激しいという代名詞のアリサ先輩が制裁することがないなんて。

さては偽者だなと言ったらアイアンクローされたけど。

しかも事あるごとに俺に話しかけては笑顔になったりと顔を紅くしたりと感情が他の人に向けるよりも表れていた。

まさに解せぬのこれ一言である。

そういうわけで月村先輩に相談したら、休日に指定された駅の近くに来るように言われた。

とりあえず行ってみると喫茶店に案内された。彼女はコーヒーを頼んだので俺も頼んだ。

「アリサちゃんが最近おかしいのは知ってるよね？」

「はい。理由がわかるのですか？」

「もちろんだよ。何年、幼馴染みをしていると思ってるの？」

「半年くらい」

「それは五木くんのことじゃないかな？」

そうだった。さて、冗談はこれくらいにして真面目に彼女の話聞くこととしよう。

アリサ先輩はどうしてあんなったのですか？

「それは君が原因だよ」

「俺……………ですか？」

「うん。アリサちゃんはおなたに惹かれ始めているんだよ」

な、なんだってー!?(棒読み)

はい、なんとくわかってました。だって最近あの人が見る目が熱っぽいもん。

まあ、あんまり自信がなかったから確信していないが。

「だから率直に聞くよ？　アリサちゃんのことをどう思っているの？」

「狂暴だった頼りなる先輩」

「それは……………ホントにそう考えてるの？」

「それ以外にはありませんねー。あの人は俺に好意があるのはわかりましたが、自分はいくぶんわかりません。卑怯かもしれませんが俺は『恋』とか『愛情』というのがわかりません。……………なんせ記憶喪失ですから」

俺は月村先輩に記憶喪失のことを話した。両親がどこにいるのか、どんな人なのかわ

からないし、愛のことがよくわからない。

……………受けたこともない感情を知らないのに理解することは無理がある。

「それは……………」

「まあ、唯一の救いは友達がなんなのかをわかっていることですかね。今のところ友愛が強いつてところですよ。だから嫌いとかそういうのはないですから安心してください」

俺がそう言うのと月村先輩は何かを考え込んでいた。俺の記憶喪失に関してだろうな。

まあ、考えたところであんまり意味ないと思うのだがねー。

「……………記憶を取り戻そうと考えたことはないの?」

「取り戻せば何かメリツトがあつたら考えてましたよ。それに取り戻して『俺』というモノが失って昔の『俺』になつてしまうのがイヤなので」

そう言つて俺はコーヒーを含む。月村先輩は「これは強敵だよ……………アリサちゃん」と呆れていた。

強敵つて俺は普通の一般人なんです、戦えと申すのかこの人は……………。

☆☆☆

「今日はありがとうね」

「いいいえ、美少女とお茶ができて目の保養ができましたから」

「それは素で言ってるのかな？」

「基本本音はぶちまけるのが俺のモットーなので」

ちよつぱり照れた月村先輩に癒しを感じながら俺は彼女と別れた後、そのまま帰ろうと足を運んだとき、背後から月村先輩の悲鳴が聞こえた。

……なぜか知らないが悲鳴がしたところへ向かってしまった。そこには黒のワゴン車に乗せられそうになった月村先輩がいるのではないか。

咄嗟に飛び出した。

頭では引き返せ、戻れなくなるぞ、と声がする。

——それがどうした。わかってるんだよ。

無謀かもしれない。

不可能かもしれない。

だけど逃げ出すわけにはいかない。俺の魂がそう叫んでいた。

俺は月村先輩を乗せようとした男にタツクルをくらわした。そいつが怯んだ隙に彼女の手を掴もうとした。

ザシユツ

右手の感覚が無くなった。

月村先輩の手を掴んでいた手が切り落とされた。

激痛で顔が歪むが切り落としたヤツを睨み付けた。

——その人のことは、俺は知っていた。

否定しなかった。嘘だと思いたかった。

だってその人は

——俺に世話を焼いてくれた女性だったのだから。

ズバツ、ブシュー!!

今度は身体を切り裂かれた。

沈む、シズム、しずむ……………。

意識が……………失う……………。

このまま俺は……………しぬ、の……………かな……………。

(?!サイド)

さて今宵始まるのは復活劇。

誰が少年は無力だと決めた？

誰が少年は普通だと決めた？

誰が少年は死んだと決めた？

ここからが本番だ。壊れた女性が殺したのは『普通を望む少年』だ。

ではその少年から生まれるものを紹介しようではないか

目覚めるの『無血の死神』を育て上げた男。
光速を体現する者なり。

外伝! 壊れた女性と忘れていた少年 その四

(転生した男サイド)

ふと目が覚めた。ここはどこで俺が何者なのかを確認する。

……………なるほど、俺が何者かがわかった。いや思い出した。

全く……………転生してからは記憶を消去してもらったのに、これでは台無しじゃないか。

まあ、台無しにするのが彼女らしいが。

それにしても片腕を切り落とされるとは思わなかったし、身体も切り裂かれるとは思わなかった。

まあ、神器で止血したから問題はないが。

さてさて……………面倒なことに誘拐されたあの小娘を助けにいかないとな。出ないと彼女が先に壊してしまいそうだ。

(すずかサイド)

また誘拐された私は手足を縛られ、ジツとしていた。大人しくしていた理由は別に助けが来ると期待していたわけではない。

——人が死ぬところを目の前で見てしまったのだ

——しかもその人はアリサちゃんの……………

私はどうしてお気に入りの喫茶店でお話をしようと思ったのか後悔した。家ですれば誘拐されることや彼が殺されることはなかったのに！

私は罪悪感に苛まれていてと知ってる人とその取り巻きが現れた。

「安次郎おじさん、まさかあなたが……………!?!」

「察しがいいな、すずかちゃん」

この人はかつて私達の財産を狙って何度も襲撃してきた同じ夜の一族だ。最近は大
人しくなっていると思っていたが、油断していた。

今度も私達の財産狙いかな？

「違う。ワタシの狙いは君の二人のお人形さんさ」

ノエルとフアリン? なぜと聞くと仮面をつけたが答えた。

どうやら彼女は彼に協力しているらしく、異世界について話したらしい。その話を聞いたおじさんは魅了され、異世界に進出——いや侵略を決意したらしい。

異世界の行き方はどうやら仮面をつけた女性が知っているらしく、後は戦力となる兵器が必要なんだとか。

「そしてワタシはその世界の頂点に立つのだ!」

「安次郎くん、その台詞は明らかに三流が吐くモノだから」

「うるさい。一度くらい言ってみたかったのだよ」

この会話だけなら自分の身に危険がなさそうに思えるが彼と彼女の背後にいる三体自動人形が武装している。そのうちの一人は明らかに異様なくらい人間身を帯びていた。

おそらく、人質の間は私を傷つけるつもりはないようだ。

その後、おじさんと仮面の女性がこの場を見張りを任せて離れた。

さてと……………行動しますか。

私は見張りを目を離した隙に胸に隠した紅い丸薬を取り出して飲み込む。

これは血でできた丸薬だ。夜の一族は貧血になりやすいがため、吸血行為や血を飲まないと本来の力が発揮しない。

私はお姉ちゃんとは違つて知識方面より力関係の方面が強い。

中学生のときにやんちやな男子に『ゴリラ女』とからかわれたときに笑顔でアイアンクローをくらわせたのも良い思い出だ。

私は夜の一族の力を発揮して縄を引きちぎり、見張りの男達を失神させた。彼らは偶然にも地図を持っていたのでそれを持っていくことにした。

誘拐されてから鍛えておいてよかった。私はそう思いながらここから出ようと隠密のように走り回る。

誰にも気づいていないのでそのまま出口へ向かう。

「意外に早かったな」

出口の前におじさんと自動人形がいた。待ち伏せされていた………？
いや違う。彼はわかっていた。

このとき私は迂闊だったと気づいた。

見張りの男が持っていたあの地図は偶然じゃなかった。

あえて仕掛けたのだろう。

私が逃げ出す気があるかどうか確かめるために。

「こうなってしまったのは仕方ないが。君の手足が無事じゃ済まなくなつたな」

彼は二体の自動人形に私の手足を切断するように命じた。

ブレードが迫ってきたが、紙一重でかわして一体目のブレードがある腕の関節を破壊して二体目のブレードを回避した。

二体目に足払いをかけてそれから胸に向けて踵落としを決めて心臓部を破壊した。

自動人形の心臓部は活動動力源となるモノがあり、それを破壊すれば自動人形は活動停止する。

まあものスゴク固いから踵はズキズキするがそれは仕方ないと諦めておこう。

すると一体目は私を捕まえようと無事の手を伸ばすがそれを利用した背負い投げで地面に叩きつけて心臓部をまた足で破壊した。

……………あのパイレーツの料理人の足技に憧れて足を鍛えてよかったと思う。

おかげでずかさんは鉄をも曲げる足になりました。

「やるねえ……………。まあ予想通りか。イレイン」

イレインと呼ばれた人間身を帯びた自動人形が前に出た。……………彼女は強い。も

しかすと恭也さんくらいかもしれない。

私は地を蹴り、イレインに向けて上段蹴りを放つ。

「甘〜」

アツサリ掴まれ、投げ捨てられた。すぐに立ち上がろうとしたが肩にチクリとした痛

みがした直後、力が入らなくなった。

「し、痺れ薬……………?」

「そうさ。テメーみたいなチョロチョロしそうなガキを動けなくさせるためにつてな」

イレインは私にブレードを降り下ろす。

身体は動けない。力も入らない。

私はこのまま手足を切断され、自由に動けなくなり、そして人質として利用されてし

まう。

「誰か………助けて」
気丈に振る舞っていた私だが、そのことを考えているとポツリと言葉が出た。

「わかった。それが今回の依頼だな？」

聞き覚えがする声が出た刹那、イレインは蹴り飛ばされた。数回バウンドした彼女は受け身を取り、蹴った犯人を睨み付ける。

私はイレインを蹴り飛ばした犯人を知っている。

——茶髪で片腕がなく

——切り裂かれた服と何かで焼かれた切り傷

そして本来なら黒目のはずの瞳が金色に染まっていた。

「誰だいテメーは！」

イレインは激昂する。それに対して彼は静かにそして冷たい声色で答えた。

「五木雷斗。またの名を——」

—— 『閃光』のライト。ただの神器使いさ
黒いマントを着た彼の身体は雷で帯びていた。

(雷斗サイド)

状況を確認。

敵は二人。戦力になるのは一人のみ。

ヤツを殺ればなんとかなりそうだな。

久しぶりにこの神器にと共に戦うことになるとは思わなかった。本来なら転生した
ことでこの神器閃光の衣は使えないはずだ。

転生したことで魂も変わっているからな。しかし、前世の記憶を思い出したことによ
り、変わった魂が前のように元に戻った。

……………望んでいなかった復活を果たしてしまった。

これが終わったら切腹しようかなとさえ思っている。

「このクソガキがアアアアア!!」

なんかぶちぎれた美人さんがこちらに斬りかかる。何もかもがスローに見える。
閃光の衣
神器の恩恵だ。

光速移動も可能とするこの神器に一般より速い程度ではスローでしかない。

俺は次々にくる斬撃を回避し、隙を見つけるとすぐに持っていた縄でイレインという女性の背後から首を縛りあげる。

「効かねえ……よ!!」

「危ない!」

月村すずかの叫びに反応して咄嗟に身を退いたが、なんとイレインの腕にはマシンガンが内蔵されていた。

数弾くらいが身体に当たってしまった。腹部が貫通して痛い。

「弾で腹を貫かれたのにまだ動けるとか化け物かよ………」

「人間じゃないお前に化け物と言われたくない」

「うるせえ!!」

反論とばかりに乱射してくるイレインの銃弾を回避する。しかし、受けた銃弾のため回避行動に支障をきたしているため、何回か掠る程度になつていた。

「月村すずか。こいつはなんだ? 人間じゃないのか?」

「自動人形というロボだよ——ってそれさえ知らずに戦っていたの!」

「当たり前だ。俺は全てを思い出してからここにきたばかりだが、こんなブリキ人形は初めてみた」

「じゃあどうやって倒すつもりだったの!？」

「問答無用に八つ裂きすればいいのかと」

「わけがわからないよ!」

月村すずかのツツコミを聞いているときいきなりワイヤーみたいなモノでイレインに捕まえられた。ヤツは勝利を確信しているのか笑っていた。

……………馬鹿め。それは悪手だぜ。

『『なんちやつて十万ボルト』』

「うぎやアアアア!？」

放電したことでワイヤーから伝って感電してしまい、イレインはふらふらと立つのがやつとな状態になった。

「くそ……………こんなはずじゃ……………」

「隙ありんす」

「ガッ!？」

俺のボディブローがイレインに直撃してくの字に曲がって飛んでいく。

「ごんのクソガキがアアアア!？」

マジ切れしたイレインは斬りかかってきた。さてと、そろそろファイナーレといくか。俺は手に雷を集中させ、手刀を構えて一刀の刃が完成させる。

パチチチチチチ!!

本来ならば手刀じゃなくてクナイを使うのだががないモノをねだって仕方ない。

俺はそのまま高速移動し、イレインの胸にめがけて雷の刃で貫く。

「ガ……………ガガ……………」

糸が切れたようにイレインは倒れる。それを見た中年の男は逃げ出そうとしたが、光の鎖で拘束された。

……………これはなんの魔法だ？ 初めて見る形式だな。

『『バインド』。魔導士が使う魔法だよん』

仮面つけた知ってる女性がいた。

月村すずかは彼女に対して警戒の色を強めている。そりやそうか。俺を殺しかけた女だしな。

パチパチパチ

「いやー見事な抹殺だったねー♪ イレインちゃんが倒されちゃうなんて私も予想外」

「……………」

「にゅふふふ、久しぶりに君の勇姿が見れて興奮しちゃった……。どう? この後、私と——おぶ!!」

俺はヤツが言い終える前に、目の前まで踏み込んで仮面を破壊するほどの威力で顔面を殴り付けた。数回バウンドして壁まで叩きつけた後、見張りが持っていた手榴弾をヤツに向けて投げ捨てた。

ドガアアアアアン!!

よし、爆殺完了。

「や、やり過ぎじゃないかな?」

「甘いぞ月村すずか。ヤツはこの程度で治まる変態じゃない」

「いや変態って……。え?」

月村すずかは爆破された方向に目を向けると、啞然としていた。……………ヤツが爆弾でミンチになってないからな。それはもはや普通の人間じゃないことだ。

「ああん……。相変わらず激しい人だねーん」

「チツ、この程度じゃ死なないか……………」

「それは再会した幼馴染みに言う言葉なのー？　ぶーぶー」

「ほげけ人外を越えた究極生命体。お前を殺せるヤツはもはや概念殺しができる化け物共だけだ」

俺がそう言うのと彼女は嬉しそうに、懐かしそうに微笑む。

エメラルドのような輝く緑色の髪。女性らしさをハッキリしたスタイル。

……………一番の異常な部分があるとした胸囲だな。魔乳だ、魔乳クラスだ。

まあ……………なにせよ。

「久しぶりだな、エール」

「今はノエルって名乗ってるんだけど、ライト」

かつての幼馴染みは皺一つない変わらない美貌で俺と再会を果たした。

外伝！ 壊れた女性と忘れていた少年 その五

(ライトサイド)

それは過去の追憶——

十五歳の彼女は泣いていた。

—— 破かれた衣服に

—— 男によつて汚された身体

俺はただ彼女がゲスな男達に汚され、踏みにじられていることしか見ていることしか
できなかつた。

自分には力があつた。

けど、それを使うのが怖くて、彼女に拒絶されるのが、怖くて……………。

結果、彼女は『人ならざる者』になつた。

俺と同じ—— いやそれ以上のナニカになつた。

後に俺と彼女が使う力を『神器』と知ることになる。

彼女はワラツテいた。

狂ったように、この世の全てに絶望していた。

俺はそれに見るに耐えられず倒れた身体を立たせる。そして抱き締めた。

「ねえ、私が殺したんだよ? スゴいでしょ?

褒めて、誉めて、ホメテ♪」

彼女が殺したのはゲスの男達のことだ。

八つ裂き、破裂、皮を剥がれされた死体が辺りに散らばっていた。

ああ………こうなるくらいなら俺が化け物になるべきだった。勇気を出すべきだった。

しかし、それは全て後の祭り。

ここに『混沌の神器使い』が誕生したのだ。

——— 魔女が産声をあげたのだ……………。

笑顔の彼女に俺はいつものように頭を撫でて言った。

「スゴいね、エールは」

彼女は皮肉にもいつものような満面の笑みで喜ぶのだった……………。

(雷斗サイド)

さて、追憶からエピソード的な話をすれば安次郎は月村縁の警察署に連れていかれ、イレインは修理されて変態になった。

……………誤字ではない。マジで変態化した。

いくら修復不可能から直そうと思ってエールに修理を任せたのは間違いだった。今のイレインはまさしくDMの化身である。

事あるごとに俺に踏んでくるようにせがんでくる。

……………変態と絡む運命から逃れられないのか？

まあなんにせよ。イレインが直った後、俺は月村すずかに月村家に招待されることになった。

……………面倒な予感がプンプンするぜ。

☆☆☆

今、俺は月村忍と月村恭也の二人と向かい合って座っていた。傍らにはそれぞれ付き人がいた。月村サイドには姉妹型のメイドの自動人形の二人。

俺サイドには同じくメイドで頭には猫耳を装着し、ノーパンノーブラの状態の変態がいた。ぶつちやけ言えばエールである。

なぜ俺が彼女が下着無しを知っているのかは今朝、宣告したからだ。確認させようと俺の前でメイド服を脱ごうとしたところで、我が渾身のストレートで阻止できた。

そのとき彼女の悦んでいた顔は悪夢である。DM万歳なヤツである。
……………ホントなんだこの百八十度違うメイドは。

「か、変わったメイドさんね……………」

「んなわけあるか。こいつはただの変態だ。んで、俺を呼んだのはどういうつもりだ？」
「さりげなくトンデモ発言したわね……………。まあいいわ。あなたに話したいことがあるのよ」

話と言うのはきつと月村すずかのことだろう。なんとなくだが、人ならざる者の気配がしたからな。

「それは月村すずかのことか？」

「……………どこまで知ったの？」

「初対面の頃から月村すずかが人ならざる者以外しか知らない。それに貴様らのことがどんな存在かどうでもいい」

俺にとつて興味ないことである。不服そうな月村恭也だが、月村忍に遮られ、グツと堪えたようだ。

「じゃあ、私達のことには干渉してない……………って言いたいのかしら？」

「然り。俺にとつて肝心なことはテメーらが俺の敵であるかどうかだ」

「……………仮にそうだったらどうするつもり?」

「殺す。一族、関係者、または親戚全てを殺すつもりだ」

その言葉に月村恭也と付き人のメイドは険しい顔をしていた。俺が本気だとわかっているようだな。

「血も涙もないわね……………」

「あいにく、そうしなければ復讐する輩がいたのでな。そうしないと気が済まない」

「ビュービュー♪ カッコイイ♪」

「黙れ変態。豚は黙って鳴いてろ」

「ああん♪ 罵倒が痺れるう〜♪」

興奮する変態はスルーして俺は再び会話を戻すことにした。

「用件はそれだけか?」

「いいえ。あなたには契約をしてなければならぬ」

「契約? ああ……………なるほど。化け物のことを口外しないことか。馬鹿馬鹿しい。そもそもこんなことを信じる愚か者がいるとは思えないな」

「残念だけど世界中にチラホラいるのよ」

「……………ホントに世界はくだらない」

前世と同じように世界には理不尽と欲望が渦巻いている。

だから俺は世界が嫌いだ。

弱者をいたぶる強者の世界があるように。

理不尽が許され、免罪で裁かれる世界があるように。

悪が善人を蹂躪する世界があるように。

……………だからこそ、俺は弟子のあいつが輝いて見えたのかもしれない。

戦場で夢物語を目指し、理想を語るバカ弟子の光が眩しく見えたのだ。

……………あいつは今ごろ何をしているのだろうか。

「契約の内容は？」

「婿入り」

「却下」

「私の妹がブサイクと言いたいの？　ねえ、そう言いたいの？」

「忍、彼にグロツクを押し付けなくてくれ！」

月村恭也は月村忍を羽交い締めして止める。ギャーギャー喚くこの女に俺は彼に同情していると、月村すずかが入ってきた。

「何しにきた」

「えっと……………雷斗くんが心配で……………」

「必要ない。これくらいで動揺するほど修羅場を潜り抜けていない」

「そ、そうなの?」

「そうだ。エールの馬鹿に三百匹くらいのヌーの群れに突き落とされたことに比べれば軽い」

「比較対象がルナティックレベル!?」

まだこれでもノーマルなんだが。ちなみにルナティックレベルはオカマ集団に単身で乗り込むことだった。

エールの馬鹿がお姫様気分で捕まったせいで助けるのに大分苦労した。

「とにかく俺は契約しない。したければケーキを寄越せ。寄越せば婿入りバッチこいだ」

「安ッ! ケーキで人生を捧げるの!?!」

「駄目だよライト。ケーキ程度で人生を捧げたら駄目だよ。せめて一年分くらいだよ」

「ブルジョワな月村家には安い対価なんだけど!」

「なん……………だど!?!」

「この人達の貧乏性はよくわかんない……………」

クツ……………これがブルジョワか! 俺の週一の楽しみはパンケーキなんだぞ!

ケーキなんて三ヶ月に一回食べれば贅沢だったんだぞ。

「それなら私の夫なんか、家族が喫茶店を営業してるから毎日ケーキ食べれるわよ」
結婚してくださいお兄様!!

「土下座でプロポーズ!? つーか、男だから無理!」

「とうか人前の夫にプロポーズしてんじゃないわよ」

月村忍に怒られた。いや、そりやそうか……………。

「ちなみに喫茶店でケーキを作ってるのはこのお姉さま」

「恭也様、わたくしめにこのお姉さまを紹介して!!」

「いや無理だし、それ見た目若いけどうちのお母さんだし!!」

「くそオオオオ理想の女性が既に既婚者だったとはわアアアア!!」

「アハハハハ♪ やっぱライトいじりはケーキ関連だね♪」

「エールに何か言われているが気にしない。くっ……………まさかもの三秒で失恋するとは。」

さらば今世の初恋よ……………。

「……………なんか面白いわね、この子」

「これがさつきまで殺気を出していたヤツなのか?」

「恭也……………いくらお父さんだからって親父ギャグにはしるなんて」

「ワザとじゃないぞ!」

月村忍もノリに乗って月村恭也をいじり始めた。彼がいじられるとは思わなかった。まあ、なんにせよ。

「私をこの鞭でシバいて!!」

「なんでやねん!!」

「ああん! たぎつてきたアアアアアアアアアア!!」

誰かこの変態を止めてください。

※無理です

by 作者

☆☆☆

さてさて、契約は結局結ばなかったが取り引きに応じた。

月村恭也の家族にケーキをご馳走になる代わりに俺は月村家の秘密を守ることになった。

ここで断れば俺はあの有名店である翠屋のケーキが、シュークリームが食べられなくなる!!

この取り引きは絶対に守る。ちなみに月村すずかはこれを聞いて「私の魅力はケーキ以下の………」とORZ状態になった。その後、月村忍に何かを唆されて、目に火を灯し始めて立ち直ったそうさ。

何を唆されたかを月村忍に聞いてみると彼女は微笑を浮かべて「ひ・み・つ」と言いやがった。

わけがわからないよ。なのでGの^{黒いアレ}人形を引き出しに仕込んでおこう。

月村家を後にしたときに悲鳴が聞こえたが、俺はナニモシラナイヨ？

「いやーライトが復活して私は嬉しいよ♪ これで退屈してこの世界を混沌にして壊さなくて済んだよ」

「さらりと恐ろしいこと言ったな。てか、お前。俺が転生するまでいろんな世界をむちゃくちゃにしたのか？」

「うんうん、いろんな人から非難や罵倒されて結構心地よかつたなあ。まあ、せつかく作った同志ごと滅ぼしてしまったのは失敗したと思うなあ」

相変わらず狂ったヤツだ。

いや狂わせたのは俺か……………。

あの犯された日から彼女は狂ってしまった。

彼女の神器——『道化師の心』はありとあらゆるモノを混沌カオスにさせる。

理や概念、ルールでさえ彼女にかかれば全てが台無しになることさえある。

こいつの肌がシワくちやになっていないのはこの神器で『生命』という概念が狂ったからだ。

歳は取らない、死ぬこともない——まるで『神様』のような存在。

彼女を倒せるとしたら概念殺しができる神器か、あるいは『楽しい』という感情を人類から消すしかない。

後者は『道化師の心』は本来、世界を楽しませるオモチャだからだ。だから喜怒哀楽の『喜』と『楽』をこの世に存在する人類から消さなければならぬ。

まあ、絶対に不可能だが。

それに、俺がああとき——力を出していれば彼女は救えたはず……………。「後悔しても仕方ない……………か」

そうだ。それでも俺は前に進むべきだ。前世からそうだったじゃねえか。

——たとえ全人類が彼女の敵になっても

—— たとえ世界が彼女を否定しようとしても

—— たとえ彼女が俺を裏切ろうとも

—— 俺は彼女の味方であり続ける。

それがあのととき交わした約束なのだから。

「あ。ちなみに今日からライトの家に住むから」

「なんですと？　なら、早く封印術式を設置しなければ」

「ふっふっふっ………この究極の変態に不可能な夜這いはない!!」

「よし、縛るか」

「ああん、イケずう……………」

とりあえず今日から貞操の危機の毎日が始まるうとしているということだ。

……………思い出さなきゃよかったなあ。そうすればこいつは近所のお姉さんのままだったのに。

(エールサイド)

転生した彼を見つけた。

もう離さない。離してたまるものか。

彼は私のモノだ。大事な大事な遊び相手だ。誰にも渡さない。

仮に彼が誰かを愛したとしよう——ならば私も彼を愛した人も愛そう

仮に彼が誰かを殺したとしよう——ならば私は彼を報復から守ろう

仮に彼が壊れたとしよう——大歓迎。私と同じだ。

私には彼しかいない。ライトしか昔の私を知らない。

そう、彼は私の思い出なのだ。思い出を失いたくないのは誰だつてそうでしょ？
それが家族であれ、恋人であれ、友人であれと………ね。

だから私は見つけたときに彼の『生命の概念』をねじ曲げた。これで彼は私と同じく死なない。二十歳後半からとらない。

——つまり不老不死の牢獄に彼を私は閉じ込めたのだ。

そのことを帰つてる最中に彼に言つたら怒られた。まあ、勝手なことをしたからねー。でも結局は許してくれた。

やっぱりライトは優しいよ。

私からしたらこれがハッピーエンド。彼が私のモノになつて終わる幸せな終わり方。

みんなからしたらバッドエンドかもね。ライトの想いを気にせず勝手なことをしたからね。まあ、私がライトを見つけたときからバッドだね。

でもどうでもいい。他人がどう思おうが私は彼を手に入れたからそれでいい。

——今日も私はワラウ。彼が私の手を握つて家に帰つていく。

今日から幸せな毎日が——『混沌』とした毎日が始まるのだから。

(ライトサイド)

それは遠い記憶——

彼女が忘れ去ったかもしれない記憶——

「ねえ、もし私が世界中を敵にまわしたらライトはどうするの?」

「見捨てる」

「即答!」

「冗談だ」

いつものように冗談を言うと彼女は頬を膨らませる。だから俺は正直に答える。

「そのときは俺が一生味方でいてやる。たとえば、どんな相手だろうと、どんなことがあってもお前から離れないし、裏切らない」

そう答えると彼女は指切りをしようと小指を出した。

「約束だよ♪」

「ああ、約束した」

綺麗な青空が広がる世界で俺は彼女と忘れることのない約束を交わした。なぜこんな約束したって?

——彼女は俺に『光』をもたらした希望なのだからな

STS編 最終章だから時々シリアスになる

第八十三話

(はやてサイド)

「どうしてこうなったんや……………」

私こと八神はやては憂鬱な気分のため息を吐いた。

理由？ そんなもん決まっとるがな。私の親友らと夫がまたやりおった。

まず親友第一号、高町なのは。時空管理局武装隊に正式に所属し、訓練学校を経て戦技教導官を務めている。階級は一等空尉。巷では『エース・オブ・エース』と呼ばれているが、それは世間の評価。

その実態は——訓練学校ではやりたい放題に撃ちまくるトリガーハッピー。

彼女に舞い込んだ任務の大半が犯罪者と建築物が無事だった試しがない。なんでこうなったんや……………。

親友第二号、フェイト・T・ハラオウン。時空管理局執務官で、法務や事件捜査を担当している。

『黒い死神』と言われ、世間から美人執務官と言われている。

その実態は——ロリとシヨタ愛好会会長。つまり幼い子ども達に萌えを感じる集団の長である。

前々から兆候があつたが、気のせいだと思つてた。思いたかつた。

気づいたときには既にもうある意味遠い存在になつてもうた……。親族であるアルフは変態のため、それが当たり前という認識があつたため、気にしていない。

どないしょ……………。

今はまだイエス・幼児・ノータッチを貫いているがいつかシフトチェンジしてエリオとキヤロの身に危機があるんじゃないか。

不安でいっぱいや……………。

最後に私の夫、八神衛陸戦少佐。彼は知つての通り変態の仮面をつけたチキンやけど、やるときはやる男やと私は思っている。

彼は問題を起こしそうで、実は起こしてない。変態の中では無害な方や。

せやけど、その周りに問題があつた。めっちゃあつた。

彼を募う集団——通称『マッスル連合』が筋肉について論議を起したり、争いを起こしてとる。彼らは実は闇の書の事件の被害者のほとんどやつたけど、衛くんの熱い説得と筋肉演説で別の方向に悟りを開いてもうた。

話を戻すで。

争いが起こるその度に衛くんが一喝で黙らせるが、彼が遠征に行っていたら、彼らは衛くんが帰ってくるまで止まらない。

質の悪いことに猛者共の集まりやし、犯罪者の検挙率が高いから上層部は解雇できへんのや。しかも、住人達は彼らが行う争いを楽しんでる。

誰にも止められへん、やめられへん。まさしく、もうどうにも止まらへん。

なんやねん………マッスル砲つて。どこのヤサイ星人の必殺技やねん………。

地球とかの惑星を滅ぼすつもりかいな。しかも、捕まえた犯罪者が筋肉に汚染されて、信者は増える一方や。

これがミッドが抱える三大問題の一つだったりする。

以上が、私はインターネットを開いた今日のニュースを見て思う感想や。

事件名が『エース・オブ・エース、今日も元気に建物モロとも一発一掃』『死神さん、ロリシヨタを熱く語る』『マッスル連合、今日も大暴れ。必殺、筋肉スパーク初披露』。

——もっかい言うで。

「どござしてこうなったんや………」

幼馴染み達がなんでこうなったんか、とても疑問に思う毎日である。原因は千香ちゃん達だと思うのは私の逆恨みやろうか……………。

閑話休題

本局遺失物管理部「機動六課」。これが私が四年かかって立ち上げた組織や。理由は聖王教会の騎士、カリム・グレシアが予知した来るべき破壊の運命を避けるためだ。

『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりの翼が蘇る。

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、

それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる』

これが一年前から出た予言。そしてその予言に新たな一ページが生まれた。

『そして、その運命を越えるとき……………始まる絶望と恐怖。抗う術はなくここにはなく、ただ襲われる理不尽にて世界は終末を迎える。希望を望むならば主人公を。全てを開きし者、切り裂く魔人、怒りの帝王、異界の拳闘士、黒き剣士、せんこ——

——』
とここで予言は途切れる。続きが気になるところだが、現在進行形に調べている。この予言は正しいかどうかは私にはわからないが、現にジェイル・スカリエツティが騒ぎを起こしている。

彼は違法研究で指名手配されてる犯罪者で、私はこの最初の予言に関わる人物だと思っている。だからこの組織を立ち上げた。

もう一つの予言は一応、対策は考えている。なんでも『彼と彼女達』と同じ存在がこのミッドにもいたのだ。

彼女は傭兵だったため、好都合だった。私は彼女のある条件を呑んで雇った。

しかし、それでもまだ不安要素はある。

『無血の死神』……か。ジェイル・スカリエツティと手を組んでいる噂がガセやといいんやけど』

四年前、管理内次元世界で初めて現れた少年で、管理局員達を蹂躪した。

彼は返り血を一切浴びず、汚れることなく、ただ蹂躪したことで魔導士達に恐れられ、こう呼ばれるようになった——『無血の死神』と。

彼は気に入らない相手は殺し、気に入った相手は殺さないおかしな犯罪者だが、なに

より、魔導士達が恐れられている理由が魔導士にとつて残酷すぎる。無惨に殺すことではなく、最低な行為ではない。

——魔導士から魔法の力を封印する

それすなわち、魔導士から魔法の力を奪うことに等しいことなのだ。

彼はその力があるため、管理局では『戦つてはいけない犯罪者』『絶対に遭遇してはならない存在』と言われている。彼の力で、何人もの優秀な魔導士達が管理局から去り、プライドの高い魔導士だったら最悪自殺してしまう人もいた。

それほど魔導士としては関わりたくないSSS級犯罪者だ。ゆえに正義感の強い者以外は誰も彼を捕まえようとしなない。

「カギのような武器に、銀髪の青い瞳……………間違はなく彼やな」

……………衛くん、友達と戦うことになるかもしれないで。

私はそう思いながら六課に来てもらう人材を探すのだった。

「八神隊長、ミゼット議長より推薦された隊員候補がこちはに移転してきました」

「え、もう来たん？ てか、誰なんかわかる、グリフィスくん」

「例の問題児二人とあなたの旦那様です」

「ミゼット婆ちゃんエ……………」

こうして史上最強の問題児教官を抱える部隊が出来上がった……………。もつとまともか部隊がほしいで……………おばあちゃん……………。

(??サイド)

「〜♪　〜♪　〜♪」

機動六課の屋上にて、とある少年が首飾りを弄つて鼻唄を歌っていた。

黒髪の紅い目で歳は八神はやとと比べると一つ下くらいだ。管理局の制服を着ているため、彼は管理局員であるだろう。

そんな彼の紅い瞳はこれから起きることに期待している子どものように、彼はここへ向かってくる人達を見ていた。

「さてさて……………先生、始まるみたいだぜ？　——最後の戦いつてヤツが」

そう呟いて彼はその場を後にした。彼の残した発言は今の誰にもわからない……………。

しかし、敢えて言うならこうだろう。

——
さあ、始めよう。終章の劇場を

第八十四話

(はやてサイド)

天気は快晴。本日は洗濯日和とお天気お姉さんは言っていた。あの掴んでも有り余りそうかお乳を毎度見るために早起きしているわけだが、天気予報終了後のマッスル特集を放送されるため、憂鬱になるといふ毎朝だ。

なんで朝から筋肉特集を見なきやあかんねん、衛くん……………。

それはさておき、今日から部隊の本格始動である。その演説を私を行うため、台に上がる。

「はじめまして、機動六課課長ならびに総部隊長の八神はやてです。新人でまだまだ可溶性に満ちたフオアード陣。豊富な専門知識を持ったメカニック、バックヤードスタッフ。そして、実績と実力とともに申し分のない指揮官陣。私はこの部隊と一緒に仕事が出来てくれることをうれしく思います。がんばっていきましようという最後の言葉で私の演説は終わります」

パチパチパチパチ

ペコリと一礼してから私は台から降りた。次に演説するのは――
.....ヤバい。

最近、自重しなくなったのはちゃんや。

なんもなければええんやけど。

「スターズ分隊長の高町なのはです。フオアード陣のまたをみんなには頑張って指導していこうと思います」

.....あれ？ 思ってたのと比べて普通？

そう考えてたときに彼女は言った。

「ちなみに逆らう人はドンと来てください。理由がはつきりなければスタラ。はつきりしてもスタラするつもりなので、ドンドン刃向かって来てくださいね。私としてはスタラを撃てる快感が得られるのでハッピーなのです、にぱー☆」

やっぱり言いおったアアアアア!!

ほら見てみい！ 初めて見る人とかドン引きしてるで!?

知ってる人は――目が死んどる。「なんでここに来てしまったんだ」と

いう絶望した眩きがチラホラ。

教育で何があつたんやろか……………。

「はじめまして、ライトニング分隊長のフェイト・T・ハラウンです」

次が上がったのはフェイトちゃんや。頼むから真面目に演説してな……………。

「ここでみなさんに出会えてホントに良かったと思います。私の理念は一つ——子どもに明るい未来をです。子どもは宝です。希望です。だから、私達の手で守っていきましょう」

パチパチパチパチ、おオオオオオ!!

なんか士気が上がった。言葉からすれば素晴らしい演説やけど、台から降りた後にエリオとキャロの写真を血走った目で見んなや。台無しやちゅうねん。

そして次に台に上がるのは、輪郭の整った爽やかそうな青年。彼は金髪のオツドアイだが、不気味とは言えず、カツコいいとも言わせるほどの顔立ちだ。服から見れば弱そうに見えるくらい細かいが、私は彼の身体をよく理解している。

ホントはとてすごい。脱いだらスゴいと言える。

そんな彼が演説する。普通の演説をするつもりだろう——

「はじめまして諸君。我こそ、マッスル部隊隊長。八神衛である！ さあ、さつそくだが筋肉について語ろうではないか!!」

——筋肉の。てか、なんで新人や初対面の人に筋肉について語るねん。私の旦那様の演説が軽く三十分過ぎたところだなのはちやんが笑顔で砲撃を撃った。ナイスと心の中で呟いた。その際に衛くんが無傷やったけど。

閑話休題

フォアード陣の自己紹介が終わりにさしかかる頃に、私が推薦した隊員がやつと来た。

黒髪の紅い瞳。どこか見たことある顔に、アホ毛が生えたまだまだ幼さが残る少年

だ。

彼は息を荒く吐きながら、私達に向かつて敬礼をとる。

「遅れてすみません、隊長！」

「たわけ!! なぜ遅れた？」

「いやー、空を見上げてボーとしていたらいつの間にか………あだつー！」

衛くんの拳骨で涙目になる彼。どうなら衛くんの知り合いのようやね。

そんなことより自己紹介してや、と言うと衛くんは「仕方あるまい」と呟いて彼を前に出す。

「自分はアオ・S・カナメです！ マッスル部隊の隊員です！」

「そーやの？」

「そーうだ。しかもコヤツはテバイス無しで魔法が発動できる変わった逸材でな。Bランクなのに、Aランクと互角に戦う男だ。まあ、筋肉信者ではないのがおしいが」

「いやこれ以上増えたら私が困るから」

さすがにもう増えてほしくないで。この間、買い物に出掛けたら変な挨拶されたんやから。

「これは我がマッスル部隊の挨拶法だぞ。『マッスル、マッスル!!』」

「それ結構前に、衛くんが検挙したテロ組織の挨拶やないか。確か『エコ、エコ』やったつ

け？」

「何者かによってヤツらの人類動物化計画を人類マツスル化計画にされたがな」

なにそれ怖い。

ちなみに犯人は衛くんやないで。他の筋肉信者や。

とにかく、そのテロ組織のリーダーが不憫やった。だって、本拠地に戻ったときには全員がボディービルダー顔負けのダイナマイトボディーになってたから。

私の犯罪者記録の中で一番面白おかしい組織やったと思う。

アオくんが隊のみんなに自己紹介をしている最中、衛くんは私の耳元に近づき、小声で話した。

「(コヤツの魔法を分析してみた。解析不能の未知なる魔法だったが——
彼らが使ってた魔法だった)」

「(っ！ それって……………)」

「(はやて、これは極秘情報だ。まだ上層部には知られていない。ヤツ自身にも口止めしている)」

衛くんの目が私をとらえていた。

彼が言いたいこと、それは——『アオ・S・カナメ』が神器使いという可能性や。

最悪の話をすれば、『無血の死神』と繋がってる可能性があるってことや。

「……………」一応、こちらでも神器使いは雇つとるで。管理局では神器はレアスキルとして扱つとるけど」

「と、うと？」

「あ、最初に言つとくけどソラくんの仲間やない違う神器使いや。傭兵という立場やけど、愛想のええ子やった。彼女はお金为目的やなくて、情報やったけど」

「情報だど？」

「『無血の死神』という男の情報全てや」

衛くんは何かを考え込む。どうやら傭兵の彼女を疑っているのだろう。ソラくんの仲間やないにしろ、彼の神器を狙う刺客というわけでもないのやからな。

「今は考えても仕方ないやろ。とにかく、私達は来るべき戦いに備えなあかんのや」

「わかっておる。我が友をできれば味方に引き込みたいが……………」

「無理やろ。彼は重犯罪者やし、なによりジェイル・スカリエツティと手を組んどる情報が今日、届いたで」

唸りながら彼は上を見上げる。来るべき災厄に、『無血の死神』という脅威に私はつい憂鬱なため息を漏らした。

「ところでみなさん、今日の下着はどんな——」

「セクハラは駄目だよ♪」

「えっ、あ、ちよっ、高町くう——……………ぎやああアアアア!!」

アオくんがなのはちやんの餌食になった。衛くんに聞いてみたけど、どうも彼はエロスを求める重度のスケベらしい。

……………なんやろ、この既知感。

第八十五話

(??サイド)

天気は晴れ。聖王教会客間に向かう二人の男女がいた。

はやてと衛は最後の部隊の候補がいるので、向かつていたので。理由は彼女は傭兵という立場であり、管理局上層部には知られてはいけない身であるからだ。

その彼女がいるとある一室に向かった。

「一ノ瀬シイさん、八神です」

「どうぞ」とドア越しから返事がしたので、彼女と衛はその部屋に入った。

ソファアールとテーブルしかない客室間だが、防音壁で囲まれた部屋のため外部から漏れない仕組みである。

そこにははやての知り合いであるカリム・グレシアとクロノ・ハラオウンもソファアールに座っていた。どうやらシイと談笑していたようだとはやては思った。

「はじめして、一ノ瀬シイです。あなたが八神衛さん、つてこといいですよね?」

「いかにも、我こそがマツスルの貴公子の八神衛だ。神器使用のお会いできて光栄だ」

「マッスルは余計やって……………」

はやてのツツコミをスルーした彼は彼女に握手する。

衛は彼女の容姿を見て、少しだけ訝しげになる。

（銀髪のおさげ。そして水色の瞳……………。我が友に少し似ているのは偶然か？）

怪訝な表情で彼女を見ていたが、見ていたことに気づかれたため、すぐに頭の隅にやって元の友好的な表情をした。

「して、なぜ我が友のことを知りたいのかお聞きになってもよいか？」

「そうだな。僕も気になる」

クロノと衛に訝しげな表情で見られた彼女はしばらく無言で周りを見つめた後に、何かを決意してから口を開いた。

「……………私には前世という記憶があります。その記憶の私には義理ですが兄がいました。その人はとある戦争に参加し、それから私の故郷だった世界で亡くなりました。そして生まれ変わった兄はこの世界にいることを知り、私もそこへ生まれ変わりました」

「ちよつ、待ってや。まさか一ノ瀬さんって……………『転生者』やの!？」

「知っているのですか？」

知つても何もはやては衛の奥さんである。伴侶である彼が『転生者』であることをカミングアウトし、既に受け入れた身のため真面目に彼女の話が真実かどうか聞きたく

なった。

もちろん、クロノはその話を知っている。唯一知らないのカリムなので、衛は『転生者』の説明をした。

「にわかには信じがたい話ですね。そんなオカルト的なお話は……………」

「カリムの予言も同じであろう。この世にはオカルト的な力のモノが存在するのだ」

「しかし……………」

「カリム、常識にとらわれては駄目だ。一旦、受け入れて考えるのが懸命さ」

まさか真面目で有名なクロノからそういう言葉が聞くとはいわなかった。

彼ならば「ありえない」と口に出すはずだと思っていたのだ。彼女は「なぜ、あなたは受け入れたのか」と聞いてみた。

「たぶん、昔の僕なら信じていなかっただろう。だけど、僕は神威ソラ達の実力を間近で見ただ。」

……………どれも九歳の子どもができる芸当ではなかったよ。全て神器という未知の力のおかげだと思っていたけど、神威ソラの頭の回転の早さは子どもで言えば、異常なほどだった。だから、衛の話聞いて僕はようやく納得できたんだ。

……………まさか、彼が神器使い達の戦争で英雄とまで言われていたとは、ね」

「そうなのですか？」

「そうなんだよ。まあ、どちらかと言えば諦めに近いかな。いつの間にか、わけのわからないものは諦めて納得するようになってたんだ。」

「……………諦めておかないや、フエイトみたいに汚染されてたかもしれないしね」

その言葉を聞いてカリムはとりあえず納得することにした。彼の義妹であるフエイトが現にとんでもないことになっているのだ。主に将来的に……………。

どうしてこうなったのだ、という雰囲気はやてとクロノから漏れ出す。カリムはそれに苦笑し、衛は首を傾げる。

「あの、話を戻していいですか？」

シイが会話を切り替えようと口を開いた。

「あ、はい。衛さんから聞いたその『転生者』なのはわかりました。では、あなたの目的は『神威ソラ』を見つつけることなのですか？」

「そんなところです。彼は私の義理の兄ですし、前世で私は幼い頃に初めて会いましたが、母が彼を過去の幻想と勘違いして、彼を傷つけたのでそれ以来会えていません。……………今度こそ、あの人と会って色々話したいです」

シイの言葉にカリムは事情を深く追求しなかった。義理という言葉には、シイが養子として迎えられたのか、それとも父親か母親が違うということなのだろうと推測した。

それに母親が見た幻想ということは何やら深いわけがありそうだった。

なんにせよ、真実はわからないが、とにかく深く入るべきではないと悟った。

「それに私の目的は他にありません」

「目的、ですか。それはなんですか」

「それは——」

シイが口に出そうとした直後、はやての回線に通信が届いた。事情を聞けばレトリックを乗せたりニアモーターがガジェット達に襲撃を受けてるそうだ。

「……………ジエイルやな」

「間違いなかろう。グリフィス殿、我が来るまでマッスル隊の指揮を一時的に高町空尉に移す。我がが向かうまでの指示を任せたと伝えろ」

『わかりました』

通信越しでグリフィスに衛はそう言って席から立つ。

「一ノ瀬殿、貴様には悪いがさっそく向かってもらおうぞ」

「構いません。あ、私のことはシイで構いませんよ」

「なら、私のことはプライベートの時ははやてでええよ」

「わかりました。あ、それにもう一人。私のところに神器使いがいますので外で待つてる彼にも……………え？」

シイがスマホで操作していると青ざめた顔になった。はやては理由を聞くと、彼女は

ラインの画面をクロノやカリムを含めた全員に見せた。

——以下ライン——

『なんか暇だから、十香と空を飛んでいたら、面白い獲物を電車の上で見つけた(？▽？)
今から狩ってくるぜ☆』

『シキ!! あの電車の上で動く機械はなんだ!?!』

『さあ? でもあれは倒せばきな粉パンとか出るんじゃないやね? (嘘)』

『そうなのか!?! ではゆくぞ、今すぐ!』

『いや(嘘) って書いてるから嘘だと気づけよ。てか、お前。スマホによく慣れたな』

『琴里に一週間徹夜で教えてもらったのだ!!』

『あー、だからここへ召喚される前に、あいつの不機嫌だったのね』

などと言う始末。シイがプルプルと震え始めて「うがー!!」と叫んだ。

「あの問題児イイイイイイまたかアアアアア!!」

(((またなんだ……………)))

四人の心が一つになった瞬間だった。ちなみにシドーという少年が起こした最初の問題行為がチンピラのカツアゲだったりする。

「俺はどうするべきかな」

「知らねーよ。んなことよりメシまだか? なければ帰るけど」

「一誠、お前なあ……………」

「私はキリトが縛ってくれるなら、なんでもいいよ！」

「頼むからアスナさん、自重してください……………」

シイに召喚されたキリトと一誠という青年やアスナは彼女が紹介するまで外にいた
そうな。

第八十六話

時間は少し前に遡る

(??サイド)

なのはが教え子であるエリオ、キャロ、テイアナ、スバル、アオ達にガジェットによる訓練し終えた後、アオ以外の彼と彼女達にデバイスを与えることになった。

その直後にアラートが鳴り、なのはとフェイトの隊長陣を含めた少数部隊を確立し、部隊はガジェットが占拠したりニアモーターの近くまで飛んでいた。

新人達には初めての実戦であるため、誰もが表情が固かった。

「なあ、スバルちゃん」

「何、かな……………?」

「小便したくらはなっちった」

ズゴオン!!

新人達を含めた隊長までもズッコけた。

「あんだ、この状況でなに言ってるのよ!？」

「いやー、なんか急にトイレに行きたくなっちゃって……。あ、ヴァイスさん。この上空からやっていい?」

「空気と場所を考えなさいよ!!」

「俺はどんな状況だろうとどんな場所だろうと諦めない!! なぜならそこが便所だから!」

「なに無駄にカッコいいこと言ってるのよ。いろいろ台無しよ!!」

漫才展開にティアナを除いた新人達に少しだけ笑う声が出た。少しずつだが、アオのボケで緊張が和らいだようだ。

（一見、ふざけているように見えて実は考えている……。か。衛くんの言う通りだね。彼は周りを常に考えているよ）

なのがアオのことを感心していると目的地に到着とヴァイスから通達が来た。

「もう我慢できない!! アオくん、突貫しまーすツツツ!!」

「「「「「えエエエエエ!?!」」」」」

アオは扉を開けた瞬間、リニアモーターへ向かって飛び降りたのだ。

「なにしてんのよ、あいつ!？」

「そういえば、たまにノリとボケでとんでもないことしでかすつて衛くんから注意されてたなー……………」

「なのは、呑気なこと言つてないで早くアオを助けなきゃ!!」

新人達と隊長達はアオに続いた。……………そのとき、キャロの表情が優れていなかったと誰も気づいていなかった。

(エリオサイド)

どうもエリオ・モンディアルです。僕達はアオさんに続いてリニアモーターへ飛び降りました。隊長のみなさんは僕達をリニアモーターへ移すために、ガジェット達を相手にしています。

僕とキャロは外側から、ティアナさんとスバルさんは内部からレトリックの確保へ向かっていました。

「キャロ、大丈夫?」

「う、うん……………平気だよ」

嘘だ。元気がない。ここへ降りた時からなぜか元気がないのか僕は気になった。

彼女は何かを恐れているようで、怖がっていた。

「そんなことよりエリオくん。変じやないかな」

「そうだね。ガジェットの数が少ない」

僕達を寄せ付けないためならば、もつとガジェットがここにいるはずなのに。僕達が相手しているのは数機程度のガジェット達。

ありえない。これではせつかく占拠したりニアモーターがすぐに奪還されてしまう。

子どもの僕でもわかることだった。

「え、エリオくん！」

「どうしたの、きや……………ろ……………」

キヤロが指をさしたところには一人の男性が立っていた。

白い制服を着ており、髪は焦げ茶色。瞳は紅く、歳はなのはさんより二つ下くらいだ
と思う。

優しそうな顔立ちが今のその人の顔はホントに恐ろしいナニカに見えた。

「やれやれ……………ここに来るのはそれなりの実力者と踏んだが、子どもを寄越すなんて管理局もなかなか鬼畜じゃないか」

老人みたいな口調のその人はやる気がなそうに呟くが、なぜか不意をつけそうにもなかつた。

僕でも……わかるほどの殺気がにじみ出ていたのだから………。

「あなたはいつたい………？」

「お前達の敵さ。ま、要するにワシはこの足止めというわけさ」

彼は真つ白な刀を引き抜き、そしてゆつたりとした構えで僕達を見据える。

「ワシの名は北郷一刀。ただの王様だった男さ」

哀愁漂うその発言をスイッチにし、僕とキャロの絶対勝てない戦いが始まろうとしていた。

(??サイド)

さあさあ、最初のお相手は『氣』の使い手の『怒れる帝王』。

子どもも老人なのか弱き者など関係ない。

——彼はただ目の前の敵を殺す戦士だ

第八十七話

(??サイド)

絶対に勝てない敵。エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは肌でそう感じていた。

魔法を無力化するAMFがあるだけが理由ではない。

隊長、いやそれ以上の相手を最初の実戦で相手するのは明らかに無謀な戦いなのだ。

「キャロ………僕がまず突っ込む。だから後方支援をお願い」

「うん！」

槍型のアームドデバイス『ストラーダ』を構えて深呼吸。

緊張を和らげるだけではない。これこそエリオの戦闘へのスイッチである。

衛曰く、これは重要なものだ。

例えばテニスプレイヤーが押されぎみな時にラケットのネットを弄るように、野球選手がバッターボックスに立つ時にバットを振るように、切り替えが重要なのだ。

ゆえにエリオが立つ全ては戦いの舞台になる。

何がなんでも勝たなければならなくなった。

(実戦は初めてだけど、僕の全力で挑む)

デバイスをギュツと握るしめるエリオに対して一刀は構えることなく、ただエリオを見据えるだけ。

甘く見られている。ならば、その油断につけ込む!!

エリオは意を決して一刀に向けて駆け出す。

槍の特性である突きを一刀に向けて放つ

——
だが

——
それとは関係なく

——
彼は『槍の柄』を掴んで止めた……………。

まるで見えていたかのように槍を止められたエリオはすぐさま振り払おうとした。

「遅い」

「ガハッ!？」

振り払う前に、一刀はエリオを槍ごと、棒についた虫を地面を叩きつけるように地へ叩きつけた。

そのダメージでエリオの肺から空気が吐き出される。

それでもエリオはすぐに立ち、一刀へ連続に突いた。

「くっ、オオオオオツツツ！」

「ほう、食らいつくか」

右へ左へと簡単に回避される。しかも対して焦らず、余裕な表情で。

エリオは自身の無力さを悔やんだが、考える暇を与えまいと言わんばかり、一刀はここでやっと白い刀を振る。

キイーン！ カラカラ……………

たった一撃でエリオのデバイスが手から離れた。

(そんな……………こんなに差が、グガッ!!)

一刀は容赦なく、エリオを蹴り飛ばす——リニアモーターの外側へ。

しかも運悪く、長い橋の上を滑走していた。それはエリオが崖から落とされたことを意味していた。

「う、ああアアアア!!」

「エリオくん!」

キヤロはエリオを助けようと自身も飛び込む。一刀はそれを見届けた後、背中を向けて立ち去ろうとした。

「所詮は未熟者……か」

彼は二人に同情しない。

彼は二人を殺めたことを後悔しない。

なぜなら彼は様々な戦いで戦わされた子ども達やか弱き者達を見ていたからだ。

敵側で多くの者達は生きるか死ぬかの戦場で泣き、怒り、憎しみを持つていたりしていた。

当然、一刀もその憎悪を受けて悩み、苦しんでいた時期もあった。

そして彼はその者達を切り捨てることで、前へ進むことを決めた。全ては平和——
——大義のためと決めつけて。

彼を最低と言うべきだろうか?

彼を人でなしと呼ばれるべきだろうか?

仮に彼に聞いて見たらこう答えるだろう――

――ワシは最低でいいよ。それで仲間達が生き残れるなら

全ては友のため、家族のため、仲間のため。

彼は乱世の世界でその覚悟を持って戦ってきたのだ。ならば、今ここでエリオとキヤロは殺されても彼は『仕方がない』と考えていた。

それが彼の変わらぬ『覚悟』だから……………

『グオオオオオ!!』

だが、天は二人の運命はここで死ぬと決めつけていない。

背後から獣のような雄叫びが聞こえた。それは彼女の使役龍のフリードが大人になった本来の姿だ。

「力を隠していたのか？ いや、恐れてモノを克服したか………」

エリオとキヤロが降り立つときに一刀は彼らに向かってそう言う。その通りだ。キヤロは自身の力を恐れていたが、エリオを助けたいあまりに解放したのだ。

勝負はまだわからない———という人がいると誤解しているかもしれないがハッキリ言おう。

エリオとキヤロだけでは北郷一刀には絶対に勝てない。

数々の戦いで生き残った歴戦の猛者である彼を相手に、新人の少年少女では勝てるは

ずはない。

——ならば問おう。もし、『エリオとキャロ』じゃなければ勝てるのか？

もちろん、隊長達でも怪しいところだ。しかし、メタな発言だがシイの会話を思い出してほしい。

彼女の仲間はいったい今、『どこに』いるのか？

「よお、コイツは面白いことになってるな」

エリオとキャロは知らない声が出た人物に振り返る。

青い髪に、やや童顔な少年とポニーテールで髪を纏めた少女がそこにいた。そして少年は——

—— 獯猛な笑みを浮かべていた。

獲物を見つけた猛獣のように。

「な、なんで一般人が!？」

「キャロ、早く彼を転移——」

「その必要はない」

二人の言葉を遮るように少年は一刀に短刀を出して、向かって斬り込む。

一刀はそれを受け流し、少年に向けて拳を放つ—— が、それを手で受け

流した後に、距離をとる。

「さすが『怒れる帝王様』ってことか。随分強力な拳なこと。おかげで掌がヒリヒリす

る」

「……………お前は何者だ?」

ただ者ではないと一刀は彼を睨む。少年はヘラヘラと笑いながら答える。

「五河四季。ただの『切り裂き魔』さ」

『帝王』と『切り裂き魔』。

二人の神器使いの戦いが始まろうとしていた。

「エリオ・モンデヤルいるかー?」

「モンディアルですつて。てか、アオさん。今までどこに?」

「リニアの便所。快適だった」

アオと合流した二人がまずしたことは、便所でのんきにしていた彼を折檻することだっ

た。

第八十八話

(??サイド)

青い髪の少年、五河四季は合唱して手に持つ短刀に青白い紫電を与える。すると短刀はナイフへと形状変化させた。

『錬金術』——彼は衛と同じ錬成ができるが、全くの別物だ。

彼は前世から——生まれたときから『真理』にたどり着いていた。

つまり『鋼の錬金術師』の特典である『真理の門』を見ていたのだ。

まあ、前世の彼は転生者だったのかどうかはもはやわからないが生まれ持つてしての天才だったのは過言ではないし、ゆえに錬成陣無しの錬成が可能である。もちろん手合せから始まるモノだが。

ちなみに彼の神器は右手にある腕輪である。

さて、話を戻すが彼の傍らにいる少女は不安そうな瞳で彼を見ていたが、彼は彼女の頭を撫でながら呟く。

「大丈夫。十香は大人しく下がっててくれ」

「しかし、あいつは……………」

「強いだろうね。うん、もしかすると十香よりも強いかもね。だけど、殺されるつもりはない」

彼がそう言うと、視線を一刀に向ける。

「それで『切り裂き魔』がワシをどうするつもりだ？」

「そんなもんわかってるだろ——『切り裂く』」

四季はナイフを逆手に持ち、横一閃へ斬りにかかる。一刀は偶然あつたガジエットの残骸を四季に向かって蹴る。

すると、一閃されたガジエットが真つ二つに切り裂かれた。

それが、四季の持つ『切り裂く者』の神器の能力だ。

概念や魂など知覚できないモノ以外ならば、なんでも切り裂ける神器である。

「やっかいだな。だが……………関係ない」

確かに強力な神器であるが、要は当たらなければ意味がないし、四季の体格からすれば明らかに力技が苦手でテクニクだけで相手を翻弄するタイプだと一刀は推測した。

まさしくその通りに四季は力勝負はせずに、下段からの袈裟斬りをフェイトにした突きや突きと見せかけて拳を月賦に放つたりしてきた。

そんな攻撃を一刀は受け流し、防ぎ、反撃に移って四季を遠ざける。

(ひねくれ者だな、コイツ)

(チツ、そう簡単に引つ掛からないか……………)

それぞれの思惑が交差する中で、一刀が最初に動きだそうとした直後、彼の腕に紫の魔力でできた鎖が巻き付いた。

バインド——魔導士が使う拘束魔法である。

「あの黒髪の仕業か！」

一瞬だけ、動けなくなつた一刀は邪魔をしてきたアオに苛立ちを覚えたのも束の間、アオがニヤリと笑うところを見て気づいた。

いつの間にか四季の姿がなかった。振り返ると彼がすでに、ナイフかは短刀に形状変化させた神器で一刀を一閃しようとしていた。

四季の神器は文字通り『切り裂く』。

つまり、どんなに硬い武器であつても、魔力強化しようが、人が知覚できるモノであればなんでも切り裂けるのだ。今の一刀は『氣』で身体を強化しており、文字通り鋼の身体だ。

しかし四季の神器の前では何も意味をなさない。

ブシユウウウウ!

一刀の身体はその一閃で、深い切り傷ができて血が吹き出した。一刀が少しよろめく姿を確認した四季はペロリと唇を舐める。

「ナイスだぜ、黒いの。おかげで帝王様に切り傷ができたぜ」

「いやー、なんとなくやつちやつたけど怒られずに済んでよかった。卑怯だとか卑劣とか言われて」

「安心しろ。卑劣だろが卑劣だろが、それでも目的が果たせるなら俺は別に気にしないさ」

アオに誉める四季だが、エリオとキヤロは納得してなかった。

いくらなんでも、あんな傷を負うほどことをしなくていいだろう!!と言いたかったが、その考えが甘いと自分達は悟ることになる。

……………一刀が針を傷口に刺したとき、その傷が凄まじい勢いで治癒されたのだ。

普通の人間とは思えないくらいに。

「……………オイ、お前どこの九尾だコラ。反則だろ、それ」

「卑怯だろが卑劣だろが目的が果たせるなら良いのだから？　なら、おあいこだ」

「いや、俺の奇襲とその回復。明らかに不利なのが俺なんだけど……………」

「いくぞ、四季くんよお!! 『鬼・斬り!!』」

「いきなり大技ツスカッ?」

一刀が遠心力を利用した斬撃を放とうとした。

「秘技——『鬼・斬り』!!」

まるで大きな鉈が迫るように、巨大な『氣』でできた斬撃が四季に迫る。

『氣』——それは魔力とは違う人間が持つ生命エネルギー。

その力さえあれば、身体の病、傷は容易く治癒できる。さらに身体能力を向上させ、魔力のように刃が作り出せる。

一刀がしたのは巨大な魔力刃を作り出すことだ。

四季はその巨大な斬撃を切り裂き、無効化したのが背後にあったガジェットの数体が真つ二つになった。

それを見た四季は冷や汗を流す。

「……………ヤベ、これ勝てる気がしないや。けど…………お前の身体、面白いな。あとで解剖してやる」

「やれるならやってみな!! さあさあ……………『切り裂き魔』さん。ワシを楽しませろよ!!」

水を得た魚のように、一刀は攻撃を開始した。まだまだ彼らの戦いは始まったばかりだ。

(ティアナサイド)

スバルと一緒に内部へ突入した私達だが、ガジェット達の数は少なく、呆気なくレトリックがあるとと思われる貨物車両へ入った。

「あつれー、どこにあんのかなー？　ちくせう。なんであたしがレトリックの確保なのよ……………」

車両の荷物を漁る青い髪の女性がいた。歳はなのはさんと同じくらいだと思われる。ヘソを見せた大胆な服で、腰にはサーベルがある。

あれを抑えれば、どうにかできる。そう思って、私が撃った後、スバルに反対側からの特攻するように指示を出した。

彼女を取り押さえようと動きだそうとしたとき、女性はフウと息を吐きながらこちらに振り向く。

物陰で私達が窺っているのに気づかれた？

そんなネガティブなことを考えていたのも束の間、女性は「うなー!!」とくしゃくしゃ

と髪を荒げながら叫ぶ。

「だアアアアア!! 鬱陶しい!」

女性はそう言った刹那、サーベルが二つにしてからその場を二刀流の回転斬り。積み荷、次々に斬られ始めた。

——ちよつ、ヤケクソなつて全部斬るつもり!?

アホな行いに私は口を開いて呆れる。スバルも女性の剣劇に驚いた様子で見ていた。「ふう、スツキリスツキリ。これでちよつとは……………ヤバい、余計にゴチャゴチャなつた……………」

それもそうだ。積み荷のコンテナの中身を全部ぶちまける行為をしたのだ。

ゴチャゴチャになるのは当たり前だ。

なぜか彼女はアホの子だったのではないかという新たな仮説が生まれた。どうしても良いわよね、そんなこと。

「うー……………ソラにどやされる。ほむらに嫌みを言われる……………。ああ、どうしよう……………」

その場でORZのポーズを取るので、これ以上は不憫なので私はスバルに合図を送る

うとした。すると、女性は突然立ち上がり、手に何かを掴んで掲げる。

「レリッククミーケツ！」

「えエエエエエ！」

私とスバルは思わずツツコミの声をあげてしまった。女性はその声に気づいてこちらに振り向いた。

「出てきなよ。隠れてるのはわかってるわよ」

完全に気づかれた……………！

こうなったら、と一か八かの賭けに出ようとした私はクロスミラージユを握りしめる。

「そこにいるのはわかっているのよ——ほむら!!」

えっ、と私は女性が指をさした方向を見た。

誰もいない？ 彼女はいったい何を——

「なーちやつて。残念。嘘だヨーン♪」

後ろから女性が声が出したときには既に遅し。彼女は私の胸ぐらを掴み、スバルへ向けて放り投げた。スバルは私を受け止めようと前へ出てきた。

「大丈夫!!? ティア」

「大丈夫よ。くっ……………やってくれるじゃない、アイツツ」

そう言つて女性を睨む。女性はヘラヘラと笑いながら私達に向かつて言い出す。

「騙されたあんた達が悪いんでしょ？ ヤーイ、引つ掛かったー♪」

「子どもっぽいこと言うじゃない。精神年齢が身体と似合つてないじゃない？」

「うーん、それはあんたの相方も同じことじゃない？」

「大丈夫よ。コイツ脳筋というキャラポジションだから」

「把握したわ」

「ティアは私の味方だよねツ？ そうだよね!？」

心外そんな表情ですがり付くスバル。訓練学校時代のアンタの作戦を思い出してほしい。全部『突撃、粉碎、勝利』という提案ばかりじゃない。

……それを聞いて張飛という『にやははは』と笑う少女が頭に浮かんだときもあったわ。あれは学校で見た妖精ということにしたけど。

「それでお嬢ちゃん達はあたしを捕まえにきたの？」

「アンタとは三つ違いで対して歳は変わらないと思うけど」

「そのたつたの三年が生死を分けるのを気づかないのかな？」

それを聞いてゾツとした。確かにそうだ。最初の放り投げたときだ。

——もし、あのと『投げる』ではなく『斬る』ということをしていたら、私

は……………

身体が震える。死の近さに恐怖した。そんな私にスバルが手を握る。

「大丈夫。ティアは私が守る」

自信満々にスバルは言う。

カッコいいこと言ってくれるわね。

でもおかげで震えは止まった。勇気が出た。

——もう怖くない。戦える。

「おー、恐怖に打ち勝ったのかー。お姉ちゃん、ちよつと感動」

で・も、と彼女は続ける。

「勇気や根性で勝てるほどあたしは甘くない。敵に負けてやるほど、あたしはお人好しじゃない」

サーベルを構える女性。私達はそれぞれデバイスを構える。

奇襲は失敗。ならば、後は訓練通りの初めての实战をこなすだけだ。

勝てるかどうかはわからない。むしろ負けてしまうのが常識だ。だけど……負けるつもりはない。勝つつもりで挑む。

「満足した？ 充実した？ なら、安心してとつと死んでよ」

その言葉が吐き出されたとき、女性は私達に斬りかかる。

第八十九話

(ティアナサイド)

二対一。聞こえは私達に有利かと思われたこの戦いだが、青髪の女性のワンサイドゲームになっていた。

「っ！ スバル、また来るわよ!!」

青髪の女性によつて投擲されたサーベルがこちらに飛んできた。私はそれを撃ち落とそうにも、投擲された力が強いため、ポイントを逸らせるだけだった。

「おおー。すごいわね。射的であたしの剣を上手く避けてるじゃない♪」

ナメられてる。ものすごく腹が立つ。けれど、相手は新人の私達がどうにもならない敵だ。

「うーん、そろそろ時間なのに遅いねー？ 一刀のヤツどうしたのかな？」

「……………仲間がいるってこと？」

「まあね。あたしよりかなーり強いよ、あいつ。そうね……………あつという間にここを吹き飛ばされるくらいね」

ウインクする彼女の言葉に私はゾツとした。

そんな敵がここにいるのか？

ハツタリと思いたかったが、敵は一人でいるとは思えなかった。事実には違いないだろう。

——刹那、私達の車両の天井が吹き飛んだ

天井は消え去り、綺麗な空が見える青空教室になった。

その隣の車両には吹き飛ばした犯人が青髪の女性に話しかけていた。

「見つけたのか？ なら、退くぞ。今、八神衛が参戦してきたため、ガジェット達の損失が激しくなってる」

「ゲッ、衛が出てきたの？ ちょっと今はマズイな」

青髪の女性がそう答えると私はその女性が飛び乗る前にクロスミラージュを向ける。

——逃がさない!!

私は魔力弾を撃つ。しかし、それは一刀と呼ばれる青年が投げた刃物によって弾かれた。

「邪魔なヤツらだなー。……………いっぺん、死んでみるか？」

肌に鳥肌が立った。私とスバルは咄嗟にプロテクションを発動した。

『炎龍斬』!!』

その判断が正解だったことを示すように彼が放った斬撃が大きな炎の津波となつて、私達に襲いかかる。

強すぎる一撃に私のプロテクションはあっさり破られてしまった。炎が私達に襲いかかる刹那——

「オイオイ、相手はこの俺だろ？ 帝王様よお」

——何者かが私達の上から現れて、炎の津波を『切り裂いて』相殺した。

「だ、誰!？」

「何者なのよ!？」

謎の少年に私は言葉を出す。彼は無視して、青年に短刀を向けるだけだった。

私は文句を言おうとした直後、衛さんが私達のところに降りてきた。

「無事か、貴様ら」

「衛さん、彼は何者なんですか?」

「うむ、我が部隊に雇われる身となった五河四季殿だ。ヤツはレアスキル———神器の使い手だそうだ」

先程の炎を消した斬撃はその神器によるものだと少し納得できた。だけど、傭兵を雇うことには些か不満はあった。

「……………信用できるのですか?」

「さてな。今のところは我にもわからぬがヤツの相手は信用に値することは、はやてと一緒に感想だった」

「八神総隊長が?」

八神総隊長の信用に値する人か。一度、お目にかかりたいと私は思った。

すると衛さんが、青髪の女性を見て目を丸くした。

「貴様は……………さやか殿か!？」

「ありま、衛？ 相変わらず筋肉モリモリよね、あんた。細くならうと思わないの？」
「マッスルモードだからモリモリなのは当然だ。見よ、この芸術的な筋肉を!!」

「ホンツツツト、相変わらずよ、あんた……………」

衛さんの知り合いなのだろうか？ 名前を知っていると顔見知りであることは確実だ。

私が衛さんに彼女との関係を聞くところ、彼女はどうかやら『無血の死神』という人物に繋がるかと判明した。

『神威ソラ』——七年前に上層部の圧力により、捕らえようと天宮草太が率いる部隊が襲撃したところ、返り討ちに合い、全滅した。なのはさんやフェイトさん、はやてさん、衛さんの四人もその現場にいたらしい。

彼は非殺傷ではない魔法や神器を使って、天宮部隊を皆殺しにして、その隊長である天宮草太を地獄の世界へ放り込んだそうだ。

それから彼は消息を断ち、この世から消滅かしたかのように現れなくなったが再び現れ、多くの局員を抹殺した。

局員を皆殺しとはやり過ぎだと思っている。いやそれに以前に私にはヤツには個人的な怨みがある……………。

その彼に繋がる女性が目の前にいることにいても立ってもいらなかった。しかし、

衛さんは私を前へ行かせなかつた。

「どうして止めるのですか!? 今なら……………」

「たわけッ。彼女を倒せるという甘い考えを持つな!! 貴様ごときの若造がアヤツに勝てるはずがないわ!」

「ッ……………!!」

叱咤され、私はやっと自覚した。

そうだ。今の私達が勝てる相手ではない。むしろ、これからも勝てることも怪しい。

戦術、技術、経験の全てがあちらの方に軍配が上がっている。

どちらにせよ、勝てる相手ではないのだ。

「やれやれ……………強そうなのが二人か」

「大丈夫だつて。そろそろ、あいつが来る時間だし。……………あ、来た♪」

さやかと呼ばれる女性の目の前にドアが現れた。衛さんは「マズイ!」と言いながらドアに向かおうとしたが、彼女がサーベルをフルスイングした直後、衛さんはこちらへ叩きつけられた。少年もドアに飛び込もうしたがガジェットの妨害で失敗。

私達は犯人の青年と女性を逃してしまふのだつた……………。

(さやかサイド)

「たっだいまー、チンク〜♪」

「ぬあ!?! いきなり抱きついてくるな、さやか!」

スリスリとチンクの柔らかな頬つぺたを擦るあたしを一刀は襟首を掴んで引き離す。
「チンクをいじるのは後にしろ。彼女にはまずこれを渡すのが先決だ」

一刀はレリックを出して、チンクに渡す。

「管理局の追つては?」

「あるわけないでしょ? なんせ、ソラが直々に迎えに来てくれたのだから」

「そのさやか達をここへ帰した肝心の功労者は今、どこにいった?」

「さつきまどかとほむらと千香の変態三獣士に見つかって逃走中。捕まったら絶対犯されるね」

「……………ヤツのそういうところは同情するぞ」

変態達のターゲットとなったソラをチンクも不憫だと思っているようだ。ここ最近、ソラの干からびた姿しか見かけないのは気のせいだろうか?

その一方でまどか達の肌がピチピチになっていたけど。

「ま、いつも通りってことよね。平常運転で何よりよ」

「これが日常とはアイツの平穩はいつたいたいどこに……………」

「ちなみにまどか達に拘束されたところを見計らって、参戦予定」

「安息の地はないのか!？」

当たり前よ。ソラの安息の地なんて最早、便所とママさんの胸しかない。

なんでママさんの胸が出てきたのはあの人の胸は現在進行中に成長しているのだ。二十歳になつてからバストがG以上あるのはこれ如何に。まあ、ソラはその母性の塊で癒されてるのだけ。

あたしにツッコむチンクは呆れた顔で、質問してきた。

「で、『アレ』はしっかり馴染んでいたか？」

「馴染んでいたけど、まだ機能はしてないみたい。ドクターと千香にそのことを報告しておいてね」

「わかつておる。全く…………、なぜあの組織に『ヤツ』を行かせるのか千香の頭はわからないことだらけだな」

チンクは踵を返して背を向ける。

……………チンクにはわからないと思うよ、きつと。

思い出してほしいんだよあたし達は。『彼』が捨てたモノを。

それから千香は見たいんだよ。別の可能性ってヤツを。

『いやアアアアそこだけはらめエエエエ!!』

「あ、ソラが捕まった。混ざってこよ」

この後、ソラを四人でおいしくいただきました、まる。

第九十話

(??サイド)

とある研究所の実験室にて、ジエイルことスカさんは封を開けて中の手紙を読んでいた。チンクがその部屋に入ってきて「ドクター」と呼び掛けるが、彼は未だに気づいていなかった。

チンクはそんな彼に怪訝な表情を向けながら、隣にいるナンバーズ4のクアットロに話しかける。

「クアットロ、ドクターはいったいどうしたんだ？」

「ドクターは今、ドゥーエの報告書を読んでいるのですよお。あのお馬鹿なオジサンのね」

お馬鹿なオジサンとは陸の管理局のトップであるレジアスのことを言っている。彼はスカさんと裏では協力関係である。しかし、レジアスとて管理局の犬。いつ裏切るかわからないため、監視のためにドゥーエを派遣したのだ。

「それでチンクちゃんは何しにここに来たのお？」

「ドクターに『ヤツ』の報告をな。『あの力』は機能はしてないが魔法だけならば千香と同じくらいだそうだ」

「ドクターはなんであの人形に拘るのでしょいかねー？ 所詮は余分なモノを持った

『失敗作』でしょ」

『失敗作』という言葉聞いてチンクはムツとした表情になった。『ヤツ』が確かにそう言われても仕方ないとは言え、チンクにとつては弟みたいな存在である。

家族を貶されることは誰だつて嫌なのだ。

「ふむ……………すばらしいよドウエ。聞いてくれ、クアットロ、チンクよ」

「何か良いことが書かれていたのですかあ、ドクター」

「そうだよ、クアットロ。これはとてもとてもとーツてもめでたいことだ!!」

スカさんはとても喜ばしい表情だった。それを見たクアットロは期待するような目でドクターに聞いてきた。

「ドゥーエがめでたくゴールインしたッ！」

「はあ!？」

バーンと背景に出るほど、スカさんは手紙を高らかにあげる。

ゴールイン——つまりドゥーエの結婚報告だったのだ。

「ふむふむ、相手は私達と同じく敵対するテロ組織のスパイ、赤井シユウ君という男性のようだ。どうやらデキ婚という形で入籍したようだね」

「いや、なんでスパイ活動中にめでたくゴールインしちゃってるのですかあ!?! あと、デキ婚ってこんな時期にナニやっちゃってるのですかあ!?!」

「ちなみに手紙には彼の組織は彼自身の手で終わらせたみたいだね。すばらしいよ。たった一人で組織を壊滅させるとはうちでも欲しい人材だよ」

「どんな超人!?!」

「そうか……………私も叔母になるのか……………」

「どうでもいいわよ!」

チンクとスカさんのボケにクアットロのツッコミが火を吹く。

「とうか、これで二人目ですよ! ナンバーズがデキ婚で抜けるなんてふざけてるのですか!」

「何を言うのかね、クアットロ。これも立派な策略さ。ナンバーズという我々、管理局の敵がこんなふざけた形で彼らの本拠地にいるとは思うまい」

「そ、それもそうですが……逆が目立つんじゃないですかあ?」

「いやいや、目立つことはないさ。なんせ、表向きは一般局員と一般局員のデキ婚だから親しい者しか目立たないものさ。それにこの機会に管理局の上層部の新たな情報を得られるかもしれないだろう?」

「確かに……。そ、そうですね! ドクターがそう言うなら!」

「うむ。理解してくれて何よりだ。……ところで、シユウ君からドゥーエのお腹にいる娘の名前を考えてほしいとこの手紙に書かれているのだが。私としては『メアリー』と『ヘレン』のどちらがいいと思うが、どちらがいいね、クアットロ」

「ドクター、さっきの本当に策略ですよねえ!」

「それにしても、さすが千香くん。まさかトーレだけでなくドゥーエのために彼とのゴールインをセッティングしてくれるとは……」

「またあの変態の仕業ですかあッ!」

実は言うのと、四年前にナンバーズ2のトーレは千香のおかげで管理局の一般男性とゴールインしてしまい、今は一児の母となっていた。

当時の彼女は厳格で恋愛という無意味なことには冷淡で切り捨てる女性だとナンバーズのみんなの印象に残っていたが、千香の「女として君は不合格」と言いたい放題言われて、ナニカを刺激された彼女は研究所を飛び出した。

それから一週間後に彼氏ができたという報告がきてスカさんファミリィに衝撃を与えた。お相手は合法シヨタで女装可能な男の娘である。

その時のトーレは既に千香の『シヨタ』『男の娘』『カップリング』という同人誌に汚染されていたため、こうなったのではないかとソラは推測していた。

出会った当初の彼女は無垢に近かったためか汚染するのは早かったのだろう。

ちなみにトーレを崇拜していたセツテがそれを知ったとき、血涙流すほどその男性に嫉妬していたのは過去の話だ。

「というか、なんでナンバーズが抜けることなのにドクターはそんなにお気楽なんですかあ!?! 戦力が減ってるのですよお!?!」

「ハッハッハッ、クアットロ。人生はなるようになれというものなのだよ。それが理解できなければ千香くんの変態力には対応できないと思ってくれたまえ。それにしても

……私の孫娘はかわいいなあ。今年で四歳かあ……

「駄目だこの人。早くなんとかしないと……」

写真を取り出して自分の孫娘にホクホクするスカさんにクアットロは呆れていた。チンク以外の姉妹達もソラ達によってどこかが変だし、もはや、自分しかまともな人材はいない!!

「トーレ姉様もトーレ姉様です。あんなナヨナヨして頼りなさそうな男に腑抜けされてしまうなんて、どうかしてますわ!」

「——ほう、うちの旦那が腑抜けだど?」

「そうですわ! だいたいあんなブ男が好み、なん……て——」

肩を掴まれたクアットロは振り返るとそこには自分の娘の手を引いて研究所に久しぶりに訪ねてきた一般主婦がよく着る洋服姿のトーレがいた。

クアットロはその姿を見て、絶句して顔を青くした。

「ナヨナヨして頼りなさそうなのは認めるがブ男とは心外だな……。どちらかと言えばかわいい系なのだが?」

「あ、え……? ど、どうしてトーレ姉様がここに?」

「レイがじいじに会いたいと駄々をこねてな。まあ、久しぶりに会ってみるかと思つてここに来たが……私がどうかしてるのかな、クアットロ?」

「め、めめ滅相もないですわ！ 私はドゥーエ姉様の男が——」

「私のパパが、なんだ？」

声が出た方向へ振り返るとそこにはお腹が少し膨れたドゥーエと輪郭の整った顔だちの青年がいた。

「な、なななんでドゥーエ姉様がここに……う？」

「ドクターにパパの顔見せとこれからのスパイ活動をパパに任せるとの頼もうと思つて訪ねたのだが……私のパパが、なんだ？」

二人の形相にクアットロは尻餅をついてしまった。

方や一児の母、方や妊婦という変わった組合わせだが、クアットロの目には彼女の背景には般若と阿修羅のスタンドが具現化していた。

「ね、姉様達。何とぞお話しを……」

「少し、頭を冷やそうか……」

「いやアアアアアアアアア!!」

クアットロは逃げ出した。しかし魔王から逃げられないのが世の理である。

トーレの高速移動能力のIS『ライドインパルス』でクアットロは周り込まれ、ドゥーエがどこからか取り出した縄でクアットロを捕獲。

トーレは固有武装である虫の羽に似たエネルギー翼『インパルスブレード』を取り出

して、ドゥーエは固有武装である『ピアツシングネイル』という爪の武器を取り出した。

「さあ、O・H・A・N・A・S・H・Iの時間だ、マイシスター☆」

「ドクタアアア助けてエエエエ！」

哀れ、その肝心のドクターはドゥーエの旦那のシユウと談笑していた。

「なんまいだーなんまいだー」

唯一彼女を同情して合掌していたのはトーレの愛娘であった。小さな少女に同情される大人の女性とはこれ如何に？

「ほお、なるほど。あのトーレという女性と私の妻にはあなたの因子が埋め込まれていないのか」

「そうだね。トーレはその因子を埋め込む前に研究所を飛び出して家庭を作ってしまったからね。まさか、ドゥーエは婚活という感じでスパイ活動していたとは……………」

「まあ千香という少女に焚き付けられたようだからね。『妹に先を越される姉貴、プツプスー(笑)』という一言が決めてで私と結婚を申し込んだね」

「ほほう、やるなマイドーター。それでこれからは君が諜報活動してくれるのかね？」
「快く引き受けよう。義理の父にあたる者を裏切るほど、外道ではないからね」

スカさんはシユウと握手をしていると、白衣をクイクイするレイが上目遣いで見つめていた。

「じいじ、はなそ♪」

「ククク、よかろう。では今日は何を話そうかね」

「りよーしろん♪」

「……ジェイル。彼女はやはり君の孫娘だよ」

大学レベルについて語り合おうとする小さな少女に、シユウは少しの戦慄を覚えた。なお、ゆまちゃんはトーレの義理の娘になっていたそうなの。

現在、トーレの旦那さんのお宅で祖父と遊んでいる。

(アオサイド)

ヤッホー。我らの主人公のアオくんだよーん。……あれ、違う？

これは所謂世代交代ってヤツさ。それで納得してよ。

とにかく今回のミッションは隊長達の判断ミスだった。新人達に神器使いやマスタークラスを相手させるのはキツすぎるのだ。

本来なら、隊長達が相手するべきなのだがねー。ま、ガジェットを大量に隊長達へ

迫ってきたのはそれが理由だろう。

できるだけ実戦に慣れてない相手ならば、数値的に高い可能性で奪えるからな。

だから自分は今回のことは気にしてない。ミスしたら次を行かせばいいと思ってるからねー♪

自分がブラブラ歩いていると食堂で落ち込む二人がいた。エリオとティアナだった。

「実力不足はわかるけど……………」

「悔しいですよ……………僕は……………」

「なーに引きずってるのかねー、チミ達」

俺が話しかけると二人は意外そうな表情をしていた。俺も落ち込んでいないのがそんなに意外？

「アオさんは気にしてないのですか…………？」

「今回の失敗か？ 当たり前さ。初めての実戦が神器使いや怪物染みた相手とか、ほぼ無理ゲーだろ」

だから気にする必要はない、と言った。まあ、そんなこと言っても彼と彼女のネガティブオーラは変わらない。

ふう、仕方ないな。俺はある人の言葉を借りて励ますか。

「『弱くたっていい、失敗してもいい。だけど前へ進むだけは止めるな』」

「えっ……………?」

「その言葉って?」

「隊長の言葉さ。あの人が昔はかなーり弱かったみたいだけど、あの人は努力して今を手に入れたんだ。お二人さんはいつまでも、そこで立ち止まってるかねー?」

「ッ!」

大袈裟に腕を広げていると、二人は立ち上がってどこかへ行った。たぶん、訓練室だろうな。

「これでいいんですか? 隊長」

「上出来だ。おかげでエリオとティアナは立ち直った」

隠れるように見ていたのか隊長が曲がり角から現れた。話している最中に気づいていたけど、空気を読んでくれたのか自分達の前には出てこなかったんだと思う。

「しかしあの二人が立ち直ったところで残りの二人が立ち直るモノかねー?」

「残りの二人はアヤツらのパートナーだ。心配あるまい。むしろ、自身と共に鍛え上げようとするだろうよ」

「そんなもんかねー? よくわかんないや。自分って『そういう同期』いないし。」

「それで隊長様は自分にも自主トレしやがれとか言うのですか?」

「ほざけ。貴様に自主トレは必要あるまい。あの動きは完全に『実戦慣れ』だ。貴様に今

必要なのは、新人とヤツとの交流だ」

おやおや、交流深めろ……ねー。ま、こちらも願ったり叶ったりだけど。それよりも俺は気になることがある。

……………そうあれは——

——回想——

北郷一刀と五河四季の戦いが激化した。四季はインファイトでがんばるが、刀と短刀ではややリーチが違うし、一刀は近距離の相手がどうくるかわかっているかのように上手く突き放しながら四季を近づけさせない。

「カカカ、まだまだいけるだろ!!? え?」

「んなわけないだろ! てか、なんで俺の動きがわかるんだよ!? ニュータイプかテメーは!」

「今のワシは『王』！ そんなこと造作でもないわい!!」

「口調がジジイになってるぞ、オラア!!」

四季は一刀の一閃を受け流して、側面へ逃れると彼は足払いをかける。それはジャンプで回避されたが、自分はその背中を狙って雷の魔法を放つ!!

「予想通り……………つてか?」

自分が放つた雷の魔法が一刀の斬撃で相殺された。

なんてヤツだ。

自分の攻撃が見えていたのか。

一刀は四季を自分のところまで蹴り飛ばした。四季はそれを防御したが、怯んで足を止めてしまった。

一刀はそれを確認してから口を開く。

「ふう……………複数を相手するのは疲れるな。つーか、一人はものスッゲートリッキーだし」
「よく言うぜ。この馬鹿力ヤロー。こつちも一太刀一太刀受ける度にビリビリ震動が来るんだよ」

四季は呆れながら一刀に悪態をつく。そりゃ、あんなに震えた手を見ればスッゲー力を受けてるのはわかるわ。

一刀は「カーカカツ!!」と笑いながら、抜刀の構えに入る。

「だから、お前らを切り離すというわけさ」

何を、と思つた直後。何かを感じた自分は咄嗟に後退した。すると一刀はいつの間にか、俺の目の前に現れた。

一瞬で相手の距離を詰める歩法術——縮地。

ヤバい、この抜刀術を受けたら即死は確実ツ!!

「さあ、お前からだ!」

刹那、視界がモノクロになる。

キヤロの悲鳴が聞こえ、四季は叫びながら自分に手を伸ばす………が届きそうな
い。

自分は死ぬのか?

ここで夢も果たせず、くたばるのか?

『先生』の約束も果たせないまま、斬られるのか?

嫌だ、いやだ、イヤダ!!

そんなの嫌だ。何も成せないまま死にたくない!

自分はまだ死ねない! ここで死にたくない!

そんな自分に迫る斬撃は——身体から逸れた。

否、俺が逸らした。身体をやや仰け反らせて、斬撃をギリギリ回避した。

「ッ!? 回避しただと!」

一刀の驚愕の音が聞こえた直後、視界に色が戻った。その直後、頭痛が起きて自分は膝についた。

……………今のは、まさか……………。

「チツ、さやかと同じ技を使いやがって……………」

さやか……………? どこかで聞いた覚えが……………。

「まあいい。そろそろ俺は戦線離脱させてもらおう」

一刀はビー玉くらいの黒いモノを取りだし、地面に叩きつけた。黒い煙で一度見失ってしまった。

「逃がすか!」

四季は一刀を追おうとするので、呼び止めようと思ったが自分の足元にレーザーが飛んできた。エリオのところまで回避したところで煙幕は晴れたが、そこには多くのガジェットが待ち構えていた。

「手伝えエリオ、キャロ。これはちとばかし、キツイぞ」

四季達を追うためにも俺は一刀が言っていたことを頭の隅に置いて、ガジェット殲滅に専念した。

——回想終了——

あのととき『さやか』という名前に覚えがあった。記憶にはないはずなのに……………。

自分には幼い頃の記憶はない。あるのは『先生』と一緒に過ごし、修行した毎日だ。両親の顔は覚えておらず、先生によれば既に死んでいるようだ。

ま、別に知らない両親のことは今はどうでもいいとして。

「先生に渡されたこのアクセサリー……………。これにも秘密があるのじゃないかな？」
なんとなくそう思いながら自分は弄るのだった——

——
カギのような形をした剣のアクセサリ——を

第九十一話

(アオサイド)

自分は現在、隊長命令で五河四季とキリトと交流を深めていた。

四季とキリトはシイに召喚された神器使いで、キリトはもう一度『無血の死神』に会うために召喚に応じたそうだ。

どうもキリトはヤツとは友人のようで、かつて悪者から恋人を救ってくれたそうだ。

一方、四季は好奇心でそれに応じ、ついでに夜刀神十香も連れてきたらしい。こいつはラタトクス機関という組織に属しており、精霊というカワイイ娘ちゃんとキャツキャツウフフというデート作戦で出れさせて封印するという役割を担っていたのだ。

つまり、リア充男だったのだ！

合計四人の女の子とイチチャイチャしていたとはうらやまけしからん！ 即刻、チエンジを所望したい！

「断る。イチチャイチャすることなんかどうでもいいが、俺にとって精霊は興味深い対象だ。そう簡単に渡せるか」

「つまり、シキは私の恋人なんだな！」

「いや、ペットだ」

「ペットツ？ 飼われてるのか、私は!？」

まさかの予想外の発言に十香は驚愕。……………そういえば、大体この子って四季に食べ物与えられて喜んでいたな。ワンコのごとく。

「なるほど、愛玩用なのですね。わかります」

「だろ？ 癒されるし」

「私はワンコではなーいッ！」

プンスカ怒るが、四季に頭を撫でられてほにゃーと頬が緩んでいた。

あらやだ。一家に一人ほしいわ、この子。

「話を戻すぞ。お前は神器使い……………というわけじゃないんだな？」

「まあな。まだ神器が発現してないんだと思うけど、自分って記憶喪失だからねー。隊長に拾われるまでの記憶がないんだよ」

ヘラヘラと笑って言うが、話していることは深刻だ。自分が誰かわからないという苦しみはあると言えばあるが俺は気にしてない。

周りが気にしてあまり関わらないようにしてるけど。

しかし四季はどうでもよさそうに「ふーん」と答えて会話を続ける。

「お前に魔法を教えたその『先生』ってのは何者なんだ？ 基本構造や魔力生成のどれを見てもほぼ完璧に仕上がっていた。ここまですることができるように見てくれたヤツに興味が出てきたぜ」

「うーん、『先生』が何者か……。自分もさっぱりだけど、たぶん四季より強いかも。神器が二つあるらしいし」

「神器が二つ……。か。仮に敵なら厄介だな」

四季が難しい表情をしていたが俺は笑って四季の推測を否定した。

だってあの『先生』はヒーローを目指す大のお人好しなんだよ。そんな人がテロリストに加担するなんてあり得なかった。

「甘いな。そういうヤツだからこそ、油断できねえよ」

四季はコーヒーを飲みながらそう言う。自分だってそんなこと信じたくない。

……。あの人に限ってそんなこと……。あるはずない。

「それより『無血の死神』ってヤツの情報ほしい。キリト、アオ。何か知ってるか？」
「容赦のない規格外……。としか言いようがない。アイツはあの『約束されし勝利』の神器使いを苦戦ながらも倒したんだ。しかもその神器使いはあの『神器使い戦争』では老将だったらしいって後になってわかったんだ。要するに……。生半可な実力では瞬殺されるオチだ」

キリトの印象によるとかなり——いや、超マスタークラスというべきの実力者みたいだ。

新人のティアナ達が相手すれば『絶対に負ける』じゃなくて『絶対に殺される』という結末かもな。

ちなみに自分は『無血の死神』という人物は知らない。いや、『覚えてない』のだ。

隊長に拾われるまで自分は先生と過ごした日常と名前しか覚えていない。シャマル先生曰く、どうも記憶障害らしいが自分はそうとも思えない。

なんなんだ……この違和感は……。そんなことを思っていると、アラートが鳴り響く。

ガジェットとドールか!?

「やれやれ、またヤツらか。昨日もあんなに来たのに、ご苦労なヤツらだ」

「早く行こうぜ、四季。今日から俺も参加なんだから」

「あいにく、俺は行かぬーよ。昨日でやる気の全てを費やしたから」

「我が儘言うなよ。シイに怒鳴られるぞ」

「昨日怒鳴れたし、それに………」

「それに?」

「今朝、謹慎処分くらった。やっぱり昨日の仕返しが原因か」

「お前、なにをしたの!？」

あー、そういえばシイさん。昨夜のショートケーキの苺が『情熱の君へ』という最強のタバスコに変えられてたと愚痴を言ってたが……あんたが原因だったのか。てか、この人。完全にやる気ナツシングだよ。今まさに十香を餌付けしてるし。

まあなんにせよ……。自分とキリトと集合場所へ向かうのだった。

「つーか、一誠。お前も来いや」

「待ってくれよ、今は肉を食ってんだから」

「はよ来い」

「うぬー……………」

紹介し忘れていたがこいつの名前は兵藤一誠。性欲魔神ならぬ食欲魔神である。
この間なんか食ってばかりでリニアに来なかつたしな……………。

☆☆☆

今回の任務は昨日と同じでレトリックの確保だった。搬送中に奪われたレトリックを確保のために、ガジェットと襲撃者が逃げ込んだ廃墟の都市へ来ていた。

スターズとライトニングはガジェットを殲滅しに行き、マッスル部隊の隊長、自分、キリト、シイさんとで襲撃者を捜すことになった。

さらに二人手に分かれて発見率を上げてるわけだが。

「そう簡単に行かない……………か」

「自分もそう思うよ。こんなに広がったから見つからない」

「てか、今回の襲撃者の特徴は？」

「えっと、確か。ピンクのツインテールと黒髪ロングの……………」

と自分が狭い路地道の曲がり角へ足を運ぼうとしたとき、キリトが手で自分を止め

る。

『 ？
』

誰かの声が聞こえた。自分とキリトはお互い頷いて曲がり角を飛び出して自分は魔法の発射の準備、キリトは神器を召喚して構えた。

さあ、見つけたぜ！ 襲撃者さんよ！

「あむ、んちゅ……………だ、駄目よ、まどか。こんなところで……………」

「ティヒヒヒ。大丈夫だよ、ほむらちゃん。ここなら追っ手が来ても平気だよ」

「そ、そうかもしれないけどお……………あん……………」

「大丈夫。すぐに終わらせるから……………ね？」

……………何やら如何わしい雰囲気です。キスやら身体を触り合うピンクと黒髪の女性達。

普段なら大人の魅力を兼ね揃えていそうな黒髪の女性だが、押しに弱いのか、やや弱気そうになっており保護欲を掻き立てそうなギャップがあった。

一方、黒髪の女性に比べればやや小さいピンクの髪の女性だがその小柄容姿ながらグイグイといく野性的な行為に勇ましさを感じるギャップがあった。

そんな彼女達は自分達に気づいて目が合ってしまった。

うん……………とりあえず自分が言うことはただ一つ。

「あ、すみません。ごゆっくりー」

「いや違うだろ。この二人は犯人だろ」

キリトが自分にツッコむ。いや、違うでしょ。絶対この人じゃないって。

犯人がこんな百合百合でキスし合うほどマヌケじゃないって。

この人達はたまたまここでイチャコラしていたレスカップルだよ、きつと。うん、そうだ。そうに違いない。

「どんだけ認めたくないんだよ!? いや現実見ようぜ!」

「こんな馬鹿な現実があるか!」

自分が彼女達に指を向けると彼女達は口を開いた。

「どどど、どうしようまどか! 追い付かれちゃったわよ!」

「そうだねー。おまけにキスし合うところ見られちゃったし」

「はうう……………」

「恥ずかしの必要ないでしょ、ほむらちゃん。だいたい、ソラくんのするときには人前でチュッチュツとキスしてるじゃん♪」

「そんなに人前でしてないわよ! 私がキスするときはあまり人気のないところよ!」

……………。

「と言ってるが……………どうする?」

キリトにそう言われて自分は深呼吸してから。はい、吐く。

「知るかアアアア! なんでこんな場所でキスし合ってるんだよ!? 追っ手が来るこ

と予想できるだろ!？」

「予想してたよー? これを終わらせた後にソラくんを襲おうと妄想してムラムラしちゃったから、ソラくんもいないし。代わりにほむらちゃんを襲って見ました!! えっへん!」

「威張るなピンク! だからってここでイチャコラすんのか!? ラブホでしてこい!」

「だが断る!」

ムガアアアア腹立つわ、コイツらアアアア!

「あんまりペースに乗るな。コイツらのペースに乗れば戻れなくなるぞ……………普通の人間に!」

「どゆこと!? それって何かに感染するってこと!?!」

「いやコイツらから感染することはあんまりないけど、コイツらの仲間に『究極の変態』がいてな。ソイツのせいで一人……感染しちやって……………なんでアスナをもっと早く助けにいけなかったのかなあ……………」

「オイイイイイ神器を自分に向けるなアアアア!」

ヤベー、なんだよ。まさかキリトのトラウマを植え付けさせるほどの『究極の変態』って……………。

「もーいーかーい?」

「まーだだーよオオオオ!!」

「うっわ……………全力全開で『まだ』って言ってるよ、この人」

「仕方ないだろ！ キリトの何かが刺激されて鬱になってるんだから！」

「でもそんなの関係ないです♪」

「どういことだ、とピンクの女に言おうとした直後。自分はキリトを小脇に抱えて、その場を回避した。

ドツツツガアアアアンツツツ!!

——直後、凄まじい爆発音と衝撃が自分に襲いかかった。

「っ……………てえー…………」

自分は襲撃者の二人を見ると黒髪の女が撃つたと思われるバズーカ砲をその場で捨てていた。

「てめえ……………それ質量兵器じゃねえか……………」

「そうね。でも関係ないわ。私達は犯罪者。法を犯す罪人。ルールを守らないのは当然じゃなくって？」

「……………全くだ。神器使いを魔導士と同じもんなのかと勘違いしていた」

自分は口に入った砂を吐き捨て、元に戻ったキリトを下ろした。二人の女は神器を召

喚し、完全に戦う雰囲気になっていた。

キリトはそれに応じるかのように二つ目の神器を召喚した。

「二対二に見えるけど、そちらの子はまだ実力が足りないわね。実質で言えば、二対一になるわ」

「甘いな朱美ほむら。確かに数ではこちらが劣るかもしれないが、二刀流ならアンタらには絶対負けない」

「アハハハ、それもそうだねー。でも私とほむらちゃんが負ける道理じゃないよー?」

「ぬかせピंक。黒髪も自分を甘く見るな。魔法だけでアンタら二人を圧倒してやる」

自分、キリトは構えると襲撃者二人も構える。

「懺悔は済んだ?」

「後悔はした?」

「なら、安心してとっとくたばれ」

彼女達の死刑宣告を合図に自分達の負けられない戦いが今始まった。

第九十二話

(アオサイド)

まず飛び出したのはキリトだった。ヤツは得意の接近戦へ持ち込むために襲撃者達へ突っ込んだ。

黒髪の女性はそうはさせまいとグロックを構えるが、その前に自分が炎の魔法で牽制した。

おかげで女性の発砲が免れたが、今度はピンクの髪の女性が弓を引いた。

「いっくよー♪」

——刹那、弓に備わった矢だけでなくピンクの女性の周りに矢が展開された。その弦が離された直後、展開された魔力の矢がキリトに向かって飛んできた。

自分達がいるところは狭い路地道だ。つまり接近戦を行うキリトは前へしか行くことができない。

そこを狙って、ピンクの髪の女性は魔力の矢をバンバン撃ってきた。

「ツ！ 鬱陶しい！」

「ティヒヒヒ。ほらほら、まだまだ行くよ？」

キリトは矢を回避や切り伏せながら悪態をつく。

マズイ。これじゃあジリ貧だ。今はキリトが防いでいるがいずれは体力と集中力が切れる。

『跳ね返^{ラー}——しる』

「させると思ってた？」

自分の背後から黒髪の女性が延髄蹴りを放つ。それを、身体を低くさせて回避し、その場を離れた。

「いつの間に！」

「私の神器って時間操作できちゃうのよね」

ペロツと舌を出しながら言う女性に向けて、自分は雷の魔法を放つ。

女性はその場から消えて、今度は上空でグロツクを構えていた。発砲されたが、なんとか前へ転んで回避した。

黒髪の女性が着地した直後、自分の策が上手くいった。

「ツ！? 地面が凍って」

「正解！」

前へ転んだときに自分は地面に氷の魔法で凍らせていた。この魔法はあんまり得意じゃないため、少し凍らせる程度だが、足を滑らせるには充分だ！

あの消えた現象が時間停止なら、足を滑らせた今なら停止することを考えてる暇はないはずだ！

自分は雷の魔法を女性に放った。

『リリース』

「えっ……………」

自分が放った魔法が女性へ向かわず、こちらに返ってきた。

そのまま魔法は自分に当たりそうになったが、なんとか回避できた。

「なんでだ……魔法が戻ったのか？」

「そうね。『戻した』わね。時間操作が停止だけと思わないことね」

やられた。時間操作⇄時間停止だけだと自分は思い込みをしていた。

黒髪の女性は再びグロックをこちらに向けて発砲。

自分は加速魔法でなんとか回避した。

「ああくそ、厄介だな！」

悪態をつきながらどうやって彼女に魔法を当てようと考えていると、カランと金属を

落とす音が聞こえた。

そこを見るとキリトが力なく膝についていた。

——ピンクの髪に背中から抱擁される形で

「ってキリト、てめえ！ なに呆けてんだよ！」

「ふ、まどかの抱擁を前にして戦意損失しないものはいないわ！ あのたわわに実ったお餅に抱き締められて損失しないはずがないのよ！」

「どんなアビリティ!? めちゃくちゃ、うらやま——ゲフンゲフン。アホらしいわ!!」

「今、さりげなくうらやましいって言いかけたわね」

「仕方ないでしょ！ あんな美少女に背中から抱擁されてうらやましいわけがないだろ！」

クソツ、嫌がらせにキリトを魔法で吹き飛ばしてやろうか？

そう思っているとキリトが自分に手を伸ばして何かを懇願しているように見えた。

「ふん、何をして……………ん？」

自分はここで疑問に思った。キリトはただの抱擁でどうにかなる男なのか？

いや、それ以前にピンクの髪の毛の女性の服装が戦う前と違う。

あのドレス……………どこかで見覚えが……………。っ!!

自分は咄嗟にキリトに軽い雷の魔法を放った。嫉妬の意味ではなく、キリトが自分に何を頼んでいたのかわかっただけの行動だ。

魔法を受けたキリトは虚ろだった瞳に光が元に戻り、ピンクの髪の毛の女性の抱擁を振りほどいた。

「助かったぜ……………アオ」

「キリト、何があつたんだ？」

キリトの説明によればピンクの女性に近づけたが、その後放った斬撃が『すり抜け』そうだった。

まるで肉体が幽体化したかのように、そこに『いる』のに『いない』。

……………やっぱりか。自分がそう眩くと「どういうことだ？」とキリトが聞いてきた。

「変なビジョンが見えたんだ。あの女性の子どもらしき少女が黒髪の女性の子どもらしき少女にリボンを渡して、スウーと消え去るところをな。一見、関係なさそうに見えたんだが、それでもなさそうだった」

「どういう意味だ？」

「キリトの見た現象は概念化つて言うモノだ。まだあんまりわかんないけど、ビジョンに出てきた黒髪の女の子がそう言つてたんだ」

それを聞いたピンクの女性はパチパチと拍手した。

「へえー？ よくわかったね。そ。私は神器だけでなく、概念化つて言う力があるんだよ」

「外史で得た力だけど」とピンクの女性は踊るようにワンターンしてから言葉を続ける。「この力は触れるとき以外は実体化しない。それからさっきのキリトくんが意識をなくなりかけたのは私が彼の意識を『もっていこう』としたからだよ」

「そんなことが……………」

「できるよ。私は元々、円環の理という魔法少女を救済して導く女神様。一種の概念化した女神様だからあなたの意識を絶つことも造作もないよ♪」

もつとも殺せるというわけでもないけど、とピンクの女性は舌を出してお茶目な笑顔を向ける。その顔は一見かわいらしく見えるが、自分達にとって恐怖の対象そのもの

だった。

——話をまとめるとこの女性はいつでも自分達を眠らせることができるのだ。しかも、攻撃が一切無意味で干渉することもできない。

「さーて、今度こそ眠ってよ？」

自分は咄嗟に逃げようとしたが、足がナニカに固定されて動けなかった。

キリトも同じ現象で逃げる事ができない。

何が原因と探していると、黒髪の女性がニヤリと笑っていた。彼女が原因か!!

足の時間を止められたため、その打開策を考えようとしたが、既に遅く、ピンクの女性が抱擁してきた。

「もういいだよ。がんばらなくて、いいだよ？」

心地よい死神の声に自分の意識がだんだん暗くなる。

——力が抜ける

——闇に落ちる

死ぬわけじゃないが、悔しい。このまま彼女達を逃がせばレリックが取られてしまう。

犯罪に使われてしまう。

だから——求める。

いや求めろ。自分の力を、自分の魂を!!

自分は手を伸ばした——

——ナニカを掴むため——得るため——そして、『手に取った』!!

そのとき魔方陣が浮かび上がり、ピンクの女性は退いた。

「召喚術!? まさか、神器なのか!?!」

キリトの驚愕の声がしたがどうでもいい。とにかく自分は神器を掴む。

光と共に現れたのは——

—— H A R I S E N N ……？

「は、ハリセン？」

「ハリセンね」

「ハリセンだね」

上から自分、ピンク、黒髪の感想である。

うん。とりあえず、言わせてもらおう。

「なんでさアアアアア!?」

なんでハリセン!?! ツツコミをしろと!?! 漫才でもしろってことか、ゴツドよ!

「あの……ほむらちゃん、なんでハリセンかわかる……?」

「大方、彼女のせいでしょ………。だって『混沌』だもの……」

哀れみの視線を送らないでエエエエエ自分はカッコいい剣とか求めてたんだ

よオオオオオオ!

「とりあえず撃つとこ」

「さすがまどか。容赦ないわね」

ピンクの女性は問答無用で撃ってきた。あーもう、ヤケクソ!!

「せやー!」

ハリセンで魔力矢を叩いた。

パシユンツ

消滅した。え、何がって? 魔力矢が。

「え?」

「は?」

目を丸くする女性達。いや、自分も目を丸くしてんだけど。

「もしかしてキャンセルされたの?」

「だとしたら……………マズイわね」

なんか知らないけど、自分は足を叩くとかかっていた時間停止が解除された。もう一度確認のため、キリトにかかっていたヤツも解除した。

うおっ、スッゲー。最近のハリセンって万能なのか？

「んなわけあるかアアアア!! なんだよ、そのハリセン。キャンセルするとかどんだけ高性能なんだよ!?!」

「知るかボケ。こっちが聞きてーよ……………」

キリトのツツコミの通り、もはや呆れるしかあるまい。

ま、いいや。

自分は嘆息を吐いてから女性達にハリセンを向ける。

「さあ、覚悟しろ。こっから先が自分のターンだ」

そう言いながら不敵に笑った。

第九十三話

(フエイトサイド)

「ヒヤッハー!! 汚物は消毒なのオオオオオオ!」

なのはがまた砲撃でガジェット達を蹴散らす。

歳を重ねるにつれて言動が凶暴化しているのは――

――あ。たぶん心当たりある。草太のせいだ。

初恋の人がニューカマー化しての再会だからヤケクソになってこうなった。

それはさておき、私の前には仮面つけた女性がいる。彼女は儀礼用のマントを羽織、そして手にはビリビリと電気を帯びた刀が握られていた。

私はバルディッシュで何度も打ち合ったが、魔力刃でなければあの電気の餌食になっていた。

――その上、強い。私と同じくらいのスピードを持っているし、経験も互角だ。

油断ができない相手とはこの人のことだろう。私がそう思っていると彼女はクスクスと笑いだした。

「……………何かおかしいの?」

「だって、フェイトったらしかめ面で余計なことを考えていたんだもん。これが笑わずしていられないじゃん♪」

侮辱された。私はそう思いバルディッシュの握る力を強める。するとその人は仮面を外した。

その顔を見たとき、私の中の怒りが消えた。そして動揺した。

そんな、まさか……………。

「おっぴさー♪ わたしのかわいいかわいい妹くん♪」

その後の話をすると、私は彼女に負けた。動揺した私が勝てるはずがないのだから……………。

そう彼女は私の大切な家族だったから……………。

(アオサイド)

ハリセン——それは漫才に置いて究極のアイテム。
武器ではない……………はず。

有りとあらゆるボケをツッコむことができる。叩（はた）く者には爽快感を与え、叩かれる者に地味な痛みを与える。

……………つまるところ、叩かれたら痛いのだ!!

「くらえ!」

「あイタ! もうっ。お返し!!」

ハリセンでピンクの女性を叩くと今度は無数の弓矢を撃ってきた。

「フオアタタタタタタタタタ!!」

「まどかの弓矢を全部叩いてキャンセルしてる!?! なんてデタラメな!」

うん。ものスッゲーデタラメだと自分も思うよ。

魔力の弓矢を叩いてキャンセルし続ける。そして弓矢が収まったところで接近。

弓矢の魔力をチャージジというインターバルを狙っての行動だ。しかし、そうはさせまいと黒髪の女性はグロックを発砲してきた。

自分は銃弾をハリセンを盾すると——銃弾が弾いた。

「……………ハリセンって紙でできてるわよね? なんて鉄の弾で弾けるのよ!?!」

「知るか! こっつちが聞きてえよ!」

黒髪の女性が思わずツッコむのは無理もない。このハリセン、銃弾を受けたのにどこも破れてない。

「ただけ頑丈なんだよ、このハリセン。」

銃弾を撃とうとする黒髪の女性に自分は路地にある壁を走りながら今度は黒髪の女性を叩いた。

「ほむんツ」と謎の悲鳴をあげて叩かれた頭を撫でながら後退する。

「ぶったわね？ 親父にもぶたれたこともないのに！」

「ほむらちゃん、知ってるの？ 機動戦士」

「創世記のアニメ見てたら、ちよつとロボットのアニメにハマちゃって……………」

「なんでか知らないけど、ネタにはしる女性達。もうちよつとシリアスにしてほしい。」

「ほとんどの原因は自分だけ……………」

「というか、キャンセルは脅威だけあの神器、殺傷能力はないだけであんまり怖くないね」

「そうね。叩くだけだし」

「まさにその通りである。」

「剣ならば斬る、槍ならば突く、弓矢なら射るといふふうには殺傷能力があるのに、これには全くない。」

てか、棍棒以下の武器である。どうしよう………一人で相手側したら全然勝てる気しないや。

なので――

「キリト、たのまあ」

「な!?!」

敢えて自分から突っ込んだため、注意は自分に向けていた。その間にキリトが大技の準備に入っていた。

二刀の剣に青と赤の炎が帯びて、そして放つ斬撃。

『クロス・ファイヤー!!』

クロスを描いた斬撃が放たれて自分は身体を縮めて、当たらないようにした。

黒髪の女性はそのクロスを時を止めることで動きを止めたが、自分はハリセンをそのクロスに投げた。

では問題だ。

最初にキャンセルされるモノはなんだ？

答えは、『上書きされたモノ』。

そう自分が投げたハリセンにより、クロスの斬撃にかかった神器の力を解除したのだ。

「まどか!」

「うん!」

ピンクの女性が射た魔力矢とその斬撃が直撃して爆発が起きた。煙幕で見えなくなり、晴れたときには彼女達はいなかった。

——逃げられたか。

そう思つて女性がいたところまで向かう。そこには赤い結晶体が光帯びていた。

☆☆☆

「ようやった。そう言いたいところやけど、言わせてもらうで——

——なんで連絡してくれへんねん!!」

レリックを確保という任務は確かに成功だったがどうも援軍を呼ばなかった自分達にこの平成ポンプンコさんはぶちギレてるようだ。

ちなみにキリトと自分は今、始末書を書いていた。ただいまので五十枚目を突破した。

全く……成功したのに怒られるなんて——わけがわからないよ。

「やかましい。白いナマモノセリフをパクんなや。しかも覚醒したら、神器がハリセンやっただって……」

「イエーイ♪」

「サムアツプすんなや、腹立つ！」

八神隊長に小突かれた。痛いでごわす。

「にしてもなんでレリックとか集めているのでしょうか？ 聖堂教会のお偉いさんからの情報ありましたか？」

「まだわからへんわ。せやけど、スカリエツティだけでなく千香ちゃんも関与しておるからただ事じゃないで、きつと」

ふーん、ただ事じゃない……ね。

でもなーんか、しつくり来ないなあ。千香って人がスカリエツティと組んで管理局に混沌をもたらそうとしている。

それは前半の予言だ。

では後半の予言はどうかということだ？

シイさんやキリト、四季達がここに来たことに何か関係あるのか？

自分はそう思いながら始末書を書くのだった。

(千香サイド)

今日のレリック集めは失敗とほむらとまどかちゃんから通信は届いた。

けれど、進展はあった。

神器の出現——つまり第一段階を突破したことだ。

「ふっふっふ……楽しみだなあ……。『彼』はどのように進化して、どのような結末を迎えるのか♪」

ああ、ホントに………楽しみだなあ………♪

閑話 感染していく若者達

(キャロサイド)

最近、エリオくんを思うと胸がドキドキする……………。

あのリニアの戦い以来、私は彼をずっと見るようになった。彼と面に向かって顔を見ることができなかった。

……………なぜか仲の良い家族という関係が徐々に嫌になっていた。

私はおかしくなったのだろうか？

そしてこの気持ちはなんなのだろうか？

解決策を隊長達に聞いてみた。

『なのはさんの場合』

「それはあれだね。異姓を意識しているんだよ」

「異姓ですか？」

「うん、成長すると男と女という性別に関して意識するようになるんだ。だからキャラはおかしくなってるよ。それが当たり前のことだからね♪」

「それじゃあ、どう対処すればいいのですか？」

「撃てばいいよ♪ 爽快感がたまらないから」

「いや、それ……なのはさんオンリーの解決策ですよね？」

だから恍惚そうな顔で私に砲撃テクニクをレクチャーしないでください。

『フェイトさんの場合』

「異姓の問題かあ……。それは徐々に慣れていくしかないよ」

「そうですか……………」

「とりあえず、気分転換しようよ。ほら、これを着て私が指示するポーズをとって」

「?? よくわかりませんが、やってみます」

なぜかフェイトさんに写真を大量に撮られました。その時の顔はとても満足そうでした。

『はやてさんの場合』

「それは『恋』やね」

「恋、ですか？」

「せやせや。胸がドキドキして気になる異性がいるっちゆうことはその人のことが好きやっつてことや」

「私はフェイトさんやみんなも好きですよ？」

「恋の好きは友達の好きとちゃうねん。せやから、キャロはエリオくんとどうなりたいかよく考えておいた方がええで。……でないと放つておくとんでもないところに行くかもしれへんから」

なぜか達観していたはやてさんが印象に残りました。この人は過去に何があったのだろうか？

☆☆☆

結局、答えなんてわからなかった。私はエリオくんのことが好きということ以外は………。

なのはさんは砲撃しか教えてこないし、フェイトさんはよくわからないし、はやてさんは自分で答えを探すようにとしか言われなかった。

………私は結局、どうすればいいのだろうか。

「あ、キャロ。なにしてんの？」

アオさんが私に話しかける。この人はあまりあてにできない人だけど、ダメ元で聞いてみようと思って聞いてみた。

「あー、なるほどね………。面に向かって顔を見ることができなくなっただ。それならこうすればいいんじゃないかね」

「え？」

私はアオさんの答えを聞いてビビツときた。そして後日、私は実行するのだった。

(エリオサイド)

最近、誰かに見られている。そんな気がして僕は周囲を伺っていた。けれど、誰もいない。

それに最近、キヤロの様子がおかしかつた。前は面に向かって話しかけられることが少なくなっていたが、今では積極的に話しかけるようになっていた。

まるで何かを悟って理解したかのように。

またキヤロの視線がたまに怖いときがある。僕が女性に話しかけられたときにはいつの間にか後ろにいたり、隣に現れて会話を邪魔をしたりしてくる。

僕は怪しくなつてキヤロの部屋に侵入した。

僕がこれが最低なことだと自覚している。勝手に女の子の部屋に入ることは許されないことだとフェイトさんから教わっていた。

だけど、このままじゃ僕はいつかキヤロにナニカされる気がしてたまらないのだ。だから僕はキヤロが僕に対してどんなことをしていたのか調べることにした。

——そして……………後悔した

キャロは既に僕の知ってるキャロじゃなかったというのを……………。

壁には僕のポスターや写真がいたるところに張られており、DVDには僕のシャワーシーンや着替えているところが撮られていた。

日記には僕のことやビツシリと書かれていて、どんな女性に話しかけられてデレデレしていたのかも書かれていた……………。

僕はこのとき本能的にここが危険だと悟り逃げ出した。そしてしばらく訓練を休むことになった。

病んだ僕にアオさんは様子を見て来てくれた。

僕はアオさんにこのことを相談した。

僕はキャラがおかしくなったことが受け入れられなくなった。現実を否定したかった。

そのとき、アオさんは一枚のディスクを渡して言った。

「現実が辛いなら、ここへ逃げてもいいんだぜ」

彼が渡したのは恋愛シミュレーションのゲームだった。僕はそれをプレイしてだんだん心が晴れてきた。

—— そうだ。辛くなったらここへ逃げてもいいんだ

二次元なら誰も裏切らないし、辛いことはない。

だからいつでもここへ逃げてもいいんだ！

僕はアオさんのおかげで救われた。こうしていられるのも、アオさんが二次元を紹介してくれたからだ。

だから僕はもう一度現実でがんばってみようと思う。辛いときは二次元に逃げればいいんだしね！

「アオ、貴様。キヤロになんとそそのかした？」

「面に向かつて顔を見ることができないなら写真やカメラで慣れていけばいいんじゃないか。ねって言ったらストーリー化した」

「……………その結果がエリオの現実逃避に繋がったか。まあ、なんにせよ。貴様は今からお仕置きだ」

「あつれー？」

第九十四話

(アオサイド)

今日は隊長達との模擬戦である。この模擬戦のルールは五分以内に高町空尉に当たらないとまた五分からやり直しという鬼畜ルールである。

高町空尉のモットーは実戦で戦い、自信と緊張を無くすのがこの訓練の意味らしい。別に砲撃が撃ちたいから実戦ばっかりしていると思いたくない。

高町空尉にスバル、エリオが突貫していくが、スフィアとプロテクションでなかなか攻撃が当たらない。

ティアナが指事を出すのが、単純でわかりやすい。

キヤロは召喚術やフリードの火炎など補助的なことをしているが、突貫している二人はそれを活かしていない。

はあ……………暇だなあ。

「あんたも何かしなさいよ！」

「嫌でござす。なんで自分がトリガーハッピーに突っ込まなきゃならん」

「あのハリセンがあるでしょ！ それでなんとかしなさいよ！」

「いやアレ、あくまでも魔法や能力をキャンセルすることしかできないハリセンだからね。決定的なモノが出せないから、ね？」

そんなこと言っているとっているとティアナにピンクの砲撃が直撃。撃墜である。なんかいつの間にか、エリオ達も落とされてるし。

「次は君だよ、アオくん♪」

「えー……………。なら、仕方ない。わたくしは最期最後でおのれの欲望に従うのみ。さあ、行かん。なのはさんの乳——」

「デイベインバスター!!」

「アーーーーー!!」

おふぎけは許さない。なぜなら私は高町なのはだからと言わんばかりのツツコミが炸裂された。

「……………なあ、俺達参加しなくていいのか？」

「必要ないわ。キリトと四季、一誠は既に実戦で使えるもの。それに三人はチームワークより個人で戦うタイプだし」

「まあ、そうですね。てか、アオが真つ黒ク口助になつてるんだけど」

「セクハラ男子は死すべきよ」

シイさん、パネエツス……………。

てか、一誠。てめえも肉なんか食ってないで心配しろや。

☆☆☆

今日の全ての訓練を終わらした自分達は解散となつてフリータイムとなつた。エリオはシャワーを浴びに、キヤロはエリオのシャワーを盗撮しに行つた。

……………ん？　なんかおかしいこと言つてたか？

キヤロの最近のマイブームはエリオの観察である。

同い年の異姓には興味津津なのは悪いことではない。むしろ自分が進めてこつたと言つてもいい。

さて、話は変わるが自分は広場で散歩をしていた。気分転換を兼ねてのことだ。

すると魔力弾が弾ける音とかが聞こえるではありませんか。自分が気になつて見ると、なんとティアナが自主練をしていた。

あんだだけ動いてたのに、まだまだ動ける彼女は現役だなあ。自分はもうクタクタだけ
ど。

「んで、ヴァイスさんはなんで陰からこっそり見守っているのですか？」

「ティアナ嬢のポロリを期待して」

「いやポロリないから」

「それじゃあ、ティアナ嬢のキャストオフを」

「あんだの中のティアナはどんだけ変態なんだよ」

しかしポロリとキャストオフは男のロマンである。女性なら尚更みたいなのは男の性さがである。

「まあ冗談はさておいて、あの二人はこうやって毎晩自主練しているんだよ」

「二人って、まさか」

「察しの通りスバルもだ。スバルはティアナに協力しているようなモノだがティアナ嬢はどうも行き急いでいるってところが俺の印象なんだが」

確かにそうだ。今回の訓練で確信したが、どうも焦っている様子が見られた。たぶん、リニア戦のとき接敵した神器使いが原因だと自分は思う。

「このままのオーバーワークを続ければ……………」

「ぶっ壊れる、か……………」。ヴァイスさんは止めるように言ったの？」

「言つても『自分は凡人だから』という理由で止まらなかつた。あいつには才能があるのだが………後は本人が気づくまでだな」

手の施しよいがいいか……。ヴァイスさんの言う通り、彼女自身が気づかない限り、この問題は解決しようがない。

自分はただ彼女の努力を見守るしかなかつた……。……。

(ティアアナサイド)

私は凡人だ。だから努力する。

私の兄は管理局員だつた。両親を早くから失い、男手一つで私を育ててくれた立派な人だ。

たまに私が兄さんと遊びに行きたくて我が儘を言つて困らせたことがあつたが、そんな私を兄さんは仕事の合間をぬって遊んでくれた。

そんな兄さんには夢があつた。立派な執務官になることだつた。

兄さんの夢は私にとって叶えられるモノだと思つていた。それは私にとって誇り

だった——

——
しかし

——
兄さんは

——
ある男によつて………殺された

雨の日の出来事だった。兄さんは犯人を追つて追い詰めたが、なんと犯人の仲間が現れて、そいつは人質をとつて手足を出せない兄さんをなぶり殺した。

人質だった女の子は無事で事件の聴衆された。彼女は人質にされたときの意識があまりにまいだったため、顔はよく覚えていないらしい。

………けれど彼女はその犯人の仲間の名前を知っていた。

そう——『無血の死神』だ。

あいつが兄さんを殺したんだ………。

兄さんの夢を奪ったんだ………。

兄さんは上司からも無能呼ばわりされ、無念の想いで死んだ。
だから私はそのとき決意した。

——『無血の死神』をこの手で捕まえる。

兄さんの夢を………ランスター家の銃弾を証明してみせる！

そのためにも強くなる。あの青髪の女になんかに手こずっている暇はない。
私が兄さんの仇を必ずとる。………絶対に。

(シイサイド)

私は今、次なる召喚のためチョークで書かれた円を使って陣を組んでいた。異世界からの召喚にはこういう手順が必要のため、いちいち組まないと異世界からの猛者を呼び出すことができない。

なぜ、私がそういうことをしているのか？

理由は私の兄の知り合いである女神からの指示だ。なんでも全ての異世界、平行世界の危機に備えての準備らしい。

………強大なナニカが近づいていると彼女は言っていた。

「そのナニカって言うのは知らないけどね………」

「そんなことより、今度はどんなヤツを呼び出すつもりだ？」

陣の手伝いをさせていた四季が私に聞いてきた。私も実はあまり知らないのだ。

この召喚で呼び出される者は『強い存在』でしかないので、人種人格性別はランダムで呼び出される。

つまり、変態だったとして仕方がないのだ………仕方がないのだ………仕方がない

のだ。

「なんで二回言う必要があるんだよ」

「問題児が呼び出されても仕方がないってことよ」

「わけがわからない」

ちなみにこれで召喚される者達はいつでも自分の意思で還れる仕組みになっている。なので一誠はみんなと違い、来るべき戦いが来るまで自分の世界でゆったりするつもりらしい。

四季と十香はこの世界に興味があるため、残っているがキリトだけは別の理由で帰りたくないらしい。

彼曰く、「変態に振り回される毎日だった」からだど。

ホントに何があつたのよ……………。

そんなことを思っていると陣が光だし、何かが召喚された。

それは人形で髪は黒い。そして犬歯がやや長く、瞳は紅い——

—— スッポン。ポンな男性。

「きゃあアアアア露出狂よオオオオオ!!」

「いやお前のせいだろ」

四季のツツコミがあつたものの私は問答無用に魔法を乱射するのだった。

召喚された彼、『サイト』は喋る剣『デルフリンガー』に向かつてこう言っていたらしい。

「数百年ぶりの目覚めで魔法を乱射されるのはこれ如何に」

『知らねえよ』

第九十五話

(アオサイド)

新しく仲間ができた。

その人はなんと吸血鬼という種族で何百年をも生きている人外だ。

そして露出狂である。その名はサイトく——いだだだだだ!

ごめんなさい。自分が悪かったからアイアンクローから解放して!

「よかろう。二度と言うな」

『相棒は容赦ないなあ』

「当たり前だ。サーシャから譲られたお前を見つけて、あと数百年は寝ようと思ったがいきなり召喚されるわ、露出狂扱いされるわ、ワタシをなんだと思つてやがるつて話だ」

スツポンポンだったサイトは今はいきなりワイシャツと黒のズボンという大人らしさを際立たせる格好をしている。てか、この人。執事服着せたら絶対似合う人だ。

「サイト、さんでいいかしら?」

「サイトでいい。お前らは何ゆえにワタシを呼んだ」

少し威圧的な目で自分達を見るサイト。ピリピリと肌で感じるほどの気だ。シイさんは尻込みすることなくサイトに話しかける。

「サイトさん、お願いします。私達に力を貸してください」

「断る」

「即答ですか……」

「当たり前だ。わけのわからない組織に手を貸せるほど、ワタシは貴様らを信用していない。……ただでさえ、先の召喚で露出狂と言われて攻撃を受けたのだぞ」

「うっ……いい、一応悪気があったわけじゃ。それに私の神器で傷を完治させましたし……」

じーとサイトは批難の目を向ける。それはシイさんが悪いので弁明してあげない。

だから涙目で「どうしよう?」と言われても自分達は目線を逸らすだけだ。

「まあいい。せっかく目覚めたのだ。しばらく遊んだら寝よう」

「フリーダムだな、お前。てか、その片手剣見せてくれない。神器とは違うモノを感じる」

「いいぞ。ワタシも仲間プレゼントされたモノだからよくわからないが魔法を吸収して、その魔法を斬撃として放てるらしい」

「へえ……解体して解析してえーな」

『あ、相棒！ こいつ、めっちゃくちや怖い目でオレを見てるぞ！』

「よかろう。いつでも元に戻せるなら解体してもいい」

『相棒オオオオ!?』

四季とサイトがデルフを使って談笑していた。つーか、主に裏切られたでデルフ哀れである。

「はいはいー、みんな注目してなー?」

すると我らがタヌキのやが——

ズドオン!

「なんか言った?」

「言ってますん」

いきなり砲撃を撃たれたでござる。こやつはニュータイプじゃないのか時々思う今日この頃である。

「とりあえず全員ミーティングルームに来てや。明日の任務について話すことがあるんやから」

「てか、放送せずにわざわざここに来る必要があるのですか?」

「放送しても来ないやろ、この二人」

「何を当たり前なことを」

はやてさんに青筋を浮かんだ。この二人、ものすごくマイペースだ。

キリトは呆れて手に額を当てて嘆息を吐いた。

まあ、なんにせよ。この二人が素直に言うこと聞かすためにシイさんが説得に一時間くらいかかった。

彼らを動かすにはやはり好奇心ということを追記しておこう。

☆☆☆

ホテル『アグスタ』。高級宿泊施設であり、本日は多くの宝物をオークションする会場である。

ロストログアも秘密裏であるがオークションにかけられていたりする。

そんなホテルにて自分を含めた新人達は周囲の監視と守りという役割を与えられた。

ちなみに隊長達の役割はホテル内の守備だったりする。

なので、衛さんこと自分の隊長は黒のスーツを着衣していた。

金髪と黒のスーツって妙に合うよね。

「我としてはスーツは動きにくくてあまり好まぬ」

「マッスルモードになればスーツが悲鳴あげますしね」

「うむ。その際にスーツが弾け飛ぶがな」

「せっかく買った一着目スーツを破んなや」

はやてさんが半目で衛くんを睨みつける。小柄な彼女とドレスはマッチしており、普段では見せない美しさを醸し出していた。

「どうや。別嬪さんの晴れ姿は」

「馬子にも衣装」

「豚に真珠」

「うん、衛くん。旦那やったら奥さん誉めろや。そしてアオくん、あんたはそれはどういうことや？ 価値がわからん豚って言いたいんか、ゴルア」

そう言いながらアイアンクローはやめて。説教とお仕置きは辛いでござる。

「はやてさん、綺麗ですよ」

「エリオくんもいつか着ようね♪」

「いや僕は男だからね、キャロ。というか、何さりげなく写真撮ってるの!？」

「私のコレクションに新たなページが増えた」

「もう、二次元にはしろうかな……………」

エリオが達観し始めた。キャロの変態化のせいではなく現実には嫌気をさし始めたのか、彼は二次元に逃げようと考え始めた今日この頃である。

ちなみに誘導したのは自分だったりする。

「アンタのせいか！」

「いたたた……………アイアंकローはやめるでござるー」

「余裕そうに言つて何をいまさら！」

いや確かにそうなんだけど、痛いのは痛いものだから嫌だ。

すると、今度はフェイトさんとなのはさんが出てきた。

彼女達は元々スタイルが良いため、ドレス姿はモデルさんレベルである。

素晴らしい。というわけで自分の最初の一言は。

「なのはさん、なのはさん」

「何かな、アオくん」

「今日のパンツは何色？」

「デイベイイイインバスタアアアアア!!」

「アーーーーー!!」

今日も砲撃を撃たれるのだった。めちやくちや痛いです、先生……………。

(なのはサイド)

アオくんの折檻を終わらせてから私達隊長四人はアグスタのオークション会場に向かった。そこには様々なオークションに出される品とテレビなどに出てきたりする多くの有名人が集まっていた。

「さすがアグスタやな。高級宿泊施設だけあって色んな人が集まるとるなあ」

「ねえ、はやてちゃん。ここにいる人達吹き飛ばしていい?」

「いやなんでテロるねん。ここの守備するのが私達やろが」

「だってここにいる人達って大体違法犯してるじゃん。いつそのことぶつ飛ばしたらいいかなーって」

「本音は?」

「人をゴミのように蹴散らしたい」

「落ち着け砲撃魔。てか、なのはちゃんのせいで大体の犯罪者が桃や桜の饅頭を見ただ

けで逃げ出すようになってんねん」

「あ。私のOHANASHIがちゃんと効いてるんだ。よかった、よかった♪」

「よくないわ、どアホ」

むー、なんでわかってくれないかなー。私の砲撃による爽快感はいつになったら理解してくれるのやら。

「あ。もしかしてなのはにフェイトにはやてと衛さん？」

私がそう思っていると眼鏡をかけた優男が話しかけてきた。えっと、確かこの人は……。

「変態ユーノくん」

「あふん……………」

「やめんか、二人共。てか、ユーノくんも相変わらずやな」

「いやーフェイトとなのはの罵倒はやっぱり心に来るね！　こんなことだったらアルフも連れてこればよかった」

「私の心労が増えるからやめてや!!」

土下座しないばかりユーノくんにはやてちゃんは頭を下げる。変態が合計四人になればさすがに嫌だよね……………。

ちなみにアルフはユーノくんと付き合っている。まさかユーノくにケモナーとい

う新たな属性ができるとは思わなかった。

「歪んだ解釈するな、高町。それから貴様も変態だろうが」

「なんですと？ 心外だよ。私は百八十度どこからどう見てもまともな別嬪さんだよ」

「砲撃魔がまともとら言えんだろう。いや、それよりも聞きたいことがある」

何かなと衛くんに聞くと彼は目を逸らしながら口に出す。

「貴様……下はどうした……？」

「なにセクハラ言つとんねん!! なのはちゃん、ビシツと言つてええで！」

……

「え？ いや、その……嘘、やろ……？」

「はやてちゃん、世の中にはこういう格言があるんだよ」

「なんやねん」

『パンツ 履かない』

「なんでやねんツツツ!!」

はやてちゃんの今日最高のツツコミが炸裂した。

今ならシユテルちゃんの気持ちわかる気がする……！

爽快感がたまらない！

「ま、まさかなのはちゃんに新たな属性が追加されるやなんて……………」

「ちなみに私は既に覚醒済みだよ、はやて」

「ここにも変態がおった……………」

フエイトちゃんの脱ぎ魔は元からだと思うの。

第九十六話

さて、今宵始まるのは少年少女が望んだ復讐劇の序章。

誰が失い、誰が悲しむかは時の運。

では、始めよう——オレ達の復讐^{劇場}を。

(はやてサイド)

パーティ会場は大物ばかりで賑わう中で不意にその声が静かになった。

理由は二人の女性の登場である。一人はメイドで、金髪のアートヘア。スタイルは抜群で母性溢れそうなくらいの穏やか雰囲気を周りに与える美女である。

もう一人はメイドの女性のような大きな胸はないが、スレンダーでモデルのような女性で、私や周りから見れば人形のような魅力を感じさせる黒いドレスを着た婦人やつた。

「衛くん、もしかしてあの人……………」

「『ミッドの歌姫』だ。まさか幻と言われるほどの有名人がこのようところへ来るとは……………」

『ミッドの歌姫』。彼女は歌手活動で表に出ることは滅多になく、あまり顔を知られていない女性だが、その歌は周りを魅了し、販売されたCDもすぐ完売するほどの大人気のため、周囲から『幻の歌手』と呼ばれている。

「情報が少なすぎて誰だったのか一瞬わからぬかった」

「せやけど、なんで幻の有名人がこのホテルにやる……………」

『ミッドの歌姫』はしばらく大手企業の人達と談笑した後、司会者からマイクを借りていた。

「みなさん、こんにちわ。ミキ・アマノカワです。今日はみなさんに私の新曲と重大なお知らせがあります。まずは私の歌を聞いてください♪」

ミキ・アマノカワが合図すると曲が鳴り、彼女は歌う。

——— 美しい旋律

——— 誰もが聞き入る美声

——— そして歌う姿はまさに女神に等しいと表現できるものやった。

私もつい彼女の美声に感動して聞き入ってしまった。仕事中やけど、この美声を聞いたら仕事どころやないかもしれないかもしれへんようになる。

「？ 衛くん、どないしたん？」

「いや、どこかで聞いたことがある歌だな……と思って」

「そりゃあとCDちやうの？」

「いや……CDからではなかったと思うが……」

訝しげに衛くんはミキさんの歌を聞いていた。

テレビ番組から聞いたんちやうの、と思っているとミキさんの音が終わった。

とてもええ曲やったで。

「ありがとうございしました！ それではミキさん、続きまして重大発表をお願い致しますー！」

司会者がそう言うときミキさんはマイクを握り、口を開いた。

「今日はみなさんにお知らせしたいことがあります♪」

私、ミキ・アマノカワはジェル・スカエリエッテイの手先です♪」

……………は？

私だけでなく周りの人達が凍りつく。なんや、スngoイカミングアウトしたような……………。

「え、えーとミキさん？ それはどういうことですか？」

「どうもこうも事実です♪ 私はスカさんの仲間ってことなんだよ？ キヤツ、言っちゃった♪」

「じよ、冗談はほどほどに……………」

「冗談？ ボクは常に全力全壊だよ？」

口調が変わった直後、私と衛くんはバリアジャケットにセットしてミキさんに向けて魔弾を放つ。彼女は私達の魔法を避けるまでもなく、ナニカで遮った。

「いきなり攻撃するなんて物騒じやないか。ねえ、はやてちゃんに衛
「やかましい。堂々と我らの目の前に現れといて攻撃せずにいられるか
「全くや。まさか一人で来ないなとこに来たやないよな？」

私の質問にミキ——いや『天ヶ瀬千香』はクスクスと笑い出す。

どうなら一人やないことやな。どこかに千香ちゃんの間があるはずや！

「いやー確かにそうだけどー……………クスクス」

「何がおもしろいねん」

——せやけど、私達はここで気づくべきやった。

「だってさあ、ボクは一人で敵地に来てないけど——」

——私達四人の隊長達は中を警戒するんやなく

「外には彼が来ているんだよ？」

——外から来る化け物を警戒するべきやったんや、と。

「高町、ハラオウン!! 今すぐ外へ向かえエエエエ!!」

私がそれに気づいたときに衛くんはなのはちゃんやフェイトちゃんに向けて叫んだ。
どった。

「もう遅いよ」

なのはちゃんやフェイトちゃんがバリアジャケットを纏ったときには千香ちゃんの神器が発動しており——その神器で私達は会場ごと閉じ込められた。

(アオサイド)

自分達が任されたのは外の守備である。………全く、襲撃する気配がないから意味がないと思う。

あーあ、中では隊長達は内部監視という建前で楽しんでいるだろうなあー。

——そう思っていた刹那、ホテルにナニカが覆われた気配がした。

「な、なんだあ!？」

「これは……………」

シグナムさんは見覚えあると言った顔でホテルを覆った半透明の結界を見ていた。

すると、デバイスから隊長達の通信が入った。

『緊急事態や！ 私らが千香ちゃんの策略で閉じ込められてもうた！』

「本当ですか主はやて！」

『今のところは千香ちゃんを捕らえようと衛くん達が戦ってるんやけど、千香ちゃんだけやなく三人も潜んでおった!』

「誰と誰ですか？」

「مامィさんとまどかちゃん、あとフェイトちゃんに似た女性や！」

フェイトさんに似た女性？

プロジェクトFか？

『それよりも周囲の警戒を最優先にして！ 今、そつちにSSS級の犯罪者が向かつと

る!』

「SSSS級……ですと!？」

SSSS級——通称災厄の存在。

管理局では魔力ランクで犯罪者の危険性を示している。S級以上だと人災扱いされ、AAA級の魔導士達が束にならないと勝てない存在である。

SS級くらいは過去に一人いたくらいで逆に言えばSS級以上は本来存在しない。

——だが四年前にSS級を超える者が現れたのだ。

そしてそれはたった一人の男を示している。

「まさか……ヤツですか?」

『せや、最悪シグナムだけやなく全員でかからへんとヤバいあの人や』

険しい表情のままシグナムさんははやてさんの通信を聞いていた。

どうやらそのSSS級の犯罪者がこちらに向かっているようだ。

『呑気に通信していて大丈夫か？』

知らない第三者の声が聞こえた。いつのまにかデバイスのウィンドウに『アンノウ
ン』と表示されていた。

どうやらこの場にいる局員全員に通信されているようだ。

『その声は………やつぱり………』

『その通り。オレさ。久しぶりだな、八神』

『一応、衛くんが婿入りしたから八神は実質二人やで』

『どうでもいい。衛は衛。八神は八神と言うまでだ』

相変わらずだ、とシグナムさんはぼやいていた。しかし、こんな彼女のマジな表情は
見たことがない。

恐怖と喜び満ちている顔だ。

『お前らに言いたいことがあってな。まずは言っておく——』

——
『宣戦布告だ』

その言葉を聞いた直後、ガジェットの反応が起きる。

ヤバい……これは！

「防ぎきれようがない！」

ザコを相手するのは自分達だが、はやてさんはSSS級を相手するなら全員でかからないとヤバい。

つまり、今いるシグナムさんとヴィータさんの二人の隊長で彼を相手しなければなら
ない。

『さてさて、今宵のお前達の相手は——無血の死神。』

後悔しろ、無力さを思いしれ。

……………そして、とつと死ね』

その宣告と共に自分達はガジェット達の反応があるところへ向かった。

(ティアアナサイド)

あいつが……………兄さんの仇がここに……………。

私の顔は笑みで歪む。スバルは心配そうに見ていたが気にしない。私はヤツを絶対に捕まえる。ランスター家の弾丸がどんな相手でも通用すると証明するんだ！

(シイサイド)

……………ここにお兄ちゃんが……………『無血の死神』が……………。

私は神器を握りしめる。私には戦う力はない。けれど、他者を支える力には長けてい
る。

「サイト、お願い」

「さっそく仕事は英雄退治かよ。ま、全力でお相手するだけだな」

不敵に笑うサイトに続いて私は彼のいる場所に向かう。

第九十七話

「ふーん、ふふーん♪」

鼻唄を歌いながらオレは杏子を連れて歩き回っていた。オレの役目は千香達の退路の確保だが、接敵したら殺り合ってもいいそうさ。

うむうむ、素晴らしきかなシンプル・イズ・ベスト。

「呑気に鼻唄歌ってる場合かよ」

「まだ強いのが来ないから別にいいだろ？」

「まあ……………それもそうか」

杏子の服装はファンタジーの世界のギルドとか着そうな赤を基調にした動きやすい格好である。スカートは少し長めだが、たまにあるチラリズムにドキドキしてしまう。

「……………なんかお前、エロくなってるない？ たまにアタシの胸とか見てくるし」

「杏子がかわいいからいけない。杏子のおっぱいが大きいからいけない」

「後半いらねえだろ！」

Dくらいある胸を腕で隠すがより強調していることに彼女は気づいてない。

「ヤバい……………ムラムラしてきた」

「ちよつ、マジかよ!? こ、ここでスルのかよ!？」

「え? シたいの?」

「スルわけねえだろ! 時と場所を考えろ!」

「まあ半分冗談はさておいてー」

「残りの半分は本気!？」

ツツコミを無視して魔力感知で辺りを探る。こちらに向かつてきているのは二人。

あんまり強くなさそなのに見つかつたかな?

「というわけで杏子さんや、どうしますか?」

「どうするもこうするも倒して、財布抜き取つて、デバイスからソイツのダチ達へイタ電

連射する」

「わかっているじゃん。ちなみにメールで『私はロリコンロリコンロリコンロリコン

シヨタコン』というのが抜けている」

「……どうでもいいけどアタシも毒されているなあ」

ため息を吐く彼女に苦笑しているといきなり魔力弾がこちらに飛んできた。

それを手で握りつぶして、撃ってきたヤツを睨み付ける。

「オイオイ、いきなり撃つてくるのが管理局のポリシーか?」

「違うわ。うちの教官のポリシーよ」

怖いなその教官。

橙色のツインテールと青髪の女が構えていた。いつでも戦闘体勢ってことか？

やれやれ……………たかだか魔導士の二人が逃げることなく立ち向かっていくのはどれだけ無謀なのか知らないのか？

「ま、とりあえずはじめまして。オレが『無血の死神』。魔導士の天敵様さ」

「ツ！ やつぱり……………あんたがツ」

なんか知らないけど橙色のツインテールが歯を食いしばりながらこちらを睨み付けていた。

……………え？ オレ、なんかした？

「いや色々しただろ。向かってくる魔導士達から魔法を奪い取り、再起不能または亡き者にしてるだろ」

「仕方ないだろ。鬱陶しいくらい傲慢で正義とか口ばつかりなヤツらだったし」

「まあ確かにそうだけど…………」

「そんなわけで杏子さんや、亡くなった人に一言」

「Amen」

「無駄に発音いいな」

「現役シスターナメんなよ」

「あんた達ふざけてるのツ？」

軽口を言っているとなんかツインテールに怒鳴られた。ふざけてるも何もこれがオレらのスタンダードだし。

「んで、お兄さん達になんの用なの？」

「あんたを捕まえにきたに決まってるでしょ！」

「捕まえについて……お兄さんのこと知らない、はずはないでしょ？」

殺気を当てると彼女達は震えながらも失神を耐えた。ほほう、これは見所ある根性だ（と）。

「合格だ。オレへの挑戦権を認めよう」

オレは神器を召喚し、構える。

「死ぬ気来い。殺しにかかって来い。でないと——

——死ぬのはお前らだぞ？」

杏子はやれやれと肩を竦めていたが気にせずオレは構える。

油断しないし、手加減しない。敵は抹殺あるのみ。

(はやてサイド)

戦闘が始まってから三十分が経った。ユーノくんを含めた有名人達はメイド服のミニさんのリボンで縛られておった。

………そのとき何人かが縛られて変態化したのは気のせいやと思いたい。

てか、早ようしないと外の連中がやられてしまう！

私はそう思いながら周りを見て考える。

「ふふ、いつまで逃げているのかしら？」

「ちよつとは隙を与えてほしいね！」

「ダーメ♪ お姉ちゃんとまだまだ踊りましょ？」

なのはちゃんはママさんによつて思い切り翻弄されておった。火力ならなのはちゃんが上だけど手数が多いから攻撃に移れないらしい。今さらやけどメイド服のままです戦えるのはどういふことやろ。

「なんで………なんでなの………！」

「いやー。一応、あの人のお世話になってるからね。その恩返しってところかな」
「だからってこんなことあんまりだよ……………」

「じゃあ、隅でジツとしたら？ わたしはドクターの指示に従うだけだし」

「ッ……………」

フェイトちゃんはフェイトちゃんで因縁のある女と戦っていた。顔は仮面で見えないが髪が金髪なので、いつか見つけたら捕まえたと思う私である。

「さあさあ、ダンスの時間だよ！」

ティヒヒヒヒと笑いながら白いドレスを着たまどかちゃんが打ち上げた魔力矢が雨のように降り注ぐ。

ガジェットや来席客にはお構い無しかい！

「ならば—— 『マグネットマッスルウウウウ』!!」

衛くんは集束魔法で魔力素を集める。変な魔法名やけど、なのはちゃんのスタラに次ぐ強力な砲撃魔法や。

せやけど、今回は砲撃を撃つんやない。

魔力素に引かれて魔力矢が衛くんを集中放火した。

客席や私達を守るために自分の身体を張ってくれているのだ。

「筋肉に不可能はない！」

「あう……全て防がれちゃった」

「隙ありや！ 彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、『ミストルテイン』！」

私は七本の石化の槍を放ち、まどかちゃんの動きを止めようとする。しかしまたしても、半透明の壁に遮られてしまい、魔法が打ち消された。

「くつ、千香ちゃんか！」

「正解正解♪ とういかまずボクから潰すべきじゃね？」

「やつかましいわ!! じゃあ、なんやねんその滅茶苦茶張られたバリアーは!!」

千香ちゃんがいるところは世界に隔絶されたかのように半透明の壁が多数張られておる。さつき『デアボリック・エミッション』を放ってみたが、バリアーの先にいる千香ちゃんのところまで届かないし、干渉できへん。おそらくやけど、千香ちゃんがいるところは魔力素なんてない遮断された空間や。

酸素など人間が生きるのに必要なモノは通気されるけど、それ以外は遮断される厄介なもんや。

「そもそもそんなにバリアーが張れることがおかしいで！ どんだけ魔力があんねん！」

「女は秘密を重ねるごとに変態になっていくのさ！」

「そうなのか？ はやてよ!!」

「騙されるなや、アホ旦那ッ。つーか、美しさやろ普通!」

度々、衛くんが千香ちゃんに騙されてまどかちゃんへの攻撃の手を緩めてしまう。地味に心理戦を持ち込むなんて最悪な状況や!

「ぬ? はやてよ。ちと聞きたいことがあるがいいか?」

衛くんは何かに気づいたかのように背中合わせで私に話しかける。

「なんやねん。今めっさ忙しいねん。」

「いやまどか殿と千香殿に繋がってるラインらしきモノが見えたのだが……そんな魔法があるか?」

「いや聞いたことないで。というかそんな魔法初めて………待てや。それホンマか?」

「ああ、千香殿の背中からラインらしきモノが伸びており、それはまどか殿に繋がっているのだ」

「まさか………その魔法は………」。

「思い出したで。『団結せよコネクト』やな!!」

「きつとそうや。アインスから聞いた話やとかつて彼女と戦っていたときに使った魔法や。魔力供給させる補助系の魔法やったはずや。」

「我が友の魔法か！　しかしなぜ千香殿も……………」

「ソラくんだけが使えるとは限らないんや。ただでさえ千香ちゃんとソラくんは修羅場を潜り抜けた猛者やで？　戦いで使えるありとあらゆるを覚えているのは当たり前や」

私の答えを待つてましたとばかり千香ちゃんはパチパチと拍手してきた。

「いやー名推理だね♪　ちなみにまどかちちゃんの魔法量は無尽蔵だから持久戦じゃあ、君達が勝てるのは絶対に無理だから♪」

ナメられとる……………腹立つな、ホンマ。

せやけど千香ちゃんの言うとおりにや。まずまどかちちゃんを倒さなきやあかん。

だけどもどかちちゃんに攻撃すれば千香ちゃんのバリアーが邪魔するし……………。

「いやはやてよ。千香殿のバリアーにはいくつかの制限が見られた」

「どういうことや？」

「彼女のバリアーは多く張れば張るほどその強度も弱くなっている」

「せやけど魔法じゃあ……………」

「魔法であればな……………。ならば物理攻撃ならばどうだ？」

確かにそうや。千香ちゃんのバリアーは魔力素を遮断することで打ち消すモノやと推測できる。だから魔法は効かないと考えると——試したことないのは物理攻撃や。

………試してみる価値はある。

「はやては我に何も近づけさせるな！」

衛くんはまだかちゃんへ飛び込む。またしても千香ちゃんのバリアーが衛くんの拳を遮る——

ガシャアアン！

——ことなくバリアーを破壊できた。まだかちゃんは驚愕して衛くんの次の攻撃に反応できなかつた。

「くらえ、『マッスル砲』!!」

至近距離からの『マグネットマッスル』で溜めた集束砲撃魔法を放つ。

「きやあアアアア!!」

悲鳴をあげて地面へ叩きつけられたまだかを好機と見て、私は氷結魔法の詠唱を唱える。

「ほのしろ灰白き雪の王、銀の翼も以て、アードテム・デス・アイセス眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹——

『氷結の息吹』!!」

小規模やからコントロールが難しかったが上手く発動してまだかちゃんを氷付けに

できた。

「あちやー……………これじゃあ、ボクの魔力がもたないや」

「よし！ 今ではやて！」

千香ちゃんの多数のバリアーが消失したときを狙って私は砲撃魔法を放つ。

千香ちゃんがその魔法に飲み込まれてしまい、姿が見えなくなった。

「ふう……………なんとか倒せたか」

「全くだ。しかしこれで我が友と戦うヤツらの増援に——ッ!!」

衛くんは咄嗟に私を小脇に抱えて横へ飛んだ。

何事や、と言おうとした刹那。私がいいたところが魔力矢で吹き飛んだ。

……………嘘やろ。氷付けにしたまどかちゃんがもう出とる。

しかも優しい紅の瞳が金色に変わつとる。

「氷付けしたはずやで……………」

「ティヒヒヒヒ、あの程度の拘束はちよちよいのちよいだよ！」

「どっかの洗剤のCMのように言われるやなんて……………！」

「どうでもいい。それよりもはやてよ。……………あっちも無事らしいぞ」

衛くんが指をさすところにポロポロになったドレスを着たセクシーな千香ちゃんが

いた。ポロポロなのはドレスだけでそれ以外の白い肌は無傷やった。

「神器使い達は化け物かいなッ」

「いやいや、千香ちゃんとソラくんが例外なだけだよ。普通ならあれを受けたら動けなくなつてたよ?」

「そういうまどかちゃんはどうかやって私の氷結魔法を解いたの?」

「ティヒヒヒヒ、それは今の私は人間じゃないからだよ」

人間じゃないやつて? どういうことや、と聞こうとしたら代わりに衛くんが答えた。

『概念化』かつ」

「正解♪ 肉体を概念化させて氷付けから解放されたのでーす」

ニコニコ笑うまどかちゃんに私はゾツとした。報告書から知つとつたけど、人間じゃないという言葉に私は目の前にいるのは普通の女の子には見えなくなつてしまったのだ。

「はやてよ、怯えるな」

「ま、衛くん……………」

「確かにまどか殿は人間ではなくなつたかもしれない。しかし、我が友の大事な人であり、我が友の友。怯える必要はどこにある。そして、私は彼女達や彼を止めるために全力を尽くすのみだ」

……すごい。すごいで、衛くん。その勇気が臆病風から私を守ってくれる。

恐れるな。

前を見ろ。

背中を向けるな。

目の前の相手だけに集中するんや！

「へー、私が怖くないんだ？」

「当たり前じゃん、まどかちゃん。彼と彼女はソラが認めた友達だよ？」

嬉しいこと言ってくれるやないか。とつくにソラくんは私達を認めてくれてたんや。

「ならば私はあなた達の勇気を試そう」

「ならばボクは君達の信念を試そう」

「だからとつと示してみせろ、弱者達よ」

私達の戦いはまだ終わらない。

(アオサイド)

そんなこんなで、自分のターン！

さつさと『無血の死神』に遭遇したティアナ達の増援に向かわなければならないのに、ガジエツト達が邪魔をしてきた。

てか、なんかいきなりガジエツト達が合体して約二メートルの小さな機動戦士になったのは完全に遊び心だろ！

しかも何気なく強かったし！

『くっ……………このキングガジエツトを倒すとは見事。さあ、持っていけ。我がビームサーベルをッ』

「いらねえよ!!」

魔法で完全に破壊した。『青春してるかお前らーッ!!』とどつかのゲジマユみたいなセリフを残して逝った。

……………もはや最初からカオスだった！

この気持ちも隊長に伝えたい！

「ヴィータ隊長！ そっちはどうです！」

『駄目だ！　なんか変態が現れてティアナのところへ行けねえ！』
「変態？」

ウインドに移るヴィータ隊長の映像をよく見ると、なかなかイケてるおじ様写っていた。見た目からして三十路後半くらいか？

『ハアハア……お嬢ちゃん、おじさんと一緒にいこう』

訂正。変態だ。しかもフェイトさんと同類の。

「んじゃ、その変態の相手は任せました」

『ちよつと待てエエエエ!?　ティアナよりこっちの方を応援に来てほしいんだけど！』

「無理です、嫌です、却下です。なんか知らないけど、変態という存在を見ていると鳥肌が立ちます。嫌な記憶が蘇りそうです」

『忘れた記憶に何があったんだ、お前!?!』

『見ろ、このゼストの素晴らしきマッスルをオオオオオ!!』

『ぎやアアアアこいつ衛の同類かよオオオオオ!?!』

ロリコンで筋肉信者とはなにもその究極のレットル。もはやヴィータさんは助からない。

……さらばヴィータ。今度はまともな人と出会えよ。

ま、三秒で忘れるけど。さてとヴィータさんを生け贄にしたからには自分だけでもティアナのところへ向かわなければならぬ。

キングガジェットは現れることなく、「I, l l b e b a c k……」と呟く筋骨隆々なオツサンが歩き回っていたが攻撃してこない辺り無害だと判断して無視した。

そしてやつとティアナがいるポイントに着いた。スバルもいる。

彼女達と対峙しているのは一人の青年と紅いドレスの女性だ。

「ッ……………」

肌で感じる殺気。幾度の戦いを駆け抜けた猛者が持つモノだ。

……………駄目だ。あれは自分達が相手してはいけない。

隊長達がいらない今、ティアナ達を撤退させるべきだ。

自分は声を出そうとした直後、ティアナが魔力弾を撃ちやがった。

「あんの馬鹿がアアアア!!」

自分が駆け出したとき、ティアナの魔力弾はあっさり回避され、そこへスバルが『無血の死神』に拳を放つ。

しかしそれはあっさり受け止められ、今度は『無血の死神』の反撃が放たれた。

スバルがディフェンスを張るが、自分にはその拳が魔力で強化され、一種に凶器に
なっていたことに気づいていた。

自分はスバルに何重の『跳ね返せ』ミラージュを張った。

—— 拳は普通に殴る程度になり、スバルは吹き飛ぶ形で済んだ。

危ない。今のはスバルの顔面が吹き飛んでスプラッタになるところだった。

「なにやっつてんだバカ二匹！ 今のシールド張らなきや顔がミンチになっていたぞ!!」
「うるさいわねッ。あんたは黙ってなさい！」

神器を召喚したとき、ティアナは自分の言うことを無視して再び魔力弾を撃つ準備を
していた。

チツ、今のティアナは使い物にならん。司令官が冷静じゃなければただのうるさい
ギャラリーと変わらない。

とは言え、接敵したからには逃げられない。とりあえず神器を召喚した自分はこの場
を抜ける策を——

ザシユツ

「あ……れ……？」

腹部からナニカが生えてる。これは………や、り……？」

「ワリーな。コツチもコツチで事情があるんだ。一回死んどけ」

さっきの紅いドレスの女性がどうやら自分を刺したようだ。それから意識が遠くな

り

—
何もみえなく……なつ、た……

第九十八話

やれやれ……杏子も容赦ないこと。まさに一撃必殺だな。

血がたくさん流れる黒髪少年にオレは同情した。

「このオオオオオ!!」

「よくもアオをオオオオオ!」

杏子に向かって拳を振るう青髪と魔力弾を放つ橙色のツインテール。

そんな攻撃をヒラリヒラリと避け、杏子は不敵に笑った刹那——花びらが開くよ

うな連続突きの応酬で反撃した。

悲鳴をあげて青髪は吹き飛んだ。デバイスが張った咄嗟のシールドで助かったな。

「オイオイ……この程度か? これじゃあ、ソラどころかまどかですら勝てねえぞ」

「うるさい! よくもよくも……!!」

はあ………血走った目で睨まれても怖くないんだけど。てか、こいつを死なせた原

因はそのツインテールにあるんだけど。

そう言うときはやはりツインテールは激昂した。

「なんですって!」

「だってそうだろう？ 仮にもSSSSとSSSクラスの化け物達をたつた二人でしかも新人でどうにかしようとしているのが間違いないんだよ。普通は撤退するのがセオリーだ。それをそのツインテールは戦いを望んだ」

「違う……………」

「オレは襲いかかるヤツには容赦しないが、それ以外はスルーだ。面倒だから相手しない。今までだってそうだろう？ だいたいが返り討ちにされたって話を聞いてるだろう？」

「ちがう……………」

『攻撃してきた』。ということとは敵対する意思がありと判断してこちらから先に手を打たせてもらったけど。こいつも哀れだなー。なんせ、唯一冷静になってどう撤退しようか考えていたのに……………不憫なもんだ」

「違う……………!!」

ツインテールが自らオレに向かって突貫してきた。遅い格闘技にオレは欠伸をしなから次に放たれた蹴りを掴み、木へ叩きつけた。

「よくもティアをオオオオオ!!」

青髪がまたしても突貫してきた。やれやれ……………血迷って。

「クロスミラージュ！ カートリッジ!!」

あん？ オイオイ、カートリッジって高町達が使っていたドーピングじゃねえか。

それを新人が四発デバイスに打ち込むなんて、無茶じゃねえのか？

ただでさえ、あれは打ち込めば打ち込むほど負担がかかるし、コントロールも難しくなるそうだし。

「まあ、負担は大丈夫か。素晴らしきかな、時代の進歩」

「くらえー！！！」

放たれた多数のホーミング魔力弾。まあ避けるまでもなく、全てを開く音神器で防いだが。

「あ……………」

ツインテールがコントロールを誤って魔力弾が青髪に向かっていく。彼女も気づいた頃には既に目の前だった。

やっぱりバカだ、こいつ。自分の力量をちゃんとわかってないから——

バシユン！

——風が吹いた。誰かが通りすぎたのだろう。そして青髪は無傷だ。魔力弾は何者かによって弾かれ——いやキャンセルされていた。

「……………どういうことだ」

言葉が思わず口に出た。

なぜこいつが『アレ』を持っている？

ヤツが『アレ』の使い手だったのか？

いや、首飾りのアクセサリーがいつの間にか消失している。つまり——そういうことか？

「……………なるほどなー。オイ、杏子。お前、知っててこいつを先に眠らせたのか？」

「さーね。ま、アタシは何も知らないから」

嘘つけ。口笛吹いてこっちを見ないのが何よりも証拠だ。

そう青髪を助けたのは先ほど杏子に刺された黒髪少年だ。血はもう流れていない。恐らく止血されたのだろう。

そして、手にはカギのような真つ白な剣が握られていた。

「『全てを開く者』——それがお前の本来の神器ってことか？」

後で名前を覚えてくれよ、黒髪少年。お前のこと気に入ったようだ！

オレは黒髪少年に向かって斬り込みにかかった。

黒髪少年は青髪を突き飛ばし、オレの斬撃を受け止めた。グイグイと押せる辺り、この黒髪少年は力が強くないようだ。

しかし押し込みすぎて黒髪少年が引いた直後、オレはバランスを崩して前へ倒れかけた。そこを狙ってヤツは斬りかかる。

その斬撃をオレは防ぎ、つばぜり合いに持ち込んだ。

「なかなかやるじゃねえか！」

「……………」

「戦いになると静かになる口か!？」

オレがそう言うのとヤツは至近距離から魔法を放とうとする。放たれた魔法を後退することで回避したが、黒髪少年は追撃に斬り込んできた。

それを回避、受け流し、持久戦に持ち込んだ。すると、ヤツの足取りが歪になってきた。

「その神器は燃費が悪いからな。使いすぎるとすぐにバテてしまっぜ？」

「……………」

「はん、それでも前へ………か。ま、らしいって言えばらしいが」

オレは黒髪少年に問答無用に腹部へ拳を打ち込んだ。

「圧倒的な存在には意味がない」

くの字に身体を曲げて少年は地面へバウンドしていき、倒れたままとなる。ま、よくがんばったもんだよ。

「さてと——さっさと殺すか」

オレは神器全てを開く者で今度こそ二人の少女に向けて斬りかかる。

「失礼。ここで彼女達を殺さないでいただけるかね」

丁寧な物言いでオレの斬撃はワイシャツを着た男の剣で遮られた。

「なんだ、お前は」

「ワタシか？ ふむ、何者かどうか考えたことがなかったな……………」

一端後退すると男はブツブツと呟き始める。

吸血鬼やれ、エーデルワイス家の召し使いやれ、執事やれ、どうでもいいことばかりだ。

いい加減ウザくなってきたな……………。

「……………オイ」

「はっ。すまない……………。どうやら考え込んでしまったようだ。しかし、何者かどうかと聞かれたことには答えられそうだ」

その男は名乗る。

「ワタシの名はサイト。異世界ではとある吸血姫の執事であり、虚無とその使い魔の友だった男だ」

……………やれやれ。一刀と同じ異世界の住人か。こうもあつちに異世界の住人が集まるとか女神から全く聞いてないぞ。

どうなっているんだ？ これは……………。

「ま、どうでもいいか。さっさと——」

「やっと見つけた」

唐突に声が聞こえた。銀髪のおさげの女がオレを見て嬉しそうに笑みを浮かべていた。

はて、どこかで会ったか？

「サイト、彼を捕まえて」

「捕まえられる保証はどこにもないぞ。なんせ、相手は英雄だからな」

オイオイ、勝手に話を進めるじゃねえよ。オレがそう文句を言うとその女はやっとオレを見て話し始めた。

「久しぶりね」

「オレはお前を知らない」

「覚えてないの？」

「覚えてるも何もオレはお前に会ったことすらない」

オレが素っ気なく答える。しばらく顔を伏せていたが彼女は意を決して顔を上げた。
「私の名前は一ノ瀬、一ノ瀬シイだよ。お兄ちゃん！」

……………なんだと？

思い出すのはあの頃のオレ。

現実の辛さを知らず、無知にも救いのヒーローを目指そうとした愚かなオレ。

……深く思い出せば出すほど――

「やつと会えたね、おにい――」

「ッ！」

オレは一ノ瀬シイに斬り込む。それはサイトの剣によって阻まれ、後退する。

「なんのつもりだ、『無血の死神』。妹をなぜ殺そうとした？」

「ムカついたから。それ以外何がある？」

それを聞いて一ノ瀬シイは驚愕した。当然だな。兄であるオレが妹である自分を殺そうとしたのだからな。

「な、なんで……」

「オレにとつて『一ノ瀬ソラ』は忌むべき過去だ。憎悪すべき名だ。だから許せないんだよ……』『一ノ瀬ソラ』として見るお前が!!」

そうだ。思い出した。

こいつは前世で実母あのみの隣にいた小さな女の子だ。

子どもの頃からオレは許せないでいた。拒絶した実母のことを。

だからオレは『一ノ瀬』を捨てた。だってそうだろう？

希望をもっていた幼いオレが会いたい想いでやっと会えたのに、あの女は拒絶し、化け物扱ひしたのだから。

オレを化け物として見たあの女の目は今でも思い出せる。それを思い出すだけでオレは『一ノ瀬ソラ』だった頃のオレは嫌な想いになる。

「お、お兄ちゃん……………」

「お前に『兄』と言われたくない。お前がそう呼び続けるなら、容赦しない…………」
射殺すくらいに睨み付けるとおさげの女は愕然として膝についた。

ふん、そのまま絶望している。

とにかく今は目の前にいるこの男をどうするかだ。

「…………ワリイがソラ。どうやら時間切れらしいぞ?」

杏子がそう言うとおレの足元から転移の術式が現れる。なるほど成功ってことか。

「逃げるつもりか?」

「いや、どうやらオレ達の目的は果たされたみたいだな。悪いが撤退させてもらう」

「なんだと? ……………まさか!」

サイトは気づいたようだ。オレの隣にいる杏子が煙のように消えていく。

そう、オレの隣にいる杏子は分身だったのだ。

本物は既に内部に侵入しており、スカさんが欲してたモノを手に入れている。

「くっ…………お前と内部にいる神器使いは囷だったんだな！」

「そゆこと。ま、みんなは元から退路なんて作るつもりでオレをここに送ったわけじゃないみたいだが…………」

「どういうことだ？」

オレはチラリと倒れている黒髪少年を見て「さあな」と答えた。

スカさんと千香め……………こいつを覚醒させるために送ったな。

まあいい。とにかく一刻も早くここから帰りたい。

おさげの女がオレをすがりつくような目で見られているだけで嫌な思い出を思い出すだけでなく、全身に不快な感じがする。

……………自覚はなかったがオレは過去の自分をかなり嫌っているようだ。

まあなんにせよ。オレ達は目的を果たして撤退した。

(衛サイド)

我らは千香殿にネタバレされ、彼女達が撤退した後、すぐに盗まれたモノを確認した。

ロストロギアの類いは盗まれておらず、宝石の類いも手はついていなかった。

盗まれたのは古代の偉人が使用していた布切れだ。

……………彼女達はこのような骨董品としても価値もないモノを盗んで何がしたいのだ？

パチンツ!!

「……………なんで二人だけで『無血の死神』に挑んだの？ 一歩間違っていたら死んでいたんだよ？」

高町がティアナとスバルを叱っていた。当然のことだ。

彼女達は無謀にも『無血の死神』に挑んだのだから。

我でさえ単身では危険な行いだと言うのに。

全く、身を弁えてほしいものだ。

しばらくティアナは茫然自失の沈黙な状態で、スバルが彼女を庇うような会話が続き、ふとティアナが口を開いた。

「…………アオは、アオは無事ですか？」

「……………正直、無事とは言いがたいよ。元々、彼は身体が弱いみたいで慣れない神

器の発現で、魔力が大幅に消費して衰弱していたよ」

そう。アオは魔力枯渇で衰弱していた。今はシャマルが彼の治療に当たっていた。

目覚めるとしたら明日以降になるかもしれないが、我としてはすぐに問いただしたいことがある。

「高町、説教はそこまでだ。今は我ら隊長陣が議論すべきことは他にある」

「せや、ティアナの暴走よりこの議論せなあかんことや」

しづしづ高町は従い、我は隊長陣を連れ、会議室に入った。

そこでウインドを展開する。内容は『アオ・S・カナメ』についてだ。

「スラム街で倒れていた次元漂流者……………」

「然り。フェイトの言う通り、ヤツは次元漂流者だ。ゆえに我が友が使っていた魔法が使えると推測できる。問題はこれだ」

我が見せたのはヤツの神器だ。それを見た全員は驚愕の顔を浮かべた。

「こ、これって……………」

「嘘だろ……………」

「……………」

「ありえない……………」

「マジかいな……………」

「……………」

上からハラオウン、ヴィータ、高町、シグナム、はやて、一ノ瀬殿の順だ。

そう……これは——

「『全てを開く者』。よもや二人目が現れるとは思わぬかった」
厄介事にならなければよいが……………」。

第九十九話

(アオサイド)

目を開けると、そこは綺麗な青空が広がる湖の上だった。自分は水遁の術が使えたのか、水の中には沈むことはなかった。

……………綺麗な青空だなあ、ホント。

でもこの景色……………どこかで……………。

自分はふとそう思ったとき、誰かの泣き声が聞こえた。

「どうして……………」 「なんで……………」 とすすり泣く誰かが目に写る。

泣いているのは小さな少年だ。黒髪で青い瞳の……………え？

自分に似ている……………？

「お前はいつたい……………」

自分はそう呟くと少年は自分に振り返る。やっぱり自分にそっくりだ。

「お兄ちゃん……………オレは間違っていたのかな……………」

「間違っている？　それが泣いてる理由か」

「うん……………あのね——」

ポツリポツリと彼は語り始める。彼は救いのヒーローになりたくて不殺を誓った。

しかし環境がそれを許さない。戦争でそんな信念など無意味だと思い知らされたそうだ。

——彼の恩師が死ぬという形で。

彼の理想は間違いではない。誰もが望んでいるモノだ。

しかし叶わない、実現できない——それが『理想』

厳しい現実の前では無に還らされたのである。

「……………」

無言になる。彼の質問には明確な答えがない。いや、違う。

答えはあるが正しいと断定できない。

まあ人の答えは十人十色だ。彼の求める答えが、自分が出した答えが合うとは限らないのだから。

『さて、答えは得たかい?』

「ッ!」

自分の背後には同い年の男がいた。顔は————ない。真つ白な身体でかろうじて人間だとわかる変な存在だ。

「お前は……」

『僕が何者かなんてどうだっていいだろ? それよりも彼に答えを出してあげなよ』

真つ白な存在に勧められて自分は少年に向き合う。

答えは————出せない。

自分が出す答えがそれでナニカが決まってしまうし、そんな気がしたのだ。

『やれやれ………どうやらまだまだ、ここに来るのが早かったみたいだね』

「どういふことだ?」

『君は既に知っているさ。だから僕は答ええない。答えてあげない。ヒントは既に出ているからね』

真つ白な存在が指を鳴らす。すると、身体が徐々に湖に沈み始めたではないか。

「ここはこいつの世界なのか!」

『また会おうよ、〇〇くん。今度は君の答えを————君が導いた道をこの少年に教えてやってよ』

意識がなくなる前に真っ白な存在が笑っていたような気がした……………。

☆☆☆

退院したある日、管理外世界にてロストログアが紛れ込んだらしい。それを我らが隊長はやてさんがその任務を承り、その世界に行くことになった。

てか、承けたまったらというよりぶんどった感じだ。「休暇をくれやアアアア!!」とぶちギレる彼女に敵う上司はあまりいない。

そして自分はどうと——

「なぜ退院前の自分はベッドに縛られて搬送されてるのでしょか………」

「仕方あるまい。貴様を一人にすればまた女性に迷惑をかけるだろう」

「あれはスキンシップですよ、衛さん」

「たわけ。あれはどこからどう見てもセクハラだろうに」

「ばんなそかな。とは言え動けない自分はドナドナ気分で次元船に連れて行かれるのだった。」

「シキ、シキ!! あの巨大な塊はなんなのだ!」

「次元船って言われてるモノだ。しかし興味深い……。はやて、あれを解体していいか?」

「なんであんたは興味もつたモノを解体したがるんや!」

なお、シイは残り、キリトはアスナに縛られてミッドにいる。唯一付いてきた一誠は

食事に夢中だったことを追記しておく。

……………混沌化してきたなあ。

(??:サイド)

地球にたどり着いた機動六課は現地の協力者であるアリサ・バニングスと月村すずか
と出会った。隊長達は彼女達との再会を喜び、紹介していないメンバーを紹介してから
彼らはバニングスの別荘に向かった。

そこは森に包まれ、湖がある自然豊かな別荘だった。エリオとキャロとスバルはは
しやぐ中、アオは「子どもだなあ」と呟く。

まあそれはさておき、と彼はそう思いティアナに声をかける。

「……………何よ」

「なんか落ち込んでいると思ってな」

「なら、放っておいてよ」

「無理だな。なんせ、自分はお人好らしいから」

沈黙。それから会話が續かず、彼と彼女は湖を見ているだけだった。

「スバルから聞いた。『無血の死神』を怨んでいるって」

「ツ……………あのバカ」

「あいつだつて自分に話すまで迷っていたさ。わかつてやれよ」

「……………それで復讐をやめろと？」

「さあね。別に止めるつもりはないさ」

アオの言葉にティアナは目を丸くする。てつきり止めるものかと思つていた。

「自分はティアナの意思を尊重するよ。でも覚えてくれ。『復讐』は必ず悲劇をもたらす……………つてね」

「どういふことよ？」

「んー、これは先生から聞いた話なんだけど、例えば誰かが復讐を誓つて達成したとしよう。すると復讐された人物の親族は復讐した人物に報復する。それから報復した人物は今度は報復された人物の親族に復讐される。つまり、復讐つてのは『無限に續く悲劇』なんだ」

「だから必ず悲劇が起きる……………か」

「そゆこと。ま、赦す赦さないのはティアナの自由さ。復讐するなどは言わないけど……………忘れないで。ティアナは一人じゃない。ティアナの周りには仲間がいるつて

ことをな」

アオはそう言つてテイアナから離れて子ども達の水遊びに加わつた。残つた彼女は
眩く。

「……どうすればいいのよ」

今の彼女は闇の中。

されど彼女の周りは光だ。

いつか彼女がそこから救われることを祈るアオだつた……。

(ソラサイド)

久しぶりに地球にやつてきたオレこと神威ソラは欠伸をしながら翠屋にいた。どう

もまどか達が「ケーキが食べたい。いつ行くの？ 今でしょ！」とノリノリにお願いしてきたため、ケーキを買いに来たのである。

ついでに気分転換も来ていたのであるが、スカさんからのお願いもある。どうも最高評議会の連中に例の古代の遺物を強制的に取られたらしい。不機嫌な彼は地球に落ちたロストロギアを回収して嫌がらせに使うらしい。

まあ、これが飲み終わったら探しにいくとするか。

「むう、このブラックは苦い……。ミルクはない？ マスター」

「お子ちゃまね、千香。この苦さがたまらないのよ」

「ぬぬぬ、なんだこのいいいようなない敗北感は……………」

「砂糖を入れてるあんたが言うべき言葉じゃないわよ、ほむら」

取り巻きは知つての通りのこの二人。時間停止のほむらと究極の変態の千香、そして音の使い手のさやかである。

つい、この間さやかが考えた超音波攻撃は効いた。平衡感覚が掴めなくなるという恐ろしさを直に感じたからな。

「相変わらずだね、ソラくんは」

「相変わらずですよ、マスター。てか、いつノエルを雇ったのですか？ あの变態はある意味敵ですよ。店を乗っ取ってイロモノ喫茶店にされますよ。実体験のあるし」

「はっはっはっ、大丈夫だよ。彼女は彼とセットでアルバイトしているからいつも暴走したときは彼が仕止めてるから♪」

「笑顔でとんでもないこと言ってるなあ」

ここでノエルに再会したときは驚いた。メイド服を着る辺りは相変わらずだが、ランダムでどこかへ放浪するこの変態女が一つの世界にとどまるなんてありえない。

まあ、士郎さんの話から察するに貰い手が見つかったということだろう。

おめでとうノエル。そしてババアの年齢なのに肌年齢に騙されて、貰らってくれた男性に幸あれ。

「ノエルじゃなくてエールだよん、ソラっち」

「また偽名か?」

「ううん、本名。探し物が見つかったから元に戻そうと思ったの。きや☆ 言っちゃった♪」

「ババアが言うときモイ」

「うにゅー……………ババアなんてひどいー。ほら、見てよ。このピチピチ潤いのあるお肌をー」

「見た目が二十代なのは士郎さんと桃子さん並の年齢詐欺だろ」

はあ……………なんでこいつがいるんだよ。面倒なヤツに出くわした上に相方の二人

(ほむらとさやか) はくだらない戦いで火花を散らしている。

オレのライフは^{SUN値}ゼロだよ……………。

「ただいま、お母さんお父さん！ 今日私の——」

ん？とカウンターから振り返るとそこには機動六課のみなさんがいた。画像でしか見たことないヤツや名前がわからないヤツもいる。

まあ、気にする必要はないと思いコーヒーを飲むことにした。

「なんで『無血の死神』がここにいるのよ！」

「うるせえなツインテ。喫茶店では静かにするのがマナーだろ」

「犯罪者のあんたには言われたくないわよ！ てか、なんで呑気にコーヒーが飲めるの!？」

「わっちのティータイムは何人たりとも邪魔はさせぬ」

「腹立つ！ なんか腹立つから殴らせろオオオオオ!!」

乱心するツインテを青髪女が羽交い締めにして止める。

がんばれー。オレのティータイムはお前にかかっているのだー(棒読み)

「余裕ね、ソラ」

「これがスタンダードになってきたところあたし達もぶっ飛んでいるのかねー」

「安心しなさい。あなたは元からよ」

「やかましい。人外確定女」

「なんですつて、このネトラレ女」

バチバチバチバチ!!

火花を再び散らす二人に千香は「キャットファイトフラグ、キタコレ!」とカメラモードでいつでもハプニングが起きても撮れるようにしていた。

相変わらずである。

「離してスバル! 離さないとあんたのおかずに生クリームのオンパレードをするわよ!」

「やめて。おかずに罪はないよ! 出来立てホヤホヤのおかずくんを生クリームで汚さないで!」

想像しただけで吐きそうになる凶だな、そのおかず。

てか、いい加減に静かにしてくれないかなー?

優雅は一時が台無しじゃん。

「うっせーぞオオオオオ小娘共がアアアアア!!」

銀のトレイが二人の脳天に落ちる。あまりの痛さに蹲る。

銀のトレイで叩いたのはオレより一つ下くらいの金色の瞳で茶髪の少年だ。

「ツ〜！ 何すんのよ！」

「やかましい。こちとら接客業が売りにしてんのにこうもうるさくされたら商売できねーよ。騒ぐなら外でやれ、馬鹿共」

「あ、アンタ何者なのよ！」

ツインテの問いに少年は親指を自身に向けて答える。

「翠屋の従業員の五木雷斗。次期店長様だ！」

「そうなの？」と土郎さんに聞くと「そうだよ」と笑顔で答えた。

やったね。これで二世代目が確実にできたね、翠屋。

☆☆☆

さて、混沌化しかけたところで五木雷斗の活躍により治まった。ちなみにオレ達を捕まえようとしてきた高町やフェイトだが、雷斗の脳天トレイぶち抜きでブツの刑叩く刑により中断させられた。

「なんでもオレ達が犯罪者だろうがなんだろうが客として来ている限り公私混同は許さないとか。」

「……………普通は私的なことで言われる言葉なのになー。てか、高町達の頭がとても痛そうに見えたよホント。」

「それから大人しくなって、休憩になったところでオレと雷斗と四季、そして黒髪少年の四人は席についていた。」

「んで、テメーらは何者だ?」

「犯罪者で神器使いだ」

「錬金術士で神器使いだ」

「奇遇だな。俺も喫茶店の従業員で神器使いだ」

「なにこのカオス!?!」

八神がツツコんだ。いや確かに神器使いのみが共通点でその他がバラバラだ。

てか、錬金術士ってアレか? 合成魔獣を造り出すアレか?

「よく知ってるじゃん。そうだ、俺はそれを造り出していた。ちなみに一番のお気に入りは『にゃー』と鳴く顔が猫なドラゴンだ」

「いやどんな生物!?! めちゃくちゃシユールなんだけど!」

「甘いな。知り合いの中には顔が猫で身体がゴリゴリマツチヨなナイスボディな合成魔

獣がいたぞ」

「そんな合成魔獣は嫌すぎる！」

四季の美的センスがわかんない！ 人のこと言えないけど、その合成魔獣になんの需要があるんだよ！

「バカヤロー。『にやー』という破壊光線が撃てるんだぞ。ノーモーションで撃てるんだぞ？ 『んちゃ砲』なんだぞ？」

「無駄に強いなオイ！」

「オイ、『ばいちゃ砲』はあるのか？ あれがなければ不完全だぞ」

「雷斗もなに言ってるの!？」

こいつらは何を求めてるんだよ、そのドラゴンもどきに！

てか、鳥山先生の作品に感化されすぎだぞ！

「目指せ、『スーパースイ人』」

「どうでもいいわ！」

四季の目標がもうわかんない……………。

「ツツコミ疲れないか？」

「それなら変われよ雷斗。こいつはある意味変態より疲れる」

「変人にいちいち構うな。変態より数倍疲れる人種にいちいちツツコんでいたら廃人な

るぞう」

「大袈裟すぎね？ それ……」

「ちなみにこいつの作品の中に『かめはめ波』が撃てる猿がいる」

「なにそのいらぬ情報」

というか二人って知り合いなのかよ？

そこに疑問があったので質問すると帰ってきたのはyesだった。

「前世からの付き合いだ。コイツに何度も実験動物扱いされたことか……」

「何言ってやがる。お前も人を技の開発のサンドバックしてたじゃねえか。お互い様だろ」

「女体化する薬を飲まされてエールに襲われたことがあるんだけど？」

「……………」

「オイ、口笛吹いて誤魔化すな」

そんなこともあつたんかい。てか、雷斗くんマジどんまい。すると四季は今度はオレに話しかけた。

「さてソラ。お前の目的はなんだ？」

「管理局をブツ潰す」

「……………なるほど。だけど、潰されたことに影響はどうするつもりだ？ これが潰れ

たら治安がかなり悪くなるんだが」

「知るか。こいつらは人の大切な者に手を出した。だから潰す。治安が悪くなるうが知ったことじゃない」

オレの答えに雷斗は眉間に皺をよせる。何か言いたそうだが、反論できる素材がないんだらうな。

「あの一、ちよつといいか?」

オレ達の話に参加して来なかつた黒髪少年がやつと会話に参加してきた。んで、何か言いたいことがあるのか?

「アオと呼んでくれ。まずその考えは極端すぎるじゃないか? いくら管理局が汚職していると言つても、この組織による影響は絶大なんだ。その抑止力を潰すことはやり過ぎる」

「やり過ぎが丁度いいんだよ。一度滅んだ方がいい教訓だ。バカ共は大きくなりすぎて下の立場を理解していない。また魔法が使えないとか犯罪者だからって偉そうにふんぞりかえつてる上級魔導士はバカばかりだ。居場所を無くすことを体験してろつて話だ」

「……上級魔導士の中にはまともなヤツはいる。家族を想いやるいい人もいる」

「それは管理局の中だ。外から見ればオレが言つてたヤツらが多い」

「お前も自分が言つてたヤツが多いことも知らないだろ？」

……………(いつ)

「あんた、ヒーローに憧れたことあるか？」

「あつた。けど、捨てた」

「なんでだよ？」

「実現できないと思ひ知つたからだ。どんなにがんばつてもどんなにオレの想いを叫んでも結局変わることがなかった。そのせいで大切な人を失つた」

オレがそう言つてコーヒーを飲むとアオは苦虫を噛んだ顔になつた。

「だからオレはヒーローより英雄になることにした。敵に畏怖され、蹂躪する化け物にな」

「だけどそれは……………」

「ああそうさ。いつか一人になる。だが、それがどうした？ 理想に囚われて大切な人を失うくらいなら敵を皆殺しにした方がマシだ。それがオレが経験し、導き出した一つの答えだ」

オレはそう言つて席に立つ。

お金は既に払い済みだし、後はケーキを持って帰るだけだ。

「お前はお前で答えを見つけ出せればいいさ、アオ。オレはもうヒーローになるつもり

はないしな」

オレはそう言つて店から出ようとするとアオが立ち上がった。

「……あんたは自分が止める。あんたの行動で誰かが悲しむなら絶対止めてやる」

「ほう？ それは楽しみだねえー……。つまりオレを殺して止めたいと？」

「違う！ あんたを救う。そんな悲しい考えしかできないあんたを救いたいんだ！」

オレを救う？ 悲しい？

は！ くだらない……。

「やってみろよヒーロー……。そんなくだらない理想をぶつ壊してやる」

「やってやるさ英雄……。悲劇の登場人物を救うのはいつだってヒーローさ」

オレはほむら達と店を出て空を見上げる。笑みが自然と溢れる。

——ホント……。らしいよ、お前は

だからこそ、アオ……。お前だけは徹底的に潰してやるよ。

(??サイド)

「はあ……………厄介なことになったな、雷斗」

「ああ。全くだ……………」

「というか今のお前が弟子と戦って勝てる？」

「……………アイツは甘いだからこそ勝てる相手だが、甘さと容赦がないなら別だ。神器の性能を駆使しまえば勝てない」

「それはつまり？」

「『過去』と『今』じゃあ、まるつきり違う。今のアイツは最高にして最強の神器使いだ『最凶』の俺が止められるかどうかも怪しい」

「と言いつつも止める気満々……………だろ？」

「……………」

「『アレ』はある意味お前だよ。そして『閃光』が求めたあいつじゃない。お前は自分とは違う答えを持った神器使いになってほしかったんだろ？」

「……………だから俺が止めてみせる。必ず、な……………」

——とある少年の決意。

——とある師の決意。

『無血の死神』と『閃光』——ソラと雷斗

『最高にして最強の神器使い』と『無名の神器使い』——ソラとアオ

三人の戦いは………近い。

「あれ？　そういえば一誠は？」

「さあ、道に迷ってるんじゃないかね？　夕飯ごろには戻ってくるだろう」

☆☆☆

兵藤一誠は人外である。ドラゴンの一族でゴムゴムの力を持つ変わった男である。生命力は高く、身体能力も高い。彼自身も普通に考えて負けるはずがないと思ってる。

なぜこのようなことを言っているのかと言うと——

その彼が瀕死になつていたからである。

「ゴム人間つて普通の打撃系がなかなか効かないんだな」

「でも海楼石の籠手で拳が通るようになったじゃない」

「あんま使いたくなかつた戦法だけどクライアンの意向だしなあ」

男はしぶしぶと言つた感じでその籠手を使つていたようだ。一誠はなんとか立ち上がり、決死の一撃を与えようと両手を掌打の構えをとる。

「ギア 2 セカンド —— ゴムゴムの………」

「おっ？ 必殺？」

「『JETバズーカ』ッ！」

襲撃者の男に一撃が入った。渾身の一撃だ。そのため一誠の身体が悲鳴をあげて、身体から血が噴いた。

「んな、ばか……な………」

一誠の下から魔方陣が浮かび、彼は光の粒子となつて消えた。彼がそう言っていた根拠は——その男にはダメージが一切効いていなかったのだ。

「いてーな。結構効いたな、今の」

「嘘つきなさい。びくともしてないじゃない」

「いやいや、お前と違って衝撃とかビリビリくんのよ。というかその常時アビリティがほしいな」

「必要ないでしょ。第一今のところあなたに一撃を与えられて通用するとしたら、『美国織莉子』のお気に入りぐらいじゃないかしら」

「そういえばそいつの一撃って身体の一部が吹き飛ぶんだっけ？」

彼と彼女は一誠が消えたことに気にせず、そしていつの間にかその場を去っていた。

い——二人の狙いは異世界の住人をこの世界から退場させること。生死は問わな

——そして第二の犠牲者は……もうじき現れる

第百話

(??サイド)

温泉——それは和の極楽。

女風呂——それは男のユートピア。

男風呂——誰得？ 腐女子が得するだろうな、たぶん。

さてそんな温泉施設にきた我らが機動六課だが、ここで問題が起きた。それは十歳以上の少年を女風呂に同伴させるかどうかだ。

それどういうことを意味しているのか？

つまるところ、だ——

「さあエリオ、私と一緒に入ろう。大丈夫。先っちょ、先っちょだけでいいから。ね？

ね!? ハアハア……………」

「フェイトさんの言う通りだよ。だから一緒に入ろうよエリオくん。え? このカメラ? それはエリオくんの裸体を……………」ゲフンゲフン。エヘヘ……………」

フェイトは血走った眼でエリオを説得しようとし、キヤロは妄想でにやけていた。ていうか、こいつらその者がオッサン思考である。

そんな彼女達に対する彼の反応は言うところか疲れた目をしていた。

「二次元が一番だよね……………アオさん」

「いや全国と男性諸君にうらやまけしからん状況になに言つてやがる。美人と美少女と一緒に風呂が入れるんだぞ!? てか、自分と変わってくださいエリオ様!」

「僕には味方がいないや……………」

ちなみにアオはこの後なのは様の『デイバインバスター』で真つ黒黒助になる。

要するにこの六課の状況は……………。

「カオスだによ!!」

「誰やねん、あんたは!」

ミルたん友情出演。

(雷斗サイド)

エリオが女風呂に拉致されるところを俺は助けてやり、今彼になつかれていた。てか、コイツただけ味方いいんだよ。八神衛は「苦労を経験するのも成長なり！」とか言つて助けてやらないし、アオは真つ黒黒助だし、四季は如何にしてエリオをモルモットしようか画策してやがったし、女性陣は論外。

エリオを子どもとしか見てないため、恥ずかしがる彼に味方するはずがない。しかも一部はヤバかったし。

オイ、誰かコイツを救えよ。今までのコイツ、めちやくちや人生に疲れた目をしていてぞ。

……………やはり変態達は常人の天敵だ。

おかげでコイツは二次元が嫁という危ない領域に入っていた。逃避活動万歳はこれからの人生ではヤバいからやめましょう。

さてなぜ俺が六課と同じ銭湯にいるかと言うとエールの監視だ。ヤツは「カオスの二オイがするぜえ〜。にゅふふふ……………」と六課についていきやがった。

ヤツの被害を最小限に控えるために、俺はヤツと同伴することになったのだ。

まあ女風呂に入られたが向こうにはアリサとすずかななどの生け贄がいる。一般市民を守るための多少の犠牲だ。

あばよ、ダチ公二人。お前らのことは二分くらいは忘れない。

「? 雷斗さん。向こうが何やら騒がしいのですが……」

「ほつとけ。それよりエリオ、露天風呂行こうぜ。あそこなら静かだぞ」

「うん、あつちのことに關しては深くは追求しませんがわかりました」

「薄情者——!!」というアリサの悲鳴が聞こえたが気にしない。俺は常に前向きに生きていくのさ。

さて、露天風呂はどんなモノか——

「し、シキ……なぜここにお前が………」

「知らねーよ。てか、混浴なのか？　ここ」

四季と見知らぬポニテがいた。確か夜刀神十香だっけ？

てか、扉を確認したら『混浴☆』って書いてあったわ。

「きゃッ。な、ななな………」

「あー。気にすんな。好きにちちくりあつてろ」

「ちちくらんわ！」

「んじゃ、チチもみ合つてろ」

「誰が揉むか！」

「十香、お前の胸揉んでいい？」

「唐突に何を言つてるのだ四季!？」

「そこに乳があるから」

四季のボケに狼狽する十香。確かに四季の発言に一理ある。それは男の真理だ、きつと。

「さっさと出ていけー!!」

十香さんに怒られたのでスタコラ出ていくのだった。ちなみにアオがそれを聞いて

突貫したが、扉が血で汚れていた。

カナカナカナカナー♪　　つてか？

「あ。ひぐらしですね。わかります」

「そういえば高町なのはの声って梨花ちゃんとそっくりだな」

惨劇の運命を乗り越えろよ、六課女性陣。主に変態の魔の手から。

☆☆☆

「なんだ眼鏡。いたのか」

「眼鏡じゃなくて美由紀だよ！　ホント私に対して辛辣だね雷斗くんは……………」

「そうか。ならジミーと改めよう」

「待って！　それは私が地味ってこと？　地味ってことだよね!？」

この人は高町美由紀。俺の中ではジミーと呼んでいる嫁ぎ遅れだ。一応、翠屋の従業員だ。

「私、まだ二十代だよ!？」

「嫁ぎ遅れは事実だろ。料理ができないとか駄目だろ」

「ぐっ………だ、だけどきつと私を貰ってくれる猛者がいるはず！」

「お義姉ねえちゃん、自分で嫁ぎ遅れって認めてるよね、それ」

「すずかちゃん、それは言わないで！」

というか同じ銭湯にいたのが意外なんだけど。

「そんなことより四季くんはどこや？」

「あれ？　そういえば十香ちゃんもいないな」

八神はやたとフエイト・ハラオウンは四季達がいなことに気づいたようだ。ホントどこに行っただ？

と思っているとラインが届いた。なにになに？

——以下ライン——

『青いスライムを発見。倒せばやくそうか、経験値が貰えるのか？』

『シキ、シキ！　なんかこの青いの集団の中に灰色のすらいむがいるんだが』

『なんだと!? メタスラもいるのかよ! こうしちやいられない! 倒すぞ十香』
『うむ!』

——以上ライン——

「うん、なんか二人はリアルドラクエしてるみたいだから問題ないだろ」

「問題あるわアアアア!! それを俺達六課が探してるロストログアだからッ!」

「てか、メタスラいたらはぐれメタルいるのかな」

「言ってる場合かよ! はやてさん!」

「はいよ、六課出撃や!!」と言って八神はやて達は現場に向かった。その途中、疲れた目をしていた一ノ瀬シイはきつと気のせいではない。

「あれ? エールは?」

「そういえば見かけないな、どこ行った?」

「エールさんなら六課について行ったよ」

『魔法少女×スライム×触手Ⅱゲへへな展開キタコレ!!』とか言ってビデオカメラを

持って行ったわよ」

そのとき俺は全速力で六課を追いかけたの言うまでもない。

(アオサイド)

ロストログア————メンドイからロスギアでいいや。そんなこんなでスライムを見つけた自分達だが……………。

「どんだけいんねん」

「むしろ現在進行形で増えておるな」

八神夫婦のツツコミを合図にスライム達が襲いかかってきた。

隊長達の指示で気持ち悪いくらい分裂したスライムを役割分担して倒すことになった。

「うへー、気持ち悪う〜」

「ぐじゅぐじゅするわね……………」

スバルとティアナが嫌そうにスライムを討伐する。まあ砲撃魔法で一掃できるから

ね。

「う、うわ！ 離れてよ！」

砲撃魔法を使わないエリオはスライムのネバネバに捕まってしまい、R指定が付きそうな状態になっていた。誰得だよ、それ。

「ハアハア………あられのないエリオくん！」

「いいねいいね☆ 美少年がスライムに汚される描写を富竹フラッシュユ！」

訂正。約二名が得していた。てか、エールさんいつの間にかいたのだろう。

「とーりあえず、鬱陶しい！」

自分を捕らえようとしてきたスライムを火炎魔法で燃やす。スライムって熱に弱いのは常識である。

ちなみに自分の神器だが、どうも召喚には条件があるためまだ自由に召喚できない。

『危機的な状況』

それが自分が神器を召喚するための条件だ。

しばらく殲滅活動していると、四季が一匹のスライムをじつと目線に捉えていた。

そのスライムは金属的な色で如何にも固そうなスライムだ。

……………メタスラっていたんだ。

「見つけたぜメタスラヤロー。テメーの経験値をいただくぜ」

彼は地面を材料にして槍を錬成した。それを掴み、スライムを仕止める必殺の一撃を放つ。

キーン！

その突きは金属音と共に弾かれてしまった。やっぱり固いか。

「なら、ナイフを錬成して『切り裂く』だけだ！」

「させるか！」

行く手を阻むようにソラが四季に向けて斬撃を放つ。四季は舌打ちをしながら後退することとなった。

「邪魔するなよ『無血の死神』。そいつは切り裂いて解剖する予定なんだから」

「あいにくウチのマッドがこの珍しい分裂体を捕まえろって指示されてるんだ。そちらこそ邪魔するならばちのめすだけだ」

一触即発。まさに何かの刺激を与えれば爆発しそうな空気となっていた。

ヤベー、ここにいたらぜってー巻き込まれる……………。

こつそり逃げ出そうとしたら——『閃光』が通りすぎた。

キーン!!

その『閃光』が投げたと思われるクナイをソラは弾き飛ばした。彼はクナイを投げた人物を睨み付けていた。

「よお、俺も混ぜろよキチガイ共」

「……………オイオイ、マジか」

ソラは彼を見て苦笑を浮かべる。

そう、クナイを投げた男——『閃光』のライトがそこにいたのだ。

第一百話

『閃光の衣』——それはかつて師匠に継承された神器である。それを持つ者がオレの目の前にいた。

「まさかあんたまで転生していたとはな……」

「まあな。第二の人生ヒヤッホーイしてやろうかと思つたがエールに捕まつた」

「変態から逃れられない運命か」

「そういう馬鹿弟子もそうだろ」

「所詮蛙の子は蛙さ」

「お前と血繋がってないだろ」

オレと師匠は意外な形で再会した。

いや初めて会つたときはまさか、つて思つてたけどホントに転生していたとはねー。

ソラくんもビックリだぜ。

「んで、師匠は何がしたいの？ オレのメタスラ捕獲を邪魔するつもり？」

「いんや、全くそう考えてないから安心しろ」

「ただ……」と付け加えたところで背後から攻撃に備えると、クナイを刺そうとしてきた

師匠が現れた。

「テメーに仕置きしなくちゃいけねーなって思つて」

「なぜ仕置きされなきゃならん」

「理由は簡単。俺が求めていたお前じゃなくなったから」

「あんたが求めていた『オレ』？ まさか目の前にいる青くさい理想を抜かしたこいつになれつてこと……かなッ！」

力任せに振り切り、受け身をとっている師匠に向けて神器を降り下ろす。師匠の身体に神器は――

――スウ……と、当たることなくすり抜け。オレはすぐに周りを警戒した。

師匠は超速攻型の神器の使い手だ。短距離と長距離という例えを表すならば短距離が得意というわけだ。

――ほんの一瞬という時間で相手に近づき

――『殺された』ことを認知させず

――『あつという間』ではなく『あつ』と言わせず対象を抹殺する

故に『閃光』^{フラッシュ}――光の速さで即死させる化け物だ。

「おまけに人外だし」

「誰が人外だゴラ」

「一度ガスなんちやらと戦ったときに流し込まれたウイルスに適應してたじゃん」

「あれはビビった。一時期ワインレッドの瞳になるとは思わなかった」

「董さんもびつくり新事実だったりする。あ、そういえばあっちにいるガスなんちやらの美幼女元気かな。九尾のロリババアで偉そうだったけど。」

「今は関係ないだろ。てか、死ぬ。今すぐ死ぬ。俺のストレス発散のために死ぬ」

「それひどくね!？」

「容赦の知らない師だ。いきなり現れたと思ったらクナイ突き刺そうとするし、それを防ぐと今度は消えたと思ったら殺気がある方向に神器を構えるとクナイが飛んでくるし、おまけにビリビリしていて肌が痛い。」

「チツ、見えないなら勘を頼りにする……か。成長しているなソラ」

「そういう師匠は退行してるよ。オレが知ってるあんたなら音も立てないし、なにより気配を感じさせない。暗殺者のあんたらしくないな」

「仕方ないだろ。思い出したのは約一年前だし、士郎と恭也について最近鍛えさせてもらったばかりだ。勘がどうも鈍るんだよ」

『最凶』のこの人でもブランクは大きいか。なら、今がチャンスってこと。
んじゃ、いかせてもらおうぞ。

「オラァ！」

「ッ、お!?」

接近していた師匠が現れたところで掌打を放ち、彼を防御させる。怯んだところを神器で斬り込むが、やはりクナイで防がれる。

それを予想していたオレは開いた片手で魔法を放つ。至近距離の水魔法は冷えるぜ？

「ぐっ、手が……」

「もらったァー！」

好機。問答無用に地面を蹴り、飛び込むようにして斬撃を放つ。

しかし金属音が鳴るだけでそれは失敗に終わった。

ここで邪魔してきたのは――

「やっぱりお前もか！」

「当たり前だろ！」

ヤツはオレを押し返して追撃にかかるが、あっさりそれを押し戻し、逆に追い詰める。

そこを師匠は凍らせた片腕を外して、雷を帯びさせた左の手刀でオレの神器を受け止めた。

「義手？」

「月村の特注品だッ」

オレは師匠の蹴りを受けて後ろへ飛ばされた。蹴り放った足には雷が帯びていて、威力と鋭さが倍増していたのでかなり痛い。一般人なら最悪肉愧にできるんじゃないのか思っていたりする。

「イテテ……久しぶりに効いた」

「溝尾を狙ったのに動けるとかどんだけ元気なんだよ」

「あいにくもつと痛いのは師匠が死んだ後に経験していたからなあ。ま、痛いもんは痛いけど」

オレは神器を構えながらいつものように口に出す。

「懺悔は済んだ？ 後悔したか？ なら、安心して——とっと死ね」

（千香サイド）

やあやあ、みんなのアイドル千香ちゃんだよん。にしてもスライムを多い。六課のみなさんが善戦してるからこちらに被害はないが、ボクの目の前には『最凶』がいた。

「おつひさー千香ちゃん。早速だけど大人しくしてね」

「嫌です。てか、こんな絶好になりそうな状況で大人しくしろつてのもおかしいですよ
ね？」

「お互い『混沌』をもたらす者だから目的は同じだねえい。だーけーど、今回はカオスは無しよん。理由はライトがご褒美くれるから♪」

「ご褒美つて？」

「それは……えひひひ、電撃ビリビリいく………」

あー、お仕置きのことだね。これは不味い。師匠と敵対するとは厄介だ。

あらゆる攻撃は無力化され、あらゆる能力を無力化にする真正銘の化け物。

『勝てる』じゃなくて、『勝てない』。

つまるところこの人に勝利することは絶対にならないということだ。

「うにゅー、このままじゃ六課に先を越されそうだし、さやかちゃんとほむほむは六課の人に時間をかけられているし………」あ♪」

名案を思い付いた。

用は――

「師匠を壊せばいいんだ♪」

「それは名案じゃないよ」

「アハハハ、師匠はわかってないねー？　ボクが元からどういう存在でどういう在り方だったのか、ね？」

「……ああ、『人形』――だったね」

人形だから考えはしない

人形だからシンプルな答えを出す

人形だから容赦は――できない

師匠はため息を吐きながらサバイバルナイフを構える。ボクもまたスタンロッドを構える。

「勝つても負けても文句はないよん？」

「ボクは敗北を知らない、理解できない。同時に勝利を知らない、理解できない。『人形』だったから」

ボクと師匠がぶつかる。互いに譲れないモノを賭けて。

……まあ変態的な戦いになるけど。

(四季サイド)

とりあえずソラを二人に任せて俺は森の中に逃げたメタスラを追いかけていた。あれはどうしてスライムでありながら固く金属なのか、知りたい、理解したい。

だから解剖する。それが俺のスタンダードだ。

ふるふると震えるソイツをやっと追い詰めた。あとは切り裂いて解剖するだけだ。

その一步を踏んだ刹那——メタスラが破裂した……………。

「自爆…………？ いや違うな。これは拳圧で吹き飛ばしたつてところか？」

「スゲーな一目見ただけでわかるの？」

バイザーで顔を隠した男女が俺の背後にいた。

男はやや黄色のヒーロースーツを着ており、最儀礼のようなマントを羽織っていた。な

んかどこかのアンコのヒーローを彷彿させそうな格好だな。

女は小さな容姿で男と同じくバイザーで顔を隠していた。ピツチリ着こなされたタイツと小さな籠手をつけている。たぶん、二人とも近接格闘タイプだろう。

「んで、お前は誰だ？ 俺になんのようだ？」

「単刀直入に言えば排除。たくつ、気乗りしない命令だな」

「仕方ないわクラウ。彼らに私達は逆らえない」

「オリビア、そうは言ってもこいつはまだまだ若造なんだぜ？ ものスッゲー年寄りな僕達には気乗りしないって」

若い……………歳のことじゃないな。実戦経験のことだろう。つまり、この二人は戦争など経験してきた猛者。しかもかなりの年寄りだ。

……………経験においての話だ。

「悪いけどここで倒れてくれ。クライアントの命令で邪魔らしいんだよ、お前」

俺は言い様のないナニカを感じてその場から右へ飛んだ。すると俺がいたところに男がパンチを放っていた。

パアンと空気に響く音がその威力を示していた。しかも予備動作無しで必殺とはこれ、いか……………に？

「あ、あれ…………？」

腹部が痛い。避けたはずだ。なのに……なのに——

——横腹が抉れたコレハナンダ？

「ガハツ……………」

吐血する。ちくしよう。まさか、避けていたと思っていたのに僅かにカスっていたのかッ？

くっ、だけど幸いなことに男はそこから一步も動かず待っている。早いとこ逃げてみんなに……。

「残念だが、僕が手を出すまでもないと判断して動かなかった」

ザシュツと肉を貫く音が胸から響く。胸から小さな手が生えて心臓を握っているのではないか。

「ぐ……ぼ……」

「これでおしまい——バイバイ」

瞼が重い……意識が沈む。

俺は自分の心臓を握られている光景を見ていることしかできず、そして——

グ
シ
ャ
!!

第二百一話

(??サイド)

クラウとオリビア——男と幼女は動かなくなった死体を見下ろしていた。死体は彼らを見返すような形で死んでいるのでクラウはその臉を閉じてあげた。

「ふう……ホントに意味があるのか、これ？ さっきの肉とか言いながら逃げられた子どももそうだし、単に子どもを殺して快樂殺人者になってとけてオチじゃねえだろ」
「知らないよ。でも仕方ない。これが私達の運命なのだから……」

彼と彼女は過去の英雄だった。彼女は戦争を決戦兵器で勝利し、彼女を失った彼は強さを求めて最強になった。

そんな彼と彼女を蘇らせたのは過去の遺物達の仕業だ。なぜ、彼と彼女がこんなことをしなければならぬのかは定かではないが、ソラやシイなど管理局ではない者達の敵であることは確実である。

「それでコレどうすんの？ そのまま放置ってかわいそ過ぎだろ」

「しばらくしたら回収組が来てくれるはずよ。それまで——クラウー」

オリビアは何かに気づいたのか、咄嗟にクラウスを押し倒した。クラウがいたところには斬撃が地面を抉りながら飛んできたのだ。

斬撃を放った犯人を確認しようとオリビアは見た。

——そこにいたのは黒髪をなびかせた鬼神がいた。

「よくも……よくもおツ。四季を殺したなアアアアアッ！」

涙を浮かべ怒りの化身となった十香が霊装を纏い、〈サンダルフォン塵殺公〉を握っている。

彼女は怒り悲しんでいることは明白である。

「恋人か？」

「どのみち消すしかないわ」

オリビアが十香に肉薄し、必殺の拳を放とうとした。

避けられないッ。

待つのは死。これはかつて自分もそうだった。でえとの最後に彼女は腹部を撃ち抜かれ、泣いて悲しむ彼にお別れを言つて、彼女は死んだことがある。

彼女が生きている理由は『土道』のおかげだ。その代償に『四季』は『土道』といった記憶と自分との出会いを忘れた。

彼女は自分のために犠牲になった『土道』とある約束した。

——『四季』を一人しないでくれ。彼は一人でいようとするか、わいそうな男の子なんだよ

彼女はその約束に付け加え、『四季』を一人にさけないだけでなくあらゆる害敵から守るとも約束した。

………なのに、なのに、ナノニイ!!

死んだ。

死なせてしまった。

殺されてしまった。

コイツらが殺したんだ!

「ああああアア!!」

「んなツ?」

オリビアの手刀を掴み、木へぶん投げた。彼女は理性無き獣の如く斬りかかる。オリビアは籠手で迫る斬撃をいなしていく。

「はああああアアツ」

十香を蹴り飛ばすことで距離を開けることができた。オリビアは彼女の次にくる猛攻に思案しているに対して十香は全く別のことを考えていた。

——足りない、これでは足りない……。

精霊だった頃の十香ならば圧倒できるが今の十香は精霊の力が一部だけ戻ってきただけだ。

早くコイツらを蹂躪したい、泣き叫ぶようなことがしたい。

憎悪の矛先である二人に十香は更なる力を望む。

——そうだ、精霊の力だけじゃないもつと別のチカラ……！

望む、のぞむ、ノゾム！

それを望めば待つのは破滅と消滅。されど彼女は躊躇わない。彼を殺したこの愚者を早急に——

「馬鹿、なこと……やめろ………」

望もうしたとき声がした。それは死体となっていた少年だった。過呼吸で血まみれの彼は辛うじて立っているのもやつとな状態だ。

だが立っていた。そして十香の怒りが治まった。

「シキツ、大丈夫か？　大丈夫だったのか!？」

十香は四季にギユツと抱き締める。うらやましい状態かと誰もが思っているかもしれないが、彼は重傷であることを忘れてはいけけない。めちやくちや痛そうに苦しそうにしていた。

精霊化した十香は力持ちだったたりする。

「く、くるじい………」

「心配したのだから！ もう……もう私を一人にしないでッ！」

子どものように十香は四季の胸の中で泣き始める。四季は親のように十香をあやし
ながらクラウスとオリビアを睨み付ける。

「よくもやってくれたな。おかげで一回死んだじゃねえか」

「貴様……なぜ………」

「答えるか、バーカ」

四季は辛そうな表情で手合わせ錬成をした。地面から砂煙を上げるただの目眩ま
しだが、視界を遮ることができた。

「目眩まし程度で」とオリビアは鼻で笑い、砂煙に見える影を狙って拳を放つ。致命傷を
負っている今の四季がそう簡単には離れられないと考えていた。

その影の正体は——錬成された石の人形。

同じくクラウもワンパンしたが、砕けたのは生身の身体ではなく石でできた人形だ。

クラウは舌打ちして砂煙そのものを吹き飛ばした。その砂煙が晴れたとき、横着して
しまい、手を抜いたことを悔やんだ。

既に四季と十香はこの場に居なかつたのだ。残りの影は全て人形だった。

「油断した。あの女の子は人外の一人だったようだ」

「これはまずいよね……」

「顔は見られてないから安心だけど、『神器使いを狙う敵』がいることが明るみなるな」
 まあ気にしない。敵がいるという警戒心を与えることで彼らが強くなればこちらも
 楽しめる。

なぜなら、彼と彼女は次元世界において『最強』なのだから。

☆☆☆

一方、四季は木にもたれ掛かっていた。十香は心配そうに声をあげているが彼の耳には届かない。

(カマエルの……再生のおかげで助かったが……だめー、じが大きい、な……)

精神的に辛い。死というモノを感じた恐怖と苦痛による疲労で体力と精神がギリギリ削られた。

「 ツ? ツ! 」

十香が何かを言っている。だけど聞こえない。ああ、ホントに疲れた。

四季はもう眠たくて眠たくて仕方がなかったのだ。もう立てることができない。

(『姉ちゃん』……ごめん。俺、十香を泣かすわ……)

そりや、悲しませることはしたくない。心配もさせたくない。ただけど限界だ。もう無理だ。だから今は疲れを取るために休もう。大丈夫、すぐに目覚めるから。

四季はそう考えながら目を閉じた。

「シキツ？ シキツ、シキイイイイッ！」

呼びかけには四季は答えない。死んではいけないが目を覚まさない。

こうして五河四季は意識不明の重体になった。

(ソラサイド)

メタスラ捕獲は中断された。理由は六課の雇われた神器使いの一人が意識不明の重体で十香と呼ばれる少女に運び込まれたのだ。戦闘中にも関わらず、オレはつい目を見張ってしまった。

さつきまで会話していたヤツが、さつきまで元気だったヤツがこんなことになるとはオレも六課も思っても見なかった。

「顔を隠した男と女にやられたッ。四季は殺されかけたッー」

十香は錯乱しながら四季をこんなふうにした犯人の特徴を口に出していた。

「師匠……………」

「ああ…………やめだ。とつとスライムを終わらずぞ」

「了解」と答えた刹那、オレと師匠は『閃光の衣』を使ってあつという間にスライムを一匹になるまで蹴散らした。

その間、僅か五秒。再生や増殖もさせないくらいのスピードで全て狩り尽くした。

残った一匹はロスギアの本体だ。それにとどめをさしたのはアオだ。

神器の力でそのロスギアを封印したのだろう。

「…………千香、ほむら、さやか。帰るぞ」

「あ、うん。わかったソラ…………」

「そだねー……………」

「……………」

それぞれが返事してオレはドコでもドアを展開してスカさんの基地に繋がった。

「じゃあな六課。どうやら敵は他にもいるみたいだ。せいぜい気を付けな」

八神や高町が何かを言っていたような気がしたが無視してオレ達はその場から去った。

(??サイド)

五河四季が六課の医療施設に緊急搬送されてから三日後、はやては急遽六課に戻ることを宣言した。どうやら被害者は四季だけではなかったのだ。

「一誠が消えたって……」

「文字通りです。この召喚で喚ばれた者が命の危機に直面したときには強制的に還らせる措置があります」

「つまり一誠くんは四季くんがやられる前に既にやられていたってこと？」

おそらく、とシイは答えた。しかも悪いことにこの措置が発動した場合、二度と召喚に喚ばれないこととなっている。

「幸いなことにミッドにおけるキリトくんやアスナさんには何にもなかったらしいで。つまり『敵』は私達の休暇もとい、帰郷を狙っての犯行ってことやな」

「あるいはミッドではできなかったから、という可能性がある」

「どういふことや？ 衛くん」

「管理外という世界は管理局では注目されていない。つまり監視された世界だからこそ、行えた犯行ということもあるのだ」

衛の言う通りかもしれない。ミッドでは管理局の本部がある。故に徘徊している局員が多いし、目撃者が多くなる。

つまり犯人は知られてはいけない者——有名で名のある者と考えることが妥当なのだ。

「絞り込めへんな」

「それもそうだ。有名な局員および著名人が犯人だとすると数えきれぬ」

容疑者が多すぎるに証拠がないので捕まえることもできない。

「あのゴムゴムの能力者でドラゴンの血筋の男が敗れるほどの実力者とは……………」

「衛さんと互角だった人ですよね？」

「そうだティアナ。ヤツには筋肉はないが、パワーならば我以上だった。その者が負けただど？　ならばどれほど実力者なのだ、敵はッ」

友がやられたことに拳を握りしめ無力な自分を悔やむ衛にはやては肩を置いて「大丈夫や」と言葉に出す。

「とにかく私達がすることは？」

「戻って訓練祭りや」

「上等だよ……!!」

三人の隊長娘の気合いは充分だった。衛も腕を組み、頷く。

「十香さんと四季くんの無念を晴らす」

「そうだねティア!」

「こちらも気合い充分。」

「四季さんの仇討ちです!」

「エリオくん、抱いて!」

「あ、ごめん。僕の好みは巨乳の同級生」

「解せぬ」

エリオの嘘八百に騙されるキャロ。てか、お前ら真面目にやれよ。

まあ、なんにせよ。

彼らと彼女達は再び戦う決意を固めるのだった。

☆☆☆

『ソレ』はいた。暗闇の中で蠢くナニカがいた。

それに近づく男がいた。黒いレインコートを着た男で両目が紅く染まった瞳。

彼は笑みを浮かべながらソレに語りかける。

「もうすぐ、もうすぐ始まる……………終焉のときが、な」

ナニカも笑っていた。

その声は少女のモノだった。だいたい中学二年生くらいの女の子のモノだろう。

その笑い声はどこまで美しく、狂っていた。

その笑い声はどこまで綺麗で、不気味だった。

——その笑い声の正体は……………まだ誰も知らない。

第三百三話

(??サイド)

機動六課訓練室にて、今日もテイアナ達は隊長達と実戦経験を積むための試合をしていた。まあなのはいつも通り、砲撃で薙ぎ払うし、フェイトは変態機動で攻撃が当たらないし、衛に至っては全く墜ちる気配無しの耐久力である。

パワー、スピード、ライフエンスの全てが勝てないゲームはもはや無理ゲーだ。

するとはやてはその訓練を一時中断をさせた。なんでも新しく取り入れるトレーニングがあるとか。

はやてが用意したのはカーテンで隠されたコンパクトサイズの小部屋だ。よくバラエティなどでスタジオで着替えに使われるモノだ。

「んじゃ、ごたいめーん！」

「[[[[[[ツッ!]]]]]]」

それを見た直後、アオ達の空気が凍りついた。ピシッと彼らは凍りついたように動けなくなった。

そう、そのトレーニングで使われるモノの正体は——

—— 縄で縛られて白目を剥いてる雷斗である。

「ちよつと待てエエエエツ。なんで雷斗がここにいるの!？」

「私が拉致するように頼んだ」

「実行犯は私とフエイトちゃん」

「ミツシヨンコンプリート」

「勝手に拉致すんなよ！ 誘拐すんなよ！」

犯罪を犯したお馬鹿三人組にアオはツツコむ。ノリノリにサムアップしている辺り、三人娘に反省の色無し。

「う、うう……ここは……」

「すみません雷斗さん。この馬鹿隊長三人組があなたを拉致してしまいました……。ちなみにここはミッドチルダです」

「くっ、やはりあのハニートラップは罠だったのか！」

ハニートラップということは誰かがお色気したのでろうかとアオは妄想する。フェイト辺りのスタイル抜群の美人だとコロツとやられそうだ。

「おいしそうなホットケーキを食べていたら意識がなくなつて……」

「そつちのハニー!？」

訂正。ハニーはハニーでも味覚のハニーだった。というかホットケーキに引っ掛かったこの人は案外チョロいのかもしれない。

「それでこの人を連れてきて何をするつもりですか？」

「動物的になつてもらうつもりや」

「鬼だ。鬼がいる……」

はやての発言にティアナは青くなる。確かに拉致したあげく動物的にするとは鬼の所業である。

「くつ、俺は屈しないぞ！ ショッコー。俺は決して——」

「なお、訓練が終わる毎に夕飯の最後にケーキが出る」

「よろしい。的でもなんでもなつてやるぜエエエエ！」

((((チヨロツ!!)))

新人達の最初の恐い印象がこのとき薄くなつたとか後日、スバルが語っていた。

「にゅふふふ、美少女と美少年が豊富な六課に来て私の変態パワーがたぎってきたわん

！」

「あ。こいつもいたんや」

ちなみにエールも付いてきていた。要するに——

「カオスな予感がするによッ！」

「だから誰やねん、この魔法少女服着た霸王さんはッ!？」

ミルたんリターン出演。

(ティアアナサイド)

『無血の死神』に勝つため、私とスバルは連携の練習をする。ヤツに勝つには一人では勝てない。二人で攻めない勝てない。ならば私達が得意とする連携攻撃を伸ばす。

それに接近戦も鍛えないと。

私は魔力刃を構えながらそう考えていた。

「何をやってんだお前ら？」

振り返るとそこには先ほどトレーニングで無傷無敗という記録を残した雷斗さんがいた。一つか二つしか違いなのに『さん』付けしてもおかしくなくらい彼は大人びていた。

「さっさと休め。明日もあるんだろ」

「……すみません。でも私は強くなりたいといけないのです」

『無血の死神』に復讐したいのか？」

ッ！ どうしてそれを!？」

「オイオイ、一応俺は翠屋でアイツと話し合っていただろ？　なら、アイツの口から聞いてもおかしくないだろ？」

………それもそうか。忘れていた。この人は私の仇の関係者であることを。

私の雰囲気にはスバルはオロオロしていたが、雷斗さんは気にせず続ける。

「アイツの変わりようには俺でも驚いている。まさかあのガキがあそこまで変わるとはな」

「雷斗さんは彼とどんな関係なのですか？」

「師匠と弟子。前世ではそういう関係だった」

「えエエエエ!？」

スバルが驚くように私は驚愕した。まさかこの人が……………。

「あなたが『無血の死神』を育てたのですか!」

「然り。されど俺が育てたのは『無血の死神』じゃない『ソラ』だ」

彼はポケットに手をつ突っ込んで語り始める。

—— 彼は心優しい少年だった

—— 彼は殺しはしない救いのヒーローに憧れていた

—— 彼は雷斗さんが死んだ後に絶望してしまった

「『無血の死神』は神器使い達の戦争によって生まれた。環境によって生まれた英雄。それが今のソラだな」

「あなたなら説得できないのですか?」

「無理だし、無駄だ。アイツにはアイツなりの譲れないモノがあるし、許せないモノがあ

る。だからぶつかるのは必然だ」

スバルはシユンと顔を俯く。穩便に済ませたいと考えているのでしようね。けれど私は違う。アイツが捕まるのであればなんだっていい。

だからこそ、頼む。お願いする。

「雷斗さん、私達を鍛えてください」

「理由は？」

「ヤツに勝ちたい。負けたくないからです」

「……………」

「私は……私はもう誰も失いたくないです……………」

兄が死んだとき私の頭は真っ白だった。なぜ兄さんが死ななきやいけないのか、どうして真面目なあの人々が死ななきやいけなかったのか。

それに私にあのとき力があればアオに無茶させずに済んだ。無力は罪だと私は思う。だからこそ、力を求める。

「……………」後日、ココに來い。ある程度は見てやる」

「じゃあー！」

「鍛えはしない。俺が教えるのは欠点と戦い方だ」

踵を返して彼は背中を見せて去った。私とスバルはその大きく見えた背中をいつま

でも見ていた。

(??サイド)

とある世界にて一人の少女がいた。雪のように白い肌に真っ黒のワンピースを着た彼女は鼻唄を歌いながら、灰色の空を見上げていた。

青空ではなく灰色な空——つまり世界が死んでいた。

世界を殺したのはこの少女の仕業だ。

「クスクス……」

「ラン、ここにいたのか」

一人の男が彼女に話しかける。邪神となった彼だけがこの世界の唯一の生存者と
言っても過言でもない。

「やあ、クロ。どうだい？　ここは」

「生き物全てが何かを吸いとられて全滅した世界はともつまらない」

「そうかな？　全てが止まった世界ってとても美しいじゃん」

少女は微笑む。まるでこの世界を作り出したのは自分だと自慢するような子どものように。

『無に帰す者』。生命体から全てを食らう神器……か』

『世界も生きているからねー。でも抑止の存在を倒さないと世界も食いつくせないのよねーん』

彼女の手に変化する。その手は牙のある芋虫だ。体内に存在する神器の影響だと彼女は言っていたが、クロにとつてはどうでもよかった。さっさとあの世界で行きたいのだ。

暴れたい、壊したい、破壊したい。

それが邪神である彼が与えられた役目だから。

「ミッドチルダってどんなところ？」

「多くの人間がいる。また多くの次元世界がある」

「それは食いがいがあるね……」

ペロリと唇を一舐めして彼女は笑う。

彼と彼女の登場は先。

『喰らう者』と『破壊する者』がミッドの世界にいずれは来る。

「ああ、ホントにいるのかなー？」

『無血の死神』くんは」

彼女のお腹に傷をつけた怨敵との邂逅は………いずれ。

第四百四話

(??サイド)

彼女は正しかったのだろうか？

彼女の努力は否定されるモノだろうか？

彼は断言する——間違っていないと

彼は断言する——あなたは間違っていると

ゆえに彼は戦う。相手がたとえどんなに強くても、相手がどんなに理不尽な実力者であつても。

なぜなら彼は『幼き彼』と同じ理想を持つ者だから。

☆☆☆

ティアナとスバルはなのはに挑んでいた。今日の訓練はなのはを撃墜させることがルールだ。

順調。まさに好調だ。

これなら雷斗のアドバイスを元にした連携がうまくいく。

危険な連携攻撃だが、なのはを倒すにはこれしかないと彼女は考えていた。

ティアナはスバルに陽動の指示を出した。その陽動はとても無謀で危ないモノだったため、なのはに叱咤される。

その隙についてティアナはクロスミラージユを構える。

なのはは得意とする砲撃を放ち、ティアナを墜とそうとする。しかし、それは幻覚。つまり本命は上からの魔力刃と下からスバルの拳の奇襲である。

通る——そう思った刹那、拳はシールドで止められ、魔力刃はなのはの手によって止められた。

「おかしいな……。これじゃあいつもしていたような訓練じゃないよ……」

声色が低い。アオはこのときぶちギレたなど顔に手を当てる。

やれやれと呟きながらアオは隣にいる雷斗を見ると、彼は剣呑の目で見ていた。

どうしたのだろうかとアオが思っているとそれは起きた。

「少し頭を冷やそうか……」

スバルをバインドで縛り、ティアナを砲撃で吹き飛ばす。それを見たときアオは背筋がゾツとした。

何か嫌な予感がする。このままじゃとんでもないことが起きる。

彼はモニター室から出て訓練室に向かう。

彼が到着したときティアナは何かを言っただけで魔力弾を撃った。しかしそれはなのはのショートバスターで相殺された。それでティアナは戦意損失した。

それで終わりならまだいい。しかしなのははあろうことがとどめをさそうとしている。

——なぜ誰も止めようとしななんだッ！

彼は神器を展開してティアナに迫る魔力弾をキャンセルする。

「……………なんで邪魔するの？ アオくん」

「やり過ぎだからだよ。もうティアナは戦意損失している。もう終わっている相手に何をしているんだよッ」

「指導の邪魔だよ。邪魔しないで」

これが指導？ ふざけているのか！

アオは煮えたぎる想いでいっぱいになった。

戦うことを止めた相手に、戦意無き相手にとどめをさすこのやり方が教育というのは納得できない。

「ふざけんよ。これが指導なら『オレ』はあんたのあり方を認めない。ティアナの努力を否定し、こんな正義でもなんでもない理不尽で暴力的な力で押さえつけるあんたのあり方を否定する！」

「うるさい、うるさい、うるさいよッ！ 邪魔するなら——オトスマデ」

無謀と言うべきか？

不可能と笑うべきか？

そんな戦いが今始まった。

最初に言っておくが勝者は——

———
いない……………

(アオサイド)

エース・オブ・エースに勝てるとは思っていない。彼女に勝てるならもう自分は『無血の死神』の足止めくらいになっている。それほど強いのだ。

「ッおー」

ピンクの極太砲撃が迫ってきたところをギリギリで回避する。バンバン神器を使いたい、これはとても燃費が悪いのであまり使えない。

この神器で戦う場合、如何に相手に近づき、如何に相手を無力化させるかという戦略的な戦い方をしなければならぬ。

というか魔力量が平均だからあまり長く戦えないのよねー。ちなみにティアナは気を失って倒れているし、ぶつちやかけ味方は無し。ハッハッハッ……………。

「勝てるかアアアアアッ！」

思わずシャウト。

いやだつてエース・オブエースだぞ!?

巷で有名な砲撃魔だぞ!?

勝てるはずないじゃん！ 何してんの自分はホント！

《勝てない？ それは君の勘違いだよ》

なんか知らない声が頭に聞こえるしッ。本格的にヤバいし！

《じゃあ君は逃げるのかい？》

.....

《『彼』は逃げなかったよ。どんなに相手が強くても、死の恐怖があつても、彼は逃げなかつた。それは君の夢でも知ってるはずだよ？》

……自分はアイツじゃない。アイツのように勇気がない。

《あるさ。なんせ君は『彼』だから。君は『彼』の強さを誰よりも知っているはずさ》
謎の声はそう言うといつの間にか、自分の視界があああの夢と同じ世界になっていた。

湖だけの世界の上に立つ自分と——自分同じ年齢の少年

同じ髪の色で同じ紅い瞳。白いシャツとズボンを履いた少年だ。

彼のことは知っている。真つ白な男の正体はコイツだ。彼はいつからか自分の中にいた。

気づいていた？ いや気づこうとしなかった。なぜなら彼は自分が『彼』と同じモノを表す象徴だったのだから。

《だけど、それもおしまいさ。君はもう今の『彼』とは違う。また新しい別の可能性なんだよ》

彼は自分に——『オレ』の手を握る。

暖かい手だ。優しい気持ちを手から伝わる。

《僕がでしなかつたこと、僕が憧れたモノ、そして『彼』が諦めたモノ……それらを君が叶えてほしいんだ》

『オレ』に……？

《以前君に出会った幼い『彼』は絶望していた。今の『彼』はあの幼い『彼』が自分の夢を諦めてなったなれの果て……。だけど君は諦めずなろうとしている》

少年は微笑む。彼の後ろには幼い『彼』がいた。彼も笑っていた。

《○○くん、君が僕達の夢さ》

「戦つてよ、お兄ちゃん。オレがなれなかったヒーローになってよ！」

そこで声は聞こえなくなる。再び現実に戻される。自分が幻覚を見ている間に状況は変わっていた。

なのはさんは息をきらせており、自分は身体がビルにめり込んでいた。

幻覚を見ていた間に幼い『彼』が戦ってくれていたのだろう。

「負けられない……」

負けられなくなった。

負けられなくなった。

ティアナのためじゃない、なのはさんのためじゃない。

……そう、あの夢の世界の少年と『彼』のためだ。

間違つたことを直す——それが『ヒーロー』だから。

「なのはさん」

「？」

「『オレ』、勝たせてもらいます」

消えた神器を再び手に取り、ビルから飛び出す。

なぜか身体が軽い……………。負ける気はしないッ！

(??サイド)

なのはは戸惑っていた。突如、アオが意識をなくしたかと思えば、逃げ腰から積極的に攻撃に転じたからだ。

彼女は思う——まるで彼のようだ、と。

しかしまだ足りない。自身の経験と感覚を信じてあらゆる斬撃を回避し、カウンターに砲撃を浴びさせた。

ピンクの砲撃でビルにめり込んだとき、なのはは息をきらせていた。

致命的な一打はないとは言え、回避するには一苦勞であった。

そんな息をついたとき、彼の意識が戻った。既に神器は消えており、ダメージで動けない。そう思っていた。

——しかし、それは間違い

そう気づいたときにはアオはなのはの前に来ていた。

油断した。まさかアオがここまで早く動けるとはおもってもいなかった。

しかし近距離になったところで変わらない。なのはは接近戦においてアオには負けてないと思っている。

ゆえにスフィアを用意して棒術の構えにはいる。

「らアアアアアッ」

「ッ！」

アオの猛攻。右へ左へ上からの斬撃。

なのははそれを受け止め、レイジングハートの柄の部分でカウンターを放つ。

しかしそれは回避され、回し蹴りを受けてしまう。

少し飛ばされたところでアオを見据える——が、いつの間にかアオはいなかった。

どこ？ どこにいるのツ？

アオを探す。しかしどこにいるのかわからない。そしてアオは姿を現した。

「『神速』ツ」

(後ろツ!?)

なのはは咄嗟にレイジングハートで受け止めたが、その斬撃はレイジングハートで受け止めるべきではなかった。

それは『封印』の斬撃。『閉じる』の概念を持つ斬撃であった。

《す、みま……せん。ます、た……》

「レイジングハートツ」

スリープモードに強制的にさせられてバリアジャケットも解除されたのははすぐにスリープモードを取り消してまた、バリアジャケットを展開した。なんとか地面と激突はなかったが、またもやアオを見失ってしまった。

ザクツ

「あ……え……？」

なのはの胸から鍵のような剣がのびていた。そして鍵を閉める音と、共にバリアジャケツトは解除されてしまった。

「な、なにをしたの……アオくん」

感じない。あの力が……私と周りを繋げる力が感じない！

なのはは困惑する。彼が封印した力は彼女にとってとても大切に彼女にとって周りを繋げる絆みたいなモノだ。

「なんで……なんで……なんで……！」

——魔力が感じないツ!!

「リンカーコアの魔力供給の機能を『封印』した。これであんたは魔法は使えない。空も

飛べない」

「あ……………」

絶句した。それを意味するのは――

「要するにもうあんたはただの人間だ」

――絶望。彼女はそれを聞いたとき、ショックのあまり意識がなくなってしまった。

そしてアオも――

――倒れてしまった。

第一百五話

(アオサイド)

「知らない天井だ……」

いやマジで。気がついたら知らない白い天井だった。というか鉄格子のあるドアに閉じ込められていた。

「独房なのかねー」

どうやらぶちこまれたようだ。まあ、それもそうか。

上官に背き、しかもその上官から魔法の力を奪った反逆者みたいなモノだからねえい。

ぶちこまれても仕方ない、仕方ない。

「それに……もう迷わない」

ハッキリした。自分が何者で、そして『先生』の正体が。

これを伝えたいことやまやまなんだが、まだティアナの復讐とかそういうのがまだつぼいし、後にしよう。

「このまま処分されるオチなのかなー」

それもそれで悪くない。なんせ自分は——『偽物』

『彼』のコピーなのだから。

(??:サイド)

テイアナが目を覚ましたのは六課の医療室であつた。担当医であるシヤマルはテイアナが目を覚ましたことを遅くまで看病して寝ていたスバルを起こすことで伝えた。

心配かけちゃつたみたいね……。

スバルの涙顔に少しだけ罪悪感を感じていると衛が中に入ってきた。

「平気のようだな」

「衛さん、あの後どうなったかわかりませんか?」

衛は目を伏せながら事の端末を彼女に伝えた。

アオ・S・カナメは上官に対する反逆及び武力行使により六課の独房で謹慎処分させられた。そしてその被害にあつた高町なのは魔法が使えなくなり、活力を無くした子どものようになってしまった。

「私の、せい……」

「確かにそうだが全てが貴様のせいとは言えん。高町のあの指導に対することを反論したアオの言い分はもつともだ。努力の否定をする上にあのような指導は認められぬよ。ゆえに高町にも非があるとは言える」

衛は踵を返して部屋を出る間際に、

「だが、貴様らは高町を信用せずに勝手なことをした。その行いを招いた結末だと知れ、愚か者」

と言つて出ていった。

その言葉にティアナは胸をおさえつける。

私は……私はこんなことを望んでいたわけじゃ……。

そんなティアナをスバルは何も言えず、手を握るのだった。

☆☆☆

その頃、フェイトとはやてはなのはをどう励まそうと模索していた。今のなのははなんともしえない痛々しさの笑顔で誤魔化していた。

そう、かつて身体が動けず魔法が使えなくなったのはと同じ状態なのだ。

「どないしよう、フェイトちゃん」

「とにかく今はそつとしておくべきだと私は思う。今のなのは草太を失ったときに似ているから……」

「せやけど時間でどうにかなる問題やないで」

最善と言えるのはアオに封印を解除してもらうことだが、肝心のアオはやる気はなさそうだし、衛も今は「待て」と言っていた。はやてとしては文句を言いたいがかつて衛が言っていたことを思い出して口を抑えた。

だからこそ、どうしようかと画策する中で彼女達の話の曲がり角から聞いている者がいた。彼は目を伏せてそれからなのはのいる部屋に向かう。

閑話休題

なのはは一人引きこもっていた。自分は無力な一般市民と変わらない者になった。魔法のない自分には存在価値がないと思っていた。

(こんな私にみんなはどう思うのだろうか……。きつと嫌われているね……)

思うこと全てがマイナスなっていく。自分に魔法がなければ離れていく。魔法が彼女にとって『希望』であり、『絆』だった。

「なつかしいなあ……お父さんが倒れたときも一人なんだった……」

あのときは一人だった。公園で一人ぼっちだったときにソラが話しかけてきたが、なんの理由も無しに彼を嫌悪し、草太の勘違いで彼は蹴り飛ばされていた。当時はザマアと思っていたりしていたが、今では後悔している。

せつかく話しかけてくれたのに、友達になつてくれる子だったのに、私は拒絶してしまつた。

「あのとき神威くんが私の友達になつていたらどうなつていたのかな……」

「問答無用のお前の完成さ」

彼女が振り返ると雷斗がいた。どうやらドアを破つて入つてきたようだ。

「……………勝手に入らないで」

「どうでもいい。高町なのは、テメーに言いたいことがあつてきた」

「言いたいこと？」と聞くと彼は頷く。

「お前は『魔法』があるからみんながいると思つていようだが、勘違いも甚だしい。お前に魔法が無くとも誰もお前から離れない。お前は孤独じゃねえよ」

「勝手なこと言わないでッ」

「悪いが勝手言わせてもらおう。ぶつちやけ、テメーの勘違いぶりに腹が立つて仕方ないんだよ、コチラはッ」

雷斗はなのはを胸ぐらを掴んで怒鳴る。

「お前の仲間は魔法がなくなつた程度で離れるのかッ。テメーの作った絆はその程度の柔なもんなのかッ！」

「ッ……………」

「月村すずか、アリサ・バニングスの二人は魔法がなくともお前の親友だろうがッ。そう
だろッ！」

「そ、それは……………」

「テメーは魔法がなくともいるんだよ。テメーをちゃんと思つてくれるダチが。それが
テメーの作った『絆』だろーがッ！」

雷斗はそう言つて胸ぐらを離してやつた。

「もう一回行つてやる。テメーは孤独じゃない。テメーと出会つて、テメーと苦楽を共
にして、それからできたモノこそ、『絆』だ。そこんとこ覚えておいて八神はやたとフェ
イト・ハラオウンに心配かけたことを謝つてやれ。それにティアナともしつかり話し
合つてこい。アイツの実力ないって勘違いした結果がこのザマだからな」

雷斗はそう言つて部屋から出ていった。彼が曲がり角にさしかかつた境にエールが
ニコニコしながら彼の腕に抱きついてきた。

「雷斗は甘いなあ。なのはちゃんに手をさし伸ばしてあげるなんて♪」

「……………別に俺は助けたつもりはない」

「ツンデレ乙ー。まあ、あのままだったら私が手を伸ばしていたかもねん」

「お前の場合は『手を伸ばす』じゃなくて『手を出す』だろうが。どうせ、高町なのは倫理、信念、理想を自分好みにするつもりだったんだろ？」

「せいかい♪ ま、雷斗にとられちゃったからもういいけど」

エールは壊れた女だ。壊れた変態だ。彼女は楽しければそれでいいし、雷斗がいれば何もいらぬ『最凶』の神器使いだ。

なのはは危うく彼女の魔の手にかかるどころだったのだ。そうさせないためにも、雷斗は動いた。

まあ、主にこれ以上彼の心労が増えないための行動が良いように働いただけなのかもしれないが。

「アオくんと戦ったときに見せてくれたあの『狂気』をまた見たいなー♪」

「安心しろ。もうねーよ」

「なんで？ あの子はある意味狂っているんだよ？」

「残念だけどアイツは狂ってない。他者を思うほど心優しく、それに苦悩する——
そういう純粋な馬鹿だからな」

雷斗はそう言ってエールという重みを引きずりながら歩いていった。

☆☆☆

ティアナはなのはがいる部屋に向かっていた。とにかく自分がしたこと、信用できなかったことを謝りたかった。彼女が曲がり角にさしかかると、なんとバツタリ謝るべき人物と遭遇してしまった。

「なのはさん……………」

「ティアナ……………」

「気まずい。部屋に入る前に気合いを入れてから謝ろうと思っていたため、口が出ない。」

「あの……………その……………！……………」

「少しお話ししようか……………」

なのははティアナの手を握り、静かなところへ向かう。

ブリーフィングルームとして使われてる部屋に入り、彼女は椅子に腰掛けるように言いかける。

「ごめんね、あなたの気持ちをおわかってあげなくて……」

「いえ、こちらこそ。私もなのはさんを信用してなかったのですから、謝るべきは私です……」

また沈黙の空気となる。お互い口に出そうにも言葉が出ない。するとなのはは意を決してある事件を口に出した。

「私ね……昔、ティアナのようにな茶をしていた時期があったんだ……」

「そうなのですか？」

「うん。幼い頃の友達を『無血の死神』にどこかに飛ばされて、探すために寝る間や休む時間を割いて必死になって仕事をこなしていたんだ」

それを聞いてティアナは『無血の死神』の酷さに怒りが沸いたが、原因はなのはの友達にあったのだとなのは自身が言っていたため治まった。

—— 『無血の死神』も大切な人に手を出され、挙げ句の果てにバラバラにされた。だから管理局を憎悪しているんだ

「でね、ある日事件が起きたの。その日の任務の帰りにアンノウンと呼ばれるモノに襲撃されて重傷を負ったんだ。普通の私ならそんなモノには負けるはずはなかったと思う。でも無茶をしていたから、身体に疲労がたまっていて、あっさり敗北。さらに身体が動けなくなっただけでも魔法も二度と使えないとも言われていたんだ」

「ッ……………」

「私は『魔法』がなくなるとは嫌だ。みんなとられる『絆』がなくなるのは嫌だッ。つて思つて必死にリハビリしたんだ。そのおかげで今の私はいるんだ。でも、今日。雷斗くんに言われたよ……………勘違いしているつて」

「雷斗が、ですか？」

「うん。私の『絆』は『魔法』で繋がっているわけじゃなかった。出会つて一緒にいたときからあつたんだ。元々あつたんだつて、ね。私はたぶん『魔法』に依存していたんだよ、きつと」

彼女は俯いていた。ティアナに今の自分の顔を見せたくない。こんな……………こんな情けない顔を……………

「なのはさん……………」

「うん、大丈夫……………平気だから。それから私はこれを教訓にしてみんなに無茶な訓練させないようになつたと思うようになつたんだ。だからティアナのあの連携が許せなくて……………」

「ごめなさいッ。私……………私はあなたの気持ちをわかつていなくてッ」

「もう気にしてないよ。それにティアナは才能ないとか言つてるけど、違ふよ。指揮官としての能力や状況の洞察力、それに射撃の精密度は誰よりも上だよ」

なのははそう言ってクロスミラージュを出すように言う。彼女はティアナのデバイスにあるダガーモードを解放する。

「これは……………」

「もっと早く解放すればよかったね。ごめんね、遅くなって……………」

「いえ、私の方こそ…………ごめんない…………。遅くなってしまつて……………」

感情が思わず溢れてしまいお互い抱き締める。百合百合しい展開だなーとこのときエールがいたなら、そう口に出していた。

しかし、今彼女はいいない。しかもそれだけでなく雷斗、シイ、サイト、キリト、アスナもいなかった。

彼らと彼女達はそれぞれ出かけていた。

——だからだろうか…………六課は気づかなかつた。

ウーウーツ!!

「警報!?!」

「六課に侵入者!?! いったい誰がッ」

さらに防衛システムでブリーフィングルームにシャッターが落ちた。出られない！
中枢機能に何者かがハッキングしたの!?

なのはそう思いながら通信をフェイト達に繋げる。どうやら彼女達も閉じ込められていたようだ。

「いったい何が……」

『大変ですッ』

グリフィスから届いた通信は意外なことだった

☆☆☆

轟音がする。誰かが壁を破っているようだ。

いったい誰が破っている？

誰がこちらに向かっている？

アオはそんなことを考えていると目の前の壁がひび割れて、その犯人が姿を現した。

「よお、『偽物』。何か良いことでもあったのか？」

「やあ、『本物』。別にないさ。いつものように変態やってたら捕まっただけさ」
『本物』と『偽物』。

再会する『全てを開く者』を持つ二人。

彼と『彼』はお互い再び出会えたことに笑みを浮かべる。

第百六話

(??サイド)

ソラは神全てを開く者器を肩に抱えて、目の前の少年を見据える。

それに対してアオは姿勢を変えず、ただソラを見ていた。

「この騒ぎを起こしたのお前？」

「まあな。そろそろつて千香が行つてオレをここに向かうように言われてな。来てみたらドンピシャ、お前が捕まつて絶望してるじゃありませんか」

「別に絶望はしてないさ。いや、絶望は少ししてるか……」

「へえ、どんなことに？」

「お前の『偽物』だつてことさ」

アオは絶望していた。

それもそうだ。『彼』はやつと思ひ出した記憶が『偽物』である事実だったのだから。彼はソラによつて記憶を封印されていたのだ。そして封印された記憶には彼の正体があつた。

『人造神器使い開発プロジェクト』。通常の神器使いよりスペックより高い神器使いを創造し、戦争の道具として使うために開発された計画だろ。かつて『No. 14』——いや今は『天ヶ瀬千香』という名前か。前世の彼女もこの計画で産み出された神器使いだ。前世の彼女のスペックは異常だったしな」

記憶力、身体能力、魔力の創造力——前世の千香は幼いながらもそれらが異常なほど長けていた。

中でも魔力の創造力はかなり難しい。体力と精神力を混ぜて練るとか普通の子どもができるはずがない。

しかし、それができたのが『千香』である。ソラのように死ぬ気でやらないとできない『天才』に比べて千香はまさに造られた『神童』ということだ。

ソラはアオの答え合わせに耳を傾けていた。今のところは何も言わない辺り、間違いはない。

「そして『オレ』はプロジェクトFを使って産み出された『人造神器使い』。タイプはおそらく——あんただろ」

それがアオの答えだ。モデルはおそらく『神威ソラ』。

『全てを開く者』を持つ神器使いは彼しかない。だからこそその『偽物』とアオは名乗った。

——造られた存在

——ソラのコピー

それらの意味を踏まえて。

しかしソラは鼻で笑って「違う違う」と言わんばかりに首を振る。

「違うのか？」

「半分正解だが満点はあげられない。確かにお前のモデルは『神威ソラ』だ。だが、お前のモデルはそれだけじゃないんだよ」

「どういうことだ？」とアオは喰エクストラってかかった。

「お前の正式名は『ナンバーズ番外』。モデルは『神威ソラ』、それから——

——『天ヶ瀬千香』

「んなッ!？」

「驚いただろ? お前のママはあの千香なんだぜ?」

なぜ千香の因子を入れ込む必要があったのだろうか?

そんな疑問に答えるかのようにソラは続けて口に出す。

『人造神器使い開発プロジェクト』は確かに優秀な人材確保はもってこいだった。けれど、前世のオレ達の世界では同時にかなりのリスクとコストがかかる計画だった。わかるか?」

「……実験体と費用、そして神器の欠陥化」

「正解。実験体はクローンか孤児達を使えば問題ないが、拒絶反応を考えてどちらを選ぶと言えばクローンの方が成功率が高かったため

クローン製作には主要にした。だけどクローンの製作にはかなりの費用があったし、ここと比べて製作には失敗が多かった。また拒絶反応でたまたま欠陥化する神器も出てきたため、『人造神器使い』の創造はあまりに少なかった」

「しかしそれはプロジェクトFでクローンの問題は解決された」

「そういうこと———とほいたいところだが、お前を開発するにはクローンが誕生するまでの死亡確率が高かった。なぜかわからないけど、神器使いを生み出すにはプロ

ジエクトFではなんらかの力が働いていたんだろな。だからスカさんはいろんな遺伝子を使って創造しようとしていたよ」

例えば朱美まどか。

例えば朱美ほむら。

例えば友江さやか。

例えば友江杏子。

例えば友江マミ。

当初、試作段階で彼女達の遺伝子を使って生み出そうとしたが、なぜか彼女達は生み出される前に死亡してしまった。

「それからはコンピュータから演算した結果、成功率が高かそうなオレの遺伝子を使ったクローンを創造することを決めた。が、やはりクローンが生まれる前から死んじゃうことが多かった。失敗が付き物だったんだよ」

「ここまでが失敗談。彼は「だけど」と続けて口に出した。

「それを解決した方法を生み出した」

「まさか……『人造神器使い』の遺伝子……?」

「そゆこと。千香は転生するときに頼んだ身体は『人造神器使い』のモノって女神に頼んだみたいなんだ。だからその遺伝子をしっかり持っていた。

スカさんはその遺伝子を目につけてオレの遺伝子とそれを掛け合わせてプロジェクトFを造り出した。

そしてやっと誕生したのはお前ってことさ。

結果は失敗だったが」

「失敗？」

「お前は生まれつき『全てを開く者』を持つていないんだよ。そのアクセサリーが証拠だ」

アオの神器は生まれつきではなかった。『人造神器使い』は生み出されたときから神器があることが必須である。ゆえに『失敗』だった。

「だが、お前は神器の適正が高かったから処分されず、逆にお前に合う神器を千香はお前を連れて、異世界に向かったらしいな。」

……そしてキリトがいた世界で見つけた。オベイロンが持っていたアクセサリーにされた神器——『全てを開く者』を」

ソラが思い出すのは千香と共にいた黒いレインコートで顔を隠していた小さな少年。その少年こそアオだった。

あのときのアオには『人形』という言葉がふさわしかった。

「それからあんたの修行を受けて記憶を封印された……………そんなところか？ 『先

生』

「そんなところだな」

先生の正体はソラだった。彼の実践経験がある理由はソラの修行の賜物だったのだ。「ま、意外だったのはさやかと一緒に鍛練していたときにヤツが使っていた『神速』がでるようになっていたことかな」

まさしく『神童』。一度見た技を模倣できる天才だ。

「オレとしてはさやかの因子があるんじゃないやねって思ったよ。あいつって一目見ただけで剣術を模倣できるし」

「アホの子因子が入っていたら今ごろ脳筋発言してたって」

「お前って口が悪いな」

「パパに似たんだよ」

ニヒルに笑うアオにソラは呆れながら嘆息を吐いた。

—— オレってそんなに口がひどいのかねー。まあ、自覚してるけど
そう思いながら彼は本題へと入った。

「アオ、オレと来い」

「管理局を裏切れ……と？」

「お前の居場所がここにあると思ってるのか？ 『無血の死神』は管理局にとって恐怖

の対象だ。そのコピーであるお前も恐れられる対象——または怨恨の対象になる」
迷惑な話だ。この人が勝手に恐怖の対象になっただけでこちらにも被害を被る可能性があるなんて。

アオは嘆息を吐いた。いずれにせよ、アオの正体がバレなければなんの問題はないが、スカリエツティが情報をばら蒔く可能性もある。

ヤツは混沌を指す者——天ヶ瀬千香と同類で彼女と比べるとややマイルドで迷惑な人物だ。

まあ悪い人ではないと彼の記憶にあった。

「確かに悪くない。スカリエツティは自分にとつてもう一人の父みたいなものだ。あの人はどうもフェニミストみたいだし」

「自ら生み出した戦闘機人を『娘』って呼んでいるしな」

「だから信用できる人だろうな。自分があの人に造られた存在だからこそ、な」
ソラは期待した。

おつ、脈ありか？と彼は思っていた。だから彼はアオに手を差し伸べた。
そしてアオは答えた。その答えは行動によって示される——

☆☆☆

「ああもう、なんやねん！ このウイルスはツ。さつきから『Yes we can！』とか『I can fly！』とかめちやくちや流暢な英語ばかり言つとるのが腹立つ！」

「通称ノバウイルスです。たまにノヴァうさぎとか出てくるハッキングのようなウイルスです」

「どうでもいいわッ！」

グリフィスははやてに焦っていることがよくわかっていた。なんとかわけのわからないウイルスで六課は乗っ取られ、『無血の死神』がアオを監禁してる部屋に入っているのだから。それは映像で確認済みである。

今のところこのウイルスを駆除しているので、六課の七割の機能は回復している。隊長達も解放されて、今アオのいる部屋に向かっていた。

（なのはちゃんの砲撃なら一発やけど今の彼女に魔法の力はない）

だからこそ今の今だったのだろうか。

アオを閉じ込められ絶望している。今の彼ならばスカリエッティに寝返る可能性は

ないとも言えない。

なのは魔法の力を失い何もできない。今の彼女は何も無いか弱い女性だ。今だからこそ狙ってきただろう。

「フェイトちゃん、早く行って。ソラくんが勧誘しとる！」

『したいのは山々だけどなぜかこのシャッターが多いし、魔力が上手く練れない！』

おそらくA アンチ・マギリング・ファイルド M Fが展開されているのだろう。完全なる時間稼ぎだ。

これだと早くアオのところにはいけない。

するとスバルから通信が入った。

『大変です八神隊長！ 十香さんが、十香さんがいません！』

「なんやって!？」

『あと、あとッ』

「落ち着いて。あと……なんや?」

スバルの通信から伝わった情報を知ったはやては思わず愕然した。しかし絶望からの愕然ではない。

呆れの愕然だった。だからこそ、彼に頼むしかはやてには手立てがない。

「頼むで……」

彼はアオのところに向かっている。アオの命運は彼に委ねられたのだ。

「大丈夫なのか？」

「ちよつぱり痛いや。だから先制は任せた」

「うむッ、任せろ！」

（さてさて、久しぶりの運動だ。どこまで動けるかな？）

彼は笑う。久しぶりに戦う相手だからこそ、楽しみなのだから。そして彼は最後のシャッターを『切り裂いた』。

☆☆☆

「……………それがお前の答えか」

アオはボロボロの身体で膝についていた。狭いところで彼はソラに攻撃をしかけて、

どこかの次元世界に誘導され、そして敗北した。

やはり経験の差が大きい。アオでは戦争で英雄となった男には敵わない。

現在、アオとソラは元の部屋にいた。すると、ソラはアオに聞いてきた。

「なぜ断った？」

「自分がなりたいのは……救いのヒーロー。だからあんたみたいな悪党にはなりたくない……」

「……だとお前は拒絶されるのだから？　悪党だとかヒーローだとかそんなくならない区

切りにこだわるのか？」

「……だわ、るさッ！」

彼は叫ぶ。立ち上がって神器を構えた。

「あんたはかつてヒーローに憧れた。救いを求める人を助ける救いのヒーローに。自分は先生がなれなかったものをなりたいたいだよ！」

アオの心にいた少年——幼いソラは泣いていた。それはソラの嘆きの声だとアオは思っている。

「それに自分は約束したんだ。白髪の少年の『ライル』とッ！」

白髪の少年と聞いてソラは目を開いた。

間違いない。こいつはオレや千香だけでない……『全てを開く者』を持っていた

少年の魂がある。ソラはオベイロン殺された少年——ライルを弔った。そのとき彼の特徴を知っていた。

アオがライルの特徴と名前を言っていた辺り、彼の中にライルがいるのだろう。

いやアオ＝ライルと考えるべきだろう。かつてのアオは魂無き人形みたいな者だった。

ならばその白髪の少年の魂を埋め込むことで自我を得たのでは？

ソラはそう思っていたがその考えを首を振る。

「安心してとつと死ね」

ソラはアオを殺すことはやめない。理由は簡単。自分達の脅威になる。

——千香はアオをオレソラに近づけようとしているが、どのみちオレの復讐には障害だ

可能性が無限大。自分だからこそ、侮れない。

だから始末する。

だから殺す。

だから消す。

もはや仲間にならないこの敵を殺すしかない。

そしてソラの斬撃がアオの首を狙う——

「させるかよ」

アオに当たるはずの曲線は何者かの刃物に阻まれた。そしてソラはアオを守った男に蹴り飛ばされる。ソラはその男を見た。

それから笑みが溢れた。だってそいつは——

「よお、ソラ。辺り何か良いことでもあったのか？」

「ああ。お前が元気になったことに、な——

——四季」

四季と十香はアオを守るかのようにソラの前に立ちはだかる。

第一百七話

四季とポニテの女………いや夜刀神十香だっけ？

まあいい。こいつらがオレの前に立ちはだかる状況ははつきり言つてオレは不利だ。特に四季だ。なんでもヤツは錬金術が使い、神器以外のなんでも切り裂く力がある。当たらなければなんともないが、師匠の知り合いに弱いヤツはいない。

例えばエール。

彼女は戦争にも関わらず、パイで敵を排除していた。

いやマジで。

パイ投げで敵を排除していた。

何やってんだッ！つてツツコんでいたけど、あのパイはクソ不味い必殺料理人作の科

学兵器だったらしい。

ある意味凶悪だったと思う思い出だが、よくよく考えていればエールは全く汚れていなかった。

つまり四方八方の攻撃を防いだけでなく砂煙でさえ浴びていなかった。

真面目な話を言えば師匠の知り合いは人外どころか超人だと思う。その超人っぽい

のが目の前にいるわけだが、まあ油断ならない敵というわけだ。

「それで助けに来たわけか？」

「いやお前に会いに来た。そこに瀕死になつて役立たずはどうでもいい」

「役立たず言うなッ！」

アオは文句を言うがどこ風吹こうがおかまない無しに会話を続ける。

「お前に聞きたい。十香のこのコスチュームについてどう思う？」

「は？」

いきなり何を聞いているのかと問い詰めようとしていたら、四季がポチツとなどポタンを押した。

すると、夜刀神の服装が変わった。カジュアルな服がいきなり――

——バニーガールになった。ハイグレで網タイツ。足と胸に目がいきそうなセクシーな格好でうさ耳がピヨピヨ動くというセクシーとかわいらしさを表現する衣装になっていた。

「し、シキツ。これはどういうことだ!？」

「八神はやてからもらったデバイスの情報を使って簡易式のバリアジャケットさ。ここに行く前にお前に渡した腕輪がソレだ」

「だ、だだだだからと言ってここ、このような格好をさせる必要がある!？」

全くだ。なんの必要があつて夜刀神にこんな格好をさせたんだ。そう聞いてみると四季はフフンと胸を張り答えた。

「全ては『萌え』のためだ」

はい？

「この俺が真理の扉で得た情報でさえ理解できなかつた新たな真理。かわいい、美しい、妖艶などなどというどの言葉にも当てはまらない言葉。そう、俺は探究したいのだ——

——『萌え』をッ！」

「さて、第二モードは裸エプロンだ。見たい人、挙手」

「シキイイイイ!?」

十香は顔を真っ赤にしながらツツコミながら止めようとするが、鍊金術で造られた手錠で手足を封じられて動けなくなる。「それで答えは？」とオレ達に聞いてきた。

「見たいです、先生!」

「よろしい。さあ共に『萌え』を理解しよう!」

四季は再びボタンを押そうとした。しかし、彼はいきなり事切れたかのように倒れた。

「え?」と呟いたとき、次に倒れたのはアオだった。

二人とも眠っていた。いや意識がなかった。これはいつたい……………。

「ソ〜ラ〜く〜ん?」

優しい声の後ろから聞こえて背中から抱きつかれたが、振り替えるのがめちやくちや怖い。振り返りたくない。しかし、振り替えられなければ彼女はさらに怒りを燃やすだろう。

ギギギとブリキのような音を立てながら首を背後に向ける。

そこにいたのは女神——という名前の鬼神。

うん、円環の理の状態のまどかさんがいるではありませんか。なんだ。優しい優しい愛する彼女じゃないか。

というわけで離してよ。

「ヤダ。ソラくんにはお仕置きしないと駄目だからねー」

「な、なぜわたくしめがお仕置きされなきやならないのですか？」

「乙女を泣かしてあまつさえ、欲情していたから」

「欲情じゃないって。こ、これは……………そう萌えだ！ 萌えという概念を深めていたんだー！」

「ふーん……………」

あ、ヤベ。なんか言い訳したせいで余計に怒らせたつばい。

というわけで——逃げるんだよオオオオオオ！

「逃がさない」

「キャウンツ」

襟首掴まれた。てか、概念化したまどかから逃げられるわけなかったアアアアア！

「それじゃ♪ 少し頭を冷そうか……………」

「お、お慈悲をオオオオオオ！」

いたが。

なのはアオによって魔法の力を取り戻したが、しばらくは雷斗の指導の元でクロスレンジの特訓をすることになった。魔法に頼らない戦法を得るためが目的である。

なお、そのときの彼女の雷斗を見る目が友人とは違う好意的なモノだったとはやては言っていた。もしかすると特訓は建前ではとはやては推測している。

雷斗に恋する乙女が増えたことはエールによつてすずかとアリサに伝えられ、彼女達もミツドに来ようとしていた。

さすがに不味いのではやては説得したが、治まる気配がなかったので後日の休みで彼女達は来ることになった。エールの修羅場計画は順調である。

アオは自分の正体を六課に暴露した。はやてやティアナなどフオアード達や隊長達はアオの正体を知り、局員達は最初はあまり良い顔をしなかったが、衛となのはによつて彼は彼だと認識し、いつものように接するようになった。

彼のセクハラは相変わらずだが、なのはによつて制裁されていたりしている。まるで姉と弟みたいだなーなのが局員達の印象である。

以上、少年二人と教官一人の成り行きである。

「ティアナさん、今日のパンツは何色ー」

「『スターライトブレイカアアアアツツ』!!」

「アアアアアアツツ!!」

なお、アオのセクハラでティアナが『スターライトブレイカー』を覚えた。何それ怖い。

閑話休題

その日、六課のフォアード達は休日を得た。訓練と度々あるスカリエツテイ関連の事件にさすがに休み無しはキツイ。なので上層部のお偉い方にO☆HA☆NA☆SHIしてわかってくれた。

さすが我らの魔王様と言っておこう。さて、そんな休日にエリオは困っていた。

彼は二次元に逃げていた時期があったが、やはり現実から逃げるわけにはいかないため自重し始めた。

いや彼もがんばっていたよ？ 必死に受容しようと、ありのままに受け入れようとしていたがキャロの暴走は予想の斜め上だったため勝てなかった。恐るべし、ヤンデレストーカー。

もはやエリオにとってキャロは苦手な美少女である。出会えば至る所にキスしてくるし、お尻も触ってくる。

なので出来るだけ会いたくない。

「右……………よし。左……………よし！」

「甘いよ、エリオくん」

「ッ！」

エリオは振り返る。そこにいたのはキャロ……………ではなくキャロの立体映像が映った虚像だった。

「残像よ」と呟いて本物のキャロはエリオを縄で捕まえた。

「さあデートに逝こうよ！」

「ちよつと待つて！ 字が違うッ」

「あ。そうだね。じゃあ、一緒にイこうよ！」

「それも違う！ というか、せめてまともな状態で連れて行ってエエエエッ！」

哀れ。エリオはキャロによつて連れて行かれる。彼の休日はまだキャロによつて潰されるだろう。

「エリオも大変だな。彼女がヤンデレとかもはや悪夢だな」

「雷斗ー、アリサとすずかさんがここに来てと君とお話したいって」

雷斗は逃げ出した！

しかし魔王達から逃れられない！

「どこに行こうと言うの？ 雷斗」

「そうだよ。ちゃーんとお話しないといけないんだよ？」

アリサとすずか。ムチと鋼鉄のヒールを装備した女性達が雷斗を捕まえていた。

「……………めんどくさい」

その後、彼は二人の美女の攻めから逃げ出すこととなった。彼の災難はいつもエールによって呼び起こされているのだった。

「し、シキ！　こ、この服はなんなのだ!?!」

「デイラー。なかなか萌えるだろ」

なお、その日。十香は四季によって着せ替え人形させられていた。ヴァイスなどの男性陣にとって眼福だったと追記しておく。

第八百八話

(??サイド)

ティアナとスバルはヴァイスのバイクで風となり、エリオはキャロの強制デート、雷斗はなのは、すずか、アリサという三大美女とリアル鬼ごっこという充実な休日をお過ごししている。

あれ？ 最初以外ろくなモノじゃない？

まあいいや。

そんなこんなで一人になったアオはシイに誘われて外に出かけていた。カフェで彼女とお話が出たからだ。

「お兄ちゃんのクローン……だったよね？」

「厳密にはプロジェクトFで造られた『人造神器使い』だ。まあ違いがあるとすれば信念だな。アイツは切り捨てるモノは切り捨てるが、自分は絶対に切り捨てない」

「……………理想論ね」

「確かにそうさ。でもいいじゃん。簡単に諦めるより最後の最後まで足掻き、苦しんで、

成功を掴む。そういうもんだろ、夢や理想って」

そういうところは実はソラもそうなのだが、彼は最後の最後で、どうしようもなければ切り捨てる。アオは逆にどうしようもなからうが足掻く。

諦めないと諦める。それがアオとソラの違いである。

「……お兄ちゃんは私のことが嫌いなのかな」

「さあな。でも『ソラ』の記憶ではアンタの母親はアイツを拒絶した。会いたくて会いたくて仕方なかった人に、否定され、拒絶されたことはアイツにとってトラウマになっているんだ」

「一ノ瀬という名前が？」

「いや血の繋がりがだよ。もっともアイツにとつて『一ノ瀬ソラ』は理想を目指して師匠——『五木雷斗』を死なせてしまった忌むべき過去の存在だ。だからこそ、『一ノ瀬』という名前が許せないんだ。思い出すだけで腹が立つ………ってな」

それがソラがシイを拒絶する理由。自分の過去を思い出させるトラウマと思い出を持つ存在が許せない。

だから拒絶したのだろうとアオは推測した。

「つまりソラにとつて『一ノ瀬』の名前と思い出は地雷なんだろうな。シイさんが彼のことを『一ノ瀬』と言わない限り、大丈夫だと思う」

「……………」

「シイさんには悪いが、あの人は変わってしまったんだ。もうあの人に優しい心はない。敵を許さない冷酷な『無血の死神』さ」

シイがソラと出会ったのは母親が彼を拒絶したときだ。知らない男の子だったが、彼女は彼が悪い人ではないという印象だった。

会いたかった。父親が違うとは言え、兄と呼べるべき人に。そしてごめんなさいと言いたかった。シイの前世はそんな後悔がある人生だった。

「私は諦めません……。兄に拒絶されようとあの人は私の兄ですから」
それでいい、とアオは思いながらコーヒーを口に含んだ。

結局、彼女の意思を尊重するのでいいやと思っている。

すると、シイのデバイスから通信が入った。どうやらエリオとキャロからのようだ。

「アオ、エリオとキャロが小さな女の子を保護したようです」

「へー、なんか訳ありみたいだな」

「そしてキャロが呪詛を吐きながら呪い人形を五寸釘で打っています」

「ちよい待ち。どんな力オスだよ」

大方、デートの邪魔をされたことに対して腹を立てているが呪い人形に五寸釘とはシャレにならない。何してんだホント。

「現場に行きますか」

「そだな。てか、ドコでもドアが使えたらなあ……」

「あなたができるのは『解錠』と『封印』くらいですからね」

アオはまだ『全てを開く者』を完璧に使いこなせていない。そこがソラと差があると
言えばそれまでだが、まあなんにせよ。彼と彼女は現場に向かうのだった。

(エリオサイド)

どうもエリオです。キャロに拉致され、強制デートで振り回されていたがマンホール
から小さな女の子が出てきた。人気のないところのマンホールだったのであまり騒ぎ
にならなかつた。

え？　なんでそんな場所に僕達がいたって？

……察してください。キャロの暴走はもうどうにも止まりません。しかもどこから
か入手したのか呪いの人形と五寸釘を持っていたし。その人形がどこかの魔王の亡霊
だったし。

まあそれは雷斗さんから学んだ念仏で成仏させたが、今はどうでもいいです。僕とキャロ、スバルさんとティアナさんはマンホールの下にある水道を調査することとなった。どうもレリックがあるみたいだったので。

「チツ、せつかくエリオくとラブいちやデートしていたのに」

「あからさまに舌打ちしないで。キャロのファンに怒られるから……」

「大丈夫だよ金ちゃん。ヤンデレがステータスなのは私の個性だから」

「誰が金ちゃんだし。緋弾の人とゴツチャにしないで」

「そんな細かいこと気にしていると禿げるゾディアック卿の逆襲☆」

「ウザいし、わけがわからないよ。てか、どこのアイドルだよキャロは」

中の人ネタにはしる暴走少女キャロにツツコミながら僕は前に進む。すると、声が聞こえた。どうなら先客がいたようだ。

「チビツ子達、合図を出したら、私達が敵を引き付けておくからその間にレリックを確保しなさい」

「そして愛の逃走しろってことですね。わかります」

「オイこらピンク。アンタいい加減に自重しろよ。ツツコミする暇がないのよ、こっちは」

青筋を浮かべてクロスミラージュを構えるティアナさん。最近、彼女が怖いです。ア

オさんのせいだと思ってましたが雷斗さん式ブートキャンプで凶暴化してるような気がします。このままだと第二のキチガイが誕生するのでしょうか……。

「最近のティアナは怖いね……」

「スバルさんもそう思いますか？」

「夜中に閃光弾を作っていたからね」

「何に使うのかな……」

ティアナさんの凶暴化に憂鬱なため息を吐いていると彼女は僕達に耳栓を渡してきました。

え、何に……と言おうとしたとき彼女はパイナップル状の金属からピンを引き抜き、敵に向けて投げた。

ドガアアアアン!!

軽い爆発が起きました。

「つて、ティアナさん>NN>NNツ!!」

「何よチビツ子。さっさと行きなさい。とどめをさしたら私も行くから」

「いや質量兵器を使いましたよね!? 思いきり爆殺しましたよね敵を!」

「バレなきやいいのよ、バレなきや」

黒ッ！ この人黒い！

平然としているなんてどんだけ雷斗さんに染まっているのですか!? あの人もあの人で普通にトラップや爆撃を使ってきますしね！

「つべこべ言わずさっさと行く！ さもなければ逝かせるわよ？」

「イエス・مامツ!!」

僕とキャラはさっさと進むのだった。だってクロスミラージュを眉間に標準されていたら誰だつて逃げますつて！

「あ。それよりエリオくん、この後一緒にお風呂入ろうよ。別に何もしないから♪

ハアハア……………」

「僕に味方はいないのかッ！」

まさに四面楚歌。もう二次元に逃げたい今日この頃。誰か僕を助けてください……………」

「変態だー！ー！！ ピチピチタイツを着た変態がいるウウウウウー！」

「スカリエツテイのナンバーズって変態ばかりなの？」

「「んなわけあるかアアアアアアアッ！！」」

最後にスバルさんの叫びと三人の女性のツッコミが聞こえて僕の思考は現実から逃避した。帰ったら『劇場版エヴァンゲリオン』を見よ。

僕は決め顔でそう思う（偽物語より）

（??サイド）

ルーテシア・アルピーノはレリックを探していた。彼女は仲間であるアギトとチンクと共にレリックを探していたりするが、実は違う。母親はもう目覚めさせているし、

ぶつちやけスカリエツテイともう協力関係を結ぶ必要はないが、友達感覚でお願いを聞いている。

彼女は千香の教育のおかげで変態化はしてないが思考回路が快樂主義というヤバい子どもになっていた。元々イタズラ好きで社交的だったようなので、それが早い段階で覚醒してハツチャケキャラになってしまったようだ。

なお、メガーヌも実はハツチャケキャラだったのでルーテシアを止めなかつたことを追記しておく。なんか不満があつたのかもしれないね、きつと。

さて話は変わるがルーテシアには目的がある。そう、彼に会うためだ。イタズラという名目で参加していたが、彼女は意中の少年がいた。きつかけはアグスタ。一目見たときから『ユー恋してる』である。

悩み悩み苦しんだ末に母親に説得され、彼女は戦いの地に立つことで彼とお話をしようとして決意したのだ。ルーテシアはポケットからその意中の少年の写真を取り出す。

「もうすぐ会えるね……………エリオくうんツ♪」

笑う、嗤う、ワラウ。

なんととかヤンデレ的な笑みにアギトはドン引き、チンクはルーテシアの意中の少年に同情した。

そんな主であるルーテシアにガリユーは思う。

——
あれ？
なんでこうなった？

第百九話

(??サイド)

ティアナは戦闘機人の三人娘と戦っていた。ガンナツクルや双剣、盾というコンビネーションでティアナを翻弄しようとするがヒラリヒラリと僅かな隙を作って回避したり、わざわざフェイントに突っ込まない。たまに攻撃に移るが、なぜか盾を持つ戦闘機人ばかり狙っていた。

「それでピチピチ変態タイツ集団、アンタ達は何者なの？」

「誰が変態よ！ というかその名前で呼ぶな。私にはノーヴェという名前がある！」

「同じくウエンディッス」

「デイドです」

「なるほど三人揃って『埼玉ピチピチタイツ隊』ってことね」

「『その名でくくるなッ!!』」

ノーヴェ・ウエンディ・デイドはティアナのペースにのまれてスバルの注意を疎か

にしてしまった。そのため、スバルはノーヴェを殴り飛ばし、デイドを蹴り飛ばす。それぞれ防御が間に合ったが、少しダメージを受けてしまった。

それからティアナは再びウエンディへスファイアや魔力弾を集中放火した。

「ちよ、なんで自分に集中放火ツスか!？」

「盾だからよ。なんか耐久力ありそうだし、後々防御されたら堪らないし、それに」

「そ、それに……?」

「その口調が腹立つ。だからくたばれ。今すぐ倒れろ」

「ちよつとこの人怖いツスウウウウ!」

問答無用なティアナから救おうとノーヴェとウエンディはスバルから押し通ろうとする。深呼吸したスバルは高速連続パンチをノーヴェに与えた。ノーヴェはそれを受け流して捌くが辛そうだった。

「オラアツツ!!」

「く、アアアアア!？」

「へえ………私のラツシュを捌くなんてなかなかじゃん」

「どんだけえげつない攻撃するのよあんだ!」

「これならどうツ? ポケガエルウウウウ!」

スバルの拳をノーヴェエはその場を飛んで避けた。すると壁にクレーターができた。それを見たノーヴェエは青ざめる。

「外したか」

「外したじゃないわよッ。何アレ!? 殺す気満々じゃん!」

「私の中のボケガエルの怒りが爆発しちゃってね、テへ☆」

「こえーよ!! てか、ボケガエルって何!?!」

「細かいことは気にしない! 私は掛け声を出すことでどうも威力を発揮するタイプだからこうやって掛け声を出すんだ!」

「掛け声がメタイのは気のせい?」

「よーし、次は——まどかアアアア!!」

「なんであんたがまどかさんを知ってるの!?!」

ノーヴェエはもはや形無しのキャラ崩壊をしていた。ツツコミが彼女を変えてしまったのだ。

そういえばスバルと朱美ほむらの声って似てるわねーと思いつながらティアナはウエインデイとデイドにまた集中放火を与える。

「さあ泣け、叫べ、苦しめ! 私をもっと楽しませなさい!」

「こいつ第二の魔王ツスよオオオオオ!」

エリオは当たってしまった人に謝ろうと後ろを振り返る。

そして、そこでふと疑問に思う。

—— 僕ら以外にここに人がいたっけ？

「みーつけた♪」

それを理解したとき下がろうとしたが紫髪の少女に縄で拘束された。そこであえての亀甲縛りなのはツツコまないにして、エリオは焦燥にかられる。

まさか敵に捕まってしまうなんてッ！

すると今度は銀髪の眼帯少女が口を開く。

「エリオ・モンディアルだな」

「そうですが、何か？」

「最初に言っておこう——

——「スマン……」

冷たく返したつもりがなぜか謝られた。何がと聞こうとしたら紫髪の少女ことルーテシアが彼の唇に自分の唇を押し付けた。

ズキユウウウウウウウンツツツ!!

画風がどこかの作者に変わり、背景にそんな音になった気がしたとチンクは思った。その光景を見たキャラは絶句、エリオは驚愕、アギトは興奮していた。

「さすがルールーツ。あたし達に出来ないことを平然とやってのけるウ！　そこに痺れる憧れるウツ！」

「いや憧れるものなのか？　姉にはわからん……」

なぜかそう言わなければと言ったアギトにチンクはツッコむ。するとルーテシアの長いキスは終わり、エリオの唇を離す。そして自身に指を向けてキヤロに宣言した。

「エリオくん、あなたの初めてはキヤロでもチンクでもない。この私、ルーテシアがもらったアアアア!!」

「いやなぜに姉も含まれる」

そこはノリである。そしてキヤロはそれを聞いて身体をフルフル震わせる。当然だ。意中の少年が目の前でファーストキスを他の女に奪われたのだから。

「ルーちゃあん、絶対に許さないッ！ あなたが泣いて謝るまで殴るウウウウー！」
「上等。来なよ」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!

またもや画風がどこかの作者のモノに変わり、背景にそんな音が浮かび上がる。

だからなんなのだ、この画風と音は……………と思いつつながら呆然損失しているエリオに肩を叩く。

「おい、大丈夫か……………?」

「う、ウウ……………」

「うわー……………戦意損失どころかガチ泣きしてるぞ、コイツ」

哀れエリオ。変態に標的とされ、あまつさえ変な女の子にファーストキスを奪われるという悲劇に合い、絶望している。

「もう泣くな。男はくよくよするもんじゃないだろ。な？」

「ち、チンク姉さん……………」

「よしよし頑張ったな。だから姉の胸で泣きな。泣き止んだら立ち直れ。わかった？」
「う、うわアアアアアッ！」

エリオはチンクの胸で泣き始めた。これまで溜めていた心労が爆発したのだろう。歳に合う少年は本気で泣いた。それをチンクは彼の背中を優しく撫でて癒すのだった。

「あ、ヤベ。なんかキユンツと来るなコイツ。さらって見ようかな」

「チンクウウウウウウ抜け駆けは許さぬウウウウウツ！」

「うん、とりあえずお前らは元に戻れ。さつきから違う画風だし、キャラ崩壊が激しすぎる。てか、その『ドドドドド』を消せ。うるさい」

その様子を見てアギトは思う。

——なにこの茶番

☆☆☆

一方、残りのメンバーはガジェットを殲滅していた。そしてなのはは保護した幼女を狙ったヘリを守り、居場所を特定してからフェイトと一緒に向かって、接敵した。

「死ねエエエエエクスメガネエエエエ!!」

「うきやアアアア!?!」

見つけた瞬間に砲撃で消し飛ばそうとした。それに対してクアットロは不満をぶつける。

「いきなり砲撃を撃ちますか普通う?!」

「うるさいの。雷斗くんは敵を見つけたら問答無用にぶち殺せって言われてるの。だから撃って当然なの」

「どんな常識?! 普通バインドで束縛するもんでしょお!?!」

「さつきからうるさいなあ。……おいで、遊んであげる。小娘♪」

「助けてオヤシロ様アアアア!」

再び行われるガンガンいこうぜ。そして巻き込まれたナンバーズ十番のデイエチも涙目で逃げる。バレたらそれまでだったのだ。

そしてフェイトは自称謎の美少女仮面と戦っていた。

「ちよつとー『自称』はつけないでよー」

「というか自分で『美少女』とかイタイですよ、姉さん」

「いやそこでネタバレしちゃうの？ 読者のみなさんが楽しみしていた『驚愕！ あなたとは姉妹！』というネタをバラしちゃうの？」

「安心してください。読者のみなさんは既にあなたの正体はアリシア姉さんって知っていますから。というかぶっちゃけバレバレですし、問題ないでしょうに」

「なんかメタい！ フェイトがセメントでメタいことに全国のお姉ちゃんは泣いたッ！」

泣いた素振りを見せるアリシアにフェイトは呆れながらバルディッシュを構える。

「さっさと捕まってください」

「ありま。戦うことを決意したの？」

「はい。雷斗にウジウジ考えるなって言われましたし、それに……………」

「そ、それに……………」

素振りをし始めるフェイトにアリシアは一種の恐怖を覚える。

「とつとぶちのめしてエリオ&キャロを愛でたいのでさっさと捕まってください」

「まさかの私意的!?! お姉ちゃんとロリシヨタをどちらを取るの!」

「ロリシヨタ。年増はゴースティングマイホーム」

「よしきた。喧嘩しようよフェイト。お姉ちゃんが直々にぶちのめしてあげるッ」

こうして姉妹喧嘩が始まった。なお、巻き込まれた局員が多くいたそうなの。

☆☆☆

六課とスカリエッテイ達が戦っている頃、ヤツらはいた。

「ゲハハハハ！ 始まつてるなあ、オイ！」

「フツ、遂に美しき僕の出番だね。さあ、刮目してもらおう！」

——悪意がもうじき現れる。

第百十話

(??サイド)

「チツ、ちよこまかとツ」

「ゼエゼエ……………なんなんですか、この人」

「私の『シルバーカーテン』お構いなしに撃ってくるなんてえ……………」

クアットロはISで逃走を計ろうとしたが、なぜかなのはに見破られて逃げられないように的確に砲撃を撃っていた。

「どうやって見破ってえ……………」

「勘。シックスセンス」

「人外になつてるう……………」

もはや絶望的である。すると、なのはの遥か後ろから爆発がした。なのはが振り返るとそこには局員に囲まれた青髪の男性がいた。彼は周囲に泡を出現させ、それで局員を閉じ込めた。

(敵? いや、このメガネも知らないって顔をしているし…………)

思案していると泡に閉じ込められた局員達が閃光を放ち――

ドガアアアアアッ！

爆発した。爆死したのだ。局員がいた場所は血で汚れ、肉一つも残していない。

なのはが彼を敵として断定するには充分だった。彼女は砲撃で青髪を消し飛ばそうとしたが、あっさり避けられた。

「いきなり撃つとは狂暴なレディーですね」

「知ったこと。あなたがしてることは許されないことだから撃つて当然なの。それにあなただって話し合いに来たわけじゃないでしょ？」

「クスクス……………そうですね」

不気味に笑う青髪の男性になのはは警戒心を高める。青髪の服装は黒のタキシードだが胸元ははだけており、髪は女性のように長く綺麗で手入れされているようなモノだった。

「僕の目的はお分かりですか？」

「知るか。さっさと答えて落とされろ」

「随分と品のないお人ですねえ。まあ、せめて……………」

局員達を爆殺させた泡が展開され、青髪の男は言う。

「僕の美しさのために、ち——ブフツ!？」

最後まで言う前に青髪の男は地下から出てきた光線に飲み込まれた。なんで?と思いつつながら光線が出てきた地下に目を向けるとティアナ達が出てきた。

「あ。すみません、なのはさん。めんどくさかったのでぶち抜きました」

「別に問題ないの。というかさつきからエリオくんがキャロにチュツチュツされてるのだけ……………」

「無視してください」

「了解」

「そんなあツ!？」と叫ぶエリオだったがすぐにまたキャロの餌食にあつた。

それからののははクアット口達に目を向けたが、どうやら逃げられたそうだ。フェイトもここに来た辺り、同じだろう。

「おのれ、紫。私のエリオくんのファーストを奪った罪を必ず裁く」

「なんかキャロも壊れてきたなあ」

フエイトはしみじみと呟く。キャラ崩壊が激しいのがこの作品である。そんなことはさておき、光線に飲み込まれた青髪の男は今度は厳つい顔の中年に担がれた形で現れた。

「どうやら彼らは仲間のようだ。」

その中年男は大きな身体で筋肉がガツシリしており、黒いタンクトップとズボンを着ただけの格好だが、おそらく身軽に動けるためだろう。

その中年男はティアアナを見てニヤリと笑う。

「なるほどなア。ラストの馬鹿が不意打ちでやられたのも領ける」

「不意打ちじゃないわよオッサン。というかアンタ誰？」

「オレア、プライド。そして——」

——『無血の死神』だア」

なのは達はそれを聞いて驚く。『無血の死神』は神威ソラが持つ異名だ。それをこの男が名乗っていることがおかしい。

「どういうこと? 『無血の死神』は神威くんじやないの?」

「あんな旧世代と一緒にすんな。オレア、新しい世代の『無血の死神』だア」

プライドは手を前に出す。そこから光と共に現れた——カギのような
剣が

「『全てを開く者』!?!」

「クッククック、やっと理解したようだなア。オレこそが『無血の死神』だア!」

そういえばソラらしくない殺し方が度々あった。その殺人は一撃必殺ではなく、被害者を殴り、苦痛を与えて殺すという悪質な殺し方だった。

そのときは上層部が血を流すことなく殺されていたため、『無血の死神』ということまで収まっていた。

そして——ティアナの兄はまさしくそんな殺され方をしていた。

「アンタが………アンタが兄さんを」

「そうだア。まあ旧世代がとどめをささそうとしたときに現れて、殺せたかどうか確認で

きなかつたが、まさか旧世代が犯人扱いされてこちらとしては大助かりだったア。なんせ、こちららは快樂殺人し放題だったからなア！」

笑うプライドにティアナは魔力弾を放つ。しかし、それは『解錠』によりキャンセルされ消滅した。

「無駄無駄ア！　これがどんな神器か知ってるだろオ？」

「クソ、クソ……」

涙を流し、自分の無力さを知るティアナ。

——　なんで、なんでここに来て兄さんの仇をとれないのツ！

悔しい悔しい悔しい！

彼女は射殺さんばかりにプライドを睨むがヤツは好戦的な表情をしていた。

「ここで皆殺しにしてやろオか？」

笑うプライドだったが直後、その表情をやめてその場を離れた。彼がいたところからアオと四季の斬撃がきた。

「外したか」

「あ。ヤベ、落ちる。えいや」

「ちよつ、ズボンの裾を掴むなよ！　脱げる脱げる！」

宙には浮けない四季はそうやって落下を阻止する。そんなコントにプライドは険し

い顔をする。

「テメエ、嘗めた真似を……」

「なめる？ あいにくオッサンよりティアナのようなピチピチギャルをナメナメしたい」

「発言が変態っぽいぞ。あ、でも変態か。なんせ究極の変態の遺伝子があるし」

「なんだと。よろしい、戦争だ。どちらが萌え萌え写真をとるかを雌雄を決する」

「上等。我が最高兵器の十香ちゃんの力を見せてやる」

「オレを無視するなア！」

プライドは激怒する。しかし二人は勝手に変な戦いを始めようとしていた。

プライドは無視する二人のクソガキを殺そうとしたとき、声が出た。

『プライド、さっさと帰ってこい』

「しかしラース！」

『アオ・S・カナメはまだしも、そこにいる変人は興味のないことには全くの無関心だ。その無関心な者が邪魔すれば即刻抹殺される』

「そんなもん、オレの神器でエー！」

『愚か者。あの方に迷惑かけるつもりか？ 貴様に力を与えてくれたあの方を』

プライドは歯を食い縛り怒りを抑えた。そして二人のクソガキに対して言う。

「テメエらはこのオレがゼツテー殺してやる！ 精々怯えて待つてろオ！」

「わかったわかったからさっさと帰れブサイク」

「ウザいキモい暑苦しい物体はゴミ箱に帰れ」

「ゼツテー殺す！」

完全に興味なし。それに怒るプライドだが、二人は完全に眼中にない。

転移魔法でどこかへ行ったことを確認してから二人は同時に呟く。

「邪魔者は消えた。さあ、始めよう。我らの萌え萌え^聖バトル^戦をツ」

『『ハイペリオンスマツシヤアアアアア!!』』

『『ダイバインバスタアアアアア!』』

ティアナとなのはの極太砲撃魔法がアオと四季の二人に直撃した。プライドという敵を見逃してしまうから当然の報いである。

なお、四季はアオという肉の盾とプロテクションを使いちやつかり無事だったが。

☆☆☆

スバルの姉ことギンガ・ナカジマは二人の同僚と一緒に破壊された研究所を調査していた。どうやら違法研究していたところだったらしく、謎の割れたカプセルが三つあった。

「ギンガさん、三つありますけど何があつたのですかね」

「シルビィア、たぶん猫耳幼女を造つていたんだ。獣人に萌えを感じる人達だからきつと造つていたはず」

「それはお前だけだ。てか、なぜに幼女？ 普通お姉さまじゃね？」

「幼女こそ至高で純粋な存在である」

「そういえばお前、『ロリシヨタ愛好会』の会員だったな」

ホープ・アブストラクト——優秀で顔が整っている美青年だがロリコンという残念なレッテルがある。同僚であるシルビィア・スノーマンは悲しきことに彼の幼馴染みだったりする。

「はいはい、イチヤイチャしていいでさつきと調査」

「イチヤイチャしてませんよ!?!」

「そう？ でもシルビィアって彼のことを……」

「わーわー！ それは言わないでくださいー!」

必死に誤魔化すシルビィアにギンガはクスクス笑う。三人はこのような部隊で仲良

くしているのである。

(にしてもカプセルが三つ……か)

ギンガはふと疑問に思う。三つが割れているということは実験体が三つ存在していたことになる。その三つは行方不明だが、しっかりと資料が残されていた。

(だけど書かれていたのは実験体の一人のみ。その他の実験体の資料は破られている……)

きな臭い。まるで二体の実験体の存在をなかつたこと……にしたいような感じがギンガはした。

考え込むギンガにシルビニアはヒョコと顔を出して資料を覗き込む。

「それでその実験体は何者なのですか？」

「ホープの大好きな幼女よ。しかもヴィヴィオという名前の聖王のクローン」

「ヤッフウウウウ！」

「ホープが暴走した!？」

ホントに相変わらずだなあ。まあなんにせよ。厄介なことにならないとギンガは思うのだった。

(雷斗サイド)

どうもみんなの雷斗です。すずかとアリサから逃げ出した雷斗です。

ホントによく逃げれたもんだよ。アリサはどこからか入手したのかもわからない双剣双銃《カドラ》で、すずかは黒いブーツを赤く熱しながら追ってきた。

うん、アリサ。お前いつから緋弾を受け入れた。そしてすずか、いつから悪魔の風脚を習得した。

なんというか俺に関わったことで人外かしてるのは気のせいだろうか……。

まあそれはさておき、病院に逃げ込み彼女達が諦めるまで隠れていた。ここならさすがに騒げないしな。

結果、見事に成功。どうやら彼女達は恭也さんや鮫島によつて地球に帰らせられることとなった。

「覚えてろー!」「再会したら覚悟してね」と言つて帰つたようだ。ザマア。

さてさて、病院に逃げ込んだ病院を散策することにした。現代の医療技術に興味はないことはないが、何よりエールや高町なのは達によつて溜まつた心労を癒すためである。なので中庭を散歩していた。

綺麗な花が咲いてる花壇の道を歩いてみると一人の少女が花をじっと見ていた。金髪でオツドアイ。白い入院服を着た少女だ。

なんというかエールが言つてた踏み台転生者っぽいなあ。

俺はそう思っていると少女はいつの間にかズボンを掴んでこつちを見ていた。

「パパ……………?」

「パパじゃねえよ」

「ママ……………?」

「まさかのママかよ。いやママじゃねえよ」

「パパ?」

「え、リピート? ヤベ、選択肢エンドレスパターンに入った」

まあどうでもいいけど。それよりこの幼女はなぜここにいるか聞いてみた。どうやら彼女は迷子のようにママを探しているようだ。これはイカン。即刻ママを見つければ。

理由? ぶつちやけた話、エールが知れば間違ひなく毒牙にかかるから。

「んじゃ、ママを探すぞー?」

「おー!」

肩車してやると元気になったのか良い返事をしてくれた。

そして、俺はこのとき気づいていなかった——また面倒なことに巻き込まれていることに……………。

まあ、いつも通りだしね。問題ないけど。

第百十一話

(雷斗サイド)

こんにちはわ、みんなの友達雷斗くんです。え？ 友達じゃないから引つ込んでろ？ よろしい後でお前の電話にイタ電、迷惑メールの嵐を送信してやる。覚えてろ。

それはさておき、俺はこの状況に困惑していた。どんな状況だった？

それは――

「さあ雷斗くん、パパってどういうこと？ 答えて。答えないと撃つ、答えても撃つか
ら」

高町なのは、それどのみち真つ黒黒助じゃん。てか、レイジングハートでグイグイ背中を付かないで痛いから。

——回想——

なぜこんな状況になったかと言うと今肩車している少女ヴィヴィオの知り合いっぽいシスターがいきなり「このロリコンがアアアアア！」といきなり襲いかかってきたのだ。

前からの奇襲はびっくりしてつい反撃しちやったよ、俺。しかもモノの見事なカウンターでシスターはノックアウト。ヤベ、殺っちやった？

後で山奥に遺棄しないと。

「パパー、この人だーれー？」

「パパじゃねえよ。このシスター、お前の親族じゃないの？」

「ちがうよー？」

「なら、新手の誘拐犯か。よし、ヴィヴィオ。119だ。そうすればこのシスターは安全な場所に送ってくれるから」

「ヴィヴィオ、それわかんないよー……」

「なら俺が教えてしんぜよう。まずはこのスマホで」

「やめなさい。てか、この人が不憫だから」

高町なのはが現れた！

雷斗は腕を抑えられた！

……………いやどつかのRPG風に言ってみただけど、ホントに腕を抑えられてスマホを取られたから。いつの間に来たんだこの人。

「とりあえずその子を捜しにきたんだよ。病室からいなくなってたからね」

「把握。要するにお前の娘なのね。……………ごめん、悪かったからレイジングハートを眉間に構えないで。怖いから、マジで」

「よろしい」とニコニコと笑う魔王様。最近の子は容赦ないなあー。なんでだろ……………あ、俺のせいかな。

「パパー、このひとだーれ？」

「高町なのは。通称魔王——あ」

「ちよつとO☆H A☆N A☆S H Iしようか」

口は災いの元とはこのことである。

それから高町なのはいろいろと説教と砲撃をかまされた。ヴィヴィオをどこかに座らせて曲芸師並みに動いたことは言っておこう。

てか、中庭で砲撃をするなよ。結界を張ったからって安全であるとは限らないから。

そしてヴィヴィオ、お前はなぜはしゃぐ？ 俺の曲芸師並みの動きに喜んでいいのか、高町なのはの爆音に喜んでいいのかわからないけど、とりあえず将来のお前が不安になった。どうやるお前の未来。

なんとか話をつけて落ち着かせたが、まさか今度は『パパ』に関して聞かれるとは思いませんでした。

まあ、正直に答えて誤解は解けたけど。

「要するにこの子は雷斗くんの娘じゃないのね？」

「童貞はエールに食われたけど他に交わった覚えはない」

「オイこら。子どもの前で不穏な発言するなし」

高町なのはに怒られた。まあさすがにこの発言はマズイよな、教育な面において。

「お詫びとして今日から『なのは』と呼んで」

「だが断る」

「お詫びとして今日から『なのは』と呼んで」

「いや、その……………」

「お詫びとして今日から『なのは』と呼んで」

「……………はい」

今わかった。高町なのは——いやなのはは桃子さんの娘である。強引だよ、この人。

「うーん、でもこの子の本当の親は未だにわからないし。どうしようか」

「パパー、ねむいー」

「よしよし、パパは忙しいからママとおねんねしましょうねー?」

「さりげなくママのポジションに入りやがった」

まあ別にいいか。パパよりママ。父より母。

母性愛とは子どもを安心させることができる偉大な力なのだからな。

それに……………アイツもあんな風だったしな。

今では『無血の死神』って呼ばれてるけど。

それから俺となのははヴィヴィオを両側して彼女の手を握って病室に戻るのだった。

「あの……私は……」

そういえば謎のシスターのことをすっかり忘れていた。ちなみにシスターことシャツハさんはどうも俺がヴィヴィオを拐う変態かと思つて攻撃したようだ。

……誰がロリコンだコラ。

(??サイド)

ティアナ達フオアード陣に新たなメンバーが加わった。ギンガ、シルビニア、ホープ、マリーの四人達である。主にゲンヤが呼んだ助っ人らしい。

それから助っ人三人による模擬戦を行い、彼と彼女達の強さを肌で実感していた。

「フリード、プラストバーン！」

『GYAAAAA!!』

「マジでポケ○ンの技を使ってきやがったアアアアア!？」

ホープは炎属性最強の技を回避したが、ビルマの上層が燃やし尽くされた。

「チツ、外したか」

「オイこらチビツ子ツ。なんで殺る気満々なんだよ!? てか、よくそんな技を覚えたな

！」

「愛に不可能はない！」

「スゲーなお前の愛！」

などホープはキャロのキチガイ火力に苦戦したり、

「はアアアアア！」

「どうりやアアアアア！」

互角のラッシュをしかうスバルとギンガ。

「つてやりにくい！」

「反則ですよ、あの人の重力操作！」

「ぐがががが……重いイイイイ……」

そしてシルビニアのレアスキルに苦戦するティアナ、エリオ、アオ達であった。

彼女のレアスキルは人を潰せるほど威力はないが、重りを与える程度の重力を与える。そのため今受けているアオは動きにくいのでシルビニアが放つ魔力弾が回避できずに直撃した。

「ゲブウ!!」

「ああッ、アオさんの顔面に魔法が！」

「ストライク！」

「ティアナさん、せめて心配しましょうよ！」

そんなこんなでフォアード達の模擬戦は続く。

☆☆☆

模擬戦が終わり、はやて達隊長組とフォアード陣は食堂で昼食をとっていた。フォアード陣は新たに加わったギンガ達と友好を深めていた。

するとテレビではレジアス・ゲイズが新兵器について説明と質量兵器の有効性について語っていた。

「確かに魔法と大して変わらないな」

「どういうことや衛くん」

「例えば魔法の非殺傷設定。あれがなければ魔法も質量兵器と大して変わらぬ。また質量兵器の利点は使いやすいということだな。例え魔力が使えなくとも使えること、だな」

「うーん、確かにそうやなー」

「だが同時に訓練されていなければ危険な代物だ。ゆえに質量兵器を持ったばかりのヒヨツ子が犯罪者達を捕まえるにはあまりオススメできぬのだ」

「もつとも訓練されていたら大丈夫だがな」と衛は呟く。危険な代物だが犯罪者を捕まえるには悪くない代物だ。

武器は殺人にもなる。しかし使い方によっては抑止力となる。

肯定も否定もしない。

それが衛の意見だ。

「私としては立案してほしくないで。こんなか弱い乙女が傷ついたらどないすんねん」
「筋肉を鍛えれば不可能ではない！」

「……………せやった。この人、筋肉で銃弾弾く化け物やった」

マツスルキングを指す我が家の旦那様にはやては額に手を当てて呆れてしまう。

「地上本部公開意見陳述会がそろそろだな」

「確かお偉いさんが集まるところやねん？」

「そうだ。そして厄介な話……」

『『無血の死神』の予告状。それもソラクンを捕獲しようとしたアホ共やな』

『無血の死神』は予告した。

『我が恨みを晴らすときがきた。関係者一堂覚悟しろ』

そんな予告がはやてが言うアホ共に届いた。彼らには危機感がないのかあまり信用していない連中が多かった。当然だ。

いくら『無血の死神』と言えど管理局の中心的な会議に来るのは飛んで火に入る夏の虫なのだから。

「確かに護衛はおる。Sランク以上の魔導士ばかりや。けど……」

「魔導士殺しと呼ばれてる我が友を止められる保証はどこにもない」

はやてと衛は不安だった。SSSトリプルエスのソラがそんな魔導士達で止められるかどうか。

そしてそれは的中してしまうとはこのときはやてと衛は気づかなかった。

☆☆☆

ほむらとまどかは久しぶりに外に出かけていた。気分転換を兼ねてであるが、ホントのことを言えばソラの誕生日が近づいていたからだ。彼女達はソラが喜ぶモノを買いに街道を歩いていった。

「にしてもソラくんってこういう甘いお菓子が好きなんだー」

「ええ、彼って師匠譲りの甘党らしいわよ。しかもグルメ」

「だからデザートのおきに美味しいお店知ってるんだ……」

知られざる趣味にまどかはしみじみと納得していると背後から荷物を奪われてしまう。引ったくりという愚か者だ。彼は路地裏に消えていくことをこの目で見ていた二人である。

「始末してくるわ」

「あ。じゃあ私も」

「まどかは待ってて。すぐだから」

ほむらはそう言ってまどかをその場で待たせた。それから一分程度でほむらは荷物

を取り戻し戻ってきた。

「早かったね」

「あんなザコと比べるまでもないわ。さあ、帰りましょ」

ほむらが先にいくという形でまどかは彼女の後ろについていく。

(……………あれ?)

そのとき彼女はふと疑問に思う。

(なんだろう。なんか違和感ある…………)

まどかはほむらに僅かな違和感を感じていた。そしてそれはほむらだけではないと気づくの先の話だった……………。

第一百十二話

地上本部公開意見陳述会当日。遂にこのときがきた。
………さあ始めよう、決戦の狼煙を。

(??サイド)

なのは達は公開意見陳述会の部屋から外のところで待機していた。理由はレジアス
がはやてを嫌っているというのもあるが神威ソラと関わりある者達を除外するため
ある。

「なに考えてんねん!」

「大方、我らの中にスパイがいると疑っているのだろう。もしくは我らが捕まえること
をないようにだな」

「アホもここに極まりやな」

はやてはもはや言葉にできないくらい呆れていた。なのは達も同様だ。幸い中にはレティヤリンデイ、ミゼット達など知り合いがおり、中の様子だけわかるようにしていた。

「キャロに感謝だな」

「……………なんやろ。これは感謝したらアカンような気がする」

「盗聴も犯罪だからな」

なぜあんなったのかとはやては嘆くが、しばらくしたら治まった。だいたいアイツのせいである。

とりあえず、キャロとエリオに余計なことを教えたソラのコピーヤローに八つ当たりしようと思案するのだった。

——そして

——時は来た

警報が鳴る。外からナンバーズとガジェット達が攻めてきたという情報だ。なのは達は今すぐ外に向かおうとしたが、ここでなのは違和感を覚える。

——『無血の死神』はそこにいるのか、と

気づくのは遅かった。公開意見陳述会の部屋に千香のバリアらしきものが覆い始め、逃げられないようになっていた。

「リンデイさん！ レテイさん！ ミゼットさん！」

応答を呼び掛けるが返事がない。なのはは部屋に覆われたバリアにただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

☆☆☆

一方、雷斗はヴィヴィオと遊んでいた。まあ、彼としてはなのは達に例の会議を任せるのが得策だと思っているからである。

すると再び警報が鳴った。雷斗はそれを聞いて嘆息を吐いて部屋から出た。

「ちよつと行ってくる」

「いつてらっしやーい♪」

全然不安じゃなさそうなのは雷斗式教育が役立っているのである。

さて、雷斗は外から迫る侵入者達を排除しようと駆け出す。

まず四季に連絡をとろう。そう思いスマホで発信する。しかしいつまで経って来なかった。

すると目の前に四季を殺しかけた二人の男女がいた。やはりバイザーで顔を隠している。

「テメーらが四季を殺つたヤツらか」

「そうね。でもまさか復活するとは思わなかったわ」

「ナメんなよ。アイツは『萌え』を知り尽くすまで死ぬつもりがないそうだと言ってたからしばらく死なないだろ」

「いやそれはどうかと思うぞ……」

男性は呆れたと言わんばかりな感想をもらした。まあなんにせよ。雷斗がやることは変わらない。彼と彼女を今すぐ――

ブシユツ

「あ、ら……………?」

胸から手が生えていた。そして雷斗は膝から倒れて地に横たわった。

「どう、いう……………つもりだ……………」

雷斗は自分に致命傷を与えた女に力弱い怒りの声で言う。彼女の表情は変わらぬまま、何も言わずバイザーの男女の元に近づく。

「待てよ……………待てよ——エール!」

最愛の彼女が裏切った。それがとても応えた。雷斗は思わず涙を流す。

裏切ったことに対しての怒りか、それとも裏切られた悲しみからのかわからない。スカエリッティならば雷斗は大して怒らなかつた。しかし彼女が味方したのは友人を

殺しかけたヤツら。

ただ雷斗は血を吐きながら悔しがる。

「ごめんね、雷斗。でも……『グリード』様の命令だから」

彼女は無表情でそう言つて魔法を雷斗に放つ。

六課に爆炎が舞い、そして雷斗は――

こうして六課は致命的なダメージとヴィヴィオを奪われた。

☆☆☆

ところ変わつて意見陳述会の会場内。そこには銀髪の男は中央にいた。彼の目は完全に復讐に燃えた恐ろしい目だ。

そしてレテイ、リンデイ、ミゼットは思う。

これが私達の罪なのか、と。

「貴様、どこか——」

Sランクの魔導士の一人が口を開いた刹那、そいつは死んだ。いつの間にかソラが彼を斬り殺したのだ。

目に見えぬ早さで味方を殺した相手にSランク以上の魔導士達は戦慄を覚える。

「さて、今宵始まるのは最低最悪の劇場。誰も救われない、誰も助からない——」

——そう、オレが示した復讐対象は、な……」

一斉に復讐対象である上官は逃げ出した。しかし外には出られない。袋のネズミ。

ソラはゆっくり近づいていく。

「そ、そうだ！ 貴様もよければ我が下に付かないかッ？ そうすればこれまでの罪を

「黙れ」

ソラは凄みを効かせた声で中年の男を斬殺する。それを見た一人の魔導士がソラに攻撃を加える——前にどこから現れた一刀によつて首を狩られた。

「お前の欲望でオレ達はバラバラになった。お前達のせいでオレは失いそうになった」

硝子玉のような瞳は怯えた子羊を写していた。

「お前達は敵——だから殺すつて決めた。お前達の町を、管理局を、全て破壊してやる……………！」

ここでやつとSランク以上の魔導士達は動いた。このままでは友人や家族、恋人にまで被害に及ぶ。だからこそ、目の前の少年を止めなければならぬ。

彼らは自分達の上官の前に立ち、ソラから守ろうとしていた。最後まで自分の責務を果たそうとしていた。

「それが答えか」

「やれやれ……………どうなつても知らないぞワシは」

一刀は呆れ、ソラは笑みを浮かべる。彼らにはもはや傲慢はない、自惚れはない。自分の責務を果たすために彼の前にいる。

だからこそ、彼は敬意を表して眩く。

「いいぜ。お前らがオレの邪魔するなら皆殺しだ。誰も生かさない、許さない、救わない
——覚悟しろ」

幸いな話、昔馴染みだったのかリンデイの関係者及び知人にはソラの毒牙はかからな
かったそうだ。

そして彼女は語る。

——あれはもはや蹂躪だった……………と

☆☆☆

ああ……………歯車は止まらない。最悪な形と最高の形。

果たして運命は何をもたらすのか？

「それがわからないのが人生なのによ！」

「ミルたん。オメー、何言ってるんだ？」

「変な電波を受信したによ。あ、もう大丈夫なのかによ？」

「まあーな。さてと、あんにやろー。ボコボコにした仕返しに今度は本気の本気で当たってやるぜ……！」

どこかの異世界で、復活する男は……いた！

第一百十三話

復讐は果たした。

スカさんの目的も果たした。

師匠が六課にいと懸念していたが杞憂に終わった。どうやら何者かに襲撃されてどんな状態か行方不明らしい。

………とりあえず、この戦いが終わったなら師匠を襲撃したヤツらをぶちのめそう。そう決意した。

「ねーねー、なんでパパみたいにみえるのー？」

「パパってなんぞ？ てか、師匠っていつの間にか子作りしたの？」

「なんてこつたい。まさか二つ下の若い子に先を越されるなんて。こうなったらソラくん、今すぐ合体しよう！」

「子どもの前でなに言ってるんだ！」

ちっちゃい容姿の仮面ライダーがライダーキックでまどかの顔面を襲撃。ノリで「目がー、目がー！」と痛みを堪えていたりする。

「てか、ソラの旦那。誰が仮面ライダーだよ！ あたしのどこにライダー要素がある！」

「主に名前とライダーキック。ちなみにスカさんはお前を変身できるように改造する予定」

「あの変人、なに考えてんの!?!」

まあ確かにライダーに変身して喜ぶ女子はあまりいないと思う。どっちかと言うとぷりキュアという(物理的)魔法少女

が好きっぽいしな。

「にしても……………まどか」

「うん……………違和感あるね」

静かだ。静かすぎて違和感ある。杏子やさやか、ママさんにほむらがオレ達に絡むことなく時を待つなんてなんかおかしい。

いや変態達によって毒されてるのはわかってるけどいつもは騒がしいのが我が家である。なのに静かだ。

「最近、千香の変態もおかしいくらいに大人しい」

「富竹フラッシュが日常だったのはこれ如何に」

全くだ。だけどこの違和感にオレは気づけ、気づけと直感が言っていた。やはり嫌な予感がするのだ……………。

(??サイド)

ヴィヴィオとギンガが拐われ、地上本部公開意見陳述会で多くの人が死んだ。一刀は多くの殺しで血で濡れ、ソラは返り血なく皆殺しにした。

鬼神と死神。まさに二つがソラ達に危害を与えた者への報いなのだ。リンディは言っていた。

そして、多大な損害を受けた六課はかつて世話になったアースラを移動せざる得なかつた。

「我が友が……こんな、こんなことを………」

「隊長………」

止めたかつた。やめさせたかつた。友達として彼の復讐を止めさせたかつた。

しかし悲劇は起きてしまう——これからも。

「衛くん！ 今すぐモニター室に来て！」

はやての声で衛は前へ進む。それしか彼にはない。

☆☆☆

モニタールームにたどり着いた頃、スカリエッティが映っていた。どうもはやての話では全次元世界で公開されているらしい。

「ユー〇ユーブかな？」

「アオくん、黙つとき」

ともあれ、スカリエッティは演説を開始しようしていた。

『やあ、平和に暮らす諸君。ごきげんによろ。……』

「「「……………」」」

『今日は君達にビックなお知らせが』

（（（誤魔化した！）））

隊長だけでなくフォワード達も心でツッコんでいた。

『私達は今日この日をもつて管理局を潰させていただこう。理由？ ああ、それなら簡単だ。面白いからだよ。私は天才だ。造られた天才なのだよ。培養槽から造られ、管理局の駒として働く傀儡だったため、つまらない人生を送っていたのだよ』

意外な事実にはやて達は目を丸くする。

『ともあれ、準備は整った。長い間の夢がやっと叶うんだ。培養槽で生まれた時から変

わらずに揺らめいていた私の願い。刷り込まれたものなのかもしれないが、それでもこの手で叶えたい夢に違いない。我々が望む、我々の世界。自由な世界。襲いかかって、奪い取ろうじゃないか。素晴らしき我々の夢を！

ハ—ハツハツハツハツハツハツハツハツ——

——ゴホゴホ、ゲホ………あ、ヤベ。むせたツ。カツトカツト、ウ—ノ！
『テイクツ—いきますか？』

『うむ！』

『うむ、じゃねえだろ！ 台無しじゃねえか!!』

局員全員の想いをソラが代表してツツコんだ。いや、最初はホントに悪人っぽかったのに最後で台無しである。

『これより君達のトップ——最高評議会を紹介しようではないか!』

最高評議会。管理局の創始から君臨するトップ中のトップである。彼らは既に百歳以上のため生きてないのでは、と思われているがスカリエッティはいると言っている。

「ほ、ホンマにおったんか?」

「まさか、な……………」

『さあさあ、ご対面だよ!』

スカリエッティはある部屋の扉を開けた。そこには——

——それぞれのカプセルに入った脳ミソが何やら口論をしていた。

『貴様ら！ それで恒久なる平和があると思ってるのか?!』

『勿論でござる』

『小生としては書記と同意見だ』

あれ、なんかいきなり仲間割れしてる。局員達はそう思った。

『何を口論してるのかね?』

『ムツ、ジェイル。丁度よい！ この者に教えてやるのだ。真の平和とはなんなのかを！』

まともな議長がどうやら残り議員を説得してほしいとお願いしているようだ。

するとBとCが答える。

『フツ、真の平和とは恒久ではない』

『そう真の平和とは——』

『筋肉である！』

『いや萌えでござる！』

上から評議員と書記の答えである。はやては思う。

——千香ちゃんの変態が感染しとる!!

『なぜ、なぜこうなった……かつては志を共にしていたはずなのに……』

『時代は変わるモノ。拙者達も変わらねばならぬ』

『故に小生は人類マツスル化計画を推奨する』

『いや拙者の人類萌え萌え化計画を推奨するでござる』

『貴様らなんて友達でもなんでもないやい!!』

もはや威厳もなくそもなくなった評議長は子どもの口調となって余計にキャラ崩壊が

激しくなった。

議員達の謎の三つ巴ができていた。というかどちらも嫌だ。マッスルも萌え萌えもなんか嫌だ。唯一まともな恒久なる平和も最悪なモノだが。

『ならば我々はもはや別れるべき、さらばだ！』

『うむー！』

さて、ここでカプセルが顔で身体が人間という奇妙な生き物がいた。あの有名な漫画ブリーチにも『アロー・ニーロ』という仮面アランガルの者がいたようにだ。それと同じモデルと思われる身体が二人の議員の今の姿である。

球体状のカプセルとなり、それが顔の代わりとなり身体がくつついたのだ。おそらく人の身体の部分は機械だろう。

議員二人は「じゃあな、みんな！ また会おうぜ！」と言って爽やかに去っていった。顔が脳ミソだけなのに。

それを見送ったジェイルと議員Aは終始無言だった。それからスカリエツティは小型の爆弾を評議長のカプセルに設置する。

『ま、待てジェイル。残った私をどうするつもりだ？』

『え、だって私の目的は君達の報復だし』

『いや、お願い。こんなオチ——』

『えい☆』

ドガアアアアアン!!

カプセルが爆発して議員Aは消滅した。そしてスカリエッティは手を掲げて宣言する。

『さあ！ 決戦といこうじゃないか！』

『無理矢理ですなドクター』

なんともグダグダな決戦合図だった。

『あ、それから私は寿退社しますので降ります』

『待てウーノ。パパに説明なしに結婚したのかね？』

『はい。なんせ相手は教会の人です』

『なんてこつたい。パパはウーノなしでは嘸んでしまうぞ。これ放送していたら緊張しちゃうんだぞ』

『上がり症は自分で直してください』

『ちくせう』

放送を切り忘れていたのかとんでもない事実が流れていたことをスカリエツティは知らない。

第百十四話

(??サイド)

アースラオペレーター室にてはやては乱心していた。

理由? 前話がいرونな意味で台無しだったからである。

「なんでやねんツ。なんでこうもグダグダやねんツツ!!」

「はやてよ、とりあえず戦闘準備だ」

「衛くんはなんとも思わないか!?! こんな決戦合図があつてええんか!?!」

「これもまた時代なのだよ。それからだいたい千香殿のせいだと我は思う」

「あんの変態女アアアア!!」

こうもグダグダな開始はさすがにツッコまずにはいられないのが関西弁の女性である。今こそはやてがHARRISENで戦つても誰も違和感がないと思う。

「隊長、ウーノという人から自首の電話が……」

「はい!?!」

「なんでも『うちのお父様がご迷惑をおかけいたしました。せめてのお詫びとしてわた

くしめに首輪と犬耳をつけさせて犬と罵ってくださいまし」と

「コイツ絶対変態や!! なんか千香ちゃんっぽいこと言ってるもん!」

『あ。あとヴェロツサさんが事情聴取を担当してください。純潔を奪った責任とらせる』とも」

「誰かロツサくんをここに呼べやアアアアアッ! あんのドアホは敵に何をしやがったんやアアアアア!」

マジギレのはやて。衛や局員達は冷や汗をかきながら苦笑していた。

なお、その後ヴェロツサはこつてりカリムの五時間耐久の笑顔で説教を受けていたことを追記しておく。

☆☆☆

決戦が始まった。ガジェット達やドールというあのターミネータ達と局員達とぶつかったのである。なのは達も戦いに参加しており、拐われたギンガがスバル、ホープ、シルビアとぶつかっているらしい。どうやら操られていたようだ。

そんな中、はやてと衛は大きな戦艦を見ていた。

聖王のゆりかご——それは古代ベルカが誇る巨大飛行艦である。かの有名なオ

リヴィエが戦いを終わらせるために起動させた兵器である。

はやてと衛はその絶大な大きさに唾然していた。

「すごく……大きいで……」

「オイ、はやて。今の発言アウトだ」

「私だつてたまにボケたいねん」

「我にツツコミにまわれと？」

余裕な二人が軽口を言っているとクアットロが局員のデバイスの通信を繋げた。

『ごきげんよう愚民のみなさあ〜ん♪ 今日はおなたの方に絶望を与えにきましたわあ』

「なんやこのメガネは。猫の皮を被つといて、絶対腹は黒いで」

「はやてが言えること——げふっ」

衛の溝尾にはやての裏拳が炸裂した。痛いもんは痛いので少し悶絶する。

『それでは私達の科学の力を見せてあげますわあッ!』

クアットロがポチツとボタンを押すと——おや？ ゆりかこの様子が……………。

ガシャン、ガシャン、ウイーン、ジャキーン!!

ゆりかごは変化——いやトランスフォームした。まさかトランスフォームする

とは衛やはやて達も予期せぬことだった。
だつて、古代ベルカの飛行艦が——

——ガンダムになったのだから。

『そう、私がガンダムだ』

「なんやて!?!」

「はいイイイイイ!?!」

衛でさえもさすがのあり得ない変化に驚かずにはいられなかった。

「なんでガンダムになつとるねん！ ゆりかごつて古代ベルカの兵器やろ!」

『これこそが旧暦において一度は世界を滅ぼしたとされる強大な質量兵器たる所以なのよお』

「いやオーバキルどころか私の中の古代ベルカが崩壊しとるんやけど!」

『馬鹿ね。飛行戦艦で一度世界を滅ぼせると思つてえ? 「はははは、見ろ!」

人がゴミのようだぞ!」と晩年の遺言で語ってますわ』

「オイイイイ私の知る聖王はどこにいったんやアアアアア!」

はやての知る『聖王』は実家に帰りましたようだ。というかハツチャすぎだろ科学の力。

『いきますわあ! 滅びのバーストストリーム!!』

「作品ちやうで!」

「ぬオオオオオそんなことより退避イイイイ!」

はやて達は回避すると、ビル達が一撃で蒸発した。幸いなことに局員達の戦艦には当たらなかつたことだ。

「な、なんやねん……この馬鹿げた魔導砲撃は……」

「はやてよ……」

「なんや、衛くん」

「事後処理どうしよ……」

「知るかいな!!」

なぜか事後処理に関して悩む衛にはやてはハリセンでツッコんだ。

『アハ♪ すばらしいですわあ、ドクター！ 試し撃ちでビル達が消し飛びましたわあ
！』

『どうしよウーノ。被害総額が……』

『大丈夫ですドクター。一部はタダ働きになります、全面的にクアットロに押し付け
ます』

『なるほど!』

『ウーノ姉様!?!』

こっちもこっちで悩むところがお金である。ビルもシリアスも破壊されたようだ。

『こっちなつたら八つ当たりですわあ! くらえ、ティロ・フィナーレ!!』

「だから作品ちやうやろ! てか、技名統一しろやアアアアア!」

シャウトと共にはやて達のアースラに魔導砲撃が飛んできた。ちなみにこの魔導砲撃は空気中の魔力を充填し、内部のエネルギーと混ぜて発射する砲撃なのである。

つまり、魔力の塊がビームとして出ているのだ。

では問おう。塊 \parallel 合わさったモノ——つまり結合したモノだ。

それを解くには誰の力が有効かお分かりだろう。

「うらアアアアア!!」

——ソラのレブリカ そうア オである。

集束魔導砲撃はたった一撃の『解錠』で魔力が分解された。

『おのれ失敗作ウウウウ!!』

「はん、自分が失敗作ならアンタは駄作だよオバサン!」

クアットロは「ムキイイイイ!」と怒り狂いまた充填を開始する——

——それがいただけなかった。

《ピー……………活動限界です。戦艦モードに移行します》

機械的な声が出た後、ガンダムは元の戦艦にトランスフォームした。

「……………エネルギー切れ？」

「せやろな……………」

……………。

終始無言になる一同。そしてゆりかご内にいたスカさんとクアットロと言うと、

「……………ガジェット稼働にエネルギーを使いすぎちゃいました。テヘ☆」

『よし、ほなみんなであるのオバサンをシバくでー。キモいもん聞かせてくれた礼や』
「ちよ、ちよつと待つてエエエエ!!」

悲痛の叫びを出すクアットロだった。

「ふむ、ウーノ。どうやって自首しようか」

「スポーツカーで運転しながら六課のみなさんに謝ればよろしいかと」

「なにそのスタイリツシユ謝罪」

諦めというか最終的には捕まる予定のスカさんだった。

☆☆☆

一方、まどかはほむらの後についていた。ここ最近のほむらの様子がおかしい。そう思ったまどかは決戦にも関わらず人気のない路地まで来ていたほむらの後をつけていた。

ほむらが目的地につくとそこにはさやか、杏子がそろっていた。

「やっと始まった」

「これで終わりだね」

「そう私達が——」

——グリード様のモノになっていることを」

彼女達の瞳は虚——いや空虚だった。まるで意思があるようで『ない』。

まどかはそれを見てどうしようか思索していると、

「それで、まどかはどうするの？」

いつの間にか自分の前に魔法服を着た女性達三人がいた。やられた。ほむらの時間

操作だ。

「当然、ソラくんに伝える。おかしくなったほむらちゃんを元に戻すために」

「「デキルカナ？」」

ヤンデレみたいだなーと呑気に考えるまどかだが、これがいつもの彼女である。さて、凄腕元魔法少女対最強の元魔法少女との戦いが始まるうとしていた。

第百十五話

(??サイド)

アオとなのは、フェイト、ヴィータはゆりかごに侵入に成功した。中にはガジェット達がわんさかとお出迎えしてきたが、彼と彼女の前では無意味だった。

「どけコラアアアアア！」

「うちの子はどこじやアアアアア！」

「この程度で私が満足すると思ってる？ もっと来てよ！ もっといじめに来てよ！」
変態つえー。ヴィータはそう思った。

片やクアットロに貶されてぶちギレたレプリカ。

片や娘(?)をとられてぶちギレたモンスターペアレント。

片や自身の快樂のためにどんどんバツコイな変態。

なんだこのカオスなメンツは。唯一まともなのは彼女だけである。

「ッ、あれは！」

ヴィータは次に出てきたガジェットに目を見張る。なんとかつてなのはを撃墜させ

たアンノウンだった。

まさかスカエリッツテイの策略か？

彼女はそう思っているとなのはは、

『ハイペリオン・デス・スマツシャアアアア』!!」

ハイペリオンスマツシャアの進化型の超凶悪砲撃でそのアンノウンを消し飛ばした。

「トラウマをホントの意味で消し飛ばした!?!」

「貧弱貧弱う！ この程度で私の愛は止まらない！」

「ホントにどうしちまったんだよなのは!?!」

キャラ崩壊しまくるなのはにヴィータはどうしてこうなったと思い悩む。

「とりあえず動力源を止めればこの戦艦も止まるはずだからあたしが行ってくる」

「なら、私とアオくんが神威くんとヴィヴィオを確保」

「私はスカエリッツテイとお姉ちゃんを捕獲してくる」

じゃ、任せたとばかりに彼女達は散開する。なお、なのはに待ち構えていたデイエチはなのはの容赦なき砲撃の餌食に合い、トラウマを負うことなるのは後のお話である。

☆☆☆

オットーは悩んでいた。理由は彼女のISで閉じこめたティアナと戦うノーヴェ、ウエンディ、ディードの悲鳴からである。

『ちよ、待つて待つて!』

『待たぬ、許さぬ、ぶち殺す。それがアタシが雷斗さんから習った戦い方よ』

『この人、マジでこわ——みにや——?!』

『ウエンディが撃たれた!?!』

『この人でなし!』

『やかましい。こちとら気が立っているのよ。さつさと落ちろやアアアア!』

『い、いやアアアアなんか増えてるウウウウ!?!』

ティアナの十八番、幻覚魔法でどこから魔弾がくるのかわからないし、隙を見せればウエンディみたいに砲撃の餌食にする気満々である。

おそらくディーダが生きていたら間違いない「どうしてこうなった」と呟いていただろう。

こんな、こんな人を閉じ込めてどうにかすることなんてできるはずなかったんだ! オットーは結界を解こうとしたとき、背後に気配がした。

その人物は筋骨隆々で犬耳。そして上半身がはだけたマッスルな男性———ザフィーラは言った。

「ヤらないか？」

オットーは女性だ。女の子だ。男ではないため、彼が言ったとしても健全なお誘いである。だが、彼女にとって今の発言は生娘としてではなく、何か受け入れてはならないモノを感じた恐怖だった。

おそらくザフィーラはオットーを美少年と勘違いしてのお誘いだったのではなからうか。

オットーは結界を維持することを放棄し、なんと屋上から飛び降りることにした。しかしそれを待ってましたとばかりに今度はナース服を着たお姉さんがバインドでオットーを捕縛する。

「だ、誰だ!？」

オットーを捕縛して地に降ろしたお姉さん——シャマルは言った。

「癒しのマジカル戦士——メディカルシャマル、ただいま参上☆」

「……………」

なんだこの痛い人。オットーはこの人も変態だと確信した。そして彼女の不幸はまだまだ続いていた！

「あなた、なかなかの素材ね。どう？ お姉さまが見繕つてあ・げ・る♪」

オットーは恐怖した。シャマルの今の目は彼女に数々の恐怖と羞恥を与えた変態——

——天ヶ瀬千香と同じ目をしていたからだ。

逃げようにも逃げられない。迫ってくる脅威に彼女は叫ぶ。

「誰か助けてエエエエ!!」

願いはむなくも叶わず彼女はしばらくシャマルの着せ替え人形というトラウマをしばらく持つことになった……………。

ドガアアアアアッ!!

「I, m winner !!」

なお、ノーヴェ達が重ねられてティアナに踏まれていることが判明したのはこの後である。

……………誰か、この暴走を止めてください (by ソラ)

「ガリユーはプラカードを使って言葉を返すことした。

「ねえ知ってる？ 最近のキャロってさ、とことんおかしいこと言う子になっちゃったんだ」

『こつちもだ。どうしてこうなったものか……………』

「こつちはアオさんが余計なことを教えたせいなんだ。アハハハハ、もう僕に安らぎはないんだきつとー」

『し、少年。早まるな！ きつと人生にはいいことあるから！』

「もうさ……………なんかどうでもいいんだ色々。キャロはお風呂に突撃してくるし、ルーテシアが部屋にいて中を物色したり、終いにはキャロかルーテシアが僕の下着を何に使っていたと思う？ 良い子には見せられない光景だったよ……………」

『なんと……………』

「もうやだ。お家に帰りたい。帰って二次元に逃げたい……………」

『絶望するな少年！ このガリユーも一緒に考えてやるから元気だせ！』

熱血人型召喚獣——ガリユーはこの絶望した少年に希望を与えるために努力する。

がんばれ、ガリユー！

負けるな、ガリユー！

エリオのSUN値を戻すには君しかない!!

——敵だけど。

なお、彼女達の戦いに終止符を打ったのは、意外なことにメガーヌさんである。目覚めた彼女は運動したくて出した召喚獣で二人の召喚獣を喧嘩両成敗したそうなの。

「あら、好みのシヨタ……」

「子も子なら親も親ですか……」

ロックオンされたエリオの心労はまだまだ続く。

☆☆☆

シグナムは地上本部へ向かっていた。ゼストを追いかけていた。彼女は誰もが知るバトルジャンキーだ。強い者と戦いたい——そんな願望の果てに暴走しちゃった女性だったりするわけで、見境なしに強い魔導士や武人に勝負を挑んでいる。ときどき奇襲もしてくるのでまともな人にとっては心臓に悪い戦闘狂である。

「ハ、ハ、ハから先はいかせねえぞ！」

「どけ。邪魔だ。私を呼ぶ強い者のおいがお前の先からする」

(こ、こえー！ 旦那アアアア頼むから早く話をつけてくれエエエエ!!)

ギラギラした眼で見られたアギトはめちやくちや怯えていた。気の強い彼女であるが目の前の暴走女の威圧に萎縮しちゃうのである。

「もう我慢できん！ 一番シグナム、いつきまーす!!」

「アンタってそういうキャラだっけ!? てか、アタシの結界が突撃で破られた!」

再度暴走女シグナムを止めようシグナムの服の裾を掴むアギトだが、彼女の腕力ではシグナムは止められぬ。もうどうにも止まらない!

「ゼストオオオオオオバトルしましょうかアアアアア!」

遂にはレジアスの部屋までたどり着いたシグナム。だが、彼女はある光景を見て、愛刀を落としてしまった。アギトが何事かとシグナムの後ろからヒョッコリ顔を出す。

「幼女とは！」

「癒し、萌え、和みを与える至高の女性！」

「見よ、今日もロリシヨタが熱く輝いているウウウウ!!」

とりあえずアギトは思った。

なんだこれは!?

「これがハラオウンが言っていたロリシヨタ愛好会の合言葉か」

「なにそれ!? てか、旦那はそんな組織に入ってたのかよ!」

「そんな組織ではない! 幼女と幼児を愛するロリシヨタ愛好会だ!」

「どうでもいいわ!」

アギトのツツコミは続く。

なぜ、ゼストがそんな愛好会に入ったのか。

どうしてここに来たのか。

「俺だって少し前まではまともだったさ。それが、それがまさか……あんな本が出回るなんて……」。もうやってられないから癒しを求めてこの組織に入った」

「なんの本だよ？」

『ゼスト×レジアス』の薄い本」

「犯人に心当たりがあるぞ!？」

「ちなみにレジアスはその本を愛娘が所有していたことにショックを受けてこの組織入ってた」

「愛娘も!？」

オッサン同士が絡み合う最悪の本を所持していたオーリスにショックを受けるアギト。それもそうだ。親バカであるレジアスがそんな本を持つてるといふ事実だけでも軽く死ぬる。

「もう誰にも頼れないからな。それにゼスト。お前を犠牲にしたことをすまなく思っている」

「レジアス……お前の正義はいつから変わったのだろうな」

「そうだな………間違っていたようだ。だからこそ、わしは提唱しよう」

「うむ」

彼らは握手して宣言した。

「かわいいは正義!!」

「シグナム、やっちまえ」

もはやどうでもよくなったアギトはレジアスもろともやられてしまえと思っていた。

その後、ゼストは自首し、レジアスも汚職についての責任をとる形で辞任を決意するのだった。

☆☆☆

スバルとギンガとの戦いはスバルがギンガを破る形で決着がついた。スバルはガジェットを相手しているホープとシルビアと通信を繋げた。

「あ。ホープさん終わりました——」

『GYAAAAA!!』

『し、シルビィアアアアア!!』

繋がった通信から聞こえたのは巨大な芋虫みたいな生き物の声とホープの叫びだった。いったい何がと思ってよく見てみた。

——そこに

——あつたのは

——頭から食われて胴体がぶら下がるシルビニアの——死体だった
.....

「ツ、ホープさん！ 状況を」

『よくもよくもシルビニアをオオオオオ!!』

激昂しながら芋虫に向かうホープ。しかしたどり着くことなく、なんらかの力で地に
身体を伏せられた。

『こ、これ……はシルビニアの重力操作……』

『ふーん。ま、そこそ良い力ね』

ホープの目の前には白い髪にワンピースを着た少女だった。普通ならばかわいらしさを強調するワンピースだが、ところどころに返り血があり、残忍さを現していた。

『お前、何者……………』

『シロって言うの。でももうお別れ』

シロが従える芋虫がホープを食おうと大口を開く。

『クソ……………ごめん。ギンガさん、スバルちゃん。シルビニアの仇、とれなく——』

グチャ!!

それがスバルが聞いたホープの最後の映像だった。スバルはすぐにギンガを肩に抱えて逃げ出した。

(早く、早くはやてさんに伝えないと!!)

スバルは新たに現れた敵についてはやて達に伝えようとアースラに向かう。ギンガの安全を第一に考えての行動でもあり、何よりここから離れたかった。ここで戦っても彼女が勝てることはないし、何より相手は未知の敵だ。

「クソツ、クソオオオオオ!!」

仲間を殺されたことの怒りを堪えながら彼女は駆け出す。

☆☆☆

さて、なぜここで戦いの結果を出しているのか君達は理解してるだろうか？

理由は簡単。直にこの結果はホープ達を殺した敵が起こす事件により重要視されな
いからだ。

「く、う……………」

そしてまどかは疲労していた。逃げ出したのであるが、彼女が負った傷はとても痛々
しいモノだった。

「早く、ソラくんに…………つ、たえ…………ないと…………」

しかし彼女は力尽き倒れた。そこに現れたのは——

「やれやれ、怪しい氣を感じたと思いきや……………まさかワシを差し置いてこのようなことが起こつていようとはな」

だからこそ、怒る。

だからこそ、許せない。

大切な仲間を傷つけられ、裏切らせた者に怒りを込み上げる。

「そう思うだろ——雷斗」

一刀の呼び掛けに雷斗は現れた。そしてその隣には脱落したはずの男もいた。

「さてと彼女を治療してから始めようか——」

——反撃の準備を」

彼は王。

彼は軍師。

彼は武人。

彼は王を支えた天の御遣い。

——そして、あらゆる戦場の怒り、悲しみを知り、受け止めた『最凶』である。

第百十七話

(??サイド)

フエイトはスカリエツティを捜していた。そうしていたら、待つてましたとばかりにアリシアが長方形の大きな部屋で待ち構えていた。

「姉さん……どうしてあなたはスカリエツティの味方をするのですか?」

「うーん、一応お世話になっていたならねー。ま、恩返しつてのが妥当だね」

「それが例え犯罪者でも?」

「うん。罪があるうがなかるうが悪い人じゃない——だから恩返しができる。わかるでしょ?」

確かにそうだ。悪い人ならば恩返しする気にはなれないがスカリエツティはどちらかと言えば良い人である。愉快犯だが、悪人とは言えない。だからこそ、フエイトはスカリエツティを否定しない。

原作のフエイトならば悪人であれば問答無用だが、このフエイトは既に問答無用な鬼畜な人物を見ているため、自分はそうはならないように努力していたのである。

「でも私は局員ですから公共を優先するので姉さん、あなたを逮捕します」

「ええー見逃してよー」

「いえ、被害総額がかなりあるのでタダ働きさせないと気が済みませんので」

「そっち!? 正義優先じゃなくてそっち!?」

「言っておきますけど、私はこう見えて二児の養子がいいますから嫌でもお金のことを考えないとけません。あの被害総額では管理局の予算がヤバくなりますし」

アリシアは冷や汗を流す。フェイトが映したウインドには卒倒しそうな金額が提示されていた。まさかそこまでのことになるとは思ひもしなかった。

「ええい、こうなったらとことん逃げるためにフェイトと戦ってやるウウウウー!」

「罪から逃げないでください!」

「なんかフェイトが言ってるのと違う意味で聞こえる!」

こうして二人はぶつかる。その様子をスカリエッティは見ていたのだが、後ほどわからなくなった。

どうやらヴィータが動力源を破壊に成功したようだ。

だが――

――そのときにはフェイトとアリシアはやられていたことに気づいていなかった。

☆☆☆

時間は進んで――

ヴィータはやつとのことで動力源にたどり着いた。そこには大量のガジェット達があり、ヴィータはいつでも戦闘体勢に入っていた。

『フハハハハ。現れたな、エターナルロリよ！』

「誰がロリだ！ てか、テメーは誰だよ！」

「ヴィータ、何してんだ？」

「ああ、四季——つて四季!? なんでお前がここにいるんだよ!」

四季は外のガジェットを殲滅を任せていたはずなのに、なぜかここにいた。

「十香に任せてきた。それよりも合体とは——やるじゃんスカリエツティ。男の口マンをわかつてやがる」

「感心してる場合か! てか、十香は無事なのか!」

「まあな。快く引き受けてくれた。あ、帰ったらはやてにきな粉パン作れって言っておいてくれ」

「後半は買収じゃねーか! しかもきな粉パンの作り方つてアタシ達知らねえぞ!」

「チツ、役立たず」

「何様だよテメーは!」

ぶちぎれるヴィータだが、その背後には合体が完了したガジェットがいた。

『フハハハハ! これで貴様らには勝ち目がないぞ!!』

偉そうに笑うガジェットはヴィータに向かって拳を降ろす!!

「まあ、ロマンがあるうがなろうが俺は『切り裂く』ただけだよ」
『はっ。』

四季が動き出すと手足が切り離れ、そして首が最後に落ちる最後をガジェットは迎えた。

TAGOSAKUとヴィータはその光景を見て啞然とする。

四季は錬成したナイフを球体状の結界を切り裂き、そして中にある立体正方形の前に立つ。

『ま、待て。取り引きしないか？ 私と共に世界を支配し、その半分の領地を貴様に——』

「どこの魔王だよお前は？」

呆れながら四季はそれを切り裂いた。それがTAGOSAKUの心臓にあたるものとはつゆ知らず、彼を殺った。

『青春しろよーお前らアアアア!!』

「どんな断末魔だよ!？」

最後の最後でネタにはしるのがスカさんクオリティである。

☆☆☆

ヴィータが動力源を破壊する前、アオとなのははヴィヴィオがいる玉座の間の扉まで来た。

「遂にだ」

「遂にだね」

「自分はこれから先生に千香さん達からいただいた最後の教えを与えます。なのはさんは?？」

「ヴィヴィオを連れて帰ったらすぐに雷斗くんを探すの。そしてゴールインするの」「いや、いろいろふっ飛んでませんそれ?」

なのはをツツコミながらアオは扉を開けた。そこには――

「ダウト！」

「何!? バレた!？」

「フハハハハ！ どうやらソラくんはこういう駆け引きが苦手なものなんだねー」

「純粹だもんねソラは♪」

「な、なんだと千香！」

ダウトをしているではあーりませんかッ。

「最終決戦前に何をしてるのオオオオオ!!」

なのはの凶悪砲撃魔法がヴィヴィオがいるのも関係なく放つ。「脱出^{ニヤワツチ}」と全員が回避している、そこにいたクアットロが砲撃に巻き込まれた。

「チッ、メガネを仕留めただけなの！」

「いやなのはさん、今の娘さんもろとも葬り去ろうとしてましたね？」

「ボクは何を言ってるのかわかんないのです。にぱー☆」

「中の人ネタを使うなよ十九歳」

アオの辛辣なツッコミがある中、ソラはクアットロの襟首を掴んでドコでもドアへ放り込んだ。

「クアットロをどうしたのかね？」

「イン・アースラ」

「ちようどいい。全ての責任を彼女に押し付けよう」

「黒いなーこの人達」

なんとというかシリアスがない。原因は千香が提案したトランプゲームであるが。

「さてよく来てくれたね。高町なのは、歓迎するによ。……………」

「……………」

「あ。オジサン噛んだ」

「いや仕方ないよ！ 私だつて緊張するよ！ 私は本来ここにいるべきではなくてテストタロツサにやられて捕まるやられ役の悪役なのだよ！ ラスポスという役割には些か程遠いのだよ、ヴィヴィオくん！」

「えー？ でもパパいってたよ。『スカさんならできるやればできる子だつて』」

「何を根拠に!!」 というかちやんとパパをしていたね雷斗くん!」

スカリエッツィのキャラ崩壊が半端ない。

「それより雷斗くんはどこなの? さっさと答えないとメガネと同じ末路なの!」

「知らないさ。どうも彼の居場所が特定できないからこそ、私はビクビクしているのさ。一人のときに奇襲されそうで怖い」

「師匠ならやりかねないな。あの人色んな意味で怒らせたらヤバいから」

まあなんにせよ。スカリエッツィは千香と一緒に傍観するだけらしい。ヴィヴィオとなのはを戦わせ、アオとソラで戦わせる。そう彼は説明した。

「なんでそんなことする必要があるの?」

「面白いから」

「よし、ヴィヴィオが終わったら千香ちゃんとスカさんをぶつちk i i r」

なのはの殺気が高まったところでヴィヴィオに変化が生まれる。

身体は十代後半となり、髪がストレートからポニーテールとなった。

「これならパパもイチコロだね!」

「母が娘に負けるとでも?」

「えー? だって可憐なヴィヴィオと比べて凶暴なママだとパパは見向きもしないと思っけどー?」

「よろしい。戦争だ」

なのがキレてヴィヴィオに向かっていく。そしてソラは神器を構え、アオもソラと同じようにする。

「これで終わり」

「ああ、終わらせる。だから——」

「安心してとっとくたばれ!!」

偽物と本物。彼らの戦いはこうして始まった。

第一百八話

(アオサイド)

かつて一人の少年がいた。純粹で真つ直ぐでいたずらつ子な男の子がいた。だけどその少年は現実を知り、夢を諦めた。

かつて一人の少年がいた。悪者が許せずヒーローに憧れ、そして悪の欲望で殺された男の子がいた。だけど、その少年の想いは自分に受け継がれた。

英雄とヒーロー。

蹂躪と救済。

どっちが勝つても文句はない。だけど、この戦いで思い出してほしい。いや思い出すだけでいい。

——— かつてこんな日が自分にもあつたんだ、と

そう自分がソラに教えることは……………

(??サイド)

劍術において経験ではソラが上だ。その手の天才の少女と戦ってわけだ。なお、その戦いの原因はエクレア争奪戦だったりする。

「エクレアで鍛えられたオレの劍術を特と見よ!」

「なぜにエクレア!?!」

わけがわからないよとばかりに下からの袈裟斬りを繰り返すが、神器でそれを滑らすように流し、ソラは腹部へ蹴りを繰り返す。

「ぐふッ」とアオは後方へ飛び、それと同時にソラはアオへ飛び込む形で斬り込もうとする。

「なんのオ!」

「チッ!」

アオはそれを受け止め、あらかじめセットしておいた雷魔法を放つ。空中に飛んでいるソラが避けるには不可能。ソラはなんとかしてアオから離れたが至近距離から受けることを回避しただけだ。雷魔法を受けることは避けられない。

直撃。バリバリと感電するソラは地面に叩きつけられた。アオは壁を蹴り、今度はソ

ラへ斬り込もうとした。

ゾツ——

不意に寒気がした。ソラが何かをするという感じがした。まさしくその通りでアオの手足をリボンが拘束した。

『シンクロ』

「や、ベツ！」

ソラの髪の毛が金髪に染まり、全てを開く者神器は刃がなくなり円筒状になっていた。カチャツ

とアオにそれを向けて叫ぶ。

『ティロ・ファイナーレ』!!』

巨大な魔力砲弾がアオに直撃し、煙幕が立ち上る。ソラはそれを確認してから『シンクロ』を解除し、再び構える。

まだ終わらない。なぜなら相手は自分だ。最後の最後まで足掻き、苦しみ、そして勝利を掴もうとする。

ちなみにمامィとの『シンクロ』はもう使えない。魔力さえあればできると言えばできるが分けてもらった魔力はさっきの底を尽きた。残っているのは杏子、さやか、ほむ

ら、そして千香の魔力である。まどかの『シンクロ』はオーバーキルのため、ゆりかごと破壊しかねないのでもらつてない。

「負けて、負けてたまるかアアアア!!」

「さすがはオレ。しぶときはG並みだ」

今度は杏子の『シンクロ』を使う。髪の色と神器はまたもや変化し、赤毛と槍状になった。長いカギというイメージがしっくりくるモノだ。

「うオオオオオ!!」

アオは『神速』を使った先制攻撃に成功——したかに思われた。

「き、消えた!?!」

霧のように消えたソラに戸惑うアオ。そこへソラが彼の肩へ突きを放った。

「ッ、が!?!」

肩をやられたので逆襲に蹴りを放つが、またもや霧のように消えた。

「そいつも幻想だ」

「果たして」

「どれが本物だ?」

合計十人くらいの赤毛のソラがいたずらつ子な笑みを浮かべてアオを挑発する。

「ナメるなアアアア!!」

アオの神器から雷魔法が上へ放たれた。そして上から雨のような雷魔法が放たれた。ソラ達はそれを回避する、がアオが放ったごく小さな魔力弾で幻想達を消す。そして残ったソラを本物と断定して『封印』の斬撃でソラを切り裂く。

「ツ、コイツも!？」

アオが切り裂いたのは幻想だった。では本物は?とアオが辺りを見回す。そして気づいたときにはソラが懐刀にまで来ていた。今度のソラは黒髪で手甲には『アクセル』と書かれたカードがあつた。

「ちよつくら、くらつとくく?」

カードが『トツプアクセル』と書かれた刹那、物理現象を越えた拳のラツシユがアオの身体中へ襲いかかる。

そして最後の一撃でアオは壁へ叩きつけられる。

「WRYYYYYYYY !!」

WINとばかりにソラは手をあげて勝利ポーズをとる。

これでおしまい。誰もがそう思っていたが、それでもアオは立ち上がる。

既に身体はズタボロ。フラフラとした足取りだ。

「……………どうしてお前立ち上がる?」

「アンタに……………思い出してほしいんだよ……………『オレ』を」

それがアオの過去の自分願いだった。

「カフツ」とアオの口から血が吹き出した。

「……お前、まさか」

「そうだよ……気づいてなかったのか？ 自分はもう長くない……。クアットロが言つてただろ？ 失敗作だって……」

「…………お前は今のオレを否定するか？」

「しない。だつてアンタはアンタだ。ソラはソラ。間違つてると思えばそれは間違つてるし、正しいと思えばそれは正しい。第三者の意見なんて元々参考程度みたいなもんなんだよ。ホントに正しいのは自分が信じたモノさ……」

「…………」

「なあ、ソラ。自分はアンタのことを——ツ!!」

アオが突然立ち上がり、ソラを右へ押した。

何事？とソラは思った刹那——

——アオの胸に穴が開いた

「え……………う？」

アオは倒れる。倒れた原因は撃った犯人のせいだ。
なのはじゃない。

ヴィヴィオじゃない。

では誰だ？

ソラは撃つた犯人を睨み付けた。しかしそれは予想外だった。

「なんで……なんでこんなことをした——」

——「ママさん!!」

ママはいつものようにニコニコ笑ってマスクを向けていた。

☆☆☆

前哨戦は終わり、本番はここから始まる。

もしかするとシリアスばかりの物語。はたまた悲しいばかりの物語。
残酷な決着もあります。ご覧ください………

第一百九話

マミさんの行いが信じられなかった。

なぜこの人はアオを撃った？

敵だからか？

いやそんなことより早くアオを治療しないと！

致命傷だが息はしてるので、まだ死んでないはずだ。オレは応急措置を行うべく魔法の準備に入った。

「な、なんだよこれ！」

影がアオ自身を飲み込もうとしていた。直感的にこれはマズイと感じた。今すぐこいつをこの影から出さないととんでもないことになる。

オレが手の力を込めて引つ張りだそうとしたとき、再びマミさんが魔力弾を撃ってきた。

やむ得ず手を放してしまい、アオは影に飲み込まれてしまった。

「……………どういいうつもりだマミさん」

「残念だけどソラくん。あなたがアオくんを連れ出しちゃ困るのよ」

「どういふことだッ」

怒りを吐き出す。精製した魔力が吹き出し、風が起きる。場合によつては本気になる必要がある。

マミさんはベテランの魔法少女だった女性だ。油断すれば搦め手などでこちらが不利になる。

「全ては『グリード様』の命令よ」

「『グリード』？」

聞いたことない名前にオレは顔をしかめる。するとマミさんが今度はオレじゃなくて、戦いを終わらせた高町とヴィヴィオに向けて『ティロ・フィナーレ』を放つ。

高町は受け流す形で防御魔法を使ったが、ヴィヴィオは『聖王の鎧』が受け流せるダメージのキャパシティを越えたのか、そのまま地に倒れて元の幼女の姿になった。

「どういふつもりなの？ マミさん」

「私の命令は『アオくんの回収とゆりかごのゴミ掃除』。だから排除しなければならないの。そうよ、排除……………排除……………ハイジョツ」

ここでオレはやっとマミさんの様子がおかしいことに気づいた。言動だけでなく瞳に何やらわからないマークがあった。

……………操られている？ いや間違いない。

普段のマミさんならオレに襲いかかるのは夜かお風呂のときだ。

「そうなの?」

「まあな。もうすぐ成人なのに困ったものだ」

「なら、次回から私も雷斗くんできてみるの」

「師匠になんらかのフラグを立ててしまった」

軽口を言いながらマミさんの魔力弾を回避する。ヴィヴィオを肩に担いで高町はオレと同じく回避している。

「そういえばヴィヴィオがやられたらこれって落ちるよね?　なんで落ちないのかな」

「……………まさか」

ヴィヴィオはこのゆりかごの核だ。つまり核がないこの戦艦が落ちるのが道理だ。だが、この戦艦は落ちない。

軽く考えてみた。核ということはこの戦艦の所有者はヴィヴィオだ。つまり、ヴィヴィオの所有者が何者かに奪われたとしたら……………そうか。そういうことかよツ。

怒りだけでなく、悔しさが込み上げてきた。

「へえーさすがは『無血の死神』ってことだな」

「マミさんの後ろから男が現れた。ワイルドな格好で野性味溢れる顔が整った男だ。」

「お前は誰だ？」

「『グリード様』さ。無血くん」

「マミさんに何をした」

「なあに、この別嬪さんの『所有権』をオレのモノにしただけよ」

やはり『所有権』を奪う力——最低最悪の神器ッ！

「まだあったのかよッ。強奪の神器！」

前世の戦争のときに何度もいた神器使いだ。その能力は相手の持つモノを奪う最低最悪の力だった。味方の神器使い達の力を奪われ、その強奪した力を悪用されていた。しかも、強奪で所有できる数には限りがない。

そのときのオレは友人を殺され、ぶちギリたので、その強奪の力がある神器使いを一人残らず殺した。

まさかまだ残っていたとはな。

「ガハハハ、『強欲の魔の手』。他人の『所有権』を奪うのがオレの神器だ。おかげで女をたくさん手込めにできるぜ？」

ムカつくことにマミさんの髪に触ってきやがった。今すぐ殺したいところだが、マミ

さんを人質にとられている状態だ。

しかも高町は荷物を抱えている状況だ。ここは撤退するしかない。オレは歯を食いしばりながらスカさんに撤退するように言った。

「うむ。どうやら計画外なことが起きているみたいだね、千香くん」

「……………」

「千香くん？」

「計画外？ 違うよ——」

——計画通りじゃないか！」

オレはすぐにスカさんを突き放して千香が放ってきた凶行から守った。ナイフを神器で受け止め、すぐに千香を蹴り飛ばしたが、ヤツは受け身をとって立ってきた。

「くそッ!!」

すぐにでもドコでもドアを展開したいのに今の状況じゃ、展開できる暇もない！

高町に時間稼ぎを任せたいが今の彼女にそんな力はないし、最悪敵になる可能性がある。

どうする、どうする……………!!

「神威くん、前!!」

高町の声でオレはグリードがやろうとしていたことに気づいた。巨大なビームライフルらしき神器がオレ達に向けられている。

ヤロー……………このままオレ達を滅ぼすつもりか！

「全員一ヶ所へ来い！」と叫んでオレは千香の『シンクロ』を完了させた。

『『デストロイギガレーザー』!!』

『『守護せよ、アイギス』!!』

ビームライフルと大きな透明のシールドがぶつかった。千香と『シンクロ』できる時

間が限られている。それまでにこれを耐えきれないとオレ達はお陀仏だ。

しばらくレーザーとシールドの攻防は続いた——が、オレの中にある千香の魔力が底を尽きそうになる。シールドも徐々に維持できなくなる。

「ガハハハ！ 滅べ、滅んでしまえ！」

「おんのれエエエエ!!」

くそ、くそ、くそッ!!

このままじゃ——死ぬ。

刹那、グリードの神器がオレ達の方向から逸れた。それを好機とみたオレと高町はスカさんとヴィヴィオを抱えてその場を離れた。

何者かがグリードのビームライフルを逸らしてくれたのだ。それを行った人物の名前をオレは口に出した。

「サイトか」

「久しい、というべきか」

「なんのつもりだ？」

「なに、マスターの命によりワタシはこの足止めだ」

「私も、ね」

サイトの隣には一ノ瀬シイもいた。ニッコリ笑う彼女に対してオレはそっぽを向く。

どうもまだ気に入らないのだ、オレは。

「……お兄ちゃん、ここは私に任せて逃げて」

「……………理由は？」

「家族だからじゃ、駄目？」

「納得できないな。ただでさえオレはあのふんぞりかえってるに盗人ぬすっとに腹を立ててるんだ」

「それはあの人達をとられたから？」

「当たり前だ。今のオレの大切な人達だから」

オレが断言すると一ノ瀬は「そうだよね……………うん」と呟いて何かを振り切ったという顔になった。

「お兄ちゃんは『希望』。だから生き残らなきゃ駄目だよ。サイトもそうだったけど、もう彼の役割はもう一人の異世界の住人に託した」

「もう一人の……………住人？」

「うん、だから彼の役目はここで足止めすること。あなたをここから離脱させ、主人公達と合流させることが優先よ」

「一応、この鬼畜女も主人公だけど？」

「足りないよ。原作主人公だけじゃ、あの闇には勝てない」

一ノ瀬はそう言つて神器を召喚した。ここにきて初めてみる神器だ。杖だった。先つぽが天使の翼が展開されており、その中央にはルビーが輝いてる不思議な杖だった。

「行つて！ 長くもたないかもしれないから早くッ」

一ノ瀬の言葉を聞いてオレはドコでもドアを展開した。行き先はアースラだ。そこなら味方が集まると判断したからだ。

「お礼は言わない」

「いいよ。私が好きでやったことだから」

「オレはお前を家族とは見ない」

「いいよ。それが私の母の罪だから」

「……………ありがとう。そして——」

「さようなら」

それが彼女との別れ。もしかすると生きてるかもしれないが、生きていたとしても敵になつてゐるだろう。

(??サイド)

一ノ瀬シイとサイトはソラを背中で見送り、ホツと息を吐いた。

「これでよかったのかね？」

「うん。これでもう大丈夫」

サイトは一瞬だがシイの顔が見えなくなった。何やら恐ろしいモノを見たような気分だ。

(……………まさか、な)

馬鹿馬鹿しい。このような少女が恐ろしいとは自分は疲れているな。彼はそう思つてデルフを構える。

「オレに勝てるんでも？」

「勝てれば吉。負けても吉さ。なに、君とてワタシのような化け物はほしくもなんともないだろ？」

「男だからな。まあ……………さっさと終わらせるかッ!!」

こうしてグリードとサイトの戦いは始まった。彼の戦いの結果を言えば敗北した。

サイトではこの強奪した神器の力では勝てなかった。

しかし、彼は最後の最後で笑っていたことを追記しておく。

そしてシイはグリードのモノにはならなかった。なぜなら――

☆☆☆

ソラ達がアースラの外を見ればそこは『全てが止まった世界』だった。灰色の世界。まるでほむらが起こした時間停止のようなモノクロの世界だ。

つまりアースラの中以外は全ての世界が停止していたのである。なぜアースラが無事であるのかはさておいて、四季やキリト、はやてや衛など一部の者は既に中にいたので無事だった。

しかしエリオとキャロ、ルーテシアなどは止まっていた。大切な者が石化したかのよう固まっていたのだ。

もはやスカエリッテイの問題ではない。世界の危機なのだ。

そしてアースラの医療室には包帯で巻かれたまどかと無事だった一刀と雷斗がいた。

どうやら彼女だけがグリードの魔の手から逃げ切れたようだ。彼女は「袋叩きにされちやつた」と少し悲しい笑みを浮かべて誤魔化そうとしていたがソラは彼女を抱き締めた。

彼女は何かを耐えているのが痛ましかったのである。

「ほむらちゃんが、さやかちゃんが、杏子ちゃんが……………」

「よくがんばった。たった一人で戦っていたんだよな。だから、もう……………がまんするな」

「……………グスン、うええん」

まどかは泣いた。子どものように泣いた。ソラは前世で慰めてもらったように彼女の頭を撫でながら思う。

——前哨戦はオレ達の敗北だ。ああ、強いよお前らは……………

まだ見ぬ敵にソラは敬意を表す。そして、何もいないところを睨むような眼光となる。

——だから覚悟しろ。敵と認めたお前らには逃げ場なんてやらない。皆殺しに

してやる………！！

許せないから潰す。

奪われたら奪い返す。

ソラはそう決意するのだった。

「あ。世界の危機が去るまでしばらくは見逃してやったるけど、ソラくん達は刑務所行きな」

「解せぬ」

やはり閉まらない……………のがこの小説だよね。

第一百二十話 コラボっちゃいますその一

アースラが無事だった理由はすぐにわかった。それはオレが外史で会っていた女の
仕業だった。

「美国織莉子、なのか？」

「管路と呼びなさい。まあ、貴方のお話はよく聞いてますわ。なんでも弱味に漬け込ん
で女の子を取っ替えひっかえしている鬼畜だと」

「いやオレそんな性的鬼畜じゃないから。むしろ誰だそいつ」

「え、貴方はアグレッシブ武田じゃないのですか？」

「誰だよその芸能人みたいな名前！」

「じゃあサンドイッチさんですか？」

「食べ物じゃん！」

「冗談ですよ、悪意ソラ」

「悪意を感じるんだけどそれ！ わざと!? わざとですか!？」

「クスクス、わざとよ」

「相変わらずムカつくなこの女！」

そういえばキリトの世界に来る前にこの女のせいで一年間無駄にしてしまったな。その怨みを晴らせねば気が済まない！

「やめとけ、この女に何をしようが無意味だ。リスク無しに未来予知できるからな」

「だけどなあ、一刀……」

「照つとり早い方法がある」

「どんなの？」

「無視しろ」

「ええー……」

それでどうにかなる人なのこの女は……。

「相変わらずね北郷一刀」

「……………」（一刀は無視をした！）

「あら？ 無視？ それならこちらが知ってる情報を教えないわよ？」

「……………」（一刀は目線を逸らした！）

「ね、ねえ。あのこつちを見て。目線を合わせてよ」

「……………」（一刀はあやとりをしている！）

「ごめなさい。ソラのごとは謝るから無視しないで！」

「……………」（一刀は志〇千里を歌い出した！）

「お願いだからこつち見てよお……………グスン、私を一人にしないでよお……………」
管路が泣いた!? てか、この人メンタル弱くなつてないか?

「コイツは根は寂しがり屋の構つてちやんだからこうやって放置プレイさせとけば勝手に自爆するから」

「なんかかわいそうなんだけど……………」

「知らねーよ。こちとらコイツのせいで散々な目に合つてきたんだからこれくらいのがちようどいいのさ」

「いやガチ泣きじゃん。しかもなんか泣いてる管路に欲情してるっぽい変態がいるんだけど」

鼻息を荒くして「泣いてる織莉子、萌えろ♪ ハアハア……………」と手をワキワキさせる変態がいた。てか、どつかで見たことあるなああの眼帯女。

「ああ、コイツはな——死ね!!」

「ゲバツ!」

いきなり一刀が眼帯女に腹パンしやがった。マミさんが見たらアンリミテッドマスケツトショットが待つてるぞ、それ。

「いきなりひどくね? それ……………」

「^{キリカ}コイツは織莉子という意中の女がネトラレて興奮するドMなんだよ。ちなみにこの

☆☆☆

さて、ギャグは終わり管路の話を書くことになった。なんでもこのアースラは彼女が起こした結界のおかげでここにあるみんなは停止しなかったらしい。

管路が言うには外の世界がモノクロなのはなんらかの力が世界を止めたらしい。

「なんらかの力って……………」

「私にもわかりません。でも、神や管理者をも凌駕する力であることは確実です。しかも抑止の存在が出てこない辺り、しっかりルールに乗っ取ってる反則技であるようですよ」

世界のルールを破る者にペナルティを与える抑止の存在。救済の魔女のような化け物が現れるが、この抑止の存在がどんなのかはオレはまだ知らないんだよな。まあ、現れたら世界の危機なわけだが。

「私達は何をすればいいんや?」

「貴女達が出会ってきた敵——その神器使い達を討伐してください。そうすれば元に戻るはずですよ」

簡単に言ってくれる。相手は未知の存在だ。タイマンならオレや雷斗などは大丈夫だが、高町やオレンジツインテが危険すぎる。

「大丈夫です。ここにも助っ人がいますから♪」

「助っ人？ サイトが抜けた枠を埋めるためか？」

「はい♪ ではこちらをご覧ください！」

管路が指したのは黒い幕で隠れた長方形の小部屋だ。洋服屋の服とか試着するとき
に使う部屋だっけ？

管路は「ご開帳！」と幕を上げた。そこには――

——手足を縛られて猿ぐつわで声を出せず座らされた中学男子が涙を流して失神していた。

「アウトオオオオオ!!」

「きゃうん!」

オレと衛は管路をハリセンで叩いた。

「何をするのですか、いきなり!」

「いきなりも何もあるかアアアア! お前がしたことは誘拐じゃねえか!」

「全くだ。貴様はいつたいどうやって連れてきたんだ!」

「え。それは鹿目まどかさんと別れた夜道を奇襲して拉致りましたが、何か?」

「問題だらけだわ!!」

オレと衛は罪無き少年を拘束から解放する。てか、鹿目まどかつてことは平行世界の住人か? まあいいや。とりあえず見滝原に返しておこう。

オレはドコでもドアを使って少年を放り投げた。

うん、少年には悪いが白昼夢だったということにしておこう。

「ちなみに天道陸途以外の犠牲者も召喚^{拉致}する予定ですよ♪」

「お前いい加減にしろよ!!」

拉致する予定にオレはツツコまずにはいられない。

というか、SKYアイスさん、すみません！

閑話休題

管路——もうめんどいから織莉子でいいや。まあこれからすることは乗っ取られたゆりかごに攻め込むことだ。

ちなみに行くメンバーはもう決まっている。

四季、夜刀神、キリト、アスナ、雷斗、高町、オレ、衛、一刀、ツインテに青髪姉妹、あとなんかレインコートで顔を隠したヤツ。

いやマジで誰だと思つて警戒していたがどうやら四季の知り合いらしい。

八神とヴィータには悪いが彼女達にはアースラを守ってもらう必要があつた。オペレーターだけでなくヴィヴィオも危ないからからな。

「さてと織莉子はどうする？ ま、お前ことだ。どうせ傍観だろ？」

「さすが北郷一刀さん、わかっているわね♪」

「だから嫁ぎ遅れなんだよお前」

「グサツて来ました！ なんか心外なこと言われましたよね、私!!」

容赦ないな一刀。てか、知的な雰囲気はただのいじられマダムにシフトチェンジして
るよね、これ。

『ふん、談笑とは余裕だな』

アースラのモニターに『敵』が映っていた。

そこには奪われたオレの仲間やツインテの仇も並んでいた。それよりも意外だった
のが――

「なんで、なんでフェイトちゃんまで!？」

「アリシアさんも……だなんて」

まさかここまで仲間をとられていたなんて思いもしなかったな。しかし、フェイトと
アリシアはそれを否定するかののように笑みを浮かべた。

『所有権』を取られてないのか？ ではなんでだ？

『この身体を持ち主はフェイトと』

『アリシアのようね』

『私は妬嫉』

『あたしは嫉妬』

『私とあたしは他人の身体に寄生する神器の使い手』

……つまり遠隔操作か。まあグリッドよりまだ弱いかもしれない。理由はあいつの神器は洗脳ではなく身体や神器などそのものを使う権利がある最低最悪な力だからな。

それでも身体をとられたフェイトやアリシアとたまったもんじやないな。

『久しぶりね、死神』

ん？ 死神ってオレのことか？

『そうよ。あなたに胸の傷をつけられて以来ツキツキするのよ……！』

そうかそうか………ところであんた誰？

オレがそう言うのと周りの空気が凍りついた。え？ なんか悪いことしたオレ。

『あなた、私のこと覚えてないの？』

「うん。お前みたいに見える知らずの豚は知らない」

『誰が豚よ！ 太ってないわよ！』

「あ。ごめん。つい本音が」

『わざと!? わざと言ってるのよね、そうよね!』

「なんだ。その程度の思考回路はあるんだな」

『ムツキアアアアアコイツ絶対食い殺すウウウウ!!』

白髪女がフェイトとアリシアに羽交い締めされて落ち着かせていた。てか、ホント誰だこいつ。

「アイツって確か、お前が正義の味方ごっこしてるときにぶちギレて傷つけた少女じゃね?」

「あ、いたなそいつ。それから師匠が亡くなってからまた現れたから今度は身ぐるみを剥がして亀甲縛りで吊るした記憶があつたなような気が」

「お前もまだまだヌルいな。俺ならそのときの写真を撮って周りに広めるな」

「いや師匠はやり過ぎだから。それで何人かの女性や男性が社会的に抹殺されてたから」

「あんたら師弟が怖いわ!!」

八神にツツコまれた。すると、青髪が指をさして叫んでいた。どうやらぎんギンガミだっけ?

まあいいや。その同僚を白髪女に殺されたと言っていた。

だからはつきり言っちゃった。

「どうでもいいだろ」

「どうでもよくない！ あの女性のせいでホープさんが、シルビニアさんが！」

「いやオレにとつてどうでもいい。ぶっちゃけ関係ないから」

「なんで……………なんでそんなひどいことを！」

「ひどいも何もオレはそいつを知らない。だからどうでもいい。あとどのみち——

あいつら全員皆殺しだ。あ、ほむら達や知ってるヤツらは除いて」

オレがそう言うともモニターにいるヤツらは一斉に笑いだした。今度はプライドというヤツはオレに指をさして言ってきた。

『き、旧世代の遺物がデカイこと言ってきたなア！ ゲハハハハ！』

「……………」

『はつきり言っちゃるよオ。無理だ。テメーみたいな古いのがオレ達に勝てるはずない

だ——』

「黙ってる偽物」

オレの一言でプライドはビクツと反応した。声色がどうも低くなっているようだが、気にしない。

「不可能可能を決めるのらお前らじゃない。オレだ。これからやるヤツらが決めること

だ。第一お前の神器はキャンセルしできないっばいじゃん。ぶっちゃけ、お前はアオ以下。あいつの方が偽物らしい本物だったよ」

『この、クソガキイ!』

「怒ったか? まあどうでもいい。てか、お前はもう眼中にないから。お前の相手は既にいるからな」

オレが親指で指名したのはツインテだ。ツインテは復讐の相手だしな。

『上等だア。その女を殺してからテメーを殺す!』

はいはい、言ってる言ってる。オレは手の平を振りながら無視した。にしてもツインテだけでは不安だな。よし、保険をかけておこう。

オレは師匠と四季を呼んでツインテの保険について提案をするのだった。

(??サイド)

戦いは始まる——そして『彼女』はラースに頼んだ男を愛しそうに撫でる。

男——動かなくなったアオを愛しく撫でるその女性はかつてラースが崇拜して

いた闇だ。

既に『彼女』は人型に戻っていた。黒いドレスと黒い羽。

それはかつてソラが見たことある者だった。

「あなたも働いてもらおうよ」

クスクスと笑い、『彼女』は黒い霧をアオの身体に注入する。しばらく苦痛の呻き声をあげるアオだったが、立ち上がり虚ろな目で水晶に映るソラを見ていた。

「アハハハ、ホントに楽しみよ——ソラ♪」

笑う女性。それは狂喜。そして狂気の笑み。その女性の名前は——

敵だったのだ。

—— 『暁美ほむら』。

『朱美』ではなく『暁美』だ。そうかつての前世のほむらが

第二百二十一話

ドコでもドアでゆりかごの内部に侵入したオレ達は中が変わっていたことに訝しげになつていた。

「確かゆりかご内部は機械的だったはず……。なのにいつの間にか中世ヨーロッパみたいな大理石になつている……………」

衛の分析通りだ。何者かの力でゆりかご内部が改造されているようだ。おそらくマッピング対策だろう。ヤツらは自由に大将をとらせないためだろう。

「つか、なんでまどかまで来ているんだよ?」

「ソラくんいるところに私有りだよ」

「わけがわからないよ」

まどかはおんぶという形でオレの背中にピッタリとくっついていていた。その様はコアラのようなのである。柔らかい身体にワッチの情欲はたまる一方である。

「ムラムラしてきた?」

「してくるから離れろ」

「合意を得た。今こそ合体のときだよソラくん!」

「やめんかい」

接吻を迫ってくるまどかを押さえながらオレ達は前から感じる敵意に表情を険しくなる。

そこから現れたのはほむら達だった。

「ようこそ、グリードアイランドへ」

「なんですと？　ここは念能力者オンリーしか参加できないオンラインゲームじゃん。まどか、今すぐ撤退だ。ゴンさんの力がないとオレ達はここを攻略できない」

「よしきた」

「いや違うからね、まどか。グリード様がたまたま名付けてそうなったただだからね？」
「さやかが帰ろうとするオレとまどかを引き止める。まあ帰るつもりは元からないのだが、そこんところはノリだ。わかってくれ。」

「それで火憐ちゃんや、ファイヤーシスターズは再結成するのか？」

「火憐って誰よ！　てか、中の人ネタをここで使うなよ！」

「ねえパパ。あいつ斬っていい？　斬っていい？」

「まどかも乗らない！　あとそのキャラ怖いからやめて！」

「さすがに斬殺系ロリっ子少女のキャラにさやかさんは涙目だ。オレも怖いよ。だって実際に師匠と一緒に遭遇したことあるもん。」

あのとき見たワインレッドな瞳と返り血は忘れられない。

「んで、お前らがなんでここにいるんだ？ 足止めか？」

『ガハハハ、違うな！ 試練だ』

なんかモニターが出てきてグリードがアップで映された。

『そう、オレと出会いたけ——』

「えい☆」

「てい！」

ガシヤンツ!!

ガラスが割れる音と共にモニターを破壊した。すると、またモニターが現れてグリ

ドが映された。

『いきなり何しやがる！』

「キモい面を見て殴りたくなつた」

「後悔も反省もしてないから消えて♪」

『なにこの二人!! 会って早々、いきなり毒を吐かれ——』

ガシヤンツ！

再びモニターを破壊。

言わせない。しゃべる前に黙らせる。それがソラクンクオリティである。

「……ちよつとくらい聞いてあげなさいよ」

「メンドイ。とかいかいちいち待ってられるか。そんな正義の味方ごっこはアオとアホに任せるわ。オレはさっさと帰って『劇場版魔法使いまなか☆マギカ』を見たい」

「あ。私も。なんか主人公が昔の私みたいな人で共感できるんだよねー♪ 男の子だけど」

※説明しよう！ まなか☆マギカとは鹿目まどかの人生をそのままアニメで再現したかのような物語である！

ちなみにヒロイン的な立場にほむらみたいな少年がおり、一部淑女にとつて『キマシタワー!!』というコメントがあるほどの愛と勇気とBLがある物語なのだ！

え？ なぜソラくんも見ているかって？ 面白いからに決まってるじゃないか!!
(bysスカさんより)

「え、あたし達よりアニメが優先なの？ てか、さりげなくあたしのことアホって言うてたわよね？」

「お前のアホは今さらだろ。てか、テレビアニメでめちやくちや気になる終わり方したからさっさと見たい」

「あ、それなら私と一緒に行くよ」

「デートか。よし、これが終わったら行くか！」

「うん！」

「あんたら緊張感持ちなさいよオオオオオ！」

頭をかきむしりながらさやかはシャウトする。ほむら達も呆れた、という顔でオレ達に向けて冷めた目で見ている。

「あ。それより試練ってなんだ？」

「今さら!? それを今さら聞くの!?!」

「それがオレクオリティ」

「そういうえばそうだった！ 上等よ。ここを通りたければあたし達を倒せってことよ！」

さやかがそう言って神器を召喚すると他のヤツらも召喚してきた。一触即発。オレ達も警戒心を高くする。

するとほむらがさやかの肩にちよんちよんとつつく。

「さやか、いいかしら?」

「何よ、ほむら」

「リーダー私でいいかしら?」

「なんのリーダーよ！」

「だって私達一つのチームだし、それにアホなさやかよりこの完璧かつ最高の美を持つ私こそふさわしいわ」

「どんだけ自信あんのあんた!? てか、誰がアホよ！」

なんか変な争いが始まった。すると杏子も参戦し、マミさんも参戦してきた。

「それならアタシが一番だろ！ 戦隊モノのリーダーは常に赤だろ！」

「色なんて関係ないわ。いつだって妹の上はお姉ちゃんよ？」

「ふざけないで。お積む無しのレッドと年増にリーダーをやらせたらクレームがくるわ」

「なんだと（ですって）？」

オイオイ、仲間割れし始めたぞ。てか、なんで仲が悪くなってるんだ？

しかもだんだんと『リーダーを決めるリーダー』という議論になってるし。

「たぶん、ソラくんという共有財産がなくなったという影響かも。ほら、みんなってソラくんに依存していたし」

「あー、オレも似たようなもんだからわかる気がする」

だからと言ってこのケンカは止めないけど。オレとまどかは無視して先に行こうとしたらマミさんがオレの足下に魔力弾を撃ってきた。

え、見えてるの？

「私達を倒してからにしなさい。でないと先には行けませんよ？」

すると衛達がいたそれぞれの床下が割れて落ちていった。あ。ヤベ、分断された。

これは放置してたら迷って捜すのに苦労するかも。すると結界でオレとまどかは閉じ込められ、またモニターが出てきてグリードが映された。

『ガハハハ、一本食わされたな！　どんな気持ちだ？　仲間が心配か？』

「あ、割りとそんなにないや」

『はあ!?!』

予想外の答えにグリードは驚く。いやだつてうちの面子に敗北しそうなのは高町とかツインテ、夜刀神くらいだもん。

四季、師匠、一刀、衛だつたらなんか問答無用で勝てそうだし。

だから心配する必要はない。

「んで、グリード……マチュピチュだっけ？　こいつらと戦ってこと？」

『グリードだけでいいつつうの！　そうだよ。テメーらはかつて仲間だった女と戦うのさ。どうだ？　良い演出だろ？』

「そ、そんな……………」

まどかは愕然していた。グリードの言葉にまどかは絶望して————いるかのよう

に見えた。

「私は」

彼女は魔法少女服になって、

「みんなを」

それから弓を引いて、

「傷つけられないよ♪」

魔力矢発射。

ズドオオオオオンと一矢一殺が四人の少女達がいる中央を通過して床が吹き飛ばした。

「え、ちよ、ま……まどか？ 行動と言動が一致しないのだけど？」

ほむらはまどかの凶行に戸惑っていた。他も同じだ。まさか味方を殺すつもりで撃ってきたのだから。

「……私ねーみんなに袋叩きにされて結構傷ついたんだよー？ でも怒ってないから安心して♪」

嘘だ。満面の笑顔だが目が笑ってない。

「それで気づいたことがあるんだ。ほむらちゃん達のお陰でね」

「な、何に？」

嫌な予感がするとほむら達は冷や汗をかいていた。そしてそれは予感通りだった。

「悲しいけど、これ——戦争なんだよね……………」

真顔でまどかはそう言つてのけた。大魔王も裸足で逃げ出したくなるような恐怖が彼女達を襲う。しかしそれでも立ち向かう勇者はいた。

「ま、負けないわよ！ みんな狼狽え——」

さやかが言う前にオレは背後から腕に間接技を決める。

「くっ、はな……………つてソラ。何その振動してるコケシは!？」

「一刀アイデアで、スカさん作の『お菊ちゃん』だ。ベッドの上でいろいろ楽しめる道具
ですぞお客さん」

「それをどうする——つてちよ、どこをさして…………ぎにやアアアアツ!!」

さやかのお菊に思いきり差し込んでやった。するとピクンピクンと反応しながらさやかは白眼を剥いて倒れた。どうやら逝つたようだな。それを見ていた残りのメンバーは恐怖に震えていた。

「……………」

「さて、お前らに選択肢を与える。まどかにぶちのめせされるか——

——ケツの初体験を体験するかをな♪」

オレの微笑みで全員が一斉に結界を叩いて助けを求める。

「いやアアアアア！」

「た、助けてグリード様アアアアア!!」

「ひいッ。く、来るな! くる——みぎやアアアアア!!」

次の犠牲者は杏子である。それから行われたことはあえて書かないが凄惨でえげつないことが起きたと思つてくれ。

それからオレとまどかは裏切り共を始末した後、モニターのグリッドに向けていった。

「さあ次はお前だ」

『決めた。お前らだけは絶対に戦わねえ』

なぜグリッドにご指名拒否されてしまいモニターと結界は消えるのだった。

「うう………もうお嫁に行けないわ」

「あ。まだほむらちゃんだけ生き残ってる」

「リピートアアアアアアアアアアムツ♪」

「い、いやアアアア!!」

「逃がさないよオオオオオオ!」

こうしてオレとまどかが鬼という鬼ごっこが始まるのだった。なお、ママさん、杏子、さやかは縛ってアースラに放り込んでやったことを追記しておく。

(??サイド)

ティアナは誰かの悲鳴が聞こえた気がしたが、すぐに記憶の隅にやった。なぜなら、

目の前には、

「ゲハハハ、来いよ。小娘！」

「上等よ、ゲス。アンタなんか『偽物』のアイツを汚してたまるモノですか」
かつて偽物だった彼のためにティアナは目の前の最低な男に挑む。

第二百二十二話 コラボっちやいますその二

「『シンクロ』！」

オレは『シンクロ』をし、まどかの魔力をラインで繋げた。髪の色と神器に変化が現れる。髪は薄いピンクで、神器は弓になり、矢尻が鍵状になっていた。

まどかも同じだ。髪の色は銀髪になり、神器もオレと同じようになっていた。

「逃げるなメスブタアアアア！」

オレが弓を引いて、それを離す。ほむらの真横を通過して地面が吹き飛んだ。

「ちよ、ソラ。殺すつもり!? なんか殺意を感じるのだけどー！」

「あつたり前だ！ これまで受けたセクハラ、お仕置き、イタズラの数々を身体で払ってもらおか!!」

「いやらしわね！ このへん——きやアアアアアア!？」

変態と言いつ終わる前に第二、第三射撃を発射。

涙目なつても気にしない。ごめんなさいって言っても許さない。これすなわち問答無用なり。

「ま、まどか！ ソラを止めてツ。マジ殺して私の命に危機があるのだけどー！」

「えー？ だってほむらちゃんがソラくんを怒らせたんだよー？ あと、ソラくんの敵だから助けないよ私」

「親友として助けて！」

「うーん、ぶっちゃけ親友だろうが恋人だろうが関係ないのだけど、それに……………」

「それに？」

「涙目で逃げるほむらちゃんに興奮してきたよ！！ ハアハア、富竹フラッシュ富竹フラッシュ！！」

「まどかアアアアアア?!」

まさにブルータスお前もかどほむらの期待は裏切られた。てか、まどかさんや。どつからそのカメラを持ってきた。

まあそれはさておき、ほむらを追いかけいじめパーティは再開される。

「泣け、叫べ、苦しめ！ ここが地獄の鬼ごっこじゃアアアアア!!」

「助けてエエエエエ!!」

かつてはまどかがお姫様で、ほむらが王子様という立場。そしてオレが白馬という立場だったが、まさに白馬とお姫様が乱心して、泣き叫ぶ王子様を追いかけるというシユールな光景である。

なお、今さらだがグリード優先のはずだと思っていたが、どうやら生存本能など生来

の本能が刺激されれば優先もクソもないことに気づいたのはほむらが泣きながら地面に横になってるときだった。

(??サイド)

ティアナとプライドの戦いの優劣は明白だった。魔力弾や幻術、ダガーだけではティアナに勝ち目はない。なにせ、相手は魔法をキャンセルできる武器を持っているのだから。

「ゲハハハ、どうした！ どうしたア！」

「く、がッ！」

遊ばれている。ティアナは目の前の相手をぶちのめしたい。後悔させたい。

しかし届かない。プライドは強いわけではない。大きな身体だけで技術が優れているわけではない。

しかし魔法をキャンセルされる、デバイスを無効果する。

ティアナが格闘のチャンピオンならば話が別だが、不得意なクロスレンジによってプ

ライドの独壇場となっていた。

「へんツ。これじゃア兄の二の舞だなオイ？」

どうすれば、とティアナは策を巡らすが相手はそれを許さず壁へ叩きつけ首をしめる。

「ぐ、う……………」

「さあさあ、とつと逃げない死ぬぜ？　死ぬぜエ！」

悔しい、悔しい……………。

ティアナにはもはや涙を流すしかなかった。しかし味方はいない。分断されて一人だ。

ティアナの本来の役目は司令塔。だが、指示する味方がいないし、第一に魔導士では『全てを開く者』には勝てない。

ティアナの意識は徐々に薄れていき、そして――

——死んでしまう……………

「突撃、四季くんの晩飯」

「ゲバブー!!?」

……………前に四季が錬成で開けた穴からプライドの側面の顔に向けてドロップキック

ク。

「こうかはばつぐんだ！」

ティアナは解放されて咳き込み、助けにくれた四季に頭を下げる。

「あ、ありが——」

「黙れザコ。耳障りな口を塞げ」

「ええ!？」

いきなり辛口に戸惑う。四季はへの字で不満そうな顔をしていた。

「て、テメー。よくも……」

「オイ、ゴミ。お前、その神器どっから仕入れてきた?」

「ああん? どっからだと?」

「そうだ。その神器——いや人の手で造られた紛い物をな」

紛い物という単語にティアナは怪訝な顔になる。どうやらあれは本物の神器ではないようだ。疑問を感じたティアナが四季にどういふことかと聞くとあっさり答えてくれた。

「アレは『人造神器』って言って人の手で造られた神器の紛い物さ。神器特有の固有能力はあるが、それは一部しか使えないし、ステータスは最低最悪の粗悪品。量産はできるが開発費が馬鹿デカイし、何より『神器は人の手では作れない』という世界のルールの

せいで滅多にできない超欠陥品だ」

なるほど、だからプライドはキャンセルしか使えないのか。しかし、なぜそれを四季が知っているのだろうか？

それも聞いてみた。

「当たり前だ。開発したのは俺だ」

「へ？」

「若さゆえの過ちで『ルールなんて反逆してやる！』という反抗期だったが、何度もやっても何度もやつても無駄な行いに気づいて研究資料を燃やした。俺にとって黒歴史だよ」

まさかの事実にてィアナは啞然としていた。ちなみに四季の口がへの字だったのはその黒歴史をほじくり返されただからである。

「つーか、旧世代うんぬん云々以前にお前が偽物時点で新世代名乗る価値もないだろ。粗悪品使ってる分際がエンシエントを馬鹿にするな、バカ。てか、お前の取り柄はただデカイだけだろ。アオ以下の分際で威張るな、死ぬ。つか、消えろ。今すぐ帰れ」

「さつきからごちやごちやうっせーよ!!」

ぶちぎれたプライドが四季に向かって神器を降り下ろす。四季は錬成したナイフでその神器粗悪品をバラバラに切り裂いた。

「は……………?」

「必殺、ただのキック」

「コブベ！」

四季が上段蹴りでプライドを引き離し、そしてすぐに召喚陣を展開した。

「お前に真のコピーの使い手を見せてやる」

四季が召喚したのは先程織莉子によつて拉致された少年——天道陸途だ。彼はいきなりここに呼び出されて「へ？ え？」と戸惑っているが、ぶちギレたプライドが迫ってきたのですぐに回避した。

「どこだよー!!」

「ゆりかごとという戦艦内部だ。さあ、奴隷。戦え。さもなければお前をホルマリン漬けにして解剖するぞ」

「いきなり呼び出しといて何様!？」

それが五河四季である。陸途はまあ状況をしっかりと判断した。

——青アザだらけになった少女

——偉そうな巨漢

——理不尽な召喚

なるほど、つまりあの巨漢のせいで女の子は傷ついたようだ。

「そしてそいつはお前を最初に拉致した変態だ」

「お前が犯人かアアアア!!」

実は違うわけだが、陸途が怒る理由——それは縄で縛られるところを道中を行く人達に見られたという恥ずかしい目に合ったというわけだ。そのとき見られた知人達の微妙な顔は忘れられない。

それをトリガーにして、オレンジ色の瞳となつた陸途は砕けた粗悪品を見て投影を開始した。

カギは開けるモノ、つまり開ける力があるという基本性質を瞬時に理解することで陸途は『全てを開く者』を完璧に投影した。

「ば、馬鹿な！ 投影しただとオ!？」

プライドはあまりの出来事に一步退いたが、いきなり地面がしなやかな縄になり縛り上げた。四季の錬成だ。

「さあ、贗作者のレプリカ。とくと味わえ、粗悪品」

「て、テメエエエエ!!」

四季に激昂するプライドだが、陸途の駆け足は止まらない。彼はそのままプライドを斬り抜けた。

縄を解除し、プライドはそのまま倒れるがどうやらまだ完全には死んでいないよう

だ。

「ガハツ……………くそう。完璧に投影したつもりなのに、なんでだ？」

それはおそらく『抑止の力』の影響である。完璧に投影——つまり完全な複製は不可能なので反発する力が働き、完全な投影はできずデメリットに陸途は吐血したのだ。

吐血するほどのダメージなのに、大して痛くなさそうな辺り、こいつも人外だなど四季は思った。

「ところであんた。俺をここに……………」

「あ。もうこんな時間。良い子は帰る時間だぞ☆」（棒読み）

「え、ちよ、待て——」

問答無用に四季は陸途を送還し、元の世界に帰した。

「ありがとう、異世界の戦士。お前のことは五秒だけ忘れない」

「サイテー……………」

「最低？ 何を今さら」

クスクスと笑うこの外道。しかし神ですらコイツには手を出したくないのか天罰は起きないのである。

「さてと……………んで、お前は どうしたい？」

既に虫の息なプライドにティアナはどうしたいか四季は聞いた。ティアナはデバイスを展開し、プライドの向ける。

「まあ、待て。復讐をしたのならこれを使え」

四季が差し出したのは質量兵器——マグナム銃だ。弾は一発だけ入っており、ティアナは同じくプライドに向けた。

「たす、け……………て」

「アンタはそうやって助けをせがむ人を殺してきたのですよ？　なら、その報いを受けろ」

ティアナはトリガーを引き、プライドに止めをさした。

眉間に一発辺り、彼は絶命した——

——
と思った？

残念。
死にません。

「復活^{リボーン}！」

「え、えエエエエ!?」

なんと身体を殻のようにぶち破り、瑞々しいお肌を持ったブルーメランパンツだけ履いた変態が現れた。

「我、悟りに目覚めた！ 真の強者とは筋肉があるものだアアアア!!」

「ここに来てマッスルが感染!？」

ティアナがツツコミに専念している最中、四季は原因を究明していた。

「あ。これ、俺の前世のとき遊び感覚で作った細菌兵器——『筋肉よ目覚めよ』だ」

「どんな細菌兵器よ！ てか、私の復讐劇が台無しよ！」

確かに四季は本物の弾丸をセットしていたはずなのに、なぜかこのような細菌兵器がセットされていたことに疑問を感じた。

「てか誰だよ、こんなイタズラしたヤツ——つてあ……………」

気づいた。いたわ、犯人。まあ、どうせ。あえて乗っているのだろうなと四季が思っている、

「プライド改めて『筋肉戦士ぴーたん』はこれよりマッスルを広めにゆくぞオオオオオオ！」

元プライドことぴーたんはあり得ないことに拳で次元の壁を越えてどこかに行った。

筋肉スゲーと感心しているとティアナはヒステリック気味に叫んだ。
「アタシの復讐心を返せエエエエツ!!」

最後の最後で台無しなプライドの最期だった……………。

「さあ、共にマッスルを極めようぜ!!」

「なんでお前がここにいる!?!」

どこかの知らない町にて再会した陸途はあの短時間で変貌したプライドを見て、いったい何が起きたのか少し戦慄した。

第百二十三話 コラボっちやいますその三

(??サイド)

四季とティアナは仲間と合流するために走っていた。途中からガジェットが現れて襲ってきたが、そこは四季とティアナが葬り去っている。

まあ彼と彼女では敵にはならない。しかしそうは問屋は許さないとばかりに新たな刺客が待っていた。

「待っていました」

「お前は確か……………」

黒のウェットスーツのような戦闘服。バイザーで隠し、籠手を装備した女性——
オリビアがいた。四季は何かを確かめるように石礫を投げた。

するとオリビアはそれを避けず直に受けたが弾き飛ばされた。

「出たなピチピチ女」

「あのその呼び名はなんかヤなんですけど」

「じゃあ変態痴女」

「悪意感じますよそれ!？」

「当たり前だ。こちとら殺されかけてるんだよ。お前の夫に慰謝料を請求したい今日この頃」

「クラウは夫じゃありません!」

とは言っているもののモジモジしてうれしそうだ。

やはり、と四季は目を光らせる。オリビアはクラウに惚れている。間違いない。

「まあ前世が前世だからな。お前らの人生は悲恋な物語だしー」

四季の言葉にモジモジをやめた。彼女は驚愕しているのかピタツと身体を止めたのだ。どういふことなのかとティアナが四季に問うと四季はスラスラ答えた。

「まず最高評議会がスカリエツティから没収した英雄の遺物。それはどこの時代で誰のモノだったことから考えることとなる。無限書庫の変態のおかげで誰だか特定できた」

「ユーノさんのおかげで?」

「あの人は変態じゃなかったら物凄く有能だから。ユーノだけに」

「うまいからさっさと説明する」

眉間にクロスミラージユを構えられたら四季は余計なことを言わずに答えるしかない。

「んで、その英雄はお前達の世界で古代ベルカという時代のモノだった——つまり、コイツらは古代ベルカの化け物、ということになる」

「その時代の有名な英雄って………！」

「そうだ。コイツ、オリビアは——」

——晩年、ゆりかごで最期を迎えた英雄——オリヴィエだ」

根拠はある。オリビアは石礫をガードをとらずに弾き飛ばした。それはオリヴィエが持つ固有能力『聖王の鎧』だ。

あらゆる危機的な攻撃を回避させるもはや無敵と言っても過言ではない能力だ。

「だから石礫を投げた……………そうですね？」

「まあな。正直、お前がオリヴィエということは当たってほしくなかつたけどな。なんせ時間がかかるから」

四季としてはさっさとここから抜け出してみんなと合流するべきだが、如何せん相手は英雄。苦戦は必至だろう。

「ティアナ、お前はさっさと行け」

「でも……………」

「いいから。コイツは——俺の獲物だ」

獍猛な笑みを浮かべる四季にティアナは恐れを持つ。

——こんな顔をする人間を初めてみた

四季の目の前にいる敵は彼の獲物だ。それを邪魔することは許さない。それにティアナのレベルではオリヴィエに勝つことはできない。

英雄に凡人は勝てない。

英雄に天才は勝てない。

それはまるで世界のルールのように存在する。だからこそ、この場を離れてほしいと四季は思っていた。

ティアナはそれに頷いて四季を置いて走る。オリヴィエことオリビアはそうはさせまいとティアナに向かうが、既に四季の錬成は始まっていた。

ティアナから遮るように壁が現れ、オリビアはやむ得ず破壊した。

そこにはティアナはいない。そして四季がオリビアの前に来て、ナイフを構えていた。

「そんなナイフで！」

「ところがどっこい。コイツに斬られたら、切り裂かれるぞ？」

オリビアはそれを聞いてナイフに伸ばした手を引っ込めた。それは強者としての勘だった。

オリビアが斬られたのは戦闘服のみだった。普通ならば『聖王の鎧』が発動して無傷のはずだった。

しかし、切り裂かれたということは無効化されているということと同義なのだ。

「解剖してやるよ、オリヴィエちゃん。お前の鎧は珍しいからな。あと、こちらら伊達にお前みたいな化け物と殺り合ったことがあるから悪しからず」

「は、はは………」

嫌な予感がする。助けてクラウドス。
オリビアはそう思った。

☆☆☆

なのはとスバルはフェイトとアリシアにとり憑いている嫉妬と妬嫉の二人と戦っていた。
いた。

彼女達には能力は寄生するだけだが、とり憑いていた者の能力は使えるそうだ。

今、フェイトと戦っているなのはは親友と久しぶりに競い合うことに喜びを感じていた。

「なのはさアアアアアん！ アリシアさん強すぎますよ！」

「踏ん張れ。あなたならできる。……………足止めだけど」

「足止めって言った！ 言いましたよね!？」

「あ、間違えた。生け贄なの」

「もつとひどい！」

軽口が言えるのは余裕の証。嫉妬と妬嫉はそんな二人に苛立ちを覚えた。

『なんでそんなに余裕なの？』

『仲間と傷つけ合っているんだよ？』

二人の疑問になのは鼻で笑う。

「傷つけ合う？ だからなんなの。手加減しろとか言わないでよ。それだとフェイトちゃんやアリシアさんに対しての侮辱だし、何よりこの程度で戸惑うほど私はもう弱くない」

なのはのメンタルは強くなっていた。凶暴なのはさておき、雷斗に鍛えられた心と身体が彼女に闘志を与えている。

「それに親友だからこそ争う——それも悪くないの！」

『ツッ！』

なのははスフィアを展開し、フェイトとアリシアに発射。追尾機能があるため、逃げ切れずそれを撃退してしまった。そのため、煙幕でなのはを見失う。

「いくよ。スバル！」

「はい！」

次にフェイトとアリシアが見たのは青い砲撃魔法だった。フェイトは避け切り、アリシアが少し掠る程度にとどまるが、撃つたのはスバルだけだと気づいたのはなのはが

フェイトの背後に移動していたときだ。

「いくよ、フェイトちゃん……………悪夢の再現を♪」

『ヒッ!』

寄生していた嫉妬はフェイトの記憶——トラウマを知っていた。そう、あれは彼女の少女時代。ジェルシードをかけた戦いで見せた悪夢の元氣玉とかめはめ波を混ぜた凶悪砲撃魔法。

『スターライトオオオオオ——』

『ま、待って! いいの!? 親友にそんなほうげ——』

『ブレイカアアアア!!』

カートリッジとブラスターモード3を使用した『スターライトブレイカー』がフェイトを至近距離から飲み込んだ。

フェイトこと嫉妬は戦闘不能。彼女が立つことはもうなかった。それを見たのは恍惚な笑みを浮かべていた。

世の男ならばその妖艶な笑みにドキツとするくらい、そして恐れを抱くくらいの笑みだった。

「あ、悪魔め!」

「悪魔でいいよ……………悪夢らしくぶちのめすだけだから♪」

ヴィータと戦う前に言っていた悪夢宣言再びである。前と違うとしたらO☆H A ☆
N A ☆ S H I がお話ぶちのめすことになっただけだろう。

「やれやれ……心配になって来てみれば恐ろしいモノを………」

「あ、雷斗くん♪」

愛しの彼を見つけて喜ぶのはにチャンスとばかりにアリシアはなののはに向かって
斬りかかる。

『くらえ！ 雷神の——』

「唸りってか？」

『——え？』

アリシアの手から神器は消え、そして彼女は力なく倒れた。雷斗が彼女を失神させた
のだ。

彼女より早く動き、そして手刀で意識を奪ったのだ。

「悪いな。それはうちが元祖なんだわ。模倣じゃ俺には勝てねえよ」
彼は嘆息を吐きながらアリシアを抱えた。

「あとはアイツに任せるか………」

☆☆☆

「……悔しいなあ」

「くそツくそツ」

嫉妬と妬嫉は十代前半の双子の姉弟だった。静かな嫉妬とで活発な妬嫉。

二人は一つという意味で神器『羨むその器』はその効果を発揮する。つまりどちらか一人が欠ければその効果は発揮しないのだ。

「馬鹿にして………馬鹿にして！」

妬嫉達は子どもの頃から周りから見下されていた。奴隷だった。そして彼女と彼は普通に憧れ、妬み、そして神器が発動した。それからラースにスカウトされ、彼と行動を共にするようになった。

「普通にのうのうと生きてるヤツらに僕らは——」

「負ける」

彼女と彼は声がした方向に振り向く。そこには一人の男が立っていた。白いロングコートを着て、白い髪紅い目、大きな白銀の翼、そして白銀の大太刀を持っている。

「誰だお前」

は、と言う前にその男、鳳上恭介は剣を構え、そして妬嫉を切り裂く。

え？と彼がそんな表情をしていたときに嫉妬はナイフを抜き取り恭介を刺そうとした。妬嫉も恭介に寄生しようとした。

バチンツ!!

「えっ?」

しかしその寄生はなんらかの力で遮られ、そして失敗した。

「遅いな」

「——あ……」

さらに嫉妬のナイフを持つ手を切断され、そして彼女の胸に剣が刺さる。彼と彼女は力なく倒れた。

「ね……え、嫉妬」

「なあ……に嫉妬……」

「生まれ変わったら……また、姉弟でいら、れる……かな」

「きつと……だいじょう、ぶ……」

最後の最後で彼と彼女は笑い息を引き取った。恭介は頭を掻きながら気分が悪そうに眩く。

「……………きつとじゃない。必ず、だろ？」

彼はそう言つて隙間に呑み込まれた。彼の役目は終わり。彼と彼女を冥府へ旅立たせ再び転生させるといふそんな役目。こうして、なのは達の戦いは終わった。

「隙ありイイイイ！」

「どわ?! いきなり何しやがるソラ！」

「ノリと気分で飛び蹴りしたくなっただ!!」

「どゆこと!？」

つまり恭介くんがカツコよかったので嫉妬したのである。いや決まってたからねー
.....。

第二百二十四話

(一刀サイド)

さてさて、厄介なことになった。どうもみんなとはぐれてしまい、しかも迷った。初めて来る場所ほだいたい道に迷いやすい。

ヤベー、ワシ。この歳で迷子とか笑われるんですけどー……………。

「まあワシとしてはさっさと合流したいわけじゃが」

「そうは問屋はいかん。俺と戦え色男」

バイザーで顔を隠した男がいる。冒険者の勇者が着そうなマントと黒いスーツのよ
うな服を着た男だ。

「我が名は北郷一刀。お前？」

「クラウ——改めクラウス。霸王と呼ばれた男だ」

「……………霸王？」

ピクツとワシの眉は反応した。どうもその呼び名はワシにとって最も価値があり、最も知らない人間が呼んでほしくない名前だ。

——その称号を名乗るべきはただ一人

——誇り高くて、誰よりも前を見ていた

——寂しがり屋な女の子

つまりだ——愛しい彼女の称号を勝手に名乗られるのはあんまりいい気分ではないのだ。まあ、こつちの世界では仕方のない話だから妥協するが。

するとクラウはホワンホワンと回想し始める。

オイ、なに勝手に回想してんだ。

「古代ベルカ。オリヴィエが亡くなって俺はずっと鍛えてきた……」

回想の中のクラウは筋トレオンリー。ちよつと待て。お前、筋トレオンリーしかしてないのか？

「そして時には強者と戦ってきた」

回想の中のクラウは割烹着を着たサザ○さんヘアのマッスルなオッサンと戦っていた。貂蟬、卑弥呼と同じ変態か？ 漢女か？

え、てか女だったはこの人。紛らわしいほど漢女らしすぎる豪傑だぞ。

「俺はもうオリヴィエを失いたくない。だから鍛えて鍛えて鍛えて、そして——たどり着いた」

彼は服を脱ぎ捨て己の肉体を見せた。

その肉体はもはや芸術。

無駄なモノが一切ない鋼のような筋肉。

誰も真似できそうもない細く、ギッシリ詰まった筋肉。

そして何より目を見張ったのは氣だ。

コヤツは魔力ではなく氣を鍛え、武の究極へ近づいたようだ。

「なるほど……確かにお前は強いな。四季が一撃で殺られるのもわか……る……？」

何か違和感がした。そう筋肉ではなく、顔でもなく、そう主に頭に対して……………。

「あ。忘れてた」

彼はそう言つて髪を掴み取つた。え、取れるの髪つて？

……………え、ちよ、オイ。

「なんでヅラアアアアア!？」

「な、なんだよ？ 何か問題でもあるのか？」

「大有り！ なんて若いお前がヅラなの。つか、いつの間に禿げた!？」

「……………禿げてない」

「いやなに現実認めようとしなない!？」

「うつせーな。俺だつて禿げたくて禿げたんじゃやない。鍛えているうちになんか髪が生

命が筋肉に吸いとられたんだ。うん、きつとそうに違いない」

あり得ないからなそれ！

てか、なんでヅラつけてたの!?

ボケ？ ボケのつもりか!?

「俺だつて見栄張りたいときがあるんだよ。髪の毛フサフサが今生の目標」

「ごめん、どうでもいいわ！」

まあ確かにワシもいつかは禿げるから否定はしないが、それでも認めろよ！
ありのままの自分を信じろよ！

というかワシが久しぶりにツツコミにまわるのはこれ如何に。

しかも落ちたヅラのところにひび割れが！ どんだけ重いヅラなんだよ!?

「さあ始めようか！」

「めちやくちや萎えてるんだが……」

シリアスを返せと思う今日この頃である。

(四季サイド)

チツ、オリビアめ。逃げやがったな。実験材料になるモルモットを取り逃がしたことに俺は苛立ちを覚えていた。

なによりあんなにいじめがいのあるおもちゃ——ゲフンゲフン。モルモットはそうはいない。最終的にはなんか涙目だったし、ヴィヴィオのように小さくなってた。

どうやらクラウスのように成人状態からの誕生ではなく、子どもからスタートしたバーロさんだったとか。

見た目は子ども頭脳は大人。その名はオリビアさんである。まあ、大人モードで誤魔化していたが、根はガキだったからあつさり戦意損失してくれた。逃げられたことは頂けないが。

にしてもゆりかごか………。敵を撃破したら研究してもいいだろうか。ラタトクス機関に貢献できそうだし。

「おっ?」

「むっ」

「奇遇だなソラ、衛」

再会したソラ、まだか、衛に状況を確認することにした。

プライドは撃破。

嫉妬と妬嫉はソラの知り合いによって討伐。

まどかの知り合い達は拘束されて無効化して、開発中。

……………なんだ開発中とは？

「嫉妬達を撃破したのは誰か知らないか？」

「さあな。でもなんか感想欄で出会ったことがあるヤツらだと思うのだ！」

「私も」

「メタイなお前ら」

まあそれはさておき、さっさと前へ進んで——

「ツ、みんなその場を飛んで!!」

まどかの声で俺達は一斉に四方八方飛び散った。すると泡が現れ、爆発を起こした。

あぶねー。中央にいたら無傷じゃ済まないぞ。

「やあ、ごきげんよう諸君」

出たなナルシスト。いきなり不意打ちとはやってくれるじゃねえか。

「ラスト……………だっけ」

「ほほう。かの有名な死神殿に覚えてもらえらるとはやはり僕の美しさは最高だね！」

「いや単にウザいヤツだから早めに消そうと思ってた」

「俺もだ」

「真の美しさとは筋肉なり！」

別にラスト個人はどうでもいい。あと衛、お前の美意識はおかしいと思うのは俺だけか？

「この僕が筋肉ごときに劣るとでも？」

「然り。貴様の美など底辺。美しさとは誰かに認められてこそ発揮するモノだ」

いやその場合だとお前もナルシストと同類だぞ衛。

「いや真の美しさは自らが誇示するモノだ！」

「たわけ！ 自らを誇示するなど当たり前。第三者に認められてこそ真の美しさなり！」

なんだこのドングリの背比べ。

すると、衛とラストは俺達に振り向き言った。

「どつちが美しい!？」

「四季、殺れ」

ソラの許可をもらったので錬成開始。

拳の形をした石が二人をぶっ飛ばす。ぶっ飛んだ——はずなのに、すぐに立ち上がった。来た。

「石ごときで僕の美しさは無意にできない！」

「筋肉に不可能はない！」

このイロモノ共……………素で耐えやがった。

俺とソラは嘆息を吐きながらこの馬鹿共を黙らせるのか話し合うのだった。

(??サイド)

グリードは笑う。順調だ。全て上手くいっている。

あの女を自分のモノにするためにはソラの力、四季の錬金術、一刀を手駒にする必要がある。

一番来ないとすればソラだったが、彼の大切なモノに手を出せば釣れてくれる。しかもおかげで四季、一刀もついて来てくれて考える手間も省けた。

だがまだ不安要素がある。その人物はエールのお気に入りだった男だ。邪魔者を排除しなければ自分の計画が遂行できない。

「だからテメーはリタイアだ。雷斗くんよお」

モニターに映る十香と一緒にいる雷斗を見ながら邪悪な笑みを浮かべながら、彼はエールと千香を引き連れてモニター室から出ていった。

——
それは背後の『彼女』^笑_屈が笑っていることに気づかずに……

第二百二十五話

(??サイド)

ギンガとレインコートを着た男は同伴していた。どうやら行動を共にしているようだ。何度もギンガは声をかけているが、どうやら彼は寡黙だ。一向に答えない。

「ねえ、そのコート脱がないの？」

「……………」

(はあ……………なんか不気味ね。いったい何者なのかしら)

とは言うものの四季やアオのようなイロモノなのだろう。

なんせ、シイが喚んだ相手は大抵おかしい。キリト以外がぶっ飛んでいる。初対面のときからどこにいった常識という感想があった。

きつとこの人もそうだろうと思っていると、ギンガが目の前にいる少女を見て拳を握る。

「なんだ。こんなザコが相手か」

「ザコですって……………！」

こいつのせいで二人は死んだ。許せない。頭に血が上ったギンガは渾身の右ストレートを放つ。彼女は避けるどころか動かない。羽虫に対して興味がないような目をしていた。

「甘い」

「きやッ」

ベシンと尻尾らしきモノが叩きつけられてギンガは吹き飛んだ。尻餅をついたギンガの目に移ったのは芋虫の形をした化け物だった。

そいつには目も鼻はなく、口だけしかない不気味な生き物だ。それに口の歯はまるでギロチンのように鋭い。

「あ……ああ……」

ギンガにとってそれは未知のモノだ。故に恐怖する。あれは二人の人間を殺した生き物だと。

「じゃあ、あなたも死にな」

「ッ！」

その言葉に反応してギンガは立とうとしたが、なぜか身体が重くて立ち上がれない。

「いい忘れてたけど、私って食したモノの力を取り入れる——それが私の神器『暴食』。あなたも肥料になりなさい」

もはや逃げられない死が迫っていた。するとレインコートを着た男はギンガの前に立つ。

駄目だ。彼も食べられてしまう。ギンガは彼に逃げるように言おうとした――

ガシッ

——が、芋虫を止めた。恐るべき筋力と言うべきか身体が動くことなく受け止めた。

シロはそれを見て驚いているようだが、彼は芋虫を放り捨てた。

ズドンツと地面に叩きつけられるとシロは苦悶の表情を浮かべる。どうやら芋虫とリンクしているようだ。

「ふう……」

「あなたはいったい……」

ギンガの問いに答えるかのように男はレインコートを脱いだ！

「によー！」

その男——いや漢女は魔法少女服を着た変態だった。

「つてホント誰エエエエ!?」

「ミルただによ」

「いや知らないですから！ てか、一誠さんじゃなかったのですか!? どうやってその巨体をコンパクトにできたのですか！」

「そんなことより悪を倒すによ」

「正論なのが腹立つ！」

まさしくその通りだがどうやら敵は待つてくれそうになかった。ギロリと睨み付け

るがミルたんはやれやれと首を振る。

「……なによ」

「今の君にイツセーくんには勝てないによ」

「いつせー? はん、あの嘯ませ犬じゃない。どうしてがあのクソトカゲより弱いによ」
「嘯ませ犬? 君は彼を甘く見ない方がいいによ」

ゾクリツとミルたんから威圧感を感じた。いや顔もそうだし、服装が服装なのでシニールな光景なのだが気にしないでほしい。

「彼は本気になると強いによ。ギア2ドレヒンクだけが彼の戦法じゃないによ」

それを証明してあげるによ、とミルたんは拳で次元の穴を開けた。普通は拳で、次元の穴は開かないモノだがもはや存在そのものが規格外なので誰もツツコまない。

そして穴から現れたのは真正正銘のイツセーだった。その隣には茶髪のポニーテールの少女が彼の腕に抱きついていた。

「アニキいく、スリスリ♪」

「いい加減に離れろ——つてヤベ。来ちやつたじゃねかーか! どうしようミルたん。汐里まで巻き込んでしまった!」

「気にしないによ。きつと大丈夫だによ」

「なるほど!」

「おるらアアアア!!」

あつさりだった。あつさりと芋虫は蹴り飛ばされた。倍加の能力を持つ神セイクリッド・ギア器で。ハ
ワー勝負では汐里に軍配が上がった。

「くそッ」

「へへーん♪ どんなもんだい!」

「イイ気になるなよ!」

汐里とシロがぶつかりそうになったがそこで止めるのは一誠だった。

「ちよつと待て。汐里、こいつは俺が相手する」

「だけどアニキ。コイツはアタイに」

「売られた喧嘩を買う。それは戦う者として良いことだが——俺は俺の同胞を侮辱
したこいつを許せねーわ」

シロは思わず身を引いた。ヤバい。あれは、あれは『無血の死神』と同じだ。命を賭
けなければならぬ強さだ。

一誠は骨を鳴らして深呼吸。すると彼の身体から何やら霧みたいなモノが出てきた。

ギア セカンド 2?

違う。あれは湯気だがこれは魔力に似た力だ。

その力に呼応するかのように一誠の身体に変化が生まれた。

——頭に龍の角が生え

——龍の翼が生え

——手足に鋭利な爪が生えてきた

まさしく人のような龍となった。そして力も増大していた。

「戦法ならぬ仙法。とくとご覧あれ」

シロの視界から一誠の姿が消えた。直後、芋虫の身体に浸透する拳が直撃した。

「ぐ、が……………!?!」

ダンプカーに突っ込まれたような強烈な一撃に口から数滴の血を吹き出すが、堪えたシロは重力操作で一誠の動きを止めようとした。しかし今の彼は人類を超越した存在である。

「ッ、早い!」

目にも止まらぬ早さに翻弄される。しかも、捉えるにはかなり難しい。トツプスピードでは消えるような早さだが、移動しているときは目には止まらない早さだ。

だが、目に見えない早さではないため不安ではない。

一誠がシロの前に現れたとき、シロはニヤリと笑う。

「くらえ!」

「ッお!?!」

シロの身体から芋虫がガバアと口を開けて現れた。一誠に攻撃していたヤツは既にいなかった。

「どうやら一度引つ込め、再び出したようだ。一誠は芋虫に丸飲みされてしまう。」

「一誠さアアアアアん!!」

「あ。アニキが食われた。大丈夫かな。口臭のニオイついてなきやいいけど」

「いやなにのんきにどうでもいいこと気にしてるのですか!?! 一誠さん食べられちゃったのですよ!」

「んー、いやアニキがかじられて食われたのなら心配するけど——」

グチャンツ!! ズドオンツ!

「——飲まれたならぶち抜けばいい話じゃん」

汐里の言う通り一誠は芋虫のお腹からぶち抜いて復活。シロは吐血した瞬間、一誠は彼女の襟首を掴み空中へ投げ捨てる。

「一撃必殺——奥義……………」

一誠の右手に気が集中し始める。そしてシロの身体を撃ち抜かんばかりの拳が放たれた。

『龍ギガ・インパクトの怒り』!!』

「(ば)アアアアア!!」

重力と筋力が合わさったその拳でシロを地面に叩きつける。床にクレータを作り出すほどのパワーなので、もはや虫の息となった。そんな彼女に一誠は一瞥もくれずに汐里のところまで歩いていった。

「ま、て……………なぜとどめをささない」

まだ生きているようだがもはや戦えない身体。ならば戦士として死にたい。それがシロとしての本望だと彼女は言ったが、一誠は否定した。

「俺はオメーのことは知らねーからわかんねーけど、別に死ぬ必要はねーだろ」

「なぜだ……………戦士として私は」

「オメーはなんで戦士になったんだ？ 誇りか？ 家族のためか？」

シロは思い出した。かつて彼女は家族の飢えを無くすために神器使いの戦争に傭兵として参加した。そして家族はその戦争で死んだ。

殺した神器使いへの復讐は果たした。けれど満たされない。

なぜ？

どうして？

わからない。わからないけど——何かを忘れてるし、満たされない。

そして、いつしか彼女は満たされないモノを満たすために食べることを求めた。
そう、彼女は――

「私は……………家族、がほしかったんだ」

やっと思い出せた。そうだ。彼女は一人だった。寂しかった。

どれだけおいしいモノを食べようと、世界を蹂躪しようとも彼女は満たされない。

それは『愛される』ということが自分に向けられてなかったからだ。家族の愛――

――誠が今まさに持っていたモノ。そしてギンガの二人の同僚が持っていた信頼に似たモノがほしかったんだ。

「それを思い出せただけで上出来だ」

「それじゃあ帰りますか♪」

「おうー」

――誠達は満足してミルたんと共に次元の穴へ帰った。

残されたギンガは瀕死のシロの前に立った。

「……………憎い？」

「うん。私の親友を殺したあなたが憎い」

「じゃあ殺すのね……………うん、それもいい。私は理解したから……………」

「勘違いしないで。私はあなたを殺さない」

「え……………？」

ギンガは手を敵だった彼女へさし伸ばす。

「あなたの罪は生きて返すべきよ。生きて生きて最期にはよかったって思える人生を歩むのよ。それがあなたが二人に対する懺悔よ」

シロは反省しているからこそ辛い罰だ。罪悪感のある人間にとってこれほど辛い罪はない。しかし、それはギンガの優しきであった。

憎いけど——許す。だから生きてほしい。

ギンガの顔が微笑んでいるのがその証拠だ。

「生きていいの？」

「ええ」

「まだまだ生きていいの？」

「そうよ」

「じゃあ…………じゃあ…………私を——許してくれるの？」

「もちろん」

そしてシロはギンガの手を——

「つまんねー茶番」

—— 触れることなく力なく手を落とした。

え……………とギンガは呟いた。そして彼女の身体を踏みつけた男を見た。

グリードだ。彼が彼女の神器を奪ったのだ。強奪された神器の所有者は死ぬ。それはすなわち——

——彼女は彼に殺されたのだ。

「あなたはアアアア!!」

激昂したギンガが邪悪に笑うグリードに挑む。

それを無謀と言う者はいらるだろうか？

客観的に言えばギンガは勝てない。無謀だ。

しかし主観的に言えばもはや耐えられるモノではなかった。

せつかく家族として迎えられる少女を、与えられる幸せを理解した少女を、この男に殺されたのだ。

彼女は許せなかった。だから戦いに挑む。そして——

——彼女は負けてグリードの配下となった。

☆☆☆

キリトとアスナは目の前の敵に対して緊張感を持っていた。相手の名前はラーズ。
つまりリーダーだ。

最強の敵。ソラや雷斗、四季、一刀が挑むべき敵。要するに——

(ヤベー、超逃げてー……………)

(キリトくんのマジな顔……………ハスハスウ)

——チワワがライオンに挑むようなくらい場違いな勝負である。なお、アスナさんは平常運転なので気にしないでほしい。

第二百二十六話

(キリトサイド)

どうもキリトです。今、自分は逃げたいです。はい。

なんせ敵は一刀さんや雷斗などの化け物クラスが挑む化け物です。

てか、勝てる気がしないしアスナはなんか俺を見て興奮してるし、どうしようもない。

ヤベー、超逃げてー……………。

「よもやお前のような弱者がここに来るとはな」

「いや来たくて来たわけじゃないし。グリードのおたんこなすに落とされてここにいるんだけど」

「まあいい。やることは一つ。さあ始めようか」

「話聞いてた？ てか、やる気満々だよこの人！」

ハア……………どうしよ。やる気出ない。いや、やる気出ても勝てる気しない。

まあ仕方ない。理不尽なのが現実だ。

一応、神器を召喚することにしたけどアスナさんがどっからかカメラ取り出して富竹

フラッシュしている。

「この子なににきたの？」

「キリトくんの真面目な顔に興奮した。ねえ、食べていい？」

「思考が段々と千香に似てきてない？」

「似てきたら縄でお仕置きして！ ハアハア……………」

「もうやだこの人」

「いつからだ。いつから俺と彼女はこうなった……………。あの日、俺が彼女を引き止めておけばこんな未来には……………」

「どうでもいいが、なぜに『昼ドラ的なすれ違いの演出』をしている？」

「この方が読者のに盛り上がるだろ」

「お前はソラの思考に感化されてね？」

「ラースめ、なんて失礼な。ソラに感化されてるなんて信じられぬ。せめて、ダンディなおじさまに感化されたい。」

「まあいいや。どのみち逃げられないし、逃げたところでみんなに迷惑かけるだけだし」

「お前がこの俺様と戦う？ クハ、笑わせてくれるッ」

「まあお笑い話だろーな。でも一つ言っておくよ」

「なんだ？」

「俺って運がいいんだよ」

こうしてアスナと共に敵の最高戦力とぶつかる。やり直し無しの無茶苦茶で理不尽。そんな戦いが始まる。

☆☆☆

「ステージを用意してやる」と言つてレースは指を鳴らした。するとビルが並び立つミッドの都市となった。おそらく六課の訓練室と同じシステムだ。石ころを手に取りると実際のモノがその証拠だ。

「アスナ、気を付けろ。これは実物と変わらない映像みたいだぞ」

「そうね。それよりもキリトくん」

「なんだ？」

「いつものように、つてことでいいの？」

アスナは不安そうな顔で俺を見ていた。

いつもの———ということとは俺一人が前衛で、後衛にアスナがサポートするという

戦術だ。アスナは前衛でも戦える。それは悪くないが、今回はやめておいた方がよさそうだ。

相手は僅かな隙も、甘えも、見せない最強に近い存在だと俺は思ってる。

「アスナ、俺が信じられないのか？」

「ううん！　でもッ」

「大丈夫。俺は負けない」

そう断言した。アスナは「わかったわ」と言って後ろへ下がる。俺は『エリツシユデータ』のみを鞘に納め、『ダークパルサー』のみ構える。

「貴様……二刀流を構えないのはナメてるのか？」

「お前には二刀流はまだ早い」

「……………殺すッ」

挑発するつもりはなかったのだ挑発と受け取ったラースは両手から赤い光のセイバーを伸ばし、俺に斬りかかる。俺は一太刀目をかわし、二太刀目を回避するため『ダークパルサー』で受け流した。ラース攻撃を防いだとき、俺は反撃にラースに向けて横一闪。

ラースは上へ跳んで回避されたが、ヤツの服に傷をつけることができた。

「ナメるなよ、小僧オオオオオ!!」

激昂したラーズがセイバーを消して、上へ手を掲げる。するとビルがもち上がった……た………？

「つてなんだその規格外!？」

「くたばれエエエエ！」

ビル達が俺を潰そうと一齐に迫ってきた。これは回避できない!

俺は『ダークパルサー』を鞘に納め『エリツシユデータ』を抜き、一つ目のビルを斬り、内部から突き抜けるような形でビルに潰されるようなことを回避。

ラーズも俺がビルから飛び出たことに目を丸くするが、その隙を狙ってアスナが拘束した。

「つーかまえた」

「ツー！」

アスナの言葉でやっと正気に戻ったみたいだが、もう遅い。『エリツシユデータ』でラーズの身体を肩から斬ろうとした。

しかし、俺の斬撃がピタツと止まる。すごい力で止められた。

「ナメ、るなアアアアア！」

ラーズの身体から吹き出すかのように、その力は俺を吹き飛ばす。万有引力が働いたかのような力だ。

「らアアアアア！」

「ちよつ、それはまずいって……！」

なんとラーズは何百本のセイバーを造りだし、それを一齐放射した。王の財宝ですか
コノヤロー。

しかしそれは運よく一緒に吹き飛んだビルの大きな破片があったため、それを足場に
してなんとか下へ回避した。

ちなみにセイバー達は大きなビルに直撃して蜂の巣にしがった。当たってたら俺
もああなつてたのかな？

「あー、クソ………どうしようか。勝てるビジョンが中々浮かばね………」

そもそも敵の最強クラスに挑むこと事態が馬鹿馬鹿しい。勝てるはずのない戦いに
挑むのは愚かとしか言いようがない。けどな………。

「負けてやらねえけどな」

俺は『エリツシユデータ』を鞘に納め、『ダークパルサー』を抜いた。

「だからどうしたアアアアア！」

「こうした」

刹那、突っ込んできたラーズの背後をとった。俺は袈裟斬りでラーズの身体に傷を与
えたが、浅い。致命傷にはならなかった。

「ば、馬鹿な！　なぜ俺様より!？」

『『ダークパルサー』って時間が経てば経つほど、俺のスピードが早くなるんだよ』

つまり俺はスロースターターなのだ。俺は長時間になればなるほど戦いが強くなる。

俺とソラの神器はホントに真逆なデメリットだなどつくづく思うよ。だって俺は短時間では負けてしまうが、ソラは長時間で負けてしまう。例えるなら長距離が得意で短距離苦手な陸上選手だ。

「そして——『エリツシュデータ』もな!」

『『エリツシュデータ』は力を倍加させる。それを抜き取り、二刀流の構えをとる。落下した俺はビルを蹴り、再びレースに接近した。』

「させるかアアアアア!」

再び吹き飛ばすなんらかの力がきた。当然、空中では何も踏ん張れる力がないので飛ばされてしまう。

ああ、くそ。もう少しだったのに。

「俺様は負けぬ。負けてはならない!　そうしなければアイツが……アイツが報われな
い!」

そういえばレースって幼馴染みを平行世界のりりなの住人に殺されたんだっけ?

なんでも織莉子さん曰く、闇の書事件で幼馴染みを人質にされた挙げ句、罪をなすり

つけられて殺された。それが原因で——いや何者かによって今のような邪神化したというわけだ。

「世界は残酷すぎる！ だから俺様は世界に復讐する！ あらゆる存在に復讐する！
アイツのために絶対にイイイイ!!」

大切な者を世界に、その住人に奪われた悲しき少年の末路がラースだ。だからこそ、俺はこう言う。

「馬鹿馬鹿しいな」

俺の言葉が理解できないのかラースの表情が止まる。

「だってそうだろう？ 要はお前の自己満足だろ。しかも思いきり現実逃避。カッコ悪いよお前は」

「なんだと!」

「事実だろ。お前は認めたくないから今から逃げてる。それに現実が残酷で最低最悪なのは当たり前さ」

「だけど——」

だからこそ生きていく。

だからこそ、胸を張って前を見る、未来を見る。

理由は何かがわからないが例え辛くても、苦しくても、悲しいことばかりでも俺達は

前へ向いて歩いていかなければならない。それが人生だ。

「お前に、お前に何がわかる！ 俺様の絶望にお前に何がわかるウウウウウ！」

ラースは叫びながら突っ込んできた。お前のことなんか知らねーよ。知り合いじゃねーから。正直、どうでもいい。

だけど、お前のことは知らなくても現実を知ってる。

例えばアスナ。彼女の変わらないところはあがるが、変態化である意味ダメージ受けたという悲しい現実がある。

例えばシリカ。彼女って意外に昼ドラ展開が好きで恐ろしい子だった。まどかさんの影響を怨んだのはホントである。

うん————徐々に俺の知り合いはソラの変態達に感化されてるね!! もう駄目だこりゃ!

でも、そんなある意味辛い現実を目の当たりにしても俺は受け入れて生きていくつもりだ。それに悪くないと思ってるからな。

だから、お前は俺達の『敵』だ。

それを壊そうとするなら、

「まず、その馬鹿な考えをぶちのめす」

「やれるモノならやってみろ！」

そこから始まったのは剣劇。袈裟、切り返し、受け流し、そして殴打。野獣同士の食らい合いのような激闘だ。

右頬を殴られた——殴り返す。

腹を軽く斬られた——なら、ヤツの肩を貫く。

身体を回転しながら二刀流と二刀流はぶつかる。鳳仙花の火花は散り、ラーズの左から出された斬撃を受け流して上へ逸らす。今度は二刀目が右から出されたが、それを跳躍して回避。

それから上空へのセイバーの投擲を回転しながら弾いて再び距離が開いた。

速度と力は五分五分。勝負の分かれ目は手数が多さによって決まる。

「えい！」

「んな!？」

俺は『エリツシユデータ』を投擲。そして今度は『ダークパルサー』を投げてやった。ナイフを投げるようにはいかないが回転した二刀はラーズのセイバーで弾かれた。

まあやっぱり防がれたが——俺はそれを待っていた。

一瞬開いた隙を狙って縮地を使い、掌打を打ち込む。少し怯ませることができて腕をクロスさせた抜刀術を構える。

「なにカッコ——ッ！」

やっと気づいたか。そう神器はいつでも自分の手元に召喚できる。かつてソラもそうやって油断を誘い込んでいた。何度も引つ掛かったさ。

なんせ一度丸腰になるし、そして予想外の投擲での防御体勢なるとすぐに攻撃には移れない。

「くらえ『スターバースト』——いや！」

十五から二十七の連撃斬りへ！

俺は自身の最高の技を開始した。

「『ジ・イグリプストオオオオオ』!!」

斬撃は止めるな。

隙を見せるな。

油断はしない。

ただひたすら斬り続ける！

その想いをもって俺はひたすらラースを斬り続けた。

セイバーで防ごうとした——しかしパワーで砕いた。

手で受け流そうとした——しかしスピードで手を切断した。

逃げようとした——しかしそれは手数で逃避することも与えなかった。

「うオオオオオああアアアア!!」

とどめに神器を消して、拳を握る。そして——顔面に強烈なストレートを与えてぶっ飛ばした。

「ハアハア……………あー、しんど……………」

二十七連撃は疲れる。あと長時間戦い続けるのは辛い。集中力的な意味で。

「ち、くしょ……………この、おれ、さまがあ……………」

虫の息のラースに近づいて俺はヤツを見下ろす。

「……………おれ、さまは……………にげてたのかな……………」

「ああ。……………たぶん俺もアスナを失ってたらお前みたいになってたかもな」

「なら……………」

「かと言ってそれはもしの話だ。失ったからと言って俺は世界を壊すなんて八つ当たりはしない。せいぜいその原因を作ったヤツをぶっ飛ばすだけさ」

「……………八つ当たり、か。……………はは、そうだ——」

——僕は単に気に入らなかつたんだ……………彼女がいないこの世界が……………

それを最後にラースは息を引き取った。最強だった男はここで倒れたのだ。

「ホントト……運がいいな」

皮肉なことに俺はヤツのように失っていない。まあこれからも失うつもりはないけど。

そんなことを考えながらアスナの抱擁を受けるのだった。

(??サイド)

キリトとアスナがいなくなった後、ソイツはいた。そして安らかに死んだラースを——踏みつける。

「ガハハハ！ 邪魔なヤツがいなくなっちゃったぜ！」

グリードは死者を冒瀆するかのようにはラースの神器を奪った。そして彼の背後にはなのは、スバル、ギンガ、千香、エールがいた。

「さあ——次は『無血の死神』だ！」

彼は邪悪だ——だが『最凶』には勝てない。それは覚えてくださいな。

第二百二十七話

打撃音と爆音が響く。戦いは激しさを増していた。

オレと四季は変態共の戦いを見守っていた。まあ筋肉馬鹿とナルシストの戦いだが、凄まじいモノだ。なんせ衛は錬成で相手を追い込もうとすれば、相手は爆発でそれを力技で無効化する。

創る者と破壊する者。

考えたこともなかったが能力も対立関係だ。

「貴様、なかなかやるではないか！」

「フツ、当然。美しい僕ならば当たり前だが君は遅いね。筋肉で僕の爆破を無効化するとは」

「たわけ。それこそ当然だ。衝撃に耐えられぬ柔な筋肉ではないわ！」

いや普通は耐えられないから人間は。それからお前らなんかライバル関係できてない？

さつきからお互いの強さを認めてるし。

「なあ、四季。もう先に行っていない？　なんかこっちも戦いに加わったら怒鳴られそう

だし」

「だな。なんかやる気が失せた」

マッスルとナルシストの戦いを見て誰得？

そんなわけでオレが先に進もうと思うと、夜刀神がこちらに向かってきていた。しかも霊装という精霊特有の武装を着て。

加勢するつもりできたのか？

「おー、夜刀神。無事——ッ!!」

四季も気づいたのか夜刀神の道を壁を錬成して遮ろうとした。しかしそれはバターのように切り裂かれた。

「ひどいぞシキ、ソラ！なぜ私を阻もうと」

「黙れ。なら、その殺気はなんだ？ ペットの分際で飼い主に噛みつくような育て方をした覚えはないぞ」

「……………ふふ、ハハッ！」

夜刀神は笑っていた。普段ならば今のペットというところでツッコむところだが、コイツは違う。

ヤバい。偽物じゃないし、恐らく。

「グリードかッ」

「その通り！」

グリードがオレ達の仲間を引き連れて現れた。一刀と師匠、ティアナはいないが、どうやらそれ以外はやられたみたいだ。

「高町、ギンガ、スバル、千香、エール……………ヤバいなソラ。高町、ギンガ、スバルは一人程度でなんとかできるが二人以上は難しい。おまけに人造神器使いに、『最凶』の神器使い……………勝てる気がしない」

衛も含めたいところだがあいつが戦うべき相手はあのナルシストだ。

現在、衛とナルシストはどうやらグリードの登場で戦いをやめている。

「グリード……………君という男は！」

「なんだ？ 気づいたのか？」

「当たり前さ。僕はオーラには敏感な男さ」

何がどうしたと聞くとナルシストは答えた。

「彼は僕達の仲間に手をかけ、神器を抜き取ったようだ」

それを聞いたときオレはグリードの前に現れ、全て開く者神器を召喚して斬りかかった。

それは高町によって防がれた。

「オイオイ、いきなりか？」

「黙れ。お前の行いにいい加減にぶちギレてるんだよ！」

オレが後退すると四季は錬成でグリードを串刺しにしようとしたが、夜刀神の斬撃で防がれた。

「美しくないね！」

ナルシストは今度はグリードの目の前で爆撃した。グリードが煙で見えなくなつたときオレと四季はジト目でナルシストに言う。

「オイ、見えないじゃねえか」

「しかも一応、味方がいるからするなよ」

「僕にとっては敵だから」

正論を言われたのでこれ以上は言わなかったが、どうやら千香のシールドで防がれたようだ。しかしそこにはグリードがいない。

どこに！とオレは思うと背中から殺気を感じて四季と衛の手を引いてその場を飛んだ。

「え——」

それがナルシストの最期の言葉だった。芋虫に頭から食われた。かつて平行世界のママさんみたいな終わり方をした。

「ラストがママみられた！」

「この人でなし！」

「きやははは」と面白そうに笑う女性陣を見て、シャレにならない。狂っているよ……こいつら。

あのナルシストは悪いヤツじゃなかった。

敵だったけど悪いヤツじゃなかった。

なのになんで……なんで……。

「ガハハハ、うるさいヤツが死んで精々したぜ！」

高笑いするゲスの手には芋虫が生えていた。あいつがナルシストを殺した。

オレは神器を握る力が籠る。四季は無言のまま錬成で刀を造り出す。衛は手を鳴らして戦う準備をしていた。

「あ？ やるつもりか？」

「「当然だろがクソヤロー」」

かつてない怒りを剥き出しにオレ達はグリードを睨む。

「なら、俺も混ぜてくれよ」

ドガアアアアアンと壁を突き破って師匠とティアナが現れた。やつと合流できた。

あとはこいつら全員、ぶっ飛ばすだけ！

「まだ生きてたか死に損ない！」

「高町を返してもらおうぞ………スイーツのために！」

え、それが本音？

(??サイド)

なのは達を相手するソラと四季。衛は十香を一人で相手していた。残ったエールと千香はグリードの傍らにおり、雷斗が相手するのはグリードを含めて三人になる。

雷斗は忍者が使うクナイを使って、お手玉していた。

「ふーん、雷斗はたった一人で相手するの？」

「当たり前だ変態。お前らごときは俺一人で充分だ」

「クスクス……………グリード様の敵は、ハイジヨハイジヨ……………」

「ガハハハ！ ごときかどうかはテメーの命でわからせてやる！」

雷斗はクナイをグリードに向けて投擲。千香のシールドはそれを遮ったが、いつの間にか雷斗の姿はない。彼の専売特許は高速移動を越える光速の歩法だ。

「まず一人——」

その言葉を聞いたとき、千香は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。雷斗の電撃を帯びた手が彼女の首を掴んでいた。スタンガンと同じ要領で彼女を気絶させたのだろう。

「へえ……てつきり殺すかと思ってたが」

「殺せばソラが敵になるかもしれない。アイツを殺すにはそれなりの覚悟と準備が必要になるから合理的じゃない」

「とか言いつつ実はソラと敵対したくないと言うおやごこ——あぶんウウウウツ」

雷斗はエールがいい終える前に空中回し蹴りで彼女の顔面を打ち抜く。何度もバウンドさせてそして、彼女はソラと戦っていたスバルを巻き込んで壁に激突した。そのとき興奮して艶やかな吐息を漏らしていたことは気のせいだと思いたい雷斗だった。

「あとはテメーだけだグリード」

「ガハハハ、さすが『最凶』様ってことか！」

グリードは歓喜した。これが『最凶』の実力。

圧倒的で理不尽な存在——それが彼が目指していた異名だ。

女や財宝、地位、名声などあらゆるモノを彼は手に入れた。しかし、『最凶』という名声だけはどんなことをしても手に入られない名声だった。そして彼は『最凶』になることを目標とし、その手順を知った。

『曉美ほむら』が持つ悪魔の力。それはまさしく『最凶』になれる力ではないか。

「オレは『最凶』になる。だが、その前にテメーの力も奪ってやるよ！」

「やれるもんならやってみやがれ！」

雷斗は分身を出し、グリードはラストの爆弾泡を出した。

雷斗がクナイを投げれば、それは泡で粉々にされ、雷斗の分身が泡の近くにいたら爆撃する。そんなやり取りがしばらく続き、グリードがシロの芋虫を出してきた。

雷斗は電光石火の早さで芋虫を掻い潜り、芋虫を串刺しにしようと電撃のエネルギーで伸びたクナイで刺しこもうとした。

「はん！ あめえーな!!」

なんと芋虫は爆発した。しかも爆発したのにも関わらずグリードにはダメージはない。

まさかラストとシロの神器が融合するとは思わなかったため、雷斗はその爆撃を受けてしまった。義手である片腕が吹き飛んでしまった。

「チツ、しくじったか」

雷斗が再び高速移動しようとしたが足に何かが絡まる。雷斗の足には影が紐のように絡めていた。

「影の操作かよッ」

「それだけじゃねえぜ！」

グリードがポカリツと空いた穴に泡を入れ込む。すると雷斗の目の前に穴が現れ、そ

して泡が現れた。雷斗は爆発する前にクナイで泡を打ち抜いた。ギリギリのところ爆発はせず、泡が破裂しただけで済んだ。

「今度はワームホールか……。テメーはどれだけの神器使いをツ」

「ガハハハハハハ！」

高笑いする悪に雷斗は怒りを覚える。とは言え、ヤツの犠牲になった数だけ神器の数があるというわけである。加えて魔力量と技術も異常。神器は燃費の良し悪しはあるがそれだけ使えるには時間がかかるモノだ。よってコントロールがずば抜けていると雷斗は判断した。

「さっさと終わらせねーとしんどくなりそうだ」

「安心しな。さっさと終わるさ」

「どういうこと——」

「ソラアアアアア!!」

四季が叫んでいた。雷斗は
どうしたとばかりに見た。そこには
――

——魔力矢で貫かれた血で汚れたソラがいた。

「が、ふう……………」

「……………」

なぜまどかがソラを撃った？

なぜ彼女はソラの敵だったのか？

頭が混乱する雷斗にグリードは答えを出す。

「オレの神器の前提条件は接触。つまりオレに接触すればアウトさ」

「だけど朱美まどかはお前に一切……………」

「ああ、触れてない。だけど——髪の毛一本でも触れたらアウトだぜ？」

ここで雷斗は気づいた。まどかには誰と戦っていたのか。

答えはスバルだ。そして彼女はグリードに与えられたのか知らないグローブをつけて

ていた。そこにもしグリードの髪の毛が編み込まれていたとしたら——

「ガハッ!?」

今度はティアナが雷斗の胸を撃ち抜いた。しかも非殺傷を解除した魔弾で。雷斗はそのまま崩れ落ち、血を吐き出す。

「ガハハハ、ざまあねーな!」

「くそがアアアアア!」

激昂して立ち上がりとうとした雷斗だが、影が彼をしばり上げる。グリードは芋虫を出してそして——言った。

「あばよ、負け犬」

グチャンツ!!

肉が食われる音共に雷斗は芋虫に肉塊となった。

「ガハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

勝者笑う。敗者は嘆く。

「ちくしょう………ちくしょう………」

ソラは殺された師匠を見て、ただ涙を流す。

番外編 ifなバッドエンド

(??サイド)

奇跡は起きず、そして血塗れとなって磔にされたソラは周りを見て絶望した。

—— 四季はグリードに操られ

—— 衛はグリードの僕になぶり殺され

—— 一刀は最期まで抵抗し、自害した

もはや周りは敵だらけ。黒幕だった存在はグリードによって殺された。

……………奇跡も、希望も……………何も無い。

「なぜ、オレだけを……………」

「簡単な話だ。テメーを絶望させるためだ」

グリードはニヤニヤと笑う。その笑みはとても不快だ。見たくもない。だが、どうしようもない彼は睨むだけしかできなかつた。

「テメーはあのザコの弟子なんだろ？ なら、失意のあまりにあまりに死にたくなるような絶望を見せてから殺そうと思ってるな」

そしてグリードはまだかの唇を貪る。下品な音を立てて彼の大切な者を汚す。
「……………やめろ」

今度はアースラにいるほむら達も召喚する。彼女達もまだか達と同じように汚す。
ソラは見るに耐えられなくなり目を瞑る。

「グリード様を見なさい！」

「あがアアアアア！」

瞑っていた左目を刺された。痛みのみならず暴れる。それを腹部を千香に蹴られて無理矢理止められる。

「ち、か……………」

「気安く名前を呼ばないでくれる？ ゴミ」

もはやソラの知る千香はいないのか彼女もまたグリードに情熱的な口づけをする。

もう涙が止まらない。頼むから大切な者を奪わないでくれ……。

「ガハハハ、ならこれで最後にしてやる」

そしてグリードはビームライフルを召喚し——

—— ほむらの頭を貫いた。

「え、あ——」

「ガハハハハハハ！ ほら次だ！」

次々と魔法少女が殺される。その度にソラの心が壊れていく。

「やめろやめろやめろやめろオオオオオ!!」

そして最後にまどかが—— 殺された。

「あ……………ああ」

顔はもう涙で汚れていた。憎悪も怒りも何も沸かない。

—— 虚無

心に穴が空いたかのようになにも感じない。なにも感じたくない。

ソラの心はもう—— 壊れてしまった。

「ガハハハ、ガハハハハハハハハハ!!」

笑うグリード。絶望したソラ。これで彼のお話はおしまい——
そして始まるのは——

—— 『死神』の物語

「あ、は……………アハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

「あん? なんだ狂つ——」

グリードが呆れたモノ言いをした刹那、磔のソラは消えた。

そしてソラを見つけたときには、かつて仲間だった女性達の——首。

「オイオイ、オイオイオイオイ！」

グリードは歓喜した。こいつの力は凄い。この力を手に入れば、自分はさらに強くなる。グリードは神器でソラの力を奪おうとした。

「あ？」

しかし力が奪えない。そしてソラはグリードの腕を掴み——ネジ切る。

「いがアアアアアア!？」

痛い痛い痛い痛い!

すさまじい力でネジ切られたグリードはソラから離れようとしたが、今度は足を折られた。

ソラは子どものように笑う。無邪気な狂喜がグリードに迫る。

「調子に乗るなアアアアアア!」

グリードはビームライフルを撃つ。しかしソラは避けることなく、それを素手で消した。

ありえない。ソラは神器の力無しで何をした。

素手で神器の力を消し去るのは不可能だ。ではなんの力だ？

不可解な力はグリードの疑念を深め苦しめる。

「な、なんだ………なんなんだよテメーはアアアアアア!？」

もはやグリードには恐怖しかない。そしてソラはそんな彼の首を掴んでいった。

「シネ——」

死神は笑って殺した。彼の首をネジ切った。首なしのグリードは噴水のごとく血を吹き出す。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

笑う、わらう、ワラウ。狂った青年に変化が起きる。左目が空洞みたいな黒くなり、眼球は黒くなる。

「……………コワス」

もはや彼に壊すことしか考えられない。憎しみ、怒りしかない。全てをコワスまで彼は止まらない。

——そしてソラはその世界を壊した……………

(バッドエンド)

—— なーんて、そんな終わりを認めるわけがない。
そうこれはもうひとつの可能性であり、そして——

——最後の……………■き。

「こんなことって……………」

「厄介なことになるとはねえん……………」

「やむ得まい。早く幻想卿の妖怪達を……………早くこのような未来を起こさぬために」
貂蟬と卑弥呼、織莉子は急ぐ。ソラの最低最悪な未来を回避すべく。だからこそ、彼
と彼女達は気づいていない。

——その未来にエールと雷斗の姿がなかったことに……………

——既にその未来は存在していないことに……………

そう、これはi fの世界であってi fじゃない。新たな『最凶』が生まれた世界。

第二百二十八話 コラボっちやいますその四

師匠が殺された。また目の前で……………そしてオレは致命傷。

ホント、何をしていたんだ……………オレは。

おそらくもうどうしようもない。こんな絶望的な状況なら誰だって折れる。

「う、がアアアアア！」

だからどうした？

まだ立てる。

まだ動ける。

まだ戦える。

オレが負けたとしたらそれは絶望したとき、思考を止めたとき————全てを諦めたときだ。折れてたまるか。絶望なんかかしてやらない。

なんのため、オレはここにいます？

————グリッド達をぶちのめすためだろ！

歯を食いしばりながらも立つとグリッドが馬鹿にした口調になった。

「オイオイ、まだやるちゅもりでちゅかー？ ソラくうん」

「黙れ……お前の雑音には聞き飽きた！」

迫る砲撃をオレは神器でキャンセル。しかし今度は青髪の姉の拳がきた。

「ッ!?!」

「ハイハイ、こつから先は消えてろ凡人」

四季の錬成——鉄の縄で姉は身動き取れなくなつた。そして四季はオレを治療するために錬成で作つた部屋で高町やまどか達を閉じ込めた。

「数秒しかもたないんじゃない……」

「安心しろ。雷斗の保険が発動してる」

師匠が投げて刺さつていたクナイから召喚陣が出現した。師匠が時間差にセットした召喚術だ。そこから何者かが現れた。

問題児そうな灰色の青年、同じ顔だが黒髪の青年。

これまた問題児そうな黒髪女性と同じ顔だが白髪で後ろ髪をまとめた女性、大人しそうな白い髪で金色の瞳な少女——いや男だなこれは。紛らわしい。そして白い髪の男の娘と同じ顔だが黒髪で尻尾と耳がある少女。

なんか知らないけどすぐくちート臭とイケメン美少女達が現れた。

「あれ?　なんで私達がここに居るの?　瑠璃お姉ちゃん」

「さあ?　何かに呼ばれたよう……」

なんか猫耳が生えた問題児の耀っぼい女の子と安心院さんっぼい女性が会話してる。てか、誰だよこいつら。師匠の知り合いか？

「どうでもいい。そんなことよりアイツらの名前は上から彰、修斗、梨華、瑠璃、雪男、雪菜という名前の妖怪共だ。——解剖したいな」

「オイ、なに患者を見捨ててて研究者の瞳をしてる!？」

「黙れ。俺のこの情熱は止められない。もうどうにも止められない!」

「いや止まってお願い! オレがヤバいから! ここで負けたらなんかバッドエンドな予感がするから!」

メタい? 知るか。オレは何も失いたくないんだよ、もう。あんな悲しい幻覚が現実で起きてたまるかよ!

「まどかちゃんビーム!!」

「なのなの光線!」

変な名前が付いた砲撃と魔力矢で部屋をぶち壊しやがった!

てか、ノリノリだなオイ。こいつら実は操られてないんじゃないや……………。

「ソラくん、死んで!」

はい、そんな都合よくありませんでした!!

大量の魔力矢がこっちにきた。すると四季は錬成した鉄の蛇でナニカを捕獲して盾

にした。

「修斗くんバリアー!!」

「いぎやアアアア!?!」

なんか知らないけど肉の壁がオレを守ってくれた。ありがとうポンコツ。お前のことは三秒くらい忘れない。

「オイこら! なに人を使い捨て装甲盤な扱いしてるんだよ!」

「チツ、生きてたか」

「お前らの味方だぞ俺!?!」

知らんがな。てか、お前の兄弟姉妹が戦ってますがな。

梨華という女性にほむらに似た何かを感じたのは気のせいだと思いたい。高笑いしながらティアナをいじめているのは気のせいだと思いたい。

そして瑠璃という少女。ツインテの中の人のように「お持ちかえりイイイイ!」とまどかを追いかけているではありませんか。

まどかもさすがに得たいの知れない人に追われるので涙目だ。未知に対する恐怖は誰だつてありますからねー。

「さあ、とつと働け犬。さもなければ女は恥ずかしい言葉を言わせる刑。男はホルマリン漬けだ」

「なにその男女差別!? 労働に意義を申し立てる! てか誰が犬だよ!」

「なんだ不満か? なら女は解剖。男は死ぬ」

「もつとひどくなつた! ちくしょう、覚えてろ!」

四季さんマジ鬼畜。

修斗^{弄られ役}は戦いに行つたところでオレの治療は再開された。錬金術つて生物にも適応されるのをこのとき初めて知つた。

てか、ホントにアイツらチートだよ。

なんか放つた魔力矢を操作するわ、言霊で動きを止めるわ、光という名目で砲撃魔法を操作するわ、影を操作するわ——なんだこのワンサイドゲーム。ワンターンから神のカードで追い詰められる某デュエルキングを連想した。社長も涙目だぞこれは。

つまらんくらいグリードだけを残してあつさり終わった……………。

「さて、後はおま——あれ?」

突如、彰達の地面が光る。あー、やっぱり抑止の存在か黙つてなかつた。

彰達の力は反則だ。タブーだ。本来なら殺されてるはずだが、この世界の住人ではないため弾き出される程度で済むようだ。

「あ、まどかちゃんと写真を!」

なんか瑠璃がカメラを構えたが、結局消えた。

グリードを残しての退場したため、なんとというか主人公無き物語という虚しきがあった。

「あ。修斗と雪男、彰にお前らのサンプル寄越せって脅しておけばよかった」

「いやなに造る気？」

「修斗の顔をした人面キメラ」

「キモいぞそれ」

グダグダになってしまった空気に、その時、変化は起きたことをオレはまだ知らなかった。

(??サイド)

グリードは苛立っていた。勝利を目前としていたが、なのは達は目をグルグルにして失神しており、使い物にはならなかった。そしてソラも完全復活した。

「覚悟しろクソヤロー」

「散々痛い目にあっただ。テメーの身体で払ってもらうぜ？」

ソラと四季は手を鳴らし、臨戦体勢に入っていた。上等。お前らの力を奪ってやる。グリードは足に力を入れた。

ズブツ、ズブズブ……………。

「な、なんだこれは!？」

グリードの足場は底無し沼のようにズブズブと沈み始めた。ソラと四季も予想外な現象に目を見張る。そして彼の身体も完全に飲み込まれたとき、女性的笑い声が出た。

『クスクス……………さあ、おはようの時間だよ?』

その声はソラ達がよく知る声だった。

☆☆☆

グリードは沼が部屋となったかのような空間にいた。そこには何もいない。泥々とした壁と地面しかない世界。

どうやってここから出ようと考えていると人影に気づいた。

「五木雷斗……………」

確かに殺したはず。しかし生きているとは思わなかったが、どうでもいい。今はこれを作り出したコイツにここがどこか聞くべきだとグリードは彼の肩を掴む。

「ここはどこだ！ なぜテメーがッ」

「……………ましこ」

「あん？」

「妬ましいイイイイイ……………」

グリードは身を引いた。恐怖のあまり、不気味なあまりに身を引いた。

目の前にいる雷斗は果たして本物なのだろうか。

いやそもそもここはヤツが造り出した空間なのだろうか。

そんな考えを露知らずに雷斗は言葉を続ける。

「……………どうしてお前はみんなに愛される……………」

……………どうして俺はみんなから愛されない……………」

……………どうしてお前は俺より強くなったんだ……………」

……………どうして俺はお前より弱いんだ……………」

わからない……………わからない……………彼女にあつて、俺にはないモノが……………ワ

カラナイ……………ワカラナイケド……………ネタマシイ……………」

言い終えると雷斗はアイスのように溶けて地面の一部となった。もはやあの雷斗は

人間ではないとグリードは確信した。壊れたナニカだ。

『クスクス……ようこそグリード。雷斗の心象風景へ』

アナウンスが流れるようにエールの声がし、地面からエールが微笑みながら現れた。

「テメーの仕業か！ なぜだ。なぜオレのモノになったはずのお前が」

「あら、私はあなたのモノじゃないよん。私の心と身体と魂は雷斗のモノ——あなたごときの邪悪な存在に屈するはずがないじゃん♪」

「ツー」

普段のグリードなら激昂してエールを殺していたところだが、彼女は『生命』の概念をねじ曲げた化け物で死なない。いやそれだけでなく、今のエールは怒りや憎しみという燃えるような感情がない。

彼女はただ喜んでいた。

まるでこれから子どもが生まれるような母性溢れる慈しみある微笑みだった。

「感謝するよ。君のおかげで雷斗は昔のライトを越えた。雷斗を殺してくれて万々歳さ」

「ヤツは死んだはずじゃ！」

「残念無念の助。彼は既に人間じゃないもん。私が彼の『生命の概念』をねじ曲げたからね」

つまり雷斗は不死身だ。もう永遠に死なない生物——いや死者なのだ。死なない者——『死者』^{アンデッド}という存在となっていたのだ。

「だから肉塊になろうが、ズダズタになろうが雷斗は死なないから元に戻る——君がどんなにがんばっても殺せないよん♪」

まあ概念殺しなければエールと雷斗は殺せるというルールがある。そのルールがあるため『抑止の存在』は手を出せない。

「なら何度でも殺してやる。どこだ！ どこに『閃光』が！」

「ブツブツ。残念ながらもう君には雷斗は殺せないよ。——いや、もう傷も負わない」

グリードの前に雷斗は現れた。『閃光の衣』はない雷斗だったがその変わりに右手には拳銃があった。グロックの改造銃が存在していた。

「なんだ……ありゃ」

「『断罪者の裁き』——私の力で進化させた神器だよん♪」

馬鹿などグリードは呟いた。

神器は進化しない。

神器は変化しない。

一度、姿を現したならそのままなのだ。なのに、彼女は雷斗の神器を神器させた。い

やそれを可能にした。

彼女の神器『道化師の心』が雷斗の神器の理を台無しにしたのだ。

例えるなら、とあるサッカー選手のみ『ハンド』というルールがなくなり、手を使えるという反則ができる。

そんなチートが彼の神器に起きたのだ。

「なら、その神器を奪ってやる！」

グリードは足にブーストをかけて雷斗の神器を握る。これでこの神器は自分のモノだ。

神器を取り上げようとしたが——全く雷斗の手から離れない。

「無駄だよ、無意味だよ。その神器を使えるのは雷斗しか認めない。認めないから奪えない。奪えないなら君は勝てない」

「なら、無理矢理認めさせてやる！」

グリードは神器の出力をあげた。そして——グリードの両手は——弾けとんだ。

「ギアアアアア!?!」

「あちゃー、無理矢理だったから『断罪者の裁き』が怒ったみたい。ま、元から怒ってたけど」

エールは雷斗の神器に感情があるような言い方をしていた。グリードは馬鹿なとばかりに雷斗の神器を見る。

カタカタと雷斗の神器は震え、シルバーの拳銃は美しい銀色が肉体を熱したかのようにな赤になっていた。

「感情がある、だと？ 馬鹿な神器には感情はない！ ただの魂の武器だろ!!」

「一般的にはそうだねー。でもそうでもない事例はあるよ。ソラの『全てを開く者』——あれは本来、継承はできない神器なんだよ。だけど、鹿目まどかには継承できた。まるでソラ自身が力を貸すかのように、神器は彼女に力を貸した。そのおかげで暁美ほむらは救われ、悪魔の力は消えた」

「馬鹿な………いや、なんでテメーがそんなことを知っている!」

「うーん、だって私。鹿目まどかと暁美ほむらの戦いを見ていたもん」

思い出すのはまどかがほむらと戦っていた姿。彼女達はお互い泣いていた。

片や大切な友達を失ったことに、片や大切な相棒を失ったことに対して。

エールはその姿を見て笑っていた。あまりに子どものようなお粗末な喧嘩のようだったため、ギャップの違いに笑えたからだ。ホントに自分が狂っていることを認識せざる得ない。

「まあ私は元から狂っているし、ね……」

彼女は自嘲するかのようにクスリと笑う。そして、踵を返してグリードに背中を向けた。

「どこに、い……く……？」

グリードはドチャリと倒れた。理由は簡単。雷斗が拳銃で彼の足を消し飛ばしたのだ。

「あ、がアアアアア!？」

「うるさい」

「ガフツ！」

雷斗はグリードの腹部を踏みつけた。その拍子に彼の内蔵は破壊された。

「あ。そういうえば思い出した」

雷斗はグリードに向けてシルバーの拳銃を構える。まるでその姿は断罪人。

裁きを与える化け物の説明をするかのようにエールは続けて言った。

「雷斗って拷問が得意なんだよ？」

言い終えたときが開始の合図だった。グリードに無数の銃弾が撃ち込まれた。

しかもただの銃弾ではなく概念殺しを持つ凶悪な鉛弾だ。

グリードの断末魔というBGMが流れ、肉が弾け飛ぶ。そして彼は簡単には死なない拷問が待っていた。

グリードの身体の機能は殺された

グリードの心は殺された

グリードの精神は殺された

グリードの名前が殺された

グリードの人格が殺された

グリードの魂も……………殺された

もはや雷斗に映るモノは肉塊ではなく、泥だった。

もはや人の形をしていない人間の尊厳すらない死がそこにはあった。

雷斗は踵を返してその場を離れる。

「にゅふふふ、いやーよかったよ！ 彼のスクリーン。最高のBGMだった♪」

彼女は微笑みながら雷斗に近づいた。すると彼は彼女を押し倒す。

「ありま？ 次のターゲットは私？」

「……………エー、ル」

「んー？」

彼女の顔に水が落ちてきた。それは雷斗が流していた涙だ。

「俺はお前の隣にいていいのかな？」

「……………」

「俺は生きていていいのかな？」

「……………」

「俺は……………ムグツ」

雷斗の口を封じるかのようにエールは彼の頭を固定して情熱的な口づけをした。息が苦しくなつて彼女から離れると彼女は妖艶な笑みを浮かべていた。

「大丈夫。私はあなたのモノ——そしてあなたは私の大事な大事な愛オモしい人だよ」

雷斗は悲しかった。

雷斗は悔しかった。

雷斗は妬ましかった。

全てにおいてエールは自分より優れていた。誰からにも愛されていた普通の女の子だった。しかし、それを台無しにしたのは自分だ。自分を狙う悪漢達に汚されて狂ってしまった。

エールはそう言ってまた熱い口づけを開始した。そこから先はご想像にお任せしよう。しばらくの間、彼と彼女はお互い求め合っていたことを追記しておく。

「とうわけでもつといじめて！　ハアハア……………」

「わけがわからないよ」

「あつれー？　ここどこー？」

「そしてなぜ修斗だけここにいんの!?!」

それが弄られ役クオリティ。本日のオチはこれである。以上！

第二百二十九話

全員が目を覚ましたとき正気に戻っていた。かわいそうなことに記憶にはオレ達を傷つけようとしたことをすっかり覚えていた。そのせいでまどかはオレに抱きついてワンワンと泣いた。

いや、大丈夫だ——と言いたかったが、オレは前世の最期を思い出した。

あのときはさよならは言えなかった。

別れを言わずに死んだ。

知らないうちにいなくなつた。

だからまどかは泣いたのかもしれない。結局のところはやさしく背中を撫でて落ちてさせたけど、「ハアハア、ソラくんのおい♪」と変態チックになつた瞬間にチョップを決めた。

オレは悪くない。悪いのは変態だ。

それにしても、どうやら■■■■は殺されたから全員正気に戻れたようだ——つてあれ？

「なんで敵の名前を忘れて……」

「どうでもよかつたんじゃね？」

「把握」

四季の言う通りだな。まあいいや。あとはラースを倒すだけだな。

「あ。キリトから通信。ラースは倒したからだつてよ」

「え、マジで？」

つまり完全勝利つてヤツ？

やつたね！　これでお家に帰れるー！

「帰れぬからな我が友よ。貴様とその仲間は留置所行きだから」

「解せぬ。まあいいや。別に問題——ツ！」

オレは感じた——何かがいることに。

突如、何かがオレに飛び込んで、刺そうとしてきた。オレはそいつから避けたが、そ

いつの元々の狙いはオレの足場だった。

「アオ!？」

そいつの正体がアオだと知った刹那、浮遊感に支配され、落ちる。

「どわアアアアア!？」

「チツ、ティアナ！」

「ええ！」

オレと一緒にツインテと四季も落ちていく。アオは先に落ちていたため、彼がどこにいるのかはわからない。

それからオレ達は意識を徐々に失っていた。

☆☆☆

ふと、目を覚ませばそこはビルが並ぶ大きな町だった。暗い夜空が広がる町。オレはその町を知っていた。

「なんで見滝原に……」

まどか達とオレの故郷。悲しい思い出しかなく、ここにオレはポツンと一人でいた。

「……………とりあえず歩いてみるか」

オレは町を散策するべき足を運ぶ。すると子どもたちの声が聞こえて、公園に向かう。

そこには――

「お、オレ……?」

そう幼いオレがいた。父親と母親に見守られながら、ブランコで遊ぶ子どもがいた。

「なんで……………ここは過去の世界なのか?」

とりあえず近づいてみると過去のオレは幻のように消えた。すると、今度は病院に爆

音が起きる。

オレはそこへ走っていくと魔女結界の入口らしき穴を発見した。

「入ってみるか……」

その中にはマミさんがお菓子の魔女と戦っていた。そして死にそうなところでオレが飛び蹴りでお菓子の魔女を飛ばし、代わりに戦っていた。次第にその光景も薄れていき、消えていった。

「これも幻……?」

どうやら過去の思い出を見ているようだ。次に見たのはワルプルギスと戦うオレとほむら達だ。ビルとビルを跳躍してワルプルギスと戦う。

あんな風に戦っていたんだよな……なつかしい。

まあでも、あんまり良い思い出じゃないけど。ほら見ろ、ワルプルギスを倒した後には救済の魔女が出てきたじゃん。

『抑止の存在』に勝てる人はいないか?」

「()にいますぞー!!」

「いたのか……え?」

気のせいだろうか……オレより背が小さな女の子が手を挙げていたような……。いつか一刀が話していたお漏らしなんとか超さんの従妹だったような……。

「まあなんにせよ。とつと四季を探すか」

一緒に落ちたはずの四季がどこにいるのか。どこにいるかはわからないが捜せば見つかると思つて一歩を踏み出した。

「捜す必要はない」

背後にアオがいたことに気づいたとき、オレは四角の結界に閉じ込められた。くそッ、油断した。

アオは鼻で笑っている。余裕そうな顔だ。何を根拠にオレを見下す。

「簡単だ。お前より強くなつたからだ」

「オレよりも？　ありえない。てか、お前。死んだんだろ？」

「うれしいだろ？　完全復活イエーイ」

「ブーブー、死人は土に還れ」

「お父様のあまりの冷たさにアオくんは泣いた」

ヨヨヨと泣いたふりをするこの馬鹿にオレは苛立ちを覚える。何が目的なのかは不可解だし、何より不気味だ。

オレはアオから何らかの力を感じているのかもしれない。その力はオレが知ってるモノだと思う。

そう、あれは前世で感じた――

「どうしたの？」

「……………いんや」

「なら、四季が来るまでお話しようか♪」

その笑みは昔していたオレに似ていた。

(??サイド)

一刀はベルカの霸王の拳を交えていた。クラウの拳は見える————とはいかないが常人からすると音速の拳だ。目には見えないくらいだが、一刀にとつては目には止まらぬ早さだ。しかも、その受ける打撃力はバッドで殴られるモノより強い。

ときどき、木刀を持つ手が痺れていた。

「ばんばかばん、大剣しよーかん」

「んなッ!？」

召喚陣が現れ、そこから裝飾のない素朴な大剣が出てきた。両刃のある大剣は二メートルを越える代物で、それが降り下ろされたとき大剣の先にあつた壁がスパッと切れ込

みができた。

「チートかよ!」

「聖剣『斬鉄剣』。なんでもかんでも斬れる———といいなあと思って名付けた名前だ」

「願望かよ!?!」

「うっせーな。お値段、税込み二万三千円くらいかかったんだぞ。これを買うくらいならスーパールの割引弁当買った方がマシだったわ」

「めちやくちやどうでもいいし、安いな!」

大体十萬くらい懸かる代物かと思っていたが、安い業物だった。しかし安いとは言え、凶悪な武器には変わりない。一刀は氣を纏わせた木刀でその大剣と打ち合った。

「おー、スゲー。それっていくら懸かった?」

「二千円だ!」

そして大剣を叩き割ることに成功した。今のクラウドは丸腰だが、彼の本来のスタイルは格闘だ。だからこそ、侮れない。

油断しなかった。

甘くは見てなかった。

しかし、関係なかった。

「ぐぼッ」

さつきよりも早い拳が一刀の身体に突き刺さる。身体が破裂はしなかったが大ダメージを受けて、後方を少し飛んだ。

「いくぜ——本気の一撃」

「ッ！」

今までは本気ではなかったのか？ あの拳は偽りだったのか？

驚愕を込めた目で彼を見ると、答えた。

「俺ってどうも本気を出すと身体がガタガタになるんだ。まあクローンだからそこらへんに不具合があったんだろ。本気を出せば俺の身体は壊れる」

クラウの身体がブレた。直後、一刀に何発もの打撃が襲いかかる。百、二百を軽々と越えていき、そして五百までいったところで一刀は後方にある壁へ叩きつけられた。

「が、ふう……………」

レベルが違いすぎる。今ので一刀は死にかけてしまった。彼は血を吐き出しながらゴッドベイドーを使おうとしたがもう手が動きそうもない。

「やはり、本気を出せば終わってしまうか」

つまらなそうに呟いて一刀が目を瞑るところを確認して彼は彼は次の獲物を捜しに足を進めた。

「調子に……………乗るなッ!!」

クラウの後ろから突風が吹いた。なんと血で汚れた一刀が立っていた。その姿はまさに瀕死の男。されど油断できない鬼気迫る表情をしてるではないか。

「スゲーな……………まさか……」

クラウが呟きかけたとき彼は蹴り飛ばされた。蹴り飛ばされたことに気づけなかった。

「お前は強い——認めよう。ならば、この全身全霊をもってお前を殺す」

制服とシャツを破り捨て、その肉体を現した。一刀の肉体は傷だらけだった。

あらゆるところに斬り傷があり、何カ所に突かれた傷などの古傷あった。しかも彼の肉体はクラウに負けずに劣らずガツチリしていた。

そんな一刀にも変化があった。

紅い瞳に黒い眼球。化け物のような目をしており、さらに彼が握る木刀は氣の具現化で真っ黒な黒刀へとなっていた。

「黒桜——『無我』へ覚醒したことで白桜が黒く染まった憎悪の刀だ」

「むが?」

「刺激をトリガーにし、脳にあるリミッターを解放し、身体能力、氣、集中力、生命力を極限にした所謂覚醒状態だ。当然、ワシにかかる負担は大きいがな」

それまで橙色だった氣が黒くなっていた。一刀が送った刺激——それは怒り、憎しみ。

——なぜ自分は殺される?

——なぜ仲間が殺される?

——なぜだ、なぜだ？

そんな理不尽で生まれた怒りが彼を憎悪の化身へと染め上げる。かつて彼が呉の外史で孫策を失ったことで誕生した負の遺産だ。忌むべき力を使うことに彼は躊躇していたことは言うまでもない。

「覚悟しろ。ワシの超本気モードは貴様がくたばるまで止められぬ」

「ソイツはこえー……………ごぶ」

吐血しながらクラウは苦笑していた。両者は動くことなく、その場を立つ石像になる。修羅と霸王——二つの影はぶつかつた。

クラウはまた大剣を召喚し、氣を纏わせた。一刀は黒桜に黒い氣の炎を纏わせて、大剣にぶつめた。

ズドンツと衝撃で壁に罅が入る。クラウは齒を食いしばりながら一刀に受けた斬撃による衝撃に耐えた。

(あ、ありえねー……………なんつーパワー!!)

一度、距離をとろうとして離れたが一刀は止まらず迫ってきた。クラウは一刀の攻撃を回避することに専念した。

今の一刀の斬撃速度は尋常ではなかった。余裕は与えない。氣を抜けば黒い炎が自分を焼き斬る。

「■■■■アアアア!!」

野獣のような雄叫びを上げながら一刀の超攻撃的姿勢は崩さなかった。自分の防御を一切を捨てた捨て身に近い斬撃だ。しかしクラウが防ぐにも力が強すぎて受け流すしかなかった。

クラウは思考する。

この化け物にどうすれば……どうすれば勝てる!

霸王と呼ばれた自分だが、この者は霸王を凌駕するナニカだ。負ければ死——限りなく生き残れない。

「うオオオオオ!!」

「グルアアアアア!」

クラウと一刀は咆哮する。力と力のぶつかり合いはなく、攻撃に耐える者と攻めきる者に分かれた。そして、勝敗は身体で分かれた。

「かふッ……………」

どうやらクラウの身体は限界にきていたようだ。一刀は勝機とみて、大剣を焼き斬つた。がら空きになったところで黒桜を叩き込もうとしたが、クラウの最後の悪あがきか、会心の一撃である拳が一刀の身体に突き刺さる。

「が、ふ……………」

「はあはあ……………」

「————けて、たまるかよオオオオオ!!」

『無我』はさっきの一撃で解除された。もはや脆い身体だ。だが、一刀は最後の最後まで足掻く。

なぜなら彼はかつて弱者だった。

彼は外史に舞い降りたときには最初から強かったわけではない。

力はなかった。

知識もなかった。

覚悟もなかったかもしれない。

だけど諦めることはしなかった。彼は強者であるという自惚れはない。

———この魂想だけは誰にも負けてはならない

かつて共に歩んだ少女達に誓った想いが彼の原動力だった。

「うオオオオオオ!」

命を燃やし、一刀は木刀に戻った黒桜を休むことなく、斬撃に使う。クラウが倒れるまで打撃を与え続ける。

血ヘドを吐こうが、疲労で目眩があるうが関係ない。ただ目の前の敵を倒すことしか考えられない。

そして――

「これで、」

一刀はクラウに――

「シメーだアアアアア!!」

木刀を突いた！ クラウがぶっ飛んでいったことを確認してから一刀は倒れた。

「ハ、ハア……はぁ……」

疲れた。もう動けない。一刀は大の字になって天井を見つめる。ふと、幻覚かわからないが一刀の愛しい人が見えてきた。

「どうだ……華琳。霸王に勝ったぞ……？」

『やるじゃない』

そう彼女が呟いたような気がした。

☆☆☆

クラウはぼんやりと自身の敗北を思っていた。

一刀は強かった。とても強かった。魂は誰よりも輝いていた。

だからこそ、この敗北に悔やむことはなかった。身体はボロボロのズタズタだ。疲労で立てない身体に小さな身体が近づいてきた。

オッドアイでヴィヴィオに似たポニーテールの少女だ。

「負けたんだ」

「情けないことにな……」

「その割りには嬉しいそうじゃない」

当たり前だ。自分の心は晴れやかだ。これまで自分はこの小さな少女の前世のために戦い、負けることなく無敗を築き上げた。全ては彼女のために、彼女が誰よりも強かったと伝わるために——しかしそれは彼女にとって呪いだっただのかもしれない。

無敗こそが彼女にとって重圧であり、枷だった。この世に敗北無き人間はいない。

いたとしてもいつかは負ける。それは真理だ。

「やっとな解放されたんだ……って」

「そう……じゃあ、あなたはただのクラウになれたのね。うらやましわ……」

「そうだな……………」

二人はもう聖王でも霸王でもただの少女と青年だと思えた。するとクラウドはもう大丈夫なのか、よつこらせと立ち上がり彼女に聞く。

「これからどうする?」

「旅、なんてどうかしら?」

いいねと答えて彼は彼女の手を握って歩き始める。かつての因縁は終わり、そしてこれからは新たな人生が始まるのだった。

「おまわりさーん！ ここにロリコンがー!!」

「……………オイ」

「すまん……エールを止めきれなかったロリコンと幼女」

「馬鹿にしてるのか!？」

ハートフルで終わると思った？ 残念。エールが台無しにするのだった。

第三百三十話

オレはアオを見据えながらこの結界を解析していた。魔法——のようだが、どうも嫌な感じがした。

前にも感じたことのあるゾツとするような魔力だ。

アオの魔力は穏やかな青い魔力だったはずだが、この魔力は違う。深海のように底なしの暗さ——恐怖を与える深淵の闇を持っている。

「お前に何があつたんだ？」

「さてね。ま、以前の自分じゃないってことだな」

その含み笑いはなんとも悪意を感じる。邪悪と言えるべきか。

今すぐにも神器でこの結界を叩き切りたいが、なぜオレをここに閉じ込める必要があつたのかわからないし、おまけに解錠直後に襲撃される可能性も否めない。

このアオは以前のアオではないことは見たときからわかつていたよ。危険な存在だ。

「ようやく来たか———四季」

視線の先には———

縁日スタイル——つまりお面を頭につけて、右手にヨーヨー、左手に綿飴、腕にはたこ焼きが入った袋を引つ掛けて掛けている四季がいた。

「つてなんでお祭り気分?！」

「なんか知らない神社に落ちたら縁日やってたから楽しんできた。ふふん」

なに満足してんだよ! てか、ツインテも止めるよ。敵陣地だぞここ!

そう言うのとツインテはため息をついた。

「そんなこと言っても止まらないのが四季クオリティよ。止められるはずがないじゃないかい」

「どうぞソラ。この俺は何人たりとも止まらぬ」

「自重はしろ」

まあ自重しないのがこの男らしいと言えはらしいが。

アオは神器を召喚し、剣先を四季に向ける。

「殺ろうぜ四季。自分の使命はお前を殺せとのことだ」

「……かつての仲間に対して向ける感情ではないな。まあいい。俺としてもお前をバラにして研究したいところだッ」

先制は四季だ。鍊成された石の蛇がアオに襲いかかる。アオは右へステップし、すぐに四季に斬り込むために、地面を蹴る。

接近させまいと四季は突起を鍊成した。するとアオは急停止し、苦々しく四季を睨む。

『全てを開く者』は解放や封印に關しては万能だ。しかし鍊成は違う。

鍊成という命令で構築された物質は魔法のようにすぐにはキャンセルできないのだ。

例えるなら魔法は煙。軽々と振れば散るが、鍊成は水の中の石。干渉しなければキャンセルできない。つまり、『全てを開く者』で鍊成をキャンセルするには五秒以上の時間が必要になる。

それは四季との戦いにおいて稼げるには難しい時間だ。

「ティアナ！」

「はアアアアア！」

鍊成でルートを決められ、そこへツインテの魔弾が狙われる。苦悶の表情になるがアオはそれを振り切り、再び距離を開ける。

「接近を許さないか」

「今のお前に接近を許せば細切れになるだろ」

「クク………さすが転生した賢者——いや、『切り裂き魔』さんか」

『切り裂き魔』——かつてオレが『無血の死神』と呼ばれる前………つまり師匠が生きていた時代の『最凶』の錬金術師。師匠と共に恐れられた変人だったっけ？

まあ、要するに相手すればただでは済まないということだ。オレも相手したくない。

「だからどうした？」

「こうする」

アオが地面に向けて手を向けるとオレを閉じ込めた結界が広がった。それはティアナだけを弾き飛ばし、四季とアオのみを残して閉じ込めた。

「アイツがいなくても俺を倒せるとでも？」

「まさか。ティアナはただの数減らしさ！」

そして今度は黒い人型が出てきた。なんとその人型はまどか達を象った影だ。しかもごく丁寧に神器まで複写している。

「ほう、どうならお前に影を操作するアビリティを得たようだな。興味深い」

「やれ、シャドー！」

真つ黒な弓矢が四季の頬をかすめ、マスケットの銃弾が地面を破壊する。足元をやられた四季は空中に逃れざる得ない。

さやかなの影が四季を切り裂こうとカッタラスをはしらせるが、その暗黒の閃光は虚空を斬つただけだ。四季が寸前で錬成したナイフで流したのだ。

しかし今度は杏子の影が四季の脇腹を抉った。苦痛に歪む表情だが、そこを狙ってきたのかアオが剣を走らせてきた。四季はアオに向けてナイフを投げてから着地したが、抉られた脇腹を押さえながら吐血した。

ナイフで行く手を阻まれたアオだが、顔をニヤリと歪めていた。

なんと彼の影が針のように四季に向かって延びていた。今の四季には回避不可。それは当然、彼を貫いた。

「ぐ、ふ……………」

さらにその影を四季を高らかにあげた。そしてまどかの影が四季に向けて弓を引いていた。

「どどめだ」

放たれた一本の矢は空中で分解され、バラけて彼に襲いかかる。矢は四季の身体を食い破るように穴を作り出し、そして四季は動かなくなった。動かない者にはようはないとばかりにアオは四季だったモノをビルが碎ける威力で叩きつけた。

「四季！ 四季イイイイ！」

ツインテで叫ぶが瓦礫の下敷きから血が流れていた。おそらくもう助からない。ア

オの次の標的はツインテだという視線を向けていた。

オレは『全てを開く者』で解錠しようとしたが、この結界は薄い膜を何重で張られていた。『全てを開く者』でキャンセルできる対象は一つ。強かろうが弱かろうが対象が一つなら一撃でキャンセルできるがこれでは時間がかかる。

その間にツインテがやられる。

オレは叫びながらキャンセルをし続けるが遂にアオはツインテの前まで来ていた。そして凶刃がツインテを貫こうとしていた——

「甘い——未熟者」

アオの手が氷付けされ、そして何者かに殴り飛ばされた。

「ふむ、油断してしまった。これは失敗失敗………これまでのアオの評価を変えねばな」

穴だらで絶命したはずの四季がそこにいた。穴は元に戻ったかのようになくなっており、服だけが穴だらけという奇妙な格好だ。

「再生したのか？」

「E x a c t l y。俺の中に眠る精霊の力さ。もつとも細切れにされたら復活はできなさそうだが」

首を鳴らし、彼は十香の大剣を召喚した。

「さてリベンジだ。闇を征する者」

「やってみろ『切り裂き魔』！」

大剣と神器がぶつかり火花が散る。アオもまた再生能力があるのか殴打の痕は消えていた。

影達は援護しようとして四季に襲いかかるが、テイアナのスフィアが妨害する。銀と白の閃光が火花を散らす中、四季が距離をとり、錬成して影を一人串刺しにする。

しかしまどかの影は何事もなかったかのようにドロリと解けて元の形に戻った。

「なるほど、実質再生があると言っても過言ではないな」

満足した彼は目を閉じ、何かに集中する。その間にさやかと杏子の二つの影が四季を貫こうと動いた。

『惨殺の刑に処す』

——刹那、四季は彼女達二人の影の後ろへ通り抜け、彼女達をバラバラにした。居合い切りと等しい斬撃速度で切り裂いたのだ。しかも影は再生することなくドロリと溶けてしまった。

「なぜだ？　なぜ再生しない！」

「当然だ。概念殺しを使ったからな」

概念殺し——不死や概念おも殺せる凶悪な技術だ。生涯できた者はほぼいない技で、使い手には必ず身体の一部の機能が停止するという恐ろしいデメリットがある。「俺の右目が白い瞳になっただろ？　これが概念殺しができるような視界にした代償だ。もっとも精霊の力でゆっくりだが元に戻るようだが」

これで影を倒せる手だてができた。アオは警戒した目で四季に集中する。

すると四季がナイフを五本投げてきた。そのナイフを回避したが、刺さった五本のナイフから星型の錬成陣が現れたとき、影がまた串刺しにされた。

遠距離錬成か！

「錬丹術だ。地脈がくつきり見えるぜ？」

「調子に乗るなアアアア！」

アオは激昂し、四季に斬りかかる。また白の閃光を描くが、四季は余裕をもって対応した。アオは恐れている。

—— お前なんかいつでも殺せる

—— お前なんか簡単に死ぬる

生存本能が刺激されて四季に対して冷静でいられなくなったのだろう。

「そろそろ終わりにしようぜ！」

四季の合掌と同時にアオが斬撃を入れた。その斬撃は確かに入っていた。しかしアオが解錠したのは四季の身体ではなく、よくできた氷の人形だった。

「『串刺しの刑に処す』」

錬成された突起はアオの腹部を貫き、その後手足や肩を貫いた。痛みに咆哮をするアオだが、空中にいた四季は大剣ではなくナイフを構えて落下してきた。

「『両断の刑に処す』！」

そしてナイフでアオの背中を両断するかのようになり裂いた。アオの身体は再生しようとうねるが、概念殺しで切り裂かれたモノは再生しない。

不死を切り離せば『不／死』になり、その者に死を与える。つまりアオはもう……。

「やっぱり、つよいなあ……………」

「アオ……………」

「ティアナ…………ごめん。自分はみんなに、迷惑を……………」

「そんなことどうでもいいわよ！　ねえ、アオはもう大丈夫でしょ？　一緒に帰れるでしょ!？」

ツインテの願いは叶わない。アオはもう既に死んでいるし、四季によって『死』を与えられた。その証拠にアオの身体が徐々に灰になっていた。

「泣くなよ。これが自分の運命なんだ」

「そんな運命、私は信じない！　アンタが消えるなんて、そんなこと……………!」

「ハハ……………やっぱりティアナは優しいなあ」

彼は笑っていた。死を目前としてまで笑っていた。そして彼は言葉を紡ぐ。

「ティアナ、なのはさんや……………みんなに伝えて、くれないか？」

彼が出したのは感謝の言葉。

彼が出したのは別れの言葉。

それは短くも長いことお世話になった人へのありがとうの言葉。

「——アオは、幸せな、仲間でした……………」

最高の笑顔で彼は逝った。見届けたツインテは子どものように泣いた。仲間としてか、好きだった人としてか、もうわからない。

結界が解除されてオレは風によつて飛ばされた夜空に舞う光輝く灰を見て眩く。

「じゃあな、『オレ』。お前のことは結局好きにはなれそうにもないな」

人を悲しませたスゴくカッコよかった男に悪態をつくことしかオレにはできなかつたよ。

「あら、死んだの？」

オレはその声を聞いた刹那、神器を構えた。そんな……なんで！

「あら、ひさびさの再会に随分ね。ソ・ラ♪」

オレ達の前に黒幕が現れた——名は悪魔『曉美ほむら』

第三百一十一話

暁美ほむらは優雅にこちらへ歩いてきた。四季は不機嫌な顔になり、ツインテは何やら得たいの知れないナニカを見つけた顔になっていた。

なぜ四季が不機嫌なのかはわからないけど。

「コイツが黒幕か？ 随分小さいな……これなら朱美ほむらの方がスタイルはよかったぞ」

「スタイルなんてどうでもいいわ。ねえ、そうでしょ？ ソラ」

悪魔の力—— 邪悪な力がここまで感じるくらい強い。

気分を悪くする力—— 呪いが一種の香水のように彼女から漂っていた。

「さて—— ウェルカム、ようこそ。私の庭へ。歓迎するわ、ソラと異物さん達」

四季達を招かねざる客とした言い方だな。オレだけを喚ぶつもりだったみたいだ。

それにしてもなぜ四季は不機嫌なんだ？

「……お前が俺の研究データをサルベージしたのか？」

「ええそうよ。すばらしい失敗作だったわ。なんせ愚かな駒を一つ手に入れて良い余興になったわ」

プライドは道化か。根源的な原因であるほむらをツインテは険しい目で見ていた。ツインテの兄が死んだのはこの女のせいでもあるからな。

「てか、何者なんだお前？」

「あら、あなたの愛しい暁美ほむらよ？」

「ほむらはアースラでぐつすりだ」

オレの言葉に彼女は口を塞ぐ。さて答え合わせといこうか。

「まずお前は『ほむら』であつてほむらじゃない。あいつは悪魔の力を少し持っているが、それでもお前ほど邪悪じゃない。ほむらの皮を被ったナニカ——それがお前だろ？」

「……………クスクス」

否定はしない、か。ではこいつは誰だと言う疑問が出てくる。何者かはわからないがほむらの逆の力を取り込んだ者と言えるのが妥当だろう。

ほむらの悪魔の力がなくなつたのは見滝原だとまどか達は言つていた。よつて出身地は見滝原。そしてこの力を取り込めるくらいの器でなければならぬ。

「考えてみたんだ……………強欲の男とあろう者がたつた一人の美少女を見逃している。それはあり得ない。あのクスはあいつに手を出せない——つまり、そいつは手を出せばただでは済まない女だつた」

そう、ヒントはアグスタで。答えは生前のアオとの決戦で出ていた。
「お前の名前は――」

——一ノ瀬。一ノ瀬シイ。違うか？」

ほむらの姿が黒く染まりそこから一ノ瀬シイの容姿になった。胸元を開けた黒いドレスは男を魅了する蠱惑を放っていたが、オレにとっては忌々しい気分させる呪いが感じた。

「さすが兄さん。私のことをよくぞ……………」

「……………当たってほしくなかったけどな」

やっと過去を見つめ直そうとした矢先がこれだ。かつての家族がラスボスとはSF映画のダースさんもビックリだ。

「んで、お前がオレ達の相手か？」

「ううん。残念だけど異物は除外だよ」

指を鳴らすと四季達に転移が発動した。

くそッ、こうなったら楽にはいかない。

オレの弱点である燃費の悪さは仲間によって解消される。よって、一対一では長く戦えないのだ。

「この力はホントにスゴいよ。なんでもかんでもルール違反できるし、敵なんてすぐに掃除できる。ただ、この力には欠点がある」

「欠点？」

「感情が制御できないのよ。しかもそれがあある男に向いている」

ほむらの愛はまどかに向いていた。なら、一ノ瀬シイは誰に——

「あなたよ。兄さん」

「は？ オレ？」

「うん。暁美ほむらの初恋は兄さんの死によつて失恋となつた。まあ自業自得で失つたモノだけど、彼女は一ノ瀬ソラにどうしても会いたかつた。またあの人の顔、におい、暖かさを求めていた。その結果、鹿目まどかに破れ、自分の力を失い失敗した。だけど暁美ほむら——いや反逆の力は諦めなかつた。『彼女』は新たな器を求め、再び復活のときを待った。クスクス………そしてその器——ソラの種違いの少女の中に入ることができた。スゴいわよ。ソラの妹だけであつて反逆の力が中に入つても器は壊れてないのよ」

オレが死んでからの話はあまり聞いてないが、まさかこんなことになっているとは。にしてもこいつの目的はオレなのか？

オレを求めて何がしたいんだ？

「単純な話を言えば兄さん——いえ、私はお兄ちゃんが大好き」

「お断りだ。オレはお前を妹としか見ないし」

「せっかくの告白なのに……でも、関係ないよ。私はお兄ちゃんが大好き。好き好き大好き——殺したいくらい」

背筋が凍るほど冷たい声色だ。

殺意？

敵意？

悪意？

好意？

なんだこのわけのわからない感覚は！

「お兄ちゃんを殺したい。

お兄ちゃんを壊したい。

お兄ちゃんを独り占めしたい。

お兄ちゃんをおもちやにしたい。

………クスクス、私の愛は鹿目まどかを求めた暁美ほむらをも凌駕するモノだよ？

幸せだね♪」

邪悪で妖艶なその女にオレは敵意を込めた目で見据える。こいつはもはや悪魔——

——神を貶める最悪の恋する女だ。

「さて、お兄ちゃんおもちゃの敵を用意しなきゃ♪」

彼女が指を引っかけるようにあげると地面から棺桶が出てきた。その中には黒髪の白骨化した遺体があった。

一ノ瀬は——シイはその遺体にアオの神器を刺し込む。すると召喚陣が棺桶の真下から現れた。突風が起こり、オレの視界を遮ろうと風は起こり続ける。

「なんだこれは！」

「最凶の敵を喚ぶ儀式——まあ、お兄ちゃんならわかるでしょ？」

「儀式召喚！」

最低最悪の召喚術。魂や生物を生け贄にして強力な神器または使い魔を喚ぶ。寄り代も必要とすることもあるが、シイには生け贄にすべきモノがない——

「いや待て！ まさかッ」

「私の前では世界のルールなんて意味はない！ だから喚べる。さあ、来て！」

光が起こり、そこで風は止んだ。目を開けるとそこにはかつてのオレが立っていた。黒髪で青い瞳——だが左目だけは空洞のように暗い目。その男は一目見たときオレは理解した。

——こいつは『死』、そのものだ。

「名前はナイトメア——悪夢をもたらす者と言ったところね」
「ナイトメア……………」

ソラではないソラ。それがナイトメア。

偽物でも本物でもないナニカ。

「この人はソラ——あなたのもう一つのなれの果てからきたのよ」

「もう一つのなれの果て？」

「そう。グリードに奪われ、殺されたことで絶望し、生まれた最凶。奇跡もなく、最悪の未来から来た悪夢——ふふ、魔法少女で言う絶望して生まれた魔女よ。」

なんてことだ。ラスボスが自分とはどれだけテンプレなんだよ。

正直、オレとしては相手したくないよ。だって自分と相手したらただじゃ済まないもん。

「加えて私の魔力は無限。つまりナイトメアが魔力切れを起こすことなく戦える」

儀式召喚した使い魔には魔力切れの消滅ない。つまり生物として変わらないのだ。

これはまずい。二体を相手にオレは戦えるのか？

「さあ、足掻いて見せなさい！」

シイに命じられたナイトメアはオレに向けて斬りかかってきた。その場を飛んで回避したが、斬った先にあるビルが真っ二つに斬られた。剣圧でこれかよ！

「くそッ」

『閃光の衣』と『全てを開く者』を召喚して、早さで翻弄した。一度に二つの神器を使うとすぐに魔力切れを起こすが今はそんな余裕はない。

ナイトメアは危険だ。早く決着をつけないとこちらがやられる！

オレは背後をとり、神器をはしらせる。しかしそれを読んでいたかのようにナイトメアは対処され、蹴られた。

内蔵に響く重い一撃だったが、すぐに体勢を立て直す。

「遅い」

「ぐが!？」

ナイトメアはいつの間にかオレの前まで来ていた。また蹴られたオレはビルに叩きつけられ吐血した。

オレより身体のポテンシャルが高い……………!!

自分自身かと思いきや実力は完全にあっちが上だ。

絶対的に絶望的。それがオレの今の状況。

「諦めて。もうお兄ちゃんは死ぬしかない。死んで私のモノになるしかない」

ふざけるなど言いたいがどうやってもオレはどうしようもない。オレの身体は横になつて倒れている。

……ごめん、みんな。オレはもう――

「諦めないで！」

誰かの声がした。この声は知っている。そうだ、あいつだ。オレは手をつけて立ち上がろうと顔をあげる。

「さあ、立つんだ！ 立つんだ！ ジョオオオオオぶへし!?」

「ジョーって誰だよ!」

どっかの親父の格好をした女に上段蹴りを放つ。ここにきてネタにはしるのが千香である。この女は相変わらずである。そしてドMである。

「ハアハア……………ヤベー、今ので絶頂しそうになった。ワンモアプリーズ!」

「するか!」

せつかくのシリアスが台無しになった。だが、おかげで絶望していた心が立ち直った。

……………感謝はしないけど。

「何この変態……………」

「キャッルン☆ みんなのアイドル千香ただお！ よろしくねえん！」
さすがの黒幕もこのイロモノには苦笑せざる得ない。

というかいつの間にかアイドル風のフリフリ衣装になつてるのはこれ如何に。

「だが、味方が一人得たところで」

「一人？ 違うよビッチ」

「誰がビッチよ！」

「あ、ごめん。つい本音を」

千香の毒舌に青筋を立てるシイ。ザマアとはこのことだな。

「ソラは一人じゃない。いつも一人に見えるけど違うよ。ソラは繋がっているんだよ」

—— みんなの絆で」

千香の答えを表すかのようにガラスが碎ける音共に五人の来訪者が降り立った。

「またせたな！」

「美少女戦士さやかちゃんよ！」

「ふふ、お姉ちゃんが助っ人よ♪」

「覚悟はいいかしら？ 偽物」

「ほむらちゃんのセクシードレスを返してもらおうよ！」

上から杏子、さやか、マミさん、ほむら、まどかが御送りする豪華ラインナップであ

る。あとまどかさんや、目的がなんかちがくね？

「ううん、あれを着せてソラくん共々おいしくいただきたい」

「ほむらだけいただいてろ」

「ほむんツ!？」

裏切られて反応するほむら。

あややだかわいいツツコミ。

ま。まどかの欲望は放っておいて……………さてと、

—— 覚悟しろ

—— 後悔しろ

—— 準備はできたか？

「なら安心して」

「「「「とつと死ね!」「「「「」

これがホントの最終決戦開幕だ。

第三百三十二話

先制はまだかの弓矢からだった。一発で放たれた散弾バレットはナイトメアに迫るが、すぐに横へ飛びビルを使った壁走りを行う。

「人外かテメーはー！」

杏子の多数に多節棍がムチのように伸びていく。それを回避するため壁走りをやめて地へ着地したところを狙ってマミさんとさやかかが遠距離攻撃を繰り出す。

「そーれッ！」

「ふふふ♪」

数本のサーベル投擲とマスケットの銃弾がナイトメアの地面を破壊する。苦痛に顔を歪ませたところをほむらがライフル銃を発砲した。

肩に直撃し、ほむらに向けて黒い雷を発射したが我らの千香ちゃんかほむらを守る。

「あら、いいコンビネーションね」

「当たり前よん。こちとらベテラン共の集まりなんだぜ？」

ケラケラと千香は笑いながらナイフをシイに投擲。それを彼女の神器が弾いた。

ダークグリーンの細剣。回復を司る神器のようだがそれだけじゃないな。

「痛め、オールド・ベイン古傷」

ダークグリーンの光が千香に放たれ、千香はシールドを展開するが、オレは彼女の前に立ち、彼女を押し退けた。

やはりシールドは無意味で通過し、オレはそれを直に受けた。

「ぐ、ぎい……………」

古傷——つまりかつて受けた傷が再生した。前世で受けた傷も含めてだ。とてもない激痛が起こり、身体中に血が噴き出す。幸い前世で受けた目の傷は再生していない。

「ソラ！ ツ!？」

ほむらがオレの元に向かおうとしていたが、それを遮るかのように『アミコミ結界』が展開される。杏子ではない。赤いアミコミではなく黒いアミコミだった。

「ナイトメアか!」

「ソラ、さっさとこれを解錠するぞ」

「わかつてる杏子!」

オレと杏子はナイトメアに閉じ込められている状況だ。早く外と繋がらないとシイオールド・ベインの『古傷』で全滅するかもしれない。オレは今まで額に傷を追ったことはないがどうも知らない傷が増えている。

あの力は過去や前世だけでなく、平行世界も含まれてる可能性もある。

この効果で一番危険なのはマミさんとほむらだ。第一マミさんは平行世界では悲惨な死に方だったし、ほむらら今世では死にかけている。

傷の再生はホントにシャレにならない。

『シンクロ』！

『ロツソ・ファンタズマ』

オレは杏子の魔力で幻想の力を得て、杏子はオレの神器の力を得た。それから杏子は多数の分身を造りだし、一斉にナイトメアへかかる。

ナイトメアもまた多数の分身を造りだし、対抗した。

チャンスだ。オレは槍状になった『全てを開く者』をアミコミに向けて投擲した。アミコミはキャンセルされ、外と繋がった。

「マミさんー！」

「受け取って！」

リボンがオレの手に絡まり、魔力供給を受けた。そしてマミさんとの『シンクロ』し、銃型になった神器をナイトメアに向ける。

杏子の分身は既に少数でピンチになっていた。

「縛れ！」とオレは叫ぶとリボンがナイトメア達を縛りあげる。

「なんで笑っているのあなた!？」

「最近、こうやって人を斬るのが楽しみなんだ! スカツとするから!」

「切り裂き魔!?! ツと!」

「チツ、外したか。さつさとその無駄な脂肪の持ち主なさやか共々死になさい」

ほむらさん、さやか共々葬り去ろうしていたね。

「ほむら、あんたわざとでしょ!」

「当たり前よ。どうしてあなたはまだまだ成長して私は打ち止めなのよ? Cで打ち止

めとは神が許しても私が許さない」

「知らないわよ。あ、ヤバ。今のでブラのホックが……」

「死ねエエエエ!!」

「ハツハツハツ、羨ましいかコノヤロー!」

「あなたのせいで私が巻き添えなんですけど!」

さやかは笑いながら回避し、シイは泣きながら回避していた。なんだこの三つ巴。

味方無しのバトルロワイヤルか?

「ソラくん、あれ!」

マミさんの声でオレはナイトメアに振り向くとヤツはまどかと『シンクロ』したような姿となって弓矢を引いていた。

ヤベ、あれはまどかのデストロイアーチャーだ。

「とうわけでまどか!」

「合体だね!」

「いや、わざわざ『だいしゆきホールド』しなくていいから!!」

背中からホールドされて甘いにおいでムラムラ————してる場合じゃないですね。だからマミさん、笑顔でマスクットと向けないで。

杏子も脛を蹴らないで。痛いからホント。

『シンクロ』———魔力矢装填」

オレはナイトメアと同じように引いて、共に放たれた!

無数の矢がぶつかり合い。爆発し、突風が起こる。

魔力矢の光で見えなくなり、それが晴れるとナイトメアは———泣いていた。

「なぜだ……なぜお前だけがッ。お前だけが彼女達と幸せになれる!」

ナイトメアは元の姿に戻り、オレに斬りかかる。その衝撃でまどか達は吹き飛ばされる。

「オレはみんなといたかった! あんな結末は望んでいなかった! なのに、なのにイイイイ!!」

かつてオレだった男の嘆きが斬撃から伝わってくる。一つ一つが重い。

「オレは、オレはアアアアア！」

「もういい」

オレは大振りになったナイトメアの身体に蹴りを叩き込む。距離を開いたところで今度はオレから斬り込む。

「確かに悲劇だよ、バッドエンドだ。お前はホントにかわいそうな男だよ。自分自身で言うのもなんだが」

でも、と言葉を続ける。

「オレにとつてはどうでもいい」

「どうでもいい、だと！」

「当たり前だろ。平行世界の住人は限りなく近く、限りなく遠い別人だ。オレが知らないヤツだから他人だ。逆に知らないヤツにとつてオレは他人だ。だからどうでもいいんだよ」

冷たい話だがオレには関係ことだ。だってもう一人の自分だからなんとかしてよ、つて言われたら果たして自分は助けようとするのだろうか？

答えは否。なぜならもう一人の自分は自分自身じゃないから別人だ。だからその人の問題はその人自身が解決すべきモノだ。

それにもうあのクズはいないからあんな結末はもうない。

だから関係のない話だ。

オレの言葉にナイトメアは揺れたのか、防御が甘くなっていた。チャンスとばかりにオレは斬撃を叩き込んだ。

「オレは誰でも助けるお人好しじゃない」

手の動きを封印。

「オレは知らない人間の問題を解決しようとするほど甘くない」

足の動きを封印。

「だから救いのヒーローにはならない。なろうとも思わない。けど……！」

身体に神器を刺し込んでそのまま地面に向かう。

「お前の悲しみを理解し、そしてその想いをオレが背負ってやる。だからー」

地面に一緒に叩き込み、そしてナイトメアが動かなくなったところで言ってやった。

「安心してとつと逃げ。お前だけここにいてもあいつらは喜ばねえだろ……」

そうか、とナイトメアは呟いたかのように思った。そして彼は満足した顔で光の粒子

となった――

——と思われた。

「ごんねーん。お兄ちゃん、ナイトメアは死なないよ?」

シイの言葉に反応したとき、吹き飛ばされた。オレはシイのところ見ると隣には解放したはずのナイトメアがいた。

「彼は悲劇の主人公。私が死ぬまでその悲劇によつて生まれ続ける哀れな主人公さ」

「どういうことだ！」

「クスクス、つまりね——ナイトメアは平行世界で死んだお兄ちゃんの負の感情で生み出される使い魔なんだよ！」

だから死なないし、死ねないのか！

オレは神器を構えるがシイ達にはもう戦意はなく、ただオレ達を見ていた。

「あーあ、お兄ちゃんを手に入れるはずだったのに……まあいいや。お兄ちゃんが天寿を終えるまで殺せばいいんだし♪」

「どういふことよ？」

ほむらの疑問にシイは答えた。

「お兄ちゃんね、本来なら『抑止の存在』になるべきだったんだよ」

「『『『『え……………』』』』」

「話してないようだね。クスクス……『閃光』と同じように女神との契約し、戦争を早く終わらせるために力を手にいれたみたいだけど、下級神のおかげでお兄ちゃんになるべきだった存在から生ある『抑止の存在』となつたんだ。だからお兄ちゃんが寿命で死ぬば『抑止の存在』になつちゃうんだよ」

余計なことをペラペラと。確かに、言つてなかつたな……………あーヤベ。みんなの顔

が険しいや。

「でも今回は諦めるよ。目的のモノは手に入ったし、お兄ちゃんはあわよくばって感じだしね」

「目的のモノ？」

「そうだよお兄ちゃん。彼が目的のモノさ」

ナイトメアが目的のモノって……………まさか。

『『全てを開く者』か？』

「ピンポン。大正解。おかげで色んな世界に行けるね——災厄をもたらすために……………」

楽しそうに笑う。悲しいモノを見れることをこいつは楽しそうに笑う。

もう、こいつは正真正銘の悪魔だ。

「じゃーね。また会いましょう、魔法少女、人造神器使い、そして『抑止の存在』さん♪」

シイとナイトメアは次元の穴に呑み込まれ、消え去った。

こうしてオレ達は勝利とも敗北とも言えない幕を迎えた。

最終話

エピローグ的な話を言えば一ノ瀬シイには逃げられたが世界は元に戻った。ほむらの時間停止したような世界に、色が戻りみんな動き出した。

そのときアリオかエディオンか名前は忘れたが、マジで貞操の危機にあったと追記しておく。

まさかの母親参戦の親子丼といううらやまけしからんな事態だったが。

四季と一ノは元の世界へ帰った。元々異世界の住人だったし、これ以上の長居はおそらく抑止の存在が黙ってないだろう。

一ノは帰りたくなさそうだったな。まあ、スリルと楽しみがあつたって言ってたから元の世界にはないモノがあつたのだろう。

いずれにせよ、彼には元の世界でも楽しめるモノを見つけてほしいのが友達としての願いだ。

師匠は生きていた。いや厳密には生きてるような死人という感じだ。

人間としての機能はあるものの死ねない身体というビックリ超人間になっていたそう。だいたいエールのせいだと言ってたからたぶんエールのせいだ。

現在、翠屋第二店舗をミッドで経営してる。ヴィヴィオを養子にした高町はよく娘を連れて通ってるらしい。

……パパと呼ばれて常連には離婚した夫婦と言われてるらしい。

おまけにそこにエールが出てくるから韓ドラ展開キターとおぼちゃん連中は盛り上がっている。最近の主婦に人気なのよね。

スカさんは逃げた。まあ、隠居生活する気満々だったし、一部のナンバーズは更正プログラムを受けている。

なお、メガネを黒幕にしたため彼女が主犯扱いされてる。ザマア。

さて亡くなった者——アオと青髪姉の同僚二人、シロとナルシストの葬儀は行われたそうだ。

青髪姉は泣いていたらしい。シロは彼女にとって家族になれたかもしれない悲しい少女だったから。

ナルシストはツイでだが、オレもシロに関しては残念としか言いようがない。

シロを殺したあのクズは死んで正解だ。名前すら思い出せないが。

以上、書かれた手紙の感想である。

「だから出してくれよー奥さん……」

「イヤや。てか、全然反省しとらんやん」

当たり前だ。オレはオレのやりたいことをした。反省も後悔もしてない。

今、オレは留置所で手錠をかけられて捕まっていた。

「とうかまさか煤巻きにされて放置されるとは……いやーオレも愛されてるねー♪」

「どこの世界に愛された男が煤巻きで見捨てられるねん！」

そう、オレはゆりかごから出た後、煤巻きにされて放置された。理由は女神との契約を話したことに対しての怒りだなきつと。

オレがした契約は死後、抑止の存在となつて世界の守護者になることだった。前世でほむらに殺されてなるはずだったが下級神のおかげで半分抑止の存在となつた人間となつた。

まあ、要するに死にくい身体というわけだ。

おまけに女神の契約で魔法耐性とか回復力アップという加護があるし………ヤベー。

オレ、もう人外じゃね？

「今更やん」

「やかましい。人外など断じて認めん」

「別にいいや。そや、裁判の日程決まったで」

留置所に入ったオレが待ってるのは裁きだ。まあ、あれだけやったのだから裁かれる

べきなのが普通だろう。

「なんや、全然不安やないやん」

八神は口を尖らせて不満そうだ。もつと反省してほしかったのかな。

「恐怖でガタガタ震えてほしかった」

「恐ろしいことを言うなお前。ま、不安とか一切ないよ。だってオレは……」

そこから先は言おうとしなかった。八神は首を傾げていた。オレが何を言おうとしたのかわかってないのだろうな。

「もう時間じゃないのか？」

「あ、ホンマや！ 早く待ち合わせ場所に行かなきゃデートに送れる！」

八神は衛のデートに遅れないように駆け足で出ていった。残されたオレは彼女の背中を見送り、目を閉じる。

「じゃあな衛、八神。幸せになれよ」

親友と別れの挨拶をふと口に出していた。

そして、数ヶ月後。オレの裁判は行われた。

☆☆☆

「永久凍結すべきだ！ この男は危険だ！」

「いやいや、かなり優秀のようですぞ。ならば首輪をつけて働かせるのはどうでしょう？」

「ウホ、良い男……」

裁判———というかオレをどうするかという論争が行われていた。この決定が判決になるみたいだな。

そして最後のヤツは明らかに危険人物だろ。現に若い男が連れて行かれて「ア——ッ！」という悲鳴をあげてたぞ。

「やれやれ……クロノ少年だんまりだし、八神の知り合いの方々も呆れているなあ」

まあこれが組織だ。自分の利益になるモノは使い、使えなくなったら捨てる。間違つてるとは言えないが組織を維持するためには必要なことだ。

とは言つてもこれが元は正義を志す者達だったとは誰も信じないだろ。

落着なき論争にオレは嘆息を吐く。

「もう帰っていいか？ ぶっちゃけお前らの裁判に意味はない」

「なんだと貴様！」

「だってそうだろう？　こんないつまでも利益と偽善を語る場に意味がない」
どのみちオレはもうここにいるつもりはない。なぜならまだ一ノ瀬シイが生き
る。

ヤツが生きている限りオレやみんなに危害が関わる。

こんな場所においても時間の無駄。なので――

「というわけで逃げるわオレ」

手錠を破壊し、神器を召喚。それに反応するかのように数人の局員が魔力弾を撃つてきたが全てキャンセルした。

ドコでもドアを展開し、オレはここから離れたビルへ繋がるドアに飛び込んだ。

「ふう……ホント面倒だったなあ」

「逃がすと思ってるのか？」

ビルにはシグナム、ヴィータ、衛、フェイトがいた。

逃がす気ではないみたいだな。

「ソラ、罪をつぐ――」

「ヤダ」

「即答!?!」

「だから言ったであろう……我が友は反省も後悔もしていないと」

よくわかってるじゃん衛。んじゃ、逃がしてくれよと言うとヴィータが代わりにゲートボールを撃ってきた。

「何しやがる」

「やかましい。こちらも仕事なんだよ。だから捕まれ、ボーナスになれ」

「後者が本音じゃね？」

「ならば私に斬られろ！」

「黙れニート侍」

面倒だなあと嘆息を吐いていると衛達を覆うような半透明の結界が展開された。

「お出迎えよん♪」

「遅かったな変態」

「ちよつとー。そこは愛あるような声で名前を呼んでよー」

「煤巻きにされた怨みは重い」

「あらやだ。本気で怒ってる」

なら、ニヨニヨすんな。思わず腹パンしちやっただじゃん。

嬌声だったけど。

「どこに行くのだ？」

「ここじゃないどこか。オレ達は一ノ瀬シイを倒さなきゃならないんだ」

ヤツは害悪だ。 邪悪だ。 有害な悪だ。

一ノ瀬シイはオレを手に入れるためならなんでもしそうだ。 だからここから離れて誰も傷つかないようにしなきゃならない。

オレならみんなを守ることができる？

無理だ。 自惚れだ。

関係ないヤツを助けるつもりないが目覚めが悪いことには違いない。

……ずっと昔はヒーローに憧れていた。 誰も見捨てないヒーローに。 だけどホントはそんな人はいない。 人間は利己的だ。 利益を求めないと生きていけない。 無償の愛は家族か愛する人にか与えられないのだ。

他人を愛する立派なことなんて神様や聖女でない限りできないな。

「だからお別れだ。 オレと会うことは——まあ、あるかも」

「あるのかよ！」

「だってそうだろう。」

生きてさえいればまた会える。

生きてさえいればまた巡り会う。

オレ達は他人じゃない。 友達だ。 この絆がある限りオレ達はまた会える。 きっとじゃないがな」

フツと笑いが込み上がる。

そうだ。前世でまどか達と再会したようにまた会える。
なぜなら生きてるから。

オレは衛達に向けて背中からサムアップしながらドコでもドアを通り抜けた。
彼と彼女達がオレの名前や悪態、別れの挨拶が聞こえていたが気にしない。

ドコでもドアを抜けた先は平原だった。そこにはまどか達が待っていた。
隣にいる千香は手をブンブン振っていた。

苦笑しながらとりあえずに服を召喚し、オレはすぐに着替える。

ファンタジーゲームのようき装備するような着替えだから裸にはならないから安心しろ。

「ちえー、ソラの裸体ならムラムラしたのにー」

「お前は相変わらずだよ」

合流したオレはふと空を見上げる。

晴れた綺麗な青空が広がる世界にオレはいる。

「それじゃあ、まずどこにいくっ」

「腹減ったから飯屋！」

「あんたさつきも食ってなかった!」

「さやかと杏子——親友みたい悪友。悪友のような親友。そんな関係を持つ少女達。」

「あらあら、困ったわねえ」

「ママさんママさん。ママさん的にはどうしたい?」

「お茶にしましょう♪ 落ち着くわよ」

「この人、ホントにお茶が好きだなあ。つていつのまにかテーブルとティーセットが!」

「ママさんと千香——頼れるお姉ちゃんと仲間である変態。二人共暴走するけど大切な仲間であり、家族みたいな人達。」

「ま、まどか……そのドレスは!?!」

「イエス! 悪魔ほむらちゃんのセクシードレスだよツ。さあ、これを着てソラくんを誘惑しよう!」

「さすがにそれは私も恥ずかしいわ!」

「私の女神モードと一緒に！」

「あなたがいるなら私……もう何も怖くない……！」

「ティヒヒヒ………計画通り」（ニヤリ）

まどかとはむら——助けたかった人と大切な相棒。結局、前世では駄目だったが
なるようになって二人は救われた。

——みんながいたからオレはここまで来れた

——みんながいたから今のオレがいる

悲しいことや楽しいこと。そして最後には笑っていけるような日々は今日も続いて
いこう。

「見てソラくん。女神と悪魔のツートップ！」

「ムラムラする？」

「したけど、最後には決めさせろよ!!」

まあ、要するに――

――オレの憂鬱楽しいな日々はまだまだ続くわけだ。

お知らせ

何を思ってたか『とある憂鬱』をリメイクしたくなりました。なので書こうかと思います。

いや気に入らないという理由ではありませんよ。なんかこの小説がこうも拙いまま
で終わっちゃって、しかもストラカーズ編は混乱していたと感想にも言われてました。

ぶっちゃければ、またソラの物語を書きたくなりました。なんやかんや言って自分は
この主人公が一番なのかもしれません。

振り回され、苦労しながらも、自分らしく生きていく。そんな生き方を想像したのが
ソラだったりします。

とは言え、この小説を書き直したところで誰も見ないだろうし、何より忘れられてい
るだろうなあと思います。

なので新たに書き直そうと思います。
ちなみにあえて前作のヤツは残します。

理由はコラボした作者様のキャラを残したいと思えますし、プロット段階のヤツを消

しちやって流れを忘れてしまいましたので……。まあでも拙い文章を加筆修正した作品になるのであまり変わりません。

ノリとカオスがコンセプトですが、ギャグはあるけど時たまシリアスをいれていきます。

では、最後にあらすじを――

むかし、むかし。千年か百年かそれくらい前にある少年がいた。その少年はとある『魔法少女』との約束をし、戦場で絶望を知りながらも英雄となった。返り血を浴びず、傷無き死体を周りに作り出すその姿は――『無血の死神』と誰もが恐れ、崇めた。しかしその彼は親友である女の子に殺され、そして目を覚ませば転生していた。

そんな彼は第二の人生を平穩に暮らせる――わけでもなかった！

ヒロインは一部が変態、アホ、お姉ちゃん、苦勞人、そして腹黒!! しかもネタとノリで少年を振り回すばかり!?

そう、彼の悲しく絶望的な前世は終わった。そして始まるのは彼の混沌に満ちたコメデイ全開の第二の人生だった！

果たして主人公は無事に天寿を全うできるのか!?(※無理だと思います)

この物語は苦勞人な主人公がイロモノとなってしまうたヒロインに振り回され、シリ
アスあり、ギャグあり、カオスありな第二の人生を過ごす憂鬱な人生を過ごすお話であ
る!

——
という感じなあらすじです。ヒロインはだいたい暴走します。ボケます。ツツコミ
ます。

主人公の過去話はまあぼけなすの『まどマギ』で参照してください。

ソラの起源となる物語が描かれていますから。さて長い文章になりましたがこれで失
礼します。

こんな作品ですが、またお目にかけていただいて『あ、こいつまたこんなもの書い
てたのか』と呆れてくれれば幸いです。

ではでは